

出雲 鰐淵寺

埋蔵文化財調査報告書



平成 27 年(2015)3 月
出雲市教育委員会

出雲 鰐淵寺

埋蔵文化財調査報告書

平成 27 年(2015)3 月
出雲市教育委員会

題字

鰐淵寺 佐藤泰雄住職

ごあいさつ

平成 21 年度から長きにわたり出雲市文化財課により鰐淵寺の調査・研究を行って頂いた。

この寺は、推古 2 年（594）智春上人が推古天皇の眼疾を浮浪滝に祈って平癒されたので、その報賓として建立された勅願寺と伝えられる。

寺の名称の由来は、上人が誤って仏器を滝壺に落されたとき、わに鰐魚がこれを上人にお返ししたことにより寺号を生じる。またこの地は、かつて釡尊が法華經を説かれた天竺りょうじゆせん（印度）うしどらのち靈鷲山の良地が欠けて波に浮かんで流されていた土地を留めたと伝えられ浮浪山と称する。

伝教大師が比叡山に天台宗を開かれると、慈覚大師の薦めもあり、日本で最初の延暦寺の末寺となる。また、早くより出雲大社との関係を密にし、別当寺ともなった。

元弘 2 年（1333）後醍醐天皇が隱岐遷幸の折、長吏頼源が国分寺御所に伺候して、ご宸筆の願文（重要文化財）を賜った。永祿年間には和多坊栄芸が毛利元就の尼子攻めに助力したため、天正 5 年（1577）孫の輝元はこの栄芸の功労を愛で本堂を再建した。

また、弁慶は 18 歳で当山に入り、3 年修行の後、書写山から比叡山に登ったと伝えられるなど、かつて高僧の修行の寺でもあった。

歴史に幾度も登場し、現在も数多の仏像・古文書など文化財を伝えるこの寺について、この度の報告書の成果が出雲の歴史を研究していく基礎資料として、広く用いられることを祈念いたしております。

最後になりましたが、今回の調査を行って頂いた出雲市、また格別なご協力を賜りました関係各位に心から御礼申し上げます。

合掌

平成 27 年（2015）3 月

鰐淵寺住職 佐藤泰雄

序

秋、いろはもみじで有名な浮浪山鰐淵寺は悠久の歴史をもつ天台宗の古刹です。その歴史は、推古2年（594）に始まるときとされ、中世には「國中第一之伽藍」と呼ばれるほどの大寺院に発展し、さらに中世出雲国一宮^{がらん}杵築大社（出雲大社）との一宮と一寺の相互補完関係にあったことも知られています。その歴史を物語る多数の貴重な文化財が残されており、その数は山陰地方随一です。

このたび、はじめて境内において埋蔵文化財の調査を行いました。調査では鰐淵寺の歴史を知るうえで貴重な資料、特に中世を中心とする建物跡や陶磁器類などの遺物に関する知見を得ることができました。その調査成果をまとめたのが本書です。

本書が、地域の歴史ひいては日本における神仏の歴史の解明に寄与するものとなることを願います。

出雲市としては、この貴重な文化遺産を後世に伝えるため文化財の調査・保護・活用に尽力してまいります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の調査にあたりご協力いただきました鰐淵寺調査委員会の皆様、関係者の皆様、ことに鰐淵寺住職佐藤泰雄様に厚くお礼申しあげます。

平成27年（2015）3月

出雲市長 長岡秀人

例　言

1. 本書は、平成 21 年（2009）度から平成 26 年（2014）度まで 6 年にわたり出雲市教育委員会を調査主体として実施した島根県出雲市別所町鰐淵寺の埋蔵文化財調査報告書である。平成 21 年度は周辺踏査、平成 22～24 年度は発掘調査、平成 25 年度に分布調査、平成 26 年度に調査報告書作成を行った。

2. 調査は、下記の体制で実施した。（ ）内の数字は年度

出雲市文化環境部	学芸調整官	花谷 浩（平成 21～26）
同文化財課	課長	石飛幸治（平成 21・22）
同	課長	福間 浩（平成 23・24）
同	課長	玉木良夫（平成 25・26）
同文化財課	課長補佐	穴道年弘（平成 23～26、調査員）
同	課長補佐	福田善実（平成 23）
同	課長補佐	野坂俊之（平成 21～26、調査員）
同文化財課	係長	景山真二（平成 22・23）
同文化財課	主任	大槻智徳（平成 21、調査員）
同	主任	三原一将（平成 26、調査員）
同	主任	石原 聰（平成 22～26、調査員）
同文化財課	主事	安田晋也（平成 21、調査員）
同	主事	石橋紘二（平成 21、調査員）
同	主事	伊藤靖浩（平成 24～26）
同文化財課	嘱託員	高橋 周（平成 26）
	嘱託員	八幡一寛（平成 26、調査員）
	臨時職員	阿部智子（平成 22、調査補助員）
	臨時職員	片寄雪美（平成 22・23、調査補助員）
	臨時職員	糸賀伸文（平成 24～26、調査補助員）

3. 鰐淵寺調査委員会（敬称略・平成 26 年度の所属）

平成 24 年（2012）4 月 1 日から平成 27 年（2015）3 月 31 日の任期で下記の方々に委嘱した。

委員長	大橋泰夫	島根大学教授
副委員長	坂井秀弥	奈良大学教授
委員	井上寛司	島根大学名誉教授
委員	佐藤泰雄	鰐淵寺住職
委員	田中哲雄	日本城郭研究センター名譽館長
委員	鳥谷芳雄	島根県立古代出雲歴史博物館学芸情報課長

委員 松本岩雄 島根県教育庁文化財課文化財専門官

委員 和田嘉宥 米子工業高等専門学校名誉教授

4. 報告書作成にあたって、下記の方々から玉稿を賜った（敬称略）。

中村唯史 島根県立三瓶自然館サヒメル企画情報課課長代理

渡辺正巳 文化財調査コンサルタント株式会社代表取締役

鳥谷芳雄 島根県立古代出雲歴史博物館学芸情報課長

岩橋康子 島根県埋蔵文化財調査センター臨時職員

間野大丞 島根県古代文化センター専門研究員

佐藤利江 日本考古学协会会员

和田嘉宥 米子工業高等専門学校名誉教授

大橋泰夫 島根大学教授

坂井秀弥 奈良大学教授

井上寛司 島根大学名誉教授

5. 発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の方々にご指導、ご協力いただいた（敬称略）。

文化庁記念物課、島根県教育庁文化財課、島根県立古代出雲歴史博物館、三佛寺、鳥取県立博物館、

石川日出志（明治大学教授）、池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター課長）、近江俊秀（文化庁文化

財調査官）、小野正敏（元人間文化研究機構理事）、久保智康（京都国立博物館名誉館員）、佐藤泰欽（鯉淵寺前往職）、鷗谷和彦（堺市文化財課学芸員）、林 正憲（文化庁文化財調査官）、平石 充（島根県古代文

化センター専門研究員）、廣江耕史（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、松尾充晶（島根県古代文化

センター専門研究員）、的野克之（島根県立古代出雲歴史博物館学芸部長）、目次謙一（島根県古代文化セ

ンター専門研究員）、守岡正司（島根県埋蔵文化財調査センター企画員）、高橋一夫（鯉淵コミュニティセ

ンター長）、田中義昭（元島根大学教授）、椿 真治（島根県教育庁文化財課調整監）、中安恵一（島根県

古代文化センター特任研究員）、西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課）、乗岡 実（岡山市文化財課長）、

村上 勇（奥田元宗・小由女美術館館長）、岸山常人（京都大学大学院教授）、山下信一郎（文化庁文化

財調査官）、渡邊貞幸（島根大学名誉教授・出雲弥生の森博物館館長）、渡辺丈彦（慶應義塾大学准教授）

6. 発掘調査・整理作業に際しては、下記の方々にご協力いただいた（敬称略）。

発掘調査

安食 栄、伊藤 伸、大輝正人、岡 栄、岡田光司、奥田利晃、勝部育朗、勝部成美、川瀬義敬、

小林敏治、周藤俊也、水浦 茂、水浦亜紀子、星野篤史

整理作業

荒木恵理子、飯國陽子、鞠口令子、妹尾順子、中島和恵、前島浩子、吹野初子、吉村香織

7. 本書の執筆者については、文末および下記に記す。編集は、花谷の指導のもと穴道・野坂・三原・石原が行った。

石原（第1章、第2章第2節、第3章第1節、第4章第1・3・5節、第5章第1節、第6章第2節、第8章）、中村唯史（第2章第1節）、花谷（第3章第2節、第4章第4節、第5章第2・3・4節、第7章

- 第1・5節、第8章、略年表)、野坂(第3章第3節、第4章第2・5節、第5章6節、第8章)、穴道(第4章第4節、第5章第2・3・4・6節、第6章第2・3節、第7章3節、第8章)、三原(第5章第4・6節、第8章)、渡辺正巳(第5章第5節)、鳥谷芳雄(第6章第1節)、岩橋康子(第6章第2節)、間野大丞(第6章第2節)、和田嘉有(第7章第2節)、高橋(第7章第4節)、佐藤利江(第7章第6節)、大橋泰夫(第7章第7節)、坂井秀弥(第7章第8節)、井上寛司(第7章第9節)
8. 本書に掲載した写真は、調査員のほか、杉本和樹(西大寺フォト)と坂本豊治(出雲市文化財課主任)が撮影した。また、一部は出雲観光協会平田支所の協力を得た。なお、遺物は概ね下記の大きさで掲載した。陶磁器・土器: 3分の1、瓦: 4分の1(図版54は3分の1)、銭貨: 等倍。なお、大型品についてはこの限りでない。
9. 本書に掲載した遺物の実測図は、調査員と調査補助員が作成し、黒目利江(出雲市文化財課臨時職員)、吉村香織の協力を得た。なお、掲載は、3分の1(瓦は4分の1)を基本とし、遺物断面に須恵器■、陶器■、瓦■の網かけをしている。
10. 本書で用いた測地系は世界測地系第III系であり、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。
11. 本文中で下記のとおり略記号を使用している。

調査区略記号

WT: 多坊跡 TM: 等湖院南区 KM: 鰐淵寺川南区(F1) GM: 鰐淵寺川南区(F2)

遺構略記号

S B: 建物, S D: 構造, S G: 池, S K: 土坑, S F: 道路, S L: 炉, S P: 柱穴・ピット,
S S: 碇石, S W: 石垣, S X: その他

12. 本文および図版において斜体字で示した番号は、実測図がない遺物に付した。
13. 出土遺物は鰐淵寺の所蔵であるが、当面、出雲市文化財課(出雲弥生の森博物館)で保管する。
調査で作成した測量図をはじめとする図面類、写真資料などは、出雲市文化財課で保管している。
14. 各遺物の編年については、下記の報告書・資料集を参考にした。

貿易陶磁器

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
山本信夫 2000「太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—」『太宰府市の文化財』第49集 太宰市教育委員会

横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして」
『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館普及会

国産陶磁器

木村孝一郎 2011「越前焼の編年の研究と生産地の動向」『第10回山陰中世土器検討会資料集』

山陰中世土器検討会

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

乗岡 実 2008「備前焼の編年について」『第7回山陰中世土器検討会』山陰中世土器検討会

乗岡 実 2013「中世備前焼の水屋襄」『山陰中世土器研究I－西尾克己さん還暦記念論集－』

山陰中世土器検討会

八峰 興 2013「山陰地域から出土した中世後期の「威信財」について－瓦質土器を中心にして－」

『山陰中世土器研究I－西尾克己さん還暦記念論集－』山陰中世土器検討会

吉岡 康暢 1989『日本海域の土器・陶磁』中世編 六興出版

吉田 寛 2003「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」『貿易陶磁器研究』23

土 器

足立克己 1999『姫原西遺跡』島根県教育委員会

伊藤智ほか 2004『青木遺跡（中世編）』島根県教育委員会

高橋 周 2013「出雲平野における中世土師器の様相」『山陰中世土器研究』I 山陰中世土器研究会

高橋 周 2014「中世出雲西部における底部ケズリ土師器と京都系土師器皿」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第4集 出雲市

平石 充・三代貴史 1999『古志本郷遺跡』I 島根県教育委員会

廣江耕史 1992「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 松江考古学談話会

廣江耕史 2006「山陰における中世前期の諸様相」『第5回山陰中世土器検討会』山陰中世土器検討会

間野大丞 1999『蔵小路西遺跡』島根県教育委員会

宮澤明久ほか 2007『余小路遺跡・小畠遺跡』島根県教育委員会

15. 井上寛司編 2012『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究・日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために』2009（平成21）年度～2011（平成23）年度 科学研究費補助金 基礎研究B（課題番号21320123）研究成果報告書については、本文中で『科研報告』と省略して引用する。



鰐淵寺の位置

目 次

ごあいさつ	
序	
例 言	
目 次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る契機と目的	1
第2節 調査の経過	1
第2章 鰐淵寺の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境 (周辺の遺跡)	9
第3章 鰐淵寺の歴史と文化財	15
第1節 鰐淵寺の概要	15
第2節 鰐淵寺境内の立地と構成	17
第3節 鰐淵寺の文化財	23
第4章 分布調査	33
第1節 目的と方法	33
第2節 周辺エリア・別所の周縁地域	37
第3節 別所の中核地域	47
第4節 分布調査の採集遺物	55
第5節 分布調査の成果概要	77
第5章 発掘調査	94
第1節 地区割りと調査区の選定	94
第2節 根本堂地区北部での調査	94
(平成 22 年度和多坊跡の調査)	97
第3節 根本堂地区南部での調査	97
(平成 23 年度等湖院南区の調査)	115
第4節 浮浪瀬地区北部での調査	135
第5節 鰐淵寺境内発掘調査に伴う	135
¹⁴ C 年代測定	161
第6節 発掘調査の成果概要	163
第6章 石造物調査	167
第1節 石造物調査の概要	167
第2節 松露谷地区および	167
川奥地区的石塔群	179
第3節 石造物調査の成果概要	209
第7章 総 括	211
第1節 鰐淵寺伽藍の構造とその変遷	211
第2節 明治初期焼失の和多坊の建築学的復元	239
第3節 鰐淵寺の陶器・土師器	249
第4節 鰐淵寺の京都系土師器皿	256
第5節 山陰の中近世瓦からみた鰐淵寺	265
第6節 山陰の石塔における	282
鰐淵寺資料の位置づけ	282
第7節 鰐淵寺の考古学的成果	295
第8節 中世山林寺院の調査とその保護	301
第9節 鰐淵寺の歴史と変遷	307
第8章 結 語	316
鰐淵寺 略年表	
史料からみた鰐淵寺僧坊の消長 (附表 1 ~ 3)	
遺物観察表	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 島根半島 (1:400,000).....	5	第33図 石製不動明王像.....	38
第2図 鰐淵寺周辺の地形図 (1:50,000).....	6	第34図 遠堪岬の石地蔵.....	38
第3図 鰐淵寺周辺の地質図.....	7	第35図 矢尾越の橋台跡.....	39
第4図 鰐淵寺周辺の地質状況.....	8	第36図 般若坂の平坦面.....	40
第5図 鰐淵寺の位置と周辺の遺跡(1)(1:100,000).....	10	第37図 古道を向く不動明王像.....	40
第6図 鰐淵寺の位置と周辺の遺跡(2)(1:100,000).....	11	第38図 「摩陀羅神さん跡」.....	41
第7図 現在の鰐淵寺根本堂地区の入口 (北東から, 2015年2月7日撮影).....	14	第39図 木造薬師如来像.....	42
第8図 鰐淵寺の絵図.....	16	第40図 広瀬付近の平坦面.....	43
絵図A (江戸期の境内絵図)		第41図 磐石と思われる大きな石.....	43
絵図B (明治期の境内絵図)		第42図 横穴式石室を有する古墳.....	43
第9図 鰐淵寺別所中枢地域 (1:2,000).....	19	第43図 大寺谷地域平面図 (1:6,000).....	44
第10図 重文絹本着色山王本地仏像.....	23	第44図 分布調査箇所 (1:6,000).....	47
第11図 重文絹本着色毛利元就像.....	24	第45図 A-32 東側の石垣 (1:400).....	48
第12図 県指定種子両界曼荼羅図.....	24	第46図 A地区全体図 (1:2,000).....	49
第13図 県指定絹本着色不動明王像.....	24	第47図 B・C・E・F地区地形図 (1:2,000).....	51
第14図 重文紙本墨書き後醍醐天皇御頼文.....	25	第48図 貿易陶器 (1:3).....	56
第15図 重文銅造觀世音菩薩立像.....	25	第49図 須恵器 (1:3).....	58
第16図 市指定 (重要美術品)銅造不動明王像.....	26	第50図 常滑焼、越前焼 (1:3).....	58
第17図 県指定木造牛頭天王坐像.....	26	第51図 備前焼 (1:3, 1:6).....	59
第18図 山王七仏堂建築図面.....	27	第52図 備前焼 (1:3).....	60
第19図 木造女神坐像.....	27	第53図 土師器 (1:3).....	61
第20図 木造僧形坐像.....	27	第54図 京都系土師器 (1:3).....	62
第21図 線刻普賢菩薩鏡像 (竹枝飛雀鏡).....	28	第55図 土師質土器、瓦質土器 (1:3).....	62
第22図 墨書き種子大日如來等鏡像 (菊薄飛雀鏡).....	28	第56図 軒丸瓦 (1:4).....	65
第23図 線刻種子阿弥陀如來鏡像 (菊花蝶鳥鏡).....	28	第57図 軒平瓦・軒桟瓦・道具瓦など (1:4, 1:6).....	66
第24図 金銅五鉢輪.....	28	第58図 丸瓦 (1:4).....	68
第25図 金銅五鉢杵.....	28	第59図 丸瓦 (1:4).....	69
第26図 重文石製經筒.....	29	第60図 丸瓦 (1:4).....	70
第27図 潟州鏡.....	29	第61図 丸瓦 (1:4).....	71
第28図 积迦堂.....	30	第62図 丸瓦 (1:4).....	72
第29図 常行堂 (背後は摩多羅神社).....	30	第63図 丸瓦 (1:4).....	73
第30図 別所と周辺エリアの区割り図 (1:50,000).....	34	第64図 平瓦 (1:4).....	74
第31図 周縁地域 (1:20,000).....	35	第65図 銭貨 (1:1).....	75
第32図 仏心橋の橋台跡.....	37	第66図 石製品 (1:3).....	75
		第67図 大寺谷遺跡出土遺物 (1:3).....	76

第 68 図 採集遺物分布図(1).....	84	第 99 図 錢貨(1:1).....	112
第 69 図 採集遺物分布図(2).....	84	第 100 図 等湯院南区平面図(1:400).....	115
第 70 図 採集遺物分布図(3).....	85	第 101 図 1・2 トレンチ平面図(1)(1:100).....	116
第 71 図 採集遺物分布図(4).....	85	第 102 図 1・2 トレンチ平面図(2)(1:100).....	117
第 72 図 採集遺物分布図(5).....	86	第 103 図 トレンチ土層断面図(1)(1:100).....	118
第 73 図 採集遺物分布図(6).....	86	第 104 図 トレンチ土層断面図(2)(1:100).....	119
第 74 図 採集遺物分布図(7).....	87	第 105 図 2 トレンチ石垣平面図・立面図(1:40).....	120
第 75 図 採集遺物分布図(8).....	87	第 106 図 SK208 平面図・土層断面図(1:20).....	121
第 76 図 採集遺物分布図(9).....	88	第 107 図 SK213 平面図・土層断面図(1:40).....	121
第 77 図 採集遺物分布図(10).....	88	第 108 図 SK222・SK223・SX230 平面図・土層断面図(1:40).....	122
第 78 図 採集および発掘調査出土銭分布図(1:2,000).....	89		
第 79 図 全体地区割図(1:60,000).....	95	第 109 図 SP239 平面図・土層断面図(1:40).....	122
第 80 図 調査区と地区割図(1:2,000).....	96	第 110 図 SX201 平面図・土層断面図(1:40).....	123
第 81 図 和多坊跡平面図(1:400).....	97	第 111 図 SX207・SX209 平面図・土層断面図(1:40).....	123
第 82 図 1 トレンチ平面図・土層断面図(1)(1:100).....	98	第 112 図 SK208 出土遺物(1:3, 1:6).....	125
第 83 図 1 トレンチ平面図・土層断面図(2)(1:100).....	99	第 113 図 SK222 出土遺物(1:3, 1:6).....	126
第 84 図 2 トレンチ平面図・土層断面図(1:100).....	100	第 114 図 SK223 出土遺物(1:3, 1:6).....	127
第 85 図 3 トレンチ平面図・土層断面図(1:100).....	100	第 115 図 SP225(1), SP243(2), SX201(3), SK213(4), SP250(5) 出土遺物(1:3).....	127
第 86 図 SB101 平面図(礎石番号)(1:300).....	102	第 116 図 遺構外出土遺物(貿易陶器, 国産陶器)(1:3).....	129
第 87 図 SW121 平面図・立面図・断面図(1:300).....	103	第 117 図 遺構外出土遺物(土師器)(1:3).....	130
第 88 図 1 トレンチ 1・2 グリッド平面図・土層断面図(1:40).....	105	第 118 図 遺構外出土遺物(土師質土器, 瓦質土器)(1:3).....	130
第 89 図 SD107 土層断面図(1:40).....	105	第 119 図 瓦(1:4).....	131
第 90 図 SX110 平面図(1:20).....	105	第 120 図 錢貨(1:1).....	132
第 91 図 SX119 出土土師器(1:3).....	106	第 121 図 その他(2:3).....	132
第 92 図 遺構外出土貿易陶器(1:3).....	107	第 122 図 鶴渕寺川南区平面図(1:600).....	135
第 93 図 遺構外出土国産陶器・土器(1:3).....	108	第 123 図 鶴渕寺川東岸断面図(1:100).....	136
第 94 図 遺構外出土土師器(1:3).....	109	第 124 図 F1 平坦面 トレンチ平面図・SX361 断面図(1:100).....	138
第 95 図 遺構外出土土師器(1:3).....	110	第 125 図 F1 平坦面 トレンチ土層断面図(1:100).....	139
第 96 図 遺構外出土土師器・土師質土器(1:1, 1:3).....	111		
第 97 図 瓦(1)(1:4).....	111	第 126 図 F1 平坦面 ピット土層断面図(1:40).....	139
第 98 図 瓦(2)(1:4).....	112	第 127 図 F2 平坦面 トレンチ平面図・土層断面図(1)(1:100).....	142

第128図	F2平坦面 トレンチ平面図・土層断面図(2) (1:100).....	143	第163図	川奥地区宝篋印塔分類図(1:10).....	199
第129図	F2平坦面 ピット土層断面図(1:40).....	144	第164図	川奥地区宝篋印塔 拓影(1:4).....	199
第130図	浴室跡(F3)平面図(1:100).....	145	第165図	C-3・4・7 平坦面石造物配置図.....	203
第131図	礎石断面図(1:100).....	146	第166図	C-8 平坦面石造物配置図.....	204
第132図	焼土平面図(1:40).....	146	第167図	C-9 平坦面石造物配置図.....	204
第133図	池跡平面図(1:40).....	147	第168図	C-10 平坦面石造物配置図.....	205
第134図	遺構内出土遺物(1:3).....	148	第169図	松露谷入口平坦面石造物配置図.....	205
第135図	F1A層出土遺物(1:3).....	149	第170図	江戸後期(絵図A)と明治期(絵図B)の絵図	220
第136図	F1B層出土遺物(1:3).....	150	第171図	建造物比較図(1)(根本堂).....	223
第137図	F1C層出土遺物(1:3).....	151	第172図	建造物比較図(2)(A1・B1:积迦堂 A2・ B2:鐘樓 A3・B3:常行堂・摩多羅社・福荷社 A4・B4:宝藏).....	224
第138図	F2D層出土遺物(1:3).....	151	第173図	建造物比較図(3)(A1・B1:開山堂・開山廟 A2・B2:念佛堂 A3・B3:仁王門 A4・B4: 総門).....	225
第139図	F2E層出土遺物(1)(1:3).....	152	第174図	建造物比較図(4)(A1・B1:和多坊 A2・ B2:本対坊 A3・B3:惠門院 A4・B4:対城院)	227
第140図	F2E層出土遺物(2)(1:3, 1:6).....	153	第175図	建造物比較図(5)(A1・B1:淨觀院 A2・ B2:松本坊 A3・B3:現成院 A4・B4:是心院)	229
第141図	F2E層出土遺物(3)(1:3).....	154	第176図	建造物比較図(6)(A1・B1:密嚴院 A2・ B2:洞雲院・等潤院 A3・B3:嚴王院 A4:堂 司庵 B4:竹林庵).....	230
第142図	F2F層出土遺物(1:3).....	155	第177図	建造物比較図(7)(A1・B1:藏王・子守 A2・B2:拝殿・勝手・馬頭 A3・B3:七仏堂・ 拝殿 A4・B4:浴室).....	232
第143図	線刻土師器(1:3).....	155	第178図	和多僧坊跡平面図(1:500).....	239
第144図	浴室跡出土遺物(1:3).....	156	第179図	洞明院平面図.....	240
第145図	瓦(1:4).....	156	第180図	金剛院平面図.....	241
第146図	錢貨(1:1).....	157	第181図	寿福院平面図.....	242
第147図	暦年較正結果(分布).....	162	第182図	普明院平面図.....	242
第148図	鰐淵寺境内・石造物位置図(数字は第18表 に対応).....	169	第183図	円流院平面図.....	242
第149図	念佛堂前念仏石塔配置図.....	171	第184図	松本坊外觀.....	244
第150図	松露谷墓地I・II群(1:2,000).....	173	第185図	是心院平面略図.....	245
第151図	川奥墓地(1:2,000).....	176	第186図	絵図にみえる松本坊と和多坊.....	246
第152図	大型宝篋印塔.....	176			
第153図	松露谷地区(C地区)採集遺物(1:3).....	180			
第154図	松露谷地区の五輪塔分類図(1:10).....	182			
第155図	川奥地区の五輪塔分類図(1:10).....	183			
第156図	鰐淵寺周辺地域の五輪塔(1)(1:20).....	185			
第157図	鰐淵寺周辺地域の五輪塔(2)(1:20).....	186			
第158図	松露谷地区宝篋印塔分類図(1)(1:10).....	193			
第159図	松露谷地区宝篋印塔分類図(2)(1:10).....	194			
第160図	松露谷地区宝篋印塔 拓影(1)(1:4).....	195			
第161図	松露谷地区宝篋印塔 拓影(2)(1:4).....	196			
第162図	松露谷地区宝篋印塔 拓影(3)(1:4).....	197			

第 187 図 和多坊復原略平面図 (1 : 300).....	248
第 188 図 鰐淵寺の土師器(杯・皿)分類表(試案).....	252
第 189 図 出雲地域の京都系土師器皿出土遺跡 (1 : 500,000).....	258
第 190 図 鰐淵寺境内における京都系土師器皿分布図 (1 : 4,000).....	258
第 191 図 京都系土師器皿 (1).....	259
第 192 図 京都系土師器皿 (2).....	259
第 193 図 鰐淵寺の京都系土師器皿の分類図.....	260
第 194 図 京都系土師器皿 (3).....	261
第 195 図 下がり松遺跡の瓦 (1 : 6).....	266
第 196 図 富田城跡と松江城跡の軒瓦 (1 : 6).....	267
第 197 図 佐太前遺跡の軒瓦と道具瓦 (1 : 4).....	269
第 198 図 佐太前遺跡の丸瓦 (1) (1 : 4).....	271
第 199 図 佐太前遺跡の丸瓦 (2) (1 : 4).....	272
第 200 図 佐太前遺跡の平瓦 (1 : 4).....	273
第 201 図 鰐淵寺と関連諸遺跡の軒瓦 (1 : 4).....	275
第 202 図 大内氏館跡の軒丸瓦と富田城跡の丸瓦 (1 : 4).....	277
第 203 図 鳥取の石造物変遷表.....	284
第 204 図 島根の石造物変遷表.....	285
第 205 図 「鰐淵寺宝篋印塔 2 類」の類似石塔分布図	288
第 206 図 「鰐淵寺宝篋印塔 3 類」の類似石塔分布図	289
第 207 図 大山僧坊跡全体図.....	305
第 208 図 三佛寺蔵王権現像(三佛寺所蔵、鳥取県立博物 館写真提供).....	313

挿表目次

第1表 調査委員会名簿	2	第20表 念仏堂前念仏石塔年号一覧	171
第2表 調査の経過	3	第21表 松露谷地区および川奥地区における石造物の所在点数(1)	174
第3表 調査スケジュール	4	第22表 松露谷地区および川奥地区における石造物の所在点数(2)	175
第4表 『雲陽誌』と『万指出』、『出雲鏡』の12僧坊 名称比較表	21	第23表 平坦面ごとの消長表	202
第5表 鰐淵寺所蔵指定文化財一覧表(国・県・市)	30・31	第24表 石造物種別の集計表	202
第6表 遙堪越(遙堪岬)一丁地蔵	45	第25表 松露谷地区石造物一覧表(1)	206
第7表 林木越(伊努谷峠)一丁地蔵	45	第26表 松露谷地区石造物一覧表(2)	207
第8表 平坦面一覧表(A地区)	52	第27表 松露谷地区石造物一覧表(3)	208
第9表 平坦面一覧表(B～F、H地区)	53	第28表 和多坊の敷地と四辺の変遷	217
第10表 分布調査採集遺物集計表(A地区)(1)	80	第29表 16世紀末から17世紀に終見史料のある僧坊	219
第11表 分布調査採集遺物集計表(A地区)(2)	81	第30表 『雲陽誌』、『万指出』、絵図、明細帳等の堂宇 名称比較表	233
第12表 分布調査採集遺物集計表(C～F・H地区)(1)	82	第31表 鰐淵寺における天文年間後期の僧侶名対比表 (・印の僧侶名が一致)	237
第13表 分布調査採集遺物集計表(C～F・H地区)(2)	83	第32表 鰐淵寺採集・出土遺物一覧表	255
第14表 平坦面の消長(A-1～31)	90	第33表 陶磁器の時期別傾向(年代が判明するものに限る)	255
第15表 平坦面の消長(A-32～62)	91	第34表 13世紀代の型押し年号入り瓦一覧	268
第16表 平坦面の消長(A-63～71, B-1～3, C-1～20)	92	第35表 白色凝灰岩製石塔の特徴(1)	283
第17表 平坦面の消長(C-21～24, D-1・2, E-0～4, F-1～15, H-1・2)	93	第36表 白色凝灰岩製石塔の特徴(2)	283
第18表 測定試料一覧表(測定結果)	162	第37表 島根県東部地域の主要石塔の様相	290
第19表 鰐淵寺境内における石造物一覧	170	第38表 鰐淵寺五輪塔・宝篋印塔時期区分試案	291

図版目次

- 図版 1 新緑の浮浪山鰐淵寺境内
(南上空から)
- 図版 2 浮浪滻と藏王堂
(北から、撮影：杉本和樹氏)
- 図版 3 根本堂
1 新緑の中の根本堂（南から）、(提供：出雲観光協会平田支所)
2 根本堂と常行堂（北から）
- 図版 4 現存堂宇（1）
1 根本堂（東から）、(撮影：杉本和樹氏)
2 根本堂（南東から）、(撮影：杉本和樹氏)
- 図版 5 現存堂宇（2）
1 常行堂と摩多羅神社（北東から）、(撮影：杉本和樹氏)
2 積迦堂（南から）、(撮影：杉本和樹氏)
- 図版 6 境内風景
1 覚城院跡の紅葉（南から）、(提供：出雲観光協会平田支所)
2 杉林の中の浮浪滻地区（北から）
- 図版 7 和多坊跡（北から）
- 図版 8 分布調査採集土器（1）陶磁器・須恵器
- 図版 9 分布調査採集土器（2）白磁・青白磁
- 図版 10 分布調査採集土器（3）青磁
- 図版 11 分布調査採集土器（4）青磁・褐釉陶器・青花など
- 図版 12 分布調査採集土器（5）陶磁器・墨書き土器
- 図版 13 分布調査採集土器（6）備前焼など
- 図版 14 和多坊跡出土土器、等澍院南区出土土器（1）
1 和多坊跡出土陶磁器
2 等澍院南区土坑 SK208 出土陶磁器
- 図版 15 等澍院南区出土土器（2）
土坑 SK208 出土陶磁器と備前焼茶碗
- 図版 16 等澍院南区出土土器（3）
陶磁器と須恵器
- 図版 17 等澍院南区出土土器（4）
- 土坑 SK208 出土朝鮮系黒釉陶器と備前焼大甕
- 図版 18 等澍院南区出土土器（5）
1. 埋葬遺構 SK222 出土越前焼大甕
2. 埋葬遺構 SK223 出土備前焼大甕
- 図版 19 鰐淵寺川南区出土土器（1）
1 遺構出土土器
2 青磁と青花
- 図版 20 鰐淵寺川南区出土土器（2）
1 陶磁器
2 土師器（京都系と在地系）
3 線刻土師器
- 図版 21 鰐淵寺境内（1）
1 上空から見た鰐淵寺境内（東から）
2 根本堂と常行堂（南から）
- 図版 22 鰐淵寺境内（2）
1 鐘楼（左）と積迦堂（南東から）
2 本坊（旧松本坊、南東から）
- 図版 23 鰐淵寺境内（3）
1 現成院跡（北東から）
2 等澍院跡（南東から）
- 図版 24 鰐淵寺境内（4）
1 是心院跡（南東から）
2 覚城院跡と恵門院跡（南から）。(奥は旧宝物館
拝観所「推古館」と宝物収蔵庫)
- 図版 25 鰐淵寺境内（5）
1 山門（北から）、(撮影：杉本和樹氏)
2 御成門（南西から）、(撮影：杉本和樹氏)
3 是心院跡庭園（南から）
4 淨觀院跡庭園（北から）
- 図版 26 分布調査（1）
1 密嚴院跡
2 洞雲院跡
3 堂司庵跡（A-11 平坦面）

- 4 宝藏跡（A-13 平坦面）
 5 念仏堂跡（A-19 平坦面）
 6 A-54 平坦面
 7 A-59 平坦面（1）
 8 故王院跡立会調査
- 図版 27 分布調査（2）
 1 念仏堂跡前の念仏塔（北西から）。（撮影：杉本和樹氏）
 2 B-2 平坦面
 3 C-6 平坦面（松露谷墓地）
 4 松露谷墓地Ⅰ群 C-3・C-4（南西から）。（撮影：杉本和樹氏）
- 図版 28 分布調査（3）
 1 松露谷墓地Ⅰ群 C-7（南から）。（撮影：杉本和樹氏）
 2 松露谷墓地Ⅰ群 C-8（西から）。（撮影：杉本和樹氏）
- 図版 29 分布調査（4）
 1 松露谷墓地Ⅱ群 C-9（西から）。（撮影：杉本和樹氏）
 2 川奥墓地（西から）
- 図版 30 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（1）
 1 調査区全景（北から）
 2 碇石建物跡 SB101 全景（南から）
- 図版 31 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（2）
 1 碇石建物跡 SB101 と 1 トレンチ（北東から）
 2 碇石建物跡 SB102 全景（北から）
- 図版 32 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（3）
 1 碇石建物跡 SB101 と 3 トレンチ（南から）
 2 3 トレンチ全景（東から）
- 図版 33 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（4）
 1 1 トレンチ北西部（北から）
 2 1 トレンチ全景（西から）
 3 1 トレンチ全景（東から）
- 図版 34 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（5）
 1 2 トレンチ全景（南から）
- 2 池跡 SG130 全景（南西から）
 図版 35 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（6）
 1 1 トレンチ石垣 SW118（北から）
 2 1 トレンチ石垣 SW120（北から）
 3 1 トレンチ土器溜り SX119（西から）
- 図版 36 根本堂地区南部（等謝院南区）の調査（1）
 1 調査地全景（調査区表土除去後全景、南西から）
 2 1 トレンチ全景（北東から）
 3 2 トレンチ主要部（南西から）
- 図版 37 根本堂地区南部（等謝院南区）の調査（2）
 1 1 トレンチ土坑 SK208 検出状況（西から）
 2 1 トレンチ土坑 SK208 完掘状況（東から）
- 図版 38 根本堂地区南部（等謝院南区）の調査（3）
 1 2 トレンチ埋甕 SK222・223 ほか（北西から）
 2 2 トレンチ主要部（南西から）
 3 埋甕 SK222（東から）
 4 埋甕 SK223（東から）
- 図版 39 根本堂地区南部（等謝院南区）の調査（4）
 1 2 トレンチ埋甕 SK222・223 検出状況（北西から）
 2 2 トレンチ石垣 SW271・272・273（南東から）
 3 2 トレンチ石垣 SW273・274（南東から）
- 図版 40 浮浪渦地区（鰐淵寺川南区）の調査（1）
 1 F-1 平坦面 調査前（北西から）
 2 F-3 平坦面 調査前（北から）
- 図版 41 浮浪渦地区（鰐淵寺川南区）の調査（2）
 1 F-2 平坦面 調査前（西から）
 2 旧仏心橋 橋台跡（東から）
- 図版 42 浮浪渦地区（鰐淵寺川南区）の調査（3）
 1 F-1 平坦面 1～3 トレンチ（東から）
- 図版 43 浮浪渦地区（鰐淵寺川南区）の調査（4）
 1 F-1 平坦面 碇石列 SX361（西から）
 2 1～3 トレンチ（西から）
 3 1 トレンチ全景（南西から）

- 図版 44 浮浪滝地区（鶴淵寺川南区）の調査（5）
F-2 平坦面 4 トレンチ全景（北から）
- 図版 45 浮浪滝地区（鶴淵寺川南区）の調査（6）
1 4 トレンチ全景（北から）
2 4 トレンチと石列 SX334（南から）
3 4 トレンチ石垣 SW335（北東から）
4 4 トレンチ石垣 SW335（転石除去後、北東
から）
- 図版 46 浮浪滝地区（鶴淵寺川南区）の調査（7）
1 F-3 平坦面清掃後全景（南東から）
2 浴室跡竈跡 SL316（北東から）
- 図版 47 浮浪滝地区（鶴淵寺川南区）の調査（8）
1 F-3 平坦面 磐石列 SX301 ほか（南東から）
2 F-3 平坦面 池跡 SG308（南から）
- 図版 48 浮浪滝地区（鶴淵寺川南区）の調査（9）
山王七仏堂および浮浪滝へと通じる石段（北
から）
- 図版 49 鶴淵寺の陶磁器・土師器
- 図版 50 分布調査採集土器（1）須恵器・備前焼など
- 図版 51 分布調査採集土器（2）
1 備前焼
2 大寺谷遺跡出土土器
- 図版 52 分布調査採集土器（3）
備前焼・瀬戸美濃焼・土器など
- 図版 53 分布調査採集土器（4）
土師器（京都系と在地系）
- 図版 54 分布調査採集瓦（1）
- 図版 55 分布調査採集瓦（2）
- 図版 56 分布調査採集瓦（3）
- 図版 57 分布調査採集瓦（4）
- 図版 58 分布調査採集瓦（5）
- 図版 59 分布調査採集瓦（6）
- 図版 60 分布調査採集瓦（7）
- 図版 61 分布調査採集銭貨・石製品など
- 図版 62 和多坊跡出土土器（1）
土器溜り SX119 出土土師器
- 図版 63 和多坊跡出土土器（2）
- 図版 64 和多坊跡出土瓦・銭貨
- 図版 65 等湖院南区出土土器
- 図版 66 等湖院南区出土瓦
- 図版 67 等湖院南区出土銭貨・石製品など
- 図版 68 鶴淵寺川南区出土陶磁器・土器・鉄釜など
- 図版 69 鶴淵寺川南区出土陶磁器・土器など
- 図版 70 鶴淵寺川南区出土瓦・銭貨
- 図版 71 鶴淵寺の土師器

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る契機と目的

鰐淵寺の創建は、古代にまでさかのぼり、推古2年（594）と伝わる。中世には天台宗比叡山延暦寺の末寺となって、中央の権力と結びつくとともに、出雲国の一宮杵築大社（出雲大社）と宗教的に連結することにより、その勢力を強めた。しかし、中世末から近世には、寺領の削減や杵築大社との神仏分離などにより、その勢力を弱めることとなった。しかし、現在でも多くの貴重な文化財が残されている山陰地方唯一の古刹であり、中世のおもかげを残す境内には、秋の紅葉の時期を中心に多くの参拝者が訪れる。

平成9年（1997）に開創1400年を記念して刊行された『出雲國浮浪山鰐淵寺』では、鰐淵寺の歴史過程全体の総括が行われ、彫刻・絵画・工芸などの寺宝類の網羅的な調査のみならず、地形・地質・動植物についても調査され、鰐淵寺の概要が明らかにされた。

平成21年（2009）度から23年（2011）度にかけて実施された科学研究費補助金の総合調査『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究』では、『出雲國浮浪山鰐淵寺』の成果の上に立ってその総括と点検を行う一方、これまで未解決となっている諸課題を含め、それら全体の問題解決を図ることを目標とした研究が進められ、その成果が『科研報告』（井上編2012）にまとめられた。

この研究の中で、出雲市は考古分野を担当し、かつての建物跡や僧坊跡の調査・確認（とくに唐川地域）、地形測量図の作成を行った。

出雲市ではその研究を進化させ、考古学的な手法を用いて往時の鰐淵寺の様相を解明するために調査を行った。

平成22年（2010）度から26年（2014）度まで、国庫補助を得て埋蔵文化財調査を実施した。本書はその成果をまとめた報告書である。

第2節 調査の経過

平成22年（2010）度からの発掘調査で最初に調査対象としたのは、和多坊跡である。和多坊は、根本堂地区の北部に位置し、中世には栄芸といった傑僧を輩出したことでも知られており、戦国期には鰐淵寺のなかでも中心的役割を果たした僧坊である。平成22年（2010）6月下旬から和多坊跡の清掃・測量調査を開始し、11月中旬まで発掘調査を実施した。

翌平成23年（2011）度は、坊名不明の平坦面として、等渕院跡の南側に位置する平坦面（等渕院南区と呼称）を選定した。僧坊名の不明な平坦面においても、僧坊など建物跡が存在したのかどうかの確認が目的である。調査は、平成23年5月から10月にかけて行った。

この2つの調査については、科研調査の一部門として進め、平成24年（2012）度に報告書を刊行する予定であったが、鰐淵寺の考古学的解明には、基礎データの蓄積が不足していると感じていた。

文化庁記念物課の指導・助言もあり、『科研報告』には概要報告を掲載するにとどめ、調査を継続することとした。すなわち、平成24・25年度の2年間調査を延長し、26年度に報告書を刊行することとした。平成22・23年度（2010・2011）に指導助言を受けていた科研費研究組織が解散したため、平成24年度から平成26年度の3カ年にわたり、出雲市で調査委員会を新たに立ち上げ、調査を進めることとなった（第1表）。

このような経緯のもと、平成24年（2012）度は、鰐淵寺川の南側、浮浪滝の入り口にあたる鰐淵寺川の南側（鰐淵寺川南区と呼称）を調査した。年度当初にこの地区で分布調査を行い、その状況を第1回の鰐淵寺調査委員会で報告し、発掘調査区の設定位置等を検討し、発掘を実施した。調査期間は、平成24年（2012）6月から10月までである。

発掘調査と並行して、境内地の分布調査も実施した。調査は科研委員会および調査委員会の指導に基づき、平成23年（2011）度は、12月から3月、24年度は、4月から25年3月、25年度は、4月から11月を行った。平成25年度は発掘調査を行わず、分布調査に傾注した。調査範囲は境内地および唐川地区で行い、大きな成果を得ることができた。

整理作業は、調査に合わせて同時並行で行い、平成26年度に報告書を作成した。作成までに地元委員の指導により内容の検討会議を3回開催した。

発掘調査の進捗に合わせて調査成果の公開にも努めた。出雲弥生の森博物館において、等瀬院南区の調査および鰐淵寺川南区の調査成果を速報展で公開したほか、講座のテーマとしても取り上げた。また、平成25年（2013）5月26日には、駒澤大学で行われた日本考古学協会第79回（2013年度）総会において野坂俊之が「鰐淵寺の総合調査と発掘調査」と題して発表した。同年7月には、出雲弥生の森博物館の特別展において「もう一つの出雲神話－中世の鰐淵寺と出雲大社－」と題して調査成果に基く研究成果の公開を行った（第2表）。

（石原聰）

参考文献

井上寛司編 1997『出雲國 浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺

井上寛司編 2012『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために－』研究成果報告書

第1表 調査委員会名簿

氏名	所属（平成26年当時）	備考
大橋泰夫	島根大学教授	委員長
坂井秀弥	奈良大学教授	副委員長
井上寛司	島根大学名誉教授	
佐藤泰雄	鰐淵寺住職	
田中哲雄	日本城郭研究センター名誉館長	
鳥谷芳雄	古代出雲歴史博物館 学芸情報課長	
松本岩雄	島根県教育庁文化財課 文化財専門官	
和田嘉宥	米子工業高等専門学校名誉教授	

任期：平成24年（2012）4月1日～平成27年（2015）3月31日

第2表 調査の経過

調査関係

年	月	日	事柄	年	月	日	事柄
			発掘調査				分布調査など
				2009	2	26	第1回鰐淵寺周辺分布調査
				4	20		第2回鰐淵寺周辺分布調査
				5	15		第3回鰐淵寺周辺分布調査
				7	9		第1回前住職への聞き取り調査
				7	15		第2回前住職の聞き取り調査
				2010	1	29	第4回鰐淵寺周辺分布調査
				2	19		松露谷石造物調査
2010	6	21	和多坊跡調査着手				
	7	6	和多坊跡礎石測量				
	9	30	石垣SW118・119・120確認				
	11	10	調査区埋め戻し開始				
	11	12	調査区埋め戻し終了・現地調査終了				
2011	5	13	第4回鰐淵寺周辺分布調査	2011	2	25	第5回鰐淵寺周辺分布調査
	6	13	SK208の遺物集積箇所確認				
	8	1	石垣SW271・272・273・274確認				
	9	9	SK222・223確認				
	10	12	埋め戻し開始				
	10	19	埋め戻し完了		12	6	23年度境内分布調査開始
2012	6	1	鰐淵寺川南区発掘調査着手	2012	3	16	23年度分布調査終了
	6	29	4トレンチ 砂層下より遺構面確認		4	16	24年度境内分布調査開始
	9	14	浴室跡から鉄釜破片確認		9	4	石造物部会 川奥墓地石造物調査(1日目)
	9	28	埋め戻し開始		9	5	石造物部会 川奥墓地石造物調査(2日目)
	10	1	4トレンチ西壁の一部土層を剥ぎ取り				
	10	12	埋め戻し終了				
				2013	1		漢翠館撤去工事開始
				2			漢翠館撤去に係る基礎部分の立会調査
				3	19		24年度境内分布調査終了
				4	8		25年度境内分布調査開始
				11	5		25年度分布調査終了
				2014	12	2	松露谷近世墓調査(第1回)
					12	8	松露谷近世墓調査(第2回)
				2015	2	5	松露谷近世墓調査(第3回)

会議・指導会など

年	月	日	事柄
2010	1	15	鰐淵寺総合調査(考古組)検討会議
	7	20	大橋泰夫氏(鳥根大学)視察
	8	16	和田嘉喜氏調査指導
	8	18	調査指導会井上寛司氏、大橋泰夫氏、松本岩雄氏、鳥谷芳雄氏
	10	4	池淵俊一氏(浜文史財庫)調査指導
	10	15	調査指導会井上寛司氏、大橋泰夫氏、松本岩雄氏、和田嘉喜氏
	10	22	文化庁渡辺丈彦調査官視察
	10	28	渡邊貞幸氏調査指導
	11	1	田中義昭氏調査指導
2011	4	15	坂井秀弥氏(奈良大学)調査指導
	4	18	久保智康氏(京都国立博物館)視察
	6	7	久保智康氏視察
	8	8	調査指導会井上寛司氏、大橋泰夫氏、松本岩雄氏、鳥谷芳雄氏
	8	31	文化庁林正蔵調査官視察
	9	5	中村唯史氏(三瓶自然館)調査指導
	9	8	渡邊貞幸氏調査指導
	9	14	調査指導会井上寛司氏、大橋泰夫氏、松本岩雄氏、坂井秀弥氏
	9	22	調査指導会井上寛司氏、山岸常人氏、和田嘉喜氏
2012	4	28	第1回鰐淵寺調査委員会

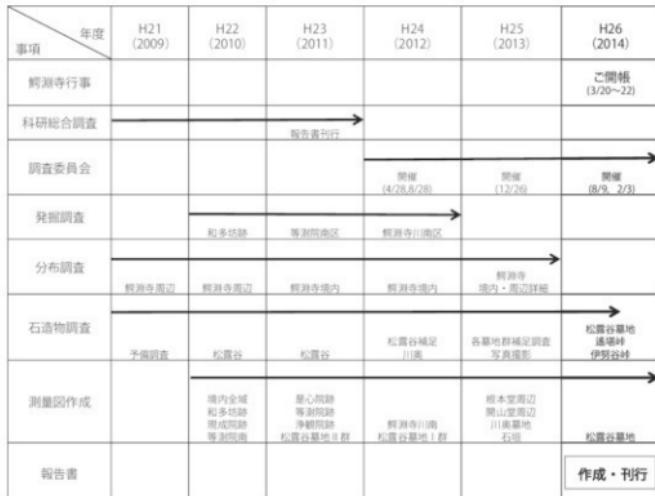
次頁につづく

	5	17	小野正敏氏調査指導(鷲洞寺境内)
	5	18	小野正敏氏調査指導(出土遺物)
	6	22	鷲洞寺調査委員会石造物部会
	8	6	大橋泰氏・松本岩雄氏調査指導
	8	28	第2回鷲洞寺調査委員会
2013	8	29	石川出志氏(明治大学)調査指導
	11	8	島根県文化財課守岡正司氏出土遺物調査指導
	9	3	鷲洞寺調査委員会石造物部会
	10	19	文化庁近江俊秀調査官視察
	12	26	第3回鷲洞寺調査委員会
2014	1	15	文化庁山下信一郎調査官視察
	5	13	西尾克己氏出土遺物調査指導
	6	11	西尾克己氏出土遺物調査指導
	7	15	村上勇氏・西尾克己氏出土遺物調査指導
	8	9	第4回鷲洞寺調査委員会
	9	25	第1回報告書作成検討会
	10	9	西尾克己氏出土遺物調査指導
	10	28	第2回報告書作成検討会
	12	17	第3回報告書作成検討会
	12	27	西尾克己氏・守岡正司氏出土遺物調査指導
2015	1	22	廣江耕二氏出土遺物調査指導
	2	3	第5回鷲洞寺調査委員会
	2	13	文化庁山下信一郎調査官報告書指導

展示・報告など

年	月	日	事 柏
2011	5	29	出雲弥生の森博物館職員リレー講座「鷲洞寺の調査について」(発表者:石原 駿)
2012	4	29	出雲弥生の森博物館職員ミニリレー講座「鷲洞寺調査について」(発表者:石原 駿)
	6	13	出雲弥生の森博物館調査速報展(等湯院南区について 8月20日まで)
	10	20	鷲洞寺コミュニティセンター講座「鷲洞寺の調査について」(発表者:石原 駿)
2013	2	20	出雲弥生の森博物館調査速報展(鷲洞寺川南区について 4月22日まで)
	5	26	考古学協会総会発表「鷲洞寺の総合調査と発掘露面」(発表者:野坂俊之)
	7	20	出雲弥生の森博物館2013特別展「もう一つの出雲神話—中世の鷲洞寺と出雲大社—」(2013年9月9日まで)

第3表 調査スケジュール



第2章 鰐淵寺の位置と環境

第1節 地理的環境

1 地形的特徴（第1・2図）

鰐淵寺は、島根半島西部の「北山」と呼ばれる山塊（以下、北山山系）の一角に立地する。北山山系は、はなたかせん 鼻高山（536 m）を最高峰に、標高400 m～500 m台のピークが連なり、全体に比較的急峻な地形である。鼻高山の北斜面に谷を開削して流れる鰐淵寺川の左岸を中心に、根本堂をはじめとする鰐淵寺に関連する建造物が配置されている。

島根半島は島根県東部の海岸線に並行して東西に細長く伸びる地形で、沖積平野である出雲平野によって本土側と連続した陸繫島状の半島である。島根半島の主軸を構成する山列は3つに分かれ、雁行状に配列している。その山列は、西列は日御碕から旅伏山（421 m）にかけての北山山系、中列なかさんたい は十六島鼻から松江市の朝日山（341 m）にかけて、東列は恵曇湾付近から美保関にかけての3列で、それぞれの間は第四系からなる低地で区分されている。また、東列の南にやや離れて嵩山（331 m）、和久羅山（244 m）の山塊が孤立している。島根半島の山塊は東西方向を主軸とする断層系の活動によって、概ね過去1000万年間に隆起してきた地形で、急峻な部分が多い。

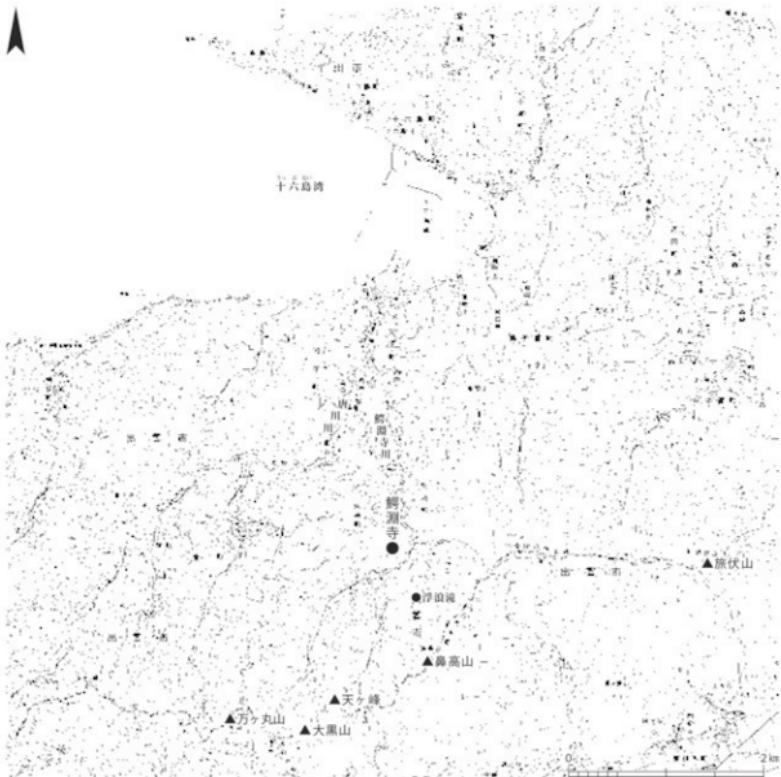
鰐淵寺付近の地形についてみると、境内地を流れる鰐淵寺川は、十六島湾に注ぐ唐川川の支流にあたり、鼻高山（536 m）、天ヶ峰（458 m）、大黒山（443 m）、万ヶ丸山（499 m）が連なる一帯を集水域としている。その谷は全体には急峻なV字谷で河床は岩盤の露出箇所が多く、河岸の土砂堆積は



第1図 島根半島（1:400,000）

限定的である。谷斜面は全体的に急角度だが、堂などが配置されている左岸側の一帯は小規模な河岸段丘状の緩やかな地形である。この地形を利用して平坦地を造成し、境内が整備されている。また、左岸側の尾根を越えた先の北斜面では、別所町から唐川町にかけての概ね 1 km^2 の範囲にわたって、標高 150 m ~ 300 m 前後のやや傾斜が緩やかな斜面が広がっており、茶畠などに利用されている。これほどの広さをもった緩斜面は、北山山系には他に見当たらず、特徴的である。なお、個々の規模は小さいものの、鼻高山から旅伏山へ連なる尾根筋を挟んだ南側斜面にも、同程度の高度の緩斜面を含む数段の段丘状地形が認められる。これらの緩斜面の分布は、後述する成相寺層の頁岩の分布域と重なる。風化してもろくなりやすい岩質が段丘面の形成に影響しているかもしれない。

鰐淵寺から鼻高山山頂付近へ直線的に続く谷は、河床勾配が約 22 度のかなり急峻な地形（急傾斜地指定対象は 30 度以上）で、その一角に硬質な岩盤が切り立っており、18 m の落差を持つ浮浪流が形成されている。



第2図 鰐淵寺周辺の地形図 (1 : 50,000)

2 地質的特徴（第3・4図）

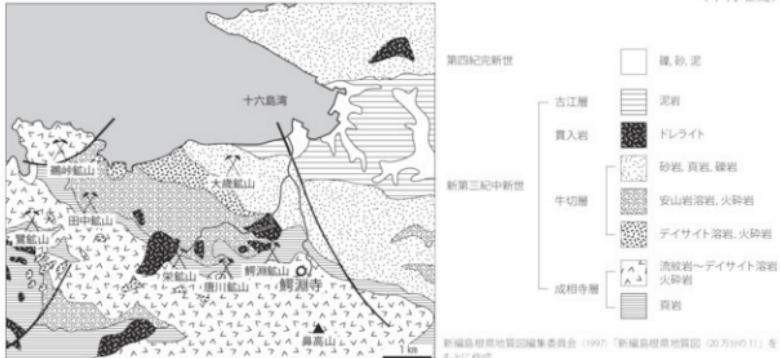
北山山系には、新第三紀中新世（2650万～650万年前）の地層が分布する。中新世は、日本海が形成され、日本列島がユーラシア大陸から切り離されて島弧化した地殻変動の時代である。当地周辺に分布する中新世の地層は、概ね2000万～1500万年前の成相寺層、1500万～1300万年前の牛切層、1300万～1200万年前の古江層に区分される。鰐淵寺付近は成相寺層の流紋岩質の火砕岩と一部に流紋岩溶岩が分布している。岩質は硬質で、鰐淵寺川の河床では水流に削られた火砕岩の緻密な岩肌を見ることができる。

成相寺層は、拡大しつつあった日本海の海底で、海底火山活動の影響を受けながら形成された地層である。同層の流紋岩質の火砕岩と溶岩は海底火山の噴出物で、热水による変質作用を受けて緑色を帯びている。鰐淵寺の北側に分布する同層の頁岩は、黒鉱鉱床を胚胎している。黒鉱鉱床は、盆地状の海底で生じた热水活動によって銅、鉛、亜鉛などの鉱物が混合した鉱石（黒鉱）が沈殿してきた堆積性の鉱床で、黒鉱の周囲には石こうを伴う。その分布は、成相寺層と同時期に日本海海底で形成された地層に限られ、世界的にまれなタイプの鉱床である。黒鉱鉱床としては秋田県の花岡鉱山や小坂鉱山が代表的で、ゼオライト鉱山として稼働している大田市の石見鉱山もこのタイプである。北山山系は、黒鉱鉱床のほか、黒鉱鉱床に伴う鉱脈型鉱床や他の要因で形成された鉱床が点在している。

牛切層は成相寺層に比べて浅い海域で形成された地層で、礫岩など粗粒な堆積岩も伴っている。火山活動の影響も成相寺層の時代に引き続いている。牛切層は砂岩と泥岩の互層が特徴的で、当地の石切り場でその様子を観察できる。特に小伊津町の海岸では明瞭な砂泥互層が発達している。

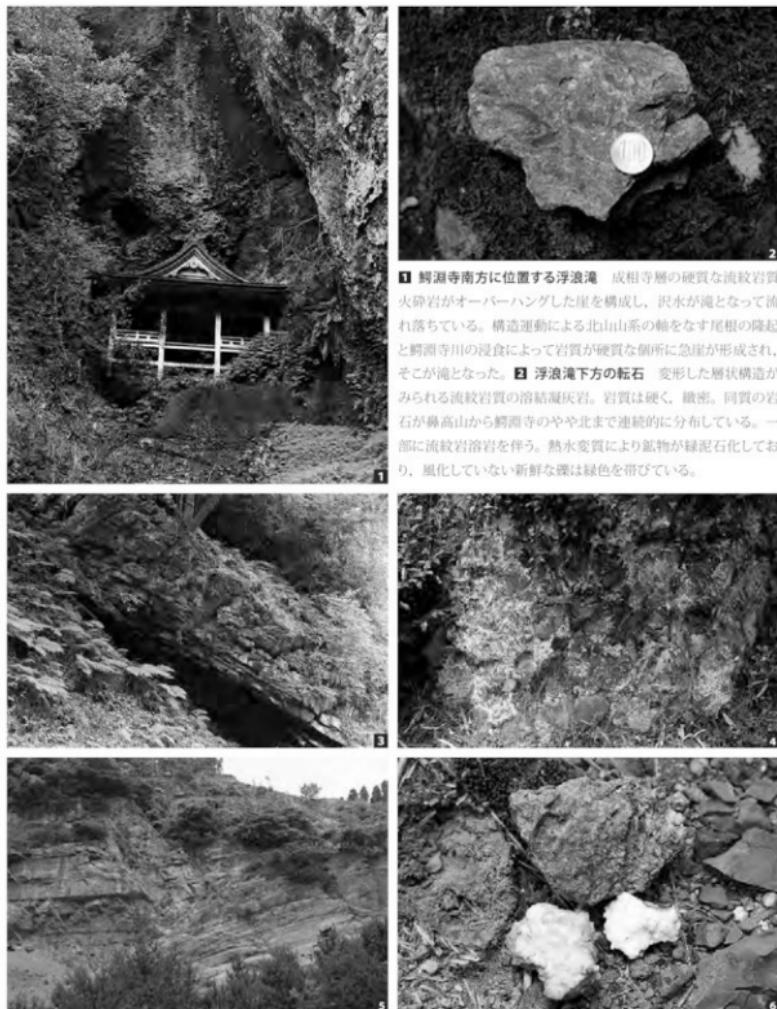
古江層は北山山系の北側から宍道湖北岸にかけて分布する地層で、泥岩を主体とする浅海の堆積物である。この地層では火山活動の影響はなく、日本海拡大期の火山活動が終息したことが窺われる。

（中村唯史）



当地一帯には、新第三紀中新世中期から後期にかけての火山活動。堆積岩類が分布する。中新世中期は、日本海形成期にあたり、当地一帯のこの時代の岩石は、拡大しつつあった日本海の海底で形成されたもの。中新世中期に日本海海底で形成された地層は、緑色を帯びた凝灰岩類を特徴的に含むことから、この時代の地層の分布域を「グリーンタフ（緑色風化帯）地帯」と呼ぶ。島根平島もこれに含まれる。

第3図 鰐淵寺周辺の地質図



❶ 鰐淵寺南方に位置する浮浪澗 成相寺層の硬質な流紋岩質火砕岩がオーバーハングした崖を構成し、沢水が滝となって流れ落ちている。構造運動による北山山系の軸をなす尾根の隆起と鰐淵寺川の浸食によって岩質が硬質な個所に急崖が形成され、そこが滝となった。 **❷ 浮浪澗下方の転石** 変形した層状構造がみられる流紋岩質の溶結凝灰岩。岩質は硬く、緻密。同質の岩石が鼻高山から鰐淵寺のやや北まで連続的に分布している。一部に流紋岩溶岩を伴う。熱水変質により鉱物が緑泥石化しており、風化していない新鮮な塊は緑色を帯びている。

❸ 鰐淵寺と第1駐車場の間の道路脇の露頭 地層面に沿った節理が明瞭な流紋岩質凝灰岩。河床で浸食された部分は緻密で硬質だが、風化を受けると節理が発達するものとみられる。

❹ 第1駐車場近くの礫岩の露頭 牛切層。円盤を主体とする。

❺ 鰐淵寺の北方、金山地区の碎石場 牛切層の砂岩、頁岩が露頭している。地層は北へ傾斜している。

❻ 鰐淵鉱山の鉱床 黒鉱鉱床で、多様な金属鉱物が混合した黒鉱と、その周辺から石こうを産出した。昭和40年頃まで、国内有数の石こう鉱山であった。

第4図 鰐淵寺周辺の地質状況

第2節 歴史的環境（周辺の遺跡）

この節では、鰐淵寺が位置する島根半島（北山周辺：島根半島西部）を中心に出雲平野を視野に入れつつ時代ごとの状況を概観する。なお、遺跡名の後の数字は第5・6図に対応する。

1 繩文・弥生・古墳時代

弥生時代には、前期に原山遺跡（50）や平野部の拠点集落・矢野遺跡（24）が成立する。中期になって大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡（63）や加茂岩倉遺跡（66）のほか、銅戈、ヒスイ製勾玉などが出土した真名井（市主社境内）遺跡（54）があり。後期には、青木遺跡（17）など沖積地上にも集落や四隅突出型墳丘墓が造られた。後期後葉には、西谷墳墓群（27）に「王墓」とされる大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれた。このほか、猪目洞窟遺跡やひろげ遺跡（55）など海に面した遺跡もある。

古墳時代に入ると出雲平野の集落は急激に衰退する。西谷の四隅突出型埴丘墓に続く前期古墳は築かれず、この時期に大きな変動がうかがわれる。前期後半には、大寺1号墳（15）と山地古墳（46）、中期から後期前半に軍原古墳（65）や神庭岩船山古墳（64）など造られるがその数は少ない。後期後半になると古墳の数が激増する。北山山麓に上島古墳（14）や、未盃掘古墳である国富中村古墳（13）が築かれ、平野南部には今市大念寺古墳（26）、上塙治築山古墳（31）、上塙治地藏山古墳（35）と大規模な古墳が続けて造られた。

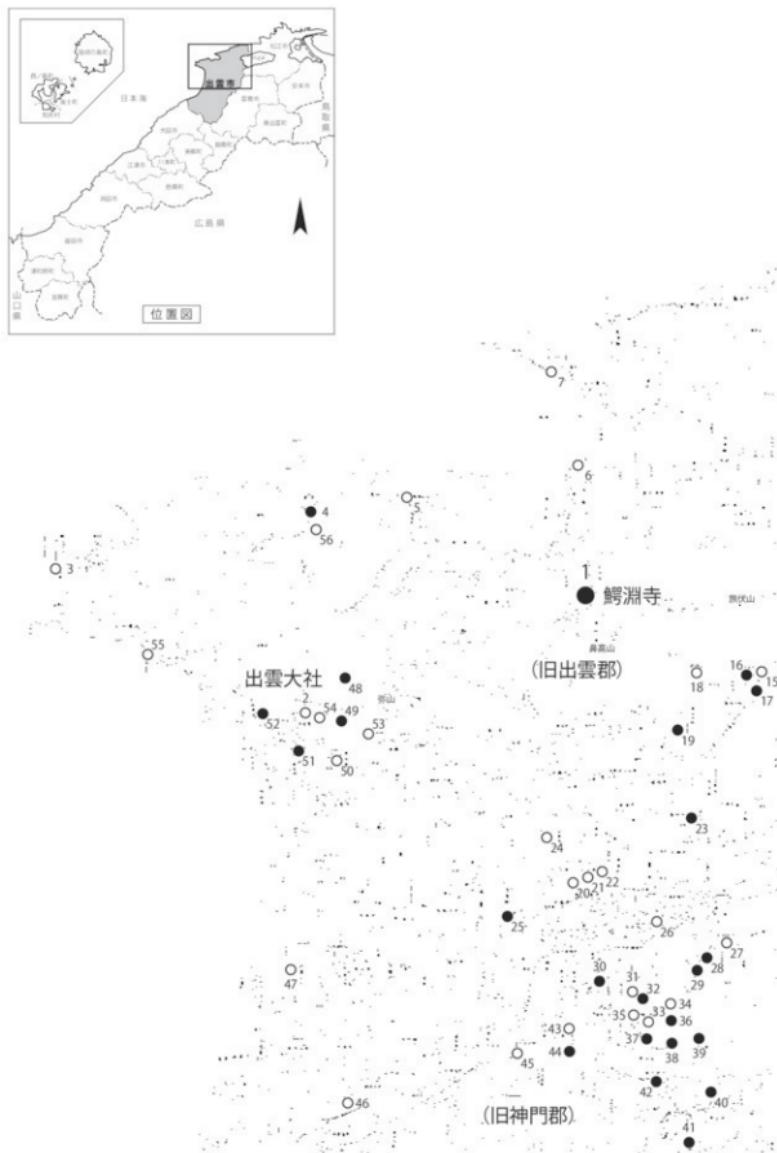
2 古代（奈良・平安時代）

『出雲國風土記』によれば、鰐淵寺を含む山塊は、出雲国出雲郡宇賀郷に属す。猪目洞窟遺跡(5)は宇賀郷にあったとされる「黄泉の穴」といわれ、出土した弥生・古墳時代の人骨が注目される。出雲郡の郡家は、斐川町出西の後谷遺跡(57)周辺とされる。後谷遺跡では奈良時代から平安時代前期にかけての柱础建物跡がみつかり、大量の炭化米や「□□倉」の墨書き土器などが出土したことから郡家付設の正倉跡とみられている。郡庁もこの周辺に所在した可能性が高い。

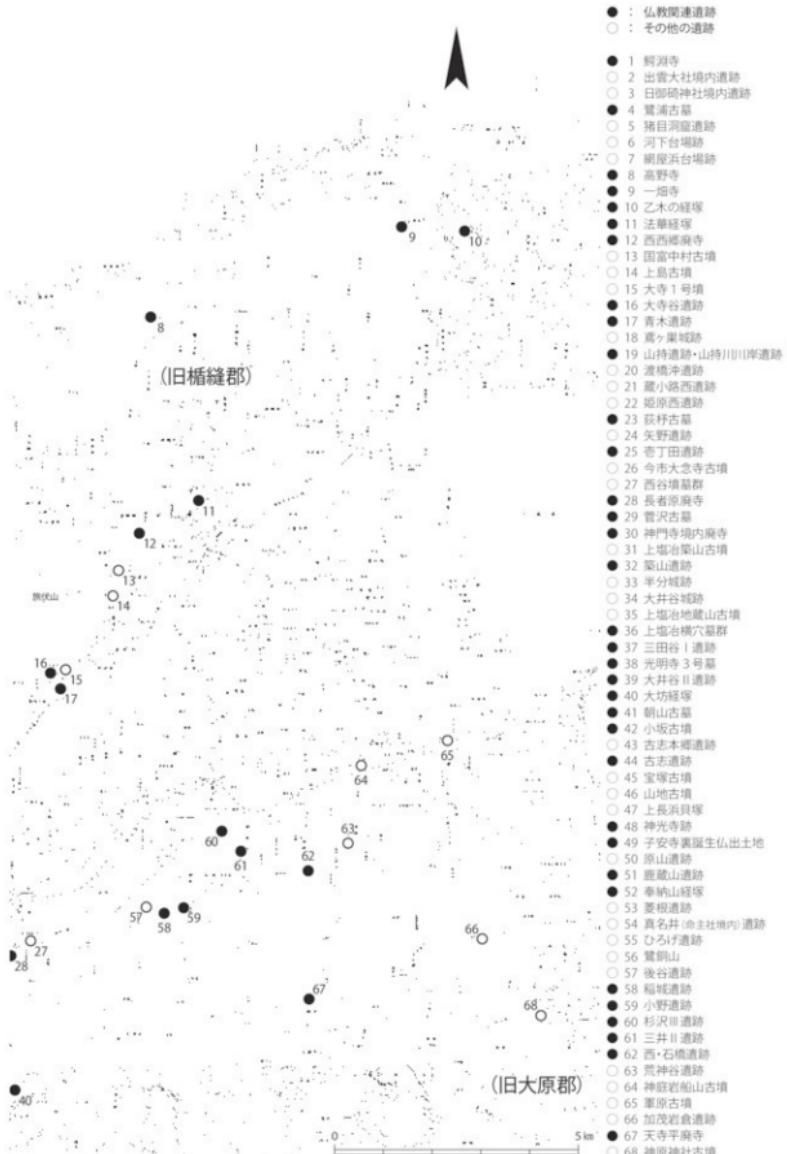
このほか、神門郡家推定地の古志本郷遺跡（43）、新造院推定地のかんむじどり寺境内庵寺（30）、西西郷庵寺（12）、天寺平摩寺（67）など、官衙寺院関連の遺跡が点在している。

出雲大社南方の鹿島山遺跡(51)では、奈良三彩の多口瓶、「堂」や「社」など墨書き土器、金銅製鍛具など宗教的かつ官衙的な色彩をもつ遺物が出土し、特異である。

火葬墓の事例は、出雲市内で9例確認できる。出雲平野西南部に集中し、石櫃を伴うなど規模の大きいものがある。このうち、小坂古墳（42）では古墳石室内から石櫃・萩手刀が出土した。奈良時代に追葬ないし改葬が行われたと考えられている。光明寺3号墓（38）は方形墳丘に火葬骨を入れた石櫃を納め特殊な例である。



第5図 鰐淵寺の位置と周辺の遺跡（1）(1 : 100,000)



第6図 鰐淵寺の位置と周辺の遺跡（2）（1:100,000）

北山南麓の大寺跡には、地方では珍しい平安前期の木造仏が残されている。その仏像が残される大寺跡（萬福寺）前面に大寺谷遺跡（16）が広がり、古代の軒丸瓦が出土している。鰐淵寺に所蔵される銅造觀音菩薩立像（重要文化財）銘にある「出雲國若倭部臣」は『出雲國風土記』にみえる櫛縫郡都司氏族であり、かつ青木遺跡（17）出土木簡にもその名が見えるなど、この地域を代表する氏族であった。

飛鳥時代以来、国家的崇敬を受けてきた出雲大社（杵築大社）とともに、半島の西端に位置する日御崎神社（3）もまた、平安時代末（12世紀末）には都にまでその名が知られる存在であった。『梁塵秘抄』には聖の修行の場として「鰐淵」と並んで「日御崎」があがる。

3 中世

古代以来、出雲国の政治・経済の中心は国府（松江市大草町）にあった。しかし、鎌倉時代に出雲守護に補せられた佐々木義清の孫頼泰は、13世紀後半に塩治郷（出雲市）を根拠とし塩治氏を称した。この塩治氏に関わるのが築山遺跡（32）で上塩治築山古墳に隣接して礎石建物跡や区画溝などが見つかっている。塩治氏が岡山平野に定着したころ、出雲大社の国造家は千家・北島に分かれた。出雲大社境内遺跡（2）で発見された巨大な三本柱の社殿は、これを少し遡る宝治2年（1248）の正殿式遷宮のものと推定されている。この遷宮には鰐淵寺の僧も参加した（井上編1997）。岡山平野の中世前半期は、出雲大社と鰐淵寺、そして塩治氏が動かしていった。

守護職塩治氏に対し、有力な国衙在庁官人だったのが朝山氏である。咸小路西遺跡（21）はこの朝山氏の居館跡と目され、12～15世紀にわたる大量の貿易陶磁器が出土した。貿易陶磁器は築山遺跡にも優品があるほか、越前焼大甕に龍泉窯系青磁が副葬された荻原古墓（23、重要文化財）が著名である。この時期の遺跡には、他に渡橋沖遺跡（20、13～14世紀）、矢野遺跡（24、14～15世紀）などがある。

平野を囲む丘陵地には、応仁・文明の乱を大きな契機として多くの山城が築かれた。発掘調査された城跡に、半分城跡（33）と大井谷城跡（34）がある。半分城跡では周囲に柵と土壁を設けた郭が調査され、室町時代後半から戦国時代末まで使われたと推定された。大井谷城跡とともに塩治氏に関わる遺跡と考えられる。

室町時代の出雲国守護は、山名氏と京極氏（佐々木氏）に入れ替わりつとめたが、14世紀末以降は京極氏が継続して補任された。15世紀前半には、その守護代として同族の尼子氏が富田城（安来市広瀬町）に入った。松田氏や三沢氏と対立しながらもこれを押さえ、塩治氏に対しても尼子経久の三男興久を養子に入ることで掌握した。興久は享禄3年（1530）に経久に対し叛くが、その背後には出雲大社や鰐淵寺がいたようである。

経久は、出雲大社に三重塔や鐘楼などを建設して境内の景観を一変させた。そのさまは『杵築大社近郷絵図』に描かれている。これ以前からも、大社には本願僧がその運営に参画しており、杵築を目指して法華經納経をおこなう、廻国聖も活発に活動していた。奉納山経塚（52）から出土した金銅製經筒には、東は常陸、西は伊予にわたる国名が残されている。鰐淵寺に対しては、掟書を定めるとともに、尼子氏は清水寺（安来市）に肩入れし、寺社勢力の制圧を試みた。

尼子氏は、^{尼子の代}（1537－1560）には8カ国守護に任せられたが、天文9年（1540）毛利氏を安芸吉田郡山城に攻めて敗れ、同12年の大内氏の出雲攻めは凌いだものの、以後も大内氏、のちには毛利氏との攻防が続いた。出雲平野もたびたび戦場となった。毛利元就は永禄9年（1566）の富田城開城・尼子氏滅亡に至る戦いにおいても、南に平野を見渡す北山の一角・鳶ヶ巣城跡（18）を陣城とした。標高281mの主郭を中心に四方の尾根に郭を配置した放射状連郭式山城である。築城時期は永禄5年（1562）とされる。

先述した尼子氏が建立した三重塔は、兵庫県養父市の名草神社に、鐘楼にあったとされる梵鐘は福岡県の西光寺^{西光寺}にあり、それぞれ重要文化財、国宝となっている。

大社町修理免坊床の神光寺跡（48）にあったとされる一石宝鏡印塔は、主に石見地方で流通する^{修理免}^{神光寺}の石塔であり、一石造りである点など注目される（大社町史編集委員会 2002）。

また、上長浜貝塚（47）では、古代末から中世にかけての漁村の姿を知ることができる。

鷲銅山（56）は戦前まで採鉱されていた鉱山で、開山時期は定かではないが、『銀山旧記』によれば、鷲銅山が石見銀山の発見に関与する鉱山として登場することから、中世にさかのぼる可能性がある。

4 近世

近世に入ると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川左岸には米原岩橋や間府岩橋が開削され、物資輸送や農業用水の確保に利用された。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を有数の穀倉地帯とした。

十六島湾沿岸では、寛政11年（1799）に網屋浜台場（7）が、文久3年（1863）に西洋式台場として河下台場（6）が築造された。
(石原 聰)

参考文献

- 出雲市教育委員会 1979『大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書』
- 井上寛司編 1997『出雲國 浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺
- 佐伯徳哉 2014『中世出雲と国家の支配』法藏館
- 島根県教育委員会 1998『島根県中世城館跡分布調査報告書』（第2集 出雲、隠岐の城館跡）
- 島根県教育委員会 1999『蔵小路西遺跡』
- 大社町史編集委員会 2002『大社町史』史料編（民俗・考古資料）大社町
- 大社町教育委員会 2004『出雲大社境内遺跡』
- 平田市誌編纂委員会 1969『平田市誌』平田市教育委員会



第7図 現在の鰐淵寺根本堂地区の入口（北東から、2015年2月7日撮影）

第3章 鰐淵寺の歴史と文化財

第1節 鰐淵寺の概要

鰐淵寺は、もと鰐淵山と称し、古代以来、現境内地の南、浮浪滝を中心とする山林修行、修験道場として発展してきた。寺伝では、推古天皇2年(594)、智春上人の開基という。寺号の「鰐淵」は、上人が滝のほとりで誤って滝壺に落とした仏像を、鰐がくわえてきたことにちなむとされる。その後、平安期以降の当地は、浮浪滝を中心に修験場から発展した藏王信仰の拠点として栄えた。仁平3年(1153)銘の石製經筒には「鰐淵山金剛藏王宝窟」と記されている。また平安時代末期の『榮慶秘抄』にも「聖の住所」の一つに謳われるなど、修験場として広く知られていた。

延暦寺の末寺としての「浮浪山鰐淵寺」が成立したのは12世紀後半とみられ、当時は薬師如来を祀る「南院」と、千手観音を祀る「北院」に分かれており、鎌倉室町期の文書にも「北院和多坊」「南院桜本坊」などの僧坊名がみえる。そして、南北朝期(14世紀中頃)の両院統一により、現在の伽藍の骨格が成立したと考えられている。

鰐淵寺の歴史のなかで特筆すべきが杵築大社(出雲大社)との関係である。北山の東西で約6km離れている鰐淵寺と杵築大社は、平安期から中世にかけての神仏習合の中でその関係を深め、杵築大社での重要な祭事において鰐淵寺の僧侶が大般若経の転読を行うなど、強い結びつきをもつに至った。文書によると、鰐淵寺が「國中第一之御藍」と称される一方、杵築大社は「國中第一之靈神」と呼ばれ、両者が宗教上、対を成して出雲国を代表する宗教的存在であったことがうかがえる。また中世の杵築大社において祭神がスサノヲとされていたことと、鰐淵寺において藏王権現をスサノヲの本地とみていたこととは呼応していたと考えられる。

また、鰐淵寺は弁慶が修行したとも伝えられ、「弁慶硯の水」、「弁慶自画像」、「負い櫃」や弁慶が一夜で大山寺から運んだとされる「大日寺の釣鐘」などが残されている。

近世に入ると、杵築大社は祭神をオオクニヌシに戻し、また寛文の代替(1667)にともない境内の三重塔や鐘楼を撤廃するとともに、鰐淵寺僧による祈祷は無用なものとするなど神仏分離を進めたため、鰐淵寺と杵築大社の関係は途絶した。

鰐淵寺境内はかつて、南北朝期に80前後かとも推計される僧坊があったが⁽¹⁾、江戸期(18世紀前半)には12の坊に減ってしまった(第8図)。現在は根本堂や常行堂・摩多羅神社・開山堂・釈迦堂・藏王堂のほか、僧坊としては本坊(旧松木坊)が残るのみとなっている。しかし、400点を超える中世文書や壬辰年(692)銘の銅造観音菩薩立像(重要文化財)など貴重な寺宝類が数多く残されていて、全国的にも注目されている。

(石原聰)

註

(1)「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」(鰐淵寺文書、『科研報告』目録119)より推定。



第8図 江戸期の絵図（上、絵図A）と明治期の絵図（下、絵図B）

第2節 鰐淵寺境内の立地と構成

鰐淵寺は島根半島の山間にあり、境内地を貫いて鰐淵寺川が北に流れる。根本堂を中心とする境内中枢部は「別所」(出雲市別所町)と通称され、鰐淵寺川左岸の傾斜地にある。最下段にある本坊(旧松本坊)はおよそ標高120mに、最上段の根本堂は標高170mあたりに位置する。この境内地の南側、鰐淵寺川右岸にも平地が広がっており、その南の山腹中段(標高約150m)に山王七仏堂がある。この堂を右手に見つつ山道を登ったところには、浮浪滝と藏王堂がある。また、本坊の東、鰐淵寺川右岸に立つ仁王門の北およそ75mの松露谷^{しまろくに}には、墓地群がある。これらが鰐淵寺境内の中核部であるが、境内全体は、江戸期の木版絵図(第8図上)に描かれたように四周の山稜部に至る広大なものである。

「別所地域」以外に、西北西およそ1.5kmを隔てたところにある「唐川」(出雲市唐川町)は、かつて「鰐淵寺北院」の所在地と推定されてきた。しかし、第4章で述べるようにここには寺院の痕跡がない。また、南東およそ4kmにある「大寺谷」を「鰐淵寺南院」のありかとみる考え方もあるが、これもあたらないことは、続く第4章で詳述されるであろう。よって、ここでは「別所地域」についてのみ述べることとする。

1 境内中枢部の現況 (第9図、図版1~7・21~26)

境内中枢部は、大きくは3つの地区からなっている。つまり、根本堂を核とする鰐淵寺川左岸の傾斜地に広がる「根本堂地区」(鰐淵寺川右岸に建つ仁王門を含む)、その南方で鰐淵寺川右岸の「浮浪滝地区」、根本堂地区東方の支谷一帯の「松露谷地区」である。地区ごとにその概要を示す。建造物の規模構造と建立年代については、山岸常人氏の論考(山岸2012)に依った。

(1) 根本堂地区

根本堂地区は、おおよそ五段に造成された標高120mから170mほどの傾斜地に立地する。

最上段平坦面 標高170m前後にある最上段の平坦面は、南北約110m、東西約40mの広さである。この中央に、鰐淵寺の本堂たる根本堂が東面して建つ。そしてその北、根本堂の右手に釈迦堂と鐘楼、根本堂の南、左手に常行堂と摩多羅神社が建ち並んでいる。仏堂と社殿だけが立地する一画である。なお、釈迦堂のさらに北や北東には今は建物のない平坦面がいくつか存在する。

根本堂は、桁行5間梁間5間、間口は13mを超える規模であり、かつ平面規模に対して建物高が大きい。入母屋造、柿葺で、正面の軒には唐破風が付く。本尊は、千手観音と薬師如来である。山岸氏は、虹梁の絵様や木鼻などの意匠から、その建築年代を18世紀中期(享保と天明の間)と推定している⁽¹⁾。その後、19世紀初め(文化年間)に修理と改造があつたらしい。

根本堂の右手(北)にある釈迦堂は、正面3間側面3間の宝形造の建物で、南正面に1間の向拝が付く。鉄板葺。棟札から、17世紀後期(寛文4年(1664)か寛文12年(1672))の建立と考えられる。境内に現存する、最古の建造物である。二つの仏堂の間、やや西に奥まって、鐘楼がある。

鐘楼は、桁行1間梁間1間の切妻造。棟札から、18世紀前期(正徳3年(1713))建立とわかる。山岸氏は「端正な上質の鐘楼」と評価する。

根本堂の左手（南側）に常行堂、およびこれと廊で連接された摩多羅神社がある。ともに東面する。

常行堂は、正面3間侧面3間の寄棟造で、正面1間に向拝が付く。銅板葺。宝曆14年（1764）の『万指出』に寛政7年（1795）造営とある。文化8年（1811）と天保5年（1834）に修理が加わっている（棟札）。

摩多羅神社は、桁行2間梁間2間、切妻造妻入のいわゆる「大社造」の社殿。柿葺で、19世紀前期（天保5年（1834）棟札）の建築である。仏堂である根本堂と神社建築が近接して建ち並び、鰐淵寺独特の境内景観を作り出している。このほか、この平坦面には、稻荷社、夜叉羅神、手水屋が並ぶ⁽²⁾。

上段平坦面 これ以下の平坦面は、主に僧坊が建つ区域である⁽³⁾。上段の平坦面、つまり第二段の平坦面は、標高155m前後で、和多坊跡からA3B平坦面（等渕院南区、第5章第3節）までの南北約280mの細長い面である。一続きの平坦面ではなく、現成院跡を含む4つの面が連接する形である。このうち、和多坊跡は長軸約60m、幅約24mの最も広大な平坦面である。明治に焼失した建物の礎石が残る（第5章第2節）。

現成院跡については、平成22年（2010）に、礎石配置や庭園景石・飛石などを測量調査した。明治20年（1887）の『鰐淵寺明細帳』によると（池橋1997）、現成院の建物は「桁拾間三尺、梁四間三尺」つまり、桁行18.9m、梁間8.1mの規模である。建物北東辺の礎石は、この梁間に合致する距離で据わっているが、南西部では攪乱されて、妻の礎石が失われているようだ。背面側には、いくつか礎石の並びがあるので、附属屋などがあった可能性はあるが、発掘調査を行っていないので詳細は不明。ほかに、「木小屋」（桁四間三尺、梁三間）と「門」（桁壱間四尺、梁三尺五寸）があった。門の礎石は南側の石積階段下に残っている。

中段平坦面 中段の平坦面は、北から本覺坊跡、惠門院跡、覚城院跡、そして密嚴院跡までの、若干の高低差をもつ4つの平地からなる。現状では、惠門院跡と覚城院跡が1つの平面に造成され（第4章第3節）、そこに旧宝物拝觀所（木造）と宝藏殿（コンクリート造）が建つ。本覺坊跡の北側にあつた念佛堂跡も、高さとしてはこの中段の平坦面にほぼそろう。

下段平坦面 下段の平坦面は、標高140m前後で、この地区の南部に造成されている。ここには、淨觀院跡、是心院跡、洞雲院跡、そして等渕院跡が並ぶ。いずれも退廃しており、中でも、淨觀院跡と洞雲院跡は後世の改変が著しい。

最下段平坦面 最下段の平坦面は、鰐淵寺川に近い標高120mあたりに位置する。本坊南側の嚴王院跡は、観光施設（瀧翠館、平成25年（2013）撤去）が建てられていたため、大きく改変されている。

本坊（旧松本坊）は、現存する唯一の僧坊である。桁行16.9m、梁間11.2m、寄棟造で鉄板葺。正面1間に向拝が付く。これも鉄板葺。建築様式から、18世紀中期と推定されている（山岸2012）。本坊の南側には、19世紀中期の御成門がある。1間の平唐門で、銅板葺、袖棚が付く。

開山堂平坦面 和多坊跡や本覺坊跡の東、小高い丘陵上の平坦面に開山堂と開山廟がある。ここに立つと真南には鰐淵寺川の渓谷が延びるのが見え、かつては浮浪淹をも望めたのではないかと思える勝地である。

開山堂は、正面3間侧面3間の宝形造建物で、鉄板葺。内部の厨子は、総檜造りの上質な建物といい、17世紀後半の作品（山岸2012）。開山堂も同じ建築年代だが、幕末に大改修を受けている。



第9図 鰐淵寺別所中枢地域 (1:2,000)

このほか、鰐淵寺川右岸に仁王門が建つ。大正7年（1918）建立で、桁行3間梁間2間、入母屋造、桟瓦葺の建物である。

（2）浮浪滻地区

浮浪滻地区は、根本堂地区の南、鰐淵寺川の右岸にあり、東側を浮浪滻から流れ落ちた渓流（浮浪屋谷川）が深い谷を刻んでいる。この地区の北部には比較的広い平坦地が広がり、そこから滻に至る道沿いに、昭和30年代半ば（1960前後）に建設されたコンクリート造の山王七仏堂がある⁽⁴⁾。また、浮浪滻の真下には、正面3間、入母屋造妻入の藏王堂がある。昭和58年（1983）の再建。

この地区には、かつて浴室や馬頭社、勝手社などが点在していた。詳しくは第7章第1節で述べる。

（3）松露谷地区

鰐淵寺境内から、出雲平野北縁の出雲市林木町に至る「林木越」の出発点にある。近世以降の石塔が建ち並ぶほか、中世期の石塔が散在する地点や僧坊跡と推定される平坦面もある。第4・6章で詳述する。

2 鰐淵寺境内の構造

鰐淵寺境内地の形成過程は、寺の歴史でもある。井上寛司氏は、中世期に起こった三度の火災とその再建過程や杵築大社（出雲大社）との関係および寺領の変化などから、鰐淵寺の歴史を大きく三期に区分している（井上編 1997）。

第1期（平安時代末から鎌倉時代）：北院（千手堂中心）と南院（薬師堂中心）が各々空間的まとまりを持ちつつ、藏王権現を中心として結び合っていた時期。

第2期（南北朝期から戦国期）：南北両院の本尊を併せ祀る根本堂を中心として、鰐淵寺境内の再編・整備が進められた時期。

第3期（近世から近代初頭）：多数の僧坊が廃絶され、12の僧坊からなる景観が創出された時期。

江戸期の木版絵図と比較すれば、現在の境内地が基本的には第3期の景観を伝えることが了解される。最上段平坦面の堂宇配置、すなわち、根本堂を中心、北（左）に釈迦堂、南（右）に常行堂と摩多羅神社が並ぶ構成は、常行堂の内殿に奉祀されていた摩多羅神が社殿として独立することを機に、寛文7年（1667）に形成された。これは、第2期から第3期への転換であった。この転換は大きかった。それは、鰐淵寺と杵築大社との関係の激変、つまり両者の関係途絶と杵築大社寛文造替に対応するものであり、現境内地の原型はそれを受けた鰐淵寺の宗教世界を具象化した構造でもある。

そして、これに合わせて僧坊の改廃があったとされる（『科研報告』31頁）。たしかに、戦国期と江戸期では文書に登場する僧坊名に大きな違いがある。天文19年（1550）9月26日遷宮の導師ならびに勤行衆として列記された僧坊数は14坊なので（『杵築大社旧記御遷宮次第』（科研目録No.631）慶長年間末ころ成立と推定），僧坊の数が第3期までに減少したことは疑えない。また、慶長7年（1602）の文書⁽⁵⁾に見える僧坊10坊のうち、竹尾坊と月輪坊は、以後、史料にその名をみないのである。

しかし、なかには改称された僧坊もあったようだ（池橋1997、191頁）。享保2年（1717）の『雲陽誌』（黒沢長尚撰）と宝暦14年（1764）の『万指出』には、ともに12の僧坊があがる（第4表）。

両者を対比すると、同一名称が、和多坊・松本坊・密厳院・洞雲院・本覚坊の5つ、そして相違するものが7つもある。後者については、本尊の名称とその作者（伝承）によって対応を復元することができる。その結果、禪林坊→現成院、橋本坊→惠門院、井本坊→嚴王院、池本坊→是心院、大福坊→覺城院、西本坊→等測院、桜本坊→淨觀院、と名称変更が行われたと推測できる⁽⁶⁾。享保19年（1734）の「山王権現社修造棟札」（『科研報告』173頁）には、「是心院」のほか「和多坊」「松本坊」「密嚴院」「洞雲院」「井本坊」「覺城院」がみえる。また、18世紀中ごろに成立したと推測される『出雲鏡』にも僧坊が12坊列記されており、そのうち、10坊は『雲陽誌』と一致する⁽⁷⁾。よって、7つの僧坊が改称されたのは、18世紀中ごろ前後と推測してよからう。

このように、18世紀初めには僧坊12坊体制が成立しており、ほどなく一部がその名称を変更した、とみるべきであろう。この境内主要部の姿が明治維新まで100年余り続いた。なお、僧坊名称変更の時期は、現・根本堂の建築年代とほぼ重なるが、両者の関連は今後の課題である。

さて、最上段の平坦面それ自体は、第2期に本堂などを建てるため造成されたと推測される。そこには、千手観音と薬師如来両尊を祀る根本堂を中心とし、北（左）に塔、南（右）に常行堂がいずれも東面して建つ3堂塔の姿があった（貞和3年（1347）「両院一摸状」⁽⁸⁾）。第3期の堂宇配置が、第2期のそれを踏襲することは明らかである。そしてその淵源は、第1期に建っていたとされる「千手堂、薬師堂、常行堂、塔」（『鰐淵寺古記録写』文治2年（1186））に結びつく。つまり、南北両院結集を象徴する建造物群を中心に僧坊群がそれを取り巻き（「根本堂地区」）、これに浮浪滝と嚴王堂を中心とする「浮浪滝地区」と墓地群の「松露谷地区」が連関する、これがこの寺の基本的な構成であった。

鰐淵寺境内の構成には、寺成立から1000年近くにおよぶその歴史が色濃く反映されているとともに、搖るぎない信仰が一貫して受け継がれている。それこそがこの寺の魅力といえよう。（花谷 浩）

第4表 『雲陽誌』と『万指出』、『出雲鏡』の12僧坊名称比較表

雲陽誌		万指出		出雲鏡	
坊名	記載順	本尊	坊名	記載順	本尊
和多坊	1	阿彌陀如來、惠心彌刻	和多坊	11	阿彌陀、惠心彌刻彌
松本坊	2	不動明王、聖德太子作	松本坊	1	不動明王、聖德太子刻彌
禪林坊	3	觀音、大宮形	現成院	10	觀音、大宮形
橋本坊	4	文殊、安阿彌作	惠門院	4	文殊、安阿彌刻彌
井本坊	5	藥師如來、行基作	嚴王院	12	藥師、行基菩薩刻彌
池本坊	6	阿彌陀如來觀音勢至、伝教大師作	是心院	2	阿彌陀（觀音／勢至）、伝教大師刻彌
密嚴院	7	如意輪觀音、安阿彌作	密嚴院	8	如意輪觀音、安阿彌刻彌
大福坊	8	千手觀音、惠心作	覺城院	9	千手觀音、惠心彌刻彌
洞雲院	9	阿彌陀、慧寬大師作	洞雲院	3	阿彌陀、慧寬大師刻彌
西本坊	10	釈迦如來、安阿彌作	等測院	6	釈迦如來、安阿彌刻彌
本覚坊	11	不動明王、大宮形	本覺坊	7	不動明王、大宮形
桜本坊	12	不動、弘法大師作	淨觀院	5	不動明王、弘法大師刻彌

* 1 雜行坊(5)と井上坊(12)があるものの、どちらか特定できない(カッコは記載順)。

註

- (1)『簗川郡名勝誌』(簗川郡私立教育会編 1908)は、「享保五年、殿堂を修繕し、佛像の金碧剥落せるを修補したるもの、即ち、現時の根本堂なり。」(199頁)とするが、何に基づくか不詳。享保5年は1720年。
- (2)根本堂と常行堂・摩多羅神社との間には、かつて護摩堂があつたが、今は、跡地に銅造阿弥陀如来坐像(正徳5年(1715)銘)があるのみ(鳥谷1998)。
- (3)根本堂地区の僧坊は、明治20年(1887)には、江戸時代以来の12坊が残っていたらしいが(『鰐淵寺明細帳』)。翌、明治21年(1888)に覺城院が焼失、明治38年(1905)には和多坊と惠門院も焼失。明治40年には、松本坊・密嚴院・洞雲院・淨觀院・等湖院・是心院・現成院の7坊となり、うち住職あるのは、松本坊・等湖院・是心院の3坊のみとなっている(藤本編 1907)。さらに、明治43年(1910)には、淨觀院も建物がなくなつた(池橋1997)。昭和13年(1938)になると、松本坊・等湖院・是心院の3坊を残すのみとなつたようだ(日本旅行協会編 1938)。なお、昭和26年(1951)の『出雲市誌』には、「出雲の二十名園」として、淨觀院・本坊(旧松本坊)・是心院・等湖院の4坊があがるが、「山内の遭坊」とあるように、退廃した僧坊を含んでいた(同書992・993頁)。等湖院には、昭和31年(1956)までは住職がいた(池橋1997)。そして、2006年には是心院も建物が撤去され、唯一、本坊のみが残つた。
- (4)旧山王七仏堂は、圓面から桁行3間梁間2間の入母屋造平入建物で、正面1間に向拝が付く。第3章第3節。
- (5)3月7日付の「鰐淵寺領富村内金剛院分田畠坪付」(科研目録No.621)。
- (6)「現成院」は、松本坊・本覚坊とともに、天正4年(1576)の「大威德奥書」(科研目録No.502)にみえる。ただし、これは、宝曆12年(1762)に本覺坊湛堂が書寫したもの。「松本坊」の初出史料でもあるが、これを除くと「松本坊」は、万治2年(1659)と推定される「岡田半右衛門外三名連署書状」までその名をみない。
- (7)『出雲鏡』成立の年代は小林准二氏による(小林2011)。第3表にも記したように、『雲陽誌』の「密嚴院」と「洞雲院」は『出雲鏡』に記載がなく、代わりに「雜行坊」と「井上坊」があがる。
- (8)「本堂[最中]塔婆[左方]常行堂[右方]已上三宇東面也」。「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」(正平10年(1355)科研目録No.119)が引用する。

参考文献

- 池橋達雄 1997 「近現代の鰐淵寺」『出雲國浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺、174－238頁
- 井上寛司 1979 「出雲大社と鰐淵寺－中世出雲国一宮制の一特質－」『山陰－地域の歴史的性格』雄山閣、96－136頁
- 井上寛司編 1997 『出雲國 浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺
- 岡田秀勝・桑原一郎・石塚尊俊編 1951 『出雲市誌』出雲市役所
- 小林准二 2011 「五、出雲鏡」『松江市史』史料編5近世I、35－39頁
- 鳥谷芳雄 1998 「鰐淵寺境内銅造阿弥陀如来坐像について－近世絶国供養仏の一例－」『古代文化研究』No. 6 島根県古代文化センター、89－104頁
- 日本旅行協会編 1938 『山陰地方』ツーリスト案内叢書第14輯
- 簗川郡私立教育会編 1908 『簗川郡名勝誌』
- 藤沢秀晴 1963 「近世の鰐淵寺」『鰐淵寺文書の研究』鰐淵寺文書刊行会、135－161頁
- 藤本充安編 1907 『島根県史要』川岡清助印刷
- 山岸常人 2012 「鰐淵寺境内の歴史的建造物」『科研報告』59－70頁

第3節 鰐淵寺の文化財

鰐淵寺は、前節で述べたように長い歴史を有し、この間に伝えられてきた数多くの有形・無形の文化財を所有する。このうち、文化財保護法および鳥取県文化財保護条例、出雲市文化財保護条例に基づく指定を受けた文化財も、美術工芸品や古文書など多くあり、その一覧は第5表(30・31頁)に掲げた。近年、井上寛司氏を代表とする調査によってたいへん多くの文化財が把握され、新たに指定されたものも多い。新指定以外のものの詳細については、『科研報告』に掲載されている(井上編2012)。

ここでは、これらの中から特に重要と思われるものを抽出し、紹介するとともに、その背景についても若干述べることとする。

平成17年(2005)9月に、鰐淵寺では盗難事件が発生し、国指定重要文化財4点、県指定有形文化財2点を含む、合計13点の貴重な文化財が盗まれた。これらは全て巻子装の絵画および書跡であったが、9年の歳月を経た現在も1点も戻ってきていない。一刻も早く戻ってくることを祈るばかりである。

1 絵画(第10～13図)

鰐淵寺所有文化財のうち、重文絹本着色一字金輪曼荼羅図(第5表№3)は、金剛界大日如来を中心とし七宝(輪・珠・女・馬・象・主像・主兵)を描き、華麗な藤原後期仏画の雰囲気を残している。実際の制作は、鎌倉時代初期と考えられているが、鰐淵寺所蔵品の中でも最古級の絵画である。重文絹本着色山王本地仏像(№1・第10図)は、山王二十一社の本地仏と祭神を描いたもので、僧形、祭神姿の上七社を大きく表わし、上端と下端に中七社と下七社の本地仏の種子を配する。室町時代初期に制作されたと考えられる。重文絹本着色毛利元就像(№2・第11図)は、的確な筆致で描かれた教科書にも取り上げられる著名な画像である。毛利元就は和多坊栄芸と親交があり、尼子攻めの際にも栄芸は毛利を助けた。永禄9年(1566)に月山富田城が落城し元就が安芸吉田に引き上げる際に栄芸を誘ったが固辞された。その際に元就が描かせ贈った肖像画が本画像だと伝わっている。

県指定絹本着色釈迦三尊十六善神像(№11)は、画面中央に六角台座に座る釈迦如来を描き、左右に脇侍像と十六善神を、前方に文殊菩薩、普賢菩薩、三藏法師、深沙大将を描いたもの。室町時代の制作と考えられる。県指定絹本着色両界曼荼羅図(№9)は、金剛界と胎藏界を描いた2幅で、薄緑色の地に像を黄白色で描き、身体や衣文は墨と朱色をもつて限取りされている。南北朝期の制作とみられている。県指定種子両界曼荼羅図(№14・第12図)は、鎌倉時代の作品で、やはり金剛界と胎藏界を描いた2幅からなり、金泥で縁取りした円形文内に仏を意味する梵字が墨書きされている。

県指定絹本着色天台大師像(№10)は、天台宗祖師の智頭を描いた



第10図

重文絹本着色山王本地仏像

作品で、宋風の影響を強く受けた作品。鎌倉時代の制作とみられる。県指定絹本著色不動明王像（No.12・第13図）は、裸形の不動明王が岩座の上に立ち、両眼を見開き、牙をむいた姿を描く。不動明王像の中でも著名な圓城寺黄不動（国宝）の写しと見られ、鎌倉時代の制作である。県指定絹本著色文殊菩薩像（No.13）は、獅子の背に蓮台を据えそこに座る文殊菩薩像を描いたもので、南北朝期の制作である。

指定以外の絵画には、不動明王二童子像や釈迦三尊十六善神像、阿弥陀来迎図など、南北朝期から室町時代にかけてのものがあるが、いずれも欠失等傷みが激しく、画像を十分に確認できないものもあり、その保存状態が危惧される。

このうち、比較的古い不動明王画像の存在は、修驗道の聖地としての鰐淵寺、つまりは藏王権現を奉斎する藏王宝窟との関係から言えば、異質なものと言えなくもない。修驗道は、それまで藏王信仰を中心として発展していたが、平安末以降、不動信仰が修驗道と結びつきを強め急速に進展し、波及していく。この影響を鰐淵寺も受けていると仮定するならば、興味深い現象として、またこれまでの研究でも不可思議と捉えられている藏王権現像が現存しない現象を解き明かす鍵として意味を持つかもしれない。



第11図

重文紙本墨書後醍醐天皇御願文



第12図

県指定種子両界曼荼羅図



第13図

県指定絹本著色不動明王像

2 書跡・古文書（第14図）

重文紙本墨書後醍醐天皇御願文（No.6・第14図）は、隠岐に配流されていた後醍醐天皇から、鰐淵寺南院の頼源僧都が元弘元年（1332）に賜ったものである。内容は、幕府が倒れ天皇の考える王道が再興された場合には根本薬師堂の造営を約束としたものである。重文紙本墨書頼源文書（No.7）は2通あり、第1通は正平6年（1351）の頼源言上状と建武3年（1336）後醍醐天皇諭旨の写し、興

国元年（1340）後村上天皇翰旨の写しである。第2通は貞治5年（1366）頼源が淨達上人に宛てた引継ぎ文書である。第2通は、これ以前は南朝側の年号であったものが、『貞治』という北朝側の年号に変わつており、頼源の末期には鰐淵寺は北朝側に大勢が傾いていることを知ることができる。重文紙本墨書名和長年執達状（№7）は、建武3年（1336）隠岐を脱出した後醍醐天皇を船上で迎えた名和長年が鰐淵寺に対し、朝敵誅伐のために祈祷と忠誠を促したもので、勲功があるものは褒賞されると記されている。これは頼源文書とセットでの指定となっている。

県指定紙金泥妙法蓮華経（全8巻）（№22）は、巻子本で紺紙の見返しに金泥で釈迦說法図を描き、その次に罫線を引いて経文を書いている。播磨國金剛城寺（兵庫県福崎町）の住僧資圓祐が享徳2年（1453）に鰐淵寺根本堂に寄進したことが分かる。また欄外にも文字があり、大永3年（1523）に宇山飛騨守久秀が日御碕社に奉納したものだと分かる。

県指定紙本墨書後村上天皇宸筆願文（№21）は、正平6年（1351）に頼源が後村上天皇から賜った文書である。県指定紙本墨書鰐淵寺文書（446通・10冊）（№23）は、建暦3年（1213）から明治元年（1868）という長い期間にわたる鰐淵寺の歴史を網羅した貴重な文書群で、そのほとんどが中世文書であり、当初の文書形態がそのまま残されているものも多い。県指定紙本墨書徳川家康起請文（№24）は、天正16年（1588）徳川家康が北条氏に対して書き送った書状で、なぜ鰐淵寺が所蔵しているかは謎である。

鰐淵寺文書等の一群は、鰐淵寺研究の根幹をなすもので、本報告書もそれらの研究の進展によって生まれ得たものであり、重要な文化財であることは言うまでもない。

3 彫刻（第15～20図）

重文銅造觀世音菩薩立像⁽¹⁾ 2軀（№4）のうちの1軀（第15図）は、高さ94.6cmある大きなもので、台座側面に「壬辰年五月出雲國若倭部」「臣徳太理為父母作奉菩薩」と刻印された著名な彫刻である。像の作風から持統6年（692）に制作されたと考えられ、鰐淵寺所蔵で最古の美術工芸品である。もう1軀の銅造觀世音菩薩立像は、高さ42.5cmほどであるが、ふくよかな顔立ちが印象的な彫刻で、制作は天平時代と考えられている。県指定銅造如来形立像（№15）は、昭和31年（1956）に山王七仏堂で発見された高さ20.5cmほどの彫刻で、珍しい服の着方をしている。7～8世紀の制作であろうといわれている。



第14図 重文紙本墨書後醍醐天皇御願文



第15図
重文銅造觀世音菩薩立像

市指定（重要美術品）銅造不動明王像（№26・第16図）

は、上半身の前半分しか残っておらず、また鑄型へ銅を流し込む際に失敗し全身にバリが付いたままである。しかし、表情などは京都東福寺塔頭の同聚院に伝存する康尚作の木造不動明王坐像²⁾と共通性が極めて高い。よって、10世紀後半から11世紀初頭の制作と考えられる。同時期の銅造不動明王像は作例も少なく、しかも中央の最新様式で作られているなど、極めて貴重な彫刻といえる。

以上のこれまでに指定されたもの以外に科研調査によつて、多くの貴重な文化財の価値が改めて注目され、平成26年（2014）に新たに鳥根県指定文化財に指定された。彫刻は、平安時代まで遡るものが多く、新たに14件が指定を受けた。

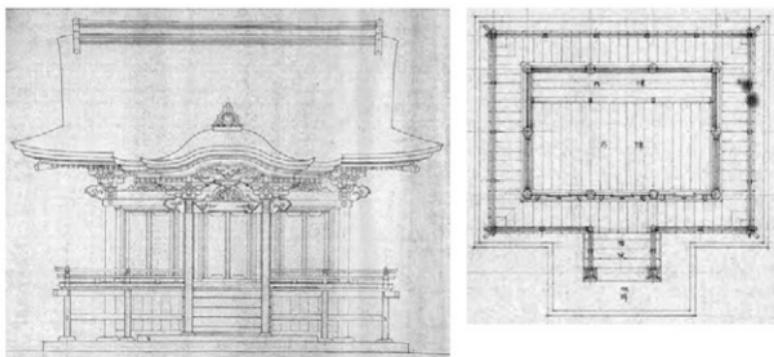
県指定木造牛頭天王坐像の2軀（№16-1・16-2・第17図）は、いずれも平安時代後期の作と考えられ、頭頂に牛頭を戴き（一つは欠損）、正面と左右に三面を忿怒の表情で表す。この牛頭天王坐像は、浮浪灘へ向かう途中斜面の平坦地に建つ山王七仏堂に安置されていたと前住職からお聞きした。その山王七仏堂は、昭和30年代に腐朽が進み撤去され、現存するコンクリート製の堂が再建された。撤去前の七仏堂建築図面が鰐淵寺に残されている³⁾。建造物は、図面上の木鼻等にある絵様などから江戸中期まで遡る可能性があるが、年代を確定することはできなかった⁴⁾。平面図を見ると、3間の奥壁に3つに区切られた内陣の壇が記されており、正面には扉が3つ開いている（第18図）。享保2年（1717）の『雲陽誌』には、「山王 祇園 菩神 三神一社にまつる」と記されており、内陣の3つに区切られた壇は、この三神を祀ったものと考えて間違いない。また、鰐淵寺川南区の発掘調査で出土した「天王」の刻書土器から、周辺で牛頭天王の祭祀が行われていた可能性が高い⁴⁾。よって牛頭天王坐像は、以前から「山王七仏堂」に奉安されていたと考えられ、山王社、菩神とともに三神の一つとして祀られていたと考えられる。



第16図 市指定（重要美術品）銅造不動明王像



第17図 県指定木造牛頭天王坐像



第18図 山王七仏堂建築図面

他の神像類にも目を見張るものがあり、木造僧形神坐像（No.16-3）、木造男神坐像（No.16-7～16-9）、木造女神坐像（No.16-6・第19図）など、平安時代後期に遡る神像が多く残されている。中には10～11世紀にまで遡る可能性のある男神坐像（No.16-9）や鎧ないし樹木に足をかける姿の神像・木造男神立像（No.16-11）など、これまで知られていなかった古い作例が確認された（いずれも県指定）。

また、木造不動明王立像は、島根に希少な鎌倉期の作品で、当時最先端の宋風図像の影響を受けていることが分かり、極めて貴重である。天台宗において重要な祖師である木造元三大師坐像は、室町末から桃山期に活躍した奈良の仏師の作風で、これまた島根においては貴重な彫刻である。さらに、開山堂に納められている県指定木造僧形坐像（No.17・第20図）は、開祖智春上人像と伝えられており、平安時代まで遡る可能性がある重要な作例である。



第19図 木造女神坐像



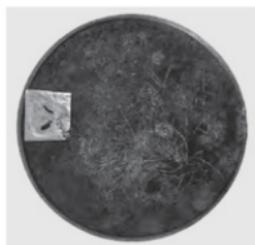
第20図 木造僧形坐像

4 工芸品（第21～25図）

重文銅鏡（No.5）は、寿永2年（1183）に制作され、伯耆国桜山（現倉吉市）大日堂上院に納められていたことが、陽鋲された銘文から分かる。武藏坊弁慶が一夜のうちに大山から運んだという伝説が残されている。

美術工芸品では、菊花、飛雀、波濤、松樹などを彫り込んだ鏡像や仏を鋲出、鏡留めしている懸仏^{きようぢゆう}と呼ばれるものに優れた作品が揃っている。これらの中には鏡面に線刻された神仏を表すものや墨書で種子を示したものなどが多くあり、また時代的に平安時代後期から室町時代にかけての古いものが合計24面残されている。このうち、11面が平安時代後期に比定されるもので、中でも線刻普賢菩薩鏡像（竹枝飛雀鏡）（No.18-1・第21図）と墨書種子大日如來等鏡像（菊薄飛雀鏡）（No.18-6・第22図）は、型式的にも古く、きわめて貴重な鏡像である。線刻種子阿弥陀如來鏡像（菊花蝶鳥鏡）（No.18-19・第23図）は、鏡面に大きく種子を彫り出し、「建長七年」（1255）や「祇園」の刻銘があり、牛頭天王祭祀の在り様やその時期を考えるうえで重要な品といえる。

また、密教法具として、特異なものとして金銅五鈷鉢（No.20-1・第24図）と金銅五鈷杵（No.20-2・第25図）が挙げられる。いずれも鎌倉時代の作品で、彫り出された文様等に特徴を有し、優品と呼ぶ



第21図



第22図



第23図



第24図 金銅五鈷鉢



第25図 金銅五鈷杵

にふさわしい仏具である。これら鏡像 20 面、懸仏 4 面、密教法具 2 口の計 26 点（件数は 5 件）が平成 26 年に県指定文化財に指定された。このほか、平安時代の錫杖頭、鎌倉時代の孔雀文磬など優れた工芸品作例が多い。

今回初めて全国的な観点での調査が行われ、その位置づけが極めて特異かつ象徴的な工芸品であることが明らかとなり、その重要性が広く認識されることとなった。

5 考古資料（第 26・27 図）

重文石製経筒（No.8・第 26 図）は、浮浪淹の藏王宝窟に収められていたもので、中には仁平 2 年（1152）の銘を持つ湖州鏡（附指定、第 27 図）が入っていた。この経筒にも銘文が刻まれており、仁平元年（1151）から仁平 3 年（1153）に法華経を書写し宝窟に安置すると記されている。12世紀中頃の鰐淵寺における如法華信仰の発展を知ることができる貴重な遺産である。



第 26 図 重文石製経筒



第 27 図 湖州鏡

6 建造物（第 28・29 図、図版 3～5・21～25）

唯一建造物で指定文化財となっているのは、境内の中心に位置する市指定根本堂（No.25）である。五間四方の極めて大きな建物で、この規模としては立ちの高い独立のプロポーションを持っている。また、内外陣ともにほとんど土間床とする点も独特で、妻飾の意匠なども非常に華麗である。18世紀中頃に建立されたものと考えられる。

境内に残っている建造物のうち、最古は根本堂に向かって右手にある糀迦堂（第 28 図）である。標準的な規模の三間堂で 17 世紀中頃から後半に建てられたと考えられる。享保 2 年（1717）の『雲陽誌』には「法華三昧堂」、宝曆 14 年（1754）の『万指出』には「法華堂」と記されている。

統いて 17 世紀後半建築と考えられる開山堂は、高い独立丘陵上、智春上人の開山廟横に建つが、19 世紀中頃に大規模な改修がなされており、移築された可能性も高い。内部中央にある厨子は、総檜造りの上質な建物で、17 世紀後半の建築と考えられる。根本堂北側に位置する鐘楼は、内転びの

4本柱に切妻造の屋根を載せる典型的な建物であるが、絵様や彫刻などの切れ味は鋭く、工匠の腕の優れていることを示している。棟札の記載から正徳3年（1713）建築と推察される。

根本堂の南側に常行堂とその背後に廊とつないで摩多羅神社が建つ。常行堂（第29図）は18世紀末の建立と考えられ、摩多羅神社は意匠や棟札の記載から天保5年（1834）の建立と考えられる。この社殿は、棟札の調査からそれまで常行堂内に奉安されていた摩多羅神を出雲大社との関係が切れてしまう寛文年間に独立して構えられたと考えられる。現存する社殿は、大社造であることから、出雲大社とのかつての関係を唯一知ることができる遺構として極めて重要である。

御成門は、現本坊の松本坊の南側参道沿いに位置し、平唐門の形式を持つ珍しいものである。比較的新しい19世紀中頃の建物であるが、梁先や垂木先にまで絵様を施し、軒付の透かし彫りなど、細部に意匠が凝らされ、手の込んだ建築物である。

建造物としては、極めて古い様相を呈するものは残されておらず、その意味においてはやや残念な点もあるが、特徴的な建造物が現存しており、出雲地方での希少性は高い。いまだ解明途上の建造物もあることから、今後さらに調査を進め、鰐淵寺の真髓を少しずつ明確にしていく必要があると考えられる。



第28図 祀迦堂



第29図 常行堂（背後は摩多羅神社）

これら鰐淵寺に残されている文化財を総合的に調査した結果、非常に古いものが数多く残されており、かつ作例的にも貴重な遺品が多いことが確認された。改めて、この寺が重要な建造物や美術工芸品、文字資料に満ちており、その歴史の深遠さと出雲における重要性を強く感じずにはおれない。これまで知られていた文献史料や当報告書で明らかにする考古学的な観点を絡め、総合的に鰐淵寺の歴史を紐解くとともに、未来にわたって残していくべきであることを確認したい。
（野坂俊之）

第5表 鰐淵寺所蔵指定文化財一覧表（国・県・市）

番号	種別	指定別	認定日	名 称	数 量	備 考
1	絵画	重文	M37.2.18	絹本着色山王本地仏像	1幅	盗難(平成17年)
2	絵画	重文	M43.4.20	絹本着色毛利元就像	1幅	
3	絵画	重文	M43.4.20	絹本着色一字金輪普茶羅図	1幅	盗難(平成17年)
4	彫刻	重文	M35.7.31	銅造觀世音菩薩立像	2幅	
5	工芸品	重文	S13.8.26	鉄鍾	1口	
6	書跡	重文	M43.4.20	紙本墨書き御室御願文	1巻	盗難(平成17年)
7	書跡	重文	M43.4.20	紙本墨書き名和長年執達状 紙本墨書き源文書(2通)	2巻	

次頁につづく

番号	種別	指定別	認定日	名 称	数 量	備 考
8	考古資料	重文	S13.8.26	石製経筒 附湖州鏡1面	1合	
9	絵画	県	S43.6.7	絹本着色界曼荼羅図	2幅	
10	絵画	県	S43.6.7	絹本着色天台大師像	1幅	
11	絵画	県	S43.6.7	絹本着色陀迦三尊十六善神像	1幅	盗難(平成17年)
12	絵画	県	S43.6.7	絹本着色不動明王像	1幅	
13	絵画	県	S43.6.7	絹本着色文殊菩薩像	1幅	
14	絵画	県	S43.6.7	絹本着色種子界曼荼羅図	2幅	
15	彫刻	県	S42.5.30	金銅造如來形立像	1軸	
16	彫刻	県	H26.11.28	木造神像	13軸	
1				木造牛頭天王坐像(1)		平安
2				木造牛頭天王坐像(2)		平安
3				木造僧形神坐像		平安
4				木造女神坐像		平安
5				木造僧形神立像		平安
6				木造女神立像		平安
7				木造男神坐像(1)		平安
8				木造男神坐像(2)		平安
9				木造男神坐像(3)		平安
10				木造男神坐像(4)		鎌倉
11				木造男神立像(1)		平安
12				木造男神立像(2)		室町
13				木造女神坐像		平安
17	彫刻	県	H26.11.28	木造僧形坐像(伝智春上人)	1軸	
18	工芸品	県	H26.11.28	鏡像	20面	
1				線刻普賢菩薩鏡像(竹枝飛雀鏡)		平安
2				線刻聖觀音鏡像(波濤松梅双鳥鏡)		平安
3				線刻十一面觀音鏡像		平安
4				線刻女神曉像		平安
5				線刻男神曉像		平安
6				墨書き種子大日如來等鏡像(菊薄飛雀鏡)		平安
7				墨書き種子藥師如來等鏡像(山吹飛雀鏡)		平安
8				墨書き種子藥師如來等鏡像(梅花散飛雀鏡)		平安
9				墨書き種子阿彌陀如來鏡像(山吹薄飛雀鏡)		平安
10				墨書き種子聖觀音鏡像(菊枝飛雀鏡)		平安
11				墨書き種子十一面觀音鏡像		平安
12				墨書き種子曉像(松枝飛雀鏡)		平安
13				墨書き種子曉像(波濤飛雀鏡)		平安
14				墨書き種子曉像(山吹飛雀鏡)		平安
15				波濤松梅飛雀鏡		平安
16				線刻阿彌陀如來鏡像(波濤菊花双鳥鏡)		鎌倉
17				線刻十一面觀音鏡像(鬼甲文散蝶鳥鏡)		鎌倉
18				線刻三神鏡像(山吹双雀鏡)		鎌倉
19				線刻種子阿彌陀如來鏡像(菊花蝶鳥鏡)		鎌倉(建長7年・1255)
20				山吹蝶鳥鏡		鎌倉
19	工芸品	県	H26.11.28	懸仏	4面	
1				地蔵菩薩懸仏		平安
2				十一面觀音懸仏		鎌倉
3				山王七社本地懸仏		室町(文明6年・1474)
4				地蔵菩薩及二神像墨面懸仏		室町
20	工芸品	県	H26.11.28	密教法具	2口	
1				金剛五鈴		鎌倉
2				金剛五杵		鎌倉
21	書跡	県	S34.9.1	後村上天皇宸筆額文	1幅	
22	書跡	県	S42.5.30	紙金泥妙法蓮華經	8巻	盗難(平成17年)
23	古文書	県	S50.8.12	紙本墨書き洞寺文書	446通 10冊	
24	古文書	県	S50.8.12	紙本墨書き徳川家康記譜文	1通	
25	建造物	市	H13.3.27	鯛淵寺根本堂 附棟札1枚	1棟	
26	彫刻	市(東美)	H9.8.28	銅造不動明王像	1軸	

註

- (1) この名称は重文指定名称。近年の調査により正式名称は「銅造觀音菩薩立像」となった。この項目以外では正式名称を用いることとする。
- (2) 2013年夏、現ご住職から「山王七仏堂」のかつての図面が見つかったという連絡を受け借用、写真撮影を行った。青焼き図面で、大きさはA1、①平面図・見上図・基礎伏図・小屋伏図、②正面立面図、③側面立面図、④側面断面図、⑤桁行断面図が残されており、いずれも2枚ずつある。これは、昭和30年代に腐朽の進んだ山王七仏堂を取り壊す際に図化されたものであるといふ。
- (3) 京都大学大学院教授山岸常人氏、(公財)文化財建造物保存技術協会岡信治氏に図面を見ていただいたが、肘木の形や桔木の組み方など、近代に降る要素も見えるため、またどこまで正確に図化されているか現段階では確認できないため、お二人ともに建築年代は明らかにし得ないとの見解であった。
- (4) この土師器は、16世紀後半頃に比定される。第5章第4節157頁、第143図。

参考文献

- 井上寛司編 1997『出雲國 浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺
井上寛司編 2012『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために－』
2009(平成21)年度～2011(平成23)年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書(課題番号
21320123)

第4章 分布調査

第1節 目的と方法

1 目的 (第30・31図)

かつて、鰐淵寺は、北院と南院の二つに分かれていた。それらの所在地について、曾根研三氏は、鰐淵寺の前身としての觀音仏と藥師仏をそれぞれ本尊とする寺院について、出雲市大社町杵築齋願寺の位置する赤塚^{あかつか}一帯の台地上にかつて存在した寺院と、出雲市東林木町の大寺を当てており、前者が幾度かの変遷を経て唐川に移ったとされ、後者との位置的関係でこれを北院、後者を南院と呼ぶに至ったと考えた(曾根 1963)。その後、井上寛司氏は、北院の前身となる寺院があったと考える理由は必ずしもなく、むしろ唐川に最初から千手觀音を祀る寺院が別途存在し、それが鰐淵寺の前身(千手堂、後の北院)になったと考えた(井上 1997)。このように、鰐淵寺は千手觀音を祀る唐川の寺院と藥師仏を祀る林木の大寺を前提として、別所の藏王權現と一体となることによって成立したと考えられてきた。唐川は、現在の鰐淵寺現境内から北西へ 1.5km の距離にあり、盆地状の土地が広がる地形から、僧坊や仏教施設が存在する可能性が指摘されたのであったが、具体的にどこにどうあったかは推測の域を出でていない状態であった。

また、別所の境内地においても根本堂を中心とする主要な堂宇や僧坊などの関連諸施設が配置されている様子は、江戸期や明治期の絵図(16頁第8図)から垣間見ることができ、現在の鰐淵寺も両院統一後の状況を色濃く残している。しかし、絵図では省略されている施設もあり、全てが描かれているわけではない。例えば、現存している松露谷^{じゆうだに}の墓地群は全く描かれていません。また、絵図が描かれる以前の鰐淵寺は、これまでの史料研究から、中枢地域に堂宇が建ち並び、周辺を僧坊が取り巻いていたことは想像に難くないものの、実際それらがどこに存在したかは、ほとんど特定されていなかった。

このような課題を考古学的な手法を用いて解明するため、分布調査を行うことになった。

今回の分布調査で明らかにしようとした点は、大きく次の二つである。一つは、北院と南院がどこにあったか、もう一つは、鰐淵寺の中枢地域における堂宇や僧坊など諸施設のあり方についてである。

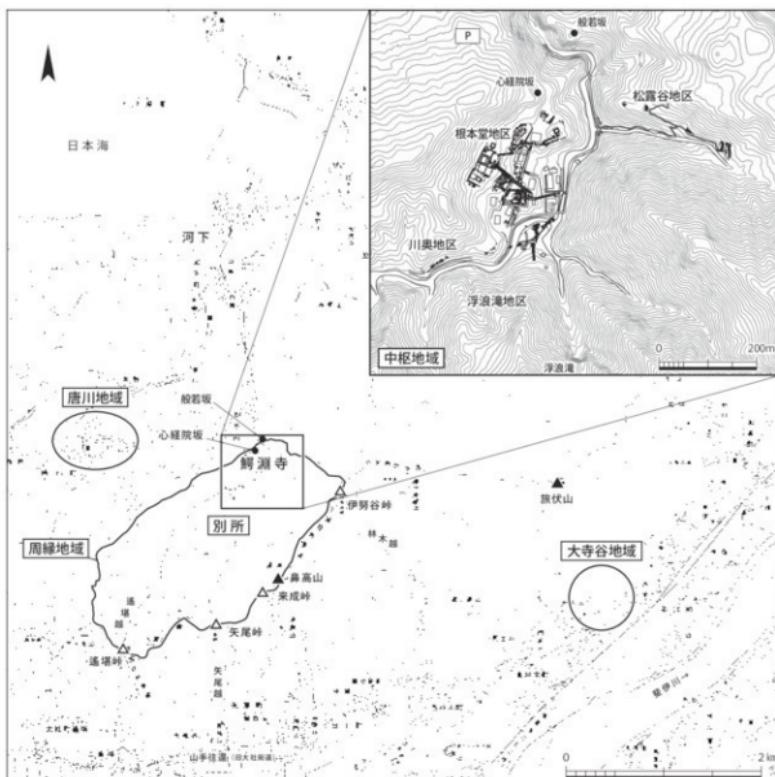
前者については別所の周縁地域、唐川地域、大寺谷地域を、後者については別所の中枢地域を対象に選定して分布調査を行った。

鰐淵寺としての寺域の区割りについては、次の三つに区分できると考える。

- ① いわゆる四至とその周辺に広がるエリア。四至は、北山遙峠^{とうとうとうとうげ}、伊努谷峠^{いぬだにとうとうげ}、般若坂^{はんにゃざか}、心経院坂^{しんきょういんざか}の四つ堂で示され、現在の鰐淵寺所有地とほぼ一致する範囲である。よって、この範囲を「境内地」と称し、ここを地名から「別所」(比叡山延暦寺の別院の意)と呼ぶこととする。その外側の唐川地域や大寺谷地域を含むエリアを周辺エリアと呼ぶ。

- ② 「別所」は、鰐淵寺境内の中心をなす中枢とその周縁に分かれる。「中枢地域」とは、鰐淵寺根本

鰐淵寺の区割り図



第30図 別所と周辺エリアの区割り図（1:50,000）

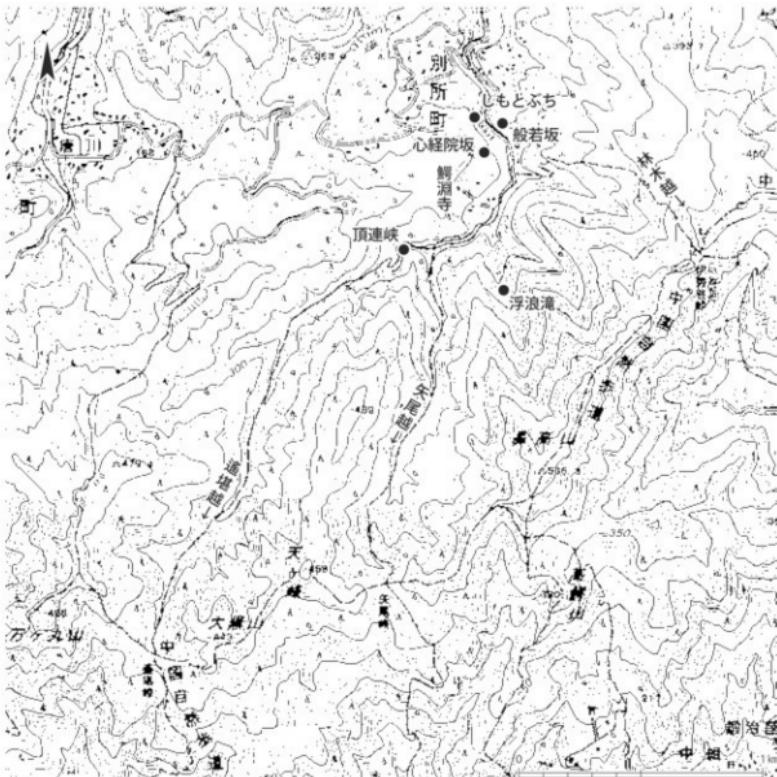
堂や僧坊などを含むエリアを指し、「周縁地域」とは、中枢に至る道を含む山野エリアを指す。この外縁境界に四つ堂が建っていることになる。

- ③ 中枢地域の中は、鰐淵寺根本堂とその僧坊群がある「根本堂地区」、鰐淵寺原初の場である「浮浪滝地区」、そして歴代住職の墓地などが所在する「松露谷地区」と「川奥地区」に区分できる。

(1) 別所の周縁地域、唐川地域、大寺谷地域の分布調査

別所の周縁地域、唐川地域、大寺谷地域の分布調査は、平成 21 年（2009）度から平成 22 年（2010）度にかけて行い、次の点を確認することを目的にした。

- ① 鰐淵寺の北院が位置するとされる唐川地域を実際に踏査し、さらに地元住民への聞き取りを行ってその成果を検討する。
- ② 大寺谷地域、特に「広瀬」と呼ばれる平坦面付近に寺院の痕跡が認められるのか、さらに、この場所が鰐淵寺の南院に該当するのか検討する。



第31図 周縁地域 (1 : 20,000)

(2) 別所の中枢地域の分布調査

別所の中枢地域での分布調査は、平成23年（2011）度から平成25年（2013）度にかけて行い、次の点を確認することを目的にした。

- ① 80前後と推考される僧坊跡が、実際に存在し得たのかを確認するために、平坦面を探すとともにその広がりを確認する。
- ② 遺物を採集することによって各平坦面の大まかな時期の消長を確認し、時期による寺域の広がりを推定する。
- ③ 平坦面に残される礎石、基壇、石垣などの遺構を確認し、僧坊跡の具体的な様相を検討する。

2 分布調査の方法

(1) 別所の周縁地域、唐川地域、大寺谷地域

別所の周縁地域、唐川地域、大寺谷地域においては、地形測量図（1,000分の1）のほか、さらに広域の地形図（5,000分の1）を参考に踏査を行ない、特筆すべき事項を記録した。また、鰐淵寺前住職佐藤泰欽氏、現住職佐藤泰雄氏からの聞き取りも行った。

(2) 別所の中枢地域

別所の中枢地域については、まず、境内周辺の地形測量図（1,000分の1）から、平坦面と推測できる箇所を候補地として抽出した。これらの候補地を踏査し、現地で状況を確認して平坦面とするか判断した。崩落等により平坦面の確認が困難な箇所もあった。

中枢地域の踏査とその記録にあたっては、山の稜線や川など自然地形をもとに、A～Hの8区画に分け（47頁第44図）、その区画内の平坦面に対してA-1、A-2というように機械的に番号を付していました（49頁第46図）。一つの平坦面に調査カードを一枚ずつ作成し、形状、広さ、特徴等も記録した。また、平坦面で遺物の採集も行った。平坦面に隣接する上斜面および下斜面についても遺物採集を行い、明らかにその平坦面から廃棄されたと考えられる場合については、「上斜面」、「下斜面」と注記し、遺物を収集した。

（石原 啓）

第2節 周辺エリア・別所の周縁地域

本節では、別所中枢地域を除いた周縁地域とさらにその外側にある周辺エリアの現地踏査成果について、簡単に報告する（35頁第31図参照）。

1 「別所・周縁地域」（鰐淵寺所有地・境内地、第32～37図）

鰐淵寺境内の南側には北山山塊が東西に延びており、標高536mの鼻高山を最高所に北東方向へ約1km、西方向へ約2.2kmの尾根に囲まれた範囲をここでは指す。具体的には、境内地から南へ鰐淵寺川を約2.5kmさかのぼった尾根の遙堪峰^{はるかね}、松露谷から東へ約0.8km登っていった尾根にある伊努谷^{いぬ}峠までの範囲となる。もっともこの範囲は、江戸期の絵図に描かれた四つ堂と呼ばれる鰐淵寺を囲んだ四至に当たる境界と一致しており、実際に鰐淵寺境内と認識されていた範囲といってよいであろう。

鰐淵寺から南の出雲平野方面へ通じる道は、江戸期の絵図では北山山稜へ向けて3ルートあり、先に挙げた遙堪峰（遙堪峠）、林木越（伊努谷峠）と両ルートの間にある矢尾越（矢尾峠・来成峠）がこれに当たる。この3つのルートを辿ってみることにしよう。

遙堪峠へ 遙堪峠に至る道は、現在中国自然歩道として登録されており、春や秋などにはハイキングの人々が多く歩く道である。出雲平野へ向けての比較的短い道でもあることから、古来、出雲大社との関係やその後の利用状況などから⁽¹⁾、往還としての役目を担っていたと考えられる⁽²⁾。

浮浪灘地区から鰐淵寺川を西へ渡る位置にはかつて仏心橋が架かっており、現在も石積みの橋台が残されている（第32図）。この橋は、昭和18年（1943）9月の大水害により流出した。仏心橋跡から150mほどさかのぼった山側（北側）に平坦面を見つけた。五輪塔の笠部などをはじめとする石塔の残骸が多く残されており、中世の墓地群であることが判明した。これについては「川奥墓地」として第6章で報告する。墓地の上流50mほどのところは、矢尾越（来成峠）との分岐点に当たるが、鰐淵寺川を渡る両岸に石積み橋台跡が明瞭に残っている。2段に構築された橋台は、仏心橋の橋台幅が2mであるのに対し、4m以上もあり、はるかに立派である（第35図）。



第32図 仏心橋の橋台跡

矢尾越分岐点からさらに約300m上流へさかのぼると、昭和50年代に建造された砂防ダムがある。この下流部の対岸は平坦な河原で、その中央には巨大な岩がそびえている。その上に石製不動明王像が屹立している（第33図）。背面には、「維持昭和己亥歳（昭和4年）五月十二日 為天下太平道中 安全奉勸請者也 鰐淵寺現住泰運 平田木佐善康刻」と刻まれている。泰運住職は、現住職泰雄氏の曾祖父に当たる。不動明王像の対岸（左岸）川沿いには、平坦面が川に向かって開けており、不動明王に向かって礼拝できる祭壇が設けてある。川の流れは清らか、かつ滑らかで、不動明王像の建つ大岩周辺も他の

場所では見られないやや広めの河原を形成している。背後の岩壁も垂直に立ち上がり、平滑な容姿を見せており、素晴らしい景観を呈している。位置関係、および景観や眺望などを勘案すると、この平坦面が、江戸期の絵図A（16頁第8図）に描かれている「頂連峠」ではないかと推察できる。

そこからさらに峠へ向けて歩いていくと、いくつか川を渡る橋が架かっているが、橋もなく浅い川を渡らなければならない箇所も相当数ある。また炭窯跡が道の脇や山に少し入ったところに計10基以上残されている。一つは残りが非常によく、窯の石組み、炭小屋跡、炭窯煙突も残っていた。小屋に残っていた瓶や前住職の聞き取りから、昭和30年代後半まで炭焼きが行われていたらしい。また、鰐淵寺山中には、昔は「山番」という者がおり、木々を盗伐する者から山を守っていたという。その山番は、山中の番をする代わりに副業として炭焼きをすることを許可され、寺へ納めたり市中へ売りに行ったりしていた。戦前には山番は、遙堪の方が3人、高浜の方が2人くらいいたそうである。昭和30年代初頭には山番は居なくなっていたが、いくらか奉納金を納めてもらい炭焼きを許可していた。

峠まで約0.7km手前付近、道からやや高い位置に平坦面があり、作業小屋跡に大きな鉄製の機械残骸が放置されていた。機械に付いていた鉄板プレートに「旋風回転椎茸乾燥機 実用新案特許586402号 製作販売元 大分市王子町3丁目 豊國たばこ資材株式会社」⁽³⁾と記され、椎茸乾燥小屋があったことが判明した。

頂上部の遙堪峠には、22m×10mほどの楕円状の広い平坦面があり、前住職の話では、戦後間もないころには茶屋のようなものがあったらしい。恐らくそれ以前から、鰐淵寺の四至を示す四つ堂などの仏堂が建っていたものと考えられる。また、石造物も置かれており、その一つの石地蔵には「元文五庚申(1740)四月廿一日／施主飯石郡八幡領／神田喜太郎」と記されている（第34図）。鰐淵寺からこの遙堪峠までの間に一丁地蔵が置かれ、途中五・六・七丁は不明なもの、一丁から廿一丁までが道の脇に立っている。地蔵に彫られた銘文から、唐川村、川下村、多井浦⁽⁴⁾などの地域で寄進されたもののか、個人での寄進、また供養のためか戒名が刻まれたものもある。石はどれもほぼ同じ花崗岩製で、年代の判明するものはないが、江戸末から明治にかけて造立されたものと推定される。峠からさらに南の遙堪に向ても一丁地蔵は並置されている。遙堪へ至る道沿いにもかなり広い平坦面が数箇所あり、かつての寺院跡等の可能性がある⁽⁵⁾。



第33図 石製不動明王像



第34図 遙堪峠の石地蔵

林木越へ 次に林木越ルート、伊努谷峠を目指す道を歩く。ここは、鰐淵寺歴代住職の墓地が並ぶ松露谷を越えていくが、それから伊努谷峠まで一丁地蔵を11基確認することができる。松露谷入口に一・二丁があり、三丁は確認できないが、四丁から十二丁まで続いている。一丁地蔵には「別所村中」「唐川村中」のほか個人名の施主が刻まれているが、やはり年代が分かることはなかった。文末に遙堪越と林木越の一丁地蔵の一覧を掲載しておく。(45頁第6・7表)

道中の峠までに10箇所程度の平坦面が連なっており、広いものは40m×30mの規模を有するものも見られた。峠までの道には、休憩用の茶屋や店が並んでいたと推察することができる。伊努谷峠頂上部には、遙堪峠ほどに広い平坦面は見いただせないが、峠から少し下った東側に長軸30m、短軸10mほどの平坦面がある。地元で「ボタモチ岩」と呼んでいる場所に当たり、土壘状の遺構も見られる。出雲平野を眺望するに優れた場所であり、戦国期に築かれた鰐淵寺側の砦的な施設であった可能性もある。

この林木越ルートは、峠に至るまでの距離が短く、道幅も広い。かつての鰐淵寺所領だった林木へ抜ける道のため、古来重要視されていたのではないかと推察されている(錦田編1980)。

矢尾越へ 次に矢尾越(矢尾峠・来成峠)を歩いてみることとする。遙堪峠への道の途中、立派な橋台跡(第35図)が残る川を東へ渡り、山中へ向かうが、急斜面を登る道が続く。山の斜面は崩れており、道は荒れ、部分的に崩壊が著しい箇所もあり、進むほどに道らしい道がなくなっていく。遙堪越同様、峠までに4~6基の炭窯跡を発見した。また、同様に川を渡る箇所があるが、そのうちの一つにはかつて橋が架かっていた痕跡として橋台石垣が見られ、その先に続く道の側面にも石垣が積まれていた。今では道としての痕跡は非常に薄れてしまっているが、かつては主要道の一つとして機能していたことを如実に示す遺構と考えてよいであろう。



第35図 矢尾越の橋台跡

矢尾峠手前のところに、道より一段高くなった40m×20mほどの広さを有する平坦面を発見した。礎石、石垣、瓦などの遺物も見られなかつたが、かつて茶屋などがあったと思われる。しかし、前住職への聞き取りでは、遙堪峠、伊努谷峠にはあったものの矢尾峠に茶屋等があった記憶はないとのことであった。また、峠を中心とした付近には、平坦面はまったく見られなかつた。この矢尾越には一丁地蔵も置かれておらず、少なくとも江戸後期以降、鰐淵寺との往来が盛んであった遙堪越や林木越ほどの道ではなくなっていた可能性が高い。また、前2者には江戸期の絵図A(16頁第8図上)に四つ堂が描かれているが、矢尾峠には描かれていない点も、そのことを裏付けているといえよう。

般若坂へ 次に鰐淵寺から北へ抜けるルートを見てみることにする。このルートは河下、つまり日本海へ抜ける道に当たるが、昔の道が般若橋からまっすぐ北に向けて山に入るルートとして現存していることを確認した。ただし、般若橋のある谷付近は斜面が崩落してしまっており、道を確認できな

かった。残っている道は、斜面下に石垣を構築し、崩れないような設備が施された部分である。東から西へ向けて延びる丘陵を南北に貫いているのだが、その頂上付近で平坦面（約 56m²）を発見した（第 36 図）。遺物はまったく発見できなかつたが、小さな平坦面ながら、礎石らしいものが顔をのぞかせていた。後日行った前住職からの聞き取りにより、江戸期の絵図に描かれている「般若坂」の四つ堂跡であることを確認した。そこから北へ向かうと東西方向の丘陵を下っていき、地蔵橋の東方で現道とぶつかることになる。ここから河下までの道はすべてを確認していない。

地蔵橋から鰐淵寺へ向けて 10 m ほど南進した西側急斜面上に、「しもとぶち」と呼ばれている箇所がある（35 頁第 31 図）。大岩に大きな亀裂があり空洞状になっており、石製祠内に地蔵、三体の小地蔵、灯籠が建立されている。「しもとぶち」は下の病を治してくれるという言い伝えがあり、例えばおねしょする子どもを何とかしたいと親などがお参りすると治ったと言われている。

一方、般若橋の谷から鰐淵寺へ向けての道はどうなっているのであろうか。恐らく現道がそのまま踏襲されているものと考えられ、つまりかつての古道は消滅してしまった状態であろうと推察される。しかし、松露谷へ向かう所にわずか 20m ほどではあるが、現道から少し東に振る形で古道が残されている。現道に背を向け、古道に正面を向く不動明王像の存在がそれを裏付けている（第 37 図）。

心経院坂から 境内の北端に念佛堂跡があり、ここから北西に道が延びている。前住職の聞き取りでは、かつて境内は女人禁制であったが、この念佛堂までは入ることが許されていたという。念佛堂から北西に延びる道は、唐川へと至る道で、西から境内へ入る唯一のルートであったと考えられる。この道沿い、念佛堂跡の少し北西に広い平坦面（約 194m²）があり、絵図等との位置関係から「心経院坂」の四つ堂が建っていた箇所に当たると推察される（49 頁第 46 図 A-54 平坦面）。ここから第 2 駐車場へ向けて道は延びるが、斜面の崩落等により道が寸断されており、危険な状態にある。第 2 駐車場に到着する手前の斜面下には、郭状に加工された段が 4 段にわたって続いており、山城を彷彿とさせる。その先は駐車場造成のため大きく改変され、現道（舗装道路）につながっている。



第 36 図 般若坂の平坦面



第 37 図 古道を向く不動明王像

2 四至の周辺エリア

(1) 唐川地域 (第38図)

唐川地域は、鰐淵寺中心部（根本堂地区）から西に直線で1.5km離れたところにあり、標高140～160mの壠鉢状の盆地をなし、四方を200～300mの急峻な山に囲まれている。東西約0.7km、南北約0.4kmの三角形状の盆地である。当地域は、これまで鰐淵寺が南北両院に分かれていた時の北院に比定されていて（曾根1963・井上編1997）、現境内にある摩多羅神社は、かつてこの唐川地区にあったものを中世に現境内に移したという伝承が残っている。盆地中央の茶畠の一角に今も「摩陀羅神さん跡」と呼ばれる石碑が建っており（第38図）、今でも祀りが続けられている。ここにはスサノヲの脛骨が埋められていたというのである。また、現境内にある摩多羅神社は毎年正月三日にお祀りが行われるが、秘事とされ、鰐淵寺住職と唐川地域の総代2人の計3人しか奉仕することができない。この総代の家には、鰐淵寺からいただいたと伝わる絵画や書がいくつか残されており、鰐淵寺での祀りの役割などを示す古文書も残されている。さらに、唐川の山中にある韓竈神社は、スサノヲノミコトを主祭神とする『出雲国風土記』にも記載される古社であるが、中世から近世にかけては智尾権現と呼ばれており、鰐淵寺を中心とする中世スサノヲ神話の伝承が残る⁽⁶⁾。この智尾権現の棟札、永禄8年（1565）のものから万延元年（1860）のものまで、計7枚が鰐淵寺に保管されている（山岸2012）。唐川盆地中心部には、明治5年（1872）に韓竈神社の遥拝所が設けられ、拝殿的な役割を務めている。

これらの伝承や祭祀の実態からも唐川地域が極めて特殊な地域で、鰐淵寺と深い関係があることを知ることができる。

曾根研三氏の見解以来、そして鰐淵寺に残る重文觀音菩薩立像の存在などから、また前記した唐川地域の特殊性から唐川=「北院」とする仮説は生き続けていた。しかしながら、唐川地域では考古学的な手法での調査はこれまで行われていなかったので、一度実施しておく必要があり、科研調査をきっかけに現地踏査を行うこととした。

現在の唐川の盆地は、傾斜地が多く、僧坊等が建っていたと思われる平坦地を見出すことはできない。その理由として、明治10年代から茶の栽培が盛んとなり、茶畠耕作のために、かつての平坦面が削平されている可能性があった。今でも山肌に連なる屋敷地のみが高い石垣によって平坦面を形成しているに過ぎない。そうであるならば、かつての遺構の痕跡は期待できないものの、僧坊跡の面が削されることによって、当時の陶磁器などの遺物が拾える公算はより高くなるはずである。

ところが、盆地内の畑、畔、それらの脇にある小石などが集積されている箇所などを見て回ったが、



第38図 「摩陀羅神さん跡」

土師器や陶磁器などの遺物をまったく発見することができなかった。畠の所有者などにも何人か話を伺ったが、土器などが出てきた話は聞いたことがないということであった。また、高い石垣により平坦面上に建てられた屋敷のいくつかも見て回り、かつ家の方々からも聞き取りしたが、古い土器などが出土したとの情報はなかった。

これらの状況を鰐淵寺境内周辺での踏査状況と比較してみると、唐川地域に僧坊跡等、かつての寺院伽藍があったことは否定せざるを得ない。今回の現地踏査で拾えないことよりも、地元の方々が古い土器等を見たことがないということの方がより重要で、その情報や伝承も伝わっていない状況からも遺跡として認知できる場所ではないということになろう。唐川にかつての北院があったという仮説は、成立し得ないとみてまず間違いない。

ただ、摩多羅神社の前身が唐川にあったという伝承は、完全に否定することはできない。建造物として摩多羅神社を調査された山岸常人氏は、それまで常行堂内にあった摩多羅神内殿が、寛文7年(1667)に独立して建立された可能性を指摘しておられる(山岸 2012)。唐川にあった“スサノヲ”を祀る神社を移すとともに、摩多羅神と融合させ、鰐淵寺境内に建立したことは十分に考えられる。山岸氏も指摘しているとおり、杵築大社の神仏分離の動向が鰐淵寺内にも何らかの形で及んだ結果の一つとして、極めて重要な転換点であるといえよう。さらに現存する摩多羅神社は、そうした歴史的転換を今に示す非常に重要な建造物遺産であると位置付けることができよう。

(2) 大寺谷地域 (第39～43図)

大寺薬師(萬福寺)には、木造薬師如来坐像(第39図)、両脇侍像、日光・月光菩薩立像、そして四天王立像の重文9軸が残され、祀られていることは周知のことであろう。この9世紀～11世紀にかけての古い木造彫刻は、県内でも出色の作品として多くの観光客が訪れ、また日本各地の展示に出品されている。現在は、萬福寺境内にある収蔵展示施設に収められているが、かつてはこの場所から北、谷奥へ約300mさかのぼったところの「広瀬」という地に大寺が存在していたと言われている。慶安3年(1650)の大洪水による山崩れのため堂宇、仏像の多くが破壊、埋没したとされ、今の大寺薬師の仏像は、その際に地元住民が土中から救出し、現在の萬福寺境内に薬師堂を建て、納めたということである⁽⁷⁾。

また、この大寺薬師西側の市営住宅付近で井戸を掘ったところから、古代の軒丸瓦が出土している(出考研編 1983、花谷・高屋 2012)。さらに、この大寺谷を南に出た沖積平野には、青木遺跡があり、古代における神社遺構など、祭祀的・宗教的な施設の存在が明らかにされている(松尾編 2006)。

ここでの踏査は、前述した広瀬付近に寺院痕跡が認められるか、大寺薬師周辺に古代寺院の痕跡はあるかを目的に行なった。大寺薬師周辺は、大寺谷遺跡として周知の遺跡となっており、古代の須恵器や土師器等が採集できる(76頁第67図)。しかし、古代の瓦片はまったく見つけられなかった。



第39図 木造薬師如来坐像

広瀬付近は、小さな谷の東側に緩やかな傾斜の平坦面があり、しかもかなりの面積を有している（第40図）。平坦面には礎石が数個認められ、また周辺からは9世紀前後と思われる須恵器表片を数点採集することができた。平坦面中ほどは東西方向に道として切られており、断面が見えている箇所があった。断面には礎石と思われる大きな石が顔をのぞかせており（第41図）、地面を掘り窪め、基礎部分にはグリ石があるような形跡が見られた。そこから東へ進むと、かつて尼寺があつた

とのいわれのある平坦面を見つけることができ、周辺からは近世期の陶磁器類、寛永通宝をはじめ、土師器、須恵器等を数点採集した。またその東側には、五輪塔の残骸が数点転がっており、少なくとも2基は認めることができた。

一方、この平坦面の背後丘陵上には横穴式石室を有する古墳（第42図）が点在しており、6～7基の開口している小形の円墳を確認した⁽⁸⁾。



第40図 広瀬付近の平坦面



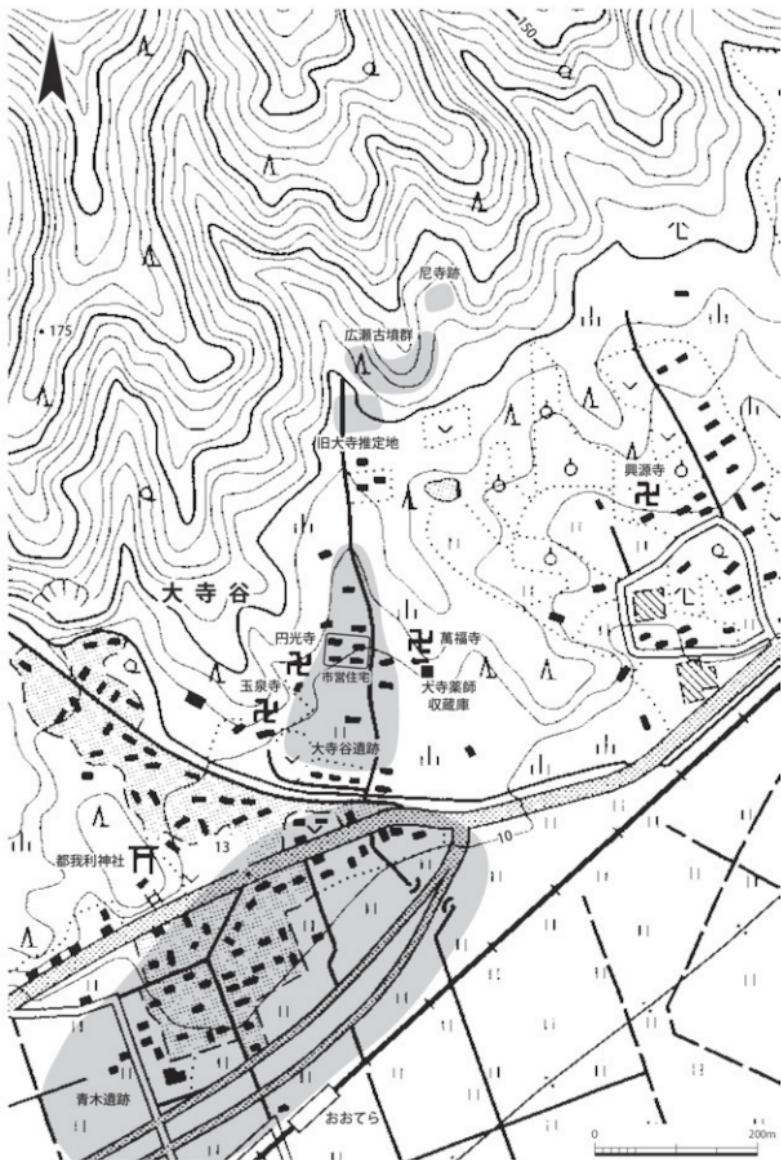
第41図 磚石と思われる大きな石



第42図 横穴式石室を有する古墳

以上のことから、この広瀬の地には礎石を有する仏堂等の大きな建造物が建っていたことは間違いないものと思われ、これがいわゆる大寺薬師と称されていたものであろうと推察することができる（第43図）。

しかしながら、ここが鰐淵寺の南院に当たると言うことはできない。なぜならば、南北両院統一前の嘉曆元年（1326）に「本堂以下の堂…悉く焼失せしめ畢んぬ」（『鰐淵寺衆徒等解状案』）という大火に見舞われ、20数年後の正平10年（1355）に「嘉曆元年の炎上以後、…一字として未だ建立に及ばず」（『鰐淵寺大衆条々連署起請文案』）状態で、本尊である薬師と千手を新造したとしている。もし広瀬（大寺薬師）が南院だとすると、本尊である薬師如来は焼失してしまっているはずである。つまり、現存する大寺薬師の重文薬師如来坐像は、鰐淵寺と関係のない仏像の可能性が高いと推論できる。大寺薬師が南院であったことはありえないと結論付けることができよう⁽⁹⁾。（野坂俊之）



第43図 大寺谷地域平面図 (1:6,000)

第6表 遙堪越(遙堪峠)一丁地蔵

丁	場所	銘文	大きさ	備考
1		(右) 一丁 (左) 松本坊	87.5cm × 40.0cm	
2	川奥墓地入口	(右) 二丁 (左) 木佐新四郎	88.5cm × 38.0cm	
3		(右) 三丁 (左) 小豆や林右衛門	82.5cm × 38.0cm	
4		(右) 四丁 (左) 小豆や林右衛門	84.5cm × 39.5cm	
5				不明
6				不明
7				不明
8		(右) 八丁 (左) 渡原三郎左衛門	84.0cm × 37.5cm	
9		(右) 九丁 (左) 林木村 加輝	86.0cm × 40.0cm	
10		(右) 十丁 油や吉衛門 (左) 春壽金光博士	87.0cm × 40.0cm	
11		(右) 十一丁 油や吉衛門 (左) 菊林貞松大助	85.5cm × 40.0cm	
12		(右) 十二丁 油や吉衛門 (左) 王林貞宝大助	89.5cm × 40.0cm	
13	川の対岸。道が川の流路になつたものと思われる	(右) 十三丁 畿一 (左) 唐川村中	82.5cm × 40.0cm	
14		(右) 奥宇ガ村 十四丁 三郎兵衛 (左) 川下村中	86.0cm × 39.0cm	「奥宇ガ村」は斜めに彫られ、彫り方も異なることが後刻と推察される。
15		(右) 十五丁 (左) 多井浦中	85.0cm × 42.0cm	
16		(右) 奥宇ガ村 十六丁 佐(祐?)助 (左) 一門 (?)	84.0cm × 39.0cm	「奥宇ガ村」は斜めに彫られ、彫り方も異なることが後刻と推察される。左の文字は削られてしまっているようで判読不能。
17		(右) 十七丁 (左) 十六鶴久三郎	86.0cm × 41.0cm	
18		(右) 八丁 (左) 塩津浦徳左衛門	89.5cm × 39.5cm	
19		(右) 九丁 (左) 塩津浦 一部兵衛	86.0cm × 39.0cm	
20		(右) 十丁 (左) 塩津 与三左衛門 長 (?) 左衛門	85.5cm × 39.0cm	
21	遙堪峠頂上	(右) 廿一丁 (左) 善 (?) 三郎兵衛 ○○善○門	84.5cm × 39.5cm	實永通賓が置かれていた。
		(右) 文永五庚申一月廿一日 (左) 旗主 鹿石郡八幡領 神田書太郎	82.5cm × 40.0cm	元文5年(1740)現在の出雲市佐田町

【凡例】「〇」は一文字あるが読めないもの、「・・・」は数文字あるが読めないもの、「(?)」はその文字で正しいか怪しいもの

第7表 林木越(伊努谷峠)一丁地蔵

丁	場所	銘文	大きさ	備考
1	松露谷入口右側	(右) 壱丁 唐川村中 (左) 是y林木庭三十七丁	86.0cm × 38.5cm	
2		(右) 二丁 (左) 旗主別所村中	87.0cm × 39.5cm	
3				不明
4		(右) 四丁 (左) 旗主 唐川村中	86.0cm × 41.0cm	
5		(右) 五丁 旗主 金本又右衛門 同苗○右衛門 (左) 新宮源四郎 同名戸石南衛門	(66.0cm) × 38.0cm	下部が埋まっている。
6		(右) 六丁 (左) 旗主 富田惣三郎 同名作兵衛	86.0cm × 39.5cm	七丁との距離が短い(約60m)
7		(右) 七丁 旗主 新宮源節衛門 福島恩衛門	82.5cm × 39.5cm	
8		(右) 八丁 (左) 旗主 黒 清八 同名甚兵衛	86.5cm × 40.0cm	
9		(右) 旗主 有留平七 平井市郎衛門	85.0cm × 40.0cm	
10		(右) 九丁 (左) 旗主 その山太郎右衛門	85.0cm × 40.0cm	
11		(右) 十一丁 (左) 旗主 福田平右衛門	88.0cm × 39.5cm	
12	伊努谷峠頂上手前	(右) 十二丁 (左) 旗主山崎賀市右衛門	87.0cm × 40.5cm	銘文が楷書で彫られている(他の行書)。後刻と考えられる。

【凡例】「〇」は一文字あるが読めないもの、「y」は合字の「より」

註

- (1) (鈴田唯雄編 1980) には、遙堪越が生活にとても重要であったことが語られている。
- (2) (山内・岩谷 2012) では、遙堪越より伊努谷越が重要であったと推論されている。
- (3) 豊国たばこ資材株式会社は、かつて煙草葉乾燥機から椎茸乾燥機製造へ転換されたが、今から 15 年くらい前に廃業された。この旋風回転椎茸乾燥機は、昭和 30 ~ 40 年代のものと推察されるが、明確にすることはできなかった。大分県椎茸農業協同組合や株式会社オアシス（大分県由布市）のご教示による。
- (4) 多井浦は十六島町の小津寄りに位置している。
- (5) 島根県教育庁文化財課椿真治調整監のご教示による。しかし、鰐淵寺の範疇ではないと考えられる。
- (6) 中世出雲神話を簡単に示すと、「昔、インドに雲霧山ウニタマツルという山があった。その山の一隅が崩れて海へ流れ出た。やがてその山塊は日本の近くに到り、それをスサノヲが杵で築き固めた。これが「浮浪山」と呼ばれる現在の島根半島であり、「杵築」の名の由縁である。」となる。(高橋編 2013) 参照。
- (7) (出考研編 1983) などに記載され、地元の伝承として言い伝えられているが、確証ある史料等は見つかっていない。
- (8) (出雲市教委 1989) によると、勾玉が 2 点出土している。また「現在は消滅している」と記されているが、本文で示したように群集墳が存在している。
- (9) 鰐淵寺との関係が密接でなかったとしても、重厚な平安仏を有している大寺薬師がきわめて重要な地位にあったことは確かである。その位置付けを明らかにすることは、今後の重要な課題である。

参考文献

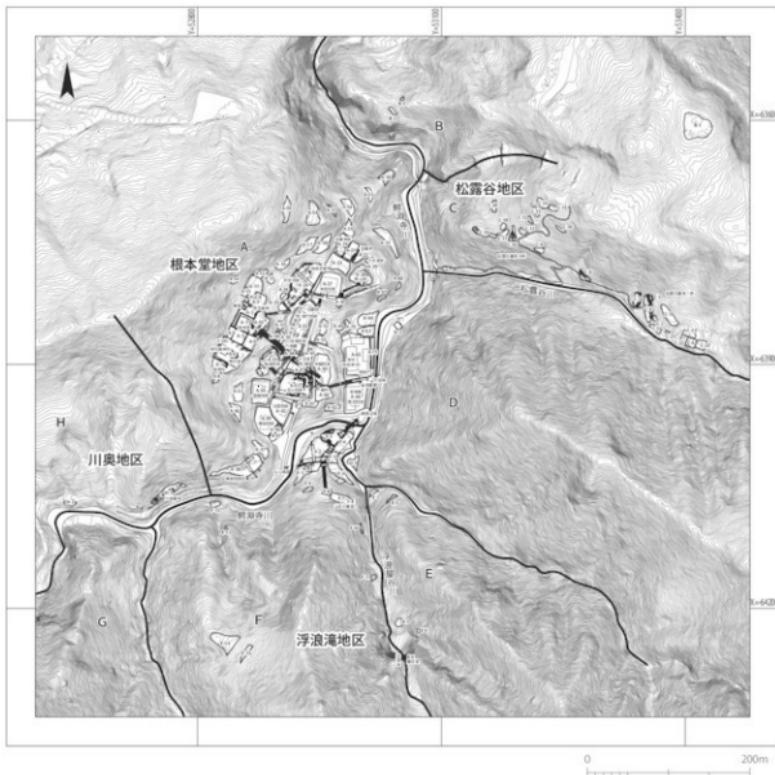
- 出雲考古学研究会編 1983『大寺谷遺跡』『古代の出雲を考える 3 出雲平野の集落遺跡 I』
- 出雲市教育委員会 1989『廣瀬古墳』『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第 2 集
- 井上寛司編 1997『出雲國 浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺
- 曾根研三 1963『鰐淵寺史の研究』『鰐淵寺文書の研究』松陽印刷所
- 高橋周編 2013『もう一つの出雲神話—中世の鰐淵寺と出雲大社—』2013 年特別展図録 出雲弥生の森博物館
- 鈴田唯雄編 1980『わにぶちのむかしがたり』第二集、平田市立鰐淵小学校
- 花谷浩・高屋茂男 2012『出雲国意宇郡山代郷南新造院跡と出雲郡大寺谷遺跡の同范瓦について』『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』第 2 号
- 松尾充晶編 2006『青木遺跡 II (弥生~平安時代編)』第 3 分冊(奈良・平安時代)島根県埋蔵文化財調査センター
- 山内靖喜・岩谷北斗 2012『鰐淵寺周辺における江戸時代後期の道路』『科研報告』
- 山岸常人 2012『鰐淵寺の棟札等』『科研報告』

第3節 別所の中枢地域

ここでは、別所の中枢地域の平坦面について報告することとする（第44図）。平坦面の調査カードは全体で122箇所分を作成した。山の稜線や川を境にA～Hの8地区を便宜上に分けて踏査し、整理した。その内訳は、A地区71箇所、B地区3箇所、C地区24箇所、D地区2箇所、E地区5箇所、F地区15箇所、H地区2箇所という数であった。それぞれの地区について述べていきたい。なお、第3章第2節（17～22頁）で使用した地区名も併記している。

1 A地区（根本堂地区、第44～46図、第8表、図版3～7・21～27）

平坦面全数の約58%がA地区に所在する。遺物は、古代の須恵器から近代の陶磁器類まで確認できた。



第44図 分布調査箇所（1:6,000）

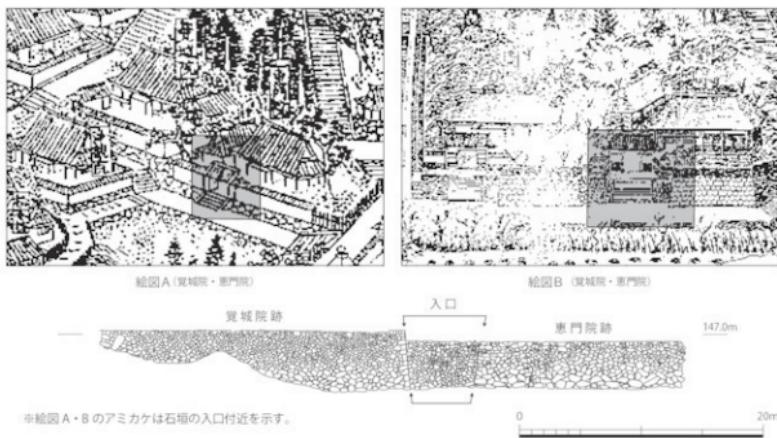
A地区は、大きく分けて最上段、上段、中段、下段、最下段の五段に分けられる（第3章第2節）。最上段は、根本堂（A-1「以下ハイフンを省略」）、釈迦堂（A3）、常行堂・摩多羅神社（A6）と中心堂舎を置くまとまった平坦面である。陶磁器類は少ないが瓦が多いことから、寺院の中心堂宇が建ち並び、僧坊の可能性は低い⁽¹⁾。また、北東部の地形的に突出した場所に開山堂（A28）が置かれる。

最上段のさらに上段でも、ところどころに平坦面が存在する。竹林庵跡（A11）では、基壇や礎石が確認できる。また、宝蔵跡（A13）では石垣の区画が確認できる。A16では古代の須恵器が採集されており、古代以来、利用されていた可能性がある。

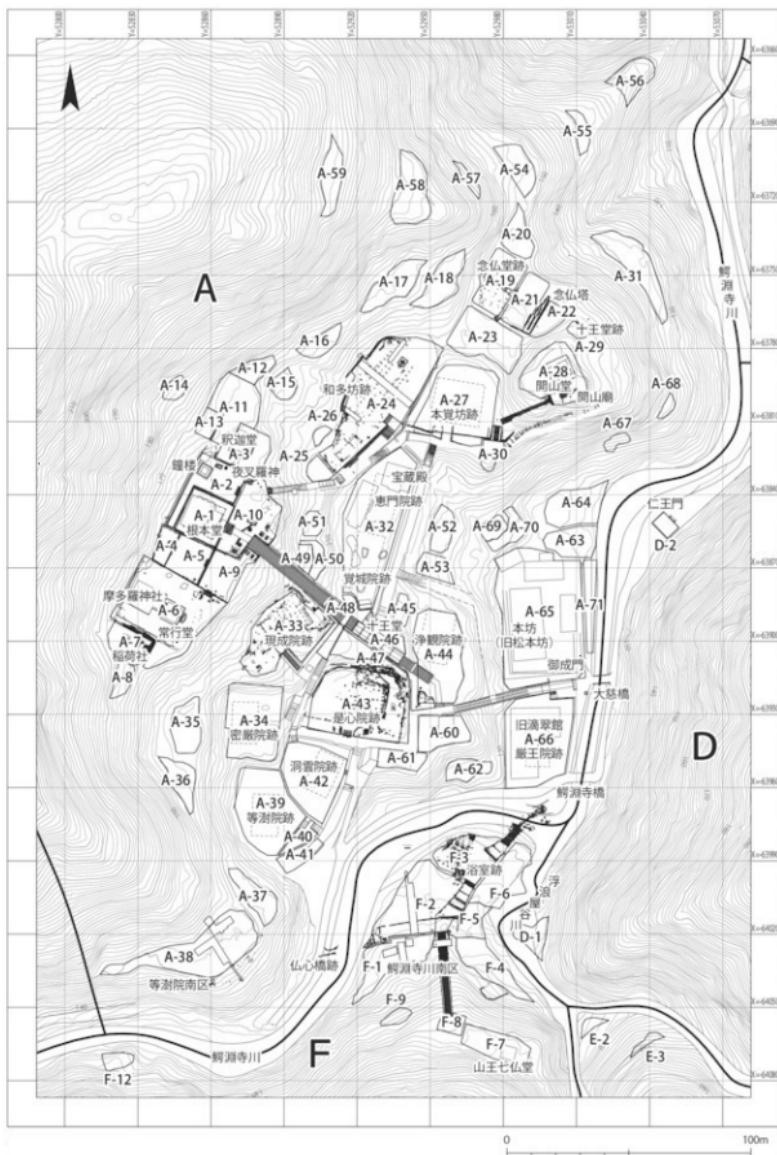
上段は、北側のA23、和多坊跡（A24）、A51、A50、現成院跡（A33）、A35、A36、等澍院南区（A38）と標高約155m前後の高さに削った面が南北に並んでいる。この上段は第5章で記述するが、和多坊跡や等澍院南区とほぼ同時期に造成を行った可能性がある。

中段では、北側にある念佛堂（A19）、A20、念佛塔（A21）、A22は、東側に開口した谷部を造成して平坦面を造成している。次にA32（惠門院跡、覺城院跡）の平坦地は、東を正面とする平坦面で、東側には、最大高5.0mの石垣が組まれている。また、絵図A・Bから惠門院は東側に門と入り口となる階段が描かれているが、現在その階段部分にも石垣が積まれている。これは、現地で明瞭に確認できる（第45図）。また、絵図では覺城院が一段高く描いてあるが、石垣も中央部で0.8mの段差が確認できる。現状では、惠門院跡と覺城院跡は同一の平坦面になっているが、覺城院側の大部分を削平した結果である⁽²⁾。

下段は、等澍院跡（A39）、洞雲院跡（A42）、是心院跡（A43）、淨觀院跡（A44）などの僧坊跡が集中している。



第45図 A-32 東側の石垣 (1:400)



第46図 A地区全体図(1:2,000)

最下段は、現在の本坊（旧松本坊・A65）、平成25年（2013）まで滴翠館のあったA66（巖王院跡）などが所在している。本坊北側のA64では、平坦面北側斜面から99点と多くの中世瓦を採集することができた。これらは、北側斜面上の開山堂（A28）から転落してきた瓦である可能性がある。また、A66では、滴翠館解体時に立会を行っており、現地表面下約1mのところで中世後半期の遺物包含層を確認している（図版26-8）。包含層上層に砂層が確認できることから、大規模な洪水に見舞われたと考えられる。

2 B地区（第47図、第9表、図版27）

B地区で確認したのは、3箇所である。B1は、平坦面として記録したもの、後世のため池である可能性が高い。B2は遺物が出土していないが、南北11.9m、東西4.7mの平坦面を確認しており、礎石と思われる構造を2基確認している。絵図Aから推定できる般若坂の四つ堂平坦面である（第2節40頁）。

3 C地区（^{しうらみだに}松露谷地区、第47図、第9表、図版27～29）

C地区は、現境内の東方に位置する墓地を中心とする地区である。平坦面を24箇所確認しており全体の約20%に当たる。石造物調査の結果、松露谷墓地I群とII群のまどまりに分けられている（第6章）。松露谷墓地I群の谷奥では、C3・C6で古代須恵器を採集した。C5では12世紀から14世紀前半の白磁が多くみられ、C6では1点だけだが、中世瓦を採集しており、古代から中世において利用されたことが考えられる。I群のC3・C4・C7・C8においては、近世の角柱型・無縫塔の石塔とともに、中世の五輪塔や宝篋印塔の部材が確認できる。また、II群のC9・C10においては近世の角柱型の石塔が集中しているが、C16・C20において中世石塔の部材が散在している状況も確認できる。また、C11は礎石が確認できる平坦面であり、何らかの建物が建っていた可能性がある。

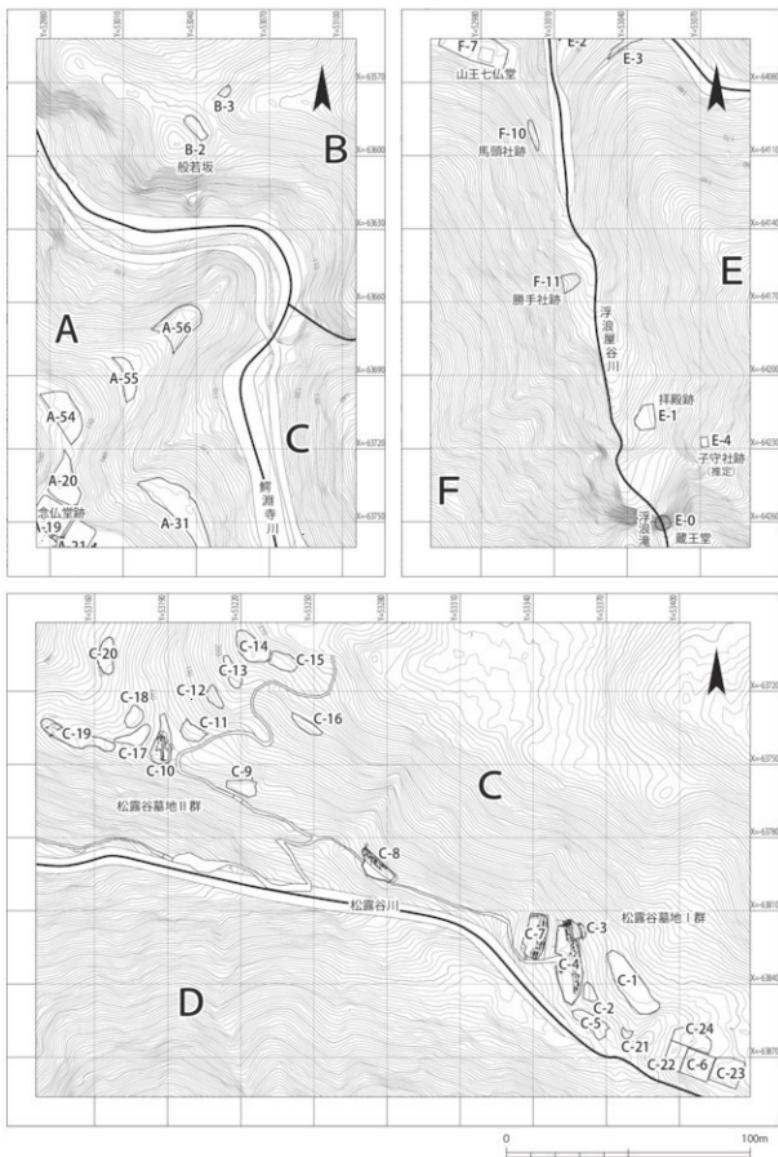
石造物については、第6章で詳述するが、松露谷墓地I・II群とも中世から墓域として利用され、I群（C3・C4・C7・C8）、II群（C9・C10）は、近世初頭以降に再編され、現在まで石塔が立てられている。

4 D地区（第46図、第9表、図版25）

D地区の平坦面としては、性格不明のD1平坦面およびD2の仁王門の2箇所である。仁王門は、棟札から大正7年（1918）の建立である（山岸常人2012）。なお、絵図Aに見られることから、大正以前に存在しており、再建と考えられる。

5 E地区（浮浪瀧地区、第46・47図、第9表、図版2）

E地区は、浮浪瀧谷川の右岸、D地区の南側に位置する地区である。地形は急峻であり、平坦面は、浮浪瀧周辺に限定される。E0が浮浪瀧であり、E1が絵図Aで「拝殿」絵図Bで「行場」として示される場所である。その他、平坦面2箇所がある。



第47図 B・C・E・F地区地形図 (1:2,000)

第8表 平坦面一覧表（A地区）

平坦面番号	名称 （備考）	平坦面情報			直横面情報			備 考
		面積 (m)	幅 (m)	最大 奥行き	現存 建物	礎石	基礎	
A-1 横本堂	345 18.80 18.35	○	○	○	○	○	○	18世紀中期建立 現存：横本堂（市指定文化財）
A-2 稲穂堂	346 20.85 13.80	○	○	○	○	○	○	正徳3年(1713)（稲穂）建立
A-3 稲詫堂	302 19.00 15.90	○	○	○	○	○	○	寛文4年(1664)又は12年(1672)建立 現存：稲詫堂、境内最古の建造物
A-4	103 15.10 8.30	○	○	○	○	○	○	稻詫阿弥陀如来坐像・正徳5年(1715)供養塔（奉福出雲觀音堂塔三十三間札供養塔）明治41年(1908)
A-5 蓬屋堂	243 15.60 15.00	○	○	○	○	○	○	
A-6 常行室	1110 33.20 29.00	○	○	○	○	○	○	寛政7年(1795)改修（刀削面）天保6年(1834)（稲穂）建立 現存：常行室・摩陀羅神社
A-7	193 17.70 12.00	○	○	○	○	○	○	清水溝（市指定史跡）平成24年(2012)改修
A-8	92 15.50 6.70	○	○	○	○	○	○	排水溝あり
A-10 接待所	496 33.70 20.30	○	○	○	○	○	○	
A-11 宮前庵（竹林庵）	391 28.20 21.30	○	○	○	○	○	○	
A-12	115 19.50 8.80	○	○	○	○	○	○	基礎規模:5.00×4.80m
A-13 宝藏	84 11.40 7.40	○	○	○	○	○	○	中央に土坑
A-14	63 12.00 5.50	○	○	○	○	○	○	
A-15	101 12.30 11.00	○	○	○	○	○	○	
A-16	123 21.60 7.60	○	○	○	○	○	○	
A-17	254 34.50 12.20	○	○	○	○	○	○	
A-18	248 32.30 13.30	○	○	○	○	○	○	
A-19 念仏堂	349 24.50 15.10	○	○	○	○	○	○	明治38年(1905)焼失
A-20	167 20.00 13.50	○	○	○	○	○	○	道路状遺構が残存
A-21	237 23.00 10.40	○	○	○	○	○	○	念仏塔碑・67基(1725年～1917年)、道路状遺構が残存
A-22	115 16.50 9.20	○	○	○	○	○	○	道路状遺構が残存
A-23	469 29.20 18.30	○	○	○	○	○	○	
A-24 和多坊 ★	1239 67.00 28.00	○	○	○	○	○	○	和多坊跡（東側）明治38年(1905)焼失、池泉庭園の可能性、源流石碑
A-25	75 10.80 6.70	○	○	○	○	○	○	
A-26	34 9.80 4.50	○	○	○	○	○	○	
A-27 本賣坊	771 28.60 27.30	○	○	○	○	○	○	建物（屋根葺材保管小屋）自然倒壊
A-28 開山堂 （開山廟）	483 23.50 23.50	○	○	○	○	○	○	17世紀後期、19世紀中期大改修 現存：開山堂・開山廟（石碑）
A-29 (十五堂)	39 8.30 5.10	○	○	○	○	○	○	十五堂跡（祠（ホウ）あり）
A-30	86 12.80 6.70	○	○	○	○	○	○	
A-31	365 46.00 10.00	○	○	○	○	○	○	
A-32 蓬門院	783 37.00 23.00	○	○	○	○	○	○	石垣：蓬門院南端に後様み痕跡（蓬門院跡石碑）明治38年(1905)焼失、池あり、鬼板
A-33 要境院	398 25.00 20.50	○	○	○	○	○	○	蓬門院より段高かつたが廃後に削平 明治21年(1888)焼失、宝鏡殿（昭和30年(1955)移入）、旧宝門拝觀所
A-34 密嚴院	706 30.20 25.20	○	○	○	○	○	○	庭園跡（枯山水庭園）
A-35	655 30.70 20.50	○	○	○	○	○	○	
A-36	22 23.50 12.70	○	○	○	○	○	○	
A-37	167 27.20 11.70	○	○	○	○	○	○	溝跡あり
A-38 ★	743 65.00 18.00	○	○	○	○	○	○	道路あり、礎石列1.80m間隔で並ぶ
A-39 等謝院	710 33.50 29.00	○	○	○	○	○	○	道路あり
A-40	75 20.00 7.40	○	○	○	○	○	○	池泉庭園の可能性
A-41	117 19.00 7.50	○	○	○	○	○	○	
A-42 洗漱院	583 28.30 25.80	○	○	○	○	○	○	門跡あり
A-43 慶心院	966 38.00 27.70	○	○	○	○	○	○	坂和50周年に等謝院（油蔵）として大きく改変されている
A-44 净觀院	677 26.50 17.70	○	○	○	○	○	○	建物平成2年(2006)に転体、池泉庭園の可能性、枯山水庭園（主）とつながる
A-45	68 12.60 6.30	○	○	○	○	○	○	池泉庭園の可能性
A-46 十王堂	199 23.60 10.20	○	○	○	○	○	○	現存：十王堂
A-47	193 31.70 12.00	○	○	○	○	○	○	
A-48 (六地蔵)	130 24.60 11.90	○	○	○	○	○	○	現存：六地蔵
A-49	61 7.70 5.80	○	○	○	○	○	○	
A-50	78 14.50 5.00	○	○	○	○	○	○	
A-51	70 10.10 7.70	○	○	○	○	○	○	
A-52	139 18.50 9.00	○	○	○	○	○	○	
A-53	125 17.00 9.30	○	○	○	○	○	○	
A-54 心經院坂（推定）	194 24.30 10.00	○	○	○	○	○	○	
A-55	82 18.50 4.50	○	○	○	○	○	○	
A-56	198 17.40 13.40	○	○	○	○	○	○	
A-57	51 19.30 3.80	○	○	○	○	○	○	
A-58	353 30.50 13.70	○	○	○	○	○	○	
A-59	197 33.70 9.10	○	○	○	○	○	○	
A-60	258 21.60 14.80	○	○	○	○	○	○	便所
A-61	140 19.70 7.70	○	○	○	○	○	○	石敷きの道
A-62	127 18.60 9.40	○	○	○	○	○	○	平成15年試掘トレンチ（通路・遺物なし）
A-63	228 22.00 13.00	○	○	○	○	○	○	
A-64	327 26.00 20.00	○	○	○	○	○	○	
A-65 松本坊	1791 58.00 37.00	○	○	○	○	○	○	18世紀中期建立 現存：本坊・御成門（19世紀中期）・華麗（住宅）
A-66 繼王院	923 39.00 28.00	○	○	○	○	○	○	旧瀧翠館、平成25年2月解体、中世の通横面残存確認
A-67	47 11.00 4.00	○	○	○	○	○	○	
A-68	36 11.30 4.60	○	○	○	○	○	○	
A-69	79 11.00 7.00	○	○	○	○	○	○	
A-70	118 17.00 12.00	○	○	○	○	○	○	
A-71	153 38.00 5.50	○	○	○	○	○	○	

* C 地区は任意の名称。 *★*は、発掘調査を行った平坦面。

第9表 平坦面一覧表 (B~F, H 地区)

平坦面番号	名 称 〔集合〕	平坦面情報		通礎情報			備 考
		面積 (m ²)	規模 (m) *最大幅 ※行き方	現存 建物	礎石	基礎	
B-1		868	35.90				
B-2	般若坂(確定)	47	11.90	470	○		
B-3		15	5.60	350			
C-1	松原谷跡地Ⅰ群	248	30.90	980	○		
C-2	Ⅰ群	31	8.90	530			中世石塔部材散在
C-3	Ⅰ群	32	8.00	530			○ 石段、寶篋壇などあり、近世墓あり
C-4	Ⅰ群	252	32.50	900	○		中世石塔部材散在、近世墓あり
C-5	Ⅰ群	85	17.50	560	○		
C-6	Ⅰ群	126	12.00	1050			○ 石組造構あり
C-7	Ⅰ群	138	17.90	880	○		中世石塔部材散在、近世墓あり
C-8	Ⅰ群	97	12.70	800	○		中世石塔部材散在、近世墓あり
C-9	松原谷跡地Ⅱ群	63	12.30	700	○		中世石塔部材散在、近世墓あり
C-10	Ⅱ群	113	20.70	900	○		中世石塔部材散在、近世墓あり
C-11	Ⅱ群	55	10.90	750	○		中世石塔部材散在、近世墓あり
C-12	Ⅱ群	37	10.40	460			中世石塔部材散在、近世墓あり
C-13	Ⅱ群	50	14.30	530			建物痕跡?
C-14	Ⅱ群	123	17.30	970	○		中世石塔部材散在
C-15	Ⅱ群	65	11.90	700			中世石塔部材散在
C-16	Ⅱ群	46	14.70	400			中世石塔部材散在(五輪塔、地軸あり)
C-17	Ⅱ群	66	15.70	620	○		中世石塔部材散在
C-18	Ⅱ群	48	9.40	730			中世石塔部材散在
C-19	Ⅱ群	149	6.30	3200			
C-20	Ⅱ群	74	15.20	610			
C-21	松原谷跡地Ⅲ群	13	4.50	400			
C-22	Ⅰ群	76	11.10	780			
C-23	Ⅰ群	103	16.30	670	○		石組造構あり
C-24	Ⅰ群	130	12.00	1150			
D-1		130	18.50	1350			
D-2	仁王門	59	9.00	650	○		大正7年(1918)(復元)建立 現存:仁王門
E-0	羅王堂						浮浪漢、現存:羅王堂
E-1	拜殿	70	10.00	850			現状、休憩所
E-2		40	15.10	470			
E-3		38	16.50	590			
E-4	子守(確定)						
F-1	★	374	32.00	1300	○		鶴源寺川南区(複数)
F-2	★	674	41.00	3600	○		○ 滝道状造構あり 鶴源寺川南区(複数), 高札基壇
F-3	浴室 *	343	18.00	2200	○		○ 鶴源寺川南区(表出済合)
F-4		295	42.00	900			
F-5		165	19.00	1500			
F-6		350	30.00	1700			
F-7	七仏堂・拜殿	274	10.70	2300	○		○ 昭和35年(1960)(復元)建立 現存:七仏堂(コンクリート造)
F-8		74	10.20	820	○		
F-9		55	13.50	560			
F-10	馬頭	27	12.90	250	○		
F-11	勝手	40	7.30	610	○		
F-12		74	13.00	800			
F-13		10	4.00	300			
F-14		499	31.00	2850			皮焼窯あり
F-15		104	26.50	550			石組をうす土坑あり
H-1	川奥墓地	340	49.00	1000			中世石塔部材散在
H-2		79	16.00	780			

* C地区は任意の名称。 *「★」は、発掘調査を行った平坦面。

6 F地区（浮浪滻地区、第46・47図、第9表、図版6）

F地区は、浮浪屋谷川の左岸でG地区東側に位置する地区である。15箇所の平坦面が確認でき、全体の12%に当たる。E地区同様に地形は急峻で、浮浪屋谷川沿いに小さな平坦面があるほか、浮浪屋谷川と鰐淵寺川の合流する地点にやや広い平坦面がある。F1からF3については、平成24年(2012)度に発掘調査を実施した(第5章第4節)。また、山王七仏堂(F7)、馬頭社跡(F10)、勝手社跡(F11)がある。山王七仏堂平坦面の北西下斜面に破片総数3,300点余りと大量の中・近世土師器のほか、備前大甕や中国褐釉陶器が確認できた。

7 G地区（第44図、第9表）

G地区は、全体が急峻な地形であり、平坦面は確認できなかった。

8 H地区（第44図、第9表、図版29）

中世石造物が確認できたH1は「川奥墓地」である。石造物については、第6章で詳述する。H2は、鰐淵寺川左岸に所在する平坦面であり、近世から近代の陶磁器が散在している。
(石原聰)

註

- (1) 中世瓦が確認できること、それ以外の古代、中世の遺物が確認できないなど出土傾向に類似点がみられることがからの推測である。
- (2) 前住職からの聞き取りでは、戦前は覚城院側が高く、そこから惠門院側へ飛び降りたりして遊んだそうである。削平し、同一平坦面になったのは戦後まもなくのことと思われる。

参考文献

山岸常人 2012 「鰐淵寺境内の歴史的建造物」『科研報告』、59～70頁

第4節 分布調査の採集遺物

分布調査によって約9,000点の遺物を採集した。このうち、近世陶磁器を除く中世陶磁器（貿易陶磁器・国産陶磁器）、土器類、瓦、銭貨、石製品は約7,200点であった。貿易陶磁器は約2.2%、国産陶磁器は約9.5%、土器類（土師器・土師質土器・瓦質土器）は約64.6%、瓦類は約3.1%を占めた。

ここでは採集遺物の分布状況および概要を、陶磁器・土器類、瓦、銭貨、石製品の順に記述する。これら土師器についての評価は、第7章第3節での分類・編年を参照されたい。また、大寺谷遺跡の採集遺物は最後に触れる。

1 陶磁器・土器類（第48～55図、図版8～53）

（1）分布状況

分布調査で遺物が採集されたのは、主に、A・C・F・H地区であった。

A地区は根本堂を中心とした堂、僧坊が集中する中枢地区で、全採集遺物のなかで陶磁器・土器類が占める割合は約58%と半数以上であった。貿易陶磁器や古代須恵器の割合が多かった。

C地区は松露谷地区である。土師器、白磁、瓦質土器が多くみかかり、古代須恵器も採集された。

F地区は浮浪滝地区である。発掘調査を行った鰐淵寺川南区の南にあるF8とF9の間の斜面から夥しい数の中近世土師器が散在していた。採集した破片数は3,300点を超える。

H地区ではH2で土師器が1点採集されたにとどまる。

（2）採集遺物の概要

① 貿易陶磁器

白磁（第48図1～5、図版8・9） 第48図1・2は玉縁状口縁をもつ碗IV類。1は玉縁が肉厚、2は薄いつくりとなる。3・4は高台をもつ底部。3、4とも底部の削りが浅く器壁が厚い。高台の断面は逆台形状である。5は皿の底部で、浅く小さな高台をもつ。これらは12世紀である。4は黃灰色、それ以外は灰白色を呈する。第48図3～5は、松露谷地区（C地区）C5からの採集。C1から転落した可能性がある。

図版9-1は小さな玉縁をもつ碗II類。2～4は玉縁が大きくなる碗IV類で、2は玉縁が肉厚、4は薄いつくりとなる。5～9は端反り（口縁端部で強く反るもの）の碗V類。5の内面、6の外面上に柳描文を施す。10～27は碗か皿の体部28～35は底部である。図版9-34は皿VII類。36～40は器壁の厚さからみて水注・耳壺の体部と思われる。1・2～4・5～9は12世紀、34は12世紀～13世紀初頭である。

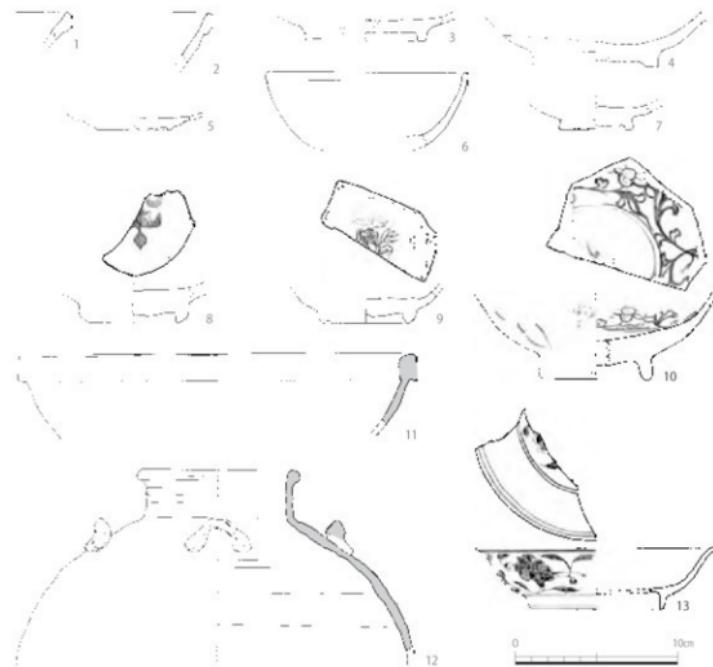
青白磁（図版9） 図版9-41・42は梅瓶である。両片とも葉文が施文される。13世紀後半である。図版9-41はA42（洞雲院跡）、42はA64（本坊北側）からの採集。

青磁（第48図6～10、図版8・10・11） 第48図6は体部が内湾して立ち上がる無文の龍泉窯系青磁碗。釉色が薄い青緑色を呈する。7～10は碗の底部で、いずれも高台を有する。7の高台は低く、8～10の高台は長方形形状で、端部は面取りを行う。9の見込みには草花文を描く。器壁が厚く重量

感がある。体部は内湾し、高台は高い。釉色は薄い緑色を呈する。外面に蓮弁文、内面体部に唐草文を描く。碗B-I類、14世紀後半である。第48図6と10はA38(等湖院南区)、7はA30、8はA54、9はA45からの採集。

図版10-1~3は龍泉窯系青磁皿I類で、内面に劃花文を描く。12世紀である。4~17は蓮弁文をもつ碗B類、4・5は口縁部で、蓮弁は大きく、鎬を失う碗B-I類、14世紀後半である。6~15も碗B-I類の体部である。16・17は口縁部で、線描き蓮弁文をもつ碗B-IV、15世紀後半である。図版18~22は口縁部外面付近に雷文帯をもつ碗C類である。18~21は口縁部に凹線を巡らす碗C-I類、22は通有の雷文帯をもつ碗C-II類に属する。14世紀後半から15世紀前半である。23~28は碗D類である。いずれも14世紀である。29~34は口縁部、35・36は輪花を呈する口縁をもつ碗、37は皿、38は盤、39は盤か香炉の口縁部であろうか。図版10-40は薄い青緑色を呈する香炉の肩部、図版11-1・2は脚をもつ香炉の底部である。3は薄い青緑色を呈する瓶の体部で外面に菊花文を描く。4~7は香炉などの高台付の底部、8~14は碗か皿の体部であろうか。15は同安窯系青磁。釉色はやや黄色味が強く、外面に細かい櫛目を有する。

中国陶器(第48図11・12、図版8・11) 第48図11は褐釉陶器の鉢口縁部で、端部が断面方形の



第48図 貿易陶磁(1:3)

縁帶状となるもの。吉田寛氏の分類の鉢C類にあたる。他に3片の体部があり、すべて同一個体である。12は四耳壺である。頸部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁端部は玉縁状になる。肩部に横方向の耳が1つ残存する。F9で、数多くの土師器などとともに採集された。後述する備前焼大甕(第51図2)も同地点である。図版11-16は四耳壺で、縦方向の耳の痕跡が1つある。17是中国陶器の底部で高台が欠損している。18・19は底部である。いずれも褐色を呈する。

朝鮮系陶器(図版11) 図版11-20・21は朝鮮系褐釉陶器の壺体部である。

青花(第48図13、図版8・11) 第48図13の体部は内湾して立ち上がり、端反り口縁をもつ。外面と内面見込みに唐草文が描かれる。皿B1群である。図版11-22は皿の口縁部、23・24は端反口縁をもつ皿B1群で、外面に唐草文を描く。25~31は碗か皿の体部または底部で、25は外面に唐草文、28は高台が付き、見込みに菊枝文を描く。29~31は器壁が厚く、盤あるいは鉢などの大型品である。

青釉陶器(図版11) 図版11-32・33は青釉小皿である。鮮やかなコバルト色を呈する。採集地点は、A24(和多坊跡)とA25で近接した地点である。

② 国産陶磁器・土器

古代須恵器(第49図1~3、図版8・50) 第49図1は甕の口縁部。端部は断面四角形状で、上端は平たくなり、中世須恵器の可能性もある。2・3は甕の体部である。第49図1と3はA27(本覚坊跡)での採集。

図版50-1は遡かと思われる。底部は球形状で、外面にヘラケズリが明瞭である。2~17は甕の体部である。いずれも11世紀以前の古代須恵器である。

中世須恵器(第49図4~6、図版8・50) 第49図4~6は甕の体部である。外面は3mm四方の格子タタキ、内面はナデ調整である。焼成はやや不良で、瓦質土器のように淡灰色を呈する。

図版50-18~20の外面は2mm四方の格子タタキで調整、内面はカキメで調整される。21・22は甕で、4は格子タタキを施す。23は珠洲焼の鉢の口縁部で、口縁部に波状文がみられる。吉岡康暢氏の編年V期、14世紀末から15世紀前半である。24・25は口縁部内面に低い立ち上がりを有する灯明皿、26は小型の壺と思われる。

常滑焼(第50図1・2、図版12・13) 第50図1は甕の口縁部で、口縁部は断面T字状になり、幅2cmの内傾する縁帶をもつ。上端は上方に、下端は大きく下方に伸びる。褐灰色を呈し、上端部には自然釉がかかる。13世紀である。

第50図2は頸部以上がないため壺か甕かは決め難いが、肩部の形状や胎土に黒色粒が点々とみられることは常滑焼の特徴と考えられる。体部は斜め外方へ延び、肩部で屈曲する。底部は平たく削られている。外面は縦方向のハケ調整後、ナデで仕上げられている。内面は横方向にハケが残る。13世紀である。松露谷墓地群(C地区)II群のC20からの採集。

越前焼(第50図3、図版13) 第50図3は甕の口縁部。口縁部は断面T字状で、上端はわずかに高まり、下端は下方に伸びる。13世紀である。A38(等湖院南区)からの採集。

備前焼(第51・52図、図版12・13・50~52) 第51図1は玉縁状になる甕口縁部で、乘岡実氏編

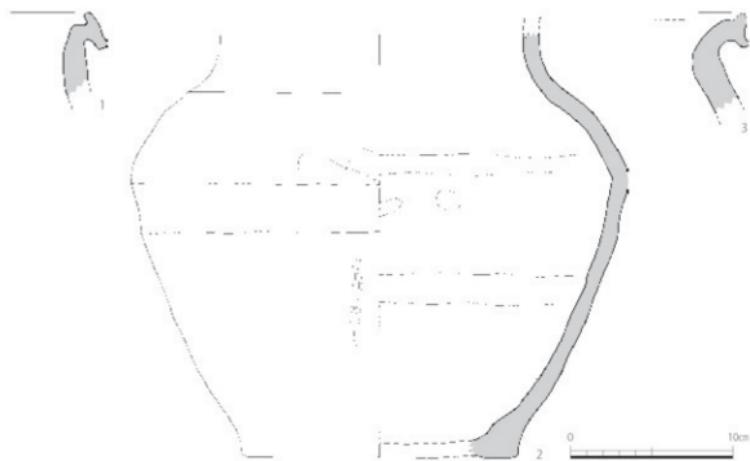
年中世3期である。2～4は甕口縁部の玉縁が扁平化するものである。2・3は真っ直ぐ立ち上がる口縁部で、2は器高89cmである。4は頸部が「く」字状に曲がり、口縁端部に折り曲げた痕跡が観察される。中世5期に属する。5の口縁部はやや外反し、外面に2本の浅い沈線を施す。中世5期～6a期である。6は口縁部が内傾し、外面に3本の明瞭な凹線を施す。中世6b期である。1は14世紀後半、2～4は15世紀後半、5は15世紀末～16世紀初め、6は16世紀第3四半期である。

第51図2はF9からの採集で、多数の土師器や中国褐釉の四耳壺とともに採集された。

第52図1は捕鉢。口縁端部は上方へ拡張され、「く」字状に内傾し、口縁帶に幅をもつ。端部は上角を強くナデにより尖り気味、外面に3、4本の沈線をもつ。内面下半に縱方向の櫛目による櫛目



第49図 須恵器 (1:3)

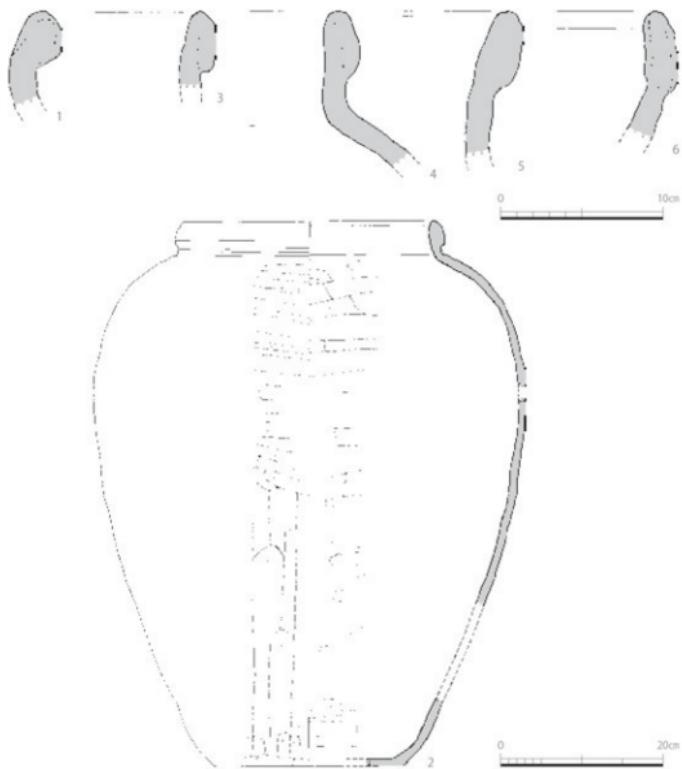


第50図 常滑焼、越前焼 (1:3)

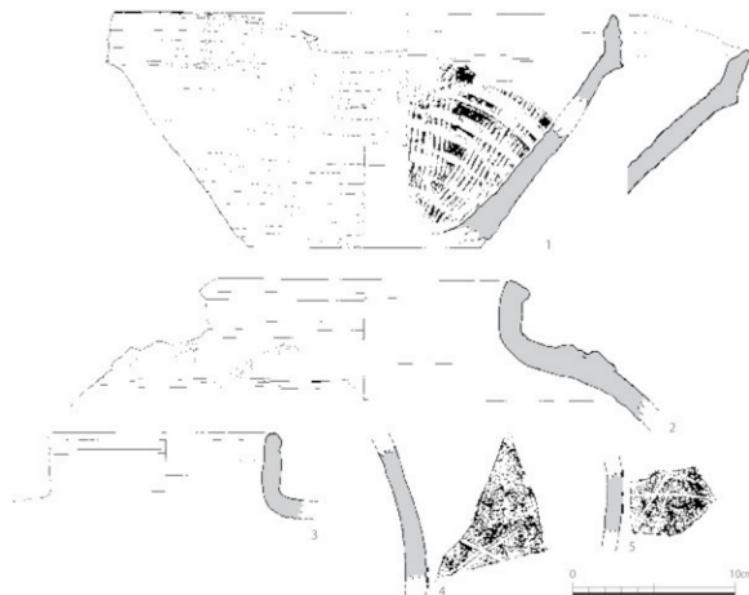
がある。中世5a期と思われる。2は四耳壺で、頸部は短くやや外傾し、口縁端部は玉縁状になる。肩部には縱方向の耳がひとつ残り、櫛描波状文が施される。中世5a～5b期に入るものである。3は壺の口縁部で、頸部は直立し、端部は小さな玉縁状になる。外面に自然釉が付着する。四耳壺の可能性がある。4・5は甕体部の破片で外面に「×」等のヘラ記号がある。

図版50-27・28は壺の口縁部。27は短い頸部が外傾し、口縁端部は小さい玉縁状になる。28は口縁部の玉縁が扁平化するもので、体部は長胴化する。29～32は擂鉢。29は口縁部で、口縁帶は幅が狭く、下端が断面三角形になる。擂目は5条以上を1単位とし、口縁部まである。近世のものと思われる。30～32は擂鉢の口縁部、体部。30は口縁帶の幅は狭く、内面に6条単位の擂目が斜め方向に入る。31は体部で、7条単位の擂目が入る。32は底部に近く、擂目が斜め方向に入る。

33は水屋甕の口縁部と思われ、頸部が「く」字状に外傾し、口縁端部は丸い。34の3つの破片はいずれも水屋甕体部で外面に断面三角の突帯をもつ。口縁部がないが、乗岡実氏の編年A類に属す



第51図 備前焼(1:3, 1:6)



第52図 備前焼 (1:3)

ると思われる。16世紀前半である。図版51-1～16と図版52-1～12は備前焼と思われる壺や甕の体部。図版51-1・2は外面に波状文を施す。

瀬戸・美濃焼 (図版52) 図版52-13は天目の体部で、内外面とも鐵釉を施すが、体部下半はかかるない。14は耳付きの小壺かと思われる。横方向の耳が付き、内外面とも鐵釉を施す。

瓷器系陶器 (図版52) 図版52-15・16は甕の体部である。胎土は粗く、にぶい赤褐色を呈する。

土師器 (第53・54図、図版12・52・53) 第53図1～4は杯である。1・2の体部は内湾して立ち上がり、器壁が厚い。3の体部は逆「ハ」字状に開く。4の体部は外方に開き、底部周縁はナデにより絞り込む。これらは口縁部が欠損しているため、時期を決め難い。

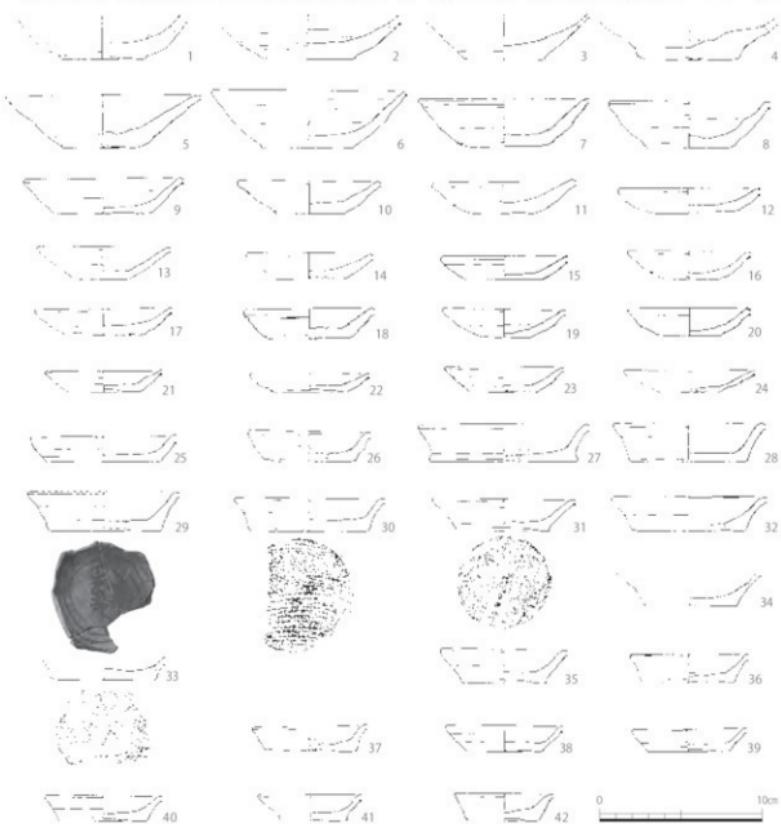
第53図5～42は皿である。5・6の口径は12cm前後。5の体部は直線的に逆「ハ」字状に立ち上がり、6は内湾気味に立ち上がる。器高は低く、器は底部が厚い。底部は回転糸切りである。皿G1類、16世紀中頃～後半である。7～9は口径9.9cm前後。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁内部はひとナデし、端部は面取りをする。底部は回転糸切り後、ナデ消している。器壁が厚いため、重みがある。7は口縁部近くの体外面に1条の沈線をもち、ほかに類例が見られない手法である。9の内面見込み端部は横ナデ後、ナデ上げしている。皿G2類、16世紀中頃～後半である。10～13は、口径8.3cm前後。皿G2類と同様に、口縁端部は面取りが見られ、器壁が厚い。皿G3類、17世紀以降である。14～20は、口径7.5cm前後。皿G3類より口径が小さい。皿G4類、17世紀以降である。

18は口縁部近くの外面に1条の沈線を入れる。21～24は、口径7.4cm前後。器高が低く、器壁が薄い作りである。皿G5類、17世紀以降である。

25・26は、体部が短く外傾して立ち上がり、25の口径8.8cm、26は7.4cmを測る。底部は回転糸切り後、ナデ消している。皿H2類、16世紀後半頃である。27～34は、体部が外反して立ち上がり、底部周縁をナデにより絞り込む。底径は大きい。口径は9.3cm前後で、ほとんどの底部は静止糸切りである。皿H3類、17世紀中頃以降である。

これら図示した在地系土師器（第53図5～42）のほとんどがF8（18点）とF9（17点）の平坦面で採集された。この平坦面は山王七仏堂のすぐ西側に位置するため、信仰的な祭器として用いられ、廃棄されたのではないだろうか。

第53図33は内面見込みに輪宝が墨書きされている。輪宝の中に、愛染明王を表す梵字「ウーン」



第53図 土師器（1:3）

がある。皿 H3 類で、17世紀中頃以降と考えられる。35～42は口径6.8cm前後で、皿 H1 類より口径が小さい。底部の切り離しは、回転糸切りである。皿 H4 類で、17世紀中頃以降である。

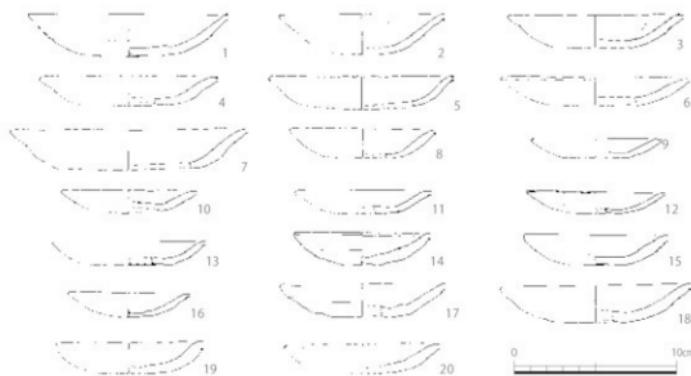
第54図1～20は京都系土師器皿である。1～7は丸底もしくは丸味をもつ底部で、口径は11～12cm程度。1は口縁端部を丸くおさめるもの、2～7は外反させるものである。1は皿I B-a 類、2～7は皿I B-b 類にあたる（第7章第4節）。

8～13は底部を平らにし、体部は直線的に立ち上がるものである。皿II A 類である14～17は丸底もしくは丸味をもち、口縁部が外反気味のもの、丸くおさまるもの、内湾気味のものがある。皿II B 類である。18～20は器壁が特に厚くなるものである。皿III類である。

これら京都系土師器皿の編年觀は、皿I B 類・皿II A 類・皿II B 類は、16世紀後半、皿III類は、17世紀段階である。図版52-17は高台付の土師器である。18～20は杯・皿、21・22は京都系土師器皿である。第54図12はC20、それ以外は、F8およびF9からの採集である。

土師質土器（第55図1、図版52） 第55図1は浅鉢形の火鉢と思われる。浅鉢IV類である。体部から口縁部は湾曲し、端部は平らとなる。外面には2条の突帯を巡らせ、間に文様をもつが、文様は磨滅のため不明である。A23からの採集である。

図版52-23は浅鉢形の火鉢である。口縁部は「コ」字状に内側に屈曲し、口縁上部は平坦になる。外面に2条のヘラ描き沈線の間に花菱文が押捺される。内面には横方向にハケメ調整が施される。24は火鉢の脚部、26は火鉢で、外面に七宝文が押捺される。



第54図 京都系土師器 (1:3)



第55図 土師質土器、瓦質土器 (1:3)

瓦質土器（第55図2、図版52、図版52） 第55図2は筒形容器の蓋か火鉢の底部である。内面にはヘラ書きがある。文字ならば「物」か「神」が想定される（平石充氏による）。図版52-27は風炉形土器の口縁部近くで、外面に1条の突線を施す。

(穴道年弘)

2 瓦

分布調査では、中世丸瓦221点（68.2kg⁽¹⁾）、中世平瓦207点（39.7kg）、近世丸瓦9点（4.8kg）、近世平瓦（桟瓦含む）63点（23.0kg）、不明96点（2.2kg）を採集した。このほか、巴紋軒丸瓦や軒桟瓦、道具瓦などがある⁽²⁾。

（1）分布状況

分布調査で最も多量の瓦が採集されたのは、根本堂地区（A地区）である。中世瓦の99%、近世瓦の80%前後がこの地区に集中している。これに対してD・E・G地区からは瓦が採集されなかった。ただし、根本堂地区に多数の瓦葺き建物があったと判断できるわけではない。瓦の重量から計算すると、中世丸瓦は約30～45枚分⁽³⁾、平瓦は約20枚分⁽⁴⁾なので、この地区にあった僧坊は瓦葺きでなく、茅葺きなどの屋根だったとみてよい。F・H地区での瓦の採集量がわずかな点もこれと符合する。

さて、根本堂などの堂宇が並ぶ根本堂地区最上段（平坦面A1～A10）では、中世丸瓦18点（3.9kg）と中世平瓦28点（3.5kg）を採集した。近世瓦は平瓦1点（0.2kg）と熨斗瓦1点のみで、ほかに石州瓦（赤瓦）の平瓦と拌瓦が計2点（0.8kg）ある。石州瓦は近代に下る可能性が高い。根本堂周辺は現在も参拝者が行き来する場所なので清掃等も行き届いており採集瓦の量は多くはないが、近世瓦がほとんど拾えない点は注目される。根本堂は、天正5年（1577）の毛利輝元による造営のあと、元禄4年（1706）の棟札が記録され、また現在の建物は18世紀中頃と推定されている（第3章第2節）。近世瓦の少なさは、江戸期の修造に際して瓦が用いられなかつたことの表れであろう。寛文4年（1664）建立の釈迦堂（棟札による）も同様だったとみてよい。

根本堂地区では、平成23年（2011）度に発掘調査をおこなったA38平坦面（等湯院南、以下「平坦面」を略す）での瓦出土量が最も多く、この地区的約1/3を占める。丸瓦82点（24.8kg）、平瓦74点（14.3kg）がある。おもに平坦面の北東斜面に堆積していた。後世になって平坦面が畑にされた時に投棄されたのであろう。中世の軒丸瓦・軒平瓦も各1点がある。瓦の年代などからみて、16世紀にはここに瓦葺き建物があったとみられる。平坦面の中央に設定した発掘調査区では少量の瓦しか出土しなかつたことや、瓦採集位置から考えると、平坦面の東北部に瓦葺きの堂があったと推測できる。

次に、丸瓦・平瓦合計で10点3kgを目安にこれを超える量の中世瓦が出土した平坦面を示すと、A16（10点、3.2kg）、A23（17点、5.8kg）、A24（24点、8.2kg）、A26（3点、3.9kg）、A27（9点、4.5kg）、A28（3点、3.1kg）、A31（12点、3.0kg）、そしてA64（99点、19.1kg）の8箇所である。これらは、A16とA26を除けば、いずれも和多坊跡（A24）と開山堂（A28）周辺とその斜面下（A31、A64）である。最も多いのが谷底部のA64であることを考慮すれば、現在、開山堂が建つA28に瓦葺きの建物があり、その瓦が周辺に散らばった可能性がある⁽⁵⁾。

A16とA26は、和多坊跡（A24）より一段高い斜面部だが、その周辺（A11～A14）にも中世瓦が分布するので、あるいは瓦を用いた堂宇があったのだろうか。

根本堂地区（A地区）以外では、C地区の奥部のC6で中世瓦が採集されていることが留意される。F地区とH地区にもごく少量の中世瓦があるが、瓦葺き建物を想定できるものではない。

（2）出土瓦の概要（第56～64図、図版54～60）

① 軒丸瓦（第56図、図版54・55）

第56図1は、左巻きの三巴紋軒丸瓦。内区と外区を圈線で区画し、巴紋の尾は圈線に接続する。外区内縁には小振りの珠紋を25個ならべる。コビキAの丸瓦を接合する。瓦当裏面の調整は丁寧である。A23採集。2は、外区だけの小破片。内外区を圈線で区画するが、巴紋の巻きは不明。珠紋は小粒で密に並ぶ。A64採集。3は、右巻きの三巴紋軒丸瓦の瓦当部片。内外区を二重の圈線で分け、内側の圈線に巴紋の尾が接続する。珠紋は小粒である。A27（本覚坊跡）採集。4は、左巻きの三巴紋軒丸瓦の瓦当部片。1よりも巴の頭部が大きく、別範。珠紋は小粒。瓦当面にハナレ砂が残る。A38（等謝院南）採集。5は、左巻きの三巴紋軒丸瓦。内外区を圈線で区画するが、珠紋は他より大粒である。外縁と外縁内面をヘラミガキし、外縁の外周には面取りがある。A64採集。

第56図6～8は、軒丸瓦の接合部破片。いずれもコビキAの丸瓦で、端面に刻み目（カキヤブリ）を入れる。6・7はA64、8はA38（等謝院南）での採集。

第56図9～11は軒丸瓦の丸瓦部で、丸瓦筒部に釘孔がある。9は、太い吊り紐痕のある「丸瓦A」（丸瓦の分類は後述、67頁）。A24（和多坊跡）出土。10も、太い吊り紐痕をもつ。A4（護摩堂跡背後）採集。11は、凹面に太さ3mm前後の細い紐痕が6段以上ならび、太い吊り紐痕をもたない「丸瓦B」。凸面は丁寧なヘラミガキ調整である。A23採集。

② 軒平瓦・軒棟瓦（第57図1～4、図版54）

1は、宝珠紋を中心飾とする3回反転均整唐草紋軒平瓦。唐草紋は各単位が連接する。瓦当の上縁をヘラケズりで大きく面取りする。頸は貼り付けか。頸の後縁に面取りはなく、頸と凸面との間には凹型台の圧痕がある。A23採集。2は、軒平瓦の左端片。内区紋様は不明。頸が剥落しており、剥離面に3条の刻み目がある。A38（等謝院南）採集。

3は、左棟の軒棟瓦。平瓦部瓦当は、五葉紋を中心飾とする3回反転唐草紋⁽⁶⁾。棟部の円形瓦當には、右巻きの三巴紋と珠紋を飾る。外縁に範端の段差がある。A34採集。4も軒棟瓦か。細い唐草紋である。脇区に「□師」の刻印がある。A38採集。

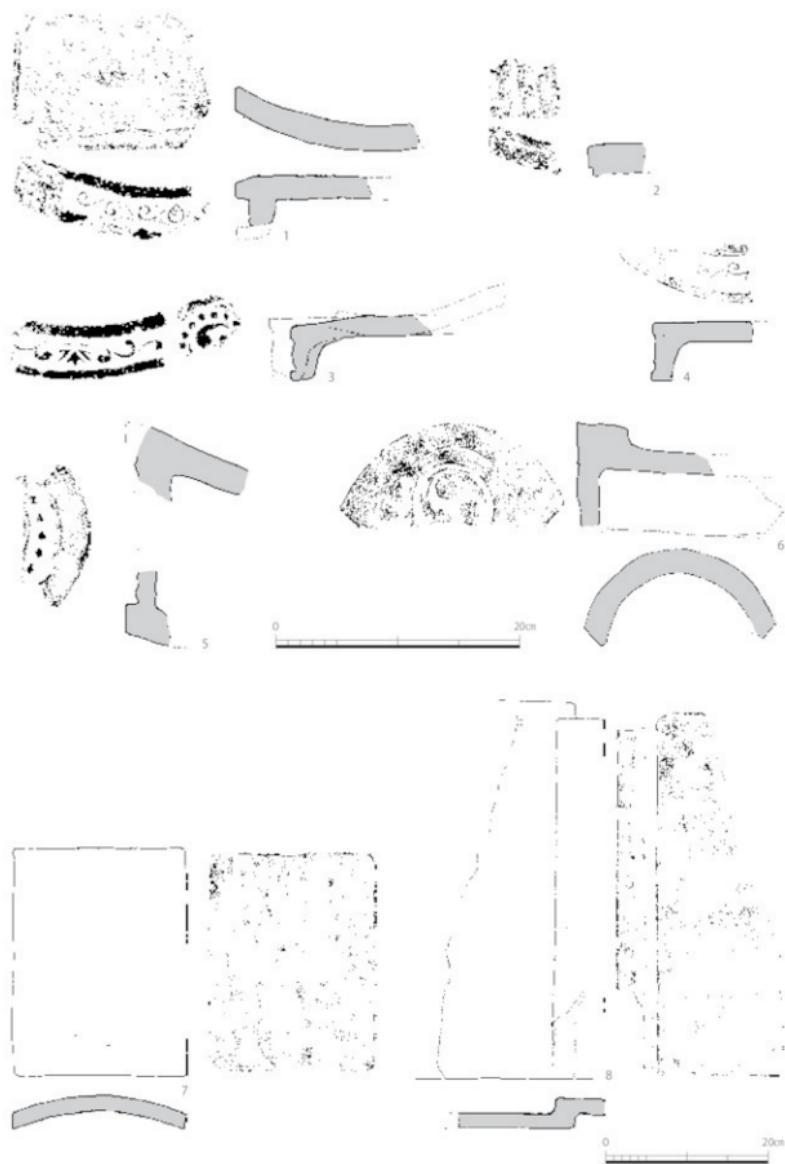
③ 道具瓦など（第57図5～8、図版54・55）

5は、三巴紋と思われる鳥食瓦。内外区の境に圈線を入れる。珠紋はやや疎らである。瓦当裏面の下半に垂帶がある。丸瓦部はコビキAの丸瓦か。A23採集。6は、扇形の瓦当面にコビキBの丸瓦が接合された棟端瓦。瓦当中央に右巻き三巴紋を押捺する。直径9.6cmの瓦范のあたりが残る。

7は、凹面に3条のカキ目を付けた熨斗瓦。長さ約9寸、幅約7寸の規格である。江戸期のものであろう。8は、右側辺に棟を取り付け、尻に釘孔をあけた大型の左棟瓦。江戸期の瓦で、塀や棟門用であろう。長さ約1尺5寸(45.2cm)ある。7・8ともにA38（等謝院南）採集。



第56図 軒丸瓦 (1:4)



第57図 軒平瓦・軒棧瓦・道具瓦など (1:4, 1:6)

④ 丸瓦（第58～62図、図版56～59）

丸瓦の分類 丸瓦は、凹面に残るコビキの違い（燃り糸のコビキAか鉄線のコビキBか）と吊り紐によつて、A～Cに分類する。

丸瓦A：コビキA、太い吊り紐痕をもつ。

丸瓦B：コビキA、太い吊り紐痕がない。

丸瓦C：コビキB、吊り紐痕がない。

このうち、丸瓦Aについては、吊り紐痕がU字形に垂れて連続するものと、波状に垂れるが玉縁側と広端側両方に結び目や捩じりを作つてW字形にみえるものとに細分した。前者を丸瓦A1、後者を丸瓦A2とする。丸瓦Aには、筒部の幅15～16cmの大型品と幅13cm前後の小型品がある。

第58図は丸瓦A1の大型品。筒部の幅は14.9～16.0cm。凸面はタテ方向の綱叩き痕をヨコナデし、さらにタテ方向にヘラミガキで仕上げてある。筒部凹面は側面に幅広い面取りがあることが共通する。

1～3は玉縁部を残す資料。玉縁部凹面は、筒部から連続する面取りのほかに、端部と側面にも面取りのヘラケズリが入る。側面の面取りが段部の隅だけに及ぶ。この特徴は、丸瓦Aにほぼ共通するようである。2は筒部凹面にヨコ方向（円周方向）の縫い目痕があり、3は玉縁部凹面に同様の縫い目痕がある。1・2はA38（等湖院南）、3は開山堂北東のA31での採集品。4は、広端部の資料。広端部凹面にも幅広い面取りのヘラケズリがある。A28（開山堂）での採集。5・6は筒部片。ともにA24（和多坊跡）での採集。

第59図は丸瓦A1の小型品。筒部の幅は12.8～13.6cm。凸面調整と凹面の面取りの手法は大型品と共通する。ただし、玉縁側面の面取りは、1～4が段部の隅だけに及ぶのに対して、5は段部側面全体に及んでいる。この面取りの手法は丸瓦A2に多く見られる特徴である。なお、1～5とも凹面にヨコ方向の縫い目痕を残す。5の復元長は32.8cm。1と2がA28（開山堂）、3がA38（等湖院南）、4が開山堂の南A64、5がA27（本覺坊跡）の採集。

第60図は、W字形の太い吊り紐痕をもつ丸瓦A2の大型品。筒部の幅は15.5～16.4cm。吊り紐痕の形状のほかに、玉縁側面の面取りが段部の側面全体に及ぶ点も、丸瓦A1との相違点である（第59図5を除く）。玉縁部を残す1～4は、いずれも玉縁部凹面にヨコ方向の縫い目痕を残す。3は、コビキAが左上がり方向をとる点で特異。1は全長33.7cmある。1はA38（等湖院南）、4はA51、2・3・5は和多坊跡西上方のA26での採集。

第61図1～4は丸瓦A2の小型品。1は、吊り紐痕が玉縁部にも及んでいる。また、玉縁部凹面に粘土板合わせ目Sが観察できる。筒部凹面には幅1.3cmの細い板による内叩き痕⁽⁷⁾がある。3は筒部凸面の綱叩き痕がかなり明瞭であり、一方、4は丁寧なタテミガキが特徴。1の筒部幅13.2cm、全長29.0cm。2はA24（和多坊跡）、それ以外はA38（等湖院南）での採集品。

第61図5～8は丸瓦Aの断片。5・6は玉縁部側面の面取りの手法からすると丸瓦A2の可能性がある。6の玉縁部凹面にはヨコ方向の縫い目痕が7段ある。採集地点は、5がA14（根本堂北上方）、6がA27（本覺坊跡）、8がA24（和多坊跡）、7のみH地区のH2である。

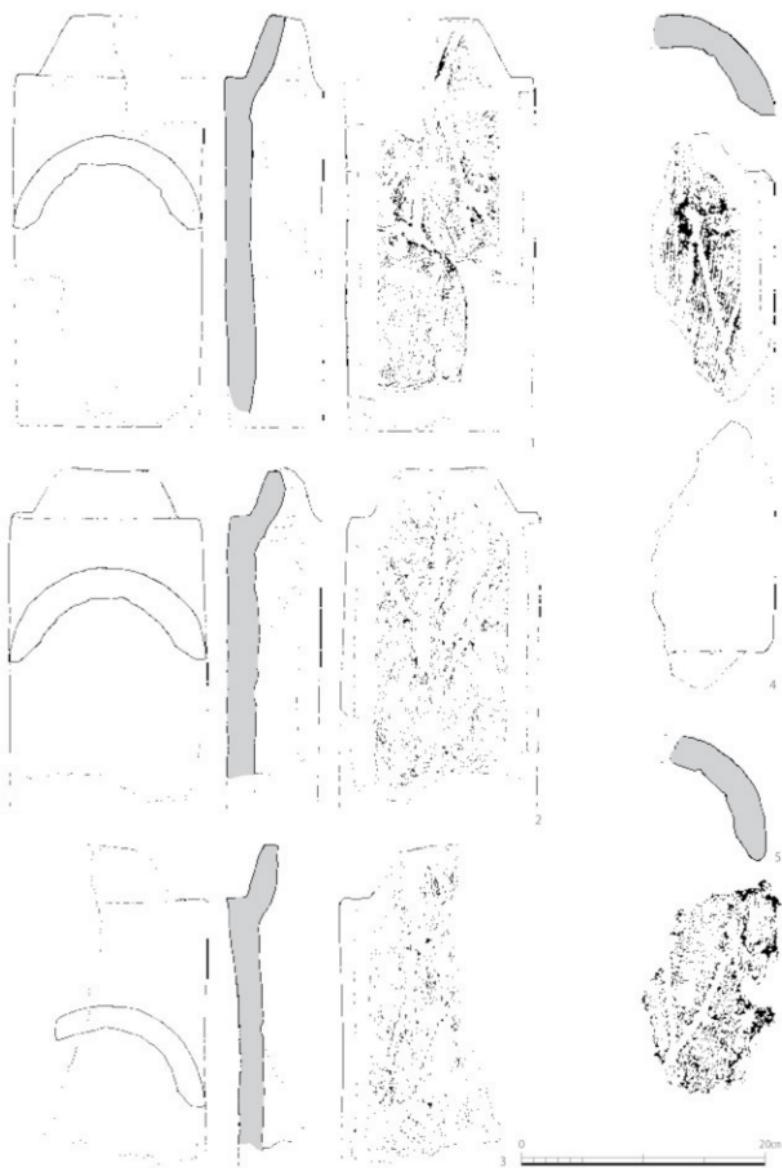
第62図はコビキBをもつ丸瓦C。筒部凹面に吊り紐痕がなく、丸瓦A・Bにくらべ玉縁が短い。



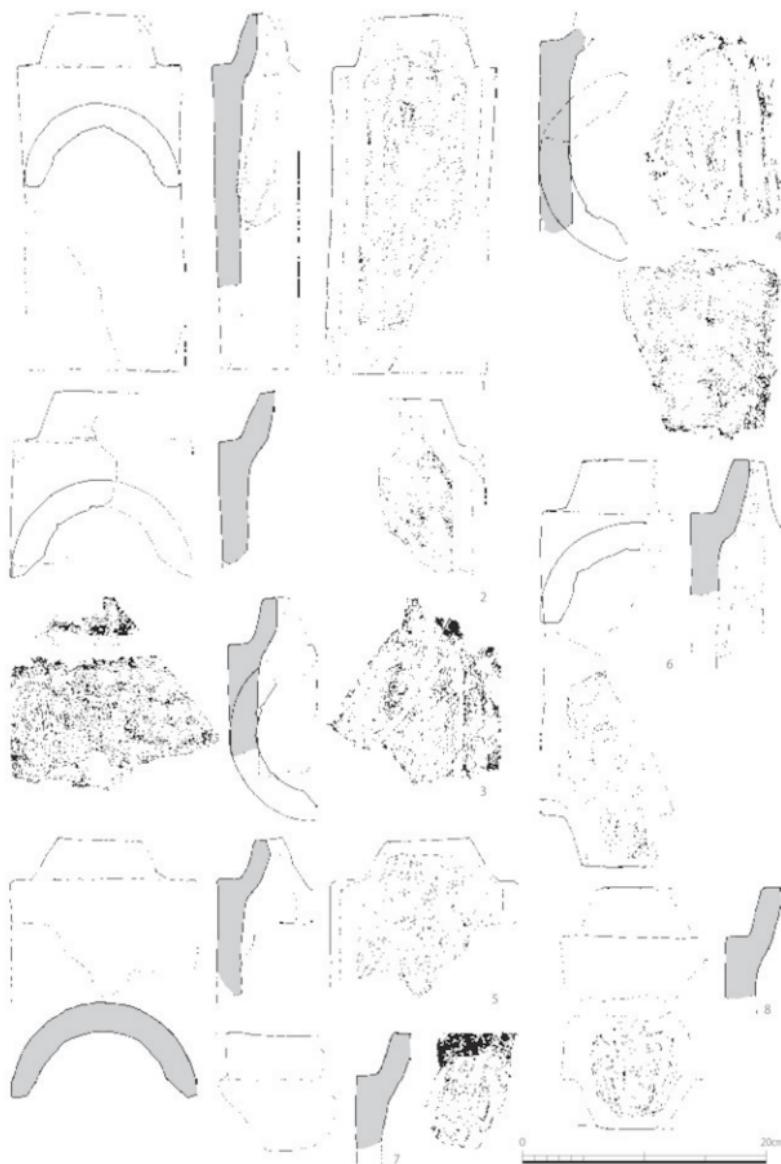
第58図 丸瓦 (1:4)



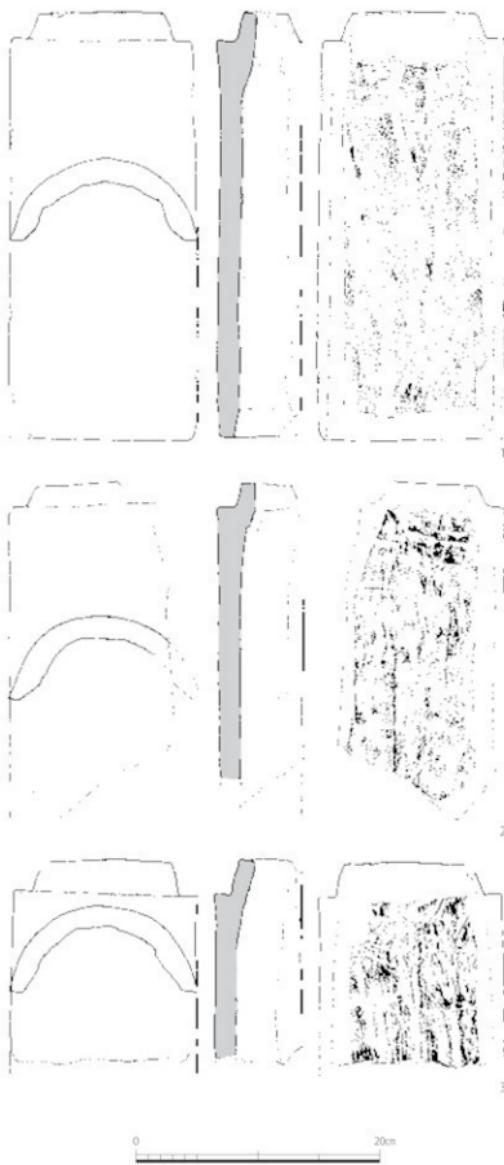
第59図 丸瓦 (1:4)



第60図 丸瓦 (1:4)



第61図 丸瓦 (1:4)



玉縁部側面の面取りは、筒部に及ばないか（1・2）、それ自体を欠く（3）。

1は模骨に被せた布袋が大きく開いている。2は筒部凹面に内叩き痕がある。3は玉縁部凹面にヘラミガキがある。1はA11（堂司庵跡）、2はH2、3はA13（宝藏跡）での採集品。

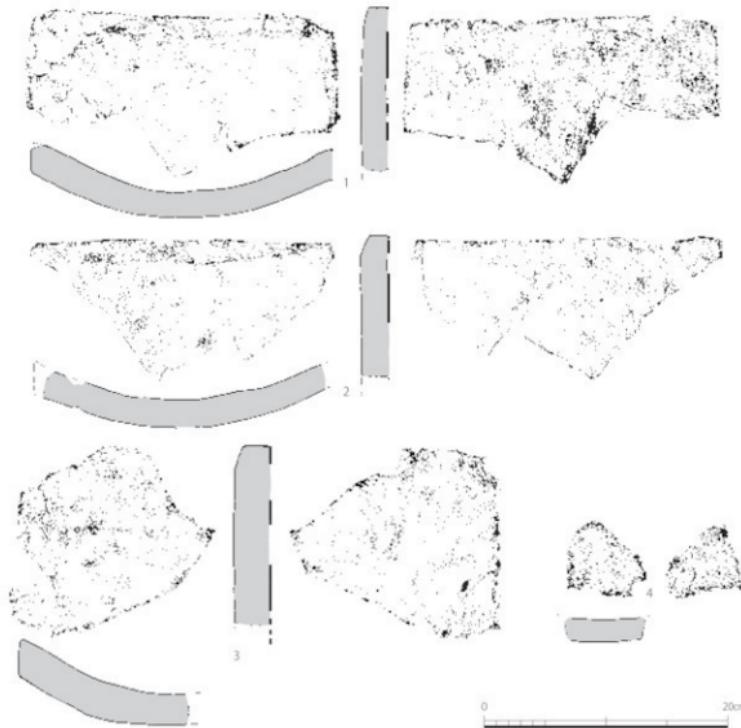
第62図 丸瓦（1：4）

⑤ 平瓦（第63・64図、図版59・60）

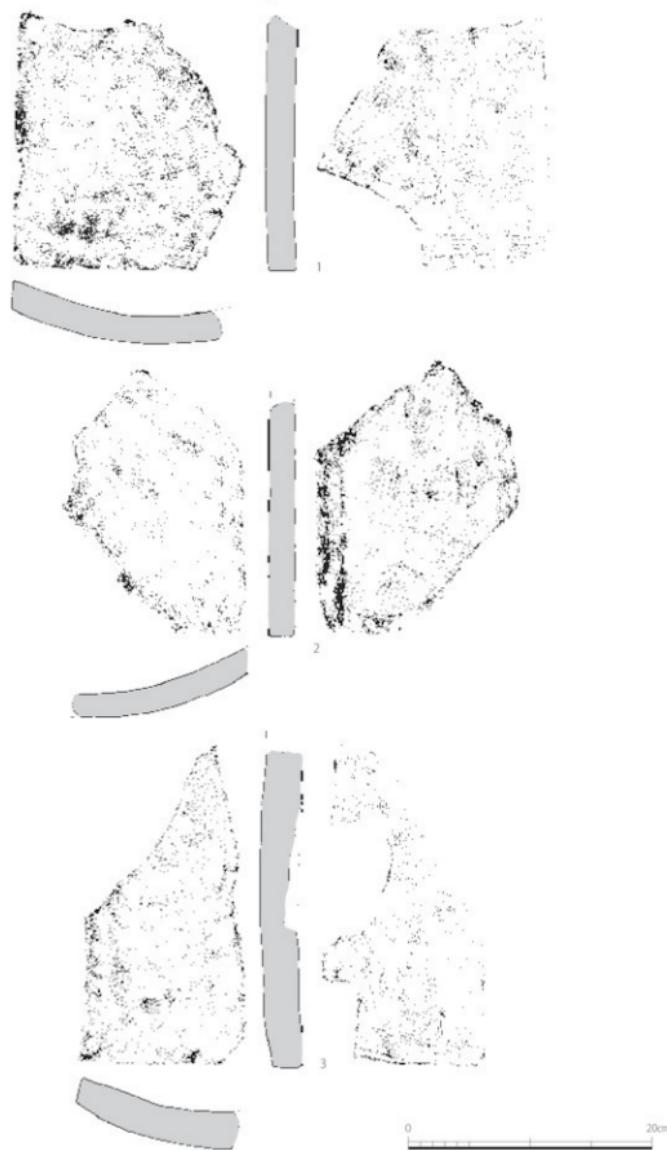
平瓦は7点を図示した。成形時の痕跡として、まれに凹面に布庄痕、凸面にタテ縛叩き痕をとどめるものがあるものの、ほとんどは凹面のミガキ調整、凸面のナデ調整で消し去られていて観察することが難しい。狭端と広端とは、凹面側に浅い面取りがあるかないか、つまり面取りのヘラケズリをおこなう狭端（第63図1～3）と、それがない広端（第64図1・2）とに区別することができる。1の狭端幅は25.0cm。第63図1・2と第63図1はA38（等湯院南）、第63図3はA16（和多坊跡北西上方）、第63図4と第64図2はA28（開山堂）での採集である。

なお、平瓦はいずれも丸瓦A～Cと同じようにイブシ焼きで表面が黒化しているが、第63図4のみイブシ焼きの痕跡がない。

第64図3は、凸面をハケ目調整した平瓦の広端部片。広端部はヨコ方向、ほかはタテ方向のハケ目である。鰐淵寺での採集・出土資料ではこれ1点のみだが、佐太前遺跡（松江市鹿島町）からは一定量が出土している（第7章第5節参照）。A64での採集。



第63図 丸瓦（1:4）

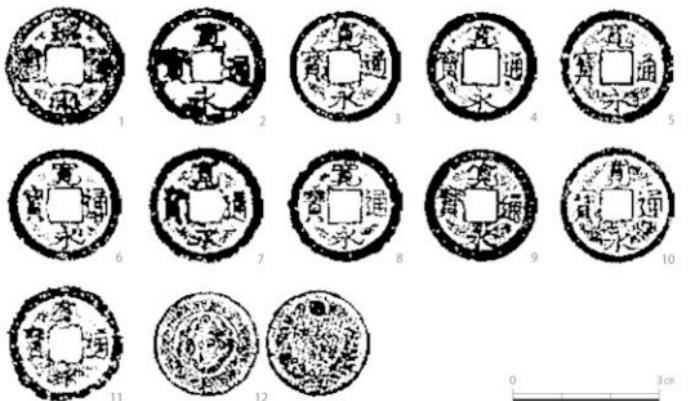


第64図 平瓦 (1 : 4)

3 錢貨 (第65・78図、図版61)

12枚の錢貨を採集した。そのうち、北宋錢は根本堂地区南調査区を設定したA38平坦面での「皇宋通寶」(篆書、初鑄1038年、第65図1)1点のみ。ほかに、A19平坦面(念佛堂跡)で1期の「寛永通寶」(古寛永)1枚(2)を採集した以外は、新寛永(3~11)と明治の銅貨(12)であった。

(花谷 浩)



第65図 錢貨 (1:1)

4 石製品 (第66図、図版61)

第66図1は滑石製の温石である。長辺5.8cm、短辺5.4cm、厚さ1.2cmで、中心部に径7mmの円孔がある。角を欠いた方形状で、滑らかである。石を温めて布類でくるみ暖を取ったのである。A27からの採集である。

図版61-1は頁岩製の硯で、海側の破片かと思われる。2・3は砥石。2は凝灰岩製で、4面とも磨耗痕がある。3は安山岩製で、表面の破片である。4は砂岩製の石臼である。



第66図 石製品 (1:3)

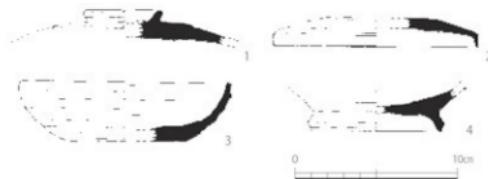
5 大寺谷遺跡採集遺物 (第67図、図版51)

大寺谷遺跡では、工事中発見の須恵器16点と土師器11点があった。その内、須恵器4点について掲載した。また、大寺谷広瀬での分布調査において、須恵器31点と土師器2点を採集した。いずれも小片であった。

第67図1は輪状つまみがつく蓋、2のつまみは欠損し、口縁端部が垂下する蓋である。3は体部

が内湾し、口縁部も内湾気味となる杯である。ロクロ痕が明瞭である。4は高台を有する壺の底部である。出雲国府跡出土の土器編年第2型式の7世紀後葉～8世紀第1四半期にあたる（福田編2013）。

（穴道年弘）



第67図 大寺谷遺跡出土遺物（1：3）

註

- (1) 以下、重量は小数点以下1桁の概数を示す。
- (2) 本書では、凹面にコビキA（糸切り痕）をもつ丸瓦を「中世瓦」とし、コビキB（鉄線切り痕）をもつものを「近世瓦」と呼称することとした。山陰でのコビキAからコビキBへの転換時期について山崎信二氏は、「慶長2年（1597）頃はコビキAが残るが、慶長6年（1601）までにコビキBになった地域」に分類している（山崎2012）。また、伊藤創氏は、米子城における飯山地区と港山地区から出土した瓦を比較して、西伯耆におけるコビキAからコビキBへの転換を慶長元年～3年（1595～98）と推考している（伊藤2009）。飼瀬寺で採集・発掘された「中世瓦」のほとんどは、山崎氏の編年で「近世Ⅰ期・Ⅱ期」に該当するものであり、本書でいう「近世瓦」は「近世Ⅲ期」以降の瓦である。本来ならば、「織豊期の瓦」「江戸期の瓦」と呼び分けるべきであるが便宜的な呼称として用いる。
- (3) 丸瓦1枚の重量は、富田城跡（安来市）出土例を計測して1.5kgから2.5kgを基準とした。
- (4) 平瓦1枚の重量は、佐太前遺跡（松江市）出土例を計測した2.2kgを基準とした。
- (5) 唯一、古代的な平瓦片が採集されたのがA28平坦面だという点も示唆的である。
- (6) 五葉紋を中心飾とする軒平瓦は松江城にもあるが、唐草紋の巻きが逆転し、第1単位が上に巻き込む点が異なる（飯塚2001、120-123頁）。
- (7) 半乾燥後に瓦のゆがみを補正するための調整痕。細い板や丸棒で叩く例がある。

参考文献

- 飯塚康之 2001『史跡松江城跡整備事業報告書（第2分冊：調査編）』松江市文化財調査報告書第88集－2、松江市教育委員会。
- 伊藤 創 2009「米子城のはじまりについて－飯山の石垣と採集瓦から－」『島根考古学会誌』第26集、135～144頁。
- 福田陽介編 2013『史跡出雲国府跡9 総括編』島根県教育委員会
- 山崎信二 2007「近世瓦におけるコビキB（鉄線切り）出現の年代」『考古論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社

第5節 分布調査の成果概要

分布調査の成果概要を、下記に周辺エリアと別所の中核地域に分けて述べることとする。

1 周辺エリア

これまで、唐川地域に北院、大寺谷地域に南院があったとする考え方があったが、今回の調査により、これをほぼ完全に否定し、鰐淵寺現境内地を中心とする中枢地域に、北院と南院が存在すると考えるに至った。このことを証左する根拠は下記のとおりである。

まず、唐川地域の分布調査では全く遺物が拾えなかった。また、唐川では地元に伝承がなく、かつ古い土器等を拾ったなどの事実もない状況から、遺跡として認知できる場所ではないと結論づけた。唐川にかつての北院があったという仮説は、考古学的には成立し得ないとみて間違いないと考える。

次に大寺谷地域については、広瀬と呼ばれている地に礎石建ちの規模の大きい建物があり、それがかつての大寺であろうことが明確となった。しかし、鰐淵寺の南院にあてることはできないであろう。なぜならば、鰐淵寺は南北両院統一前の嘉暦元年（1326）、大火に見舞われ、20数年後の正平10年（1355）に本尊である薬師と千手を新造したとされている。もし大寺谷が南院だとすると、本尊である薬師如来は焼失しているはずである。つまり、現存する平安時代の大寺薬師の薬師如来坐像（重文）は、鰐淵寺とは関係ない可能性が高いと推論できる。よって大寺谷が南院ではないと結論づけることができる。

2 別所の中核地域（第8～17表、第68～78図）

122箇所確認した平坦面のうち、墓地および50m以下平坦面を除くと、平坦面数は90箇所となる（『科研報告』）。かつて鰐淵寺には最大で80坊程度の僧坊があったとされるが、中枢地域でその数に足る平坦面を確認したことになる。また、礎石を有する平坦面（可能性を含め）は19箇所を確認しているので、多くの箇所には何らかの施設があった可能性が高い。以下、時代を追って成果概要をまとめる。なお、各平坦面の消長は第14～17表で示したとおりである。

（1）古代（第68図）

11世紀以前に位置づけられる古代の須恵器を35点確認した。境内での活動が開始された時期を示す遺物である。第68図の分布図を見ると、根本堂地区（A地区）では、A56を北端とし、A37を南端とする南北約400mの範囲に分布している。なかでも根本堂地区北部にある開山堂の建つ丘陵（A28）周辺のA22・A23・A27（本覚坊跡）、A64で採集されており、A28（開山堂）を取り巻く形で確認されたことが注目される。南部でもA34（密嚴院跡）やA39（等渕院跡）にややまとまりがあるようである。また、C地区（松露谷地区）においても谷奥のC6で採集した。古代から広範に活動していたことが明らかとなった。

（2）中世前半（第69～71図）

12世紀から14世紀頃を示す遺物に中世須恵器、白磁、青磁がある（第69～71図）。その分布は、

古代須恵器と似ているが、さらに拡大された範囲にみられる（第69～71図）。この時期の遺物が、北部ではA28（開山堂）・A24（和多坊跡）などを中心に分布することは前代と変わらないが、南部ではA44（淨觀院跡）・A33（現成院跡）・A34（密嚴院跡）・A42（洞雲院跡）などを中心に分布し、古代よりはわずかに北へ寄ってより集中度が高くなっている。この事実から、周縁地域での踏査結果（本章第2節）と合わせ、南院と北院がともにここ根本堂地区に存在し、つまり、A28・24を中心とするエリアが北院で、A44・33・34・42を中心とするエリアが南院であったと推論できるのではないだろうか。また、浮浪滻地区F1や松露谷地区C5においても白磁を採集しており、この時期の活動範囲が一層拡大した状況がうかがえる。

（3）中世後半（第73～76図）

15世紀から16世紀の状況は、備前焼、青磁、青花などの陶磁器類に示されている（第73～75図）。根本堂地区（A地区）では分布が広範囲に広がっている状況がうかがえる。特に備前焼は、北部のA23・27、南部のA37・38、その間のA45・47などで多く採集された。これは南北両院が統一され、根本堂を中心にひとつにまとめたことを表わしているものと考えられる。

この時期の陶磁器分布における一つの特徴は、A地区（根本堂地区）中央のA32（恵門院跡・覺城院跡）で備前焼甕や青花が採集されたことである。ここには江戸後期に2つの僧坊が並立していたことが知られる。ところが、この平坦面ではそれ以前の遺物が採集されず、土地利用の開始は中世後半と考えられる。谷に面して小規模な平坦面があったかもしれないが、それ以前には谷地形の状況を残していく場所を、中世後半に大きく埋めて広い僧坊敷地を造成した可能性を示唆する。おそらく、根本堂が成立したとされる14世紀に根本堂の所在する最上段平坦面を形成するのに合わせて、平坦面を造り出したのではないか。中世前半およびそれ以前の遺物が根本堂周辺やA32では確認されないのはそのためではないかと考える。

また、浮浪滻地区では3,300点を超える中・近世土師器を採集し、内面に輪宝を墨書した土師器1点を確認した。その性格については明確ではないが、京都府向日市長岡京跡第415次調査例（向日市埋文センター2003）や宮崎県都城市都之城跡主郭部の調査例（都城市教委1991）を参考にすれば、地鎮祭具であった可能性もある。また、褐釉四耳壺を採集したことでも重要で、経筒として使用した例があることから周辺に経塚が存在した可能性を示唆する。いずれも何らかの特別な祭祀が行われていた可能性を示しているが、この点は発掘調査の成果で明らかにしていくことになる。

根本堂地区や浮浪滻地区とはまったく性格を異にするのが松露谷地区である。ここでは14世紀に石塔（墓塔）が造立し始められ、15世紀以降、その数が大きく増加する。鰐淵寺境内の中で、墓域として利用された地区である。

この時期に新たに加わる遺物が瓦である。中世瓦は、最上段の根本堂周辺や上段、中段でも採集される（第76図）。根本堂のある最上段平坦面では、陶磁器類は少ないが瓦は多いことから、僧坊は立地せず、寺院の中心堂宇のみが建立されたと考えられる。また、A28（開山堂）からの流れ込みと考えられる瓦が、開山堂の南側下方のA64の北側斜面で大量に確認できた。現在の開山堂に瓦葺きの堂宇が存在した可能性を示す。また、南側のA38（等謝院南区）についても平坦面下斜面に中世瓦が

堆積していたので、瓦葺きの建物が建っていたと想定できる。

(4) 近世(第77図)

近世陶磁器は、全域から出土している。100点以上の多量出土地点は和多坊跡南部のA25・34(密巖院跡)・A64である。中世末から近世初期に、鰐淵寺では僧坊数が12坊まで減少し、近代までその構成が続く。僧坊は12坊であるが、宝蔵や竹林庵などの関連施設も各所にあり、境内全域で活動が行われていたのであろう。

3 小結

唐川地域と大寺谷地域にそれぞれ北院、南院が存在しないことを周辺エリアの踏査で示し、80坊前後あったとされる僧坊数に足る90箇所の比較的広い平坦面が確認できたことにより、現境内地に南北両院が並存していたことを明らかにした。さらに採集した遺物を集計し(第10~13表)、分布図(第68~77図)に反映することにより、北院と南院が境内でそれぞれ独立していた時期と、その後、南北両院が統一した時期の状況を示す成果が得られたことは大きい。

さらに、別所中枢地域の分布調査によって、約9,000点もの遺物を採集した。古代からの遺物が採集できたのは、連綿と続く鰐淵寺の歴史を物語るものだろう。特にA地区の開山堂をとりまく地域で古代須恵器が採集できたのは、開山堂周辺の丘陵が古代以来一つの拠点となっていた可能性を示唆する。周辺の木がない状態ならば、開山堂から鰐淵山誕生の端緒である浮浪滝が見通せた可能性があるが、そうであるならば、開山堂の丘陵が鰐淵山成立の原点であった可能性も考えておく必要がある。

中世前半の僧坊は、北院と南院がそれぞれ分かれて存在した様相を示し、根本堂が成立した14世紀に谷部であった根本堂下面部が埋められて、新たに僧坊として利用された可能性を指摘した。今後可能ならば、発掘調査等を行い、明らかにせねばならない項目であろう。

C地区(松露谷地区)は、14世紀代から墓域となっており、それが現代まで連綿と続いている。F地区(浮浪滝地区)では、F8、F9で3,300点を超える夥しい数の中・近世土師器を採集した。その中には、地鎮祭祀の可能性が高い遺物や経塚の存在を示唆する褐釉四耳壺も含まれており、16世紀から17世紀に上段の山王七仏堂周辺で行われた祭祀に伴う遺物であると想定される。祭祀空間としてF地区が利用されていたことが推定できる。

今回行った分布調査では、鰐淵寺の悠久の歴史を物語る遺物群が、現境内地の中枢地域(特にA・F地区)に大量に保存されていることを認識した。これまで述べてきたように、まさにそれが鰐淵寺の歴史である。今回の分布調査は、僧坊のあり方や境内での活動の様子など、発掘調査だけではつかめない事実を解明する大きな役割を果たした好事例といえるだろう。

(石原聰・野坂俊之)

参考文献

- 向日市埋蔵文化財センター 2003「長岡京跡第415次(寺戸町梅ノ木)」「向日市埋蔵文化財報告書」第59集
都城市教育委員会 1991「平成2年度 遺跡調査概報 都之城跡(主郭部)」「都城市文化財調査報告書」第13集

第10表 分布調査採集遺物集計表（A地区）(1)

平 面 形 状 番 号	名 称	貢 稿 面 集 合												國 土 面 集 合											
		白 稿						青 稿						青 花						國 土					
		明・基		E		不 明		白		青		花		白		青		花		土		耕			
		H	N	V	VI	IX (A)	E	白 基	四 邊	白 基	青 基	白 基	青 基	白 基	青 基	白 基	青 基	白 基	青 基	土 基	耕 基	土 基	耕 基	土 基	耕 基
A-1	日本家																								
A-2	田端																								
A-3	新潟夏																								
A-4																									
A-5	須磨堂																								
A-6	宇多羅神社・宮行里																								
A-7	稻荷社																								
A-8																									
A-9																									
A-10	寺内所																								
A-11	聖光庵																								
A-12																									
A-13	宝藏																								
A-14																									
A-15																									
A-16																									
A-17																									
A-18																									
A-19	金仏堂																								
A-20																									
A-21	金仏塔																								
A-22																									
A-23																									
A-24	和多坊																								
A-25																									
A-26																									
A-27	本覚坊																								
A-28	山寺																								
A-29	千玉堂																								
A-30																									
A-31																									
A-32	東門院・足城院																								
A-33	圓成院																								
A-34	空福院																								
A-35																									
A-36																									
A-37																									
A-38	(等割院南区)																								
A-39	等割院																								
A-40																									
A-41																									
A-42	圓通院																								
A-43	通心院																								
A-44	中興院																								
A-45																									
A-46	千玉堂																								
A-47																									
A-48																									
A-49																									
A-50																									
A-51																									
A-52																									
A-53																									
A-54	心経院知(本堂)																								
A-55																									
A-56																									
A-57																									
A-58																									
A-59																									
A-60																									
A-61																									
A-62																									
A-63																									
A-64																									
A-65	本坊																								
A-66	副主院																								
A-67																									
A-68																									
A-69																									
A-70																									
A-71																									

平面番号 現在日常的に使用されている平面図(掃除がされており遺物の採集が困難)

■ 採集点数 10 点以上

■ 採集点数 10 点未満

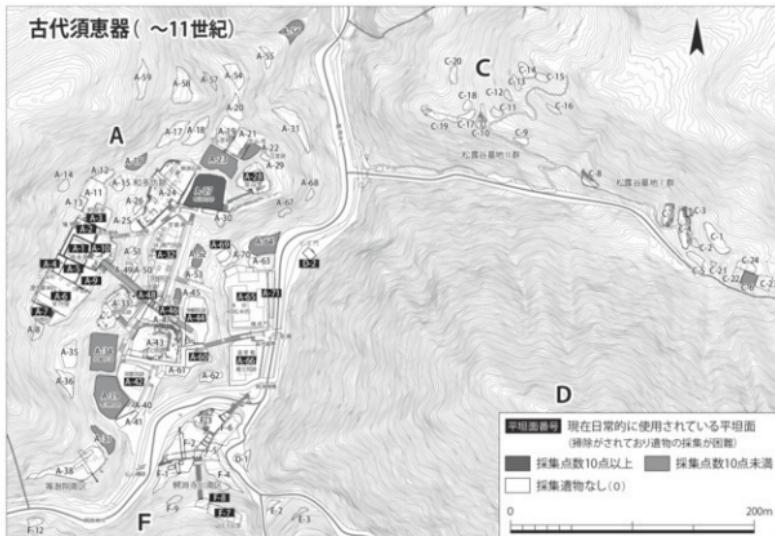
C+H地区及び()内は任意の名称

第11表 分布調査採集遺物集計表（A地区）（2）

第12表 分布調査採集遺物集計表（C～F・H地区）（1）

平坦面番号 現在日常的に使用されている平坦面(掃除がされており遺物の採集が困難)
C・H地区及び()内は任意の名称

第13表 分布調査採集遺物集計表（C～F・H地区）（2）



第68図 採集遺物分布図(1)



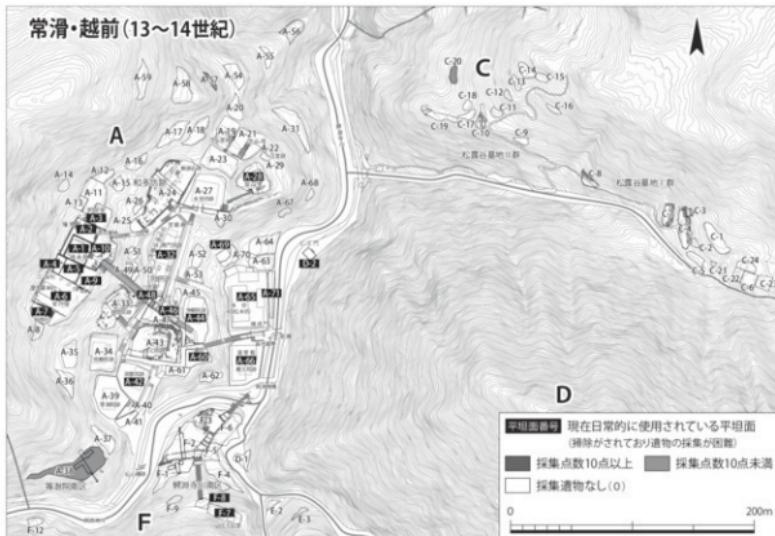
第69図 採集遺物分布図(2)



第70図 採集遺物分布図（3）



第71図 採集遺物分布図（4）



第72図 採集遺物分布図（5）



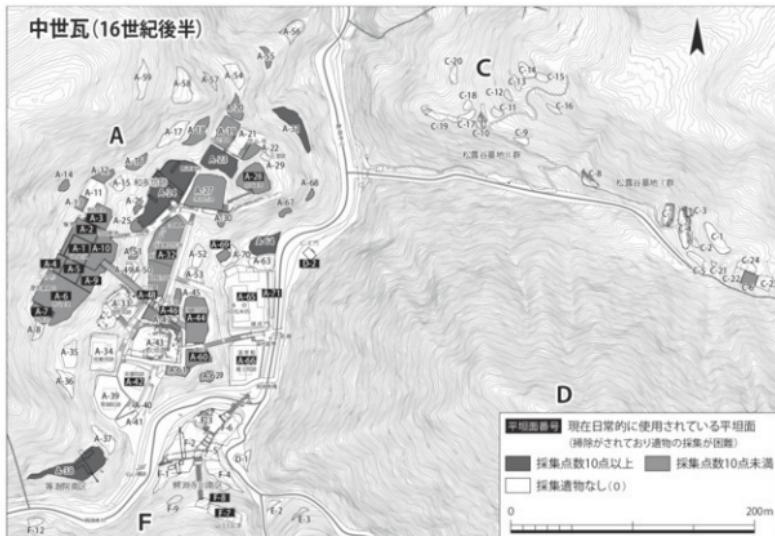
第73図 採集遺物分布図（6）



第74図 採集遺物分布図（7）



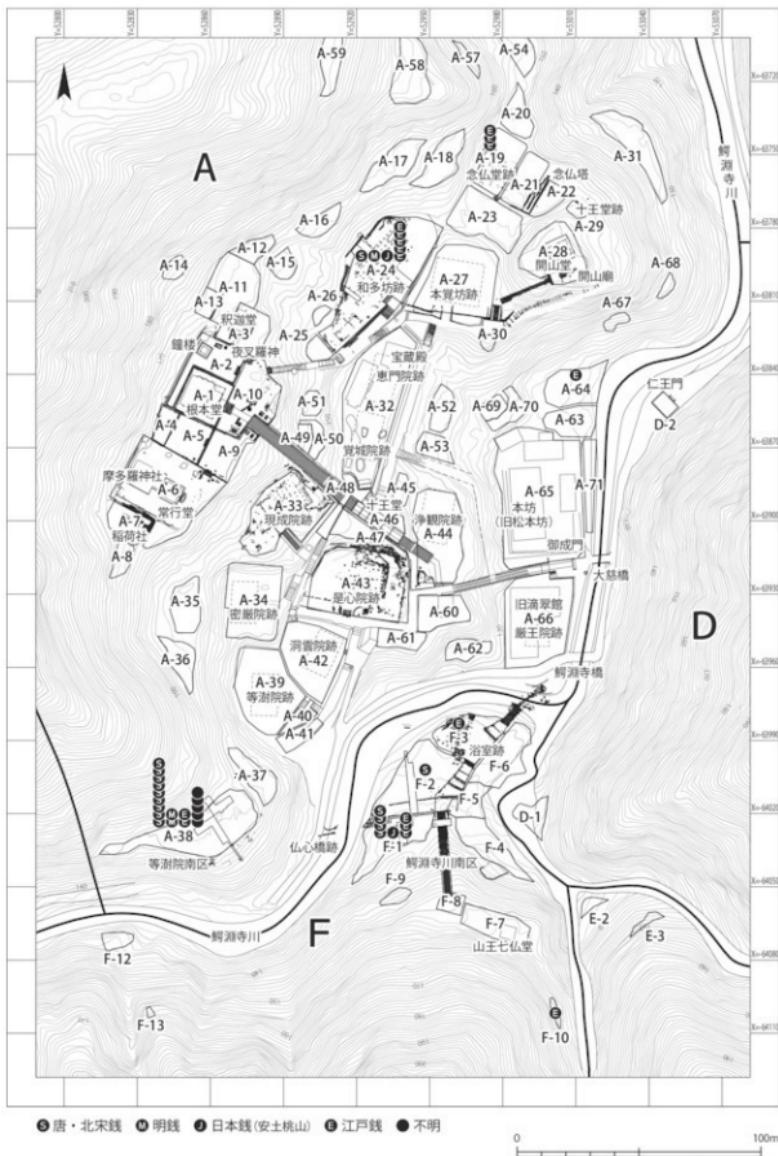
第75図 採集遺物分布図（8）



第76図 採集遺物分布図(9)



第77図 採集遺物分布図(10)



第78図 採集および発掘調査出土銭分布図 (1:2,000)

第 14 表 平坦面の消長 (A-1 ~ 31)

平成面 番号	名 称	平安前期 9C~10C	平安中期 10C~11C	平安後期 11C~12C	鎌 貞 12C後~14C前	室 町 14C後~15CB	戦 国 15C~16C	江 戸 17C~19C	明治 19C	昭 和 20C	備 考
A-1	根本堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-2	鐘楼							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-3	积迦堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-4								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-5	護摩堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-6	摩多羅神社 官行堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-7	稻荷神社							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-8											
A-9								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-10	接待所							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-11	堂司庵/ 竹林庵							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-12								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-13	宝建							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-14								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-15								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-16	古代漆器							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-17					中世漆器			五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-18								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-19	空仙堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-20								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-21	空仙塔群							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-22	古代漆器							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-23	古代漆器							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-24 和 多 坊	古代漆器				五 昭和4-5年(昭和4年)改修			五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
					五 昭和4-5年(昭和4年)改修			五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
	古代漆器				五 昭和4-5年(昭和4年)改修			五 昭和4-5年(昭和4年)改修			明治38年(1905) 損失
A-25								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-26								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-27	本覚坊							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-28	開山堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			現存
A-29	十王堂							五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-30								五 昭和4-5年(昭和4年)改修			
A-31					五 昭和4-5年(昭和4年)改修			五 昭和4-5年(昭和4年)改修			

字形表示 現在日常的に使用されている平假名（構成されており植物の採集が困難）

■：現在日常的に実行されている下塗り（構造としての）運動の実施範囲

■A：通商に伴う日本開拓の時間 ■B：明治・大正時代、開拓取引がいつの時間

治療薬の副作用による副作用

第15表 平坦面の消長 (A-32~62)

平坦面番号	名 称	平安前期 9C~10C	平安中期 10C~11C	平安後期 11C~12C	鎌 食 12C後~14C前	室 町 14C後~15C前	戦 国 15C後~16C	安土 桃山 16C後	江 戸 17C~19C	明 治 19C後	昭 和 20C後	備 考
A-32	善門院 冥44院							御室、東社、五 古今图解、ADP-5				寛永院(明治21年(1888) 接失 遷門院(明治38年(1905) 流失)
A-33	現成院				中世汎用	御室			古今图解、ADP-5			昭和(明治)まで存続か
A-34			古代遺跡		中世汎用	御室		古今图解、ADP-5				昭和(明治)まで存続か
A-35					別庭、中世汎用	御室		古今图解				
A-36									古今图解			
A-37					平安汎用	御室、御机		古今图解				
A-38	等 游 院 南 区	近世 汎用			古代遺跡、美山社 古墳	中世汎用、御室 御室	御室、御机		古今图解			
A-39	等游院		古代遺跡					御室	古今图解、ADP-5			昭和(明治)まで存続か
A-40				奈良院					古今图解			
A-41					平安汎用	御室、御机		古今图解				
A-42	清音院				古代遺跡	御室			古今图解、ADP-5			昭和(明治)まで存続か
A-43	星心院				古代遺跡	御室		古今图解、ADP-5				平成19年(2007)解体
A-44	淨觀院				別庭、中世汎用	御室、御机 五		古今图解、ADP-5				明治43年(1910)までに滅失
A-45		古代遺跡	古墳	御室	御室、御机 五			古今图解				
A-46	十王堂					御室			古今图解			
A-47					中世汎用	御室、御机 五		古今图解				
A-48												
A-49												時期不明の土師器1点のみ
A-50					別庭、中世汎用	御室		古今图解				
A-51					御室、美山社 古代遺跡	御室 五		古今图解				
A-52				古代遺跡	古墳	御室		古今图解				
A-53						御室 五		古今图解				
A-54					御室、御室度支室			古今图解				心経院坂(南北)
A-55				古代遺跡	御室、御室度支室 御室、御室度支室		五					
A-56				古代遺跡	御室、御室度支室 御室、御室度支室			古今图解				
A-57					中世汎用、五	御室		古今图解				
A-58												時期不明の白磁、青磁、中世 土器器あり
A-59									古今图解			
A-60								五	古今图解			
A-61									古今图解			
A-62									古今图解、五			

平坦面番号 現在日常的に使用されている平坦面(消滅されており遺物の採取が困難)

印 ■■■ : 遺物による活動推定時期 ■ 線図、建造物等、聞き取りからの時期

※ 線図 A : 江戸期(16世紀後半~19世紀初)の線図 線図 B : 明治35年(1902)の線図

※ 明治期以降の遺物は基本的に採集から除外

第16表 平坦面の消長 (A-63~71, B-1~3, C-1~20)

平坦面番号	名 称	平安前期 9C~10C	平安中期 10C~11C	平安後期 11C~12C	鎌倉 12C末~14C前	室町 14C末~15C前	戦国 15C末~16C	江戸 17C~19C	明治 19C後半	昭和	備 考
A-63											
A-64								江戸期初期			
A-65	松本坊	古代遺跡		奈良	奈良 中古文書館	奈良	五	江戸期初期			現存、採集遺物なし
A-66	魔王院							江戸期中期			採集遺物なし
A-67							五	江戸期初期			
A-68							五	江戸期初期			
A-69							五	江戸期初期			採集遺物なし
A-70											採集遺物なし
A-71											採集遺物なし
B-1								江戸期初期			般若坂(推定)
B-2								江戸期初期			
B-3											
C-1	松露谷基地 I 群							江戸期初期			
C-2											時期不明白あり
C-3		古代遺跡									時期不明白あり
C-4								江戸期初期			
C-5					奈良	奈良		江戸期初期			
C-6		古代遺跡					五	江戸期初期			
C-7								江戸期初期			
C-8							五				
C-9	松露谷基地 II 群										採集遺物なし
C-10								江戸期初期			
C-11							五	江戸期初期			
C-12								江戸期初期			
C-13											採集遺物なし
C-14											採集遺物なし
C-15											採集遺物なし
C-16											採集遺物なし
C-17								江戸期初期			
C-18											
C-19											
C-20					奈良	奈良	中世・近世				

平坦面名：現在日常的に使用されている平坦面（清掃されておる遺物の採集が困難）

※ ■：遺物による活動紀定期間 ■：絵図、建物等、聞き取りからの時期

※ 絵図A：江戸期(17世紀後半～19世紀初)の絵図 絵図B：明治期(1868年～1902)の絵図

※ 明治期以降の遺物は基本的に採集から除外

第17表 平坦面の消長 (C-21～24, D-1・2, E-0～4, F-1～15, H-1・2)

平坦面番号	名 称	平安前期 9C～10C	平安中期 10C～11C	平安後期 11C～12C	鎌倉 12C後～14C前	室町 14C後～15C前	戦 国 15C後～16C	安土 16C後～17C	江 戸 17C～19C	明 治 19C後～	昭 和 1945年以降	備 考
C-21	松露谷墓地											採集遺物なし
C-22	松露谷墓地											採集遺物なし
C-23	松露谷墓地											採集遺物なし
C-24	松露谷墓地											採集遺物なし
D-1												採集遺物なし
D-2	仁王門								■■■■■	■■■■■	■■■■■	現存、採集遺物なし
E-0	藏王堂								■■■■■	■■■■■	■■■■■	現存、採集遺物なし
E-1	拜殿 行場							■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	採集遺物 (不明金属遺物のみ)
E-2												採集遺物なし
E-3												採集遺物なし
E-4	子守社 (海濱)											採集遺物なし
F-1	御 湖 寺	■■■■■		■■■■■				■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明
F-2	川 南 区	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明
F-3	浴室	■■■■■						■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明
F-4												時期不明、中世土師器のみ
F-5								■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明、延石のみ
F-6								■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明
F-7	山王七仏堂 拜殿						■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	現存
F-8							■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明
F-9					■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明 (鉄製品) 不明石製品あり
F-10	馬頭社							■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
F-11	拂手社							■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	採集遺物なし
F-12												採集遺物なし
F-13												採集遺物なし
F-14												採集遺物なし
F-15												採集遺物なし
H-1	川奥墓地											採集遺物なし
H-2								■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	時期不明

平坦面番号 現在日常的に使用されている平坦面 (消滅されており遺物の採集が困難)

◎ ■■■■■ : 遺物による活動推定時期 ■■■■■ : 絵図、建造物等、聞き取りからの時期

◎ 細図A : 江戸期(16世紀後半～19世紀初)の細図 細図B : 明治期(明治35年(1902))の細図

※ 明治期以前の遺物は基本的に採集から除外

第5章 発掘調査

第1節 地区割りと調査区の選定

1 地区割り（第79・80図）

鰐淵寺中枢域を、第4章でも触れたように、地形測量図をもとにAからHの8地区に区分けした。山の稜線や川など自然地形により区分したものである。そのうち、A地区の根本堂地区の北部および南部の二つの平坦面、F地区の浮浪滝地区北部の二つの平坦面において内容確認の発掘調査を実施した。それぞれの平坦面は、その地形にあわせてトレントを設定し、それに合わせて、グリッドを設定した。平坦面の形状を考慮し、平行もしくは直交する形でトレントを設定した。また、トレントは柱間寸法10尺に相当する幅3mを基本とし、3mもしくは2mでグリッドを区切って遺物等の取り上げを行った。遺跡の保護の観点からなるべく狭小のトレントでなおかつ、遺構、遺物の残存状況、建物跡の確認を行うこととしたため、部分的な発掘調査にとどまっている。

F地区浮浪滝地区北部のF3平坦面については、発掘調査は行わず、表面精査のみ行った。ここでの遺物の取上げは、座標軸をもとにしたグリッドによった。

2 調査区の選定

調査地点の選定は、平成22年（2010）からの当初2地点2年で想定していたが、2地点だけでは解明できないことが多いと判断できたため、平成24年（2012）に1地点を追加した。

平成22年度からの発掘調査の候補予定地として第一にあげられたのが和多坊跡である。平坦面は、後の分布調査によりA24という番号を付している。現地表面に露出した礎石が残り、江戸期及び明治期の境内絵図で和多坊として建物が描かれている場所とも合致することから、本書のなかでもA24平坦面について和多坊跡という僧坊名称を使用する。A地区の根本堂地区の北部に位置する和多坊跡は、中世の文書も豊富に残されており、その史料からも鰐淵寺の中心僧坊として、極めて重要な位置を占めていたと考えられる。

平成23年度は、和多坊とは対称的に坊名の不明な平坦面を調査することとした。根本堂地区北部に位置する和多坊と対称的に南部に位置するこの平坦面は、A38という平坦面番号を付した。絵図からも僧坊であったか不明な平坦面であったが、非常に広く表面採集で、中世の瓦破片、中世の陶磁器類等が確認できることなどから、近世以前に何らかの施設が存在した可能性があったため、部分的な発掘調査を実施することにした。直近の僧坊跡等渕院の南側に位置し、等渕院南区という名称を使用してきたことから、便宜上この名称を使用する。

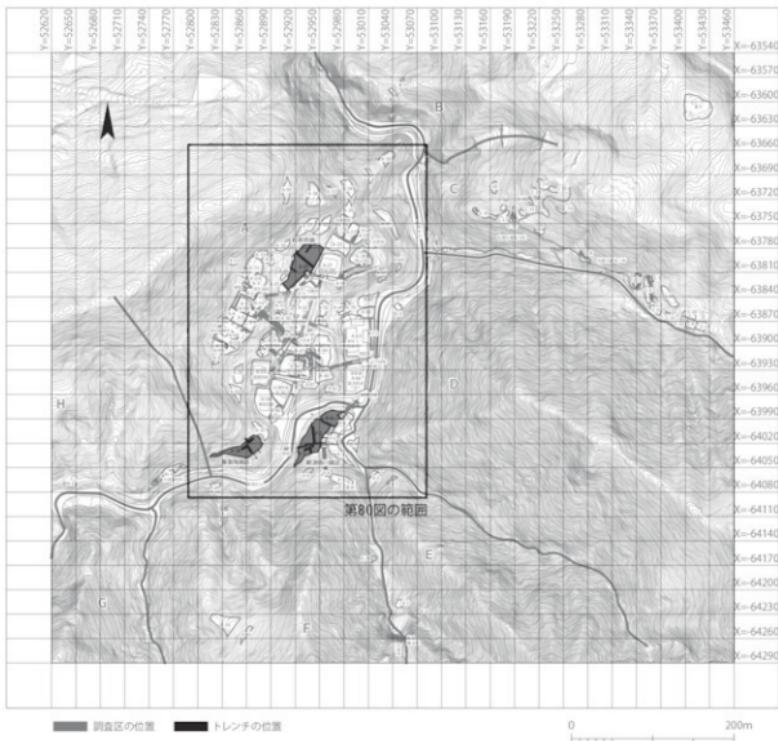
平成24年度は、鰐淵寺川の右岸を調査対象地とした。これまでの調査は絵図でも僧坊跡が確認できる根本堂地区に限って行っていたが、この地区以外にも広がっているかが課題として挙げられたの

でこの鰐淵寺南区を選定の候補とした。また絵図からも四つ堂の一つがある遙堪峠から仏心橋を渡り、この区へ入ってくことから、南からの玄関口として重要ではないかと推論された。

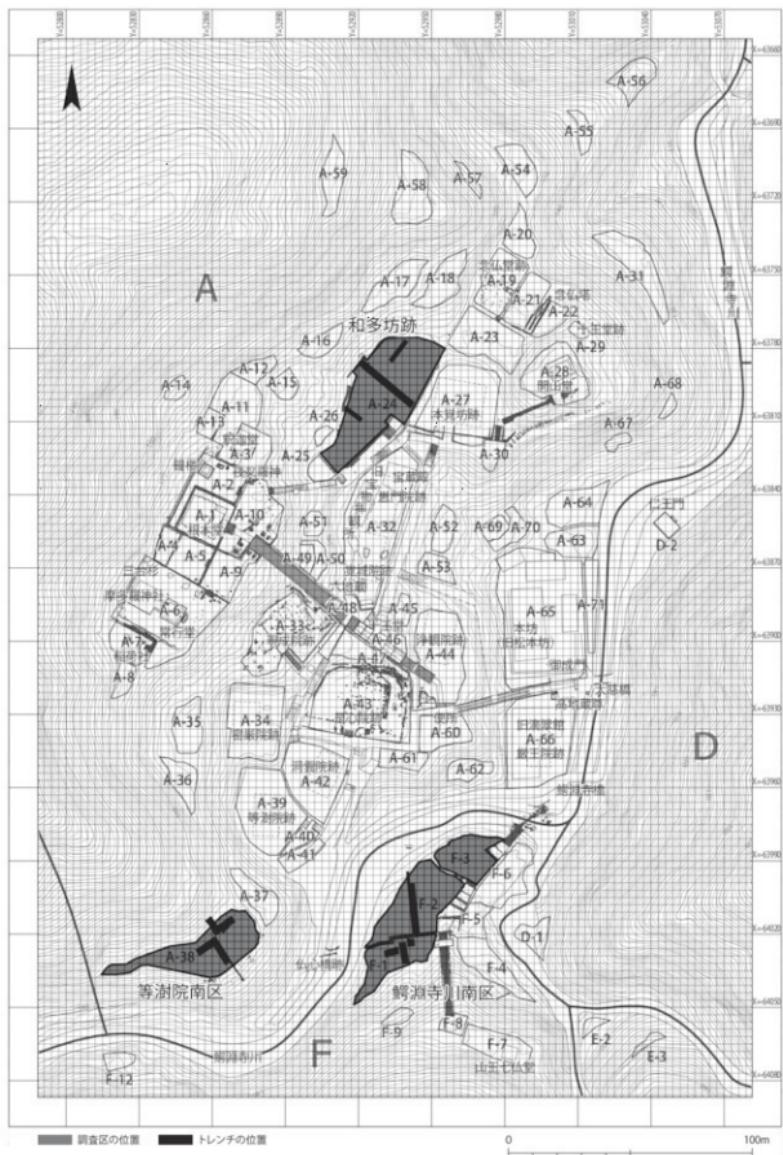
さらに、平坦面番号F1の西側、鰐淵寺川右岸の平坦面が崩落した部分での土層観察において、中世期の遺物包含層が確認され、調査前の分布調査においても中世の陶器類等が確認でき、中世期の遺構が確認される可能性があったため、F1・F2 平坦面について発掘調査を実施することとした。

一方、浴室跡(F3)については、絵図に残る浴室の遺構が実際に残存しているか、表面精査することとした。

(石原 晴)



第79図 全体地区割図（1:60,000）



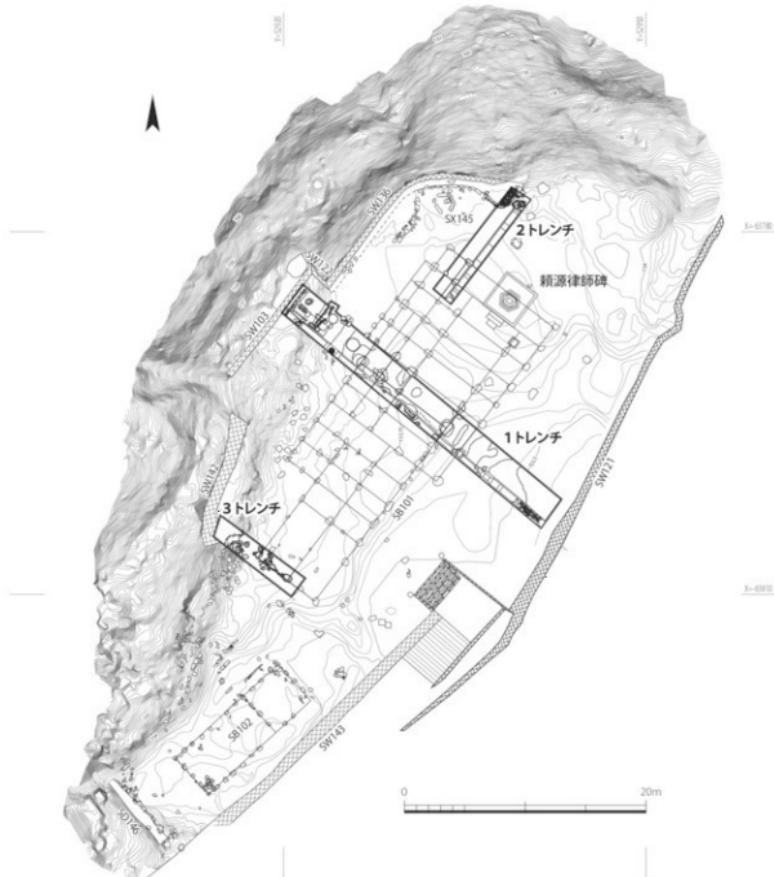
第80図 調査区と地区割図 (1 : 2,000)

第2節 根本堂地区北部での調査（平成22年度 和多坊跡の調査）

1. 調査の目的と方法 (第 81 ~ 86 図, 図版 7・30 ~ 35)

根本堂地区の北部には、江戸期および明治期の絵図（16頁第8図）に、和多坊の建物が描かれている。和多坊主屋は南北方向に棟を持つ建物で、江戸期の絵図には主屋の南側にも別棟の建物があるが、明治期にはこの建物は描かれておらず、今は礎石が残るのみである。

和多坊跡は、根本堂より約10m低い場所（上段平坦面、標高153m）にあって、その面積は1,239



第81図 和多坊跡平面図（1:400）

㎡（南北 67m、東西 28m）ある。和多坊は、明治 38 年（1905）に焼失し、敷地の一角には賴源律師碑（大正 13 年（1924）建立）が和多坊跡を見守るように立っている。

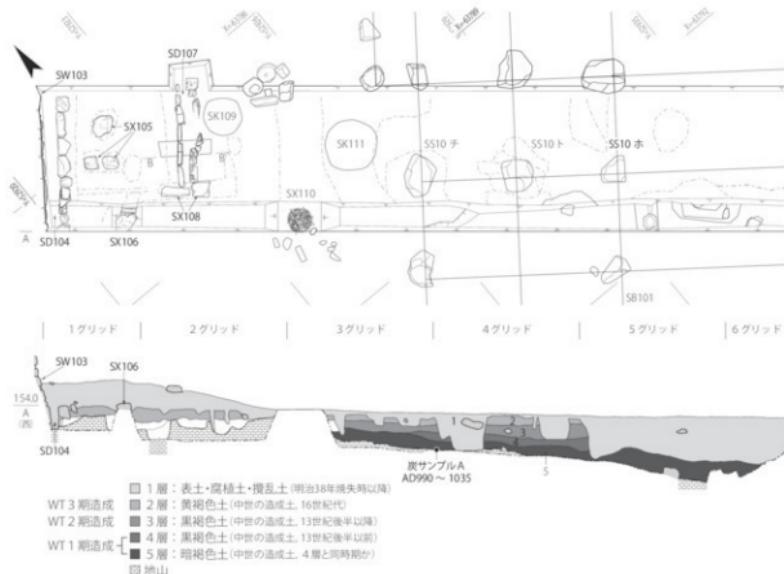
本調査は、主屋建物の規模と礎石配置や、周辺施設の状況の解明、さらには平坦面の造成過程の究明を目的とし、3箇所にトレントを設定した。

1 トレントは主屋建物の中心部で、かつ平坦面の幅が最も広い箇所、2 トレントは建物跡から庭園にかけての箇所、3 トレントは建物の南端部分と推定される箇所に各々設定した（第 81 図）。

1 トレントは、東西 28m、南北 3m（面積 84m²）、2 トレントは、南北 7m、東西 2m（同 14m²）、3 トレントは東西 7m、南北 2m（同 14m²）とした。全体の調査面積は、112m²である。各トレントには任意のグリッドを設定した（第 82～84 図）。礎石番号は第 86 図のとおりとした。なお、本節での方位は、山側を西、谷（本覚坊跡）側を東として記述する。

2. 層序（第 82～85 図）

1 層は、表土層と擾乱土層である。1・2 トレントとも 5～10cm ほどの表土の下に擾乱土層が観察できた。その規模は長さ 5m、深さ 1m と、大きく下層の堆積層に影響を与えている。1 トレント



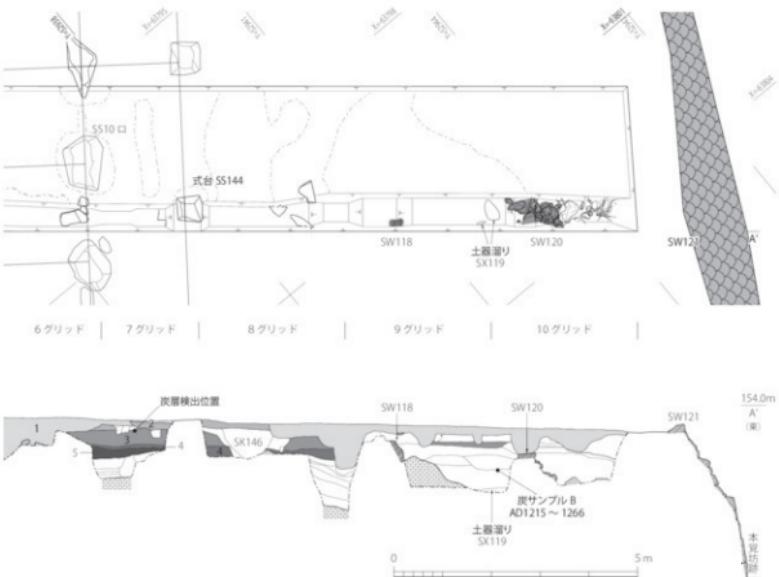
第 82 図 1 トレント平面図・土層断面図（1）（1：100）

5・6グリッドの攪乱土層には、炭化物や木舞痕のある土壁片が含まれていることから、明治38年(1905)時の火災材を片づけた土坑ではないかと思われる。

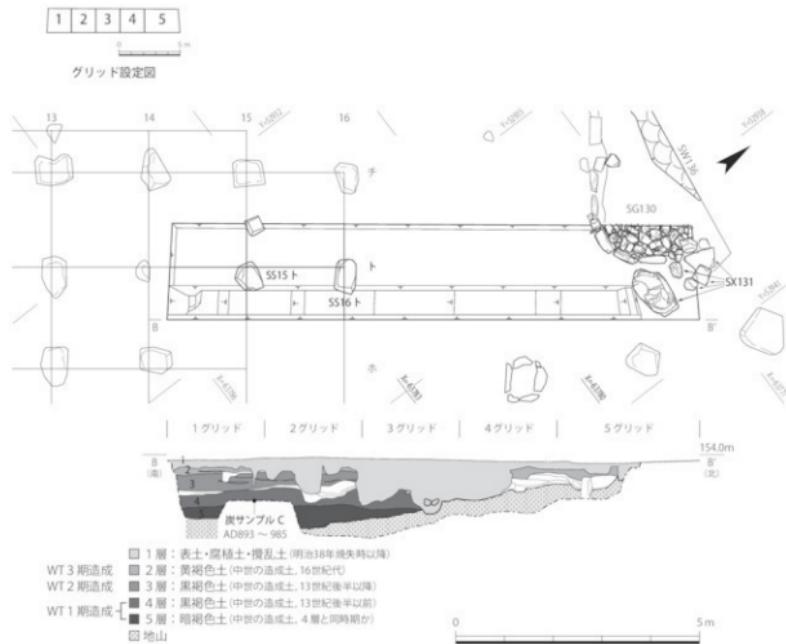
2層は、固く締まった黄褐色土である。1トレンチ1～4・7・8グリッド、2トレンチ1・4・5グリッドでは、20～30cmの厚さで確認した。この2層は最上層の造成土層で、1トレンチ西端から東へ約20m、2トレンチではほぼ全体におよぶことが確認された。したがって、東西・南北とも20mほどの範囲に広がると推定される。現地表面にみられる礎石の掘形もこの層で検出されたので、2層は最終造成土と考えられる。平坦面東辺を限る石垣SW121もこれに伴うとみてよかろう。

3層は、2層の下にある比較的締まりの良い黒褐色土である。10～30cmの厚さでほぼ水平に広がっていることを、1トレンチ3～5・7～9グリッドや2トレンチ1・2グリッドにおいて確認した。3層の東端には石垣SW120が築かれ、土留めの機能もあったと考えられる。この3層は、上面が平坦であることから第2段階の造成面と考えられる。

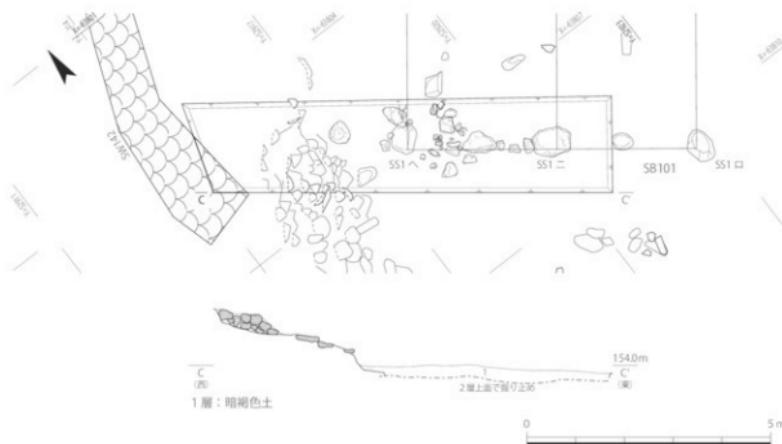
4層は3層の下にあり、1トレンチ3・4・7・8グリッド、2トレンチ1～3グリッドにおいて確認した。3層の土層と類似する黒褐色土である。20cm前後の厚さがある。5層は暗褐色土で、1トレンチ3～7グリッド、2トレンチ1～3グリッドでみられ、西側は、地山上で直接確認された。石垣SW118はこの4層と5層の東端に築かれている。4層上面が平坦な面を形成することから第1段階の造成面と考えられる。



第83図 1トレンチ平面図・土層断面図(2)(1:100)



第84図 2トレンチ平面図・土層断面図（1:100）



第85図 3トレンチ平面図・土層断面図（1:100）

以上、基本的な層序を造成面や石垣との関係からみてきた。地山上に4層・5層の土で水平に造成し、東端に石垣SW118を築く。次に3層を造成し、東端に石垣SW120を築き、最後に2層を造成し、石垣SW121を築くという三段階の造成を層序から確認できた。ここでは、後述する等湖院南区の調査と区別するために、第1段階の造成面をWT1期、第2段階をWT2期、最終造成面をWT3期と呼称する。

3 遺構（第81～90図、図版31～35）

（1）現存する遺構（第81・85～87図、図版7-30～34）

和多坊跡では、礎石建物跡2棟のほか、石垣、庭園の一部、溝を確認することができる。付属施設と推定される礎石建物跡SB102は、礎石建物跡SB101の南側に位置している。

和多坊跡の西辺は丘陵斜面に面しており、ここに高さ2mほどの石垣SW103・122・136・142が築かれている。東辺の盛土造成による段差には石垣SW121・143が積まれている。石垣の石は、すべて自然石と割石で、切石は使われていない。

礎石建物跡SB101の北西側には庭園SX145があり、平坦面の南端、礎石建物跡SB102の南側には石組溝SD146が設けられている。礎石建物の建築学的復元については、第7章第2節を参照されたい。

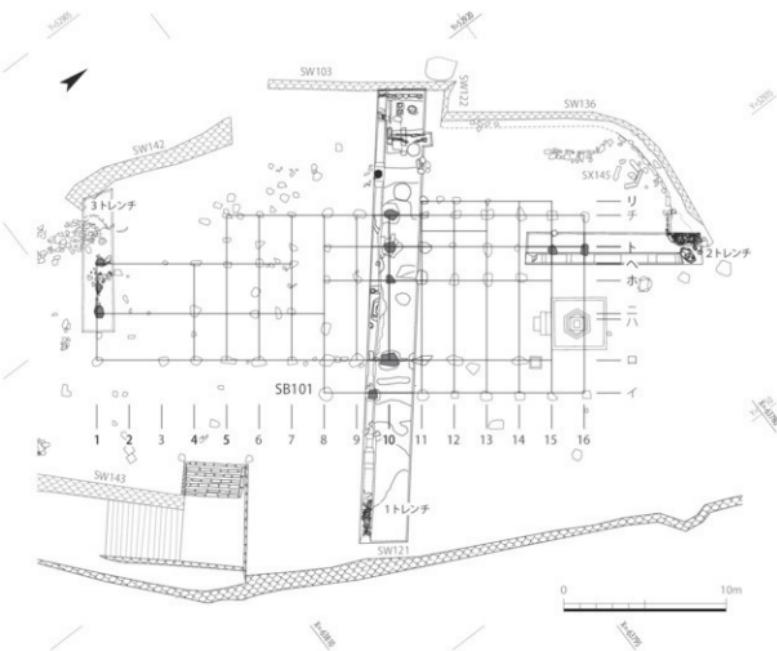
礎石建物跡SB101（第81・86図、図版7・30～34） 純石建物跡SB101は、平坦面の中心に位置する。桁行15間、梁間6間の南北棟で、玄関を東に向けた建物である。建物主屋の中心部にあたる身舎の南側に土間が取り付く。頬源律師碑が建てられたために北側の礎石(15～16通り)の残存状況は悪い。復元すると、身舎は南北8間、東西6間で、北と東に1間分の縁が付く。柱間は2m(6.6尺)を測る。突出部分は南北7間の台所、土間部分と南北4間の土間部分に分かれている。主屋南端にあたる1通りは比較的大きな礎石の間に小さな礎石を置き、支柱としている。1通りの柱間は3m(10尺)を測る。

礎石建物跡SB102（第81図、図版7・31） 純石建物跡SB101の南側に建つ小規模な礎石建物跡である。桁行12間、梁間4間の南北に長い建物で、南側8間分と北側4間分とは壁で仕切られる。建物内部には礎石がないため全面土間敷が想定され、和多坊主屋に付随する倉庫等の役割をもった建物であった可能性がある（第7章第2節）。

石垣SW103・122・136（第81・86図、図版30・31） 純石建物跡SB101の背面（西）から北側へと続く一連の石垣である。南側にある石垣SW103はほぼ直線的に延びる南北方向の石垣で、延長は11.5mである。1トレンチの西端で埋没していた。石垣最下段から5段目までを確認した。ここでの高さは石組溝の底部から2mある。

石垣SW122は、石垣SW103の北端と石垣SW136をつなぐ東西方向の石垣。延長2.5m、現状で確認できる高さ0.95～1.25mを測る。東端部の裾に池跡SG130がある。

石垣SW136は、石垣SW122の東端から北に延びて庭園SX145の背後にかけて東へと湾曲する石垣。延長20m、高さ0.9m前後を測る。



第86図 SB101平面図(礎石番号)(1:300)

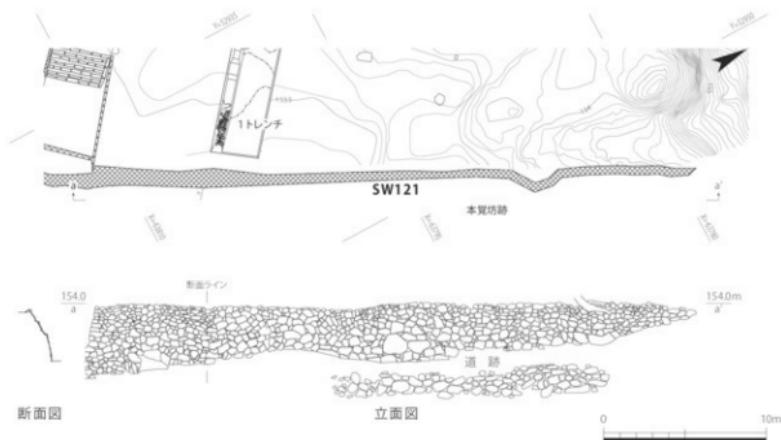
石垣 SW142 (第81・85・86図、図版32) 建物跡SB101の南西側斜面に築かれた石垣。石垣SW103とは3m離れ、その間に斜路が通る。延長11.5m、現状の高さ0.6～1.6m。一部が著しく崩壊している。

石垣 SW121 (第81・86・87図) 础石建物跡SB101の東側、本覚坊跡との間に築かれた石垣。延長51m、最高3.6mを測る。石積みは、基本的には野面積みで、一部に谷積みがみられる。上層は幾度かの崩壊によりかなり積み直しされている。出角は算木積みである。中央部の裾には、幅1mほどの道跡があり、その東肩にも高さ1～2m、長さ17mの石積みがある。

石垣 SW143 (第81・86図) 平坦面の南東側に築かれた石垣で、石垣SW121との間に坊への入口がある。延長40m、最高3.1mで、根本堂と連絡する階段から和多坊跡に通ずる道沿いに築かれる。

庭園 SX145 (第81・86図、図版34) 建物跡SB101の北西に位置する庭園。背後の丘陵との境に石垣SW136が巡っている。現況では池と思われる石敷遺構や所々に配置されたであろう石が見られる。

溝 SD146 (第81図) 和多坊跡平坦面の南端にある石組溝。溝の長さ10m、幅0.7mを測り、径30cm前後の石で組まれている。



第87図 SW121平面図・立面図・断面図(1:300)

(2) 検出した遺構 (第82~86・88・90図、図版32~35)

礎石建物跡SB101に関わる遺構、造成に関わる遺構とその他の遺構に分けて記述する。

建物跡SB101に関わる遺構 (第82~86・88・90図、図版7・31~34)

礎石7基、方形石1基、溝2条、土坑2基、その他4基がある。

礎石・方形石 (第82~86図) 純石は、1トレンチから、純石SS10口・10ホ・10ト・10チと方形石SS144、2トレンチから、純石SS15ト・16ト、3トレンチから、純石SS1ニ・1ヘ、が確認された。純石SS10ホ・15ト・16ト・1ニ・1ヘ、以外の純石は掘形を検出した。

1トレンチ内で確認した純石 (第82・83・86図) は、建物跡SB101の身舎中央部にあたる。SS10口は、一番大型の純石で、玄関の正面に据えるべく風格がある。SS10ホ・10ト・10チは、SS10口より西へ5m(2.5間分)離れ、各柱間は2mを測る (第82・83図)。

純石と掘形の規模は、純石SS10口が110×80cm(掘形120×110cm)、純石SS10ホが55×50cm、純石SS10トが65×65cm(掘形100×90cm)、純石SS10チが85×65cm(掘形120×110cm)を測る。これらの純石の掘形の検出状況から、WT3期造成面に据えられたと判断できる。

方形石SS144は、50cm四方の上面が平らな方形石で、身舎の玄関側にある。式台の支えとして据えられた石と考えられる。掘形は北側のみ確認された。

2トレンチの純石 (第84・86図、図版34) は、身舎の北側の一の間と縁の柱を支える純石である。純石SS15トは55×50m、純石SS16トは50×45cmを測る。

3トレンチの純石 (第85・86図、図版32) は、身舎の南端に位置する純石である。SS1ニへはSB101の南西角の純石となる。SS1ニと1ヘの柱間は1.5mを測る。純石SS1ニは80×55cm、純石SS1ヘは60×50cmを測る。これらの純石の間にやや小さな間柱用の純石1基(70×40cm)が検出された。

溝 SD104（第 82・88 図） 石垣 SW103 の東側で検出された石組み溝。延長 180cm、幅 30cm、深さ 50cm を測り、石垣 SW103 に沿い長方体の割石で組まれている。敷地の西の排水路で、池 SG130 へ向かっていく溝である。東側石組みの掘形は、WT3 期造成面で検出された。

溝 SD107・SX108（第 82・88・89 図） 身舎 SB101 の西側にあり、溝の延長 200cm、幅 10～20cm、深さ 14cm を測る。石組みは、長方体の割石を南北方向に並べて、さらに南側に 2 個 (SX108) と北側に 1 個の平らな石を置いている。WT3 期造成面で溝の掘形を検出した。身舎の西側（裏側）に設けられた裏門にあたる施設であろうか。

土坑 SK109（第 82・88 図） 溝 SD107 の東側で検出された。径 80cm の円形土坑である。WT3 期造成面で掘形が検出された。遺構内は未調査である。

土坑 SK111（第 82・88 図） SK109 の東側で検出された。径 100cm の円形土坑である。WT3 期造成面で掘形が検出された。遺構内は未調査である。

SX105・106（第 82・88 図） 溝 SD104 と SD107 との間で検出された。SX105 は、平たい石を 3 点配置した石組造構で、WT3 期造成面に掘形をもつ。SX106 は、SX105 より南側へ 40cm 離れた平たい石である。これらの性格は不明である。

瓦組円形遺構 SX110（第 82・88・90 図） 円形土坑 SK111 の南側で検出された。6 枚の棟瓦を円形に巡らし、中に径 10cm 大の礫を詰めた径 50cm の円形遺構である。手水受のような施設が想定できる。

造成に関わる遺構（第 83 図、図版 33・35）

1 トレンチから石垣 2 基、土器溜り 1 基が確認された。

WT1 期造成に伴う石垣 SW118（第 83 図） 層序の項でも触れたが、4 層と 5 層の東端に築かれた石垣 SW118 である。確認された石は 1 基だけで、高さ 40cm を測る。

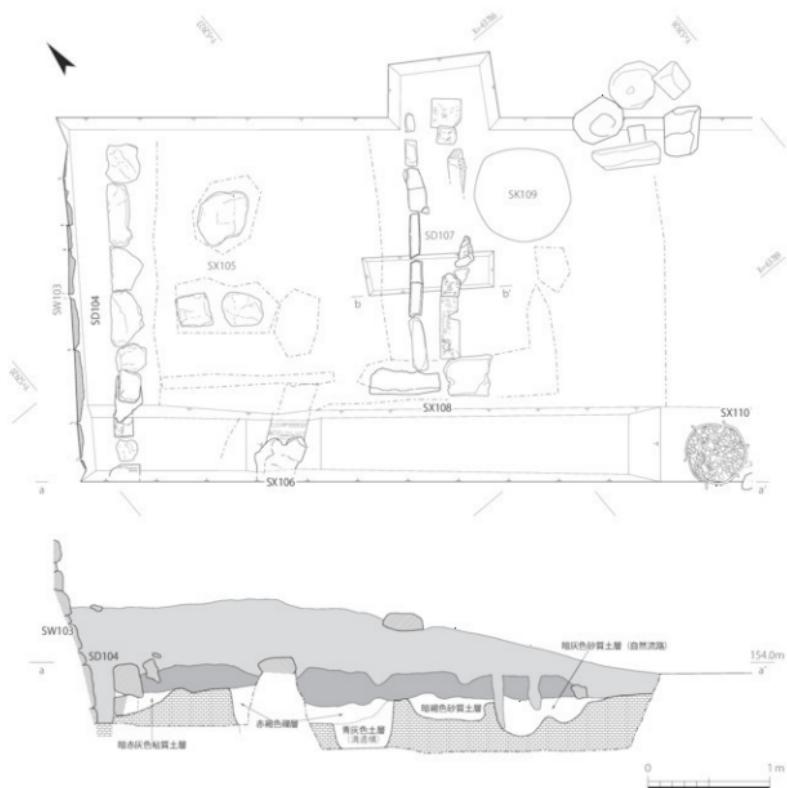
WT2 期造成に伴う石垣 SW120（第 83 図） 3 层の東端に築かれた石垣 SW120 である。石垣の高さ 60cm であるが、石垣上部は擾乱により消失した可能性がある。一部の石垣が東側の下の方に落ちた状況もみてとれた。

土器溜り SX119（第 83 図） 石垣 SW118 の東側下方、現表土下 150cm で、土器溜り SX119 が検出された。掘形は検出できなかったが、70cm の範囲の黒褐色土中に中世土師器がまとまって出土した。中世土師器は破片数にして約 100 点を数え、形態等の特徴から 13 世紀後半頃の一括資料ととらえることができる。WT2 期造成以前に形成された土器溜りと考えられる。

その他の遺構（第 84 図、図版 34）

2 トレンチの池 1 基がある。

池 SG130（第 84 図、図版 34） 礫石建物跡 SB101 の北西側、庭園 SX145 の東端に設けられた石組の池である。扁平な割石を周囲に巡らし、底に 20cm 大の石を敷き詰めている。SD104 の水を受け、受けた水は東方へ流れたものと思われる。付近の SX131 などの立石や小礫も関連する施設と思われる。



第88図 1トレンチ1・2グリッド平面図・土層断面図 (1:40)



第89図 SD107 土層断面図 (1:40)

第90図 SX110 平面図 (1:20)

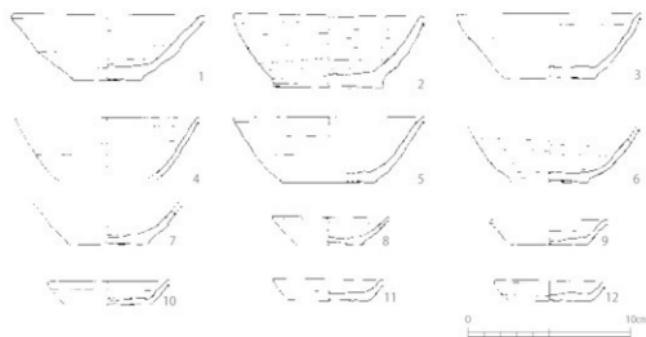
4 出土遺物（第91～99図、図版14・62～64）

ここでは、出土した遺物を遺構に伴うものと伴わないものとに分け中世遺物を中心に概要を記す。

（1） 遺構に伴う遺物（第91図、図版62）

土器溜り SX119（第91図、図版62） 1～7は土師器の杯である。1は口径11.6cm、底径4.2cm、器高4cmを測る。体部は逆「ハ」字状に開き、中ほどで少し膨らみをもつ。底部はナデにより絞り込む。底径は小さい。2～6は口径11.4cm前後、底径5.5cm前後、器高4cm前後を測り、口径と底径の差が小さくなるタイプである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめるもの（1・2）と薄く引き出すもの（3～5）がある。底部周縁はナデにより絞り込み、回転糸切り痕を明瞭に残す。

8～12は土師器の皿である。8は口径7.1cm、器高1.7cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、底部は薄い。9～12は口径6.9cm前後、器高1.4cm前後を測る。体部は短く外方へ立ち上がり、直線的なもの（8～10）とやや内湾するもの（11・12）がある。底部は回転糸切り痕が明瞭である。これらは形態的特徴から13世紀後半頃に位置付けられる（第7章第3節）。

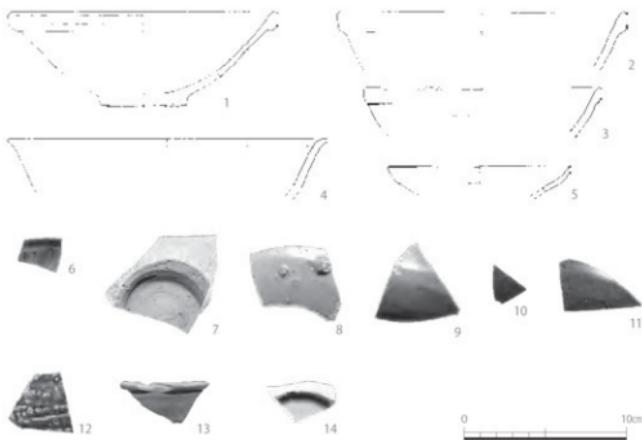


第91図 SX119出土土師器（1：3）

（2） 遺構に伴わない遺物（第92～96図、図版14・62・63）

貿易陶磁器（第92図、図版14）

白磁（第92図1～9） 1～3は玉縁状口縁をもつ碗IV類。1の高台は低く、断面は台形状を呈する。3の玉縁は薄いつくりとなる。4・6は端反りの碗V類で、6の外面に櫛描文を施す。5は皿VI類で、体部から内湾しながら口縁にいたる。7は碗VII類の底部である。底部内面の釉は剥ぎ取る。8・9は耳の痕跡と器壁の厚さからみて四耳壺の肩部であろう。いずれも釉色は灰白色を呈する。1～6は12世紀代、7は12世紀中頃～後半である。



第92図 遺構外出土貿易陶磁器（1：3）

青 磁（第92図10・11） 10は龍泉窯系青磁の碗I-2類である。内面に草花文を描く。12世紀中葉～13世紀初頭である。11は人形手の文様をもつ碗で、外面に蓮弁文、内面に草花文を描く。14世紀を中心とした時期である。釉色は黄緑色を呈する。

中国陶器（第92図12・13） 12は褐釉陶器で、外面に緑褐色の釉薬がかかる。13は中国南蛮の壺口縁部で、端部は玉線状に肥厚させる。暗灰黄色を呈する。13は13世紀代を中心とした時期、12は時期不明である。

青 花（第92図14） 14は皿E群で、内面に唐草文を施す。低い高台には砂粒が付着する。16世紀後半～17世紀初頭である。

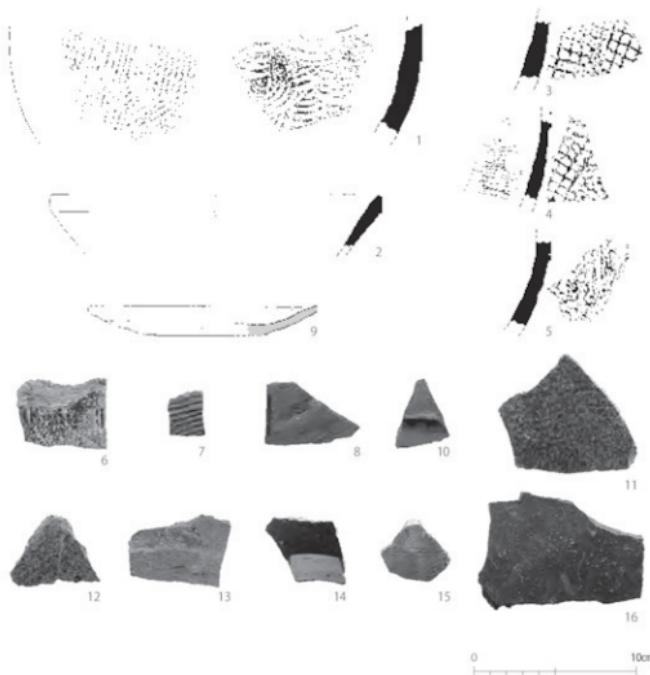
国産陶器・土器（第93～96図、図版14・62・63）

古代須恵器（第93図1） 1は甕の体部、11世紀以前である。

中世須恵器（第93図2～7） 2は東播系須恵器の鉢で、口縁端部は上方へつまみあげる。3～6は甕の体部で、亀山系の特徴を示す格子タタキが明瞭に残る。4は内面にカキメを施す。7は外面にタタキを施す甕であろうか。これらは12世紀～14世紀である。

備前焼（第93図8、10～13） 8は擂鉢で、縱方向の擂目が入る。10は水屋甕で、体部外面に突帯が1条めぐる。小片ではあるが、乗岡実氏の水屋甕編年中世6期、16世紀前半頃である。11～13は甕の体部である。11・12は外面に自然釉がかかる。

瀬戸・美濃焼（第93図9・14・15） 9は鉢皿で、口縁部内外面に灰釉がみられる。古瀬戸後期様式、14世紀後葉～15世紀中頃である。14は天目で、体部下半以外は鉄釉が施される。15は壺の体部で、3条の沈線が入る。外面に灰釉がかかる。四耳壺の可能性がある。

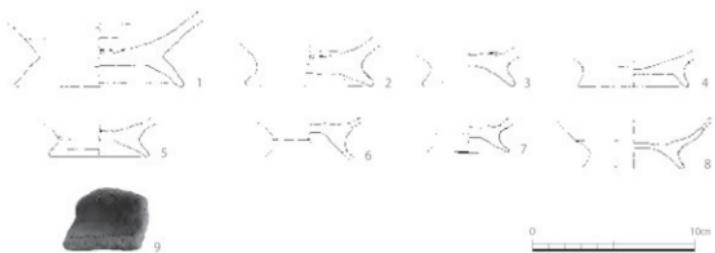


第93図 遺構外出土国産陶器・土器（1：3）

壺器系陶器（第93図16）16は底の体部で、胎土は粗く1.5mm以下の砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈する。

土師器（第94～96図）第94図1～8は足高高台をもつ壺または皿である。1は底径10.2cmと大きく、高台は高く、「ハ」字形に開く。11世紀である。2は底径7.8cm、3～8は底径6cm前後で、高台は短く「ハ」字状に開く。2～8は12世紀である。9は単純口縁をもつ古代の土師器甕である。

第95図1～9は土師器の杯である。1・2は口径16.5cm前後と大きく、体部は直線的に開き、そのまま口縁にいたる。外面はロクロ痕が明瞭で、底部は回転糸切りである。12世紀である。3～6は口径15.6cm前後を測り、体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反し先端は細くなる。外面はロクロ痕が明瞭で、底部は回転糸切りである。12世紀後半～13世紀初めである。7は口径14.2cm、器高4.9cmを測り、体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。底部はナデにより絞り込む。外面はロクロ痕が明瞭で、底部は回転糸切りである。器壁は厚い。13世紀前半である。



第94図 遺構外出土土師器（1:3）

8は口径11.5cm、器高4.1cmを測る。口径が小さく、器高がやや低い。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部もやや内傾する。底部は回転糸切りである。口径と底径の差が小さい。13世紀後半頃である。9は口径12.9cm、器高3.8cmで、体部が直線的に開き、器高が低く皿形に近い。器壁は薄く、底部は回転糸切りである。13世紀～14世紀と思われる。

10～34は皿である。10～12は口径9.9cm前後、体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。12世紀である。13・14は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反気味になる。12世紀後半～13世紀初めである。15～19も同じく体部が内湾気味に立ち上がるが、口縁部がやや内傾し、器高が深くなるものがある。13世紀前半である。

20は体部が短く直線的に立ち上がり、底径が大きく、器高が低い。21～25は口径が大きく、器高が高くなり、20～25は13世紀～14世紀である。

26～34は体部が短く外傾して立ち上がり、やや外反するもの（第95図29）がある。口径に対して底径が大きく、底部は回転糸切り後、ナデ消しているものがある。口径9.3cm前後のもの（26～29）と6.8cm前後（30～34）のものに分けられる。16世紀後半頃である。

第96図1～5は柱状高台付の杯か皿である。1の底部は「ハ」字状に開き、4は「ハ」字状に開くが厚みがある。5は低い高台状である。2、3は脚部から受部にかけてある。

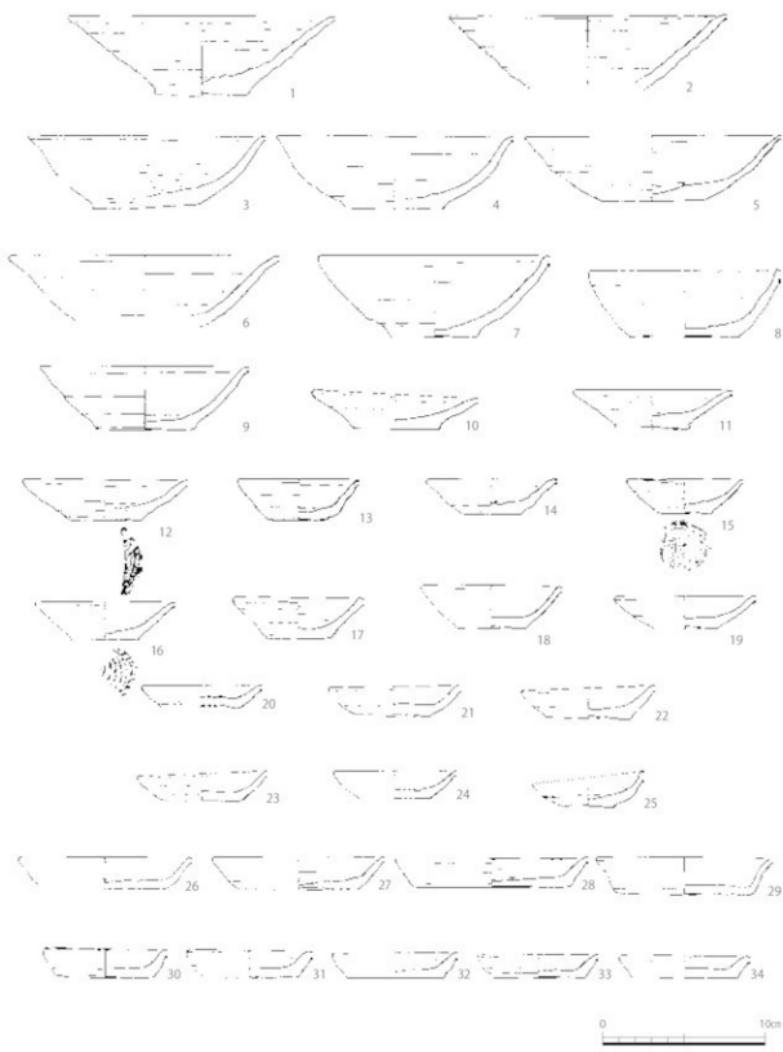
第96図6～12は京都系土師器皿である。6は口径8.1cmで、底部が平らで、短い体部となる。底部中心は上方に窪む。体部と底部の境に若干の段を認める。色調は淡褐色を呈する。13世紀である。7～9は口径7.2～9.3cmで、丸い底部から外方へ体部が開く。10は口径13cm前後で底部は平らである。体部は短く立ち上がり、口縁端部はやや外方へ開く。16世紀である。

搬入系の土器が3点認められる。第96図13は杯で、口径14.9cmを測る。体部上方でやや内湾し、口縁端部は屈曲気味に外反する。薄い器壁で、緻密な胎土である。調整は強い回転ナデである。19は環の口縁部で、端部は外反する。外面に赤色顔料が認められる。14は環の底部で、外面は赤色顔料がみられ、底部には板目压痕が明瞭に残る。山口市の大内氏館跡で多くみられる土師器である。

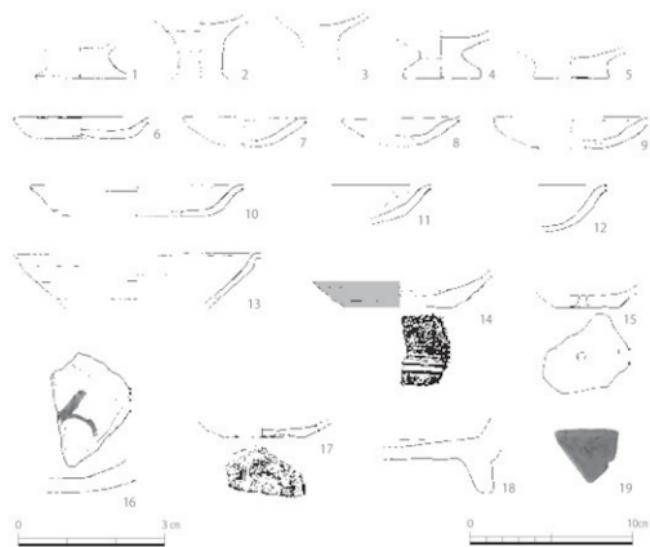
15は環の底部で、中央部に径4mmの円孔がみられる。16は環類の一部と思われる。内面に内容不明であるが、墨書きされている。17も環類で、内面にヘラ描きがある。

土師質土器（第96図18）18は、外周に逆台形状の高台をもつ深鉢である。

（穴道年弘）



第95図 遺構外出土土師器 (1:3)



第96図 遺構外出土土師器・土師質土器（1:1, 1:3）

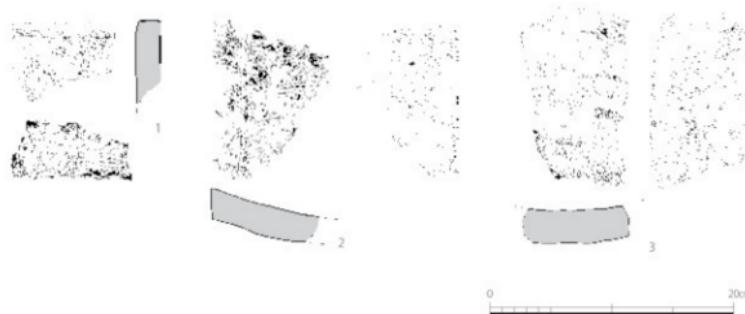
瓦（第97・98図、図版64）

発掘調査では1～3トレンチとも瓦が出土した。1トレンチからは中世瓦が109点（10.1kg）、近世瓦が50点（3.5kg）、軒瓦や磚など7点（0.3kg）が出土した。2トレンチからは軒丸瓦1点（0.1kg）と中世丸瓦1点（0.04kg）、3トレンチからは軒棧瓦2点（0.2kg）と近世平瓦1点（0.01kg）が出土した。いずれも量はごく少なく、表面採集した中世瓦（近世瓦は採集しなかった）の量、丸瓦11点（3.6kg）、平瓦13点（4.5kg）を合せても瓦葺き建物を想定することは困難である。

第97図1は左巻き三巴紋軒丸瓦の瓦当部。巴紋の頭部はやや大きい。外区の珠紋と内区との間に圓線はない。外縁はやや高い。瓦当面全体にハナレ砂の痕跡がある。2は軒丸瓦外縁の小片。3は右



第97図 瓦（1）（1:4）



第98図 瓦(2)(1:4)

模瓦の棟の瓦当部。珠紋帯はない。4は軒平瓦か軒棟瓦の外縁部小片。5は凸面に刻み目をもつ棟瓦片だが、用途は不明。6は亀甲形の刻印のある平瓦か棟瓦の断片。亀甲の中に文字があるが読めない。第98図はコビキAの平瓦断片。1は狭端片。2は側辺の破片。第97図1は2トレンチ出土、第97図3は3トレンチ出土で、それ以外はすべて1トレンチ。第98図3のみ1トレンチ6グリッド4層出土だが、それ以外はいずれも表土層ないし1層の出土。

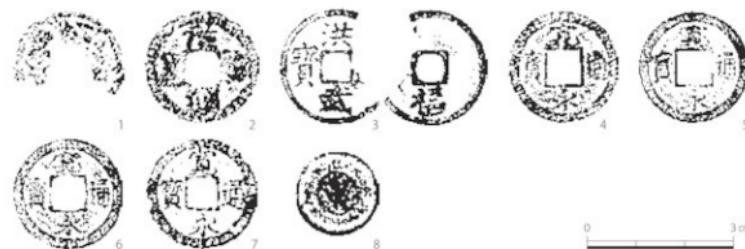
銭貨(第99図、図版64)

銅銭7枚とアルミ貨1枚が出土した。

1トレンチの表土層からは、模鋲銭の「祥符□寶」1枚(第99図1)と1銭アルミ貨(昭和15年(1940)発行、8)1枚が出土した。

3トレンチの表土層からは、北宋銭「元祐通寶」1枚(篆書、初鑄1086年、2)、明銭「洪武通寶」1枚(1368年初鑄、3)と、「寛永通寶」4枚が出土した(4~7)。「洪武通寶」は背下に「福」字のある福州鑄造品。「寛永通寶」はすべて3期の新寛永(1697年~)である。

(花谷 駿)



第99図 銭貨(1:1)

5 造成の状況と時期

1トレンチの土層の堆積状況および石垣の状況から、和多坊跡では少なくとも三度にわたり盛土による造成面を確認することができた。

WT1期造成面は、標高153.5m、東西の造成幅17.5mを測り、トレンチの東側のほぼ同一面で高さ50cmの石垣SW118が確認された。確認された石垣は1段で、WT1期造成面の東端に設けられている。造成の時期は、この石垣SW118の外側にある地山面で検出された土器溜りSX119の中世土師器の一括資料から推定することができる。土器溜りの上に、WT2期造成土が堆積していることからWT1期造成土の手がかりとすることができる。これらの土師器は13世紀後半頃とみられるところから、WT1期造成は13世紀後半以前と考えられる。

WT2期造成は、現地表下約20cmで3層（黒褐色土）として確認した。標高153.7m、東西の造成幅20mを測り、WT1期造成面よりひと回り規模が大きい。WT1期造成面の東端から東へ2.5m拡張造成して石垣SW120を設けている。一方、西側もこの時期の拡張が考えられるが、1・2グリッド2層下の地山面で確認された土坑状の遺構から出土遺物がないため、時期を確定することができない。なほ、7グリッドの2層と3層との間で炭化物が面的に検出されたが、分析できる状態ではなく、年代を測定することはできなかった。

WT3期造成面は、現地表下約10cmで2層（黄褐色土）として確認した。標高154m、東西の造成幅28.8m（西側拡張部5.7mを含む）を測り、この造成面がほぼ現和多坊境内地を形成している。トレンチ断面ではWT2期造成面の東端より東へ3m拡張造成して石垣SW121を築いている。西側は山裾の石垣SW103までとみられるが、WT2期造成で拡張した可能性もある。

WT2期造成およびWT3期造成の時期については、各造成土から時期を確定できる遺物が出土しなかったため、全体の包含層からの出土遺物の時期から推察するしかない。和多坊跡で遺物が集中するのは、白磁や青磁から12世紀代から13世紀初めにかけての時期と備前焼など国産陶磁器を中心とした16世紀代である。WT3期造成については16世紀代が想定されるが、それ以前は遺物のピークを見出すことはできない。したがって、WT2期造成については1期造成後である13世紀後半以降としておく。WT1期造成とWT2期造成以前の造成土から採取した炭化物（炭サンプルB）の年代測定結果（AD1215～1266）も参考となろう。

2トレンチにおいても1トレンチと同様に三度の造成面を確認することができた。WT1期造成は、4層と5層で、地山が北側から南へ向かって次第に低く傾斜する地形を5層でほぼ平坦にし、その上に4層を造成している。WT2期造成は3層で平坦面を形成するが、北側で大きな擾乱を受けている。WT3期造成も擾乱の影響はあるが、ほぼ全域で2層を確認することができた。

3トレンチでは現存遺構の確認にとどめたため下層の掘削は行わなかった。現存する礎石は、WT3期造成面であることがわかった。

6 小 結

和多坊跡には礎石群が整然と並んでいる。これは明治 38 年に焼失した建物の礎石である。

礎石群は平坦面の中心に建つ建物跡 SB101 の一部で、1 トレンチの中央で 10 通りの礎石列の据付掘形を確認した。その結果、建物規模を桁行 15 間、梁間 6 間の南北棟に復元できた。このほか、SB101 の西（背面）で裏門跡と推定される石組、2 トレンチでは池を確認した。

建物跡 SB101 の南側で確認された建物跡 SB102 は、桁行 12 間、梁間 4 間の南北棟で、倉庫等の建物の可能性がある。明治期の絵図に SB102 が描かれていないことから、江戸後期から明治初期に廃絶したと考えられる。

和多坊跡からの出土遺物は 6,000 点近くあり、そのなかで土師器が約 82% と圧倒的多数を占めている。貿易陶磁器と国産陶磁器は 2 % 弱と極端に少ないことが分かった。なお、WT 1 期造成の時期の決め手となった土器溜り SX119 から出土した中世土師器は、13 世紀後半頃の一括資料で、編年材料として有効な資料となった。また、古代須恵器や土師器の出土は、古代において何らかの活動があつたことを示している。

今回の調査で大きな成果は、三度の造成面を確認したことである。WT 1 期造成は標高 153.5m、東西の造成幅 17.5m、WT 2 期造成は標高 153.7m、東西の造成幅 20m、WT 3 期造成は標高 154m、東西の造成幅 28.8m（西側拡張部 5.7m を含む）となり、平坦面の東側（本覚坊側）を埋め立て、次第に規模を大きくする状況を確認した。

狭小なトレンチでの調査のため各造成時期を出土遺物から確実に押えることはできなかったが、全体の出土遺物や炭化物の測定年代から WT 1 期造成は 13 世紀後半以前、WT 2 期造成は 13 世紀後半以降、WT 3 期造成は 16 世紀代と推定した。

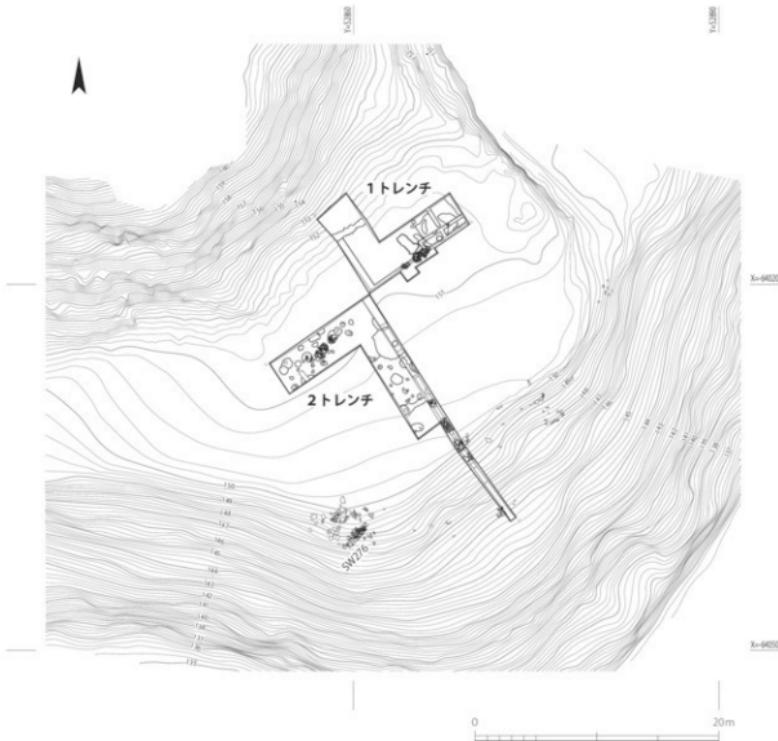
（穴道年弘）

第3節 根本堂地区南部での調査（平成23年度 等測院南区の調査）

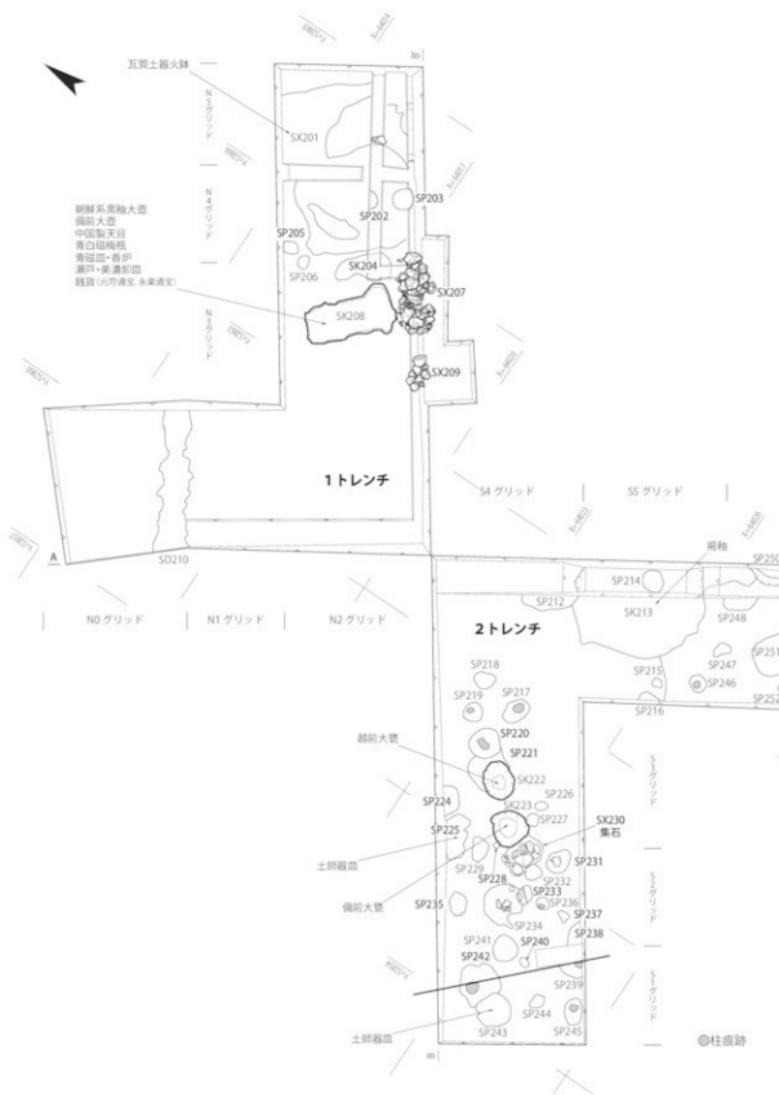
1 調査の目的と方法（第100～104図、図版36～39）

根本堂地区の南端にある等測院跡から、さらに南の小高い丘を登ると広い平坦面が現れる。面積は約743m²（南北65m、東西18m）と広く、主要な僧坊跡に劣らない敷地である。本調査区は、絵図に記載がなく、現状では礎石を確認することはできないが、この広い平坦面に何らかの僧坊施設が存在したのではないかとの想定のもと調査を行った。

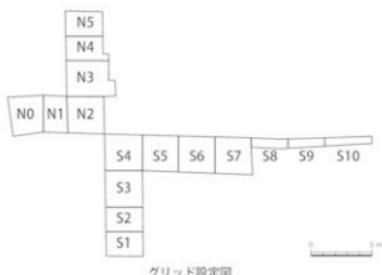
遺構の存在が想定される平坦面の中央に2つのトレンチを配置した。1トレンチ（北側）は、南北7.5m、東西10m、幅3m（面積75m²）、2トレンチ（南側）は、南北11.5m、東西10m、幅3m（面積115m²）とした。2トレンチの南北方向には、さらに南にサブトレンチを設定した。なお、和多坊跡と同様に各トレンチには任意のグリッド（第101・102図）を設定した。



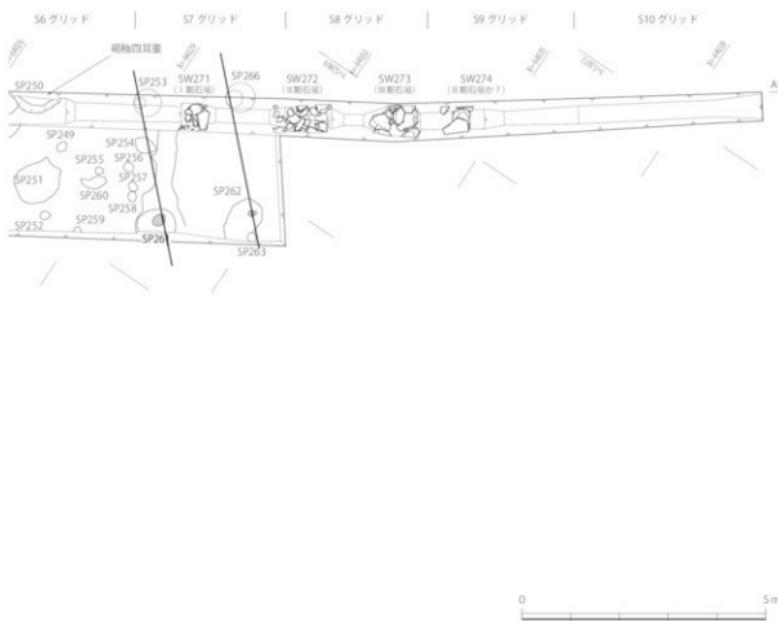
第100図 等測院南区平面図（1:400）



第101図 1・2トレンチ平面図(1)(1:100)



グリッド設定図



第102図 1・2トレンチ平面図(2)(1:100)

2 層序(第103・104図)

基本的な層序を記す(第103・104図)。

現地表面の表土・腐食土(1層)を除去すると、平坦面の北寄りでは約20cmで地山が確認された。2トレンチ南北断面の堆積状況をみると、土層の上位から、S8グリッドでは黄褐色土(2層)、S7グリッドでは褐色土と暗黃褐色土(3層)、S6グリッドでは暗褐色土(4層)が堆積する。

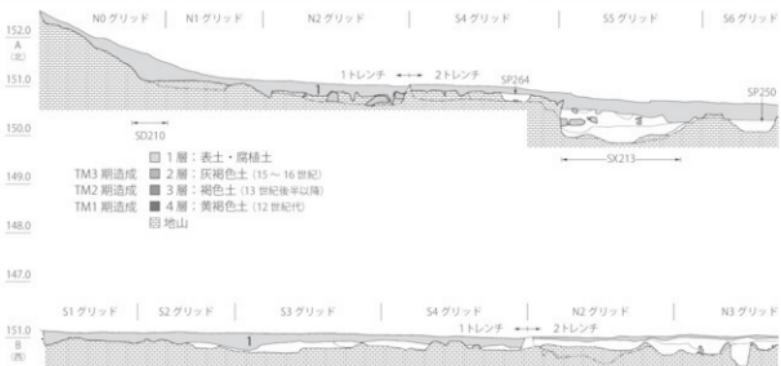
2層は、S8グリッドからS10グリッドにかけて、長さ2.6m、厚さ1m堆積する。この層の南端には表土直下で石垣SW273が確認された。この石垣からさらに南側斜面下方に幅2mにわたる平坦面があり、その上に炭や焼土を含む黒褐色土が約30cmの厚さでみられた。埋土中には中世瓦を含む。この2層は、土層の堆積状況、石垣SW273から、最終造成土と考えられる。

3層は、S7グリッドからS8グリッドにかけて、長さ2.4m、厚さ0.9m堆積する。この層の南端には石垣SW272が3段確認された。最下層から白磁碗(第116図1)および炭化物(炭サンプルD)を確認し、また石垣SW272から3m南の位置で石垣SW274を確認した。この石垣もまた土層との関係から3層に伴う可能性がある。この3層は、土層の堆積状況、石垣SW272から第2段階の造成土と考えられる。

4層は、S6グリッドからS7グリッドにかけて、長さ4.2m、厚さ1m堆積する。この層の南端で石垣(SW271)を確認し、石垣の南側の長さ1.2mにわたる4層の上面は、1mほどの幅で平坦となっている。この4層は、土層の堆積状況、石垣SW271から第1段階の造成土と考えられる。

なお、地山面の標高は1トレンチのN0グリッドでは152.3m、S7グリッドの低いところでは148.5m、その差3.8mを測る。元々は、南東側に向かって急傾斜する自然地形を大規模に拡張造成し、平坦面を広げていることがわかる。

以上みてきたように、等淵院南区では層位と造成土との関係から三回の造成が行われた。第1段階の造成土は4層で、石垣SW271を、第2段階は3層で、石垣SW272を、最終段階は2層で石



第103図 トレンチ土層断面図(1)(1:100)

垣 SW273 を伴うことが確認された。ここでは第5章第2節で記した和多坊跡と区別するために「TM」（等湯院南区の略）と表記し、第1段階の造成土を TM1期、第2段階を TM2期、最終造成面を TM3期と呼ぶことにする。

3 遺構（第100～111図、図版36～39）

（1）現存する遺構（第100図、図版36）

等湯院南区では、広い平坦面には遺構はないが、平坦面の南西斜面に石垣と思われる遺構を唯一認めることがある。

石垣 SW276（第100図） 石垣は一部積まれたままの状態が確認できるが、多くは礫が散在している。残存部分の石垣は、延長3m、高さ0.6mを測る。石垣は、階段状となっていたと思われる。石垣の方向は、N-44°38' Eである。

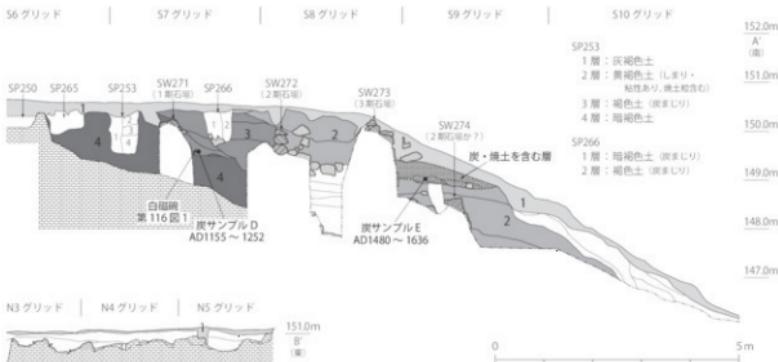
（2）検出した遺構（第101～111図、図版36～39）

造成に伴う遺構として、石垣4基がある。

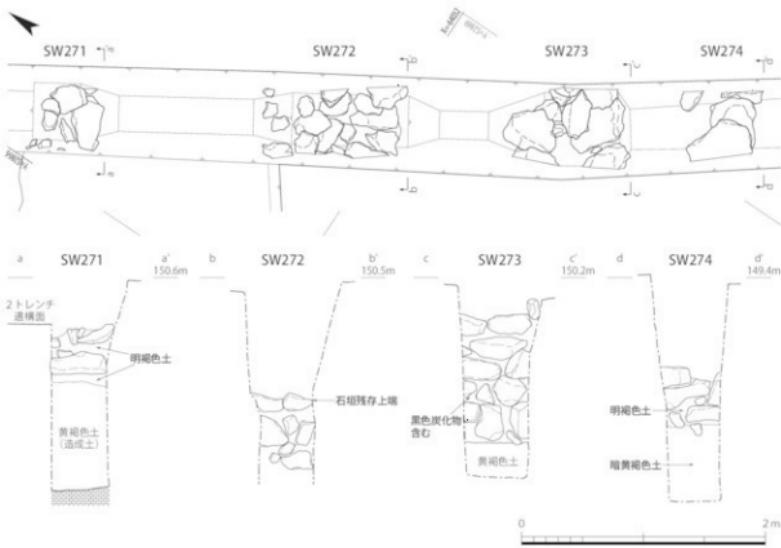
石垣 SW271（第102・104・105図） 2トレンチS7グリッドにある。高さ0.4mを測り、4層の最上部で確認された。50cm大の石の上に比較的小さな石を重ねた状況であった。この石垣の上に3層が乗っているので、元々石垣上部が2期造成時（3層）に削平された可能性がある。石垣上面の標高150mを測る。

石垣 SW272（第102・104・105図） 2トレンチS8グリッドにある。高さ0.65mを測り、3層の南端で確認された。20cm前後の8個以上の石を3段に重ねているが、南側下段にかなりの転石が見られるため、石垣上部が崩れたか、3期造成時に削平された可能性がある。石垣上面の標高151.1mを測る。

石垣 SW273（第102・104・105図） 2トレンチS8グリッドにある。高さ1.4mを測り、2層の上に積まれている。40cm大の石を5段近く重ね、保存状況は良い。石の積み方は、石垣の隙間を埋め



第104図 トレンチ土層断面図（2）（1:100）



第105図 2トレンチ石垣平面図・立面図（1:40）

るよう谷積み状にみえるが、サブトレンチでの検出のため、全容を判断することはできない。石垣上面の標高 149.9 m を測る。

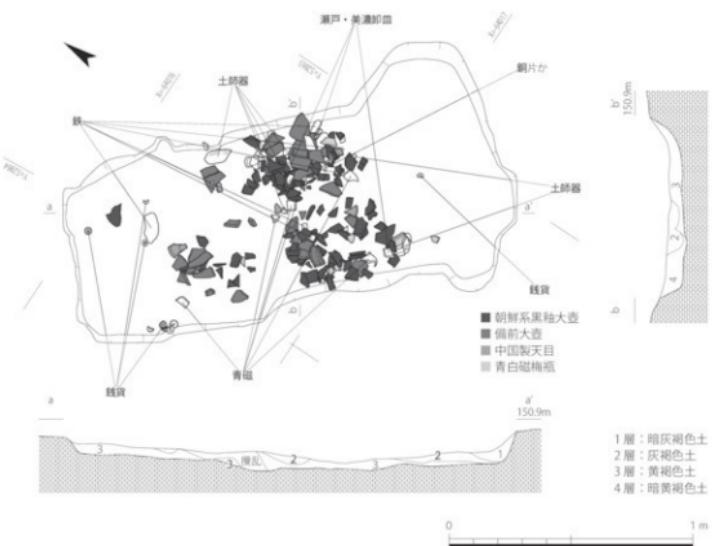
石垣 SW274 (第 102・104・105 図) 2トレンチ S9 グリッドにあり、石垣 SW273 から 2 m 東にある。高さ 0.5 m を測り、50cm 大の石を 3 段に重ねた状態で確認された。南側の崩れやすい場所に築かれたしっかりとした石垣のように見える。この石垣の上に 2 層が堆積することから TM2 期造成時の構築ではないかと思われる。石垣上面の標高 142.2 m を測る。

その他、溝 1 条、土坑 3 基、埋甕遺構 2 基、ピット群、円形状遺構 1 基、礫群 3 基の遺構がある。

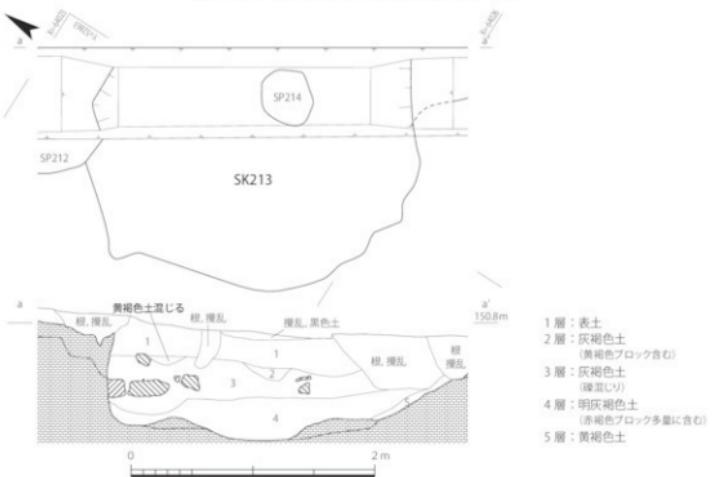
溝 SD210 (第 101 図) 1トレンチ NO グリッドにある。延長 3 m、幅 50cm、深さ 15cm を測る。北西側の丘陵斜面に沿って設けられている。平坦面と丘陵地の境の溝であろう。

土坑 SK204 (第 101・110 図) 1トレンチ N2 グリッドにある。長辺 1.16 m、短辺 0.57 m を測る。不整長方形の浅い土坑である。遺物は出土しなかった。

土坑 SK208 (第 101・106 図) 1トレンチ N2 グリッドにある。長辺 1.86 m、短辺 0.7 m 前後を測る。部分的に膨らみがある不整形な長方形土坑である。深さは 17cm と浅いが、土坑内から破片数約 200 点の遺物があった。中国製青磁の皿や香炉（15世紀～16世紀前半）、中国製青白磁の梅瓶（13世紀後半）、中国製天目（13世紀～14世紀）、朝鮮系黑釉陶器の壺などの貿易陶磁器や備前焼の壺（14世紀後半）、瀬戸・美濃焼の鉢皿（14世紀後葉～15世紀中頃）、中世土師器（14世紀～15世紀）などの国産陶器、土器のほかに、錢貨（元符通宝、永楽通宝等）などが多数出土した。土坑の上部が後世に削平を受けている可能性があり、もっと多くの遺物があったと考えられる。遺物の破片が散在する状況か



第106図 SK208 平面図・土層断面図（1:20）



第107図 SK213 平面図・土層断面図（1:40）

ら破損した陶磁器等を廃棄する目的で掘られた土坑ではないかと考えられる。

土坑 SK213（第101・107図） 2トレンチS5 グリッドにある。南北2.7m, 東西1.25m以上, 深さ0.9mを測り, 円形に近い土坑である。土坑内には, 明灰褐色土や礫を含む灰褐色土が水平に堆積

していたが、出土遺物はなかった。

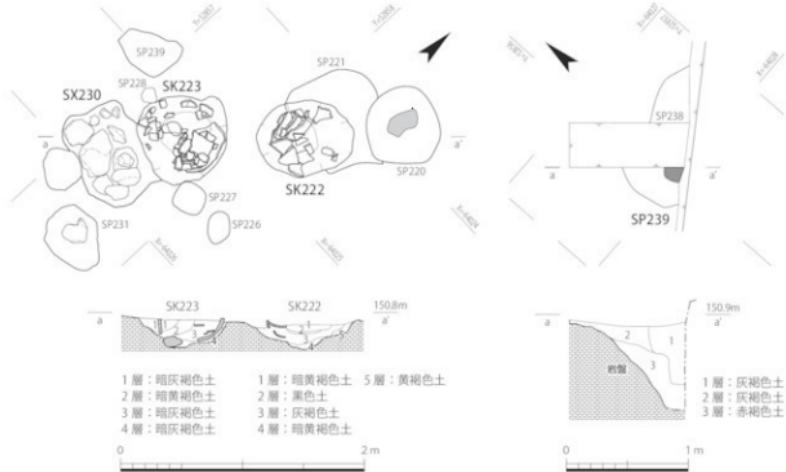
埋甕遺構 SK222 (第 101・108 図、図版 38・39) 2 トレンチ S4 グリッドにある。掘形の径 0.8 m、深さ 0.2 m を測り、北側にやや張り出した楕円形を呈している。内部には越前焼大甕が、口縁部が破損しているものの据えられた状態で出土し、埋土には暗黄褐色土や灰褐色土が落ち込んでいた。上層には黒色土がみられた。この大甕は 13 世紀末～14 世紀初めの製作である。埋甕の中から信楽焼の壺口縁や中世土器師 2 点が出土した。

埋甕遺構 SK223 (第 101・108 図、図版 38・39) 2 トレンチ S4 グリッドにある。埋甕遺構 SK222 の中心から南西 1 m のところで検出された。掘形の径 75 cm、深さ 24 cm を測り、円形を呈している。内部には備前焼大甕が、埋甕遺構 SK222 と同じように口縁部が破損し落ち込んだ状態で据えられていた。埋土には暗灰褐色土や暗黄褐色土が西方向から落ち込んでいた。埋甕の中から越前焼の壺口縁や中世土器師 2 点が出土した。

ピット群 (第 101～104・108・109 図) 1 トレンチでは、4 穴のピットが確認されたが、性格はわからない。

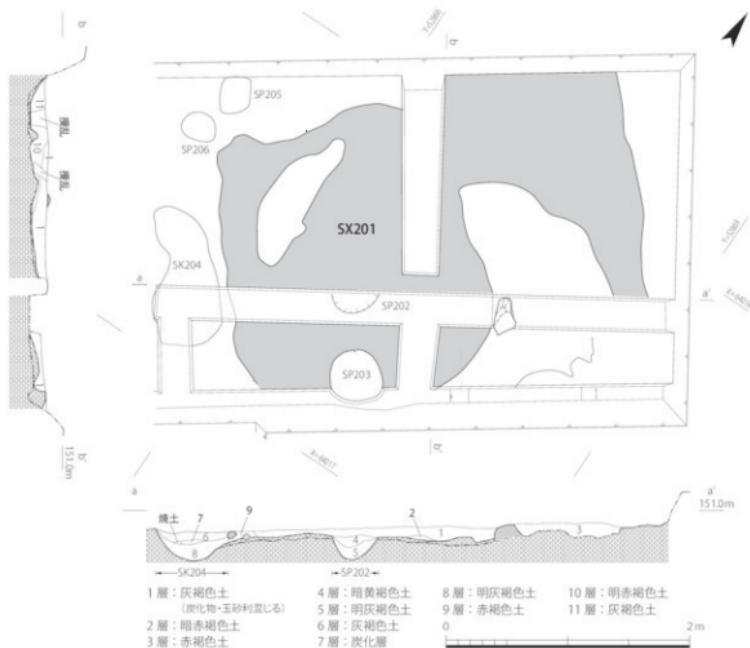
2 トレンチでは、ほぼ全域でピット 51 穴が確認された。ピットは径 20 cm 以下の杭状のものが 10 穴、20 cm 以上の柱状のものが 41 穴であった。この中で柱痕跡をもつピットは、SP217, SP219, SP220, SP236, SP239, SP242, SP245, SP246, SP261, SP262 の 10 穴であった。

柱痕跡をたよりに柱列を追ってみると、SP239～SP242 (柱間 2.3 m) の南北方向の列と、SP253～SP261 (柱間 2.5 m), SP262～SP266 (柱間 2.5 m) の東西方向の列とが確認でき、これらは直角に交わる位置関係となる。柱列の方向は、N - 44° 57' - E を向いている。これだけをもって建物を復元することは差し控えたいが、先述した現存する石垣 SW276、2 基の埋甕遺構や全体的なピット

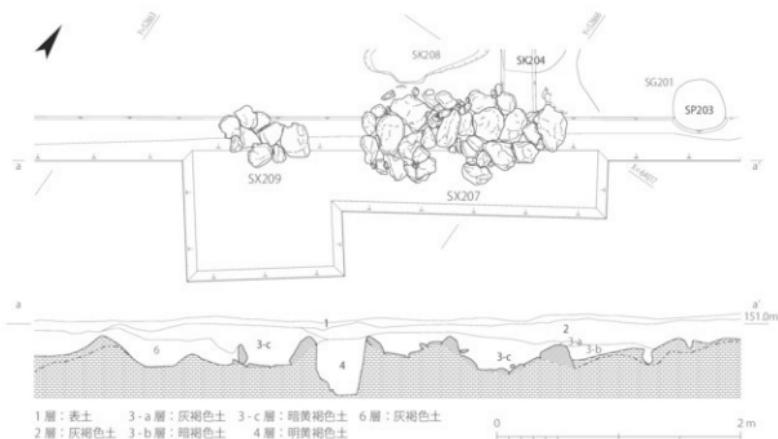


第 108 図 SK222・SK223・SX230 平面図・土層断面図 (1:40)

第 109 図 SP239 平面図・土層断面図 (1:40)



第110図 SX201 平面図・土層断面図（1:40）



第111図 SX207・SX209 平面図・土層断面図（1:40）

群の方向性、北西丘陵斜面の加工方向とほぼ一致することからみて、建物の方向としては妥当ではなかろうか。石垣との関係で言えば、石垣 SW272 や石垣 SW273 と同時期の建物と考えられる。

不整円形状遺構 SX201（第 101・111 図） 1 トレンチ N2 グリッドにある。南北 2.3 m、東西 2 m を測る不整円形状遺構で、東側が突き出た形状である。中ほどに島状の高まりがみられる。壁面から玉砂利や炭化物を含む灰褐色土が堆積している。埋土から瓦質土器の火鉢が出土した。遺構の性格はわからない。

礫群 SX207・SX209（第 101・111 図） 2 トレンチ N2 グリッドにある。礫群 SX207 は 0.5 × 0.2 m の範囲に、径 40cm 以下の礫が 30 個以上集石する。SX209 は 0.2 × 0.15 m の範囲に、径 30cm 以下の礫が 9 個以上集石する。これらの遺構の性格等は不明である。

礫群 SX230（第 101 図） 2 トレンチ S4 グリッドの埋甕遺構 SK223 の南にある。径 0.8 m 前後 の掘形に 10 個近くの礫が集石する。重複関係から備前焼の大甕が出土した SK223 よりも古いが、性格は不明である。

4 出土遺物（第 112～121 図、図版 14～18・65～67）

前節同様、出土した遺物を遺構に伴うものと伴わないものとに分けて、中世遺物を中心に概要を記す。

（1）遺構に伴う遺物（第 112～115 図、図版 14～18・65）

土坑 SK208（第 112 図、図版 14～16）

土坑 SK208 からは、青磁碗 2・香炉 1、青白磁梅瓶 1、中国製天目 2、朝鮮系黒釉壺 1、備前焼 1、瀬戸・美濃焼鉢皿 1、中世土師器 2、錢貨などが出土した。

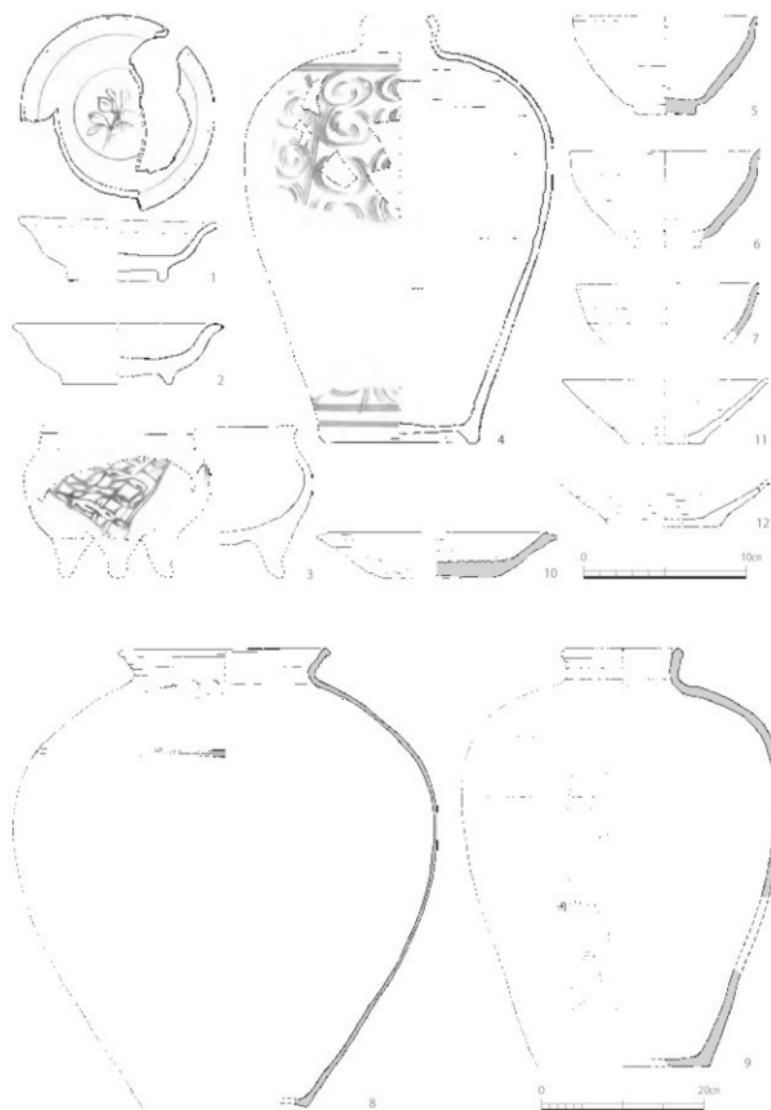
1～3 は青磁で、1・2 は高台が付く皿、3 は三脚付き香炉である。1・2 とも腰が強く張り、口縁部は外反し、端部は丸く收める。底部の器壁は厚い。1 の高台断面は長方形状で、見込みに草花文を描く。2 は全体的に器壁が厚いつくりで、高台断面は台形状である。3 の口縁部と脚部は欠損している。体部は丸身があり、外面に花菱文が描かれる。15 世紀～16 世紀前半である。

4 は青白磁の梅瓶で、口縁部は欠損している。肩部と体部下半に各 2 条の沈線が施され、その間に溝文を描く。底部は低い高台で、台形状の断面である。復元高 26.3cm を測る。13 世紀後半と思われる。

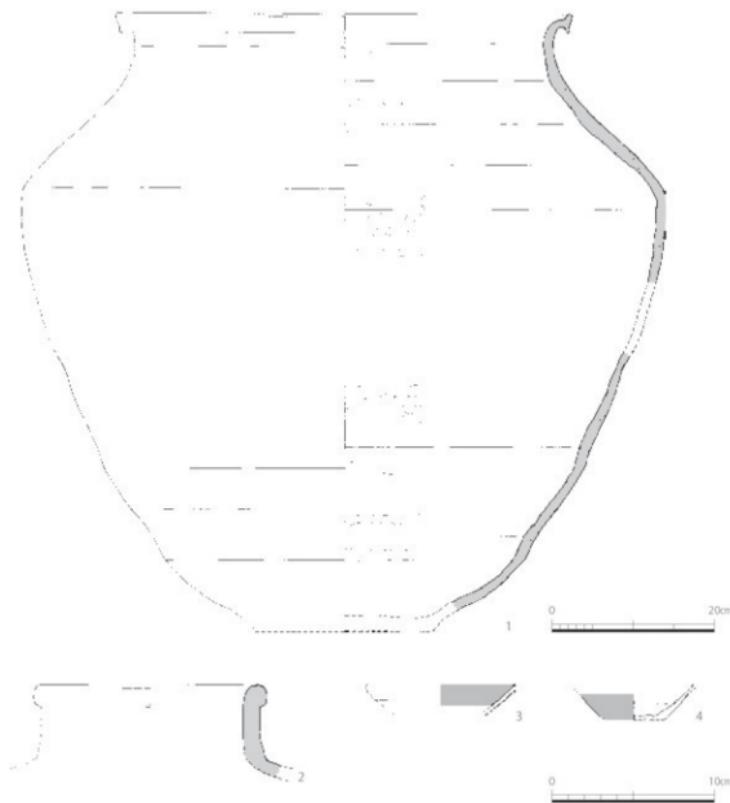
5～7 は中国製天目で、体部が直線的に開き、口縁部は上方へ立ち上がり、端部近くで外反する。5 の底部は低い高台が付く。6 の底部と 7 の体部下半は欠損している。いずれも内外面の体部上半には鉄釉が施される。13 世紀～14 世紀である。

8 は朝鮮系黒釉の壺で、復元高 24.4cm を測る大型品である。口縁部は玉縁状を呈し、頸部に 1 条、肩部に 3 条の沈線が入り、間に溝文を描く。暗赤褐色を呈する。

9 は備前焼の大壺で、復元高 56.3cm を測る。口縁部は玉縁状を呈し、肩部から体部上半にかけて鉄分が付着している。14 世紀後半である。10 は瀬戸・美濃焼の鉢皿で、口縁部内外面に灰釉がみられる。古瀬戸後期様式（14 世紀後葉～15 世紀中頃）である。11・12 は土師器の杯で、体部は直線的に逆「ハ」字状に立ち上がり、器壁は薄い。14 世紀～15 世紀であろうか。



第112図 SK208出土遺物（1:3, 1:6）



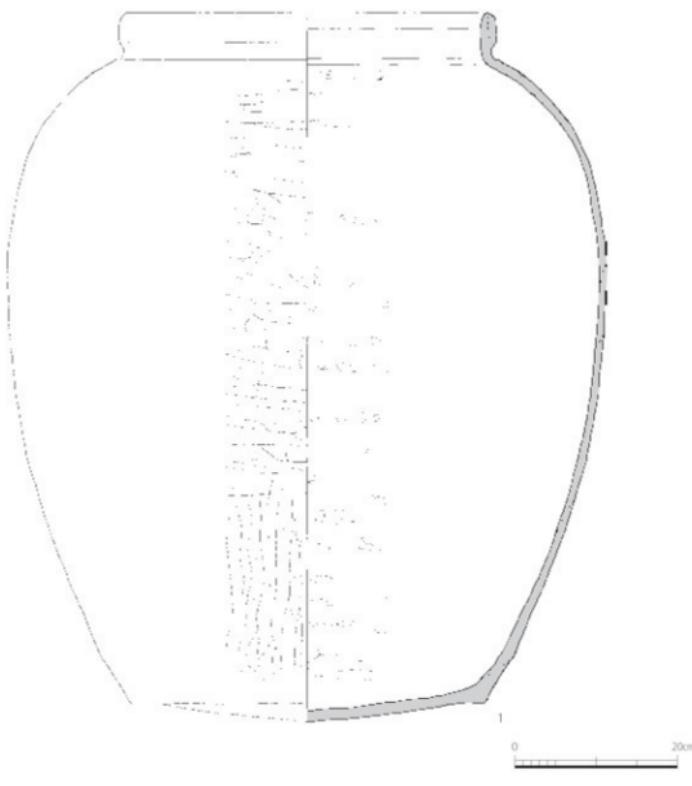
第113図 SK222 出土遺物 (1:3, 1:6)

SK222 出土遺物 (第113図, 図版16・18)

1は越前焼の大甕である。復元口径55.6cm、底部は欠損しているが、復元高75cmを測る。肩部は大きく張り、頸部は短く外反して立ち上がり、端部は上下に伸びる。内外面ともナデ調整を施す。器形からIII-1期に属する。13世紀末～14世紀初めである。2は信楽焼の壺の口縁部で、頸部は直に上方に立ち上がり、端部は玉縁状になる。外面に自然釉がかかる。3・4は土師器の皿である。3は13世紀～14世紀と思われる。

SK223 出土遺物 (第114図, 図版18)

1は備前焼の大甕である。復元口径44.6cm、器高86cmを測る。口縁部は折り曲げて玉縁状にするが、やや扁平化している。体部は長胴化し、最大径は高い位置にある。外面はハラケズリを施す。器形から中世5期に属する。15世紀後半である。2は越前焼の甕の口縁部で、端部が短く上方に立ち上がる。



第114図 SK223 出土遺物 (1:3, 1:6)



第115図 SP225 (1), SP243 (2), SX201 (3), SK213 (4), SP250 (5) 出土遺物 (1:3)

3は土師器の杯、4は皿である。小片のため時期不明である

SP225, SP243, SX201, SK213, SK250 出土遺物（第115図、図版16・65）

1はSP225から出土した土師器の皿である。口径7.2cmで、体部は逆「ハ」字状に開く灯明皿である。小片のため時期不明である。2はSP243から出土した土師器の皿である。口径7.2cmで、体部は短く外傾して立ち上がり、口径に対して底径が大きい。灯明皿である。16世紀後半である。3はSX201から出土した瓦質土器の火鉢の口縁部である。菊花文が押捺される。4はSK213から出土した褐釉陶器である。16世紀である。5はSK250から出土した壺底部で、内面はナデ、外面はヘラ削り後、ナデ調整。四耳壺の可能性がある。16世紀である。

(2) 遺構に伴わない遺物（第116～120図、図版16・65～67）

貿易陶磁器（第116図、図版16）

白磁（第116図1・14） 1は碗V類である。口縁部と高台は欠損している。体部はやや内湾して立ち上がり、外面下半は露胎、内面に砂目跡が残る。釉色は灰白色を呈する。口縁部の形態は不明であるが、12世紀代のものと考えられる。TM2期造成の最下層からの出土品である。14は切高台をもつ碗か皿の底部である。

青白磁（第116図15） 15は梅瓶である。3片とも同一個体と思われ、外面に溝文を描く。13世紀である。

青磁（第116図2・16・17） 2は器壁の厚さからみて盤の口縁部と思われる。端部は上方に屈曲する。16は碗口縁部で、雷文帯をもつ碗C-II類に属する。14世紀後半～15世紀初め頃である。17は体部内面に蓮弁文をもつ盤とみられる。

中国陶器（第116図3・4） 3は褐釉陶器の壺口縁部で、端部を外側に折り曲げ玉縁状になるものである。4は中国陶器の壺底部で、内面は黒釉がかかり、底部外面は無釉で、回転ナデを施している。16世紀である。

朝鮮系陶器（第116図5） 5は朝鮮李朝の褐釉瓶（徳利）形の口縁部で、口縁部は強く外反し、内外面に施釉される。色調は灰褐色、釉色はオリーブ黄色を呈する。

青花（第116図18～21） 18は碗E群で、体部はやや内湾して立ち上がり、まっすぐ口縁部にいたる。16世紀後半である。19は皿B1群で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。18, 19ともに外面に唐草文を描く。20は碗か皿で、外面に菊枝文を描く。21は碗C群で、体部はやや内湾して立ち上がり、まっすぐ口縁部にいたる。15世紀後半～16世紀前半である。

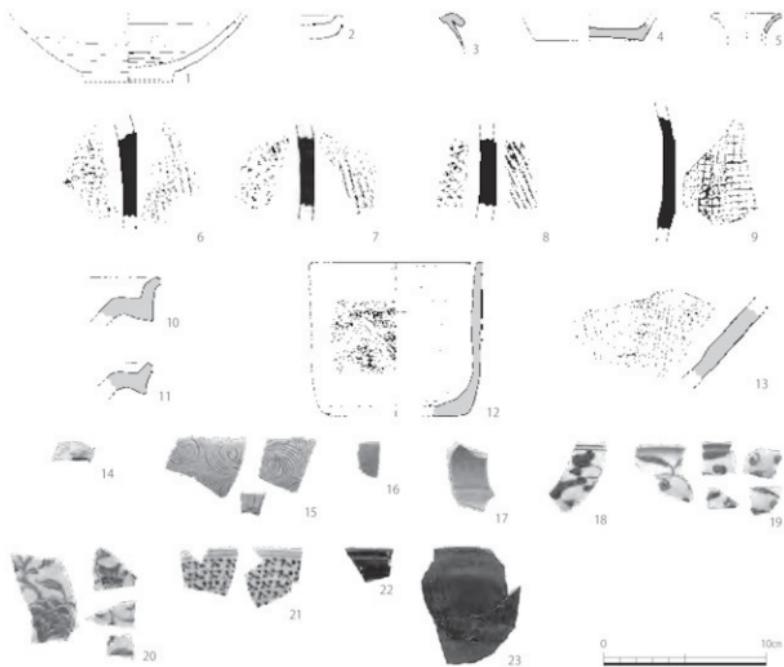
国産陶磁器・土器（第116～118図、図版16・65）

古代須恵器（第116図6～8） 6～8は甕の体部、11世紀以前である。

中世須恵器（第116図9） 9は甕の体部で、外面に龜山系の格子タタキを施す。

越前焼（第116図10・11） 10, 11は甕の口縁部で、27は口縁端部が高く立ち上がり、口縁下端の垂れ下りはない。28は27より小型で、口縁端部は低く立ち上がる。越前焼II期、13世紀である。

備前焼（第116図12・13） 12は筒形の茶碗。暗褐色を呈し、内外面は回転ナデ調整され、底部はヘラケズリされている。体部中ほどに4条単位のハケ目が山形に施されている。茶道具とみられ、



第116図 遺構外出土遺物（貿易陶磁器、国産陶磁器）(1:3)

16世紀第3四半期である。30は擂鉢で、縦方向の描目が6, 7条入る。

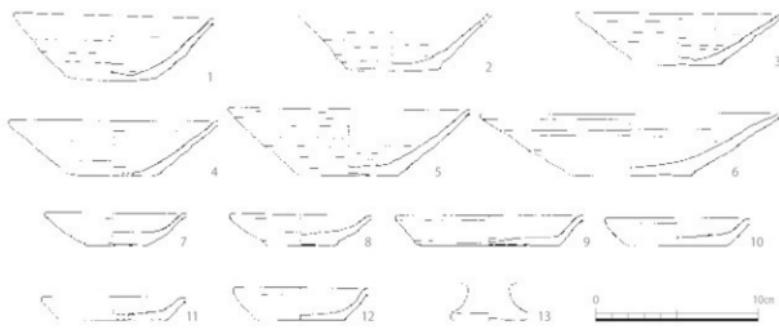
瀬戸・美濃焼（第116図22・23） 22は香炉の口縁部の可能性がある。口縁部は屈曲して外反する。外面は鉄釉が施され、内面は施釉されない。23は天目で、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部はやや外反する。内外面とも鉄釉が施釉される。

土師器（第117図、図版65） 1～6は土師器の杯である。1・2は体部が直線的に逆「ハ」字状に立ち上がり、器高が低く、器壁は薄い。13世紀～14世紀である。

3～6は口径が一段と大きくなり、体部は大きく逆「ハ」字状に立ち上がる。体部がやや外反するもの（6）もある。口縁端部は先細る。器壁は薄く、底部は回転糸切りである。15世紀～16世紀。

7・8は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反気味となる。12世紀後半～13世紀初め頃である。9～11は体部が短く外傾して立ち上がり、やや外傾するもの（9）もある。口径が11.3cmのもの（9）と、8.7cmのもの（10・11）がある。16世紀後半頃である。12は体部が外傾して立ち上がり、底径が大きい。底部の回転糸切りを、ナデ消している。17世紀中頃以降である。

13は柱状高台付の杯類で、低く厚みのある高台をもつ。

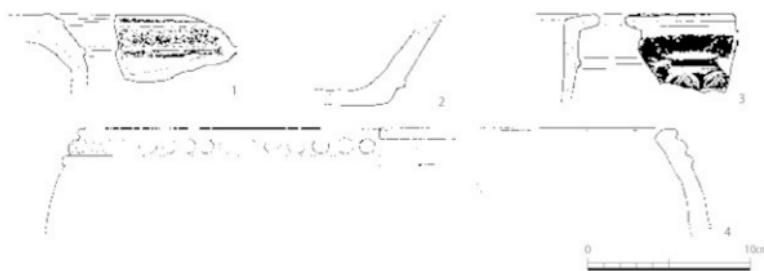


第117図 遺構外出土遺物（土師器）（1：3）

土師質土器（第118図1・2） 1は火鉢の肩部で、2条の突帯間に文様が押捺される。2は火鉢底部で下半に1条の突帯がめぐる。

瓦質土器（第118図3・4） 3は深鉢で、口縁部が大きく外方に屈曲し、1条の突帯との間に文様が押捺される。4は火鉢で、口縁部の2条の突帯間に殊文を巡らす。

(穴道年弘)



第118図 遺構外出土遺物（土師質土器、瓦質土器）（1：3）

瓦（第119図、図版66）

1トレンチから、中世丸瓦26点(3.9kg)・中世平瓦9点(0.8kg)、近世丸瓦1点(0.02kg)・近世平瓦7点(0.6kg)が出土した。2トレンチからは、中世丸瓦40点(3.2kg)・中世平瓦56点(8.1kg)と近世平瓦7点(0.2kg)のほか、中世軒丸瓦2点(0.1kg)が出土した。中世瓦の出土量は合計131点(16.0kg)で、採集品の合計量156点(39.0kg)に比較すると重量比ではかなり少ない。

第119図1・2は巴紋の瓦当部片だが、紋様の詳細は不明。3はU字形の吊り紐痕が連続する丸瓦A1の小型品。筒部長は約28cm。4は丸瓦の広端部片。5～10は平瓦。5～7は狭端部あるいはそれを含む破片である。5の狭端部凹面には布圧痕が残る。狭端部凹面の面取りは、いずれも両端には及んでいない。10は広端部片。6と8～10が土坑SK213出土、ほかはすべて表土層出土。

トレンチからの瓦の出土量は採集資料に比較すると少ないので、調査区を設定した平坦面中央には



第119図 瓦 (1:4)

瓦葺き建物はなかった可能性が高いだろう。

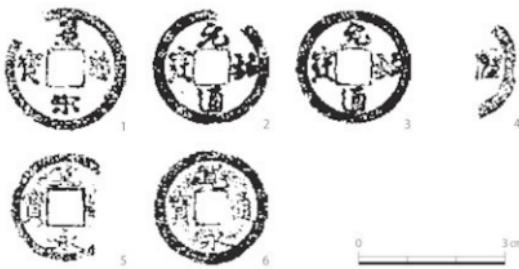
銭貨（第120図、図版67）

1トレンチの土坑SK208から、銅銭10枚と鉄銭1枚の計11枚の銭貨が出土したほか、1トレンチ表土から1枚、2トレンチ表土からも5枚、合計17枚の銭貨が出土した。

土坑SK208の銅銭10枚は、中国銭7枚と不明銭3枚である。中国銭は、「開元通寶」（初鑄621年）と思われる1枚と、北宋銭の「祥符元寶」（真書、初鑄1009年、図版67-1）「天聖元寶」（篆書、初鑄1023年、-2）「聖宋元寶」（行書、初鑄1010年）各1枚のほか「元豐通寶」（篆書、初鑄1078年）と思われる1枚（図版67-3）の計4枚、そして明銭の「永樂通寶」（初鑄1408年、-4）2枚がある。枚数は少ないが、「永樂通寶」を最新銭とすることは注意しておいてよい。

1トレンチからはほかに、表土層から「寛永通寶」1枚が出た（第120図5）。1697年以降の新寛永（3期）である。2トレンチからも表土層から、北宋銭4枚と「寛永通寶」（新寛永、3期、第120図6）1枚が出土した。北宋銭は、「天聖元寶」（篆書）と「皇宋通寶」（真書、初鑄1038年、第120図1）各1枚と「元祐通寶」（行書、初鑄1086年）2枚（2・3）である。

（花谷 遼）



第120図 銭 貨 (1:1)

その他（第121図、図版67）

第121図1は滑石製の硯である。海側の角の破片で、ツルツルしている。2は瓦の転用と思われるが用途は不明である。表面は凹面をなし、使用痕がある。3は頁岩製の砥石である。表面に筋状の使用痕がある。4・5は坩堝片ではないかと思われる。



第121図 その他 (2:3)

5 造成の状況と時期（第103・104図）

1トレンチの土層の堆積状況から、三度にわたる造成を確認することができた。

TM1期造成土は4層（黄褐色土）である。S6グリッドの地山が傾斜する変化点から南へ2.5m造成される。また4層に石垣SW271を築いているが、石垣上部は削平された可能性がある。造成の時期は、TM2期造成土の最下層（TM1期造成土の上面）から12世紀の白磁碗（第116図1）が出土したこと、同じ層から検出された炭化物（炭サンプルD）の年代測定結果（AD1155～1252）も同様な時期を示していることから、TM1期は12世紀代と考えられる。

TM2期造成土は3層（褐色土・暗黃褐色土）である。TM1期造成土の石垣SW271から南へ2.4m拡張造成している。この3層の端に石垣SW272を築いているが、上部はTM3期造成時に削平された可能性がある。

TM3期造成土は2層（灰褐色土と明灰褐色土）である。TM2期造成土の石垣SW272から南へ2.2m拡張造成している。2層に高さ1.4mの石垣SW273が築かれた。

TM2期とTM3期の造成時期については、時期を確定できる遺物が出土しなかったため、全体の包含層からの出土遺物を考えるしかない。全出土遺物の状況を列記すると、貿易陶磁器では12世紀代の白磁、14世紀後半から15世紀初めの青磁、16世紀代の青磁、15世紀後半～16世紀前半の青花、16世紀代の褐釉陶器などがある。国産陶磁器では13世紀末の越前焼、16世紀第3四半期の備前焼などがある。遺物からみると、12世紀代、13世紀末～15世紀代、16世紀代に集中していることが分かる。また、3層の最下層で出土した炭化物（炭サンプルD）の年代測定値（AD1155～1252）および石垣（SW273）の南下で出土した炭化物（炭サンプルE）の年代測定値（AD1480～1636）を参考に考えると、TM2期は13世紀後半以降、TM3期は15世紀から16世紀代とみることができる。しかし、造成土と出土遺物の関係を明確におさえることができないため、現時点では想定の域をでない。

なお、各造成期に伴って、道の可能性を示す平坦面をみることができる。TM1期では、石垣SW271の南側に幅80cmの平坦面が認められる。TM2期では、石垣SW272の南3.5mにも石垣SW274が確認されたがTM2期造成時の可能性がある。TM3期では、石垣SW273の南側1m下がって、幅2mの平坦面がある。元々は道として機能していた可能性が高い。

6 小 結

等湯院南区の広い平坦面は、絵図には描かれていないものの、調査で50穴以上のピット、柱痕が残る柱穴列、2つの埋甕遺構を確認したことから、何らかの僧坊施設があった可能性が高い。

2つの埋甕遺構から出土した越前大甕や備前大甕の製作時期は異なるが位置関係から同時期に使用されたものと思われる。廃棄土坑と思われるSK208からは、200点近い陶磁器類が出土した。寺ならではの青磁の香炉や茶道具としての中国製天目のか、青磁碗や青白磁梅瓶、朝鮮系黒釉壺などの貿易陶磁器を含んでいる。

また、出土遺物全体としては6,000点以上を数え、中・近世土師器は80%近くと圧倒的に多く、

貿易陶磁器と国産陶磁器の合計は約 11% であった。調査では中世瓦も出土したが、量的には少なかった。分布調査の採集遺物としては、備前焼の甕や鉢など貯蔵用、調理用の遺物が目立つ。

2 トレンチの調査で三度にわたる造成が行われ、それぞれ石垣を備えていることが確認できた。この造成は、南側の崖面を面的に二度拡張している。TM1 期造成は地山削り出しに、TM2 期造成は南へ 2.4 m 盛土造成し、TM3 期造成はさらに南へ 2.2 m 盛土造成して、次第に面積を拡大させている。

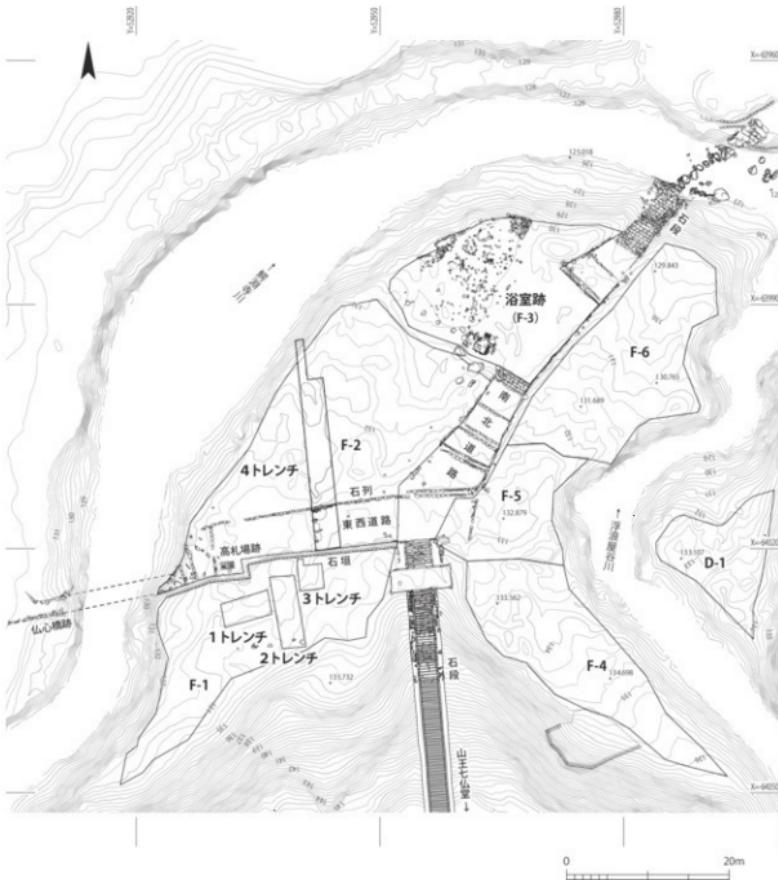
各造成時期は、和多坊跡と同様に狭小なトレンチ調査であったため造成時期を特定することは困難であったが、全体の出土遺物や炭化物の測定年代から TM1 期造成は 12 世紀代、TM2 期造成は 13 世紀後半以降、TM3 期造成は 15 世紀～16 世紀と推定した。

(穴道年弘)

第4節 浮浪滝地区北部での調査（平成24年度 鰐淵寺川南区の調査）

1 調査の目的と方法（第122・123図）

本書で浮浪滝地区としたエリアの北部については、平成24年(2012)度に埋蔵文化財調査を行った。浮浪滝地区にはD1, E0～E4およびF1～F15の平坦面があるが、これらのうちF1～F6のある範囲を鰐淵寺川南区とした。遙堪峠から鰐淵寺に訪れる際は、かつて鰐淵寺川にかかっていた仏心橋(昭和18年に流失)を渡りこの地に至り、北の根本堂方面または南の山王七仏堂や浮浪滝方面に向かうこ



第122図 鰐淵寺川南区平面図（1:600）

となる。まさに鰐淵寺の玄関口ともいえる場所であり、江戸期の絵図ではここに高札場や浴室が描かれている。また、この地は鰐淵寺における信仰の中心である藏王堂と根本堂地区の結節点に位置しており、両者間を移動する際は必ずここを経由することとなる。

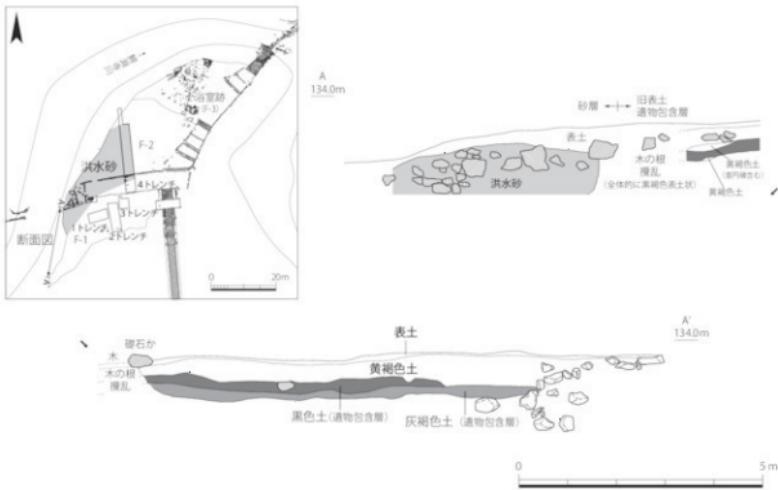
以上のような観点から、鰐淵寺川南区の平坦面は僧坊などの施設が存在していた可能性が高く、また、根本堂地区とは性格を異にすることも考えられた。よって、この地のうち、道路沿いの比較的広い平坦面であり、鰐淵寺川に面する崖で遺物包含層が確認された（第123図）F1・F2、および、江戸期の絵図に浴室が描かれていたF3を調査対象地とした。なお、これら3つの平坦面の標高はそれぞれ134 m、132 m、130.5 m付近である。

2 現存する遺構（第122・124図、図版40・41・48）

まず、調査対象となったF1、F2、浴室跡（F3）の周辺において、調査前から確認されている遺構あるいは現に機能している施設について触れておきたい。

仏心橋跡（第122図、図版41） 仏心橋は昭和18年（1943）の洪水で流され、今は鰐淵寺川の両岸で橋台を構成していた石積みだけが残る。その痕跡からこの橋は、橋長15m、全幅2mの規模であったことが推定できる。流失する前の仏心橋は、欄干が付く石製の桁橋とみられる⁽¹⁾。

高札場跡（第124図、図版40） 仏心橋の東には、江戸期の絵図と同じ位置に高札場跡が残る。厚さ18cmの基壇石を立て並べ、外寸が幅168cm、奥行94cm、高さ40cmの方形を区画している。高札を刺すためのほぞ穴を穿った基礎石（W30cm×D30cm×H18cm）も3つ残っており、2つは区内に、もう1つは区画外に残存している。



第123図 鰐淵寺川東岸断面図（1:100）

石垣 SW341（第124図、図版40） 高札場跡の南背面には、東西方向に石垣SW341が約30mの長さで残存しており、高さは1.25mである。この石垣は径60cm前後の自然石を用いた野面積みで、付け足したり改修したりした痕跡を示す目地は認められない。

東西道路 SF336（第122図） 石垣SW341の北側沿い、つまり、F1とF2の間には東西道路SF336が通り、西は仏心橋に、東は南北道路や山王七仏堂へ上がる石段に繋がっている。この東西道路の北側には縁石として石列SX334が据えられており、全長は約25mを測る。石列SX334と石垣SW341は平行ではないため、道路幅は西で4.5m、東で5.5mとなっている。

南北道路（第122図、図版6） 南北道路は、根本堂方面と山王七仏堂へ上がる石段および東西道路SF336を連絡する通路である。F2とF3の東側に沿うこの道路は、石段または石で区画される幅3m前後の段で構成されている。鰐淵寺川から東西道路SF336の縁石である石列SX334までの距離は47mを測る。F2沿いではこの通路との境を画する縁石が認められるが、浴室跡沿いではそれがないため、浴室跡とは一体的な平坦面として機能していたと思われる。

石段（第122図、図版48） 東西道路と南北道路はともに山王七仏堂や浮浪瀧へ通じる石段に接続している。この石段は、幅約2.1m、長さ約39m（斜距離）の規模であり、幅22cm前後、長さ60～130cm程度の加工された石材を横に並べて90段の階段が組まれている。そして、幅19cmの角柱状の石材を段の両端に列ねて縁石とし、標高134m付近の平場（東西7.5m、南北3m）より上では、さらに両縁石の外側に約55cmの幅で径15～35cm程度の石が敷かれており、この箇所の全幅は4mを測る。また、この石段は比高17mで約26°の勾配である。なお、標高134m付近の平場はF1平坦面とレベルが揃うので、この平坦面と連絡するために設けられたと考えられる。

3 F1平坦面の調査（第124～126図、図版40・42・43）

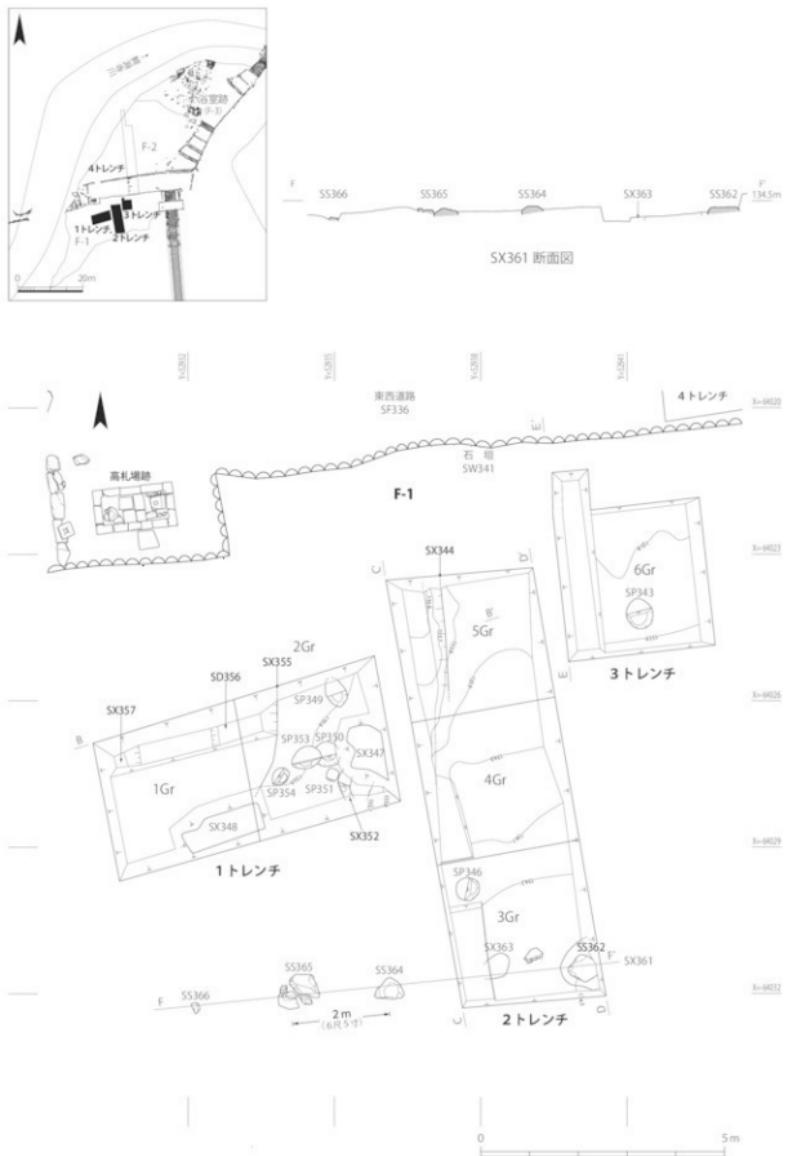
（1）調査区の設定（第124図）

F1は東西32m、南北13mの平坦面で、西は鰐淵寺川、東は山王七仏堂に上がる石段で画されており、南は丘陵の裾、北は石垣SW341を端としている。この石垣SW341の方向を勘案し、かつ、樹木などを避けて、F1の中央付近に1トレンチ（東西6m、南北3m）、2トレンチ（東西3m、南北9m）、3トレンチ（東西3m、南北3m）を設定して、都合54m²の発掘調査を行った。

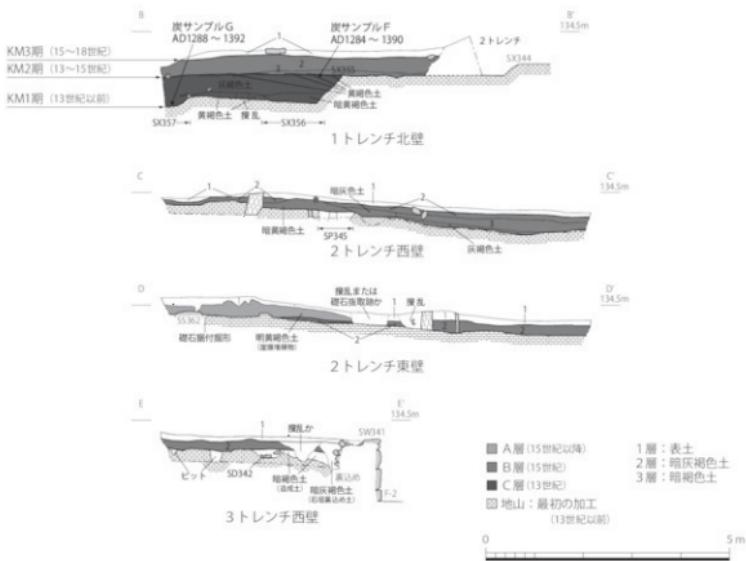
（2）層序（第125図）

発掘調査時には、土層を確認するたびに上層から順に「1」、「2」などの層名を付けていったが、出土遺物の整理作業を進めると、1層より下の層は時期ごとに大きく3つに分けられることが判明した。つまり、2トレンチ東壁で部分的に認められる崖錐堆積物のA層（暗黄褐色土）、その下にある2層（暗灰褐色土）・3層（暗褐色土）などのB層、1トレンチ北壁で確認したC層（灰褐色土ほか）に分けられ、これより下は地山となる。

下限時期を示す遺物などから推察すると各層の時期はA層が15世紀以降、B層が15世紀、C層が13世紀となり、地山で削平や掘削など最初の加工が行われたのは、13世紀以前とみられる。なお、表土の1層からは18世紀の伊万里焼が出土している。



第124図 F1平坦面 トレンチ平面図・SX361断面図 (1:100)



第125図 F1平坦面 レンチ土層断面図 (1:100)



第126図 F1平坦面 ピット土層断面図 (1:40)

1 トレンチ北壁を観察すると、地山・C層・B層の上面は平坦であることから、いずれも造成されたと考えられる。以下、それぞれの造成の時期をKM1期（13世紀以前）、KM2期（13～15世紀）、KM3期（15～18世紀）と示すこととする。

（3）検出した遺構（第124～126図、図版42・43）

検出した遺構は、掘削前から表土上に露出していた礎石列SX361（3グリッドほか）、B層上面で見つかった焼土SX347（2グリッド、以下Gr）・348（1Gr）、地山上で確認されたピットSP343（6Gr）・346（3Gr）・349（2Gr）ほか、その他SX344（5Gr）・355（2Gr）・356・357（1Gr）などである。

礎石列 SX361（第124・125図、図版43） 紣石列SX361は索石SS362・364～366と索石抜き取り痕跡と思われるピットSX363で構成されている。索石の間隔は1間約200cm（6尺5寸）である。この索石列が建物とすれば、南側は間際まで丘陵の裾が迫っているので、スペースのある北側に展開するであろうと思われる。ここに対応する索石やピットは確認できていないが、2トレンチ東壁を観察すると、索石SS362周辺の地山レベルとB層上面レベルが揃っていることが分かる。このことから索石列SX361の北側はB層を盛って造成されたことがうかがえるので、ここに建物があったと推定される。時期についてはKM3期の造成面に索石が据えられているので、15～18世紀と考えられる。なお、この遺構のSX363からは時期不明の土師器片が1点出土した。

焼土（第124図、図版43） 焼土SX347・348は1層を取り除いた後にB層上面、つまりKM3期造成面で確認した。いずれもトレンチの壁際での部分的な検出となつたため全容は不明である。検出規模はSX347が東西120cm×南北60cm、SX348が東西80cm×南北90cmで、両者とも厚さは数cmと推定される。この焼土が生じた原因は不明だが、建物火災の痕跡である可能性はある。出土遺物はなかった。

ピット SP343・346・349ほか（第124・126図、図版42・43） ピットは索石列SX361に関連するものを除くと10穴程度見つかり、規模は径20～60cm、深さ10～40cm程度である。いずれもB層で覆われた地山面、つまり、KM2期の造成面で確認しているため時期は13～15世紀と考えられるが、並ぶものはなく性格は不明である。なお、SP346・349～351・353からは土師器片などが少量出土しているが、器種や時期の判明するものはなかった。

その他（第124図、図版42・43） 落込みSX344は西に下がる深さ20cm程度の段差である。B層に覆われていたことから13～15世紀の遺構と思われるが、性格は不明であり、出土遺物もない。

落込みSX355～357はいずれも部分的な確認にとどまっているが、SX355は深さ50cm、SX356は幅120cm、SX357は深さ20cmを測る。遺構の性格は分からぬが、C層に覆われているので13世紀以前に地山に施された加工痕跡であると考えられる。これらの落込みからの出土遺物はなかった。

4 F2平坦面の調査（第127～129図、図版44・45）

（1）調査区の設定（第127・128図）

F2は東西36m、南北41mの平坦面で、西は鰐淵寺川に面し東は山王七仏堂への南北道路で画されている。また、北は浴室跡（F3）に下る緩斜面、南は石垣SW341で区切られている。この石垣の方向と直交するように軸を定め、かつ、樹木などを避けて4トレンチ（東西3m、南北21m）を設定

した。調査面積は63nfである。

（2）層序（第127・128、図版44）

表土の1層より下位にあるF2の土層については、並行して発掘調査を行ったF1との混同を防ぐため、上層から「11」、「12」、「13」・・・と順に層名を付けていった。後の整理作業ではこれらの層が時期ごとに大きくD～F層の3層にまとめられることが分かった。つまり、表土直下のD層（灰褐色砂質土ほか）、70cm程度堆積する洪水砂のE層、16層（灰褐色土）や17層（暗灰褐色土）を中心とするF層に分けられ、これより下は地山となる。下限時期を示す遺物などから推察すると各層の時期はD層が16世紀以降、E層（洪水砂）が16世紀、F層も16世紀となり、地山が削平など最初の加工を施される時期は16世紀以前とみられる。なお、F2では表土の1層から近世土器が出土している。また、E層（洪水砂）はF1からF2にかけての鰐淵寺川に面する崖面でも1mに及ぶ堆積が認められる（第123図）ことから、大規模な洪水で運ばれた砂だったことが分かる⁽²⁾。

トレンチ西壁を観察すると、少なくとも3度にわたり造成が行われたことがうかがえる。すなわち、最初に地山面が加工された時、F層とD層がそれぞれ盛土された時が造成の時期であり、以下それぞれGM1期（16世紀以前）、GM2期（16世紀）、GM3期（16～17世紀以降）と記すこととする。

（3）検出した遺構（第127～129図、図版45）

発掘調査前には石列SX334（1・2Gr）が露出していた。この石列は東西道路SF336の縁石であり、石垣SW341との間隔、つまり、東西道路の幅は5m前後である。

これらのほか、発掘調査では石垣SW335（1Gr）、SX333（3Gr）、溝SD327（5Gr）、F層上面のピットSP328（5Gr）・330～332（3・4Gr）、F層の途中のピットSP321～326（5～7Gr）・329（4Gr）などが見つかっている。

石垣SW335・集石SX333（第127図、図版45） 石垣SW335はE層（洪水砂）の下から見つかった。下部の2段が残存しており、上部は崩れていた。残存していた2段のうち上段は南北方向に人頭大的石が7個程度1列に並んでおり、最下段には根石（長径50cm程度）も認められた。

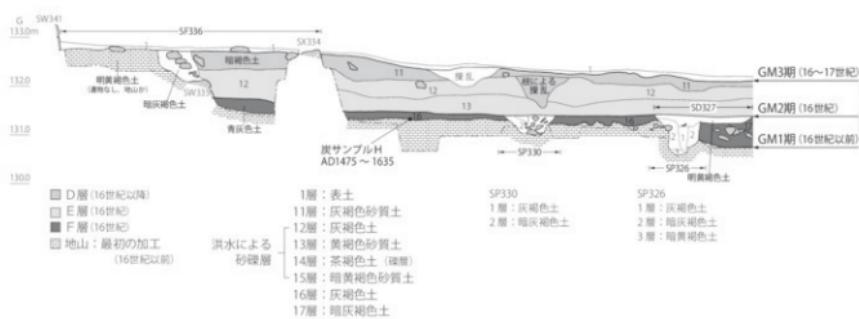
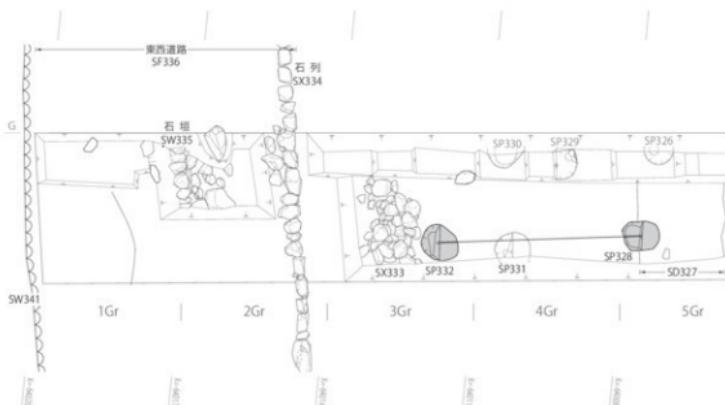
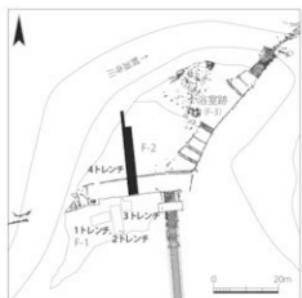
この石垣SW335を壇にして、北の地山は南の地山に比べて1.4～1.9m低くなっている。このことから、GM1期に地山を削平して平坦面を造った時、その南に築かれた石垣がSW335であるといえよう。

なお、集石SX333は、F層より上にあり石同士の隙間にE層（洪水砂）と同質の砂が噛んでいることと、大きさも似ていることから、16世紀の洪水（その堆積層がE層）で流された石垣SW335の上部とみられる。

溝SD327（第128図） 溝SD327はF層上面で確認した。検出規模は幅200cm、深さは10cm程度である。約9m離れた石垣SX335に平行している点が注目されるが、出土遺物もなく機能は不明である。

ピット（第127～129図、図版45） ピットは11穴見つかったが、これらはF層の上面で見つかったものと、F層の途中で見つかったものに分けられる。

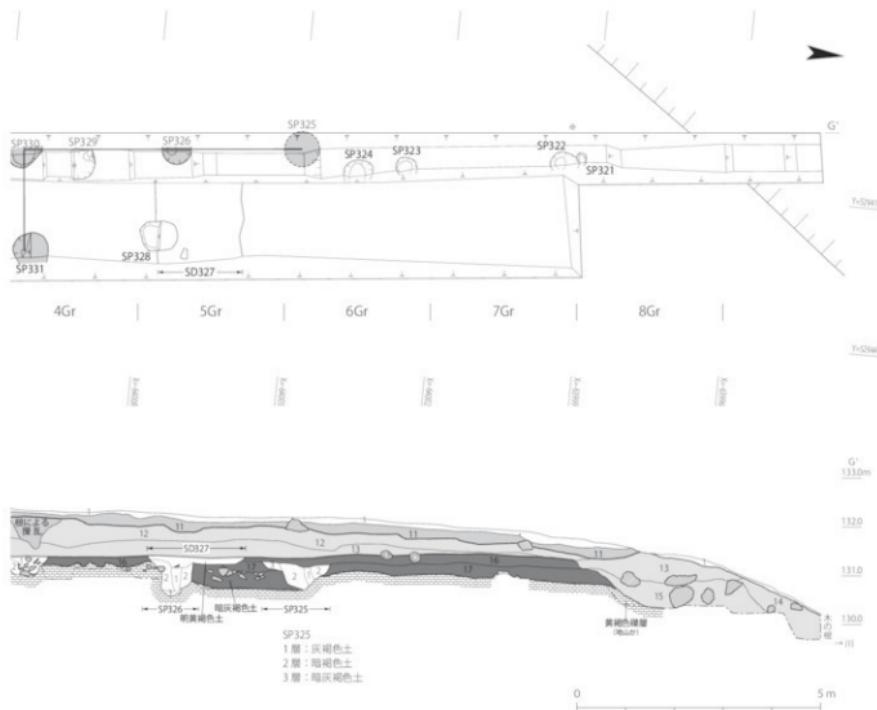
F層の上面で見つかったものはSP328・330～332の4穴で、いずれも径は70cm程度、深さは25～53cmである。また、F層の途中で見つかったものはトレンチ西壁際のサブトレンチで検出したSP321～326・329の7穴である。小さなSP321を除くと他のものの検出規模は径70cm程度、深



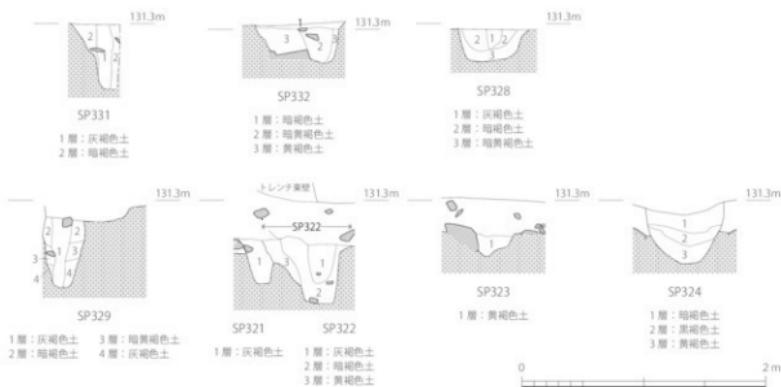
第127図 F2平坦面 トレンチ平面図・土層断面図(1)(1:100)

さ60cm前後である。各ピットには、柱痕あるいは柱抜き取り痕と思われる縦あるいは斜め方向の土層が認められるので、これらの穴は柱穴であると考えられる。

これらのうち、SP328-332の並びとSP331-330-326-325の並びは掘立柱建物を構成した可能性が高いといえよう。また、前者ではSP332から青花が、後者ではSP326から青花、SP330・331から備前焼が出土しているので、両者とも16世紀の遺構といえる。



第128図 F2平坦面 トレンチ平面図・土層断面図(2)(1:100)



第129図 F2平坦面 ピット土層断面図（1:40）

5 浴室跡（F3平坦面）の調査（第130～133図、図版46・47）

（1） 調査区の設定

浴室跡（F3）は東西22m、南北18mの平坦面で、西から北にかけては鶴瀬寺川に面している。東は南北道路と繋がり南は緩斜面で塗されている。江戸期の絵図にはこの場所に浴室が描かれており、現地踏査の段階でも礎石の露出が確認できていた。よって、遺構保護の観点から枯葉や腐葉土などを取り除いた後に表面調査を行うにとどめた。そのため、基本的な順序や造成時期については不明である。

なお、F1とF2では設定トレーナーに合せて任意のグリッド設定をおこなったが、浴室跡では国土座標に合わせた3m間隔のグリッドを設定して出土遺物の取り上げを行った。

（2） 検出した遺構（第130～133図、図版46・47）

調査地の南寄りで礎石列SX301、石列SX312、池跡SG308、石組SX307を、北寄りで集石SX311、竈跡SL316・317を確認した。これらは、いずれも浴室に関する遺構と考えられる。

礎石列 SX301（第130・131図、図版47） 矩石列 SX301は径50cm前後の礎石4個（SS303・304・305・306）が並ぶ遺構である。平坦面の南寄りにあり緩斜面の裾が間に迫っているため、浴室建物の南辺柱列の礎石列と考えられる。SS303・304・305の各間隔はほぼ200cmだが、SS305・306間は230cmとやや広い。北方に展開する礎石は見つかっていないが、調査地の中央部はやや盛り上がっているので、一連の礎石が埋没している可能性も考えられる。

集石 SX311と石列 SX312（第130図） 集石 SX311は約3m四方の範囲に15～50cm程度の石が集められたものである。この集石の北東部には直角に曲がるコーナーが認められるので、浴室の基壇を構成する石垣の北東角の部分が残存したものと思われる。

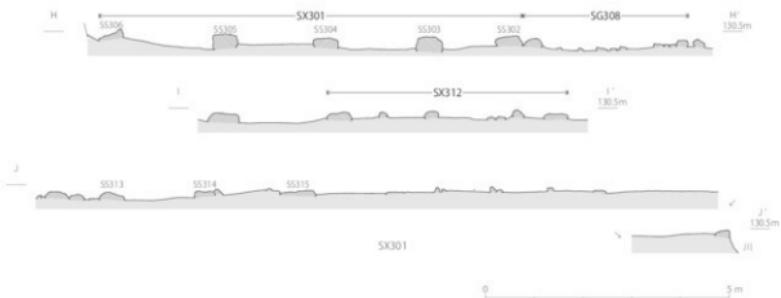
一方、石列 SX312は石SS302から北東方向7mにおよぶ石の並びである。石SS302のほか20～50cmほどの石が7つ程度並ぶが、この並びのラインを延長すると集石 SX311の東側面に沿う。



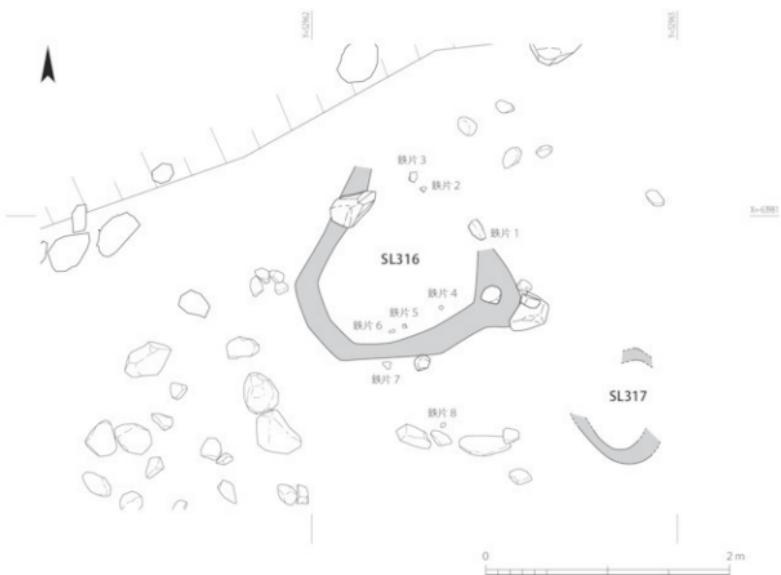
第130図 浴室跡(F3) 平面図(1:100)

よって、これらは浴室の基壇の地覆石あるいは縁石を構成していたと思われる。なお、石SS302は、石SS303との間隔がSX301の他の石同士との間隔を比較して狭いことから、礎石と考えるよりは基壇に関係する石と見た方が良いであろう。

竈跡 SL316・317 (第132図、図版46) 平坦面の北寄りで竈跡 SL316・317 を確認した。両者の間隔は約 1 m と比較的近い位置にある。



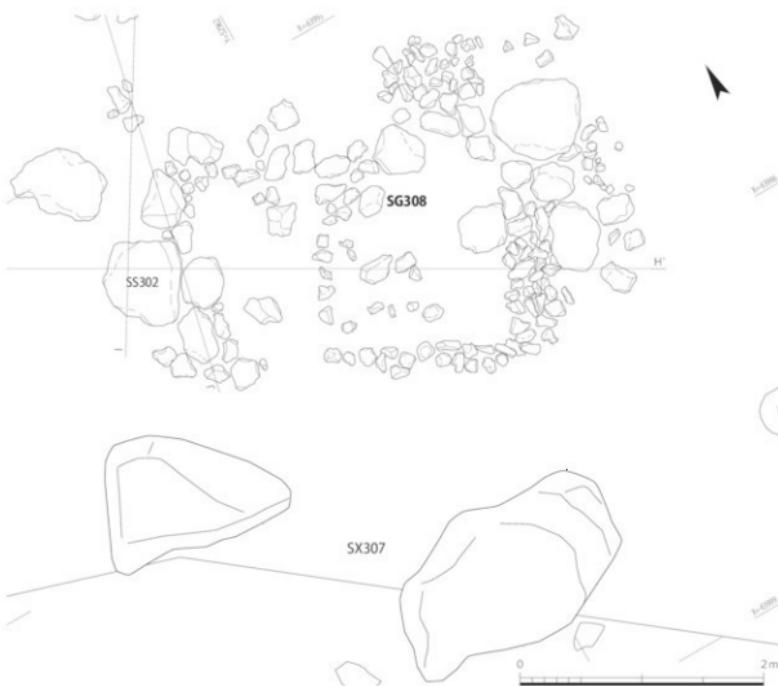
第131図 磂石断面図 (1:100)



第132図 焼土平面図 (1:40)

前者は径1.8mほどの範囲で、後者は径1m程度の範囲において焼土が弧状に認められ、前者からは鉄釜の破片（図版69-7）も見つかっている。浴室の北寄りに竈が配置されたのは、風通しや川からの汲水を考慮したことであろう。

池跡 SG308（第133図） 浴室の南東角にあたる場所で見つかった池跡SG308は、10～70cm大の石を長方形に並べ東西240cm、南北140cmのスペースを区画している。この中央付近にも短辺と平行に1列の石が並ぶため、さらに小さく区画されているのかもしれない。石組SX307は遠山石や景観石として置かれたと考えられるので、北側が正面となろう。なお、この池が浴室に付随して造られたかどうかは不明である。
（三原一将）



第133図 池跡平面図（1:40）

6 出土遺物（第134～146図、図版19・20・68・70）

鰐淵寺川南区の出土遺物については、発掘調査を行ったF1、F2および浴室跡(F3)ごとに、また層位ごとに記述する。

(1) 遺構に伴う遺物（第134図、図版19）

F1 出土遺物

F1は、おもにピット内から遺物が出土した。青磁1点、褐釉陶器1点、土師器55点である。いずれも小片のため器種、時期については不明であったので、種別と破片数を記載する。

SP346 褐釉陶器1点、土師器32点。

SP349 土師器2点。

SP350 土師器13点。

SP351 青磁1点、土師器5点。

SP353 土師器2点。

SX363 土師器1点。

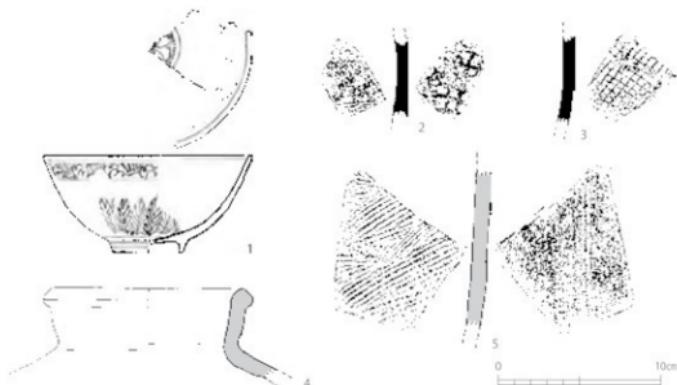
F2 出土遺物

F2もすべてピット内からの出土であった。白磁1点、青磁1点、褐釉陶器1点、青花3点、備前焼3点、中世須恵器3点、土師器55点、炭化物1点であるが、小片のため図化したもの以外は器種、時期不明であったので、種別と破片数を記載する。

SP321 土師器22点、炭化物1点。

SP322 中世須恵器2点、土師器17点。第134図2・3は中世須恵器の蓋で、体部外面に格子タタキがみられる。12世紀～14世紀である。

SP324 土師器2点。



第134図 遺構内出土遺物（1：3）

SP326 青磁1点、青花2点、土師器3点。第134図1は青花で、碗C群である。口縁部外面に波瀾文帯、体部に芭蕉葉文をもつものである。15世紀後半～16世紀前半である。

SP328 土師器1点。

SP329 土師器5点。

SP330 白磁1点、備前焼2点。第134図4は備前焼の壺である。玉縁状になる口縁部で、乘岡氏の編年中世6a期、16世紀前半である。

SP331 青磁1点、褐釉陶器1点、備前焼1点、中世須恵器1点、土師器1点。第134図5は備前焼の壺である。

SP332 青花1点、土師器4点。

(2) F1の遺構に伴わない遺物（第135～138図、図版68・69）

① F1のA層出土遺物（第135図、図版68）

貿易陶器（第135図、図版68）

白磁（第135図1～3） 1は端反り口縁をもつ碗V類で、釉色はくすんだ灰白色を呈する。2・3は皿VI類で、2の口縁端部は少し尖り気味、3は丸味をもつ。12世紀である。

青磁（第135図4・5） 4は越州窯系青磁碗III類で、高台が付き、体部下半に縱に1条の刻みが入る。黄緑色を呈する。11世紀初め頃である。5は龍泉窯系青磁で、口縁が外反する皿IV類かV類である。

中国陶器（第135図6・7） 6・7は褐釉陶器で、ともに鉢である。6は口縁端部の断面が外方の飛び出す形状、7は三角系状をしている。16世紀である。

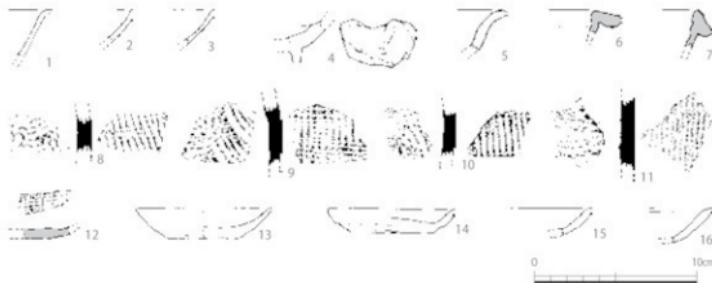
図版68-1～5は褐釉陶器の体部等の破片で、壺、四耳壺、鉢などの器種となる。灰黄色や黄褐色を呈する。

朝鮮系陶器（図版68-6） 6は朝鮮李朝の褐釉瓶（徳利形）の体部である。

国産陶磁器・土器（第135図、図版68）

古代須恵器（第135図8～11） 8～11は壺の体部、11世紀以前である。

瀬戸・美濃焼（第135図12） 12は鉢皿で、内面に鉢目がみられる。



第135図 F1 A層出土遺物（1:3）

壺器系陶器（図版 68－7） 7は壺の体部で、色調は灰褐色を呈する。

土師器（第135図13～16） 13・14は土師器の皿である。13は体部が内傾気味に立ち上がる。

14は体部が短く直線的に立ち上がり、器高が低い。12世紀後半～13世紀後半と思われる。

15・16は京都系土師器皿である。体部はやや厚く、やや内湾する。16世紀である。

その他（図版68－8） 8は頁岩製の硯で、陸側の破片である。薄い作りで、縁と陸の段差はわずかである。

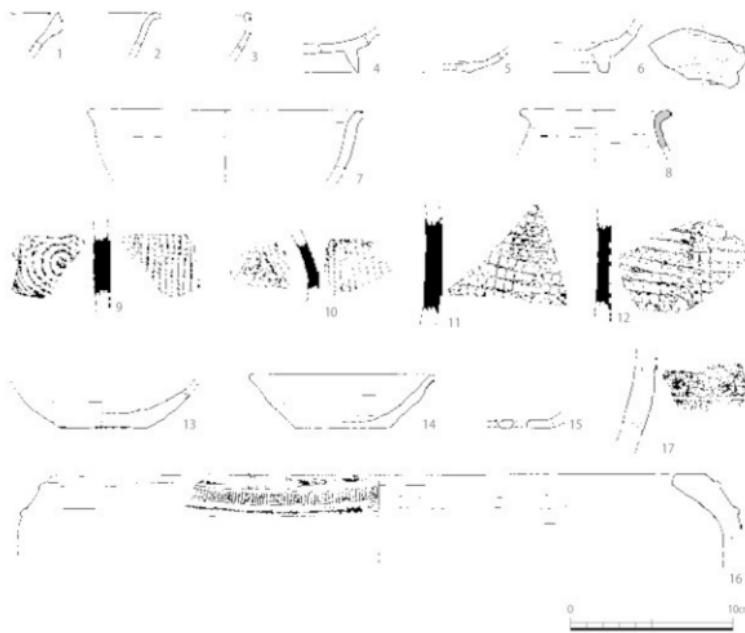
② F1のB層出土遺物（第136図、図版68）

貿易陶器（第136図、図版68）

白磁（第136図1～5） 1は玉縁状口縁をもつ碗IV類で、体部外面に貫入がみられる。2・3は端反りの碗V類で、3の体部は内湾し、口縁部で屈曲して外反する。12世紀である。4は碗類で高い高台をもつもの、5は皿VI類、ともに11世紀後半～12世紀前半であろう。

図版68－9は碗と思われる。

青磁（第136図6・7） 6は越州窯系青磁碗III類で、高い高台が付き、体部下半に縦に1条の刻みが入る。黄緑色を呈する。11世紀代である。7は龍泉窯系青磁碗で、外反する口縁をもつD類に属する。器壁は厚く、釉色は薄い緑色を呈する。14世紀末～15世紀初め頃である。



第136図 F1 B層出土遺物（1:3）

中国陶器（第136図8、図版68） 8は褐釉陶器の瓶形の口縁部である。

図版68-10～13は褐釉陶器の四耳壺、壺、鉢などの破片と思われる。

国産陶磁器・土器（第136図、図版68）

古代須恵器（第136図9・10） 9・10は甕の体部、11世紀以前である。

中世須恵器（第136図11・12） 11・12は甕の体部、外面に亀山系の格子タタキを施す。

瓷器系陶器（図版68-14・15） 14は擂鉢と思われ、内面に擂目がみられる。15・16は甕の体部で、色調は灰褐色を呈する。

土師器（第136図13～15） 13・14は土師器の杯である。13は体部がゆるやかに内湾して立ち上がる。器壁は厚い。口縁部は欠損しているが、12世紀後半～13世紀初め頃と思われる。14は体部が直線的に逆「ハ」字状に立ち上がり、器高は低く、器壁は薄い。14世紀～15世紀である。15は土師器片で、径7mmの穿孔が認められる。

瓦質土器（第136図16・17） 16・17は瓦質土器の火鉢である。16は円形浅鉢形土器である。口縁部は「コ」字状に内側に屈曲し、口縁上部は平坦になる。外面に2条の突帯を巡らせ、その間に雷文帯が押捺される。17は火鉢で、口縁部近くに2条の沈線を巡らせ、その間に円形の花文が押捺される。14世紀末～15世紀初め頃である。

③ F1のC層出土遺物（第137図、図版69）

貿易陶磁器（図版69）

中国陶器（図版69） 1～3は壺か、鉢の破片である。

国産陶磁器・土器（第137図）

古代須恵器（第137図1、図版69） 1は甕の体部、11世紀以前である。

土師器（第137図2～4） 2・3は土師器の皿である。2は内湾気味に立ち上がる。3は体部が短く外傾して立ち上がり、底径が大きい。器高は低い。2は12世紀後半～13世紀初め頃、3は13世紀後半頃と思われる。4は柱状高台付の杯か皿である。13世紀である。

図版69-4は高杯である。



第137図 F1 C層出土遺物（1:3）

（3）F2の遺構に伴わない遺物（第138～143図、図版69）

① F2のD層出土遺物（第138図）

土器（第138図）

土師器（第138図1） 1は京都系土師器皿である。口径6.4cmの小形で、

口縁端部が外反気味となり、底部は丸みをもつ。16世紀である。



第138図
F2D層出土遺物（1:3）

② F2 の E 層出土遺物（第 139～141 図、図版 19・20・69）

貿易陶磁器（第 139 図、図版 19・69）

白磁（第 139 図 1・2） 1 は端反り口縁をもつ碗 V 類である。2 は皿の底部で、外面は釉がかからず、12 世紀である。

青磁（第 139 図 3～9） 3～8 は龍泉窯系青磁で、3 は幅の広い蓮弁文をもつ碗 B II 類、4 は蓮弁が細線となり、剣頭が蓮弁を意識しないで施される碗 B IV 類である。5・6 は口縁部外面に便化した雷文帯をもつもので、碗 C III 類である。7 は口縁部が外反する碗 D 類で、外面に文様はみられない。3 は 14 世紀、7 は 15 世紀、4～6 は 16 世紀と考えられる。

8 は香炉の口縁部で、仏事に使用される。9 は同安窯系青磁碗 I b 類で、外面に細かい櫛目を有し、褐色はやや黄色味がかる。13 世紀前半である。

中国陶器（第 139 図 10） 10 は褐釉陶器の壺形の口縁部で、頸部が真っ直ぐ立ち上がり、口縁端部は小さな玉縁状となる。16 世紀である。

青花（第 139 図 11・12） 11 は碗 C 群で、広く開いた体部である。口縁帯に波瀆文帯、体部に芭蕉葉文をもつ。12 は皿 B 群で、外面に唐草文、内面見込みに玉取獅子をもつ。11・12 ともに 15 世紀後半～16 世紀前半である。

国産陶磁器・土器（第 140～142 図、図版 20・69）

中世須恵器（第 140 図 1～3） 1～3 は甕の体部で、外面に亀山系の格子タタキを施す。

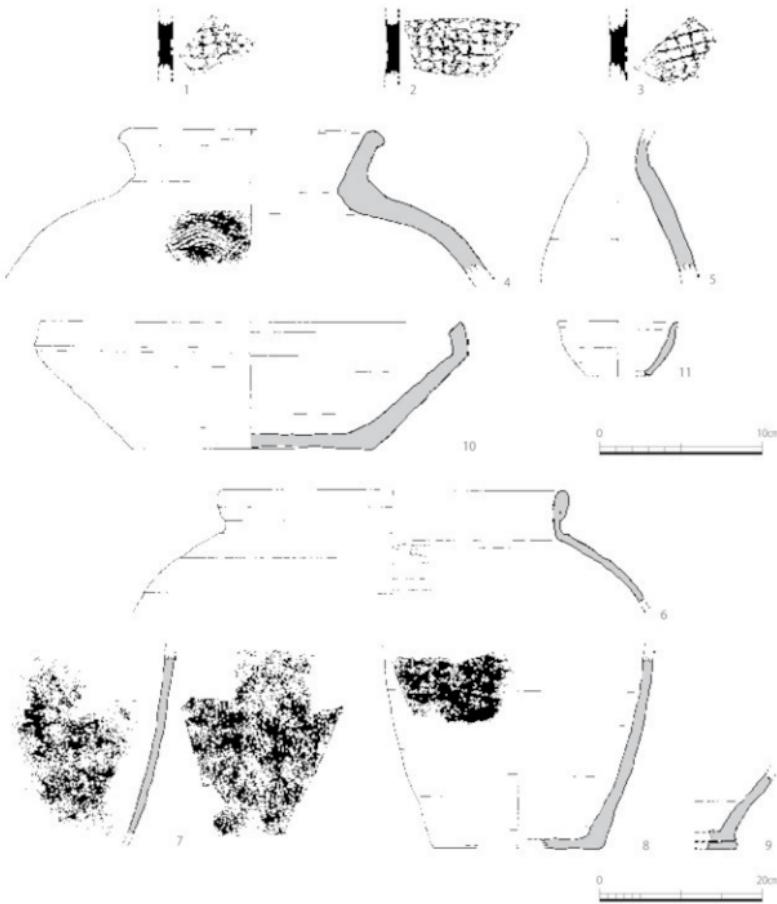
備前焼（第 140 図 4～10） 4 は玉縁状になる壺で、体部外面に波状文が施される。5 は徳利形になる壺の体部上半である。乗岡氏の編年中世 6a 期である。6～9 は甕である。6 は玉縁状の口縁が扁平化するものである。中世 4b 期である。7 は体部で、内外面は赤褐色を呈し、外面の上部は縱方向、



第 139 図 F2 E 層出土遺物（1）（1：3）

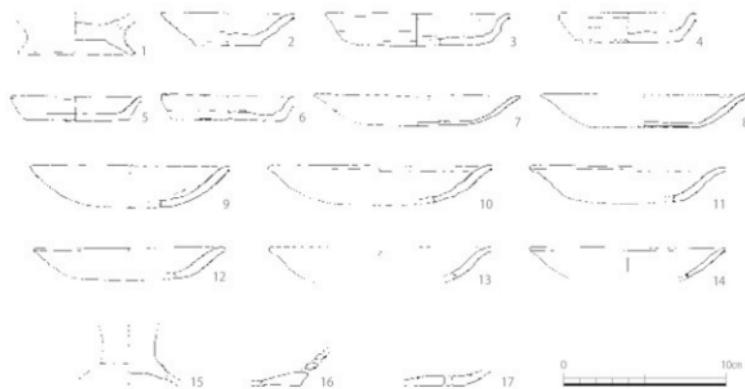
下部は斜め方向のケズリ、内面は横方向のハケメが施される。8は甕の体部から底部にかけて、胎土は粗い。内外面は横方向のナデを施し、体部外面にヘラ描きが認められる。9は体部から底部の一部で、外面は赤褐色、内面は釉がかかり胎色、胎土は灰黄色を呈する。外面は横方向のナデである。10は鉢である。口縁部はやや内傾して立ち上がる。内面に描目がなく、捏鉢とみられる。6は15世紀、4・10は16世紀前半である。

瀬戸・美濃焼（第140図11） 11は小天目で、口縁部はやや外反する。内外面に赤茶色の釉がかかること。



第140図 F2 E層出土遺物（2）(1:3, 1:6)

土師器（第141図） 1は高台付の土師器である。2～6は土師器の皿である。2は体部が内湾気味に立ち上がる。3～6は体部が短く外傾して立ち上がり、やや外反するもの（3）もある。口径に対する底径が大きい。底部は回転糸切り後、ナデ消しているものがある。口径が11.2cm（3）と8.1cm前後のもの（4～6）がある。2は12世紀後半～13世紀初め頃、3～6は16世紀後半頃である。



第141図 F2 E層出土遺物（3）（1：3）

③ F2のF層出土遺物（第142図、図版19・69）

貿易陶磁器（第142図、図版19・69）

白磁（第142図1） 1は玉縁状口縁をもつ碗IV類で、12世紀である。

青花（第142図2・3） 2は皿B群で、外反する口縁である。外面に牡丹唐草、内面見込みに玉取獅子をもつ。3は小形の皿B群で、わずかに外反する口縁である。外面に牡丹唐草、内面見込みに十字花文をもつ。15世紀後半～16世紀前半である。

国産陶磁器・土器（第142図、図版69）

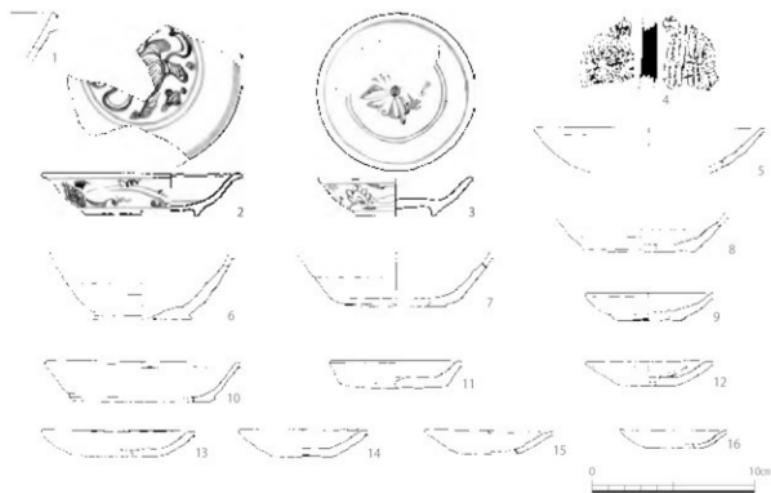
中世須恵器（第142図4） 4は甕の体部で、外面に亀山系の格子タタキを施す。

土師器（第142図5～16） 5～8は土師器の杯である。5は体部が内湾して立ち上がり、口縁部近くで外に開く。器壁は薄く、胎土が細かい。搬入品の可能性がある。6～8は体部が内湾気味に立ち上がり、底径は大きい。6は13世紀後半頃である。

9～11は皿である。9は体部が内湾気味に立ち上がる。10・11は体部が外傾して立ち上がる。10は口径11.7cm、11は口径7.9cmを測る灯明皿である。9は12世紀後半～13世紀初め頃、10・11は16世紀後半頃である。

12～16は京都系土師器皿である。口径が8.3cm前後と小さく、底部はやや平底となる。

土師質土器（図版69） 図版69－5は土師質土器の火鉢の破片と思われる。

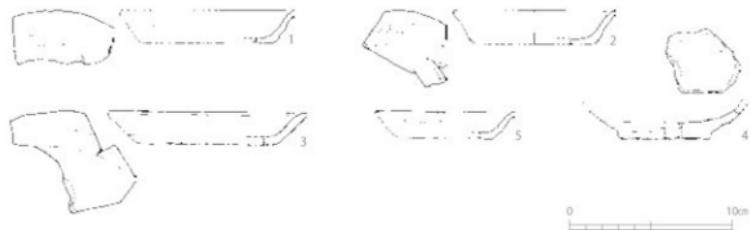


第142図 F2 F層出土遺物（1:3）

(4) 線刻土師器（第143図、図版20）

第143図は、焼成後に鋭利なもので刻まれた線刻土師器の皿である。1～4はF1から、5はF2から出土した。

1～3, 5は、体部が外傾して立ち上がり、4は、やや外傾する。1は「□[天カ]王□[大カ]○(記号)」、2は「南ム天□[王カ]天」、3は「天カ王カ」、4は「天□[王カ]」と読むことができる。5は外面に「天王天」が認められる。16世紀後半頃である。



第143図 線刻土師器（1:3）

(4) 沐室跡（F3）の出土遺物（第144図、図版69）

鉄製品

鉄釜（図版69） 図版69－7は鉄釜片である。口縁端部が欠損しているが、口径はおよそ57.6cmになると思われる。残存する最大幅は18cm、厚さは8mmである。外面上部に高さ6mmの突帯がめぐる。

その他、鉄釜の一部と思われる破片が2点出土した。

土器

土師器（第144図1・2、図版69） 1・2は土師器の皿である。1は体部が内湾気味に立ち上がる灯明皿である。2は体部が外反して立ち上がり、下半はナデにより絞り込む。底径は大きく、回転糸切りである。灯明皿である。1は12世紀後半～13世紀初め頃、2は17世紀中頃以降である。



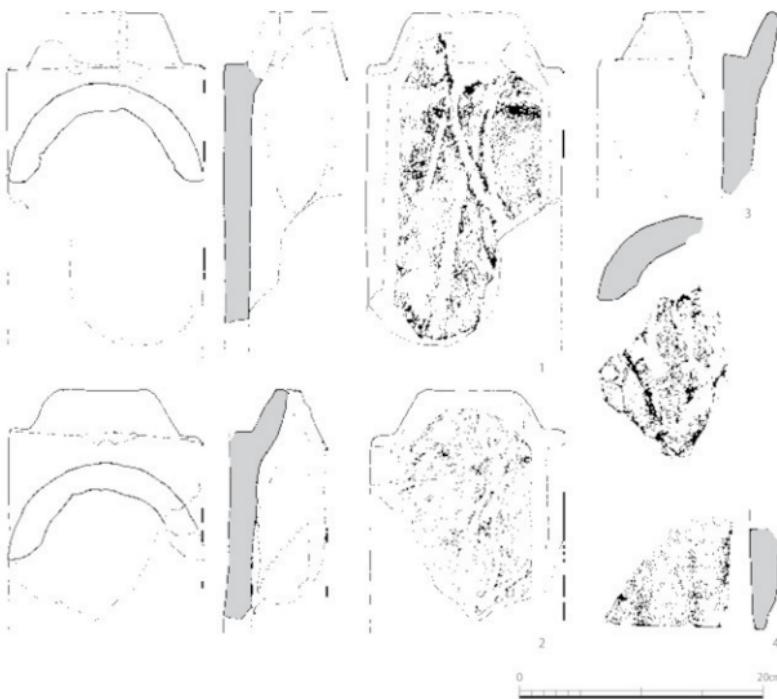
第144図 沐室跡出土遺物 (1:3)

土師質土器（図版69-6） 図版69-6は土師質土器の火鉢の高台部と思われる。 (穴道年弘)

(5) 鰐淵寺川南区出土の瓦と銭貨（第145・146図、図版70）

瓦（第145図、図版70）

浮浪滝地区の最下段（平坦面F1～F6）の中世瓦採集量は、丸平瓦あわせても3点（0.6kg）しかない。一方、発掘では16点（4.1kg）が出土し、なかでもF2の4トレンチでは中世丸瓦10点（3.3kg）が出土した。つまり、洪水砂層の下にこれらの中世瓦があり、以後は瓦を使った建物がなかったこと



第145図 瓦 (1:4)

を物語るのであろう。

図示できたのは丸瓦のみである。平瓦は小破片ばかりなので割愛した。1は丸瓦A1の大型品。(丸瓦分類は第4章67頁参照)。U字形の太い吊り紐痕が連続する。2はW字形の吊り紐痕をもつ丸瓦A2の大型品。玉縁部側面の面取りは1・2とも段部の側面幅全体に及んでいる。3も丸瓦Aの玉縁部。4は丸瓦広端部片である。1~4はいずれも4トレンチから出土した。

銭貨（第146図、図版70）

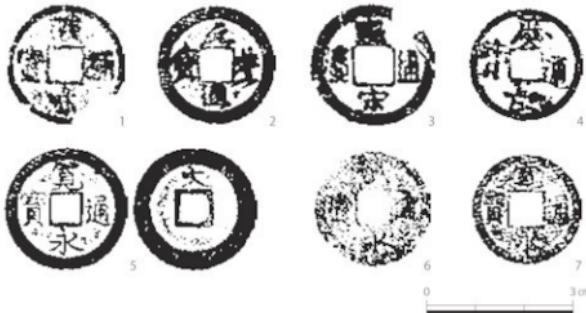
F1 平坦面の1トレンチと2トレンチから計7枚、F2 平坦面の4トレンチから1枚、そしてF3 平坦面から1枚が出土した。北宋銭5枚と日本銭4枚である。

1トレンチでは、「寛永通寶」2枚（第146図5・6）のほか、北宋銭の「熙寧元寶」（篆書、初鑄1086年）と「政和通寶」（篆書、初鑄1111年、第146図1）各1枚をみいだした。「熙寧元寶」は3期造成土層からの出土、ほかは表土層の出土。「寛永通寶」の1枚は背面上に「文」字のある、2期の新寛永（第146図5）。

2トレンチからは、「寛永通寶」（3期）1枚（第146図7）と「慶長通寶」（慶長年間、1596～1615年）1枚（4）、計2枚の日本銭が出土した。「慶長通寶」は、中四国地方では初出と思われる（鷲谷1996）。北宋銭は「元豊通寶」（行書、初鑄1078年、第146図2）と「□宋□寶」各1枚である。後者は、「皇宋通寶」と思われる。いずれも表土層出土である。

4トレンチでは、北宋銭の「皇宋通寶」（真書、初鑄1038年）1枚が出土したのみ（3）。ほかにF3平坦面で「寛永通寶」（3期）1枚を採集した。

（花谷 浩）



第146図 銭貨（1:1）

7 小 結

鰐淵寺川南区は浮浪滝と根本堂の中間、浮浪滝地区の北部に位置する。根本堂地区と滝との結節点であるとともに、かつては、遙堪越えて鰐淵寺を訪れるに足を踏み入れる境内地であった。また、三方を川に囲まれた生活における利水が容易な場所である。

この区の平坦面F1～F6を合わせた面積は2,201m²に及び、うち調査対象となったF1・F2・浴室跡(F3)の合計面積は1,391m²を占める。このように、鰐淵寺川南区は、山間にあっては比較的広い平坦面が確保できることから、僧坊などの関連施設が配置されたと想定できた。

今回の調査の結果、僧坊があったことを傍証するとみられる建物跡などを発見することができた。また、江戸期の絵図に描かれた浴室の存在を裏付ける礎石列や窓跡を確認したほか、採集した墨書き刻書土師器からは、鰐淵寺川南区が鰐淵寺において、重要な宗教的空間であったことが垣間見えてきた。

平坦面の利活用 F1とF2では、それぞれ三度の平坦面造成を確認することができた。これらの造成時期を、F1でKM1期(13世紀以前)、KM2期(13～15世紀)、KM3期(15～18世紀)、F2でGM1期(16世紀以前)、GM2期(16世紀)、GM3期(16～17世紀)とした。さらに、F2では南北で18mにわたり平坦面が削り出されていることが分かった。このような度重なる造成は、この地で積極的な平坦面利用がなされていたことを物語っているといえよう。

僧坊の有無 F1では15～18世紀の建物跡と推定される礎石列SX361が見つかったほか、人の生活がうかがえる瓦質土器の火鉢(第136図16)、壺器系陶器の擂鉢(図版68-14)、瀬戸焼の卸皿(第135図12)などの遺物も出土している。そして、F2ではGM2期造成面において16世紀の建物跡と考えられる柱穴の並び(SP331-330-326-325など)が見つかっている。位置や給水が容易な点などこの地の状況を勘案すると、これらの調査成果は、かつてここに僧坊があったことを傍証するを見てよいであろう。

信仰の空間 F1からは褐釉陶器(図版68-10～13ほか)の破片が多く採集されている。これらの中には細身の四耳壺が少なくとも3点認められ、經筒として利用されたと思われる。13世紀ごろの所産であるこの四耳壺は、鰐淵寺における如法經信仰の一端を示す遺物といえよう。F2でも褐釉陶器片が出土するがその数は数点にとどまり、F1と様相が異なる。これは、褐釉陶器片がF1南の斜面から流れ込んできたためと考えられ、分布調査と考え合わせ、斜面上部の高い位置に經塚が存在することを示唆する。

また、F2からは多量の土師器片が出土しており、付近で何らかの祭祀が行われていたと思われる。これら中には「天王」と刻書された土師器皿(第143図5など)が数点認められ、牛頭天王を表したと考えられる。F2の南斜面には山王七仏堂があり、かつては牛頭天王坐像などを祀る「山王祇園管神」社(『雲陽誌』)があった(第3章第3節)。この皿は16世紀後半のものと推定されることから、この時期に牛頭天王祭祀が行われた蓋然性が高いといえよう。さらに、分布調査においては山王七仏堂の直ぐ西にあるF8平坦面で、輪宝が墨書きされた土師器(第53図33)が採集されている。

これらのことから、鰐淵寺川南区が立地的に浮浪滝や藏王堂の「前面」に展開する広場であり、か

つ、根本堂との結節点であることから、南北両院がともに信仰上重要視していた場所と推察される。

多量の京都系土師器皿 この地区では、京都系土師器皿の出土量が多い。これらほとんどは16世紀後半のもので、尼子氏の介入を契機に、鰐淵寺で行われるようになった献杯儀礼で大量に消費されたとみられる（第7章第4節）。鰐淵寺と戦国大名の関わりという、鰐淵寺の歴史上、重要な画期を示すとともに、特別な儀礼が行われていたことを物語る遺物として注目される。

洪水の痕跡 F1からF2にかけて、洪水砂が広く堆積していることが確認できた。山間を縫って流れる鰐淵寺川は、土石流など度重なる災害を鰐淵寺にもたらしたことであろう。鰐淵寺川に面するF1の崖面では、1mに及ぶ洪水砂の堆積が認められ、被害の甚大さが推察できる。出土遺物から、この洪水の時期を16世紀と推定することができた。

浴室跡の様子 江戸期の絵図にはF3に桁行四間、梁間一間、入母屋造の浴室が描かれている。明治期の絵図には描かれていないことから、江戸時代に建てられ、明治35年（1902）までになくなつたと考えられる。調査では礎石SX301、竈跡SL316・317などのほか、鉄釜の残欠（図版69-7）も採集し、浴室の存在を裏付けた。

規模も推定可能となった。浴室の南端の礎石が4つ残っており梁間が6.6mであることが分かる。桁行方向の礎石は発見できておらず、平坦面の北西部分が川の浸食により流失しているが、基壇と考えられる集石SX311などから推定すると、桁行の長さは13～14mと思われる。この規模は、宝暦14年（1764）の『万指出』で記載された浴室の規模「二間半 六間」と大きく異なるものではない。

さらに、構造も明らかになりつつある。浴室の間取りや構造は江戸期の絵図では読み取れない。しかし、今回の調査では釜屋が川に近く利便性が高い建物北端に設けられていることが確認できた。よって、中ほどに浴室、南端に前室があつたと考えられる。

なお、浴室に関する史料としては正平10年（1355）の『鰐淵寺大衆条々連署起請文案』が注目される。「温室次第事」として「一番老僧已時、二番中臘午時、三番下臘未時、（中略）四番行人申酉二時」と入浴順と時間が記されている。

検出遺構の軸方向 昭和18年（1943）まで仏心橋からの通路として機能していた東西道路SF336をはじめ、F1の礎石列SX361や落込みSX344、F2の石垣SW335、溝SD327、柱穴の並びなどはその軸方向がほぼ正方位を指向する。これらのうちSX344は13～15世紀の遺構と考えられるため、この軸方向は長期間にわたり踏襲されてきたと考えられる。

一方、浴室跡があった平坦面では石SS313・314・315がほぼ南北に並んでいる様子も認められるが、礎石SX301は東西を指向していない。

これらのことから、この地では長きにわたり正方位を意識して境内整備が行われてきたと考えられるが、場合によっては、地形などの制約によって軸方向が変えられることもあったと考えられる。

まとめ 今回の調査では、鰐淵寺川南区で度重なる造成が行われていることが分かり、平坦面の利活用が積極的に行われていたことが判明した。F1とF2で推定した造成時期のうち、KM1期（13世紀以前）、KM2期（13～15世紀）、KM3期（15～18世紀）、GM2期（16世紀）は和多坊跡や等窓院南区でそれぞれ確認された三度にわたる造成時期とほぼ合う（第5章第6節）ことから、鰐淵寺川南

区における境内整備も、根本堂地区と一体的に行われていたことが明らかとなった。

この地における境内整備の目的は、僧坊の設置がまず考えられる。F2で見つかった建物跡などは、僧坊の存在を傍証するものとみて良いであろう。

しかし、今回の調査における最も興味深い成果は、「天王」と刻まれた土師器や、京都系土師器皿の大量出土により見えてきた、鰐淵寺川南区がもつ宗教的、儀礼的な場としての機能である。浮浪滝、藏王堂から下った最初の開けた場所であるこの地が鰐淵寺の信仰・儀式における重要な空間であったことが垣間見えてきた。

(三原一将)

註

(1) 昭和 10 年 (1935) ごろに撮影された仏心橋の写真 (池橋 1997) を参考にした。

(2) 文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏に実見いただき、確認した。

参考文献

池橋達雄 1997 「近現代の鰐淵寺」『出雲国浮浪山鰐淵寺』、浮浪山鰐淵寺、229・230 頁

嶋谷和彦 1996 「慶長通寶出土遺跡聚成表」『出土銭貨』第 5 号 出土銭貨研究会、121－122 頁

第5節 鰐淵寺境内発掘調査に伴う¹⁴C年代測定

鰐淵寺は、島根県中央部、出雲市別所町に位置する天台宗の古刹であり、現在も根本堂をはじめとする伽藍が残る。

本報告は、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市文化環境部文化財課の委託を受け、鰐淵寺境内での発掘調査に伴って検出された各遺構の形成時期を明らかにする目的で実施し、¹⁴C年代測定(AMS法による)業務報告書を再編集したものである。

測定試料について 分析試料は、出雲市文化環境部文化財課により採取・保管中の試料から8試料の御提供を受けた。試料採取地点の詳細は、別途本文に示してある(第82~84, 104, 125, 127図)。また、第18表に分析試料の詳細を示す。

年代測定方法 1.2N塩酸による酸洗浄の後に1.0N水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度1.2N塩酸による酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。

¹⁴C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。曆年代較正にはOxCal ver. 4.2.3(Bronk Ramsey, 2013)を用いてINTCAL13(Reymer et al., 2013)を利用している。

年代測定結果 測定結果を第18表に示す。また、第147図に曆年較正結果のグラフを示す。それぞれの試料についての大まかな年代は、以下の通りである。

和多坊跡 炭サンプルA：10世紀末～11世紀前半の値が得られた。

和多坊跡 炭サンプルB：13世紀前半～後半の値が得られた。

和多坊跡 炭サンプルC：9世紀末～10世紀末の値が得られた。

等瀬院南区 炭サンプルD：12世紀後半～13世紀後半の値が得られた。

等瀬院南区 炭サンプルE：15世紀後半～17世紀前半の値が得られた。

鰐淵寺川南区 炭サンプルF：13世紀後半～14世紀後半の値が得られた。

鰐淵寺川南区 炭サンプルG：13世紀後半～14世紀後半の値が得られた。

鰐淵寺川南区 炭サンプルH：15世紀後半～17世紀前半の値が得られた。

(渡辺正巳)

参考文献

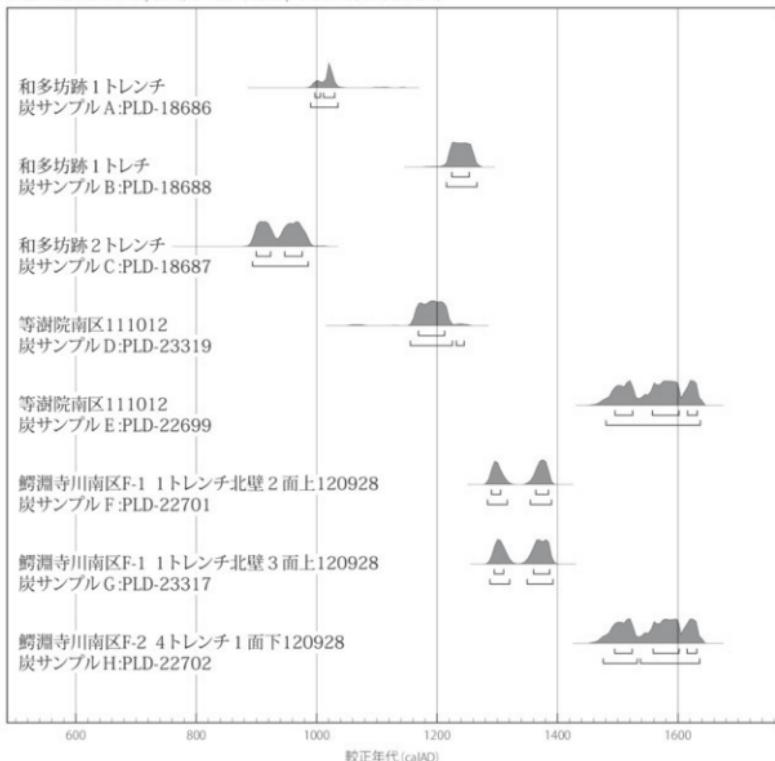
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

第18表 測定試料一覧表(測定結果)

IDH			測定年	測定年代 ¹⁾ (yrBP±1σ)	δ ¹⁴ C (‰)	算年較正年代 ²⁾ (yrBP±1σ)	補正年代 ³⁾ (yrBP±1σ)	前年較正年代			
No.	種別	出土地点ほか	測定値					1)の年代範囲	2)の年代範囲	測定番号 (PLD)	
炭サンプルA	炭化材	和多坊跡 1トレチ	-	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	98±18	-24.44±0.12	1008±17	1010±15	AD991-1006(13.2%) AD1012-1030(5.0%)	AD990-1035(95.4%)	18686
炭サンプルB	炭化材	和多坊跡 1トレチ	-	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	793±18	-24.42±0.11	802±17	800±15	AD1224-1259(68.2%)	AD1215-1266(95.4%)	18688
炭サンプルC	炭化材	和多坊跡 2トレチ	-	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	1095±18	-24.41±0.12	1105±18	1105±20	AD989-912(28.9%) AD945-973(39.3%)	AD983-989(95.4%)	18687
炭サンプルD	炭化材	等湖院南区 111012	0.2026	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	864±19	-25.44±0.19	856±19	855±20	AD1172-1214(68.2%)	AD1153-1225(93.9%) AD1233-1252(1.5%)	23319
炭サンプルE	炭化穀殻7	等湖院南区 111012	1.3347	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	326±19	-24.32±0.19	337±19	335±20	AD1495-1525(26.5%) AD1616-1630(24.6%)	AD1480-1636(95.4%)	22699
炭サンプルF	炭化材	鶴淵寺川南区 F-1 1トレチ 北壁2面上 120928	0.6494	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	634±20	-23.90±0.15	652±19	650±20	AD1290-1305(27.4%) AD1364-1385(40.8%)	AD1284-1316(42.3%) AD1354-1390(53.1%)	22701
炭サンプルG	炭化材	鶴淵寺川南区 F-1 1トレチ 北壁3面上 120928	2.0256	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	647±19	-25.43±0.18	640±19	640±20	AD1295-1310(24.7%) AD1360-1387(41.5%)	AD1288-1320(38.9%) AD1350-1392(56.5%)	23317
炭サンプルH	炭化材	鶴淵寺川南区 F-2 4トレチ 1面下 120928	1.8709	IR-アシカリ-酸性水 (HC1.2N(NaOH)0.0NHCl)1.2%	358±21	-26.08±0.19	339±20	340±20	AD1495-1524(21.9%) AD1615-1631(24.4%)	AD1475-1635(95.4%)	22702

¹⁾yrBP 前年較正年代 ²⁾yrBP 補正年代

OxCal v4.2.3 Bronk Ramsey (2013); r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第147図 历年較正結果(分布)

第6節 発掘調査の成果概要

前節まで和多坊跡、等湖院南区および鰐淵寺川南区の発掘調査成果を述べてきた。

和多坊跡は、根本堂地区北部に位置し、江戸期および明治期の絵図で「和多坊」として建物が描かれている場所である。調査は、鰐淵寺の中心僧坊として重要な位置を占めていた和多坊の規模、建物等の配置および残存状況、そして現存している礎石以前の建物痕跡を探る目的で行った。

等湖院南区は、根本堂地区南部に位置し、絵図になく坊名は不明であるが、広い平坦面が残り遺物が採集されることから、何らかの施設があった可能性を想定して調査を行った。

鰐淵寺川南区は、浮浪滝地区の北部に位置している。鰐淵寺川の南側にも僧坊跡があるのではないか、また江戸期の絵図に高札や浴室が描かれていることから関連諸施設を確認するために調査を行った。

以下に成果概要を記し、各時期の併行関係をまとめてみたい。

1 各発掘調査の成果概要

(1) 和多坊跡

和多坊跡は、根本堂地区の上段平坦面に位置し、根本堂のある最上段平坦面を除くと本坊（旧松木坊）とともに最大の広さをもつ平坦面である。

調査の第一の成果は、この礎石建物跡の正確な規模・構造を把握することができただけでなく、その下に眠っていた中世期の僧坊跡の痕跡を新たに発見することができたことである。鎌倉時代の建長2年（1250）以来の文書記録をもつこの和多坊が、その遺構を今も地下に良好に残していることが明らかとなり、榮華を極めた中世世界がそのまま遺存していることを確かめた。

第二の成果は、現在の平坦面も含め、3期にわたり平坦面を造成していることが判明した点である。各時期を推定すると下記のとおりとなる。

WT1期造成 13世紀後半以前

WT2期造成 13世紀後半以降

WT3期造成 16世紀代

和多坊は明治38年（1905）に焼失したが、その建物の礎石は現存している。礎石に伴う平坦面の造成はWT3期、つまり最後の造成であることがはっきりした。また、三度の造成はいずれも後背山側の斜面を切り、前面谷側に盛土をして平坦面を造り出し、かつ前面に石垣を構築する手法で、順次平坦面を拡張していた。いずれの造成も非常に大規模なもので、この後の調査により、鰐淵寺中枢地域では計画的に行われた3期の造成が明らかとなっていく。

出土した遺物も豊富であった。白磁、青磁、中国陶器などの貿易陶磁器や古代須恵器、中世須恵器、中近世土師器など、古代から近世まで時代をまたがって出土した。特に近世陶磁器は他地点に比べても多く、明治35年の焼失が影響していると考えられる。それに比し、中世期の遺物は非常に少なく、焼失前に持ち出した可能性もある。

一方、瓦の出土は少なく、和多坊には瓦葺き建物はなかったと考えられる。

調査は発掘範囲が限られ、また後世の攪乱も多かったため、層位に合わせた遺物の取り上げがほとんどできず、結果、造成面の時期を絞り込むことはできなかった。今後、可能ならば面的な調査を行い、時期確定はもちろん、僧坊跡の建物構造等具体的な様相を捉えていきたいと考えている。

(2) 等湖院南区

等湖院南区は、根本堂地区の上段平坦面の南端に位置する。標高的には先に調査を行った和多坊跡とほぼ同じ高さである。広い平坦面であるが礎石等が見えず、絵図にも描かれていたので、近世以前の遺構がある可能性が高いと判断し調査を開始した。

発掘調査の結果、多数のピットや柱穴列、埋甕遺構、石垣等が検出された。

第一の成果は、近世以降に残った12坊以外の僧坊がこの地に建っていたことを確認できたことである。

第二の成果は、ここでも和多坊跡と同様に3度にわたる造成が大規模に行われていたことを確認したことである。各時期を下記のように推定した。

TM1期造成 12世紀代

TM2期造成 13世紀後半以降

TM3期造成 15世紀～16世紀

造成は、和多坊跡と同様に平坦面前面の谷側を盛土し、その先に石垣を構築して拡張する方法を探っていた。異なるところは、和多坊跡が土砂をそれ以前の遺構の上にも盛土しているのに対し、等湖院南区では、背面山側が岩盤で硬く掘削ができないため、土を上面には盛れず、前面拡張部分だけに盛っている点である。

等湖院南区の施設は、中世後期に火災等に遭ったと考えられる。TM3期造成に建てられた僧坊の類が焼失した後、以来、少なくとも人が居住するような建物は建てられなかつたと考えられる。これはSW273の外側下面に堆積していた炭や焼土からも考察できる。検出された遺構のうち、一部の柱穴列や埋甕遺構は、軸線がそろっていることから最後の僧坊跡に関わる遺構と考えてよいであろう。TM1～3期の造成は、和多坊跡のWT1～3期の造成と時間的にはば重なっている。このことは、和多坊跡から等湖院南区まで続く上段の平坦面が、一体のものとして計画され、かつ大規模に造成された結果と判断できる。

出土遺物としては、青磁碗、青磁香炉、青白磁梅瓶、中国製天目など希少品や備前焼などの貯蔵用甕が多く見つかった。これらは15～16世紀に廃絶した際に取り残されたものと考えられ、僧坊の日常を捉えるのに好適な資料と考える。

等湖院南区の調査は、江戸期に僧坊12坊体制となる以前の姿が、中枢地域に広がっているいくつもの平坦面に残されている証左となった。現境内に残されている平坦面は、中世に造成されたものがそのまま残されている、つまり、鰐淵寺境内は中世期の姿をそのままとどめている極めて稀な境内空間といえるであろう。

(3) 鰐淵寺川南区

鰐淵寺川南区は南からの出入り口に当たり、根本堂地域から浮浪滝・藏王堂へ向かう際に必ず通る場所にも当たる。また、調査を行った平坦面は、南北道路の東側も合わせると2,000m近い規模であ

り、境内の中で最も広い平坦面の一つである。このような位置環境および規模を勘案すると、僧坊跡などの諸施設が存在している可能性は高いと考えていた。

今回の調査では、F1とF2でそれぞれ3面の造成面を確認し、次のとおり時期を推定した。

F1	KM1期造成	13世紀以前
	KM2期造成	13～15世紀
	KM3期造成	15～18世紀
F2	GM1期造成	16世紀以前
	GM2期造成	16世紀
	GM3期造成	16～17世紀

F1での各造成時期は、和多坊跡や等湯院南区のあり方と相似している。このことから3時期の造成は鰐淵寺山内の全域に及ぶものであり、それが計画的かつ大規模に行われていたことを推定できる。これが第一の成果である。

第二の成果は、分布調査成果と合わせて考えられることだが、白磁や中国陶器、特に褐釉陶器、そして京都系土師器の出土が多いこと、輪宝を示す墨書き器や「天王」の刻書き器の存在にある。これは、この地点が鰐淵山・鰐淵寺の始源である浮浪滻に最も近い空間であることも要因であろうが、山王社等とも関連した特殊な祭祀が行われていたことが確実視される。鰐淵寺川南区を含む浮浪滻地区では、古代末の如法經信仰と結びついた経塚に始まり、中世には牛頭天王祭祀、また京都系土師器による献盃儀礼（詳細は第7章第4節）が行われるなど、具体的な祭祀・儀礼の様相が明らかになった。これは非常に稀な事例ではないかと考える。鰐淵寺川南区は、寺の創建以来、南北両院を統合していた「浮浪滻と藏王権現」が果たした特殊性と重要性に起源する所であり、鰐淵寺統合の象徴として引きわめて重要な場であったのではないだろうか。

江戸期の絵図にあった浴室が現実に存在していた証左を確認したこと、これが第三の成果である。建物の推定規模もある程度推測することができたが、実際に湯を沸かした鉄釜片と窓跡が遺存していたことは驚きであった。鰐淵寺での入浴の規則は、正平10年（1355）の文書に定められており、まさに南北両院統一を象徴する施設でもあった。

また16世紀に大規模な洪水災害があった痕跡を見つけた。根本堂地区の滴翠館（巣王跡）を撤去する際に行った試掘調査でもこの痕跡が見つかっている。この洪水の具体的な年次を特定する史料はないが、その砂の厚さからかなりの被害をもたらしたことは想像に難くない。それが16世紀末のことであれば、毛利氏から寺領の大幅削減を言い渡された時期とも重なり、鰐淵寺試練の時に、自然災害も追い打ちをかけた可能性があると思われる。

F1・F2とも、11世紀以前の古代須恵器から近世の土師器や陶磁器（17世紀以降）に至るまでの遺物が出土している。鰐淵寺川南区で人が活動を開始した時期は、古代までさかのぼり、それは根本堂地区も同様であった。山内全体で古代から人々の活動が確認できたこと、これも大きな成果であった。

2 小 結

以上、3箇所の発掘調査によって土層の状況や出土遺物などから各造成時期を推定したが、これをまとめると下記のとおりとなる。

第1期造成 12世紀代 WT1期・TM1期・KM1期造成

第2期造成 13～15世紀 WT2期・TM2期・KM2期造成

第3期造成 16世紀代 WT3期・TM3期・KM3期・GM2期造成

根本堂地区の北部と南部に対峙する位置関係となる和多坊跡と等澍院南区は、ほぼ同じ標高に立地している。現成院跡も含め、境内中枢部の上段平坦面の造成が同時に、大規模かつ計画的に行われたことが推定できた。また、鰐淵寺川南区も第1期造成段階から根本堂地区と一連の計画に組み入れられていたとみられる。これがもつ意味は非常に大きい。

井上寛司氏の時期区分との関係で言えば（第3章第2節2参照）、第1期造成が鰐淵寺第1期に、第2期造成が鰐淵寺第2期の開始期に、第3期造成が鰐淵寺第2期の末期に当たると考えられる。これらは鰐淵寺の歴史の転換期に大規模な造成を行っていたこととなる。換言するならば、歴史学の認識と考古学の実態とがまさに整合性を持つのである。

また、これらの遺構・遺物が良好に遺存していることを確認した。中世の姿をそのまま目にできる境内であることを認識できた今、それがいかに貴重、かつ重要であるかを感じないわけにはいかない。和多坊跡では、13世紀以降大規模な造成が断続的に行われていた事実をつかんだ。中世から近世にかけて活躍する鰐淵寺の中核僧坊が、その出現から明治38年の焼失まで継続してそこに営まれていたことを明確にしたのである。中世から続き、後醍醐天皇や毛利元就などとも関係したこの坊の姿が今なおひっそりとあることに、一種の感動を禁じえない。

等澍院南区では、これまで知られていなかった僧坊跡を発見し、僧坊群の展開を実証することができた。分布調査で確認された平坦面が僧坊跡である蓋然性を高くする点で重要な成果である。かつた、ここは鰐淵寺第2期末期に焼失した後、再建されなかった。戦国大名らの介入によって、宗教的な抑え込みと寺領の大幅な削減をこうむり、寺としての岐路に立っていた鰐淵寺のあり様を直接的に示す事例である。壮大な歴史の一頁がまさに眼前に現われたのである。

鰐淵寺川南区は、特殊な遺物の出土等から宗教的・祭祀的な場としての役割を担っていた場所と推定できた。しかもそれは鰐淵寺総体としての計画のもとに造成されており、中世から近世にかけて連縋とその意味を維持していくのである。

いずれの調査も方法的に反省すべき点はあったが、成果は想定以上のものがあったと考えている。今後はこの成果を基盤として、より詳細に鰐淵寺史とその実態を追及していくけば、この稀有な寺の価値は一層高まるものと考えている。

（野坂俊之・穴道年弘・三原一将）

第6章 石造物調査

第1節 鰐淵寺石造物調査の概要

1 調査の目的と概要

鰐淵寺は山陰地方屈指の天台宗の古刹であり、豊富な文化財の伝来とともに、これらについて諸研究の蓄積が知られている。しかしながら、石造物の分野に限って言えば、石造美術、歴史考古学からごく一部の資料が紹介されたに過ぎず、これまであまり調査研究の対象に登っていなかったと言ってよい。こうした現状にあって、鰐淵寺では今回の調査が不十分ながらもはじめて基礎的かつ網羅的な調査となった。

本調査は、以上のような現状を踏まえて、石造物の有無の確認から始まり、その種類や分布といった全体的の様相を掴むことを第一の目的とした。そして、その整理の上に立って、鰐淵寺石造物の年代や特徴を明らかにすることを第二の目標とした。具体的には、出雲市文化財課から提供を受けた踏査結果を参考にしつつ、①境内外の分布調査を実施する、その上で②石造物の様相を把握する、そして③特徴的なものについて実測調査を行い、年代や性格などを検討する、という方法をとった。

本調査は、先の調査につづき（『科研報告』、岩橋康子、佐藤（今岡）利江、鳥谷芳雄、間野大丞の4名で実施し、実測については五輪塔を岩橋が、宝篋印塔を佐藤と間野が行い、鳥谷もこれに参加した。以下、このたびの石造物調査で得られた成果を報告する。先の調査研究報告と重なる部分があるが、最初に境内の中心部（A地区）をはじめとする石造物の全体的の様相を述べるとともに、その上で今回特に注目した、松露谷地区（C地区）と川奥地区（H地区）に所在する五輪塔と宝篋印塔について個別報告をするものである。

なお、各報告における石塔の年代観、石材の種類、性格付けについては、担当者間で必ずしも統一したものになっていないところがある。それぞれの責任において報告することをあらかじめ断っておく。

2 過去の調査歴

調査研究が浅いとはいえる、これまでに鰐淵寺の石造物を扱った文献が僅かながらもあるので、最初にそれらを紹介しておく（発表年次順）。

早い例では、日野一郎氏が出雲地域における石造塔婆を概観する中、室町時代の宝篋印塔の例として、鰐淵寺歴代墓地にあるものを写真付きで取り上げた⁽¹⁾。塔の台座や笠の部分が遺存しているもので、小塔ながら室町中期の粧いをみることができるとした（日野1963）。

同氏はまた無縫塔についても触れている。松露谷入り口付近の、八百屋お七に関係した吉三の追善塔と呼ばれる石塔の付近にあるもので、方形の台上に円形の塔身を受ける台を作り出している点に注目した。それはまた「逆修」の銘が僅かに読めることから、現世安穩、延寿無量、後生善処を念じた供

養塔であるとともに、あわせて江戸時代前半期のものであるが、古風な形式を示していると指摘した。

同じ無縫塔は、伊藤菊之輔氏も取り上げていて、逆修の銘が僅かに読めることから、江戸前半期のものであるが、古風な形式を示していると記述する（伊藤1965）。

原宏一氏は、松露谷地区にある板碑六地蔵6基を取り上げて、他に同類のものがなく大変珍しく貴重なものであると紹介した。うち一つに文久3年（1863）の年号と「堂司〔　〕／再〔　〕」の銘文があると指摘するとともに、ほかに壊れたもう2基があるとして、以前からあった板碑六地蔵をこの年に造り替えたとも考えられるとした（原1984）。

近年では、岡崎雄二郎氏らが現松江市西尾町にかつて所在した松江東照宮と、その別当寺であった円流寺に関連した石造物調査を行い、開山豪教をはじめとする歴代住職が鶴淵寺から出ていることに関連して同寺を現地調査し、松本坊・是心院・等潤院の3坊の墓地にある関連の石塔11基について、一部実測図を含みながら銘文等を報告した（岡崎ほか2010）。また写真図版には先の3坊の墓石群とともに、前円流院関係の各墓石を載せた。

3 境内中心部における石造物の様相（第148・149図 図版27）

境内中心部（A地区）の石造物は、ほとんどが根本堂から摩陀羅神社周辺にかけてあり、その他では和多坊や開山堂付近などに所在する（第19表）。種類は灯籠、石仏（地蔵・十王）、狛犬、水盤、石塔（開山塔・巡拝供養塔・六百万遍供養塔）、石碑（頼源律師碑・良忠記念碑）などである。石材はほとんどが来待石製であり、僅かに花崗岩やその他がある。年代は、紀年銘からすると18世紀後半から20世紀代まであって、江戸後期から近・現代にかけてのものである。踏査する限り、これより古様を示すものは認めがたい状況である。

そうした中、最も古い年紀のものは、やや中心部を離れて位置する山王七仏堂前（F10）にある元禄12年（1699）の石燈籠であり、唯一17世紀末に遡る。また、最も新しいものは、本坊前にある昭和60年（1985）の「良忠上人記念碑」である。浄土宗第三祖記主禪師良忠の七百回遠忌に当たり、鶴淵寺がその聖蹟地として再認識されたからと思われる⁽²⁾。また、数量的にまとまりある石造物は、念佛堂跡地付近にある六百万遍供養塔群であり（A21）、享保10年（1725）から大正6年（1917）までの67基からなる石塔群である（第149図、第20表）。

なお、境内を含め、幾ルートからの参道沿いには、石造の一丁地蔵が点々と残されている。多くは基礎の前方左右に對の孔を有するのが特徴である。遙堪⁽³⁾付近にある元文5年（1740）在銘のものが古い例であり、年代はおそらく18世紀前半以降から、近世末・近代に至るまでと推定される⁽³⁾。

4 松露谷地区と川奥地区の様相

境内中央部の様相とは異なり、主に中世から近世にかけた時期の石造物を確認したのが、松露谷地区（C地区）と川奥地区（H地区）である。ともに石塔中心で構成されていて、現況では墓地群の様相を呈する箇所である。



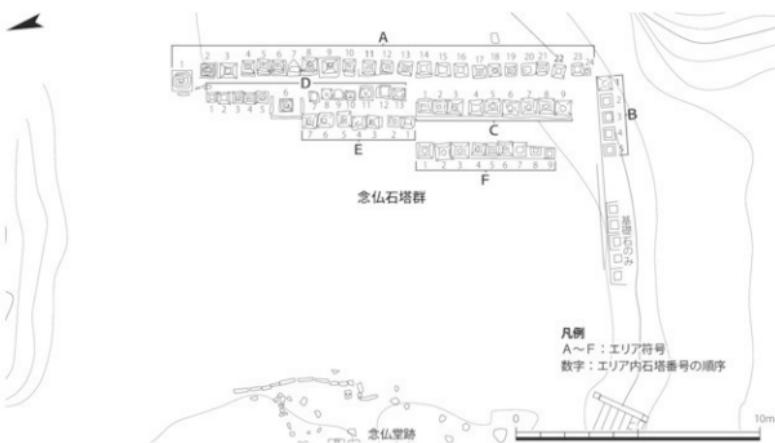
第148図 鰐淵寺境内・石造物位置図（数字は第18表に対応）

第19表 鰐淵寺境内における石造物一覧

番	名 称	数 量	銘 文	年 代	法 量	石 材	位 置	備 考
1	石狛	1对	「奉」「獻」	近現代	像高 75cm	朱待石	稲荷神社	
2	狛犬	1对	「奉」「獻」	近現代	像高 121cm	朱待石	摩多羅神社	前脚立ち、円座
3	石灯籠	1对	各「奉獻」	近現代	縦高 146cm	朱待石	摩多羅神社	
4	石灯籠	1对	各「奉獻 文化十有四」・「摩多羅神 勝出氏」	文化 14 年 (1817)	縦高 195cm	朱待石	摩多羅神社	莫望座
5	石灯籠	1基	「奉寄進 烈使市兵衛 万延ニ酉正月吉日」	万延 2 年 (1861)	縦高 215cm	朱待石	根本堂左手	
6	石地蔵	4組分	(無題)		像高 51cm		根本堂左手	
7	供養塔	1基	「奉巡出露觀音盡福三十三回拜礼供養塔」・「應葉村太西林山開慶院一茶郎」	明治 41 年 (1908)	縦高 140cm	朱待石	根本堂左手 後方	方柱尖頭形
8	石灯籠	1对	①「椎田文政 葉木朱林羅・願主・木佐新四郎」「久・木幡九右衛門・貞良」、②「椎田文政・乙西晚癸未・願主・八箇辰・廿七辰・山田又左衛門春・山本権市久慶・波瀬義九郎」「丁」	文政 6 年 (1823) 癸未 同 8 年 (1825) 乙酉	縦高 280cm	花崗岩	根本堂前方	
9	石灯籠	1对	「常夜灯」・「松江白湖・石屋磯右衛門」「嘉永七年 氷中寅十月日」	嘉永 7 年 (1854)	縦高 305cm	朱待石	根本堂前方	波瀬文。龟趺座
10	狛犬	1对	「奉」「獻」・「石工磯右衛門」「昭和五十一年七月補修工事 政道石部合司石工大助好美」	近代 + 昭和 51 年 (1976) 補修	像高 205cm	朱待石	根本堂前方	牡丹に唐草文
11	手水盤	1基	「鰐淵寺」「付属奉納 皇國永代經營門」一口 盆谷下谷・願主之祖父和祖母市郎の「[口][口]興隆祈願 昭和二十六年〔口〕・願主・木村[口]」	昭和 26 年 (1951)	183x23x61cm	花崗岩	根本堂前方	
12	一丁地蔵	1般	「三丁」「施主唐川村山口」「奉香淮・茅草・革利謹申」・「文政久歲・戊七月古吉日」	近代か	86x39x24cm	花崗岩	根本堂右手	
13	石灯籠	1基	(無題)	文政 9 年 (1826)	縦高 149cm	朱待石	根本道右手	
14	石灯籠	1对	(無題)		縦高 250cm	朱待石?	糸道堂前	
15	頸源律師碑	1基	「頸源律師碑」「先釋士後酒忠臣/出震入震宣佛」「神」「四天王・大僧大師正源・大・正甲子年三月廿一日泰達建之」「義捐人麿川郡志村・丹名各地志者一同」「贊助者麿川郡長馬場徳輔・同郡書翰石川源通」	大正 13 年 (1924)	縦高 250cm	花崗岩	和多坊跡	
16	石灯籠・常夜燈	1基	「時明和五壬午・吉良良 口宇賀村細木與右衛門信胤・時安永三甲・絶木九右衛門・工道當造立之星燭一番〔口〕」	明和 5 年 (1768), 安永 3 年 (1774)	縦高 208cm	花崗岩	和多坊跡	
17	六百万遍供養塔	67基	第 19 表参照	享保 10 年 (1725) ~ 大正 6 年 (1917)		朱待石・花崗岩・自然石	念仏堂跡前	地蔵像。石灯籠を食む。
18	角柱状墓石	4 基	(萬により不明)		縦高 79cm	朱待石		
19	南無阿弥陀仏	1基	「南無阿弥陀仏六百万遍供養塔」「明治二年四月九日 領主入主常得 □年八十三才〔口〕」	明治 2 年 (1869)	縦高 126cm			
20	石灯籠	1基	「歎歎・十王〔口〕」		縦高 86cm			
21	開山塔	1基	「開山智春上人」		縦高 182cm		開山堂	
22	石灯籠	1对	「開山塔」「梵文・妙法蓮華經」「梵字」		縦高 142cm	朱待石	開山堂	
23	六地蔵像	6 倍	「懶心三・丁卯曉・堂司・為足再建」	慶応 3 年 (1867)	縦高 68cm	朱待石		
24	十王佛	12 倍						
25	石灯籠	1基	「天明二年六月 旗主多井渡瀬辺龟之助」	天明 2 年 (1782)	縦高 193cm			
26	石灯籠	1基	「明和三丙戌年九月吉日 施主唐川村荒木〔口〕」	明和 3 年 (1766)	縦高 198cm			
27	地蔵菩薩立像	1般			縦高 420cm			
28	櫻石	1基	「だいじけ〔口〕」		縦高 70cm			
29	良忠上人記念碑	1基	淨土宗三祖記良忠上人修行之地 知恩院門跡法丈美念・七百石逸菴百遍念仏成滿記文・五箇の要き世に生まれしは 恨みかたがたされど愛し往生と聞こときは 運ってうれしくなりけらる・縦時 昭和六十年十月三十一日 净土宗石見利近青年会建立	昭和 60 年 (1985)	縦高 192cm	花崗岩	庫裏入口付近	
30	石灯籠	1对	「(梵字) 奉寄進 御宝前/元禄十二己卯六月日/旗主橋穂郡平田村渡辺良衡門尉/旗主橋穂郡多井渡辺利兵衛尉」「(梵字) 奉寄進 御宝前/元禄十二己卯六月日/旗主橋穂郡多井渡辺治左衛門尉」	元禄 12 年 (1699)	縦高 225cm	花崗岩	山王七仏堂前	

第20表 念仏堂前念仏石塔年号一覧

エリア	番号	紀年銘	西暦	備考	エリア	番号	紀年銘	西暦	備考
A	1	明治十一年八月	1878	地蔵	C	6	弘化二年	1845	
	2			地蔵		7	嘉永元年	1848	
	3	享保十年	1725			8	嘉永四年	1851	
	4	享保十三	1728			9	嘉永七年	1854	
	5	享保十□ (享保十五か)	(1730)		D	1	寛文 文化三年	1806	贈璽
	6	□寅年四月九日 (享保十九か)	(1734)			2	大正六	1917	
	7	元文二年	1737			3	大正三	1914	
	8	元文五年	1740			4	明治四十四年	1911	
	9	[] 保 () 五月九日 (寛保三か)	(1743)			5	[] 一年 (明治四十か)	(1908)	
	10	延享三年甲寅四月	1746			6	明治三十八年	1905	
	11	寛延二年	1749			7	明治十七年	1884	
	12	[] 四月 (宝曆二か)	(1752)			8	明治 [] (明治二十か)	(1887)	
	13	宝曆五年	1755			9	明治二十三年	1890	
	14	宝曆八年戊寅四月	1758			10	明治二十六年	1893	
	15	宝曆十一年甲巳	1761			11	明治二九年	1896	
	16	[] 四月九日	(1764)			12	明治三十二年	1899	
	17	明和四年	1767			13	明治廿五年	1902	
	18	(明和七か)	(1770)		E	1	享和三年	1803	
	19	(安永二か)	(1773)			2	文化 () 寅 (文化三か)	(1806)	
	20	(安永五か)	(1776)			3	[] 己 (文化六か)	(1809)	
	21	[] 己 (安永八か)	(1779)			4	文化九年	1812	
	22	天明二年	1782			5	文化十二年	1815	
	23	天明五年	1785			6	(文政元か)	(1818)	
	24	[] 甲申 (文政七か)	(1824)			7	文政四年	1821	
B	1	天明八年	1788		F	1	安政四年	1857	
	2	貞政三辛亥	1791			2	萬延元年	1860	
	3	貞政六甲寅	1794			3	文久三年	1863	
	4	貞政九年	1797			4	慶応二年	1866	
	5					5	明治二年	1869	
C	1	文政十三年	1830			6	明治五年	1872	
	2	天保四年	1833			7	明治第八	1875	
	3	天保七年	1836			8	明治十一年	1878	
	4	天保十年	1839			9	明治十四年	1881	
	5	天保十三年	1842						



第149図 念仏堂前念仏石塔配置図

(1) 松露谷地区（第150図、図版27～29）

松露谷地区は、仁王門より手前の参道から東南東に入り込む狭い谷である。当地は今も歴代住職と家族の葬地として利用されている場所であるが、それらの墓石も含めて石造物群はこの谷筋の北側斜面に認められ、大きく2群に分かれて存在する。それぞれ数段にわたって平坦面が形成されているが、便宜上、谷筋の奥にあるまとまりをI群、途中折り返して中国自然歩道沿いにあるものをII群と呼んで調査した。確認した平坦面はI群で6箇所（市の分布調査により最終的には11箇所を数える）、II群で12箇所あり、規模は大小あって一様ではない。これら平坦面全てで石塔を確認したわけではないが、現況からは多く墓地として形成されたものと推定される⁽⁴⁾。

確認できた石造物は、無縫塔、宝篋印塔、五輪塔、墓標・石標（方柱形・笠付・自然石形等）などの石塔類であり、形態からみても基本的に墓地に伴うものであることが肯定される。第20・21表は、地表面観察で捉えた各地点の石塔類の点数である。厳密な把握^{其困難}であるが、概数と傾向を知る上で参考にできよう。

墓標・石標を除き、石塔の形態として最も多くの個数がみられたのは無縫塔であり、塔身121点を数えた（I群92点、II群24点）。これにより少なくとも116基あることになる（以下同じ）。かなり風化したものが多い中、紀年銘によって確認できる年代は、18世紀前半から20世紀にかけてである。次は宝篋印塔であり、部位として多くあったのが笠部40点である（I群15点、II群25点。少なくとも40基ある）。推定年代は14世紀代から17世紀前半までと考えられる。続く五輪塔は、最も多かった部位が水輪25点である（I群5点、II群20点。少なくとも25基ある。ただしI群は水輪5点、火輪が8点である）。年代は14世紀代から17世紀前半までと推定される。いずれの形態のものも、実際にはこれ以上にみるとよいかと思われる。埋もれているものや転落・流出したものが相当数あると想像されるからである。

(2) 松露谷地区のI群とII群の比較

I群とII群を比較した場合、明確な違いは指摘できないが、平坦面からすると、I群に規模の大きなものがあり、石塔の配置などをみるとやや整理された印象がある。例えば江戸後期以降、近現代のものは区画を伴いながら整然と並ぶが、風化の進んだ無縫塔や近世初頭以前の五輪塔・宝篋印塔は背後に無造作に置かれている状況にある（C4・C7）。可能性として、もと後者の石塔が立っていたところに、その後前者の石塔が造立された、その際後者が後方に押しやられたり平坦面が拡張されるなどして、いまみる状態や規模になったのではないかと考える。I群における平坦面は、中世以来の墓地の有様をそのままに伝えているかと言えばそうではないであろう。

石塔類からすると、I群はII群に較べ、無縫塔が圧倒的に多いことが分かる。また、I群中のC7に、現存高157cmを測る大型品で、やや特異な形態の宝篋印塔がみられて注意されるが、これについて後で述べてみようと思う。

一方のII群である。平坦面からするとI群に較べて数も多く規模が小さい傾向にある。また、概してII群の石塔部材は、平坦面ばかりではなく、谷側の斜面にかけてかなり散在している状況である。ここでは傾斜地を利用しつつ、小規模な平坦地を幾つも造成することで墓地群が形成されているように思われる。この中で石塔がある程度整然と立ち並んでいるのはC10の一角だけである。この部分の

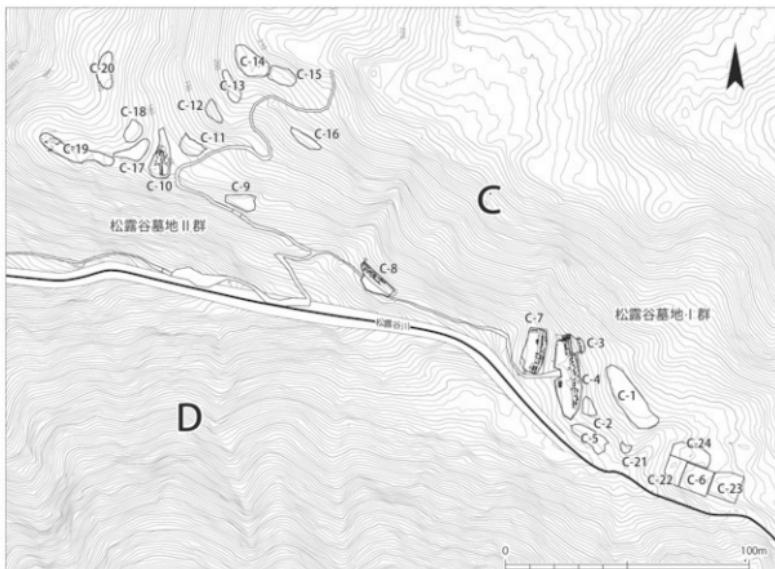
みは18世紀前半以降の墓標がみられるところであって、I群と似た要素があると言えようか。

このほかII群では、海岸部から持ち込まれたとみられる小さな玉砂利が点々と認めたりした。またC19の痩せ尾根では、小さくマウンドのようにしてある状態の部分を観察したところがあった。後者が墳墓の一形態を示しているとすれば、標石を伴わないものもあった可能性がある。

石塔類をみると、I群とは異なって無縫塔が少なく、逆に五輪塔や宝篋印塔の個数が多い状況がみてとれる。II群のほうは14世紀から16世紀にかけての石塔類が多く、I群より古様をとどめているかと思われる。II群の特徴を考えると、さらに14世紀代の大型の五輪塔があること、13世紀代の常滑焼製の骨蔵器（第2節、第153図）が採集されていることもあわせて注意される。墓地形成は、最初はこちらの方が中心であったようにも見受けられる。

I群とII群とで、どちらが先行するか、またそれぞれ平坦地がどういう順で利用されていったかなど、その形成過程なり変遷が注目されるところであるが、いまの時点ではそれに応えるだけの情報に乏しく、詳しくは今後の課題としておきたい。

なお、以前原宏一氏が注目したもので、I・II両墓地群への導入部分にあたるところに種子板碑が遺存する。板碑は、島根県下では安来市荒島町仲仙寺や松江市八幡町迎接寺のものなど10指に満たず（地方史研究所 1963、伊藤 1965）、貴重な事例の一つと言える。年代は不明だが、幕末に再建されたものとは様式が異なる2点は、室町期に遡る可能性がある。



第150図 松露谷墓地I・II群 (1:2,000)

第21表 松露谷地区および川奥地区における石造物の所在点数（1）

地区	エリア名	小区画	五輪塔				宝瓶印塔				無縫塔						
			完存品	空尾輪	火輪	水輪	地輪	一石五輪塔	完存品	相輪	笠	塔身	基礎	一石宝瓶印塔	完存品	塔身	基礎
松露谷I群	C-2				1					1	2	1					
	C-3					1											2
	南側			1	1	2				5	4	3		15			
	中央		2						1					12			
	北側				1					1			1	9			
	参道寄り		2							1							
	小計		4	1	2	2				2	5	4	4	38			
	北西奥																
	北半分		1	1	1					2		1		20			
	南寄り					1			(大型)	1	3	4		3	7		
松露谷II群	南端		1	1	1					1	1	1	2	9			
	小計			2	2	3				1	6	5	2	5	36		
	段北西			1	3		1						1	1	7		
	C-8		2						1		3	5		1	5		
	段中央				1						1	1		1	4		
	段南東										4	6	1	3	16		
	小計		3	4		1	1										
	(計)		4	6	8	6	2	1	3	16	17	4	12	0	92	/	/
	C-9			1	2					1	6			6	11		
	南側						1								7		
川奥地区	C-10		1							2	1	1	1	1	6		
	北側			1						2	1	1					
	小計		1				1			2	1	1	1	1	13		
	C-11				1					1							
	南東側																
	C-12		北西側				1			下方1	下方1	下方1					
	小計						1						1	1	1		
	C-13				下方3												
	C-14					1											
	C-15					1											
合計	C-16			2	5	2	3			3	7	1	2				
	下方斜面			1	1					1			1				
	小計		2	6	3	3				4	7	1	3				
	C-17			2			1			1			1				
			1	1		2					4		3				
	C-18		下方沢 斜面	1	1	5	2			3	1	1					
	小計		2	2	5	4				7	1	4					
	C-19				6	3	8	7			2	3	2	3			
	C-20		南東側											1			
	北西側			1						2	3	2	4				
	小計		7	3	8	7											
	(計)		15	14	20	17				11	25	6	20		24	/	/
I・II群 分歧点																/	/
(計)																	
川奥地区			H-1			7	7	16			9	1	2				
(計)						7	7	16			9	1	2				
合計			4	21	29	33	35	1	3	27	51	11	34		116	/	/

(*塔身をもってカウント)

第22表 松露谷地区および川奥地区における石造物の所在点数(2)

墓標・石標				その他							計	備考 (年号表記は墓標にみる紀年銘の幅を表す)	エリア名
方柱型	方形形	笠付	自然石	地蔵	石碑	灯籠	樺石	水盤	その他				
墓標	墓標	墓標	墓標							5		C-2	
2										5	明治42年(1909)		C-3
1	1		1		1					34	天明元年(1781)～明治15年(1882)		
		1				3				19	享保7年(1722)～昭和31年(1956)		
1				1						13	寛保元年(1741)～明治15年(1882)		
										3	寛政4年(1792)～明治38年(1905)		C-4
2	1	1			2	3				71			
3	2									5	大正4年(1915)～平成6年(1994)		
1				1						28	天明7年(1787)～昭和20年(1945)		
	1									20	延宝6年(1678)～嘉永元年(1848)		
			1							18	寛政5年(1793)～明治26年(1893)		C-7
3	3	1	1	1						71			
3				1						19	文化6年(1809)～平成20年(2008)		
							1			18	延宝4年(1676)～文政9年(1826)		C-8
		1								10	寛文6年(1666)～宝永5年(1708)		
4	1	1			1					47			
7	7	3	2	1	4	3			1	199			
				1						28	寛延2年(1749)～慶応元年(1865)		C-9
										8	宝曆13年(1763)～明治7年(1874)		
4										16	享保18年(1733)～大正7年(1918)		C-10
4										24			
										2			C-11
										0	円錐あり。		
										4	玉穂あり、斜面でも玉石を確認。かなり下方の斜面で塔身1,笠1,基礎1を確認。		C-12
										4			
										3	斜面下方で確認。		C-13
										1	円錐あり。		C-14
										1	少し離れた道歩道沿いに一丁地蔵あり。「四丁／施主唐川村中」		C-15
										25			
										4	かなり下方にあり。転落したものか。		C-16
										29			
										5			C-17
										11			
										14			C-18
										25			
											円形集石, 円錐あり。		C-19
										1	大型台座	常滑焼片表面採集 3点	
										35			C-20
										2			
										1	37		
4		1							1	158			
									7	7	1つに「文久」年間の再建紀年銘あり。		
									(柱頭)				
									7	7			
									(台座)	6	48		H-1
										6	48		
7	11	3	3	1	4	3			14	412			

(3) 川奥地区（第151図、図版29）

川奥地区（H地区）は、鰐淵寺川沿いで等渕院跡下を通る現道を少し遡った、やや道路上にある地点である。現況ではさほど広くない平坦地が1か所あるのみであり、その部分から上流側の傾斜地にかけて五輪塔、宝篋印塔の部材が散在する状況がみられる。ここでは墓標形式のものや無縫塔がみられないという特徴が指摘できる。

石塔の年代は、概ね14世紀代～16世紀代、もしくは17世紀前半までとみられ、墓地としての利用は近世初頭あたりで終わっていると考えられる。松露谷地区と同様、14世紀代の比較的量感のある五輪塔があつて注目される。



第151図 川奥墓地（1:2,000）

5 大型宝篋印塔について（第152・158・160・165図）

ここでは、松露谷地区の調査において気になった大型の宝篋印塔（C7、第158図1、第165図106）について述べてみようと思う。

本塔は、現存高157cmを測る大型品であるとともに、反りを伴った段形の笠、太い梵字や蓮弁を刻んだ縦長の塔身、上位に段形をもたない基礎といった点で特徴的であり、やや特異なタイプの宝篋印塔である。その造立年代と性格が注目されるが、現状では山陰地域においてこれと全く同じタイプの石造物に恵まれないことから、この点についての検討を次のような史資料から検討してみたい。



第152図 大型宝篋印塔

宝篋印塔形を仏舎利厨子の中に表わした鎌倉時代の代表的な工芸資料に、奈良国立博物館所蔵の「黒漆宝篋印塔嵌装舍利厨子」(重要文化財)⁽⁵⁾や、薬王寺所蔵の「宝篋印塔嵌装舍利厨子」⁽⁶⁾がある。ともに厨子の中の中央に、金銅板製の宝篋印塔形を装着したものであるが、この宝篋印塔形に本塔と類似する点がみられる。

前者は笠部が軒上5段、軒下2段で、軒と上1段とは端に反りをもち、塔身は中央の円相形水晶板窓の下辺に蓮台が表わされる。後者は笠部が軒上4段、軒下1段の段形で、これまた軒に反りが認められるとともに、塔身は大きく月輪を描いた上で中央に大振りの梵字アを貼り付ける。

すなわち、笠部に反りをもつ点、塔身に梵字や蓮台を表わす点などは、本塔にもみられる特徴であり、両者に共通する要素と言ってよからう。また、梵字アの表現に注意してみると、薬研彫りの太字で表わされ、それを乗せる蓮台はやや斜め上方からみた状態で刻まれている。こうした表現の梵字・蓮台は、例えば鰐淵寺所蔵の建長7年(1255)在銘の「線刻種子鏡像」⁽⁷⁾のそれと類似する。

これらの類例はいずれも13世紀前半から半ばにかけて製作されたものである。個別報告では本塔を14世紀前半のものと推定して報告するが、筆者は13世紀代に入る可能性も含め、少し幅を持たせて考えてよいかと考える。つまり、13世紀後半から14世紀前半にかけてである。また、仮に13世紀代には入らないとしても、本塔の造形の系譜を考えると、こうした事例が参考にされた可能性があるのではないかと指摘しておきたい。

また同時に、舍利厨子の例は本塔の性格を考える上でも参考になるのではなかろうか。奈良国立博物館が所蔵する前者は、舍利中に嘉祐2年(1226)の奥書を有する法華経1部8帖を納めるものである。これにより本例は年代の分かれる好資料であると分かるが、同時に舍利中の内容物が法華経であることも明確に知られる例である。この種の舍利厨子の製作の背景にある舍利信仰や法華経信仰が本塔にも関係していないか、あわせて注意する必要があるように思われる。

同様な観点から、もう一つ、経塚造営に関する史料を取り上げておく。嘉祐2年(1236)、宗快が撰述した『如法經現修作法』(高橋1931)の「如法經奉納次第」に、如法經が奉納される場所が具体的に記され、「横川如法堂、其外之靈地聖跡等、或亡者墳墓之近辺」とある。ここには靈地聖跡と並んで墳墓の近辺が挙げられていて注意される。

鰐淵寺は古くからの靈地聖跡であり、咸王宝窟に仁平3年(1153)在銘の石製經筒が納められたのもそうした背景があつてのことと推察するが、加えて墳墓の地も対象にされていたのであれば、境内の一ヶの墓地を選んで埋納することもありえたであろう。

本塔は梵字・蓮台以外に銘文を持たず、形式的にも特異な宝篋印塔であり、その立地や造形をみるとC7ばかりか、I群あるいはII群を含めて象徴的なものとしてあるようにも捉えられる。となればその性格は、墓塔としてより、先に挙げた舍利厨子や経塚造営作法にみられる、供養塔あるいは経塚といった類のものが考えられてよいかと思われる。

仮に本塔が経塚に関係するものであれば、經筒を埋設したあとに石塔を安置するという行為があつたことを示すものかもしれない。同じく前掲史料の「如法經奉納次第」に、「取御經筒可入土筒中次外護者以土筒蓋可覆之、次覆石於穴口、石壇可築其上可安置石塔」といった表現があるからである。

松露谷地区と川奥地区における石塔類は、大半墓塔であるとみて誤りはないものと思われる。しかし、本塔の場合はこれらとは異なる理由で造立された可能性をもつ。地下構造がどのようになっているか分からぬが、梵字ア（阿字）の意味もあわせて⁽⁸⁾、本塔は今後も十分に検討されてよいであろう。

（鳥谷芳雄）

註

- (1) 宝鏡印塔は日野氏文献の第9図(掲載写真からすると10のものを指しているとみられる)無縫塔は同第34図に該当する。
- (2) 石造物ではないが、鶴淵寺と淨土宗聖地との関係を考える上で参考になる金石文資料に、根本堂左手にある正徳5年(1715)在銘の銅造阿弥陀如来坐像がある。
- (3) 本書第4章第2節でもとりあげた一丁地蔵については、『科研報告』、山内靖喜・岩谷北斗「鶴淵寺周辺における江戸時代後期の道路」があるので参照されたい。
- (4) なお松露谷地区のすべての平坦面が墓塔・墓地の利用に供されたものと限定してよいかは問題である。多くの平坦面で構成されるものの、中には石塔を伴わない部分もあるからであり(C1・C5など)、しかもこうしたところから12世紀代ないし13世紀初頭とみられる白磁片が表採されていて、石塔群から遡れる14世紀代(もしくは13世紀後半)、あるいは表採資料の藏骨壺(常滑壺片)が示す13世紀代よりも、明らかに古い段階の痕跡が認められて注目される。つまり、当地ではいま確認される墓地の形成よりも前から、何らかの活動があったことをうかがわせるものである。となれば、その活動なり土地利用の在り方、変遷が問題となる。より以前からの葬送地としての利用もあれば、小坊・小堂といった施設の存在や宗教行為など、幾つか想定されよう。しかし、現段階で墓地以外の利用も含めた当地の性格や変遷について言及することは難しく、今後の検討課題であるとするにとどめたい。
- (5) 河田氏文献の第16図を参照。
- (6) 河田氏文献の写真第101図を参照。
- (7) 鏡面に大きく蓮台に乗せて梵字キリーキを龍字で表わしている。周縁に「(右) 建長七年 癸卯 六月日」「(左) 宮主 林成」の刻銘があるものである(第3章第3節第23図)。
- (8) 梵字アは、よく胎蔵界大日如来を表わすものとみなされる。しかし、この例では阿字の意味で理解するほうが適切ではなかろうか。因みに阿字の図像は、小野氏の文献にみることができる。それはやや斜め上方からみる蓮台が受ける。ただしこの場合は月輪を作らう図像である。

参考文献

- 伊藤菊之輔 1965 「鶴淵寺の無縫塔」・「(一) 板碑」『出雲の石造美術』
- 岡崎雄二郎ほか 2010 「松江東照宮と円済院伝来の石造物について—松江神社、円済寺、鶴淵寺等に所在する石造物—」『松江市歴史叢書2』松江市教育委員会
- 小野玄妙 1976 「大正新修大藏經圖像」第12卷(大正新修大藏經刊行会、別紙47)
- 河田 貞 1989 「仏舎利と経の莊嚴」(日本の美術No.280)
- 原 宏一 1984 「野の石—山陰の石仏めぐり」カラー写真入り
- 日野一郎 1963 「出雲における石造塔婆」『出雲・隱岐』地方史研究所
- 広瀬都異 1923 「紀年銘鏡に就きて(六)」『考古学雑誌』第13卷第9号
- 高楠順次郎編 1931 「大正新修大藏經」第84卷(普及版1992)
- 鳥谷芳雄 1998 「鶴淵寺境内銅造阿弥陀如来坐像について—近世廻國供養仏の一例—」『古代文化研究』 6
- 地方史研究所 1963 「出雲・隱岐」
- 山本 清 1963 「一部什物調査」『鶴淵寺文書の研究』

第2節 松露谷地区および川奥地区の石塔群

1 墓地群の形成

鰐淵寺の境内には、これまでの調査で3地点の墓地群を確認することができた。鰐淵寺中枢地域の根本堂地区から鰐淵寺川を挟んだ東側の松露谷地区に松露谷墓地Ⅰ群とⅡ群、根本堂地区的南西側の川奥地区に川奥墓地が所在する。

(1) 墓地群の現況（第150・151図）

松露谷は、大正7年の建物が現存する仁王門の北へ70mのところから東へ登る谷で、伊努谷峰（江戸期の絵図では「林木峰」）辺りに源を発する松露谷川流域をさす。松露谷墓地群は、この谷筋の北側丘陵地に存在する。

松露とは『大辞泉』によると、松の葉におく露という意味で、かつては松林が鬱蒼とした景観であったのであろう。現在は、昭和44年（1969）に定められた島根県中国自然歩道の旅伏山・鰐淵寺モデルコースにあたり、解説板が立てられ、下草も刈られ、見通しの良いハイキングコースに整備されている。

松露谷の入り口の松露谷川にかかる木橋をわたり、遊歩道を谷奥へ180mほど進むと遊歩道から少し外れたところに板碑六地蔵が置かれている。六地蔵は墓地（靈界）の入り口に置かれ、此の世と彼の世の結界を示しているため、ここが墓地への入り口だとわかる。六地蔵からさらに谷筋の奥へ15m登ると平坦面がみえ、数基の墓石が整然と建てられている。これより谷奥東側の墓地へ行くとⅠ群、反対に中国自然歩道沿いに50m歩くとⅡ群に行くことができる。

川奥墓地は、今回の分布調査で初めて確認した墓地で、鰐淵寺橋からさらに谷奥へ300mほど入った鰐淵寺川左岸に所在する。平成23年度に発掘調査した等湖院南区から続く南向きの急傾斜地を造成した平坦面を墓地としている。松露谷墓地群とは境内地中枢部を挟んで、南西側に設けられた墓地である。

(2) 墓地群の採集遺物（第153図）

今回の詳細な分布調査によって、各平坦面や斜面で多くの陶磁器や土器を採集することができた。

松露谷墓地Ⅰ群では12の平坦面が確認された。C1～C8の平坦面で、下記の遺物を採集した。

- I群 C1 土師器 27点
- C2 白磁4点、土師器11点
- C3 古代須恵器1点、白磁3点
- C4 土師器6点、瓦質土器1点
- C5 白磁14点、瓦質土器13点
- C6 古代須恵器2点、中世瓦1点
- C7 土師器16点

遺物の中で古い時期に位置づけられるのは、少数ではあるが11世紀以前にさかのぼる古代須恵器で、C3とC6で各1点が確認されている。また、C2・C3・C5からは白磁が比較的多く採集され、

とくに、C1 から C5 に至る斜面では 12 世紀から 13 世紀代を中心とした白磁碗 II 類、V 類、VII 類、IX 類が確認された（第 153 図 1～3）。

このように、C1 から C5 に至る斜面に白磁や土師器が多くみられたことは、I 群において古代から中世前期においても利活用がなされたことを示している。また、C6 からは 16 世紀後半とみられる中世瓦が 1 点確認され、17 世紀以降と思われる土師器の杯皿類が、C7 で確認された（第 153 図 4）。

松露谷墓地 II 群も 12 の平坦面で構成されている。C9～C20 の平坦面で、遺物が採集されたのは C20 のみであった。

II 群 C20 常滑焼 6 点、京都系土師器 1 点（第 153 図 5）

常滑焼は 6 点の破片であるが、おそらく 1 個体分であろう。口縁部が欠損しているため確定はできないが、13 世紀代の壺の可能性がある（第 153 図 6）。今回確認された 14 世紀代の石塔群よりも古い時期の藏骨器の可能性もある。

川奥墓地では、石塔とともに近世以降の陶磁器は散在しているが、中世以前の遺物を採集することはできなかった。

（穴道年弘）



第 153 図 松露谷地区地区採集遺物（1：3）

2 五輪塔（第154～157図）

（1）松露谷地区（第154図）

当該地区で実測を行った五輪塔部材は21点である。実測することができなかつた残欠も多数存在する。一石五輪塔を1点確認した以外はすべて組み合わせ式である。組み合わせが明らかな塔、原位置を保っていた塔はない。以下、実測図に基づき分類し、年代観を示しながら、鰐淵寺の五輪塔の様相を探ってみたい。

1類 1・2は層状に剥離しており全体の形状は不明であるが、本来は幅40cmを超える大型品である。1は火輪、2は水輪である。それぞれ一面に刷毛書き書体の梵字が葉研彫りされるが、残存状況が悪く判読できなかった。14世紀代と考えられる。1・2は流紋岩である。

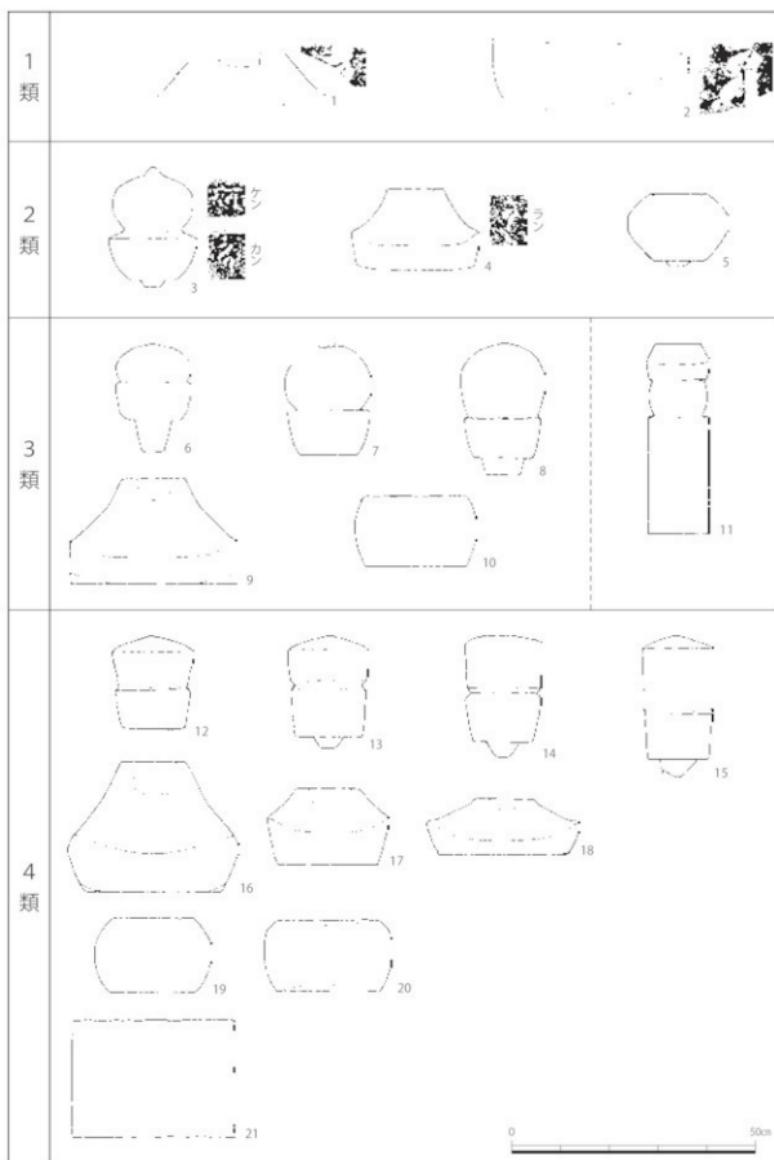
2類 3は空風輪、4は火輪、5は水輪である。3・4はいずれも四面に五輪塔四方梵字が施されていた。3の空輪は宝珠形、風輪は碗形で整った形状である。4の軒先は端部で上・下端とも反り、軒口がわずかに外傾する。「だらしな」降棟は緩やかなたるみを持つ。5は中央よりやや上位に最大径があり、上面は僅かにくぼみ下面にはほぞがつく。3～5はいずれも均整のとれた形状であり、中央地域からの搬入品もしくは搬入品を模した可能性がある。15世紀代と考えられる。3・4は花崗岩、5は凝灰質砂岩である。

3類 6～8は空風輪、9は火輪、10は水輪、11は一石五輪塔である。6～8の空輪は丸味を帯び、風輪は上面から下面にかけて側面のラインがやや直線的である。8は空輪の比率が大きく最大径が中央よりも上位にあり、風輪の下面には太いほぞが付く。表面が滑らかに整えられており丁寧に仕上げられている。9は軒先が上・下端とも平行に反り、軒口は平行である。降棟は緩やかなたるみを持つ。10は6・7と同様の石材で、かつ近い位置で確認されており、組み合っていたものか。16世紀前半と考えられる。

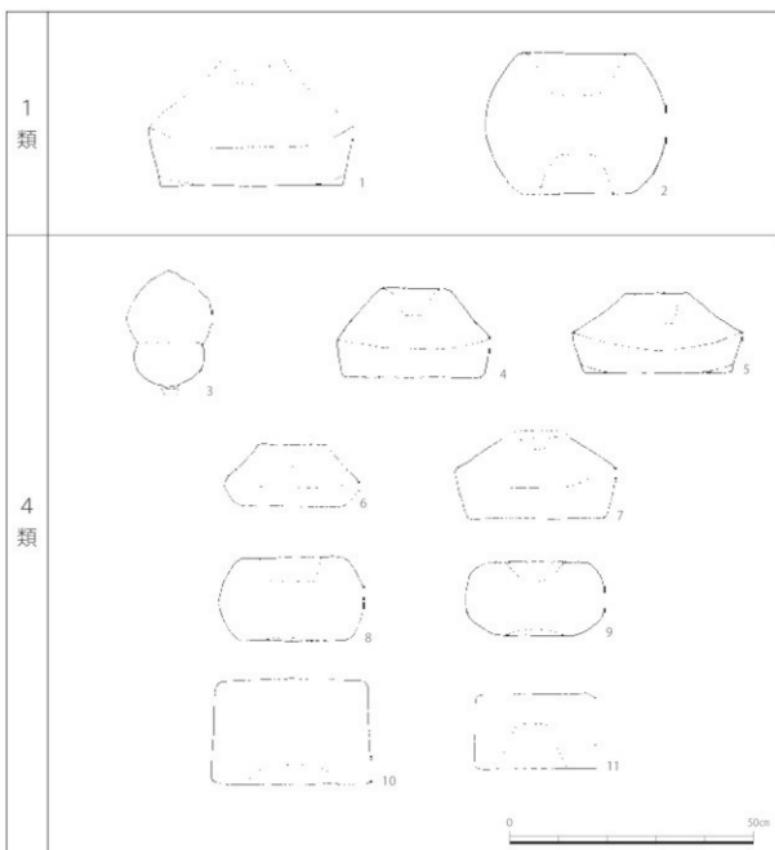
11は松露谷地区で唯一確認された一石五輪塔である。空風輪を欠くが、火輪の降棟はたるみを持たず直線的で、軒先の上端のみがわずかに反る。水輪は偏平で、地輪は長いが銘文は施されていない。周辺地域でも一石五輪塔の類例は極めて少なく時期は不明であるが、他地域の例を参考にすれば16世紀代のものであろうか。6・7・10は流紋岩、8・9は流紋岩質凝灰岩、11は凝灰石である。

4類 12～15は空風輪、16～18は火輪、19・20は水輪、21は地輪である。12～15は全体が直線的に仕上げられている。空輪の頂部は尖り気味で、肩の部分が張る。風輪の側面も完全に直線的になる。空・風輪の境は僅かな段差や溝で表現され、簡略化が進んでいる。16～18は高さがそれぞれ異なるが、いずれも軒先の上端のみが大きく反り、下端は直線的で軒口が外側に張り出す。19・20は中位に最大径があるものの、上・下面径とそれほど大差はない。16世紀末から17世紀代と考えられる。12～21は凝灰質砂岩である。

松露谷地区的五輪塔は比較的丁寧なつくりのものが多いという印象を受けた。また、1・2のようなやや大型の塔や、3・4・5のような中央地域の影響を受けた可能性のある塔もみられた。石材については1～3類では凝灰岩や花崗岩、流紋岩、凝灰質砂岩が混在するが、4類では圧倒的に



第154図 松露谷地区の五輪塔分類図（1:10）



第155図 川奥地区の五輪塔分類図（1:10）

凝灰質砂岩が多い。石塔以外の特記事項として、平坦面を石で長方形に区画している箇所がみられた。区画の単位は把握できなかったが、直線的に並ぶ石列もあり、場所によっては数か所の区画が存在する可能性もある。区画内に敷いたと思しき玉石もみられた。

(2) 川奥地区(第155図)

実測を行った五輪塔部材は11点である。これら以外にも破損した部材が見受けられた。すべて組み合わせ式であるが、組み合わせが明らかなる塔は確認できなかった。また原位置を保っていた塔もない。川奥地区の分類図(第155図)に則って記述する。

1類 1は火輪、2は水輪である。1は頂部を欠いており梵字の有無は確認できなかった。頂部にはほぞ穴が施される。軒先は端部で上・下端とも反り、軒口がわずかに外傾する。2は上下面が大きく抉られ、ほぼ中位に最大径がある。幅に対する高さの比率が高く、量感がある。1は幅42cm、2は幅38cm、とやや大型であり、松露谷地区1類に分類した火・水輪とほぼ同規模で、かつ石材も類似することから同時期と考えられる。1・2ともに表面が滑らかに仕上げられている。1は凝灰岩、2は白色凝灰岩である。

4類 3は空風輪、4～7は火輪、8・9は水輪、10・11は地輪である。3は劣化が著しく詳細な形状は不明であるが、空輪と風輪の境は溝で表現されていたようである。4～7の頂部にはほぞ穴が施され、軒先は下端が直線的で上端のみが反り、軒口が外側に張り出す。降棟はほとんどたるみを持たない。8・9は中位に最大径があるものの、上・下の径とそれほど大差ではなく偏平である。粗い仕上げで表面に凹凸が目立つ。10・11はいずれも小型で下面が抉られる。

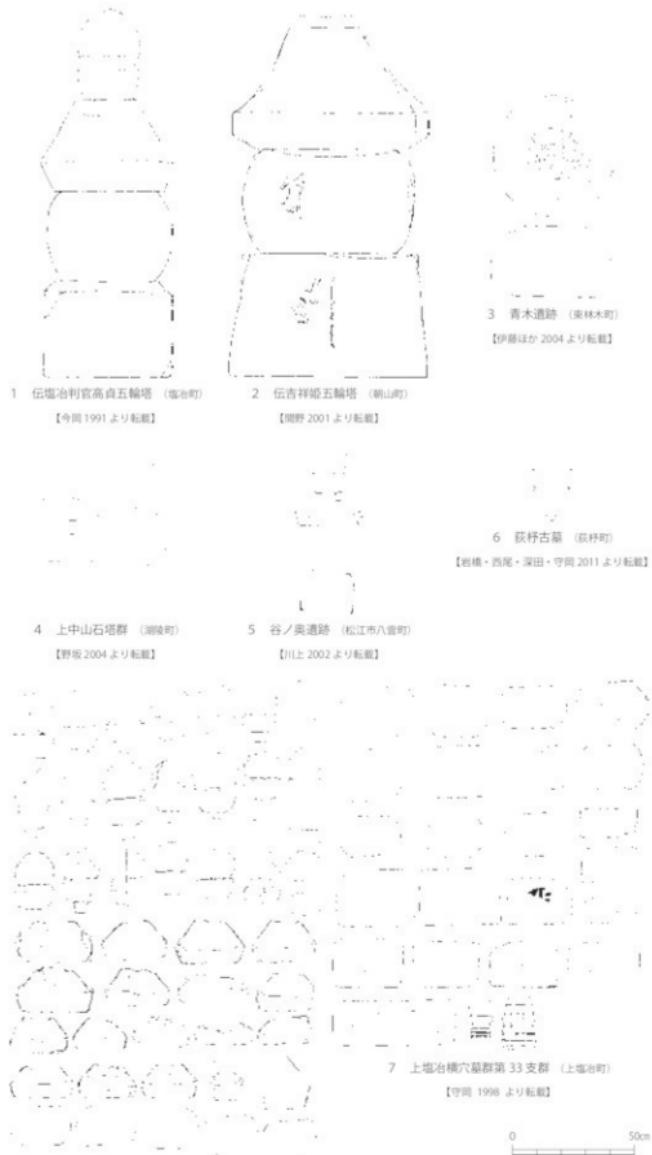
これらは概ね幅30cm前後の小型品であること、かつ火輪の特徴などから松露谷地区分類の4類に相当する時期のものと考えられる。また、松露谷地区的五輪塔群と比べやや雑なつくりのものが多いという印象を持った。3・8は凝灰岩、4～7・9・12は凝灰質砂岩である。松露谷地区と同様に圧倒的に凝灰質砂岩が多く用いられている。

(3) 周辺地域からみた鶴淵寺五輪塔の位置付け(第156・157図)

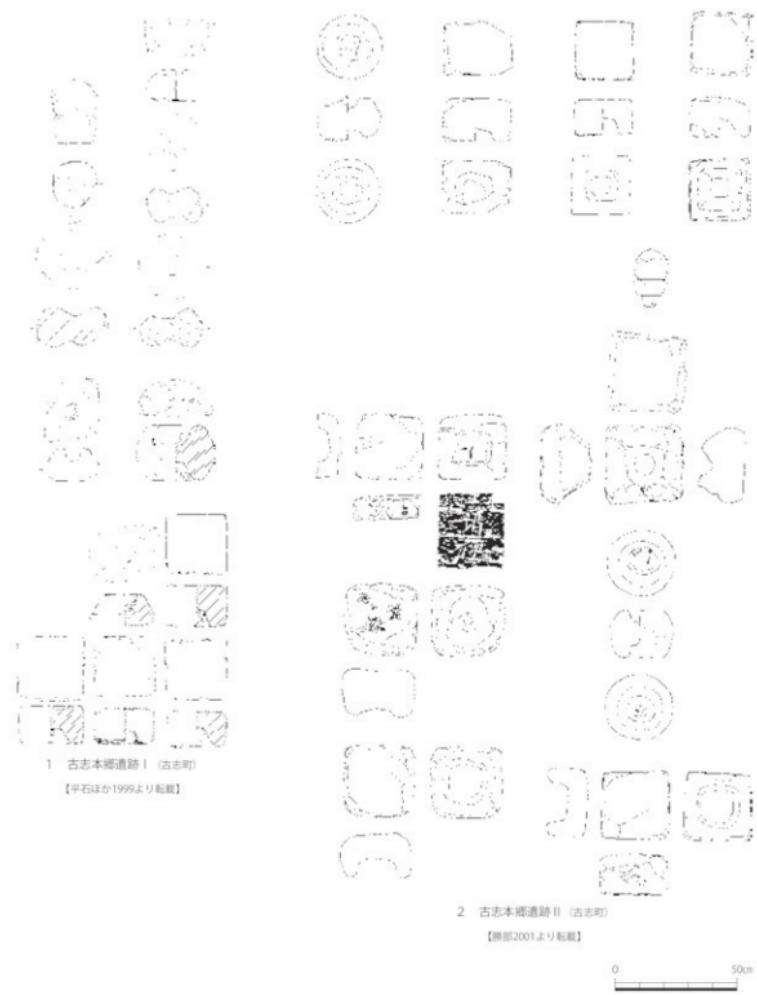
鶴淵寺の所在する出雲市周辺の地域では、これまでにどのような五輪塔が調査されているであろうか。発掘調査で出土した資料を中心に若干の比較検討を行ってまとめとしたい。

上塩治横穴墓群第33支群(上塩治町、第156図7)では、五輪塔と宝瓶印塔が出土している。五輪塔の石材は凝灰岩できめ細かいものと、やや粗く鉱物を含むものがある。谷を挟んで東側に位置する權現山石切場跡から石材が供給された可能性が報告書中に指摘されている(宮澤ほか2001)。空風輪は境が溝で表現されたものとそうでないものがあり、空輪は頂部がやや尖り宝珠型を呈する。残存状況が悪いものの、川奥地区で唯一確認された空風輪と類似するものかもしれない。火輪は降棟が反るものと直線的で高さがあるものがみられ、軒口の外側への張り出しあは小さい。水輪は中央に最大径があり、上下面に抉りを持つ。地輪は墨書きで梵字が施されたものが1点確認されている。いずれも幅30cm前後の小型塔の部材である。組み合わせが明らかになった塔はないものの、報告書中では総高70cmほどの塔が図上復元されている(守岡1998)。

古志本郷遺跡I(古志町、第157図1)では井戸跡の埋土内より大量の巨石が出土しており、この中に



第156図 鯉淵寺周辺地域の五輪塔(1) (1:20)



第157図 鰐淵寺周辺地域の五輪塔（2）（1:20）

五輪塔部材が混入していた。石材は凝灰質砂岩、凝灰岩・凝灰岩質角礫岩製などである。空輪の肩が張り、境を溝で表現するという松露谷地区4類のものと類似する空風輪が出土している。石材は凝灰質砂岩である。他に火輪と水輪が出土しているが、劣化が著しく本来の形状は不明である（平石ほか1999）。

古志本郷遺跡II（古志町、第157図2）では、井戸の石組に転用された五輪塔部材が出土している。石材は凝灰質砂岩、凝灰質シルト岩、凝灰岩、礫岩、火山礫凝灰岩などがある。凝灰岩製の空風輪が1点出土している。空輪は頂部が僅かに尖り、宝珠型を呈する。火輪は破損により細部の形状は不明瞭である。火・地輪で梵字が刻まれるものがみられた。いずれも幅25～30cmの小型塔の部材である。組み合わせが明らかなる塔はないが、空風・火・水・地輪が揃っているSE14の出土例を組み合わせると、総高80cmほどの塔が想定できる（勝部2001）。

荻籽古墓（荻籽町、第156図6）や鳩ヶ巣城山麓（西林木町）では、五輪塔や宝篋印塔の残欠が確認されている。五輪塔部材は空風輪が1点みられ、松露谷地区4類のものと酷似する。石材は凝灰質砂岩である（岩橋・西尾・深田・守岡2011）。

上中山石塔群（湖陵町、第156図4）では数十点の五輪塔部材が確認されているが、意図的に破壊されたかのような状況であったという。石材については、久多美町産と考えられる凝灰質砂岩よりは砂岩に近いものや、地元産や神戸川流域産の凝灰岩という鑑定結果を得ている。空輪は頂部がやや尖り宝珠型を呈する。火輪は軒先の下端が上下ともに直線的なものや、上下とも平行に反るもののがみられる。降棟は直線的である。水輪は最大径が中央にある。いずれも幅25cm前後の小型塔の部材である（野坂2004）。

周辺地域の報告例では、松露谷地区でみられたような中央地域の影響を受けた可能性のある部材や、極めて丁寧なつくりのものは今のところ見いだせない。

松露谷地区1類1・2、川奥地区1類1・2のような大型塔は、伝塙治判官高貞墓（塙治町、第156図1）や、伝吉祥姫五輪塔（朝山町、第156図2）がよく知られている。いずれも凝灰岩製である。伝塙治判官高貞墓は最大幅55cm、総高150cm、伝吉祥姫五輪塔は空風輪を欠くが、最大幅80cm、残部の高さだけでも150cmである。青木遺跡（東林木町、第156図3）では幅50cmほどの水輪が出土しており、本来は大型の塔であったことが想定される。松露谷地区・川奥地区にはこれに次ぐ大きさの五輪塔が所在していたということになる。

松露谷地区4類の空輪の肩が張るタイプの空風輪は古志本郷遺跡I、荻籽古墓、鳩ヶ巣城山麓の石塔で確認されている。いずれも凝灰質砂岩であった。谷ノ奥遺跡（松江市八雲町、第156図5）では、同タイプの空風輪（凝灰質砂岩）が京都系土師器皿・唐津焼皿などの16世紀末～17世紀前半の遺物とともに出土している。大変特徴のある形状であるが、出雲では今のところ凝灰質砂岩以外の石材ではみられない意匠である。周辺で産出される凝灰質砂岩は、出雲市久多美町の通称久多美石や松江市穴道町の通称来待石などが知られる。来待石についてはこれまで様々な角度からの研究が蓄積されている（間野2001、種口2004）。

鰐淵寺が所在する出雲市では、小田常陸の宝篋印塔（多伎町）や神光寺旧跡の宝篋印塔（大社町）な

ど石見地方で産出される凝灰岩、いわゆる福光石（大田市温泉津町）を用いた製品もみられる。この一方で、来待石を用いていながら福光石製品の意匠を持つ石塔（神門寺土塀西の五輪塔：塩治町、興源寺前の宝篋印塔・興源寺境内の宝篋印塔：美談町、善崩山1号墳南端所在の宝篋印塔：東林木町）が存在するなど、特殊な様相が窺える地域でもある。これについては石見の石工の出雲への移動が指摘されている（西尾・樋口2004）。

石材について鰐淵寺の事例と市内の報告例を比較してみると、凝灰岩などの地元産石材の製品を多く含むところ、凝灰質砂岩や花崗岩などの外部から持ち込まれた製品を多く含むところなど、墓地毎に石材の構成が異なるようである。しかし当該地域で悉皆調査を実施していないため、実際はどのような傾向が窺えるかはいまのところ明らかではない。

松露谷地区・川奥地区では石塔の本来の組み合わせ・原位置などが明らかな塔はなかったものの、既に報告したように一部で平坦面を石で長方形に区画している箇所や直線的に並ぶ石列がみられ、數か所の区画が存在する可能性がある。また、区画内に敷いたと思しき玉石もみられた。墓地としての地上の平面的な利用状況や、地下遺構の様子を石塔の様相と併せて把握することができれば、当地域の中・近世墓研究にとって極めて良好な資料となるであろう。

今回の調査は石造物に関する情報の蓄積が少ない当地域で、五輪塔だけでなく宝篋印塔も含め、どのような塔が存在するか確認できた点に大きな意義があるといえる。
（岩橋康子）

参考文献

- 伊藤 智ほか 2004『青木遺跡（中世編）』島根県教育委員会
- 今岡 稔 1991「山陰の石塔二三について—2—」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会
- 岩橋康子・西尾克己・深田 浩・守岡正司 2011「出雲市荻杵古墓出土品の再検討」『古代文化研究』第19号
島根県古代文化センター
- 勝部智明 2001『古志本郷遺跡Ⅱ』島根県教育委員会
- 川上昭一 2002『八雲村文化財調査報告20 谷ノ奥遺跡』八雲村教育委員会
- 平石 充ほか 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』島根県教育委員会
- 樋口英行 2004『白粉石・来待石の宝篋印塔・五輪塔』『宍道町ふるさと文庫19』宍道町教育委員会
- 樋口英行・岩橋康子 2005「中国編」「中世墓資料集成」中世墓資料集成研究会
- 守岡正司 1998『土沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩治横穴墓群（第7・22・22・33・35・36・37支群）』
島根県教育委員会
- 宮澤明久ほか 2001『権現山城跡・権現山石切場跡・白石谷遺跡・三田谷1遺跡』島根県教育委員会
- 間野大丞 2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について—中世末から近世初頭を中心に—」『石造物研究会第2回
研究会資料 来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会 来待ストーン客員研究会
- 西尾克己・樋口英行 2004『平田・小早川正平墓と興源寺周辺の石塔について』『来待ストーン研究』5, 来待ストー
ンミュージアム
- 野坂復之 2004『湖陵町の石塔について』『来待ストーン研究』5, 来待ストーンミュージアム

3 宝篋印塔（158～164図）

松露谷地区と川奥地区で確認した宝篋印塔はいずれも組み合わせ式の部材である。部材は多数存在するが、原位置を保つものはほとんどない。

掲載した部材は松露谷地区が相輪12点・屋根9点・塔身5点・基礎9点、川奥地区が相輪1点・屋根4点・塔身1点・基礎1点である。このうち当初の組み合わせが分かる資料は第158図1と第159図24のみである。

本来であれば石材ごとに各部材を分類すべきところだが、完存品が少なく組み合わせの復元も難しいなど資料的制約が大きい。さらに今回は悉皆調査を行っておらず実測した点数も少ないとから、既往の研究をもとに、以下の類型を設定することとした。

- 1類 大型石塔の部材
- 2類 日引石製品などの関西系宝篋印塔に類似した様相をもつ部材
- 3類 日引石製品などの簡略化・単純化が進んだものと、あらたな意匠に基づく部材
- 4類 これまで報告されている来待石製宝篋印塔と共通する要素をもつ部材
- 5類 4類がさらに簡略化・退化した部材

1類は当墓地で数少ないものである。また2類のなかに紀年銘資料2点を確認した。3類は当墓地で初めて確認する資料が多くみられる。また第159図27～29は報告例が少ないので類型を設定しないこととした。

以下、両地区的分類図に従って記述する。

（1）松露谷地区（第158～162図）

1類 第158図1は当地区で最大の宝篋印塔である（現存高157cm）。石材は花崗斑岩製⁽¹⁾である。相輪は九輪の二輪より上方を欠く。残存高は柄を含めて27.6cmである。九輪は深い彫りにより突帯状に造り出す。下請花は表現しない。伏鉢は径19.6cm、高さ7.5cmである。柄は円形をし、径11.2cm、長さ12cmである。屋根は上4段、下1段で、高さは30.5cmある。軒と軒上1・2段、軒下1段の段形が中央から端部に向けて反っている特徴をもつ。軒幅50.2cm、上面幅23.5cm、下面幅39.2cmである。上面に径14.0～14.5cm、深さ12.5cmの円形の柄穴を有する。軒は厚さ10cm前後と厚い。軒上の段形は3.8～5.4cmで3段目がやや高い。軒下の段形は薄くわずか2cmである。隅飾突起は基部の幅7.5cm。四隅とも先端が欠損しており高さは不明であるが、遺存する内弧から軒上2段目あたりまでと推定される。大型の屋根に対し、非常に低小さな隅飾突起が復元できる。塔身は高さ56cm、幅34.5cm、奥行34cmの長方体である。正面のみ蓮華座の上に胎蔵界大日「ア」を陰刻する（第160図）。基礎は高さ41.5cm、幅53.5cm、奥行54cmである。

2は流紋岩質凝灰岩製の塔身である。1と同じ長方体をするが、1よりも小型品である。上面幅24.5cm、高さは下位が埋没しており現状で32cm以上ある。上面には高さ1.8cm、基部14.5cm×14.2cmの方形の柄を作り出している。正面に釈迦「バク」、左面に不動「カーン」、右面に薬師「バイ」を薬研彫りし、背面は素面とする。正面の釈迦「バク」下を蓮華座で飾る（第160図）。

2類 第158図3～5は安山岩質凝灰岩製の相輪である。3点とも破損が大きく、全体の形態は不明である。3は九輪部下方を欠き残存高13.5cmである。宝珠は径6.8cm、高さ7.0cm。上請花は素弁単弁八葉に高さ半分以下でわずかに先端がのぞくほどの間弁を配する。4は九輪の大半を欠き残存高は14.5cmである。宝珠は高さ5.8cm、径5.8cm。上請花の最大径は8.2cm。素弁単弁七葉に高さ半分以下のわずかに先端がのぞくほどの間弁を配する。九輪は浅い溝で区画している。5は九輪上方から宝珠までを欠き残存高16.2cmである。下請花は覆輪付き複弁八葉をめぐらしている。

6～8は屋根である。軒上5～6段、下2段で上下面に枘穴を有し隅飾突起は二弧で外傾する。石材は6と7は安山岩質凝灰岩、8は凝灰岩質砂岩である。6は高さ15.1cm、軒幅19.0cmである。軒上6段、下2段の段形を作り出す。軒は厚さ2.3cm、各段形の高さはほぼ同じ1.5cmである。隅飾面は素面で輪郭は巻いていない。7は高さ12.8cm、軒幅19.6cmである。軒上5段、下2段の段形を作り出す。軒は厚さ2.1cm、各段の高さは1.5cmである。隅飾面は輪郭を巻く。8は高さ16.2cm、軒幅20.4cmである。軒上5段、下2段の段形を作り出す。軒は厚さ2.4cm、各段形の高さは1.7～2.1cmである。隅飾面は一面に輪郭を巻く。

9は凝灰岩質砂岩製の塔身である。幅12.9cm、残存高14.4cm（うち下柄高0.9cm）で上下面に枘を作り出している。四面とも月輪を陰刻するが月輪内に種子を配していない（第161図）。

10～13は基礎で反花座を有している⁽²⁾。反花座は中央と隅に覆輪付き複弁を配し、それぞれの間に単弁を添えている。上面中央には枘穴を有し、下面是平坦でなく中心に向けて浅く窪む特徴が共通する。10・13は一面、12は背面を除く三面に輪郭を巻き、格狭間を彫り込んでいる。使用されている石材は異なり、10は安山岩質凝灰岩（福井県高浜町産の日引石）、11～12は凝灰岩質砂岩、13は流紋岩質凝灰岩である。各基礎の法量は高さ16.8cm、上面幅13.5～15.4cm、側面幅22.0cm～15.4cmである。10の正面輪郭の右に「逆修尼妙阿」左に「文安五□（戊カ）□（辰カ）」の銘文が陰刻されている。文安5年は1448年である（第161図）。11は正面の欠損が大きいため背面も図化した（左図が背面）。高さ16.2cm、側面幅16.2cm、上面は欠損しているが幅14.8cmに復元できる。背面を除く三面は上辺以外の縁を2～3cm残して彫り込んでいる可能性がある。

3類 第159図14～16は相輪である。3点とも破損が大きく全体の形態は不明である。石材は14と15が凝灰岩質砂岩、16は流紋岩である。14は宝珠と上請花、枘を欠き残存高35.3cmである。九輪は浅い溝で区画し、輪の厚さは1.5～2.0cmである。上請花との間には径12.5cm、厚さ1.5cmの突帯をもつ。伏鉢は径12.5cm、高さ11cmある。15は九輪中ほどから宝珠までを欠き、残存高28.2cmである。九輪は浅い溝で区画し、下請花は表現しない。伏鉢は径11.7cm、高さ9.0cmである。16は九輪中ほどから枘までを欠き、残存高27.3cmである。宝珠は丸みがあり、最大径12.7cm、高さ10.5cmである。上請花は稜のある単弁八葉に間弁を配している。九輪は径11.1～11.8cmである。

17～19は凝灰岩質砂岩製の屋根である。軒上4段、下1～2段で厚い軒を有する。隅飾突起は二弧で外傾し、弧の交点は軒1段目に接続する。隅飾面の表現は17と他2点では異なっている。17は高さ25.5cm、上面幅15cm、軒幅27.3cm、下面幅21cmである。軒上の段形は高さ5.0cm～2.5cmで上段に向けて通減する。軒厚6.3cmで、軒下の段形は各1.5cmと薄い。隅飾突起は先端を欠き残存高

10.5cmである。隅飾面は内弧の線に合わせて幅 1.5 ~ 2.0cm, 深さ 0.3cmほど浅く彫り込んでいる。18は高さ 19.5cm, 上面幅 11.5cm, 下面幅 18.6cmである。上面には幅 8.0cm, 深さ 7.2cmの枘穴が彫りこまれている。枘穴は粗雑な作りで底面を平坦に仕上げていない。段形は軒上 4段, 下 1段である。軒上の段形は上 2段が低く, 下 2段が高い。軒は厚さ 3.5 ~ 4.0cmで, 軒口は斜めに傾斜している。隅飾面は内弧に沿って幅 1.0 ~ 1.5cmの縦線と幅 0.5cmの細い弧状の線を別々に刻む。19は高さ 21.2cm, 上面幅 12cm, 軒幅 24.5cm, 下面幅 19cmである。上面には径 7.5 ~ 8.0cm, 深さ 7.6cmの枘穴を彫り込む。段形は軒上 4段, 軒下 1段である。隅飾突起は二弧で外傾して立ち上がる。隅飾面は 18と同じく, 内弧に沿った太い縦線と細い弧線を陰刻する。

20は凝灰岩質砂岩製の塔身である。高さ 17.6cm, 幅 16cmの立方体である。下面に 7.0cm × 6.6cm, 高さ 2.0cmの枘を作り出している。各面に金剛界四仏種子「キリーグ」「タラーク」「ウーン」「アク」(第 162 図)を陰刻する。

21は凝灰岩質砂岩製の基礎である。高さ 21.5cm, 上面幅 19cm, 下面幅 27.2cmである。上に 2段の段形を作る。上面には一辺 8.0cm, 深さ 3.3cmの枘穴を彫り込んである。

4類 第 159 図 22・23 は相輪である。石材は 22 が安山岩質凝灰岩, 23 は凝灰岩質砂岩である。22 は九輪中ほどから枘までを欠き, 残存する高さは 21.1cmである。宝珠の高さは 6.0cm, 最大径 9.2cmである。上請花は表現しない。九輪は浅い溝で区画され, 径は下位から上位に向けて遞減する。23 は九輪上位から宝珠までを欠き, 残存する高さは 36.2cmである。九輪は溝で区画され下請花の表現はない。伏鉢の径は 12.9cm。枘は長さ 8.2cm, 径 8.6cmである。

24 は相輪から基礎まで当初の組み合わせが残り, 全高 105.2cmである。石材は凝灰岩質砂岩が使用されている。相輪は高さ 39.3cmである。宝珠は扁平な円錐形をし, 九輪は浅い溝で区画する。九輪の上下には突帯をもち, 請花は表現しない。屋根は高さ 19.8cm, 幅は上面 17.2cm, 軒 30.2cm, 下面 27cmである。軒上 4段, 軒下 2段の段形を作る。軒と軒下の段形は薄く 2.0cm程度である。隅飾突起は二弧で, 弧の交点は軒 2段目と接続する。側面は外傾し, 高さは 10cmである。隅飾面は内弧に合わせて縦線と巴状の線を彫り, 縦線には受手状の線が接続している。線の幅は縦線が 1.0cm前後と太く, 巴状・受手状の線が 0.5cmと細い。塔身は高さ 21.6cm, 上下面幅 22.7cm, 胸張りした最大幅は 23.5cmである。四面に金剛界四仏種子「キリーグ」「タラーク」「ウーン」「アク」を陰刻する。基礎は上に 2段の段形を作る。高さ 24.5cm, 上面幅 25.7cm, 下面幅 28.9cmである。

5類 第 159 図 25 は凝灰岩質砂岩製の相輪である。枘から九輪の大半を欠き, 残存する高さは 17.0cmである。宝珠は高さ 5.5cmの扁平な円錐形である。請花は鎌状の線と尖りのある梢円の線で表現した蓮弁を八葉以上めぐらしている(第 162 図)。請花と九輪のあいだには突帯を作り, 九輪は浅い溝で区画する。

26 は凝灰岩質砂岩製の屋根である。上面幅 13.0cm, 軒幅 17.7cm, 下面幅 16.3cmである。軒上 4段, 軒下 1段だが, 軒上 1 ~ 3段は正面のみ彫り出し, 他面は段を作らない。軒と段形・隅飾突起底辺のあいだを幅 0.5cmの溝で区画している。ひじょうに簡略化した造りである。隅飾突起は高さ 12.3cmあり, 屋根上面より高い兎耳状をしている。隅飾面は二弧で内弧に合わせて幅 0.5cmの浅い線で縦線と

受手状の線を彫っている。

その他 第159図27は凝灰岩質砂岩製の相輪である。柄を含めた全高は38.0cmである。宝珠は丸みが無く、先端に向けて尖っている。径は15.0cm、高さ12.0cmである。九輪との間には径14.3cm、厚さ3.0cmの突帯をめぐらす。九輪の部位は輪の表現がない。伏鉢は径13.5cm、高さ3.5cmである。柄は径6.6cm、長さ4.7cmである。

28と29は凝灰岩質砂岩製の基礎である。いずれも立体感のない彫りの浅い蓮弁を配した反花座を有する。28は横長で、29は立方体に近い。28は下位が埋没しており高さは15.0cm以上、幅は上面で19.0cmある。反花座は各隅に一葉とその間に三葉を浅く彫り出す。29は高さ18.4cm、下面幅18.7cmである。上端に半円形をした蓮弁を五葉浅く彫り出している。下面中央には $10.0 \times 9.5\text{cm}$ 、深さ2.0cmの孔を彫り込んでいる。

(2) 川奥地区 (第162・163図)

2類 第163図30は凝灰岩質砂岩製⁽³⁾の屋根である。高さ17.2cm、上面幅11.0cm、軒幅22.5cm、下面幅15.8cmである。上5段、下2段の段形を作り出す。隅飾突起の形態は二弧で外傾し、高さ7.6cmである。隅飾面は四面とも線刻により輪郭を巻いている。下面には径6.6cm、深さ2.1cmの枘穴を彫り込んでいる。

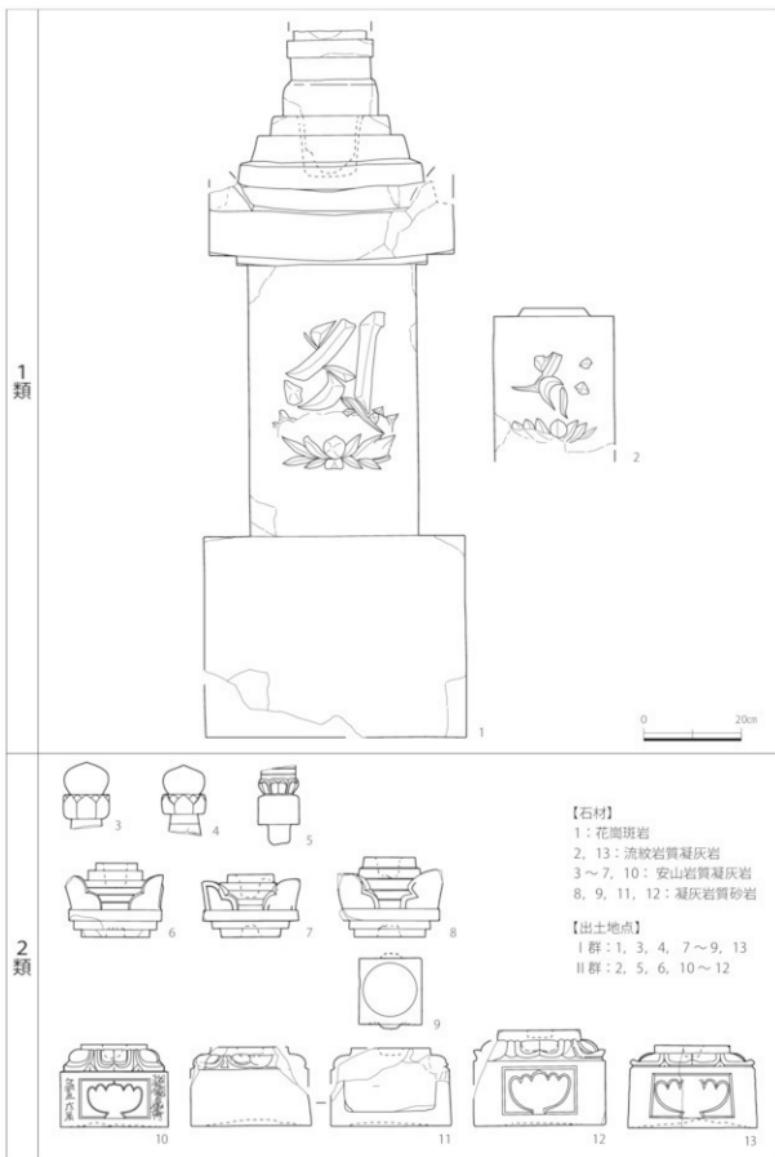
31は凝灰岩質砂岩製の基礎である。上面が剥落しており、残存する高さは18.2cmである。反花座は中央と隅に覆輪付き複弁を配し間弁を添える。側面は上幅27.0cm、下幅27.6cmである。背面を除く三面に輪郭を巻き、格狭間を彫り込んでいる。正面の格狭間には「(右) □□ (逆) □ (修) 敬白、(中央) 懶咸律師、(左) 文明十六□ (年) 卯か 月日」の銘文を刻む(第164図)。文明16年は1484年である。上面には径6.0cm、深さ2.5cm以上の枘穴をもつ。下面是縁を3.0~6.0cmほど残して浅く窪めている。

32は流紋岩製の相輪である。上請花と突帯の一部を残して大半を欠く。請花は單弁に間弁をめぐらす。突帯は径11.0cm、厚さ0.5cmである。突帯の上下にも高さ0.5cmの突線が彫り出してある。

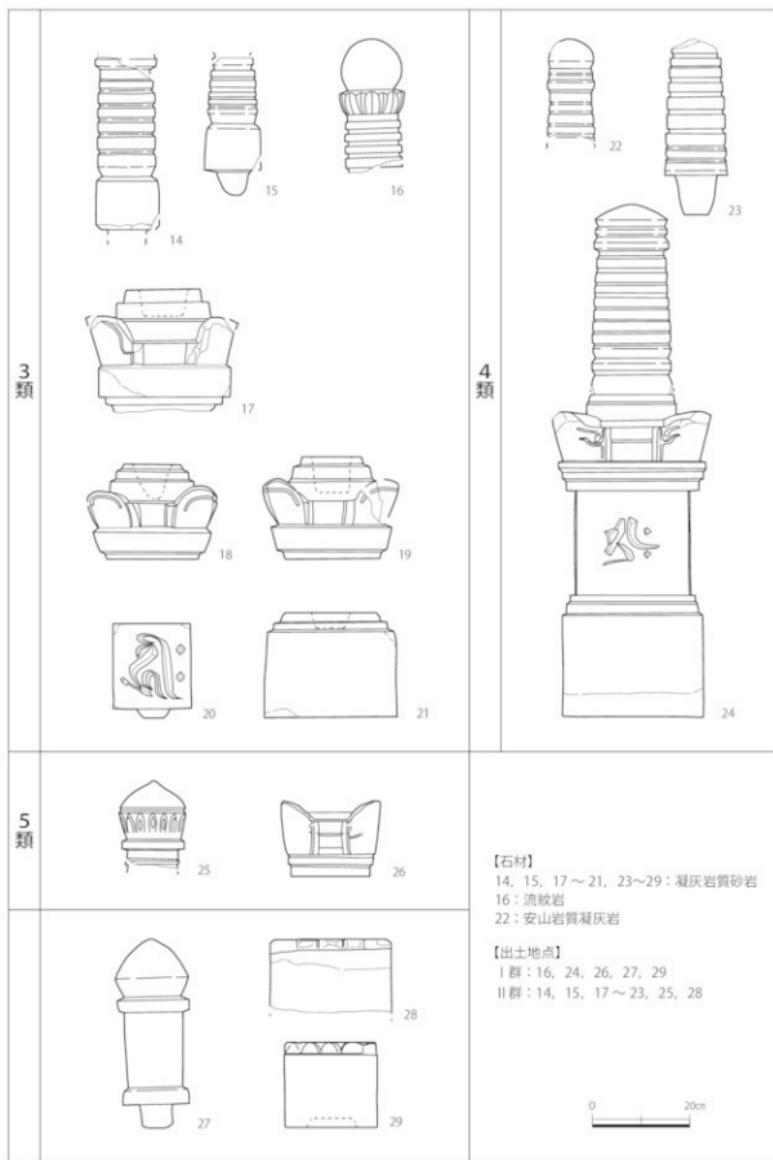
33は流紋岩製、34・35は凝灰岩質砂岩製の屋根である。いずれも厚い軒をもち隅飾突起は単弧である。33は上面を欠き、残存高は27.5cmである。軒上3段以上、軒下2段の段形を作りだす。軒幅32.8cm、下面幅23.0cmである。上面には径12.0~12.5cm、深さ6.6cm以上の円形の枘穴をもつ。下面是縁を1.5cm残して深さ0.3cm前後彫りこんでいる。軒は厚さ9.0cmある。隅飾突起は外傾し、高さ8.0cmある。隅飾面は素面である。34は下面から軒にかけて一部破損している。高さ32.0cm、上面幅14.5cm、軒は一部欠損するが幅29.0cmに復元される。上面には径8.5cm、深さ10.5cmの枘穴をもつ。軒上4段、下2段の段形を作り出す。軒の厚さは7.5cmである。隅飾突起はわずかに外傾し、高さは10.0cmである。隅飾面は剥落により観察できない。

35は軒上2段目以上、軒から下1段目が大きく剥落している。軒上幅28.7cm、下幅30.3cmで下位にむけて広がる。隅飾突起は単弧で外傾し高さ8.0cmである。隅飾面は素面である。

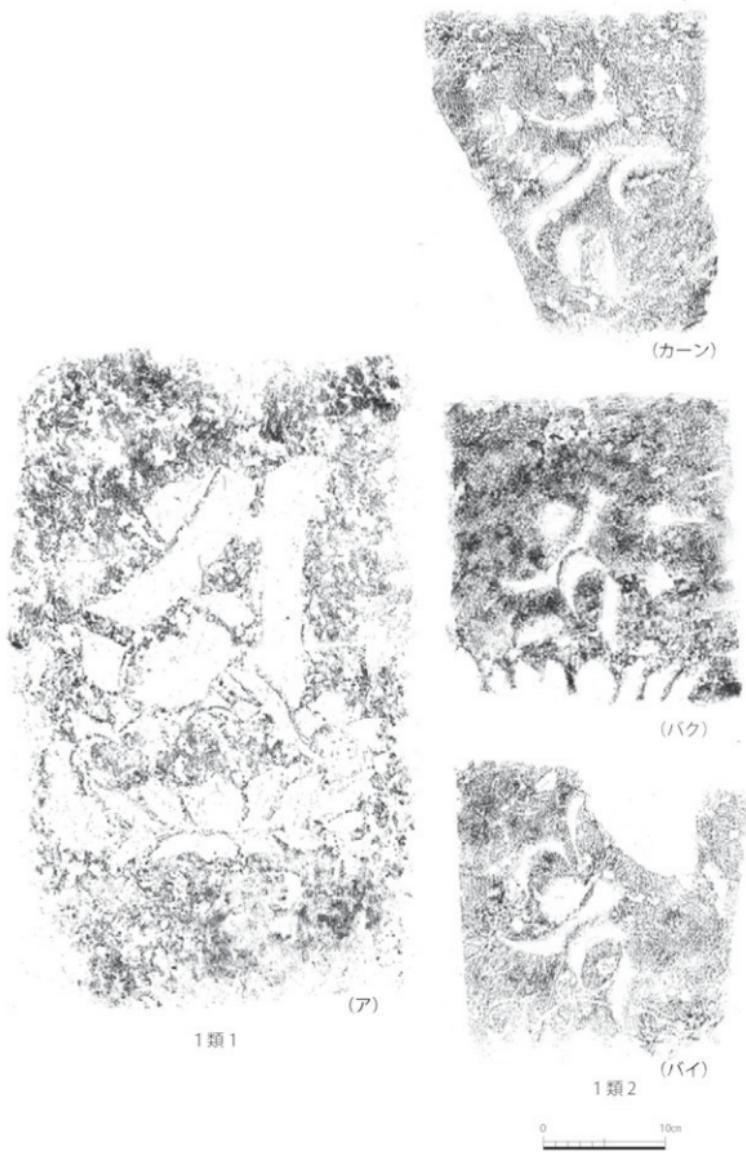
36は凝灰岩質砂岩製の塔身である。高さ18.8cm、幅18.5cmである。上下面とも中心に向けて浅い皿状に窪んでいる。各面に金剛界四仏種子「キリーク」「タラーク」「ウン」「アク」を陰刻している。



第158図 松露谷地区宝筐印塔分類図(1)(1:10)



第159図 松露谷地区宝篋印塔分類図(2)(1:10)



第160図 松露谷地区宝篋印塔 拓影(1)(1:4)



(アク)



(キリーク)



(タラーク)



(ウーン)

2類 9



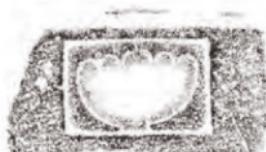
(アク)

逆修尼妙同

2類 10



2類 12



2類 13

0 10cm

第161図 松露谷地区宝篋印塔 拓影 (2) (1:4)



(アク)



(キリーク)



(タラーグ)



(ウーン)

3類 20



3類 17



3類 18



5類 25



5類 26



第162図 松露谷地区宝篋印塔 拓影(3) (1:4)

このほか、縁形式の基壇と考えられる幅 54.5cm・高さ 17.5 ~ 19.5cm の部材もみられた。

(3) まとめ

以上、両地区の部材を類型ごとに記述してきた。最後に在地の「来待石製品」の編年（岩屋寺石造物調査団 2009・松江石造物研究会 2006）を参考に、あらためて部材の形態変化を整理しておきたい。

相 輪 宝珠は丸みのある球状から扁平な円錐形へ、請花は彫出するものから、線刻するもの・表現を省略するものへ、概ね変化するものと考えられる。また請花を表現しなくなる段階から、部位そのものの形骸化も進んでいる。九輪は彫りの深い突帯状から、幅の狭い溝や線刻による分割表現、輪を表現しないものに変化する。伏鉢は高さのある円筒形から低平面形に変化する。以上の属性変化から、2類 3 ~ 5 → 3類 14 ~ 16・4類 22 ~ 24 へ変遷するものと考えられる（第 158・159 図）。1類 1 は下請花の部位そのものを作り出さないが、九輪は彫りの深い幅広の突帯であり、大型品であることから 2 類より古相を示すと考えられる。27 は 5 類 25 がさらに簡略化した形態とも考えられるが、現段階では位置づけを留保しておきたい。

屋 根 開飾突起の弧数と開飾面の装飾に着目する。単弧には低小で直立するもの（1類 1）と、外傾するもの（3類 33 ~ 35）がある（第 163 図）。前者は厚い軒が端部に向けて反る特徴をもつ。県内で同様の特徴をもつものに正林寺石塔群（松江市大庭町）がある。1類 1 が古く 3類 33 ~ 35 が新しいものと考えられる。

二弧のうち 3 類～5 類について来待石製宝篋印塔の例と比較する。筆者は、来待石製宝篋印塔の開飾突起が次の①から③へ変化したと考えている（岩屋寺石造物調査団 2009）。

①二弧。内弧の交点は軒上 2 段目と接続。開飾面の装飾は幅広の縦線と細い弧線、そのあいだに弧の交点を彫る。交点下には浅い弧状の線（岩屋寺 2 号窟 3）

②二弧。内弧の交点は軒上 2 段目と接続。開飾面の装飾は幅広の縦線と細い線。交点は細い線と一体化し巴状。交点下には浅い弧状の線（九戸千体地蔵仏 B 区 1）

③二弧ないし单弧。内弧の交点は軒上 2 段目と接続。開飾面の文様はすべて幅の細い線となり、ノ字状や隈取り状の線を加え装飾性が進む（文禄 5 年銘を有する岩屋寺 1 号窟 4 など）

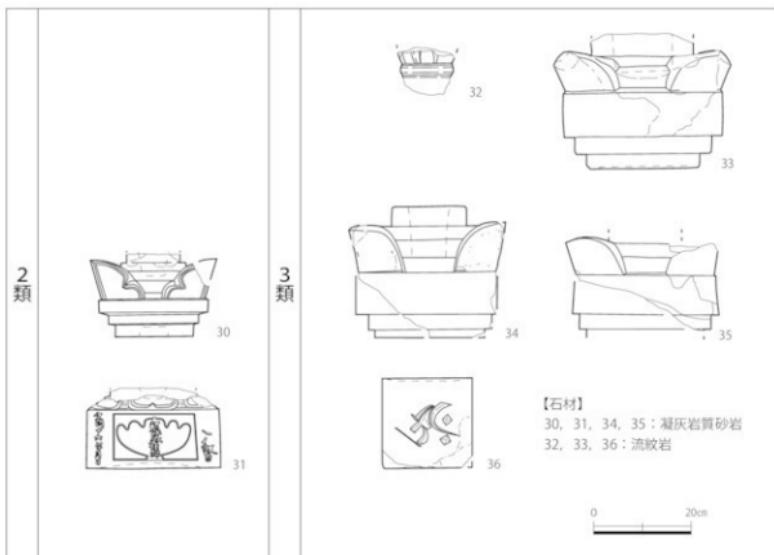
①～③と比較すると、3 類の文様表現は①に先立ち成立したと考えられ、さらに下記の A から B へ変化したと考えられる。

A（3 類 17）二弧。内弧の交点は軒上 1 段目と接続。内弧に沿って同じ幅で広く彫り下げる⁽⁴⁾

B（3 類 18 ~ 19）二弧。内弧の交点は軒上 1 段目と接続。内弧に沿って 2 本の線（幅広の縦線と細い弧状の線）を彫る

B の段階になると軒上段形の高さが均一ではなく、1・2 段目が高くなっている。開飾面の文様はこの変化に対応したもので、縦線のみ幅広の線で強調している。①の段階にはさらに垂直性が意識され内弧が 1 段高い軒上 2 段目と接続するように変化し、あわせて開飾面の加飾化も進む。また 4 類 24 と 5 類 26 は③の段階に相当すると考えられる。

以上を整理すると、3 類 17 → 3 類 18 ~ 19 → 4 類 24・5 類 26 の変遷となる。また 2 類 6 ~ 8 はこれらよりも古相を示しており、開飾面を輪郭で巻く装飾が 3 類 17 にみられる内弧を縁取る表現の祖



第163図 川奥地区宝篋印塔分類図 (1:10)



第164図 川奥地区宝篋印塔 拓影 (1:4)

形と思われる。

塔身 長方体と立方体のものがある。長方体をした塔身は、管見の及ぶ限り正平12年(1357)銘を有する安国寺宝篋印塔(松江市竹矢町)のほか、伝土御門親王墓(松江市宍道町)・岩屋寺F41塔(同)がある。類例からみて、長方形から立方体への変化が想定されることから、1類1・2が古く2類9、4類24が新しいと考えられる。

基礎 反花座を有するもの(2類10~13・31)と上2段式(3類21・4類24)がある⁽⁵⁾。いずれにも該当しない1類1は基礎ではない可能性もある。反花座を有するものには、文安5年(1448)、文

明16年（1484）の紀年銘資料が含まれている。また2類11は輪郭と格狭間を彫り込んでおらず、2類のなかでも後出する可能性がある。なお28・29は簡略化した反花座を有するが、類例が少ないと認め位置づけは留保したい。上2段式には上面に枘穴を有するものと有さないものがある。枘穴を有する3類21は、枘を有する塔身（3類20）に組み合うと考えられる。枘穴をもたないものは図に掲げていないが、川奥地区などで確認されている。4類24は上面の観察ができないが、来待石製品の類例からも枘穴は有さない可能性が高い。塔身の変化も勘案すると3類21→4類24への変遷が考えられる。

以上、各部材の形態変化について述べてきた。本稿では資料的制約と筆者の力量不足により、組み合わせの復元など詳細な検討にまで至らなかった。また設定した類型は今後、周辺地域における基礎資料の蓄積と分析を行う際のたたき台にしていただければ幸いである。なお小稿をまとめるにあたり佐藤利江氏の協力を得た。各類型の年代的位置づけについては佐藤氏が第7章第6節に記述しているので参照いただきたい。また銘文の調査には藤澤典彦氏、佐藤聖氏にご教示いただきました。記して感謝申しあげます。

(間野大丞)

註

- (1) 松露谷地区的石材は山内靖喜氏（島根大学名誉教授）に鑑定いただいた。
- (2) 図に掲げていないが、このほかにも反花座を有する基礎の大型品を1群で確認した。上面幅30.5cm、側面幅43.5cm。一面の反花座がわずかに露出するのみで、側面より下方が埋没している。中央と隅に覆輪付き複弁を飾り間に間弁を配している。
- (3) 川奥地区的使用石材は筆者の観察による。
- (4) 3類17の類例に二反田古墓（松江市法吉町）がある。報告書（杉原1987）は隅飾面の文様について、「縁の飾彫刻には蕨手状のCuspをつくる」と記述されており、筆者はこれまで線刻による表現と認識していた。しかし、あらためて26頁図11-29及び図版PL9-29をみると、内弧に沿って縁を一段彫り下げたり、3類17と類似している。ただ、二反田古墓は上弧と下弧を分割して彫ってあり新しい要素とみられる。隅飾突起の装飾以外にも二反田古墓と3類は屋根の軒が厚い点や相輪の蓮弁表現に共通性がみられる。
- (5) 当墓地では二反田古墓の基礎に類似する部材は確認されなかった。二反田古墓の基礎は、（杉原1987）28頁図11の52・55の破片をもとに、上下二段（下段は前後別材）を組み合わせた分割成形式として復元されている（同書図13）。上端は蓮弁を表現しない曲面ないし斜面のうえに方形座を作り出す縁形式である（同書図11の52）。高さは19cmで、残存幅は22cm程度（報告書から計測）となる。幅は塔身と下段部材に合わせて34cmに復元している。しかし、この復元では内面の例り貫き上面が平坦でない、左右非対称のいびつな形となる。幅はもっと広く復元したほうが適当ではないかと思われる。高さは川奥地区で確認された縁形式基壇と近似しており、図11の52は基壇（隅部の残欠）の可能性を考えたい。いずれにせよ同一石材を使用した資料の蓄積を待たなければならぬが、二反田古墓復元案については再検討が必要と思われる。

参考文献

- 岩屋寺石造物調査團 2009「岩屋寺石造物調査報告」『来待ストーン研究』9、来待ストーンミュージアム
 杉原清一 1987『二反田古墓』松江市教育委員会
 松江石造物研究会 2006「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景－松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術－」
 『来待ストーン研究』7、来待ストーンミュージアム

4 近世墓（第165～169図、図版27～29）

平成26年（2014）12月2日・8日、平成27年（2015）2月5日の3回にわたり、出雲市文化財課で松露谷墓地I・II群の近世墓調査を行ったので、その成果概要を述べる。

（1）目的

墓塔配置図をもとに、主に近世以降の石造物資料を対象として石造物の形態や銘文などの確認を行い、墓塔の構成・消長などを探る目的で調査を行った。

（2）方法

はじめに、測量図をもとに墓塔配置図を作成した。次に、調査カードを石造物1基につき1枚ずつ作成し、形態・銘文等を記録した。また、個別に写真撮影を行った。

（3）結果

現在も墓として立てられている石塔を中心に、総数213基について調査カードを作成した。その一覧は、第25～27表に示した。それらを、石塔の形態によって集計したのが第24表である。紀年銘の確認できる石塔は97基であり、石塔全体の45.5%である。

石塔形態としては、五輪塔15基のうち近世石塔が3基、中世と考えられる無銘の石塔が12基である。宝篋印塔は18基確認できるが、すべて無銘の中世期の石塔と考えられる。松露谷墓地群が寺院の墓地であることから、僧侶の石塔としてよく使われる無縫塔が全体の60.7%と大部分を占める。

時期的には、江戸中期の宝永5年（1708）から無縫塔の石塔が使われており、昭和31年（1956）まで継続している。また、墓標上部の頂点が尖った尖頂方形の石塔は、無縫塔より古い紀年銘をもつものがあり、寛文6年（1666、第26表123）から享保18年（1733、第27表190）まで確認できる。

具体的に確認できる人物としては、幕末から明治初期に活躍した鰐淵寺の傑僧・じやくそう村田寂順墓（第25表1）やその師唯我詔舜の墓（同2）が確認できる。C8にある寛文6年の石塔（123）には、「豪榮」とあり江戸初期の井本坊の住僧として文献史料に登場する⁽¹⁾。

銘の中には、「圓流寺」とある石塔が13基確認できる。その分布はC4に5基、C7に6基、C8に2基である。松江市円流寺との関連については、本章第1節で鳥谷氏が岡崎雄二郎氏らの業績に触れているとおりである。

銘によって、院・坊を確認できる石塔は14基で、石塔全体の7.2%で、紀年銘のある石塔の中では14.4%と割合は高くない。また、『科研報告』「鰐淵寺棟札等釈文」（山岸常人氏作成）に記載されている僧坊名および僧名と、石塔銘文との照合作業により、さらに11基の石塔について所属の僧坊を推定することができた。これにより、全体で25基の石塔について院・坊がわかった。

坊名の確認できる最古は、享保7年（1722、第25表32）の松本坊で、明治42年（1909、第25表60）まで確認できる。5基がC4平坦面中央部に集中している。また、恵門院はC7で3基確認でき、寛政8年（1796、第26表117）から文政13年（1830、第26表113）までと、比較的集中している。松本坊および恵門院については、若干のまとめが確認でき、坊ごとに造立された可能性を示している。また、前住職の聞き取りから、銘文では確認できないが、C9は「恵門院」の墓域であるとのこ

とであった。

建立の消長をみると（第23表），まず，17世紀代に造立されるのがC8の豪栄墓（第26表123），盛倪墓（同130）の2基（第166図），そしてC7の榮賢墓（第26表103，第165図）の3基である。18世紀の石塔はすべての平坦面で確認でき，その数25基と急増する。その後，19世紀に倍増し52基となる。20世紀以降，數は減少し，20世紀が16基，21世紀が1基となる。17世紀から21世紀まで通して紀年銘が確認できる平坦面は，C8のみである。

また，平坦面とはなっていないが，松露谷入口の道沿いに多種多様な石造物が見られる。慶応2年（1866）の一宇一石塔（第27表197）や銅造不動明王像（同193），寺小姓の吉三と伝わる無縫塔（同212），八百屋お七の墓といわれる宝鏡印塔（同213）も残されている。

近世墓は，松露谷墓地群にそれ以前の中世から引き続いているため，それが現代まで継続されていることが明らかとなった。形態としては，住僧の墓地であるため，無縫塔が大部分を占めている。また，20世紀に入ると石塔が減少しているが，これは僧坊が近世12坊から無住化や火災等により徐々に消滅していった事実と符合するのであろう。

（石原 聰）

註

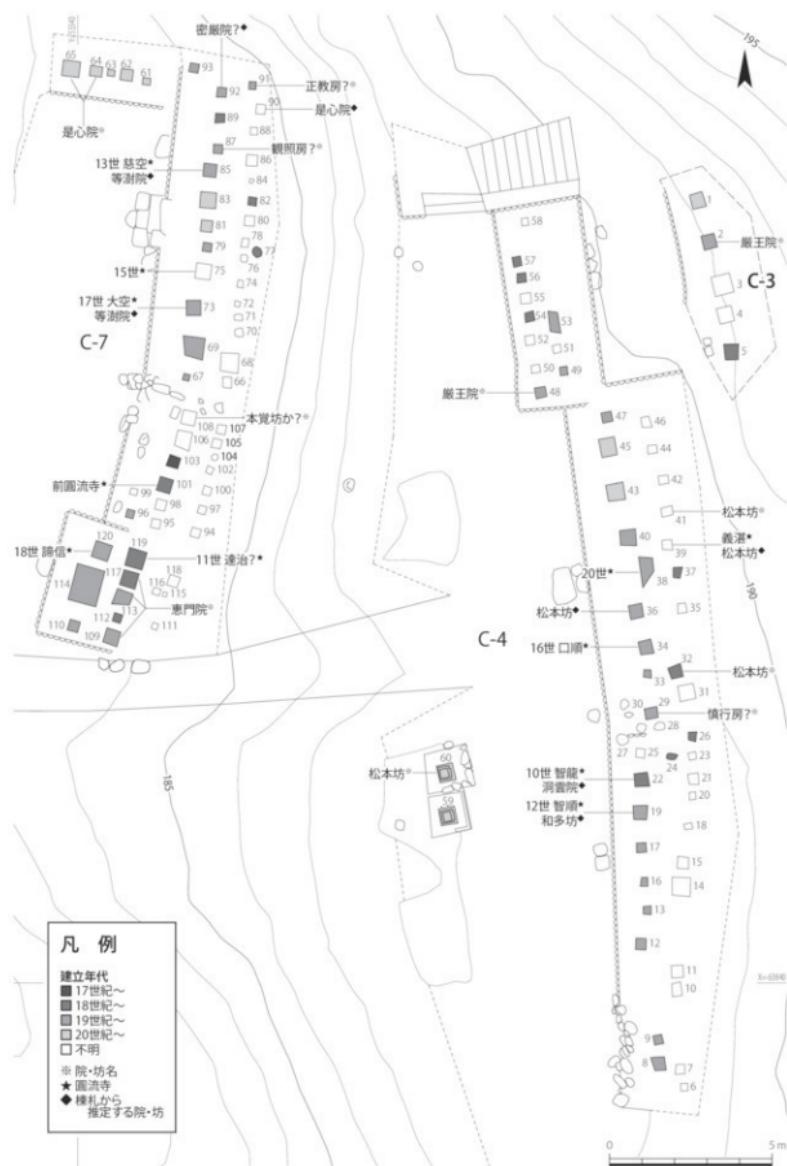
（1）慶長7年（1602）3月7日の日付をもつ「鶴淵寺領富村竹尾坊分田地坪付」・「鶴淵寺領富村金剛院分田地坪付」のなかに「井本坊豪栄」の署名が見える。井上寛司氏のご教示による。

第23表 平坦面ごとの消長表

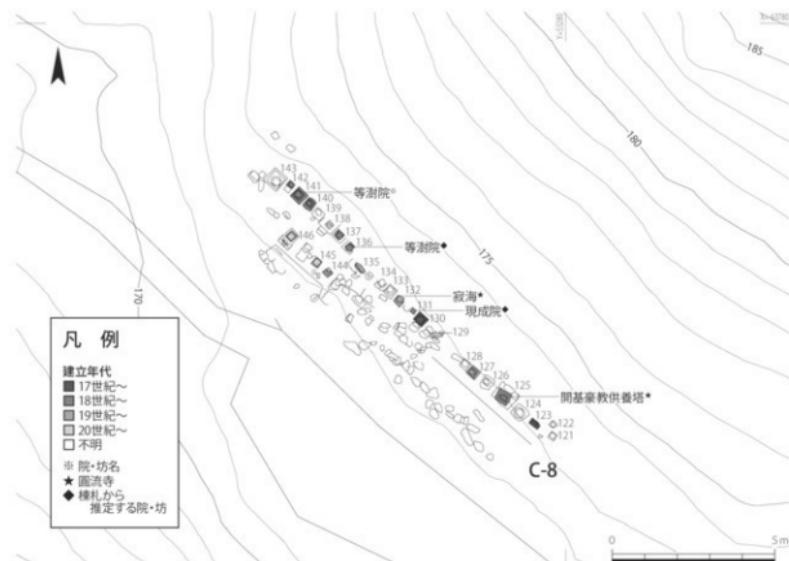
平坦面	1601年～	1701年～	1801年～	1901年～	2001年～
C-3		1	1	1	
C-4		8	18	4	
C-7	1	7	15	7	
C-8	2	3	7	3	1
C-9		4	5		
C-10		2	6	1	

第24表 石造物種別の集計表

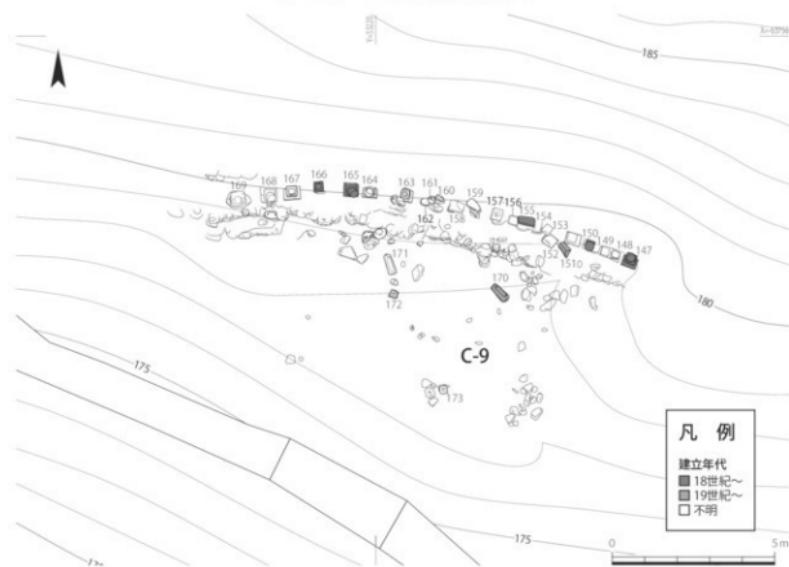
種別	総数	紀年銘有り	造立期間
無縫塔	117	75	1708～1956
円筒方形	6	5	1915～2008
円筒方柱	3	3	1862～1935
尖頂方形	4	4	1666～1733
平頂方形	2	0	
平頂方柱	4	3	1858～1909
笠置方柱	1	0	
自然石	3	3	1861～1895
五輪塔	15	3	1792～1895
一石五輪塔	1	0	
地藏	17	1	1862
石仏	1	0	
円形特殊	1	1	1892
宝鏡印塔	18	0	
不動明王像	1	0	
一宇一石塔	1	1	1866
不明	18	0	
合計	213	99	



第 165 図 C-3・4・7 平坦面石造物配置図



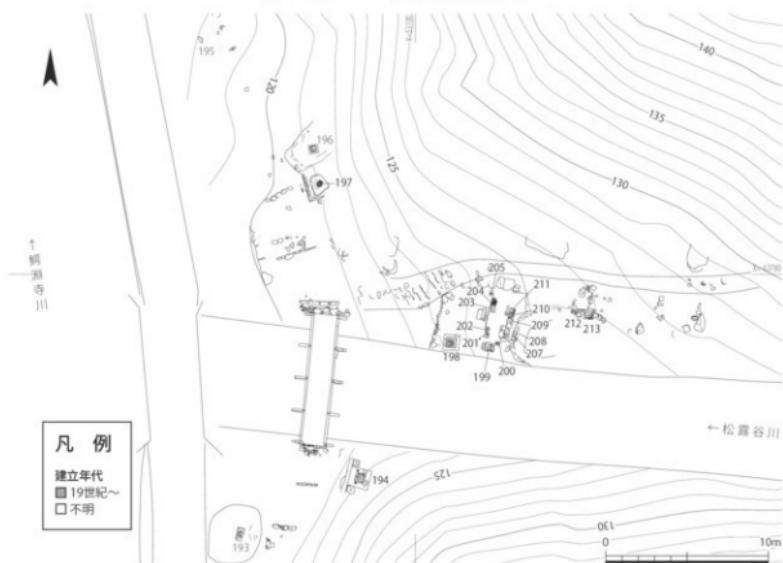
第166図 C-8 平坦面石造物配置図



第167図 C-9 平坦面石造物配置図



第168図 C-10平坦面石造物配置図



第169図 松露谷入口平坦面石造物配置図

第25表 松露谷地区石造物一覧表(1)

通し番号	平坦面番号	年号	西暦	種別	所属の院・坊	備考
1	C-3	明治 18	1895	無縫塔		村田寝頭墓
2	C-3	明治 19	1896	無縫塔	般王院	比叡山覺林坊兼東京浅草寺住職 / 比丘超舟
3	C-3			宝鏡印塔		
4	C-3			五輪塔		
5	C-3	寛政 4	1792	五輪塔		
6	C-4			無縫塔		
7	C-4			石仏		
8	C-4	慶応元	1865	無縫塔		前松林寺
9	C-4	元治元	1864	無縫塔		
10	C-4			無縫塔		
11	C-4			五輪塔		
12	C-4	明治 15	1882	無縫塔		地輪
13	C-4	明治 8	1875	無縫塔		
14	C-4			笠付方柱		
15	C-4			無縫塔		
16	C-4	天保 10	1839	無縫塔		
17	C-4	天保 8	1837	無縫塔		
18	C-4			不明		
19	C-4	文政 5	1822	無縫塔	和多坊	前圓流寺 12世 / 智龍・1785 天明 5年 (1785) 棚札 22
20	C-4			不明		
21	C-4			無縫塔		安澄
22	C-4	寛政 10	1798	無縫塔	洞雲院か	前圓流寺 10世 / 智龍・寛延 3年 (1750) 棚札 7・明和 2年 (1765) 棚札 20
23	C-4			不明		
24	C-4	明和元	1764	無縫塔		
25	C-4			無縫塔		智覺
26	C-4	天明元	1781	無縫塔		
27	C-4			五輪塔		
28	C-4			不明		
29	C-4	明治 8	1875	無縫塔	慣行房?	新道
30	C-4			不明		
31	C-4	文政 5	1822	五輪塔		性叔
32	C-4	享保 7	1722	無縫塔	松本坊	慧寬
33	C-4	文政 12	1829	無縫塔		
34	C-4	弘化 3	1846	無縫塔		前圓流寺第 16世 / 口頃
35	C-4			宝鏡印塔		
36	C-4	明治 11	1878	無縫塔	松本坊か	心海・嘉永 7年 (1854) 棚札 28
37	C-4	寛保元	1741	無縫塔		圓興
38	C-4	明治 28	1895	自然石		比叡山吉祥院洞源寺兼圓流寺 20世
39	C-4			無縫塔	松本坊か	前圓流寺 / 善湛・松本坊 享保 19 (1734) の棚札, 27
40	C-4	明治 28	1895	五輪塔		覺心
41	C-4			無縫塔	松本坊	
42	C-4			無縫塔		
43	C-4	昭和 16	1941	無縫塔		泰澤・大正 12年 (1923) 棚札 32
44	C-4			無縫塔		義海
45	C-4	昭和 31	1956	無縫塔		泰源・大正 8年 (1923) 棚札 31
46	C-4			無縫塔		
47	C-4	明治 24	1891	無縫塔		圓深
48	C-4	天保 8	1837	無縫塔	般王院	
49	C-4	明治 11	1878	無縫塔		鏡純
50	C-4			無縫塔		
51	C-4			無縫塔		
52	C-4			無縫塔		
53	C-4	安政 5	1858	平頂方柱		泰溫・忠臣之忠臣梵僧之梵僧・喜永 7年 (1854) 棚札 28 新三位
54	C-4	寛保元	1741	無縫塔		
55	C-4			無縫塔		
56	C-4	安永 8	1779	無縫塔		
57	C-4	明和 2	1765	無縫塔		
58	C-4			地藏		
59	C-4	昭和 62	1987	平頂方柱	洞源寺 佐藤クラ	
60	C-4	明治 42	1909	平頂方柱	松本坊	長尾定子
61	C-7	大正 4	1915	円頂方形		秀芳孫
62	C-7	昭和 19	1944	尖頂方柱		
63	C-7	大正 4	1915	円頂方柱		如幻孫
64	C-7	昭和 10	1935	円頂方柱	是心院	荒木利子
65	C-7	平成 6	1994	円頂方柱	是心院	荒木敏子
66	C-7			無縫塔		
67	C-7	文久 3	1863	無縫塔		大源 / 神門郡松寄下尾添出
68	C-7			平頂方形		
69	C-7	安政 4	1857	無縫塔		大源
70	C-7			五輪塔		
71	C-7			無縫塔		
72	C-7			五輪塔		

(棚札番号は「科研報告」参照)

第26表 松露谷地区石造物一覧表(2)

通し番号	平坦面番号	年号	西暦	種別	所属の院・坊	備考
73	C-7	弘化4	1847	無縫塔	等測院か	大空 / 前圓流寺第17世・天保5年(1834) 棚札 27
74	C-7			無縫塔		
75	C-7			無縫塔		前圓流寺第15世
76	C-7			宝鏡印塔		
77	C-7	享保5	1720	無縫塔		
78	C-7			宝鏡印塔		
79	C-7	天保10	1839	無縫塔		塗心
80	C-7			五輪塔		
81	C-7	大正14	1925	無縫塔		奉心 / 富山3世
82	C-7	享保10	1725	無縫塔		
83	C-7	昭和20	1945	無縫塔		泰照
84	C-7			無縫塔		
85	C-7	天保8	1837	無縫塔	是心院か	慈空 / 前圓流寺14世・是心院 文化元年(1806) 棚札 26
86	C-7			無縫塔		惠勇
87	C-7	天保3	1832	無縫塔	觀照房?	心空・少納言 文政元年(1806) 棚札 26
88	C-7			無縫塔		
89	C-7	天明7	1787	無縫塔		慈空
90	C-7			無縫塔	是心院か	達願・是心院 寛延3(1750) 棚札 7 明和2(1765) 棚札 19
91	C-7	安政5	1858	無縫塔	正教房?	普門
92	C-7	文久3	1863	無縫塔	密嚴院か	豪慶・嘉永7年(1854) 棚札 28
93	C-7	文久2	1862	円頂方柱		
94	C-7			無縫塔		
95	C-7			無縫塔		泰照
96	C-7	嘉永元	1848	無縫塔		光輝
97	C-7			無縫塔		
98	C-7			無縫塔		
99	C-7			五輪塔		
100	C-7			宝鏡印塔		
101	C-7	正徳5	1715	無縫塔		前圓流寺
102	C-7			宝鏡印塔		
103	C-7	延宝6	1679	尖頂方形		宋賀か
104	C-7			五輪塔		
105	C-7			宝鏡印塔		
106	C-7			宝鏡印塔		大型、高157cm
107	C-7			宝鏡印塔		
108	C-7			無縫塔	本覺坊か?	
109	C-7	天保9	1838	無縫塔	惠門院	確信・天保5年(1834) 棚札 27
110	C-7	明治26	1893	無縫塔		達順
111	C-7			寶鏡印塔		
112	C-7	寛政6	1794	無縫塔		惠澤
113	C-7	文政13	1830	無縫塔	惠門院	大心
114	C-7	明治25	1892	円形特殊		泰忍 / 等測院・洞雲院、惠門院、密嚴院の銘あり・文明8年(1811) 棚札 24・文化12(1815) 棚札 25・文政元年(1816) 棚札 26
115	C-7			五輪塔		
116	C-7			五輪塔		
117	C-7	寛政8	1796	無縫塔	惠門院	
118	C-7			無縫塔		
119	C-7	寛政7	1793	無縫塔		達治7 / 前圓流寺第11世
120	C-7	安政元	1854	無縫塔		諱信 / 前圓流寺第18世・天保5年(1834) 棚札 27 三位
121	C-8			宝鏡印塔		
122	C-8			五輪塔		
123	C-8	寛文6	1666	尖頂方形		泰宗
124	C-8			無縫塔		
125	C-8	明治10	1877	自然石		圓流寺開基基督教供養塔・基督教・圓流寺初代
126	C-8			無縫塔		
127	C-8	宝永5	1708	無縫塔		
128	C-8			無縫塔		
129	C-8			一石五輪塔		
130	C-8	延宝4	1676	尖頂方形		盛愧
131	C-8	文政9	1826	無縫塔	現成院	成和・文化元年(1806) 棚札 26
132	C-8	享保21	1736	無縫塔		圓流寺 / 泰海
133	C-8			無縫塔		
134	C-8			無縫塔		
135	C-8	寛政元	1789	無縫塔		
136	C-8	安政4	1857	無縫塔	等測院か	泰空・嘉永7年(1854) 棚札 28
137	C-8	文化6	1809	無縫塔		泰謙
138	C-8			地藏		
139	C-8			無縫塔		
140	C-8	文久2	1862	無縫塔		圓通
141	C-8	天保7	1836	無縫塔	等測院	
142	C-8	明治9	1876	無縫塔		圓空
143	C-8	明治37	1904	無縫塔		泰亨

第27表 松露谷地区石造物一覧表(3)

通し番号	平垣面番号	年号	西暦	種別	所属の院・坊	備考
144	C-8	昭和6	1931	円頂方形		童女
145	C-8	昭和9	1934	円頂方形		
146	C-8	平成20	2008	円頂方形		泰欽代建立
147	C-9	慶応元	1865	無縫塔		妙因
148	C-9			宝鏡印塔		
149	C-9			宝鏡印塔		
150	C-9	文政10	1827	無縫塔		智應
151	C-9	安永4	1775	無縫塔		
152	C-9			不眞		
153	C-9			五輪塔		
154	C-9			宝鏡印塔		
155	C-9	文化14	1817	無縫塔		
156	C-9			宝鏡印塔		
157	C-9			不眞		
158	C-9			不眞		
159	C-9			無縫塔		
160	C-9			不眞		
161	C-9			不眞		
162	C-9			不眞		
163	C-9			不眞		
164	C-9			無縫塔		
165	C-9	享保7	1723	無縫塔		
166	C-9	宝曆12	1762	無縫塔		智永か
167	C-9			不眞		
168	C-9	天保14	1843	無縫塔		
169	C-9	文久元	1861	自然石		義憲
170	C-9	寛延2	1749	無縫塔		
171	C-9			無縫塔		
172	C-9			宝鏡印塔		
173	C-9			宝鏡印塔		
174	C-10			不眞		
175	C-10	天保8	1837	無縫塔		
176	C-10	安政6	1859	無縫塔		
177	C-10	天保3	1832	無縫塔		
178	C-10	文化13	1816	無縫塔		性善
179	C-10	宝曆13	1763	無縫塔		大忍
180	C-10			無縫塔		
181	C-10	明治7	1874	無縫塔		
182	C-10			無縫塔		
183	C-10			不眞		
184	C-10			平頂方形		
185	C-10			不眞		
186	C-10	慶応元	1865	無縫塔		
187	C-10			円頂方形		
188	C-10			無縫塔		
189	C-10	大正7	1918	無縫塔		栄真
190	C-10	享保18	1733	尖頂方形		
191	C-10			無縫塔		
192	C-10	明治41	1908	無縫塔		
193	松露谷入口			不動明王像		銅造不動明王像
194	松露谷入口			地藏		
195	松露谷入口			一丁地藏		智空信女/口宇賀村
196	松露谷入口			地藏		
197	松露谷入口	慶応2	1866	一字一石塔		望門院達信 捺札 29
198	松露谷入口			宝鏡印塔		
199	松露谷入口			地藏		
200	松露谷入口			平頂方柱		
201	松露谷入口			地藏		
202	松露谷入口			地藏		
203	松露谷入口			地藏		頭主 三塚村 外不明
204	松露谷入口	文久2	1862	地藏		仁多郡横田町屋 俗名長兵衛
205	松露谷入口			地藏		
206	松露谷入口			地藏		
207	松露谷入口			地藏		
208	松露谷入口			地藏		
209	松露谷入口			地藏		
210	松露谷入口			地藏		
211	松露谷入口			地藏		
212	松露谷入口			無縫塔		伍吉三基
213	松露谷入口			宝鏡印塔		伍吉七基

第3節 石造物調査の成果概要

今回の調査によって、境内の石造物、墓地群の石塔、參道沿いの一丁地蔵など、すべてではないが、鰐淵寺の石造物の全体像を、概ね把握できたものと思われる。

鰐淵寺境内中枢地域の石造物は、灯籠、石仏、狛犬、水盤、石塔、石碑など種類は多く、それらのほとんどは、根本堂から摩多羅神社周辺に置かれている。石材は来待石が大半を占め、紀年銘によると18世紀後半から20世紀、江戸時代後期から近・現代のものであった。

鰐淵寺の墓地群は、松露谷墓地Ⅰ群・Ⅱ群、そして川奥墓地の3箇所からなる。

松露谷墓地Ⅰ群とⅡ群は、中世以来の鰐淵寺歴代住僧の墓地である。両者を比較すると、平坦面の数はⅠ群・Ⅱ群ともに12箇所と同じだが、墓地構成や規模等に違いがみられる。

Ⅰ群は平坦面の平均面積が約100m²あり、平坦面は方形を意識し整形されている。一方、Ⅱ群は約70m²とⅠ群より規模が小さく、自然地形に若干手を加えただけの不整形な平坦面となっている。

Ⅰ群は平坦面の形状のみならず石塔配置においても、基壇状の区画を伴うなど、江戸後期以降に整理された姿を見せている。Ⅱ群は後世に整理された形跡が見られず、石塔も五輪塔や宝篋印塔が多い。よってⅡ群はⅠ群に比べると、より強く中世の様相をとどめていると考えられる。

松露谷墓地群の石塔形式としては、無縫塔、宝篋印塔、五輪塔、方柱形墓標などがあるが、無縫塔が最も多く、全体の60.7%を占めている。これは先述したⅠ群における江戸後期以降の墓地整理が関係し、近世以降に建立された石塔が多数を占め、しかも住僧によく利用される無縫塔形式が採用されたことの反映であろう。

次に時期的な点を概観してみると、五輪塔と宝篋印塔は、松露谷墓地群および川奥墓地の両者で見られ、ともに14世紀代から16ないしは17世紀代のものがある。ただし、川奥墓地は墓地機能として16世紀代、もしくは17世紀前半まで終わっているとみられる。この点は、川奥墓地に墓標型式のものや無縫塔が見られないことも一致する。また松露谷墓地Ⅱ群は明治末まで機能を終え、一方、現代まで継続しているのはⅠ群である。

松露谷墓地群の特殊な石塔として、現存高157cmを測る大型宝篋印塔（C7-106、第158図1）があげられる。Ⅰ群C7にあるこの石塔は、反りを伴った段形の笠、太い梵字や蓮弁を刻んだ縱長の塔身、上段に段形をもたない基礎といった特徴がある。奈良市薬王寺の厨子遺品などに類例があり、中央の古い型式の系譜を引く可能性がある。また類例の使用方法から、この大型宝篋印塔が経塚等の意味を持っている可能性も指摘された（第6章第1節5）。造墓開始期初頭の象徴的な意味を持っていることも考えられ、その意味でも重要な石塔である。

石塔石材の中心は、凝灰質砂岩（来待石もしくは久多美石）、流紋岩、凝灰岩などの地元産であるが、搬入品の可能性がある安山岩質凝灰岩（日引石、福井県高浜町産出）などもみられる。鰐淵寺の石塔群は、13世紀末以降18世紀までの長期間にわたって使用石材の変遷をたどることができる資料群として評価されており（第7章第6節）、山陰地方の石造物研究の面でも大きな成果をもたらすこととなったと思われる。

近世墓については、現在も墓として立てられている石塔を中心に 213 基の調査を行った。寺院墓地を反映し、僧侶の石塔に使用される無縫塔が全体の 6 割を占めている。無縫塔は、確認できる紀年銘によると宝永 5 年（1708）から使われ始めるが、尖頂方形石塔はより古い寛文 6 年（1666）を刻むものがあり、享保 18 年（1733）まで認められる。このことから住僧の石塔が尖頂方形石塔から無縫塔へと転換する時期は、鰐淵寺では 18 世紀前半期と推定することができる。一方、無縫塔の終焉は昭和 31 年（1956）で、これ以後は一般的な方形柱墓塔となっている。

石塔の銘文、および『科研報告』「鰐淵寺棟札等証文」との照合によって、松本坊および惠門院については、坊ごとのまとまりが一定程度確認できた。しかし、明治以降の僧坊の減少に伴って石塔の造立数も減少し、言い伝えもほとんど残されていない状況から、これ以上の成果は望めないと思われる。

今回の石造物調査により、鰐淵寺では 3箇所に墓域を確認することができた。松露谷墓地 I 群と II 群の調査では、14 世紀代の五輪塔や宝篋印塔が確認され、墓地機能の開始を 14 世紀と考えた。しかし、13 世紀代の藏骨器（常滑焼）が採集されており、さらに造墓開始期がさかのぼる可能性も秘めている。一方、古代須恵器や白磁が拾えることや墓塔のない広い平坦面の存在などから、墓地以外の施設等に利用されていた可能性も残されている。現時点では、その性格や変遷について言及することはできず、今後究明すべき大きな課題の一つとして認識しておきたい。

鰐淵寺の墓地群は、僧坊群等とは独立した一種の淨地に営まれ、中世以来、寺との一体性を保ちながら今日まで連綿と続いていることが明らかとなった。そこから見えてくるのは、鰐淵寺境内の空間構成が周到な計画のもとに組まれていることである。その時期は、墓地群の形成開始年代から見ても中世期とみて相違ない。堂塔や僧坊あるいは儀礼・祭祀の場だけでなく、この墓地群も、やはり中世の様相を色濃く今に残しているのであり、中世山林寺院・鰐淵寺の重要な構成要素の一つである。

（穴道年弘・野坂俊之）

第7章 総括

第1節 鰐淵寺伽藍の構造とその変遷

鰐淵寺伽藍についての最大の問題は、北院と南院の所在地をどのように考えるかにあった。過去には、北院を現境内北西の唐川地域（出雲市唐川町）に、南院を現境内の別所地域（出雲市別所町）にあてる説が有力であった（曾根 1963, 井上編 1997 など）。しかし、『科研報告』および本報告も詳述してきたように、「もともと鰐淵寺の北院・南院はともに別所地域に存在し（中略）、とくに北院和多坊については平安末・鎌倉期以後、明治 38 年の焼失まで一貫して和多坊跡地の場所に所在したと考えるのが妥当」であり、「こうした観点から中世・近世の鰐淵寺の歴史についても改めて捉え返すことが重要」だ（『科研報告』29 頁）。

本稿でも、この観点を継承し、さらに前章までに詳述された、発掘調査と分布調査、そして石造物調査の成果を受けつつ、鰐淵寺伽藍の構成を歴史的に検討してみたい。

鰐淵寺境内地の形成過程は、第3章第2節で示した井上氏による景観変遷区分案（井上編 1997）に従う。これを再掲しておく。

第1期（平安時代末から鎌倉時代）：北院（千手堂中心）と南院（薬師堂中心）が各々空間的まとまりを持ちつつ、藏王権現を中心として結び合っていた時期。

第2期（南北朝期から戦国期）：南北両院の本尊を併せ祀る根本堂を中心として、鰐淵寺境内の再編・整備が進められた時期。第2期の開始は、貞和 3 年（正平 2 年、1347）から文和 4 年（正平 10 年、1355）頃⁽¹⁾。

第3期（近世から近代初頭）：多数の僧坊が廃絶され、12 の僧坊からなる景観が創出された時期。およそ 17 世紀後半から 18 世紀初頭以後⁽²⁾。

1 主要堂塔の変遷

鰐淵寺では、いまだ考古学的には古代中世の堂塔の遺構を確認していない。したがって、文献史料中心とならざるをえないが、堂塔の変遷を概観してみたい。

（1）鰐淵寺第1期（平安時代末から鎌倉時代）

井上寛司氏は、鰐淵寺初期の堂宇の状況を語る史料として、文治 2 年（1186）9 月 15 日奥書の「鰐淵寺古記録案」（科研目録 No.17⁽³⁾）に注目され、天永 3 年（1112）「建立塔」、天治 2 年（1123）「塔供養」について、「ほぼ正確に事實を記したものと考えてよいのではないだろうか」（『科研報告』30 頁）と評価された。平安時代末期には、塔が鰐淵山の象徴的建造物として存在したのであろう。

「鰐淵寺古記録案」によると、仁平 3 年（1153）、鰐淵寺は大きな火災に見舞われ、その再建は久寿 2 年（1155）になったとある。その 10 年後、永万元年（1165）には千手堂と薬師堂以下が焼失し、治承元年（1177）に千手堂が供養されたとある。翌、治承 2 年（1178）には再び千手堂、薬師堂、常

行堂、塔などが焼失したとされる。千手堂は同年、薬師堂は文治2年（1186）、そして常行堂などは文治年中（1185～1189）には造営されたといふ。これらの主張が、どれほど確かであるか、また堂塔の規模も不明である。この頃までの史料には「鰐淵山」と記載される。「鰐淵山時代」である。

「鰐淵寺」の名称は、文治年間から約20年後、建暦元年（1211）の「然阿上人伝」（科研目録No.18）が初見。建暦3年（1213）には、鰐淵寺南北両院に国富郷の各々50町が領知されて、寺の財政基盤が整備された（「無動寺検校坊政所下文」（科研目録No.20）。ここに、千手堂を核とした北院および、薬師堂を核とした南院から構成される鰐淵寺が体制的にも成立したとされる（井上1997、17～20頁）。そして、南北両院を結合させるのが「金剛藏王宝窟」（石製経筒銘）（科研目録No.14）だった。

しかしながら、それから間もない天福年中（1233～1234）、鰐淵寺は大きな火災に見舞われて大打撃を受けた。中世に鰐淵寺を襲った3度の火災の最初である。「神火忽ち起り、数字の伽藍紅焰に支え、若干の尊像蒼天に化す。」という惨状だった（「鰐淵寺衆徒等勧進状案」（科研目録No.36）。三重塔と薬師堂が失われているので、火災は南北両院に及んだと推測される。この時の再建は、建長6年（1254）に至っても「僅かに一両の殿堂を改む」程度にとどまり、「三蓋の塔廟、七仏道場」（三重塔と七仏薬師堂）も復興できていなかった。「これ修復の志を疎んずるに非らず。ただ建立の便なきによるなり」と苦境が綴られている（「鰐淵寺衆徒等勧進状案」（科研目録No.36）⁽⁴⁾）。

三重塔の再建は、出雲國守護佐々木氏の援助を受けて進められた。弘長2年（1262）、佐々木泰清は塔の釈迦と多宝を修理する費用の負担を約束したが（「佐々木泰清書状」（科研目録No.41））、実際に造営がおこなわれたのはその子である頼泰の代、弘安6年（1283）まで下ったようである（「佐々木頼泰書状」（科研目録No.53）。この北院三重塔への寄進は、泰清の孫・貞清の代まで続いた⁽⁵⁾。

鰐淵寺の第1期を終わらせたのは、嘉暦元年（1326）の火災だった。「沙弥覺念書状」（科研目録No.74）には、「去二月廿三日、子庖⁽⁶⁾類火、北院三重塔婆以下⁽⁷⁾炎上由事」とあり、北院の三重塔以下の堂宇が炎上したことを伝える。火災は北院の千手堂はもちろん、南院の薬師堂にも及んだようだ⁽⁸⁾。嘉暦火災の復興は、「後醍醐天皇願文」（元弘2年（1332）、（科研目録No.79）や「後醍醐天皇輪旨」（建武2・3年（1335・36）、（科研目録No.84・85）など、南北両朝を巻き込んで計画されるが⁽⁹⁾、容易に進まなかつたらしい。そのためもあって、14世紀中頃に南北両院の統合が目指された。これが、鰐淵寺第2期へ転換する契機となった。

鰐淵寺第1期の考古学的検討　以上のように、嘉暦元年（1326）を下限とする14世紀第1四半期までが鰐淵寺第1期である。この時期にわたる考古学的な証左として、まず須恵器がある。出雲地域での須恵器は11世紀が下限とされており（廣江1992）、出雲國府跡でも土器編年第8型式（10世紀後半から11世紀前半）には須恵器が消滅している（稲田編2013）。年代を確定できる資料は少ないため、開始期を特定することはできないが、根本堂地区（A地区）では広い範囲に須恵器が分布しているほか、松露谷地区（C地区）の谷奥（C6）でも採集されている（84頁、第68図）。別所地域中枢部での活動が広域に及んでいたことがうかがえる。「鰐淵寺」成立以前、「鰐淵山」時代の活動範囲を一定程度、反映しているのである。12世紀から14世紀と推定される中世須恵器や白磁・青白磁・青磁なども、根本堂地区に広く分布しているとともに、浮浪瀧地区（F地区）および松露谷地区（C地区）の奥（C5）

にも一定量が確認されている（84頁第69図、85頁第70・71図）。鰐淵寺成立後も、その活動範囲ほぼ前代を踏襲するように思える。

さらには注目されるのは、浮浪瀧地区の現七仏堂西方の平坦面（F9）で褐釉陶器が採集されたことである（56頁第48図12）。褐釉は細身の四耳壺にほぼ限定される。その用途の究明が望まれる。

発掘調査で確認された遺構としては、根本堂地区北部の調査区（和多坊跡A 24）の1トレンチの土器溜りSX119がある。13世紀後半の中世土師器杯と皿が出土した。ここでの最初の造成（WT1期造成）は、このSX119以前だから、鰐淵寺第1期に関わる可能性が高い（第5章第2節）。

同様に根本堂地区南部（等瀧院南、A38 平坦面）でも、そこでの最初の造成（TM1期造成）を、12世紀代と考えている（第5章第3節）。根本堂地区における最初の平坦面造成が12世紀に遡るのであれば、これはまさに国富郷100町が領知され寺の経済基盤が安定した時期にあたり、鰐淵寺成立（史料では13世紀初頭）と関連する可能性を強くうかがわせる。また、浮浪瀧地区F1区でも13世紀以前の鰐淵寺第1期に平坦面造成（KM1期造成）が始まっている（第5章第4節）。

次に問題となるのは、北院と南院の位置である。分布調査では根本堂地区（A地区）でこの時期の遺物が多数採集された。北院と南院のいざれかを根本堂地区にあてた時、これに匹敵する資料の分布する地区を見出すことができない（第4章第3・5節）。とすれば、考古学的に南北両院がともに根本堂地区に所在したと考えてよいだろう。南院に所在した桜本坊が後に淨觀院と名を改めたのならば（第3章第2節）、北院を代表する和多坊がこの地区の北部に位置することと対比して、南北両院が根本堂地区に配置された妥当性はより強くなるだろう。

（2）鰐淵寺第2期（南北朝期から戦国期）

嘉暦元年（1326）の火災からの復興は、20年以上を経ても達成されなかつた⁽⁸⁾。この危機的状況を開拓する方策として打ち出されたのが、南北両院の本尊を一堂に祀る新たな本堂再建策だった（井上編1997、53～54頁）。貞和3年（1347）6月23日付の「両院一揆状」⁽⁹⁾には、「本堂[最中]、塔婆[左方]、常行堂[右方]、已上三字東面也」（〔 〕は削書）とあり、東面する三つの堂宇を、本堂を中心にして左（北）に北院を象徴する塔婆を、右（南）に南院を象徴する常行堂を配置する形に並べ、両院統一を表現した⁽¹⁰⁾。本堂内には南北両院の本尊を安置するが、その配置は「兩本尊安置次第、左方ハ薬師、右方ハ千手」つまり、北側に南院本尊の薬師如来を、南側に北院本尊の千手観音を置こうとした。あたかも、両院本尊⁽¹¹⁾が南北の位置関係を入れ替えることで両者の融合を表現しているかのようである。

また、「所々修理を加えるべき事」として「鎮守神社ならびに經藏、温室および仮堂等」とあるので、これらは焼損を免れたか、再建されたようだ。このほか、本覚堂や大門などがあったようだが、これらが残っていたかどうかは不明である。

鰐淵寺第2期を象徴する堂塔、つまり本堂と塔婆・常行堂がいつ建立されたかを明示する史料はないが、「正平10年からさほど時間が経過しない頃」だったと推測されている（井上編1997、54頁）。これらが建設されたのは、現在、根本堂・釈迦堂・常行堂が並ぶ境内地の最上段だったとみてよからう。今に続く鰐淵寺境内の基本的な伽藍は、室町時代の前半、14世紀後半にできたと推定される。

15世紀の史料には、根本堂以下の堂塔に関する記録がほとんど見当たらない。わずかに、文明6年（1474）の「銅造山王七社本地懸仏裏墨書銘」（科研目録No.202）に「山王七社」がみえるのみである。

下って享禄3年（1530）、尼子晴久が大般若經を奉納し『大般若經裏書』（科研目録No.235）、天文12年（1543）には尼子氏の奉行人3名から「当山根本堂御造営」を命じる晴久の掟が伝えられた（『尼子晴久鰐淵寺根本堂造営掟書写』（科研目録No.253）。翌、天文13年（1544）に井上坊栄芸が銅製閻伽桶を寄進したのは、根本堂の造営が形をなしたからであろう（『銅製閻伽桶銘』（科研目録No.259）。

しかし、まもなく中世期3回目の大火災に見舞われた。『華頂要略』天文20年（1551）4月の条に「雲州鰐淵寺焼失」とある火災である。尼子・毛利の争乱もあって、この時の再建は遅れた（井上編1997、119－120頁）。天正2年（1574）尼子勝久が中国地方を追われると、その翌年に「鰐淵寺本堂再建勧進帳」（科研目録No.457）が作成され、「堂舎一時に灰燼となり、ただ礎石の上に、星霜かさなる」という状態からの脱却が目指されることになった。天正5年（1577）、毛利輝元を大壇主とした建設工事が本格化し、4月23日にチョウナ始める、10月27日に棟上げがおこなわれ、11月29日に完成供養された（『鰐淵寺本堂再建棟札裏書案』（科研目録No.504）。この時の根本堂の規模は、「鰐淵寺本堂再興勧進帳」に「本堂九間四面」とあり、「鰐淵寺本堂再建棟札裏書案」によれば「往古の差図を以て建」たとする。現在の建物よりも規模が大きかったらしい⁽¹²⁾。そして、この根本堂は瓦葺きだった可能性が高い。天正4年（1576）の「吉川元春書状」（科研目録No.491）に「当寺本堂の瓦」とみえるからである。また同文書は瓦の葺き替えにも言及しているので、尼子晴久造営の根本堂も瓦葺きだったか、少なくとも天正4年までには鰐淵寺境内に瓦葺き堂宇があったと推定できるだろう⁽¹³⁾。

天正年間に造営されたか、あるいは当時建っていた堂宇を挙げると、まず、天正4年（1576）と推定される「経孝書状（切紙）」（科研目録No.472）に「護摩堂御造営之儀」とみえる護摩堂がある。江戸期の絵図（絵図A）では、根本堂の南側に位置している。毛利元就と昵懇の間柄であった和多坊の栄芸は、元就の死後の天正元年（1573）、その菩提を弔うため日頃院を極楽寺跡地に建立した（『鰐淵寺日頃院縁起案』（科研目録No.503）⁽¹⁴⁾）。このほか、慶長年間に成立したと推定される「杵築大社旧記御遷宮次第」（科研目録No.631）の「勤行次第之事」には、「古キ経所ヲハ鰐淵寺山王ノ拝殿ニ立候」とあるので、山王七仏堂の拝殿が江戸初期までは建っていたことがうかがえる。独立した建物ではないが、天正6年（1577）には、常行堂の内殿として「摩陀羅神御影向所」が作られた（『常行堂内殿摩陀羅神御影向所建立棟札』（科研目録No.506）。

毛利氏の庇護のもとに進められた伽藍の復興であったが、おそらく天正初期に3000石程度あった鰐淵寺の寺領（『鰐淵寺年行事連署書状』（科研目録No.592）は、天正19年（1591）には935石余りへと激減した（『毛利氏奉行人連署充行状』（科研目録No.581））。これは、天正16年（1588）に開始された惣国検地とそれにともなう天正19年（1591）以降の知行替と転封、さらに文禄元年（1592）の朝鮮出兵が原因にある（井上1997、122－123頁）。さらに江戸時代の堀尾藩制期の寺領は300石となり（『松江藩〈堀尾氏〉寺領打渡目録』（科研目録No.633））、実質的な収入は天正末年からさらに1/5から1/6程度へと縮小した（井上編1997、128－130頁）。ここに、鰐淵寺は新たな僧坊12坊体制に基づいた第3期へと転換することとなる。

鰐淵寺第2期から第3期への転換過程は、僧坊の著しい減数である。この点は、次項の「僧坊の変遷」で詳しく述べたいと思う。また、鰐淵寺第3期の伽藍については、その具体的な状況は絵図によって知ることができる。

鰐淵寺第2期の考古学的検討 分布調査の成果によれば、15世紀から16世紀の青磁、15世紀末から17世紀初頭の青花は基本的に根本堂地区に分布している(87頁第74図・75図)。14世紀から17世紀初頭の備前焼陶器も根本堂地区に濃密に分布するほか、浮浪瀬地区(F区)にも分布が認められる(86頁第73図)。これらの分布状況は鰐淵寺第1期とさほど違はない。第1期に成立した鰐淵寺の領域はこの時期にも大きく変動しなかったとみられる。

根本堂地区北部の調査区(和多坊跡)で確認したWT2期造成、および同地区南部の調査区(等湖院南)でのTM2期造成は、ともにその年代が13世紀後半以降としか特定できなかった(第5章第2・3節)。鰐淵寺第1期を終わらせた嘉暦元年(1326)までに、この地区的南北で2度目となる大規模な造成がおこなわれたとは想像にくい。調査された平坦面(和多坊跡A24と等湖院南区A38)は、ともに標高150m前後にある。この高さの平坦面は、A54、A19~21(念佛堂跡など)、A24、A33(現成院跡)、A35・36、そしてA38までが、根本堂のある最上段の平坦面(標高170m)を取り巻くように帶状に並んでいる。このことは、これら一連の平坦面が、正平10年(1355)からほどなく成立した根本堂を中心とする造営にともなうものだった、という可能性は十分あると考える。南北両院の統一にともなう伽藍の再整備を考古学的にとらえられたことは、大きな意義をもつといえよう(第5章第6節)。

根本堂地区の最上段平坦面が基本的には仏堂などの立地する区域であったことは、一つには常滑焼や越前焼あるいは備前焼など国産陶器の分布がないことにも表れている。これら国産陶器の器種は、主に大甕などの貯蔵容器である。根本堂地区南部の調査区(A38)では、越前焼大甕(13世紀末から14世紀初頭)と備前焼大甕(15世紀中頃から後半)が2つ並んで据えられていたが、これは僧坊内の液体の貯蔵などを想像させる。

次に、根本堂地区の南北2カ所の調査区ではともに3度目の造成を確認した(第5章第2・3節)。南部でのTM3期造成は16世紀後半以降、北部でのWT3期造成は15世紀から16世紀の年代を想定している。南部(A38)でのTM3期造成は、それにともなう施設の廃絶時期が15世紀末から17世紀前半の間にあり、同じ層からはコビキAの中世瓦も出土している。中世瓦は、最上段の平坦面からも出土しているので、天正5年(1577)竣工の根本堂など毛利輝元による造営に関わる可能性が想定される。根本堂地区南部(A38)での造成がこれにともなう可能性は高いだろう。

一方、北部(A24)でのWT3期造成は、現存する僧坊建物の礎石が据えられた造成土である。明治38年(1905)に焼失した和多坊の建築年代は不明だが、本坊(旧松本坊)は18世紀中期の建築と推定されている(山岸2012, 68頁)。WT3期造成は、南部(A38)でのTM3期造成(天正年間初期、16世紀後半)と同時期の可能性と、本坊(旧松本坊)建設時期と同時期(18世紀中期)との可能性が想定できる。ただし、先述したように天正年間初期に3000石程度あった鰐淵寺の寺領は、江戸時代の堀尾期以降は300石しかなく、しかも収納高から収穫高へと切り替えられていた。実質1/20程度への縮小である。可能性としては寺勢が盛んだった天正年間初期のほうが高いと思われる。

2 僧坊の変遷

鰐淵寺文書および鰐淵寺関係文書には、多数の僧坊名が記録される。その変遷を時期ごとにたどる。

(1) 鰐淵寺第1期の僧坊（第28表、附表1・2）

嘉暦元年（1326）の火災までの史料で拾える僧坊名は、附表1の10坊ほどのある。しかし、「鰐淵寺古記録写」（科研目録No.17）にのる僧坊名は、本覺坊を除けば以後の史料にはみえない⁽¹⁵⁾。永元年（1165）の記事は、「千手堂薬師堂以下焼失」の原因が「本覺坊、火出ト見エタリ」にあることを述べる。中心堂宇と僧坊とがそれなりに隣接していたように読める点は注意できよう。

淨土宗第三祖の良忠（1199－1287年、石見国三隅出身）は、建暦元年（1211）「鰐淵寺之月珠房信暹」の門に入った（「然阿上人伝」（科研目録No.18））。これが「鰐淵寺」の初見史料であるが、月珠房は以後みえない。建暦3年（1213）の「無動寺検校坊政所下文」（科研目録No.20）に「南北長吏」とあるように、鰐淵寺は北院と南院とに分かれており、僧坊は両院のいづれかに属していた。「円觀讓状」に「北院之内 和多房」と記されるのが、北院僧坊の初出である。

建長2年（1250）の「円觀讓状」（科研目録No.33）にみえる「十林房」は、建長8年（1256）の「円觀讓状」（科研目録No.38）に「十林坊」としてみえるが、建長8年の史料にみえる「大妙坊」は以後の史料に登場しない。2通の「円觀讓状」は和多坊⁽¹⁶⁾に関わる文書であり、後者では和多坊の南に円光坊が接していたことがわかる。この段階ですでにいくつかの僧坊が隣接して建つ状況がうかがえる。建長6年（1254）の「鰐淵寺衆徒等勸進状案」（科研目録No.36）署名にみえる「寄（宰）相房」も、以後の史料にみえない僧坊名である。

以上、第1期の僧坊については不明な点が多いが、南北両院に相互に隣接して建つ僧坊があったことと、中心堂宇と隣接していた僧坊もあった可能性をうかがうことができよう。発掘調査によっても、境内地での最初の造成は13世紀以前と推定されるから、僧坊敷地の造成がこの時期に始まっていたことは確実であろう。

(2) 鰐淵寺第2期の僧坊（南北朝期から戦国期、附表1～3）

第2期の僧坊を考えるうえで重要なのは、正平10年（1355）の「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」（科研目録No.119）である。文書の末尾には大衆の僧89名が署名しており（ほかに下方33名）、僧坊数を推定する手がかりとされている（井上編1997、53－67頁）。南北朝期から室町期（14・15世紀）に史料から拾える僧坊名は20程度しかないが、分布調査の成果からは80を前後する僧坊数を推定することは十分に可能となった（第4章第5節）。しかも、根本堂地区で行った2箇所の発掘調査では、和多坊跡のWT2期造成が13世紀後半以降、そして等謝院南区のTM2期造成は13世紀後半以降15世紀まで、と推定されているので、鰐淵寺第2期に土地造成とともに僧坊の建設がおこなわれたと推測しうる（第5章第6節）。今後は、造成時期の特定が課題である。

和多坊に関しては、敷地の広さと四辺を記した文書が4通あり（第28表）、その変遷をたどることができる。

第28表 和多坊の敷地と四辺の変遷

年号	建長8年	嘉暦3年	文安元年	享徳元年
西暦	1256	1328	1444	1452
敷地の広さ	7間半	南北15間+持仏堂3間	10間	
四辺	「東西北限道／南限円光坊」	「東西北限大道、南限溝」	「東北西者、限大道／南八限溝」	「限東大道、限西北道／限南井上坊、限北大道」
文書名 (科研目録番号)	円觀讓状(№38)	盛順壳案(№76)	維榮鰐淵寺北院和多房倉経田等注文(№178)	維光讓状(№188)

これを見ると、敷地面積は、建長8年(1256)の7.5間(24.3m²)⁽¹⁷⁾が、嘉暦3年(1328)には18間(58.3m²)、うち持仏堂3間(9.7m²)に、そして文安元年(1444)10間(32.4m²)と変動している。嘉暦3年の文書では、敷地を「南七間房地」と「北八間并持仏堂三間」とにわけ、後者の四辺を「東西北限大道、南限溝」とする。この四辺は文安元年の表記とほぼ一致するので、嘉暦3年の北8間と持仏堂3間を合せた11間(35.6m²)が文安元年に相続された和田坊敷地10間に該当すると推定される。ただし、現在の和多坊跡敷地は1239m²(382間)があり、これに比べると3%にも満たない面積である。さらに、鳥取県大山寺における中世期僧坊の平均面積(666m²、辻ほか2011)に比較しても、かなり狭い。鰐淵寺が立地する別所地区中枢部が狭隘なことに起因するのであろうか。

延応2年(1240)の「維光讓状」(科研目録№29)には、「本房伍間二面、雜房三間二面」の2棟の建物があったことを記す(僧坊名は不明)ので、おおよその僧坊景観を推測できる。

この時期、史料上短期間に姿を消す僧坊と以後も長く存続する僧坊がある。

永享5年(1433)に竹本坊とともに炎上した一乗院や同じ史料の行林坊と金橋坊⁽¹⁸⁾、あるいは文安3年(1446)にみえる田中坊⁽¹⁹⁾と、明応7年(1498)の一心坊⁽²⁰⁾は以後、その名を見ない。文安3年(1446)の史料には田中坊と並んで円光坊の名がある。この僧坊は、北院和多坊の南に位置することが「円觀讓状」から判明するが、これを最後にその名が消え、享徳元年(1452)の「維円讓状」では同じ場所を井上坊が占めている。これらは、第2期に初出するものの、比較的短期間に史料からその名を消してしまう僧坊である。

その一方、応永8年(1401)初見の学林坊は大永2年(1522)までその名が追える⁽²¹⁾。また、竹本坊および永享5年(1433)初見の金剛院は慶長13年(1608)まで⁽²²⁾、井上坊は天正年間末(推定、1591年?)まで⁽²³⁾、そして、文安4年(1447)初見の大蓮坊は元和4年(1618)まで⁽²⁴⁾その名が見出せ、これら4つの僧坊は鰐淵寺第2期末まで存続したことがわかる(附表3)。

さらに、貞治5年(1366)初見の僧行坊⁽²⁵⁾、応永20年(1413)初見の橋本坊⁽²⁶⁾と、応永25年(1418)初見の大福坊⁽²⁷⁾、明徳3年(1392)以後、南院の主要僧坊として登場する桜本坊(『慶応売券』科研目録№134)⁽²⁸⁾、これらの僧坊は鰐淵寺第3期(江戸期)まで維持されていく。

鰐淵寺第2期の後半(16世紀)は、戦国大名尼子氏や毛利氏による支配とそれへの依存が進んだ時期である。永正6年(1509)尼子経久が3箇条の掟書を定め、富田城開城後、尼子勝久が出雲から駆逐された直後の永禄13年(1570)には、毛利元就と輝元が掟書を定めている。これにともない、評定衆や年行事の制度が導入されたとされる(井上1997, 99-103頁)。

この時期の僧坊が多数記録された史料に「杵築大社旧記御遷宮次第」（科研目録№ 631）がある。この史料には、天文 19 年（1550）9 月 26 日の尼子晴久による杵築大社遷宮に参加した鰐淵寺僧が属す僧坊として、竹本房、竹尾房、西本房、大蓮房、密嚴院、竹井坊、堯光坊、池本房、井本坊、月輪坊、金剛院、本覚坊、和多坊、桜木（本）房、の 14 坊が挙がっている。

さらに、それら以外でこの前後の史料に複数回みえる坊名として、井上坊⁽²⁹⁾、正教坊⁽³⁰⁾、鏡林坊⁽³¹⁾、極樂坊⁽³²⁾の 4 坊があるので、これらを加えると 18 坊となり、この時期に 20 前後の僧坊は確実に存在したとみてよからう。この僧坊数は、天文 24 年（1555）の「鰐淵寺衆徒連署起請文」（科研目録№ 274⁽³³⁾）に列記された大衆の数 23 名に近く、16 世紀中頃における鰐淵寺の僧坊数として、20 前後というのが一つの目安となる数である⁽³⁴⁾。

この時期、井上坊は和多坊とともに北院に属し⁽³⁵⁾、大蓮坊は桜本坊とともに南院に属した⁽³⁶⁾。しかし、南北両院のまとまりはなくなりつつあったようである。僧坊が院を違えた僧侶に帰属する例が散見されるからである。

延徳 2 年（1490）に中村重秀から「大蓮坊之（々）舍、敷地、寺領等」を寄進された「栄宣律師」（「中村重秀寄進状」科研目録№ 209）は、明応 9 年（1500）の「栄宣売券」（科研目録№ 1500）に「本覚坊／栄宣」と署名している。栄宣が本覚坊の修理代のために銭 11 貫文で売却したのは先師榮顥から譲り受けた「井上坊々舍敷地」だった。栄宣は南院の大蓮坊とともに北院の井上坊を所有していたわけだ。また、大永 2 年（1522）の「栄円譲状」（科研目録№ 228）では、「北院井上坊職（敷）地」を南院の「大蓮坊栄円」が尊澄に譲っている。その尊澄は、天文 20 年（1551）の「尼子晴久袖判奉行人連署奉書」（科研目録№ 265）の宛先に「桜本坊尊澄」とされるので、南院の僧坊に住まう僧侶が北院の井上坊の所有権をやりとりしていたようである。

天正末年以降は、僧坊の退転が相次いだようである。文禄慶長頃の文書と推定される「鰐淵寺年行事連署書状」（科研目録№ 592）には、先の検地で 2000 石が没収され、今度は残る 1000 石のうち 390 石余りが没収されるのは、「山院中、迷惑千万候」としてその免除を求めている。鰐淵寺の寺領は大きく削減されようとしており、実際に削減されてしまった。

鰐淵寺の僧坊は、この時期以降、慶安年間あたりまでに、それ以降その名を見せない僧坊が 10 坊ほどあり（第 29 表）、寺領削減によって寺の経済力が大きく損なわれ、僧坊の退転を招いたことが明確にうかがえる。

さらに、近世初頭まで続いた杵築大社との密接な関係は、大社側の思想的変化（祭神の転換や国造家存在意義の理論化、井上編 1997 148 – 151 頁）を基礎・契機とした寛文度造替（1661 – 1667 年）によって途絶する。これが摩多羅神社の建設（それまでは常行堂内殿祭神）をもたらし、特異な堂宇構成が出現することとなる。

これらの動きが、12 坊からなる鰐淵寺第 3 期の体制につながっていく。

第29表 16世紀末から17世紀に終見史料のある僧坊

坊名	年号	西暦	文書名	科研 目録番号	備考
井上坊	天正19?	1591?	六所神田坪付断簡	585	年末詳
極楽坊			鰐淵寺年行事連署書状	592	年末詳
竹尾房	慶長7	1602	鰐淵寺領富村竹尾坊分田地坪付	620	
月輪坊			鰐淵寺領富村内金剛院分田畠坪付	621	初見で終見
増泉坊					
竹本坊	慶長13	1608	宣秉・豪信連署書状写	627	
金剛院					
大蓮坊	元和4	1618	豪村譲状	634	
僧行坊	慶安4	1651	豪善譲状	666	
自性院					

3 鰐淵寺第3期の伽藍と近世から近代への伽藍変化（第170～177図）

鰐淵寺第3期の特徴は、僧坊が12坊体制となったことである。そのことが確認できる最古の史料は、黒沢石斎著『雲陽誌』（享保2年（1717））である（第3章第2節）。ちょうど杵築大社寛文度遷宮の50年後であるが、この間、鰐淵寺では現存する堂宇などの建立がおこなわれた。

現存する最古の建造物は、寛文4年（1664）（または寛文12年（1672））とされる釈迦堂（寛文12年の棟札では「法華堂」）である。杵築大社で正殿式遷宮がおこなわれた寛文7年（1667）には、摩多羅神社と常行堂が建立された。延宝4年（1676）には山王権現社が、元禄4年（1691）には根本堂が、さらに正徳3年（1713）に鐘楼が建った（山岸2012）。ここに、ほぼ現在と同じ伽藍が完成した。その最大の特徴は、根本堂地区最上段に南北に並び立つ根本堂と摩多羅神社・常行堂が隣し出す、神仏習合的な景観である。この状況は、江戸後期といわれる木版絵図「絵図A」に詳しく描かれる。また、明治35年（1902）年発行の「出雲鰐淵寺之圖=絵図B」にもほぼ同様の堂宇が描かれる⁽³⁷⁾。

2枚ともに北東上空からの鳥瞰で境内地のほぼ全体を描く（第170図）。僧坊の数はともに12坊。鰐淵寺伽藍の第3期を描く点は同じである。ただし、2つの絵図には相違点もあり、それは近世から近代への鰐淵寺の変化とも関連するとと思われる。施設ごとに描かれた特徴と違いをまとめる。

（1）根本堂地区堂宇（第171～173図）

① 根本堂（第171図）

絵図A・Bで建物構造と屋根の形状に違いがある。つまり、

絵図A：正面5間×側面3間で、前側1間分が外陣。礎石建ち。正面中央の向拝は向唐破風となつて外に張り出し、外陣の床は四半敷き表現。内陣の正面と側面には腰長押^{こしあげし}が描かれ、正面5間すべてに扉がある。柿葺らしい屋根の大棟両端には鬼板^{とりば}がのり、その上に鳥衾。四隅には風鐸が下がる。

絵図A



絵図B



第170図 江戸後期（絵図A）と明治期（絵図B）の絵図

絵図B：正面5間×側面5間、前側の2間が外陣。土台建ち。平側中央間に向拝はなく軒唐破風。^{のきからはふ} 外陣の床に四半敷きは明確でない。内陣正面は、中央1間のみ両開き扉、それ以外は板壁か⁽³⁸⁾。側面は前側2間が壁（板壁？）、後側1間には引戸が付くか。基壇の階段前に石敷き。

Bに描かれた建物は側面の間数が多く、かつ屋根の形も大きく違う。

② 護摩堂（第171図）

絵図Aには方三間堂が描かれる。正面1間に向拝が付き、正面側面ともに縁がある。屋根は宝形造で柿葺か⁽³⁹⁾。これに対して、絵図Bには建物がない。

③ 積迦堂（第172図A1, B1）

絵図A・Bともに方三間堂。屋根は宝形造で柿葺。絵図Bでは正面1間に向拝が付き、正面と側面には縁がめぐる。正面の両脇の間と側面3間はともに部戸か。建物背面には板塀がある。

④ 鐘 樓（第172図A2, B2）

ともに方一間だが、細部の表現に違いがある。絵図Aでは、内転びのついた四本柱は南北方向の柱間が長く、長辺と短辺に腰貫が描かれる。石積み（？）基壇上に建つ。屋根は入母屋造で、柿葺か⁽⁴⁰⁾。これに対し、絵図Bには基壇がなく、柱に内転びはない。頭貫・飛貫・腰貫は南北辺のみで、東西にはない。屋根は切妻の「むくり」屋根で、軒先には「そり」があって、その妻に破風板がある。A・Bで建物構造や屋根の形状に違いがあるが、現状は絵図Aに近い。

⑤ 常行堂（第172図A3, B3）

絵図A・Bともに方三間堂で正面1間に向拝が付く。Aでは正面と側面に縁が巡るが、Bではない。また、Aの屋根は柿葺宝形造で、屋根の頂部に宝珠飾りがのるが、Bの屋根は板葺風で、頂部には小さな切妻小屋根がのる。

⑥ 摩多羅神社（第172図A3, B3）

ともに、切妻・妻入の大社造に描く。絵図Bでは2間四方。絵図Aの屋根に鬼板・千木はないが、絵図Bでは鬼板はのるが、千木はない。社殿には縁がめぐり、Bでは高欄付きである。建物周囲の柵は、Bでは屋根付で上部に連子窓があく。Aには社殿名がない。

⑦ 稲荷社（第172図A3, B3）

絵図Aには正面2間×側面2間、絵図Bには正面より側面の長い社殿が描かれる。Aの屋根は入母屋、Bは切妻。Aの社殿には縁が付くが、Bにはなさそうである。

⑧ 宝戒（第172図A4, B4）

絵図Aでは土蔵造で腰は海鼠壁。屋根は入母屋で、瓦葺を表現するかに見える。建物の間数は不明だが、南北に長い建物で、北と東には出入口や窓はない。北に並んでもう1棟、高さの低い南北棟の建物が附属する。これが絵図Bでは、桁行3間×梁間2間、切妻屋根の簡素な建物に描かれる。腰壁は板張り、屋根は板葺か。建て替えられたか。

⑨ 接待所⁽⁴¹⁾（第171図）

根本堂正面の石段脇に描かれる建物。絵図A・Bとともに正面3間×側面2間の入母屋建物。Aでは、根本堂と向き合う前側1間は壁のない土間のようだ、Bもそうか。腰壁は板張りらしく、北側妻に窓。

10 開山堂と開山廟（第173図A1, B1）

絵図A・Bで様相が大きく違う建物である。

絵図Aの開山堂は本覚坊の並びに描かれ、開山廟よりは確実に低い所に位置する。建物の背後には開山廟へ上の階段が描かれている。開山堂は方三間堂。側面には縁が付く。壁には窓などの設備はない。屋根は宝形造で柿葺。開山廟は、大型の無縫塔を中心に柵が巡り、その正面に方一間切妻妻入の建物（拝堂）が建つ。この建物は正面が開放で、側面は壁らしい⁽⁴²⁾。開山廟の背後には三重塔が描かれる。ただし、この図像は平面的で、しかも基部が梨地風の装飾で隠されている。江戸期の記録に塔はみいだせないから、これは存在しない建物だったとみてよかろう。

一方、絵図Bでは、開山堂は開山廟と同一平面上、その奥（西）に描かれる。これは現状の配置に一致する。開山堂はAに描かれたものと同じ方三間堂。正面3間と側面の少なくとも前側2間には縁が付く⁽⁴³⁾。正面1間に向拝が付き、縁にあがる階段（木階か）がある。正面中央間は扉、両脇間は長押より下に窓がある。側面の前側2間にも格子窓があるが、正面側の窓とは段違いである。屋根は宝形造で、正面に向拝が付く。開山廟の石塔は、大きな笠石をのせる宝塔。二重の方形台に塔身を置き、笠を重ねる。塔身は下部が一段細くなっている。笠の形状は円形に見えるが、あるいは多角形や四角形かもしれない。笠の上には宝珠がのる⁽⁴⁴⁾。石塔の周囲には木柵があり⁽⁴⁵⁾、正面には柵より少しだけ背の高い建物（門？）がある。正面3間？×側面1間の構造で切妻平入の屋根をのせる。

11 念仏堂（⁽⁴⁶⁾）（第173図A2, B2）

絵図Aでは、棟に切妻の小屋根をのせた寄棟造の建物1棟と、やや小ぶりの入母屋造の建物1棟が描かれる。2棟の建物の正面には念仏塔6基以上が並ぶ。念仏塔の横は十王堂か。正面三間の入母屋造。絵図Bでは木の間がぐれに描かれ、詳細が不明。正面に4本以上の柱が並ぶことと、屋根が入母屋造らしいことくらいしかわからない。建物名称は「常念仏」。

12 仁王門（第173図A3, B3）

絵図Aの仁王門は、桁行3間×梁間2間の八脚門⁽⁴⁷⁾。両脇を閉じる（格子戸と板壁か）。入母屋造、柿葺か。表記は『雲陽誌』と同じ「二王門」。現在の仁王門は1916年（大正5）建立だが、構造は絵図Aと同じである。門の右手には高札場がある。絵図Bに仁王門は描かれない。

13 總門（第173図A4, B4）

絵図Bに見える名称で、建物は正面1間×側面2間の礎石建ち。側面の背面側1間のみ腰貫があるが、2間とも壁はない。屋根は切妻平入で、瓦葺か。これに対し、絵図Aには、正面1間×側面2間の門が同位置に描かれるが名称は付されていない⁽⁴⁸⁾。側面のみ壁で、正面・背面に扉はない。屋根は入母屋造。建物が建て替わったとみえる。

14 地蔵堂

絵図Aに、宝形造の方一間堂として描かれる。狭い平坦面にあり、背後から岩が覆いかぶさる。地蔵堂の左下に「児ヶ淵」との表示がある⁽⁴⁹⁾。絵図Bでは、般若坂近くに「児ヶ淵」として方一間の小堂が描かれる。これが地蔵堂であろう。正面に扉があり、側面は板壁か。屋根は切妻妻入で、板屋根らしいが、Aの建物とは明らかに違っている。

絵図A



絵図B



第171図 建造物比較図（1）(根本堂)

絵図A



絵図B



第172図 建造物比較図（2）(A1・B1：积迦堂 A2・B2：鐘楼 A3・B3：常行堂・摩多羅社・稻荷社 A4・B4：宝藏)

絵図 A



絵図 B



第173図 建造物比較図（3）(A1・B1：開山堂・開山廟 A2・B2：念仏堂 A3・B3：仁王門 A4・B4：総門)

(2) 根本堂地区僧坊 (第 174 ~ 176 図)

絵図 A・B とも鰐淵寺伽藍の第 3 期の姿、つまり僧坊 12 坊を描く。各僧坊の建物屋根はすべて、絵図 A では瓦葺風に、絵図 B では茅葺風に描かれている。また、絵図 A では入母屋造の屋根が、絵図 B では寄棟造に描かれる。絵図 A の表現が実際の姿かは疑問である。

① 和多坊 (第 174 図 A1, B1)

絵図 A には僧坊と附属建物（蔵？）が描かれるが、絵図 B では附属建物がなくなり、代わって僧坊脇に小屋が描かれる。僧坊の詳細は、和田嘉宥氏の論考（本章第 2 節）に譲る。

附属建物以外では、敷地入口の状況が A・B で違う。A には正面 3 間 × 側面 1 間の八脚門がみえる。中央 1 間が通路で、入母屋造。門から僧坊への階段 1 級がある。一方 B では、扉のない 3 間の平門が描かれる。脇の間には窓があき、東側には 1 間分の塀が付く。門から敷地に上がる階段は 2 つ。踊り場が敷地から張り出す形に描かれるが、これは現状とは合致しない。

絵図 B 発行の 3 年後、1905 年（明治 38）焼失。

② 本覚坊 (第 174 図 A2, B2)

絵図 A には、入母屋造の僧坊とその西（圖奥）にもう 1 棟の建物がある。後者は蔵か。敷地の南側（圖左）には塀と正面 3 間の入母屋造八脚門がある。これに対して絵図 B の僧坊は、正面 5 間 × 側面 2 間の寄棟造平入建物。正面中央に向拝が付く。これ以外の建物はなく、門も角柱 2 本が立つのみ。

1910 年（明治 43）までに滅失⁽⁵⁰⁾。

③ 恵門院 (第 174 図 A3, B3)

絵図 A・B とも、僧坊およびこれと棟を直交させる建物の 2 棟が描かれる。僧坊はほぼ同じもので、B の僧坊は正面 4 間、南（圖左）から 2 間目に向拝が付く。

閉塞施設は変化が認められる。A では、敷地の正面は塀、側面は木柵で囲まれ、正面に切妻屋根の棟門が開く。門前の階段は石垣からは出る。対して B では敷地が主に生垣で囲まれ、石垣より奥まった階段の上、平場を置いて間口 3 間の門（平門か八脚門かは不明）が建つ。門は僧坊正面のやや南にある。1905 年（明治 38）焼失。

④ 覚城院 (第 174 図 A4, B4)

絵図 A では恵門院を裏返したように、僧坊（正面 5 間か）と小建物が丁字形に並ぶ。僧坊の玄関（向拝）は東を向くが、門はそれとは直角に南の根本堂への参拝路に開く。敷地は塀で囲まれる。一方、絵図 B には小建物がない。僧坊は正面 4 間で恵門院とほぼ同形態。門（両袖に塀を備えた 3 間門）が僧坊の正面に建つ。1888 年（明治 21）焼失で絵図 B 発行時には存在しない。

⑤ 净觀院 (第 175 図 A1, B1)

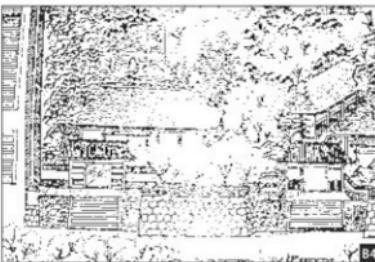
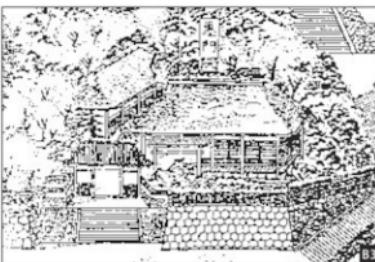
絵図 A・B とも、僧坊は恵門院や覺城院とほぼ同形態に描かれる。A では敷地四周に塀があり、南（圖左）の門（棟門か）は覺城院と同じく根本堂への参拝路に開く。B の門は屋根が長くみえる。明治 30 年代とされる境内の写真（井上編 1997, 204 頁）には僧坊の右奥にもう 1 棟が写る。

1910 年（明治 43）までに滅失。

絵図 A



絵図 B



第174図 建造物比較図(4) (A1・B1:和多坊 A2・B2:本覺坊 A3・B3:惠門院 A4・B4:覺城院)

⑥ 松本坊（第175図A2, B2）

詳細は次節に譲る。絵図A・Bでの違いは門にある。Aでは僧坊前面（東）にある門が正門か。僧坊に向かって右手（北）にも長屋門が開く。Bでは長屋門が僧坊の前面（東）に移設され、平唐門の御成門が敷地の南に建つ。僧坊の南側には庭園も描かれる。これは現状と合致する。

⑦ 現成院（第175図A3, B3）

絵図Aには堀に囲まれた敷地いっぱいに向拝付きの僧坊が描かれる。隣の密厳院との間に北面する三間門があり、そこに至る階段が根本堂への参拝路から延びる。この階段は今ない。絵図Bでは、前面（東面）に高い石垣を築いた敷地に僧坊1棟が建つ。建物前は空間地となっており、今残る出雲風庭園は描かれていない。敷地に上がる階段の下に門（平門か）がある。

1892年（明治35）以後、住僧なく、第二次大戦後に滅失。

⑧ 是心院（第175図A4, B4）

詳細は次節を参照。絵図Bでは、建物の東南には堀で仕切られた中に庭園の役石が描かれる。門は長屋門で、その左右に堀が並ぶ以外は生垣が囲む。2006年滅失。

⑨ 密厳院（第176図A1, B1）

絵図A・Bとも、正面に1間の向拝が付く僧坊を描く。1868年（明治1）以後は住僧なし。

1910年（明治43）以降に滅失。

⑩ 洞雲院（第176図A2, B2）

絵図Aには、正面1間向拝付きの僧坊とその正面に三間門が描かれる。門の右手（北）には平屋の建物がある。絵図Bでは僧坊に向拝が見えない。その正面に三間門があり、門に接して右に二階建ての寄棟造の建物が建つ。壁は下層が板壁で上層は土壁か。敷地の北面は堀、その他は生垣で囲まれる。

1868年（明治1）以降は住僧なく、第二次大戦後滅失。

⑪ 等湖院（第176図A2, B2）

絵図Aでは正面1間向拝付きの僧坊と堀に開く三間門がみえる。左奥（南面）は木柵で仕切られる。絵図Bも詳細不明だが、庭園の表現はない。第二次大戦後、滅失。

⑫ 嶽王院（第176図A3, B3）

絵図Aの僧坊は、正面1間向拝付きで建物の東と北に縁が巡るが、絵図Bでは向拝がない。Aでは、僧坊の南東に建物（藏か）がある。A・Bでは堀と門に違いが大きい。Aでは敷地の北面と東面には堀があり、それぞれに三間門が開く。北面する門は敷地より高い位置にある。Bでは、東面の堀が鍵の手になるのはAと同じだが、敷地全体が鰐淵寺川沿いの道より一段高くなっている、東に開く門に至る階段が北側に増設されている。この門脇に建物はない。1910年（明治43）までに滅失。

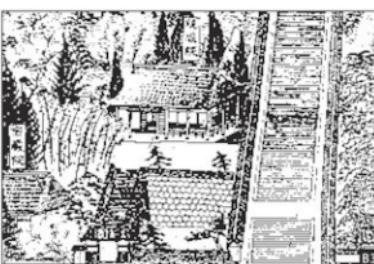
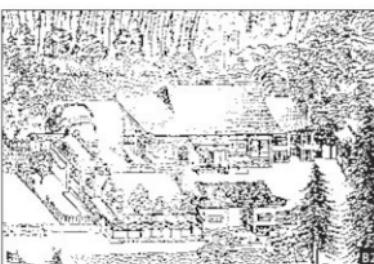
⑬ 堂司庵（竹林庵）⁽⁵¹⁾（第176図A4, B4）

絵図Aには庇付きの正面5間の建物が描かれるが、表現が平面的である。絵図Bでは建物構造はAと一致するが、縁がなくなる。1910年（明治43）までに滅失。

絵図 A



絵図 B



第175図 建造物比較図(5)(A1・B1:淨觀院 A2・B2:松本坊 A3・B3:現成院 A4・B4:是心院)

絵図A



第176図 建造物比較図（6）(A1・B1：密巖院 A2・B2：洞雲院・等測院 A3・B3：巖王院 A4：堂司庵 B4：竹林庵)

(3) 浮浪滝地区

① 藏王堂

絵図Aの建物は、正面3間ないし4間に縁が付くようにみえる。屋根は入母屋造の平入。屋根は柿葺か。建物右手から「竜眼水」が流れ出る。建物前を落ちる浮浪滝の滝壺に「鰐淵」とある。一方、絵図Bでは屋根は入母屋造だが妻入。建物正面（間数不明）には高欄が巡る。

② 子守／小守社

絵図Aには方2間⁽⁵²⁾、入母屋造平入。扉や窓の表現はない。絵図Bには切妻妻入に描かれる。正面1間で両開き扉か。ともに屋根材は不詳。

③ 拝殿／行場

絵図Aの建物は表現があいまいで規模不詳。正面3間ないし4間か。正面の左の脇間には壁がないか。絵図Bでは正面3間×側面2間の入母屋造建物にみえる⁽⁵³⁾。正面左脇間は壁・扉なく開放で、右脇間は窓か。側面2間は腰壁に連子窓か板壁か。

④ 勝手社

絵図Aの社殿は正面4間×側面1間⁽⁵⁴⁾。正面と両側面に縁が付く。屋根は入母屋造か。絵図Bは側面2間で、正面は3間以上あるか。細長い建物で縁はない。屋根は切妻平入。

⑤ 馬頭社

絵図Aの建物は方2間で、入母屋造妻入⁽⁵⁵⁾。下方の道との間に階段があるようにみえる。絵図Bでは側面2間としかわからない。勝手社と同じく細長い建物に描かれる。切妻平入。

小守社・勝手社・馬頭社はいずれも、絵図A・Bで建物構造が違っていて、Bではすべて切妻に描かれる。

⑥ 七仏堂⁽⁵⁶⁾

絵図A・Bの最大の相違点は、Bに拝殿が描かれないことである。Aの七仏堂は、正面3間×側面2間。正面中央に向拝（向唐破風）が付く。建物周囲には縁が巡るが、高欄の表現はない。縁の柱には腰貫が描かれているので、やや腰の高い建物だったか。向拝には階段がある。屋根は入母屋造平入。Bの七仏堂は、間数は同じだが正面の向拝屋根が唐破風ではない。向拝には木鼻をもつ頭貫が描かれる。Bの表現は、この建物の解体前図面（第3章第3節第18図）と食い違う点がある。

一方、絵図Aの拝殿⁽⁵⁷⁾は、正面3間×側面2間。周囲に縁が巡り、正面1間に分に階段が付く。屋根は入母屋造平入で、正面に軒唐破風がある。

⑦ 浴室

絵図Aに描かれるのみ。正面4間×側面1間の南北棟建物⁽⁵⁸⁾。窓や扉などの装置はない。低い基壇上に建つか。屋根は入母屋造。

以上、2つの絵図の建物描写を比較した。参考までに江戸期の地誌類と絵図A・Bおよび明治の明細帳に記された堂宇の名称を第30表に一覧表として示す。

絵図A



絵図B



第 177 図 建造物比較図 (7) (A1・B1：藏王・子守 A2・B2：拝殿・勝手・馬頭 A3・B3：七仏堂・拝殿 A4・B4：浴室)

第30表 『雲陽誌』、『万指出』、絵図、明細帳等の堂宇名称比較表

雲陽誌本文	雲陽誌項目	万指出	繪図A	明治明細帳	繪図B	現在名称
		1717年	1764年		1887年	1907年
根本堂	根本堂	根本堂	根本堂	本堂	根本堂	根本堂
法華三昧堂	法華三昧堂	法華堂	釈迦堂	釈迦堂	釈迦堂	釈迦堂
常行堂	常行三昧堂	常行三昧堂	常行堂	常行堂	常行堂	常行堂
馬頭堂	なし	馬頭觀音堂	馬頭	なし	馬頭社	なし
開山堂	本覺堂	開山堂	開山堂	開山堂	開山堂(移動)	開山堂
		西之門	○(名なし)	記なし?裏門?	総門	なし
二王門	なし	二王門	二王門	仁王門	【描かれず】	仁王門
蔭王権現	蔭王権現	蔭王権現社	蔭王(下方拜殿)	蔭王堂(同行場)	蔭王堂(行場)	蔭王堂
		同 拝殿				
摩多羅神	摩多羅神社	摩多羅神社	○(名なし)	記載なし	摩多羅社	摩多羅神社
日吉山王祇園普神	山王祇園普神	祇園天王・日吉山王社・北野天神・同 拝殿、鳥居、	七仏堂、拜殿付	七仏堂(拜殿なし)	七仏堂(拜殿なし)	山王七仏堂
小守勝手明神	なし	勝手明神社、 小守権現社	子守、勝手	なし	小守社、勝手社	なし
三十八社	なし	なし	不明	なし	不明	なし
		浴室	浴室	なし	なし	なし
			セッタイ所	なし(地藏堂?)	接待所	なし
		鐘樓	○(名なし)	鐘樓堂	鐘樓	鐘樓
		護摩堂(朽損)	ゴマ堂	なし	なし	なし
		宝藏	なし	宝藏(小規模)	なし	
		堂司庵	竹林庵	竹林庵	竹林庵	なし
		開山御廟拝堂	開山廟	記なし	開山廟	開山廟
		なし	三重塔(名なし)	なし	なし	なし
		念仏堂	念仏堂	常念仏	なし	なし
		○(名なし)	十王堂	なし	十王堂(移動)	
		稻荷社	○(名なし)	兜枳尼天堂	稻荷社	稻荷社
		死元源地蔵権現堂	地蔵堂	地蔵堂	兎ヶ淵	なし

※ 建物は描かれるが、名称を記さないものは「○(名なし)」とした

(4) 近世から近代への伽藍の変化

以上、2つの絵図を堂宇ごとに比較した。絵図Aは、漠然と「江戸後期」とされてきた(井上編1997, 138~139頁)。1902年(明治35)発行の絵図Bと比較し、絵図Aの年代を推定してみたい。

絵図Aの年代 絵図Aに描かれた建物は、宝曆14年(1764)の奥書をもつ『万指出』との整合性が高い。前項ではとり上げなかったが、鰐淵寺に至る往還に建てられた辻堂も「地蔵堂」として記載がある。『万指出』は念仏堂を掲げないが、『出雲鏡』に「常念仏堂」は享保11年(1726)「開闢」との記載がある。また、絵図Aには現況と同じ松本坊僧坊が描かれており、その建築は18世紀中頃と推測されている(山岸2012, 第7章第2節)。よって、絵図Aは、この『万指出』前後あるいはそれ以降のもの、とひとまず推測できよう。

次に、絵図Aと絵図Bが示す根本堂の屋根構造の違いに注目したい。絵図Aでは、絵図Bと違って梁間が3間しかない。現況の根本堂は絵図Bと同じだが、外陣の拡張とともに虹梁を補っている。山岸常人氏は、この造作を天保13年（1816）の修理によると推定している（山岸2012）。つまり、絵図Aはこの修理以前の姿と推測される。そして、幕末の19世紀中頃に建築されたと推定される御成門が描かれないこともこの年代推定と合致する。

以上の諸点から、絵図Aの製作年代を18世紀後半から19世紀初めころ、と推定する。次に両者を比較して、伽藍の変化について考えてみたい。

伽藍の変化 堂宇では、開山堂の位置が大きく違う。絵図Bの開山堂は現在と同じ平坦面（A 28）に描かれるが、絵図Aではその裾に建ち、平坦面には開山廟と三重塔が描かれる。現況を確認すると、開山堂へと上る石段は、その脇の石垣が後付けのものと見えており、建物の移築にともない増設された可能性が高い。山岸常人氏がこの開山堂について「幕末に大改修を受けて」いることを指摘していることは示唆的である（山岸2012、64－65頁）。おそらく、幕末に現在位置へと動かされ、この時に大改修を受けたのである。

絵図Aにみえる三重塔だが、正面観のみの平面的な描写であり、ほかの建物が正射図法的に描かれるのと比べると違和感がある。絵図Aとの整合性が高い宝曆の『万指出』にも塔の記載ではなく、もちろん『雲陽誌』にも塔の記述はない。そもそも、正平10年（1355）の「鰐淵寺大衆条々連署起請文」に「塔婆」と記されて以降、塔の存在やその造営を記録した史料はみあたらないのである。僧坊の名前に「塔本坊」があるが、これは「鰐淵寺大衆条々連署起請文」の文安2年（1445）卯月の書き込みが初見で、その後、元亀元年（1570）の「国富八幡宮御頭番帳」（科研目録No.429）に「伊藤分、たうの本分」とあるのみ。前者の史料には「南院塔本坊」とあるので、本来、北院の象徴的建造物であったはずの三重塔との関連はないのかも知れない。ただ、絵図Aが虚構と知りつつも、あえて開山廟の位置に塔を描いたのは、かつての「三重塔婆」の位置についての伝承が存在したのだろうか。現開山堂平坦地周辺では先述したように中世瓦がやや濃密に分布する（第4章第4節）。何らかの堂塔が存在した可能性は高い。その解明は、鰐淵寺の伽藍構成に大きな意味をもつと信じる。

このほか、根本堂背後に描かれた宝蔵は2つの絵図でその建物構造がまったく違い、Bでは「小屋」に近い。また、七仏堂拝殿や浴室の有無なども大きな違いだが、ともに堂宇の廃滅を示すに留まる。

現在の根本堂地区への参拝路は、山門をくぐり、鰐淵寺川に架かる大慈橋を渡ったのち、長い石段を登って根本堂に至るルートである。この石段は、2枚の絵図にも描かれており、江戸時代中後期（18世紀後半から19世紀初頭）以降は、おおむねこの姿だった。ただし、絵図Bで松本坊から上がってきた参道は、淨觀院を迂回するように鍵の手に曲がる。これは現況と同じである。これに対して絵図Aでは、松本坊の横から最上段まで一直線の参道として描かれる。しかも根本堂の正面に同じ軸線をもって走るようにみえる。現況地形図で同様のラインを想定すると松本坊を突っ切ることになり、絵図Aの参道がどれだけ実態をもつかは疑問であるが、松本坊御成門の建設をきっかけとして参道の改造がおこなわれた可能性はないだろうか。現在の最上段に至る参道石段は、根本堂の主軸とは斜行しており、後世の改造を強くうかがわせる。

それは、絵図Bが伽藍の南端（等湯院の横）にある門を「総門」としていることとも関連する。宝暦の『万指出』には「西之門」とあるものだが、総門という名称が明治まで継承されていたことは注目される。総門は「外構えの大門。総構えの正門。」『広辞苑』である。この門から南西に延びる山道が、遙堪峠を越えて出雲大社（杵築大社）へつながる（第4章第2節）からこそ、鰐淵寺の「正面」と意識され、記憶されたように思える。鰐淵寺伽藍には、まだまだ解明すべき課題が多い。今後の調査・研究が期待される。

(花谷 浩)

註

- (1) 正平10年（1355）「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」と、引用の「両院一揆挙状」の年代。
- (2) 享保2年（1717）の『雲陽誌』が12坊体制を伝える最初の文献なので、これ以前である。また、『雲陽誌』に見えない坊名が慶安4年（1651）「豪善讓状」（科研目録No.666・667）に見えるので（僧行坊・自性院）、17世紀なかばまでは坊の縮減が続いていたと推測される。杵築大社の寛文度正遷宮に伴う関係絶縁と、それに引き続いているおこなわれた摩多羅神社造営（寛文7年（1667））が、大きく影響したものであろう。
- (3) 正安2年（1300）ごろ編集され、明治初年に筆写されたもの（『大社町史』史料編上巻189）。
- (4) 精説は（井上1997、50頁）による。
- (5) 乾元2年（1303）「佐々木貞清寄進状」（科研目録No.65）や、正和3年（1314）「佐々木貞清願文」（科研目録No.70）。「出雲国浮浪山鰐淵寺」（井上編1997）では、天福年中に焼失した七仏薬師堂と三重塔はともに南院にあったが、三重塔についてはこれを北院に再建した、とする。しかし、本節の冒頭に述べたように、北院＝唐川地区説はとらないので、三重塔は元から北院にあったと考える。
- (6) 後述の後醍醐天皇の願文や輪旨、御光嚴上皇院宣などによる。千家古文書写乙の「鰐淵寺衆徒等解状案」（嘉曆4年（1329）7月、科研目録No.77）には「去嘉曆元年二月為類火回禄本堂以下堂〔　〕大小十余宇悉令焼失畢」「鳳輪〔　〕公家武家重書等寺庫焼失之間、悉依令粉失」とあり、本堂以下十数棟の堂宇や寺庫が焼失したという（『大社町史』史料編 上巻368～369頁）。この時、北院本尊の千手觀音と南院本尊の藥師如来も焼失ないし焼損したと推定される（正平10年（1355）「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」の「可造立仏像修復古仏事」参照）。
- (7) 「鰐淵寺衆徒等解状案」（科研目録No.77）では、国々の棟別段銭の輪旨を得て造営を終えたいと訴えている（『大社町史』史料編 上巻368～369頁）。
- (8) 正平10年（1355）3月奥付の「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」が引用する、貞和3年（1347）8月「進当寺本家衆徒解状」に「嘉曆元年炎上以後、数字の仏閣の内、一字として未だ建立に及ばず。空しく廿余作を送りおわんぬ。」とある。
- (9) 「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」引用。
- (10) 「鰐淵寺大衆条々連署起請文写」の「於造営不可疎略事」にも、「根本堂舎並びに建立すべき左右の伽藍は、塔・常行堂なり」とある。
- (11) この両本尊は、高岡禪尼念智を大檀那として、眷属16体および日光月光十二神などとともに新たに造立されて供養も終わっていた。また、三重塔本尊の精迦如来と多宝如来の像本体は、焼損を免れたらしい（「鰐淵寺大衆条々連署起請文案」の「可造立仏像修復古仏事」参照）。
- (12) 「鰐淵寺本堂再建棟札」（科研目録No.505）に「正面九間は極楽九品三拝を顯し、天にありては九曜を表す。脇七間は七仏薬師を、また七星を表す云々」とある。「鰐淵寺本堂再建棟札裏書案」もほぼ同文。後者は「良木、広大にして、あに古閣に超過せんや」と誇る。

- (13) 「吉川元春書状」には、「当寺本堂の瓦は、寒國のゆえ相検め候。付いては、葺き替えたきの由、尤もしかるべしと存知候」「吉田もその趣、申し越され候」とある。
- (14) 毛利元就の没年は、元亀2年(1571)。日頬院は、元就の戒名「洞春寺殿日頬洞春大居士」による。年末詳(永禄8年(1565)かと推定)の和多坊宛の「毛利元就・洞春元連署書状」(科研目録No.382)では、尼子方へ走つた本覚坊、月輪坊、金剛院の後に毛利に味方するものを入れるように要請している。
- (15) 貞治5年(1366)の「頼源送進文書目録」(科研目録No.124)に「僧行坊」がみえる。読みは「相行坊」と同じ可能性があるが、附表1には別の僧坊としてあげた。
- (16) 建長2年の文書には「和多房」、建長8年の文書には「和田坊」とみえるが、煩雑なので、本文中では「和多坊」で統一する。
- (17) ここでは、1間 = 6尺四方 ≈ 1.8 × 1.8 m = 3.24m²として算出した。
- (18) 「鶴淵寺別当円運等連署紛失状」(科研目録No.171)。竹木坊の初見は、貞和6年(1350)頃の「佐々木系図」(続群書類從 卷132)。応安元年(1366)の「杵築弘乗代高守邸安案」(千家家文書、科研目録No.126)にも竹木坊がみえる。
- (19) 「日吉社領出雲漆治郷文書目録」(科研目録No.183)。
- (20) 「別火虎丸起請文」(科研目録No.211)。
- (21) 学林坊の初見史料は「康富記」応永8年5月12日条(科研目録No.141～149)、最後は「円秀讓状」(科研目録No.227)。
- (22) 竹木坊の初見史料は「佐々木系図」(続群書類從 卷132)、金剛院の初見史料は「鶴淵寺別当円運等連署紛失状」(科研目録No.171)、両者とも最後は「宣乗・豪信連署書状」(千家家古文書写丙、科研目録No.627)。
- (23) 年月日未詳だが天正年間末と推定される「六所神田坪付断簡」(科研目録No.585)。
- (24) 大蓮坊の初見史料は文安4年(1447)の「妙善置文写」(科研目録No.186)、最後は「豪村讓状」(科研目録No.634)である。
- (25) 「頼源送進文書目録」(科研目録No.124)。正平6年(1351)の「三所卿輪旨案」の正文所在先としてみえる。
- (26) 「鳥居居秀旦那職讓状」(科研目録No.154)。
- (27) 「觀鏡讓状」(科研目録No.159)。
- (28) これ以外には、「鶴淵寺大衆条々連署起請文案」(科研目録No.119)の末尾に「南院塔本坊」がみえるのみ。
- (29) 天文13年(1544)の「鶴淵寺音曲奥書」(科研目録No.258)「銅製關伽桶銘」(同No.259)と、天文20年(1551)の「尼子晴久袖判奉行人連署奉書」(同No.265)。
- (30) 天文24年(1555)頃とされる「直運書状」(科研目録No.286)と、弘治2年(1556)と推定される「円秀等連署書状」(同No.346)。
- (31) 弘治2年(1556)の「鶴淵寺三答状案」(科研目録No.302)、および同年と推定される「円秀等連署書状」(同No.346)。ただし、後者には「教林坊」とみえる。
- (32) 弘治2年の「鶴淵寺衆徒申状上台」(科研目録No.290)、および同年の「覺澄書状(切紙)」(同No.316)。
- (33) 天文20年(1551)と推定される鶴淵寺第3の大火災を受けて作成された文書。
- (34) 2つの史料にみえる僧侶の名前を対比すると、13名が一致し、「杵築大社旧記御遷宮次第」から5年後にも、13の僧坊で住僧が変わっていない。また、その並び順(「連署起請文」は上段右から下段左への順)もほとんど同一である。参考に対比表を掲げる。
- なお、尊栄は、弘治2年(1556)の「鶴淵寺衆徒申状上台」(科研目録No.290)に「極楽寺尊栄」とある。また、天正6年(1578)の「直江八幡宮造営棟札」(科研目録No.507)には、栄叔が「密嚴院」、円芸は「大蓮坊」

第31表 鰐淵寺における天文年間後期の僧侶名対比表（・印の僧侶名が一致）

	「御遺宮次第」 天文 19年9月26日	「速署起請文」 天文 24年2月12日	備 考
1	竹本房栄印法印	円桂	
2	竹尾房円高權少僧都	円高*	
3	西本房栄栄權少僧都	栄栄*	
4	大蓮房栄円法印	栄円*	
5	密井房栄印律師	一	
6	竹井坊円金律師	円金*	
7	亮光房栄慶律師	栄慶*	
8	池本房印海律師	印海*	
9	井本坊安拓阿闍梨	栄真	
10	月輪坊豪慶阿闍梨	豪慶	
11	金剛院栄重阿闍梨	栄澄	読み同じ？
12	本覺坊轉予阿闍梨	轉予*	
13	和多方榮芸阿闍梨	栄芸(物語)	
14	太輔公尊寂	尊寂	極楽寺(弘治2年、1556)
15	桜木(本)房豪澄	豪澄*	
16	少納言公榮叔	栄叔*	密巖院(天正6年、1578)
17	宮内卿栄住	栄住*	
18	中納言公豪円	豪円*	
19	式部卿安盛	一	
20	兵部卿円貞	円貞*	
21	円芸	大瀬坊(天正6年)	
22	栄怡		
23	宿善		
24	栄仲		
25	尊芸		

の住僧としてみえる。

- (35) 永正9年(1512)の「円秀讓状」(科研目録No.219)と大永2年(1522)の「栄円讓状」(科研目録No.228)に「鰐淵寺北院井上坊」とある。坊地は和多坊の南に隣接する。
- (36) 天文元年(1532)の「山王私記『本地供』奥書」(科研目録No.236)と天文3年(1534)の「伝授作法奥書」(科研目録No.240)に「不老山鰐淵寺南院大蓮坊」。
- (37) 発行者は荒木泰心住職、松江市殿町印刷所の石版印刷であるタテ49.2×ヨコ63.8cm。明治35年は、覚城院の焼亡後だが、往時の姿で描き込まれている。
- (38) 現状は、中央間のみ後補のガラス引き戸に改造されているが、すべて両開きの棟唐戸を入れている。内陣の側面は双折棟唐戸、板壁、引戸となっている(山岸2012)。
- (39) 護摩堂の後方、石垣の上に長方形の木柵があり「弁慶水」とある。『出雲國浮浪山鰐淵寺』には「弁慶硯の水」の写真が掲載され(169頁、写真I-71)、20世紀末までは木柵が残っていたらしいが、現存しない。『雲陽誌』(福井郡 別所 鰐淵寺)には、「本堂の傍に井あり。昔西塔辨慶島根郡魔彌山にうまれ、異人の教を受て稚時より此山にのはり、終に髪を剃り瑜伽の密水に結し井なりとて辨慶水とも手習水共いへり」とある。
- (40) 鐘楼の北東に石積み護岸を設けた方形の池が描かれているが、絵図Bにはない。
- (41) 明治20年(1887)の明細帳添付「鰐淵寺現境内縮図」に接待所ではなく、覚城院と惠門院の背後、つまり接待所と同じ場所に宝形造と思しき小さな屋根が描かれて、これに「地蔵堂」と注記される。
- (42)『万指出』(宝曆14年(1764)奥書)に「開山御廟拝堂 六尺ニ八尺」とあるものに該当しよう。
- (43) 後ろの一間分は木に隠れて見えない。
- (44) 日野一郎は、石造の宝塔は特に「延暦寺との関係から近江、大和に多い」と指摘する(日野1984)。
- (45) 現地には木柵の土台であった石材が、原位置に残っている。
- (46)『出雲蹟』に「常念仏堂 本尊阿弥陀如来／享保十一丙午年開闢道心／松江来迎寺弟子願誓一心大徳」とある。

この記述とおりとすれば、1726年創建。

- (47)『万指出』(宝曆14年(1764))には「二王門 梁行式間／桁行三間」とある。
- (48)『万指出』(宝曆14年)には「西之門 二間ニ三間 桁損」とあるものが該当しよう。これよりも構造が縮小している。
- (49)宝曆14年奥書の『万指出』に「死元淵地蔵権現堂 三尺四方 ／但巖壁之内有」とされる建物に該当する。「死元淵」は「しもとぶち」と読む。本書第4章第1節第31図と第4章第2節40頁参照。また、『雲陽誌』(1717年、2002年雄山閣刊行POD版)には、「ある時(智春)上人岩窟にあり護法神の示現をいのりたまふに、地蔵菩薩出たまへり、上人のたまふは薩埵の顔かたち柔和にして降魔したまふべき粧にあらず、願は猛忿し姿を現て擁護を加給へとありければ、薩埵はすなわち麗をさせて飛去ぬ、今の死木淵の地蔵といふは是なり」の記事がある。「死木淵」は「死本淵(しもとぶち)」の誤植か。
- (50)1910年の状況については、「僧院二閑スル答申書」(井上編1997、205-209頁)による。
- (51)『出雲蹟』によると、寺領350石のうち4石が「堂宮守」に配分されている。明治20年(1887)の明細帳に「境内庵室」の一つとして「竹林庵(中略) 建物 桁五間三尺 梁三間／納屋 桁三間 梁三間三尺」があがる。
- (52)『万指出』に「小守権現社 五尺四方」とある。
- (53)1887年(明治20)の「明細帳」に「桁三間六寸 梁式間九寸」。
- (54)『万指出』に「勝手明神社 梁行八尺／桁行九尺」。
- (55)『万指出』に「馬頭觀音堂 五尺四方／ 伝教大師彫刻」。
- (56)『万指出』に「紙薦天王／日吉山王／北野天神社」とあるように三神一社に社殿。建物構造は「梁行式間／桁行三間」と記す。同じく「梁行式間／桁行三間」の拝殿は「桁損」とあるので、18世紀中頃には傷んでいたらしい。また、明治20年(1887)の寺院明細帳には「延宝四丙辰八月」再建とある。1676年の建造となる。
- (57)『杵築大社旧記御遷宮次第』(科研目録No.631)の「勤行次第之事」に「古牛経所ヲハ鰐淵寺山王ノ拝殿ニ立候」とある。『大社町史』では、この記事を天正8年(1580)の遷宮にかけて掲載する。
- (58)『万指出』に「浴室 式間半ニ六間」とある。

参考文献

- 福田陽介編 2013『史跡出雲国府跡－9 総括編一』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22、島根県教育委員会
- 井上寛司 1997『古代・中世の鰐淵寺』『出雲國浮浪山鰐淵寺』、浮浪山鰐淵寺、3-123頁
- 井上寛司編 2012『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために－』2009(平成21)年度～2011(平成23)年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書(課題番号21320123)
- 曾根研三 1963『鰐淵寺文書の研究』鰐淵寺文書刊行会
- 大社町史編纂委員会 1997『大社町史』史料編 大社町(『大社町史』史料編、と引用)
- 辻 信広ほか 2011『大山寺僧坊跡調査報告書』大山町文化財調査報告書第12集、大山町教育委員会
- 廣江耕史 1992『島根県における中世土器について』『松江考古』第8号、松江考古学講話会、9-21頁
- 藤岡大拙 1987『出雲の山岳信仰』『島根地方史論叢』ぎょうせい、75-90頁(初出、宮家準編『大山・石鎚と西国修驗道』名著出版、1979年)
- 山岸常人 2012『鰐淵寺境内の歴史的建造物』『科研報告』59-70頁

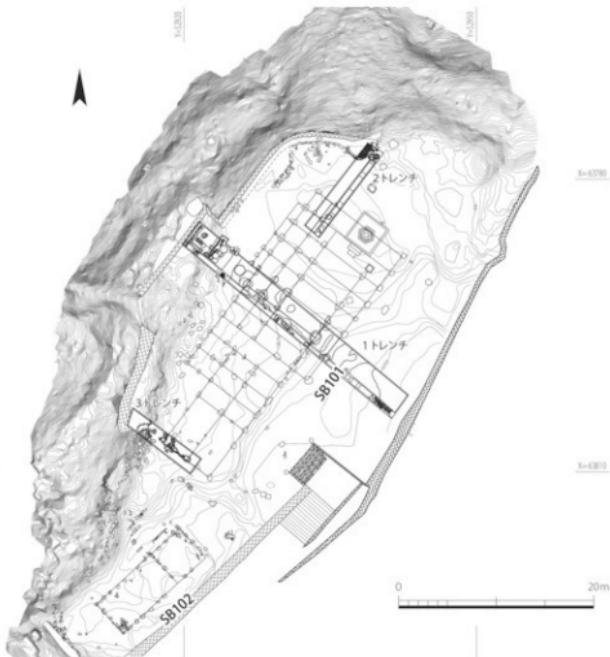
第2節 明治初期焼失の和多坊の建築学的復元

はじめに（第178図、図版7）

江戸時代、鰐淵寺には和多坊、本覚坊、惠門院、覺城院、淨觀院、松本坊、現成院、密嚴院、是心院、洞雲院、等湖院、巖王院と12の僧坊があった。これら僧坊が明治時代まで存在していたことは、江戸後期の絵図「出雲國浮浪山鰐淵寺」、明治期の絵図「天台宗浮浪山鰐淵寺」、「出雲國橋郡寺院明細帳（2）鰐淵寺」（島根県立図書館蔵）などによって確認できるが、明治40年（1907）には松本坊、是心院、等湖院の3院になり、現在は松本坊のみが現存するだけである。

今回の調査によって、和多坊跡地からは最上層に建物の礎石と思われる自然石がいくつか確認（第178図、図版7）された。これらは、近世初期に鰐淵寺を支配していた榮芸が住持でもあった和多坊の僧坊建築の礎石であることは間違いないと見られる。

ここでは、この礎石の上にどのような建物が建っていたか、鰐淵寺に現存する僧坊・松本坊や、山林寺院である大山寺の僧坊建築を参考に、建築学的な視点によって復元的な考察を試みたい。



1 大山寺の僧坊建築（第179～183図）

最初に、同じ山陰地方にあって鰐淵寺と類似の山林寺院である大山寺に残る僧坊建築について述べることにする。

江戸時代の大山寺は南光院谷、西明院谷、中門院谷の三院谷で組織され、各院谷にはそれぞれ14院の僧坊があり、一山三院四十二坊と称される体制をとっていた。鰐淵寺も、かつて鰐淵寺根本堂を中心とした南院と北院が配置されていたと伝えられている。

しかし、この一山三院四十二坊体制も、明治の廃仏毀釈によって崩壊し、大半の僧坊は取り壊されてしまい、現在、中門院谷は大山寺の参道としての形態は留めているものの、大半は旅館、食堂、店舗等の新しい建物に様変わりし、南光院谷、西明院谷も、現存する僧坊建築はほんの僅かで、大半は僧坊跡だけ存在し、坊舎が建っていた敷地を取り囲むように石垣や土塁が残っており、僅かに往時の姿を偲ぶことができる。

大山寺は史跡としての重要性から、先年、大山僧坊跡調査が行われ、筆者もこの調査に参加し、現存する僧坊建築の調査を行った。ここでは、この時に調査した僧坊建築について述べておく。調査したのは洞明院（18世紀末）、金剛院（現三鉢莊、江戸後期）、寿福院（江戸後期）、普明院（江戸後期）、円流院（江戸後期、調査後、建替え）の5院である。以下、これら5院の調査概要を記しておく。

洞明院 西明院谷のなかほどに建つ子院である。子院（僧坊）の南側には阿弥陀堂に向かって東にのびる長い石段がある。この石段を左に曲ると、右手に石段があり、その先に2本の角柱の上部に冠木を通し、上部に切妻の屋根を乗せた棟門がある。洞明院の表門である。腕木に彫られている渦や若葉の絵様、腕木の上に乗る蟇股の中央に彫られている花柄の絵様から、この門は江戸時代中期頃の建築と思われる。門を入れると、正面に茅葺き屋根（現在は金属板で覆われている）の主屋がある。この建物は、中央やや左に玄関を設け、その左に大戸口を開く。右手に室がならび、左には土間（現在は床が張られている）がある。

土間から右手に室が10畳、8畳、15畳と3室がならび、右手奥に奥行き1間の仏壇を設けた仏間（4畳）がある。洞明院は4代前の住職・禪信和尚（文久3年歿）の代、文化年間に内部が改造されて、中ほどの室の奥にあった仏間が、妻側に移されている。



第179図 洞明院平面図

金剛院 南光院谷の西北端、大山夏山登山の入口に位置する。金剛院が廃絶した後、宿坊「三鉛荘」^{もろろみこうじやう}となり、その後、京都の数寄屋大工諸富厚二により増改築され、別荘として使われていたが、近年、所有者が替わり、補強を受けて、創作レストランとして使われている。増改築を受けているとはいっても、仏間回りや書院回りに変更ではなく、往時の姿を留めており、子院（宿坊）としての趣をよく伝えている。

主屋は茅葺き（現在は金属板で覆われている）で、平面形は長細く、表側には、桁行方向に右手から10畳、8畳、8畳、10畳と室が4室並ぶ。玄関（式台）はほぼ正面中央にあり、仏間は、玄関の間の正面ではなく、左手にあり、書院を一の間とすれば、三の間の奥に置く。仏間は4畳で奥に間中の仮壇が付いている。書院は左手奥にあり、10畳で、正面に幅1間半と幅広の床があり、床脇には地袋がつく。書院の前の次の間も10畳である。書院・二の間・三の間の外側には縁が巡り、庭園に対して開かれている。室と縁の間の柱間装置は敷居と鴨居であるが、二の間左隅の1間分には腰壁が付き、鴨居上部の長押も他より一段高くなっている。

玄関正面の8畳の奥は左手に1間幅の床が設けられ、右手は1畳の踏込みになっており、裏の8畳とは襖でつながっているが、裏の8畳はこの子院の住持の居間になっていたと思われる。

右手に大戸口があるが、大戸口から入った土間廻りは一部床が張られ、土間の右手には、数寄屋造りの8畳が増設されているが、子院の雰囲気は壊さず、むしろ、新たな雰囲気を醸し出している。庭の木立を通して眼下に日本海が広がるが、この庭を通しての眺望はすばらしい。



第180図 金剛院平面図

寿福院 中門院谷の下端、博労座の上部にある。以前は宿坊寂光庵^{じやっこうあん}として利用されていたが、現在は一部がショップ「田舎屋」に貸し出されている。

平面形は桁行方向に右手の土間から10畳、長4畳、8畳、8畳の4室がならび、梁行き方向には2室が並ぶ。右手の土間部分は不老園（RC造）につづく。正面やや左に玄関（式台）があり、その正面には奥行き半間の仮壇を備える6畳の仏間がある。左手には前後に2畳が二室並ぶが、奥が書院で手前が次の間となる。書院には正面に床と棚が並び、床の左手には付書院が備わる。外側の柱間装置は他の子院同様に敷居と鴨居であるが、角の柱間だけは、腰壁付き、さらに上部は花頭窓^{かとうまど}になっている。

玄関正面の8畳の右手の長4畳の奥には1畳弱に踏込みがあり、奥の8畳と連続しているが、この奥の8畳が住持の居間で、手前の長4畳は仏間、書院、そして土間脇は8畳につながる控えの間となっている。

主屋の左手と前面の二方に縁が巡るが、縁の幅は4尺余で他の子院に比べて幅が広い。

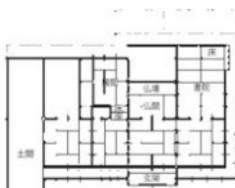
これらのことから、寿福院の主屋は、一時代前の堂庫裏建築の面影を留めている可能性もある。



第181図 寿福院平面図

普明院 寿福院の東に位置する。主屋は茅葺き（現在は金属板葺き）で、左手に土間があり、桁行方向に左から8畳、6畳、8畳、8畳とななり、右端の8畳の奥に10畳の書院がある。玄関（式台）は正面やや右手にあり、玄関の正面は、8畳を介して奥行半間の仏壇を備えた仏間となる。6畳の奥には床と1畳の踏込みが並ぶが、この踏込みの奥の8畳は住持の居間である。

玄関（式台）は縁側より一尺あまり張り出している。上部には庇を付け、入口の戸の上には絵様を施した虹梁^{こうりょう}が付く。



第182図 普明院平面図

円流院 洞明院の西、一段低い土地にある子院（僧坊）で、2009年に建て直され、新しくなった。ここでは新しくなる前の建物（旧円流院）について記す。

左手に土間があり、前側には左から10畳、6畳、8畳と並び、真ん中の6畳の奥に仏間がある。右手の8畳の奥が書院。8畳で床があり平書院が付く。書院の左手、仏間の裏が6畳の居間で「喀然^{こうぜん}の居間」と称されていた。江戸後期の画僧・喀然は一時期ここを拠点として活動した。今、建物は建て替わり、遺構としては敷地の隅に庭園だけとなってしまった。



第183図 円流院平面図

大山寺における僧坊建築の特色 大山寺僧坊について、調査が可能であったのは、子院（僧坊）5院に過ぎなかつたが、これら僧坊は、いずれも江戸時代の僧坊建築と見なしてよく、仏間と書院、そして住持の居間等が確認でき、間取り形態でも類似点が多く見られ、大山寺における子院（僧坊）建築の基本形が確認できる。

僧坊主屋は基本的には桁行方向に3室ないし4室、梁間方向に2室がならぶ6室ないし8室の間取りで、これに玄関と土間を備えた建物である。なお、大山寺の僧坊建築は座敷数が8～9室と多いのが特徴であろうか。

桁行方向の部屋の並びは洞明院が3室、寿福院は前側が4室だが裏側は3室、金剛院と普明院（倒壊した蓮淨院も）は前側裏側ともに4室が並ぶ。梁間方向の室は2室並ぶのが大半で、一部3室もある。

僧坊主屋の屋根は茅葺きで、小屋組は周辺の茅葺き民家と同じ又首構造である。屋根は寄せ棟で、妻飾りはない。

僧坊建築に共通する特色は、建物の正面中央部に式台を伴う玄関が付き、片側に大戸口を設ける。書院・棚のある室を中心とする座敷空間の外には二方に縁が巡り、縁の外には築庭がある。

寿福院、普明院、金剛院は仏間が中の間の奥にあり、上手奥には床の間、付書院が設けられている座敷がある。

仏間は、大半は2間幅で、室の奥に仏壇（厨子）を設け、仏壇（厨子）の前面には丸い来迎柱2本を建てる。また、仏壇は3分され中央に本尊像が安置される。先述したように、仏間の上手は書院造の座敷空間であるが、下手にも奥行きの浅い床や棚を備えた室がある。この部分は、多くが、住持の居間として使用されていた室である。

2 鰐淵寺の僧坊（第184・185図）

松本坊 先述したように、松本坊は、鰐淵寺で唯一現存する僧坊で、現在は本坊と称されている。

屋根は、現在、金属板で被われているが、寄棟の茅葺き屋根である。正面は東側を向き、かつては北側に土間があり、その前面には大戸が開いていたという。身舎の中央前面に庇が付き、その下に式台が設けてあり、これが正式な玄関となっている。

土間側から南に向かって3室が前面東側に並び、中央の三の間が室中（12畳半）となり、奥に仏間（12畳か？）が設けられている。玄関式台は外陣に続く細長い室（前室）の外に設けられている。外陣となる中の間の南は二の間（10畳）で、この二の間の奥（西）に一の間（8畳）がある。一の間の西南には、付書院を備えた上段の間（2畳）が張出している。ただ、この部分は後補で、以前は、この部分には違い棚と同じ奥行き（半間？）の床が設けられていたと思われる。

この僧坊建築の特色は、上記の座敷を含む身舎（上屋）の二方（南側と東側）に幅1間の庇（下屋）が巡らされていることである。そして、南東隅の1間四方は建具（板戸）と窓（火燈窓）がある2畳の室になっており、二方に高欄を設けた縁が巡っている。南面の縁は凹んで半間となっているが、庇を支える柱位置は変わらない。

つまり、この僧坊建築は、身舎（上屋）の廻りに1間幅の庇（下屋）が巡るところに大きな特色が

あるが、これは、初期の書院建築の形態を留めていると見なしてよいだろう。

なお、南東隅の2畳の小空間であるが、この部分は、近世初期の書院造の建築（例えば、大津市三井寺勘学院客殿、同光淨院客殿）では、中門廊とも称されるが、それを連想する空間となっている。

また、僧坊の南には、庭が築かれているが、この庭の南には、参道との境に東より後述する御成門が設けられているが、僧坊南東の2畳の空間は、この御成門と距離的に最も近い関係にある。

桁廻りには、柱と桁との間に舟肘木が入れてあり、次の間（10畳）と三の間（15畳）の間の欄間は竹の節欄間となっている。そして、庇（下屋）は幅1間（大山寺の僧坊の場合、縁側の幅はいずれも半間程度）と幅広である。これら松本坊に見られる近世建築の手法は、近世初期に完成を見た書院造の基本形態を踏襲していると見なしてよいだろう。

玄関式台^{スミヨコタケシマ}上部の虹梁・海老虹梁の絵様のデザインから見ると、18世紀中期の建築と思われるが、柱は4寸7分（約140mm余）角で相対的に太く、面も8分の1と大きく、大面取であり、古風である。

前項で記した大山の僧坊建築は、おむね江戸後期の建築であるし、一番古い、洞明院も仏間の位置など改造を受けている。鰐淵寺の僧坊・松本坊は、大山寺のどの僧坊建築よりも古い建物であり、座敷、仏間と玄関式台の構成から見ると、山陰地方では、江戸初期の子院建築の形式を伝える唯一の遺構と考えられる。

以上から、松本坊は、江戸時代初期の僧坊（子院）建築の形態を伝える建物と見なしてよいだろう。

なお、松本坊に付設する御成門は、唐破風を形作る垂木の先にも繰り形を施し、冠木を挟む大梁・小梁にも絵様が施されなど、棟門の一形式を基本としながら意匠的にも優れている。



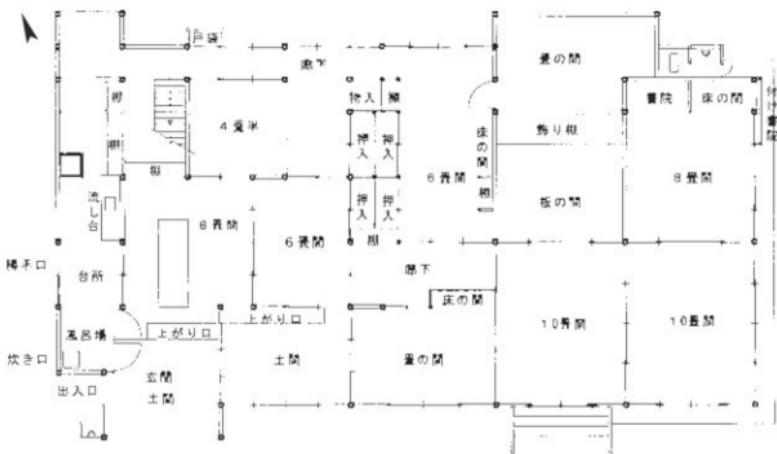
第184図 松本坊外観

是心院 是心院は現存しないが、幸い、倒壊前の写真や間取図（第185図）があり、これによって、この僧坊の姿がわかる。

屋根は茅葺きの葺き下ろし、大きさは桁行 10 間半余、梁間 5 間半である。規模は「出雲国樋縫郡
寺院明細帳（2）鰐淵寺」（島根県立図書館蔵）に記されている「是心院 桁 一間六歩 梁五間七分」
とも、ほぼ相応しているし、茅葺き寄棟の姿は「出雲鰐淵寺之図」（明治 35 年）に描かれている是心
院の図とも対応している。

是心院平面略図(第185図)を見ると、南側に土間があり、北側に室空間が並ぶ。右奥の「8畳」が床・棚・書院が備わる主室で、その前の「10畳」が次の間で、この二室の外側には縁が巡る。板の間が仏間で奥の飾り棚が仏壇であろう。板の間の前室「10畳」が外陣で、その前に階を備え、参拝者は直接仏間に入れるようになっている。「土間」と記されている前の建具が大戸口で、南側に配置されている「玄関土間」「8畳」「台所」などは、かつて全て土間(にわ)であったと思われる。

室空間の中央奥に仏龕があり、その脇に庭に面する主室と次の間からなる座敷空間が配置される構成は、松本坊とも類似しており、大山寺の僧坊の平面形式とほぼ同じであることがわかる。



第 185 図 是心院平面略図

3 和多坊の復元的考察（第186図）

山陰地方における山林寺院の僧坊の基本的形態は、大山寺の僧坊遺構に見られるように、主屋の間取りは基本的には桁行方向に3室、梁間方向に2室がならぶ子院形式で、中央間の奥を仏間とするもので、これに土間を備えた建築と言える。仏間の正面には玄関式台が備わり、また、仏壇の背後には住持の居間が設けられていた。

以上の特色は鰐淵寺の松本坊についても言えることであるが、松本坊は大山寺の僧坊よりさらに古い形式を備えている建築と思われる。

ここで、注視したいのは、「出雲国権縫郡寺院明細帳（2）鰐淵寺」に見られる僧坊建築規模の次の記述である。

「松本坊 柱 14間 梁 4間 3尺、巖王院 柱 11間 梁 5間、淨觀院 柱 13間 梁 4間 3尺、
是心院 柱 11間 6步 梁 5間 7步、洞雲院 柱 10間 梁 5間、等澍院 柱 10間 梁 4間 3尺、
密嚴院 柱 10間 梁 5間、現成院 柱 10間 3尺 梁 4間 3尺、惠門院 柱 9間 3尺 梁 5間、
本覚坊 柱 10間 3尺 梁 4間 3尺、和多坊 柱 14間 3尺 梁 6間」

これを見ると、和多坊と松本坊は、他の院坊より規模が大きく、また、和多坊が松本坊より少し大きいが、二つの僧坊はほとんど同じ規模の建物であるといえる。

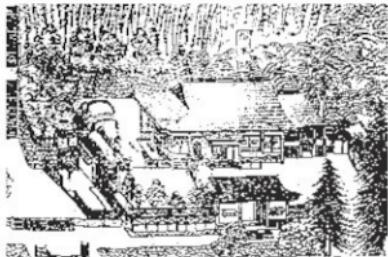
また、現存する二つの絵図、江戸後期の絵図「出雲国浮浪山鰐淵寺」、明治期の絵図「天台宗浮浪山鰐淵寺」に描かれている僧坊を見ると、和多坊と松本坊は、共に他の僧坊より大きく描かれており、主屋は共に、主要部の妻側に突出部が延びており、主屋主要部の正面には庇（向拝）が付いており、その下には式台が置かれている。また、身舎の廻りには縁が巡り、その外には柱がほぼ均等に配置されている。屋根の描き方は、江戸期と明治期で少し異なるものの、両僧坊の屋根の形態は極めて似ている。このような類似性からも和多坊は松本坊と同じような建築形態であったと見なしてよいだろう。



江戸後期の絵図に描かれている松本坊



江戸後期の絵図に描かれている和多坊



明治期の絵図に描かれている松本坊



明治期の絵図に描かれている和田(多)坊

第186図 絵図にみえる松本坊と和多坊

また、松本坊の床下の礎石の置き方を見ると、南側の主柱下部の礎石は、和多坊跡の礎石の並びと類似している。

以上から、和多坊もまた、身舎の中央奥に仏間がおかれて、北の妻側には床、棚、書院を備えた主室が配置され、その外には庭が設けられていたと考えられる。

上記の松本坊との類似性に大山寺僧坊の特長を加味し、和多坊跡発掘図の上に和多坊の僧坊平面を作成したのが次頁の第187図である。

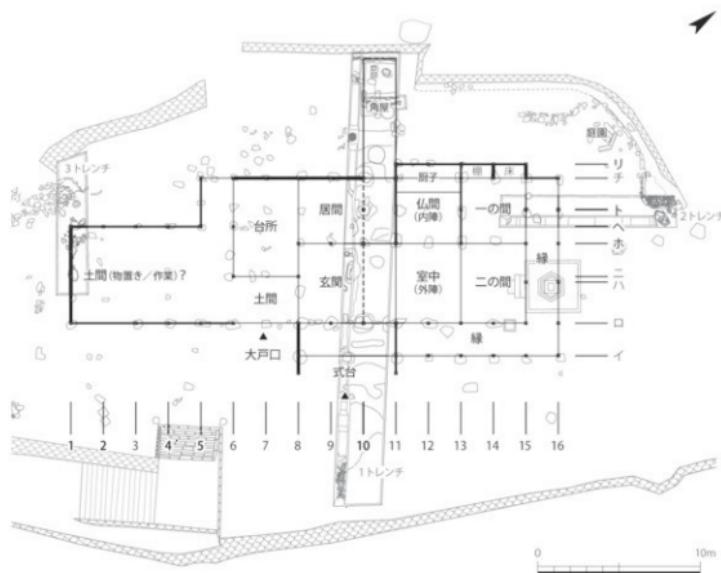
以下、作図にあたっての検討事項を列記する。

- 建物は南北に長く、桁行15間、梁間6間となっているが、これは、『出雲国橋縫郡寺院明細帳』の「建物 桁十四間三尺 梁六間」とほぼ同じ規模である。
- 仏間は11～13通りの奥に配置し、背後に厨子を設けた。幅は、礎石の配置から2間にし（大山寺の僧坊の仏間も基本的に2間幅である）、その前面を外陣とした。
- 仏間と外陣の北側の空間は室が二つあるとみなし、一の間（8畳）と二の間（10畳）の続き間とし、一の間の背後の「リ通り」に礎石はないが一の間には床・違い棚があるべきなので、あえて床と棚を設けた。
- 一の間、二の間、外陣の外、北側と東側には縁を廻した。縁の幅は礎石の配置から1間幅とした。
- 縁の北西部分は、築庭の痕跡が認められているし、松本坊にも僧坊の南に庭園があるので、庭園があったと思われる。
- 玄関式台は、明治期の絵図「天台宗浮浪山鰐淵寺」の「和田（多）坊」に併せ、身舎の南東に設けた。幅は、礎石に併せて8～11通りの3間幅とした。式台に入った室を玄間とし、その奥は、大山寺の僧坊でも、この位置に住持の居間が設けられていたし、松本坊でも同様の位置に居間があったと聞いているので、ここを居間とした。
- 大戸口は、同じ絵図から、その南の2間幅（口通り／6～8）とし、大戸口に入った所は土間とし、その奥を台所とした。
- 南の突出部分は主屋に付随する空間で、物置や作業に使用された場所と思われる所以、土間空間でよいと思われる。
- 居間空間の背後には、石組みが確認されており、浴室・便所が角屋状に設けられていたか、あるいは裏門などが考えられる。何れにしても主屋からは角屋状に西に細長く延びる主屋に付随する建物である。「角屋」と表記した。

（和田嘉宥）

参考文献

和田嘉宥 2011 「建造物調査」『大山僧坊跡調査報告書』大山町文化財発掘調査報告書 第12集、大山町教育委員会、158～178頁



第187図 和多坊復原略平面図（1:300）

第3節 鰐淵寺の陶磁器・土師器

今回の分布調査および発掘調査の結果、全体の採集および出土遺物は破片数にして 28,807 点であった。そのうち、土師器が圧倒的に多く 22,826 点、全体の約 80% を占めた。それに対して、陶磁器は貿易陶磁器が 628 点・約 2.2%、国産陶磁器が 1,514 点・約 5.3% にすぎなかった。以下に、陶磁器・土師器について取り上げ、その特徴を示す。

1 陶磁器について（第 32・33 表）

貿易陶磁器の中で多い順にあげると、白磁 304 点（48.4%，貿易陶磁器全体に対する割合）、青磁 142 点（22.6%）、褐釉陶器を含む中国陶器 94 点（15.0%）、青花 64 点（10.2%）、青白磁 7 点（0.1%）であり、朝鮮系陶器は 17 点（0.3%）とわずかであった（第 32 表）。

多数を占めた白磁は、碗や皿が主体で、四耳壺や香炉も若干見られた。時期的には、12 世紀～13 世紀前半のものが多い。褐釉陶器は 13 世紀代の四耳壺が鰐淵寺川南区から多く出土し、経筒として利用された可能性がある。

国産陶磁器の中で多数を占めるのは、備前焼 1,184 点（78.2%，国産陶磁器全体に対する割合）である。次いで、壺器系陶器（越前焼・常滑焼を含む）186 点（12.3%）、中世須恵器 107 点（7.1%）、瀬戸・美濃焼 37 点（2.4%）であった。

備前焼には、貯蔵用の大甕や壺に加え、擂鉢や捏鉢などの調理用具がある。とくに、等渕院南区では 15 世紀～16 世紀の備前焼の多さが目を引く。備前焼の茶碗（等渕院南区出土）は、鰐淵寺が茶を親しむ文化を受容していた証である。

鰐淵寺と同じ山林寺院として知られる鳥取県大山僧坊跡の発掘調査の遺物と比較してみると、大山僧坊跡では、貿易陶磁器の中で多数を占めるのが青磁（61%）であり、国産陶磁器では越前焼を中心とした壺器系陶器（59%）であった。大山僧坊跡の最盛期は、遺物のピークから 14 世紀後半～15 世紀前半と考えられており、その年代幅から 14 世紀前半頃～15 世紀後半頃までの土地利用が想定されている（大山町教委 2011）。

鰐淵寺は、遺物のピークが大山僧坊跡と違い、2 つのピークで認められる。第 1 のピークは、12 世紀代の白磁が、発掘調査をした根本堂地区の北側にあたる和多坊跡（A24）と、南端にあたる等渕院南区（A38）の周辺に集中する。これは、北院と南院に分かれていた時期に相当する。

第 2 のピークは、15 世紀～16 世紀の備前焼である。備前焼は貯蔵用の甕類が中心で、根本堂地区の上段平坦面から中段平坦面にかけて多い。南北両院が統一され、根本堂を中心に隆盛を誇った時期にあたる。

2 土師器について（第 188 図、図版 71）

島根県における中世土師器の研究は、これまで廣江耕史氏（廣江 1992）や橋本久和氏（橋本 1995）によって概要が示され、さらに八峰興氏（八峰 1998）が鳥取、島根において地域差および併行関係か

ら中世土器の変遷を試みている。対象とした資料は、松江周辺の遺跡のものが多く、出雲周辺の状況が捉えにくかった。しかし、近年、高橋周氏（高橋 2013）が出土例の増加しつつある出雲平野の遺跡を取り上げたことによって、土師器研究は新たな展開をみせている。

ここでは在地系土師器の杯と皿の分類・編年を行ってみたい。ただし、今回の発掘調査は境内のごく一部しか調査していない。よって、今後新たな分類も予想されるため、ここでは試案として提示する。

（1）土師器の分類（第188図）

取り上げる資料は、分布調査の採集遺物および発掘調査を行った和多坊跡、等淵院南区、鰐淵寺川南区の出土遺物である。それぞれ全遺物の中で土師器が占める割合は、分布調査：64%、和多坊跡：82%、等淵院南区：80%、鰐淵寺川南区：95%である。

ここでは、実測あるいは復元が可能な遺物について、器形の特徴や法量、調整等から分類した。杯については、A～G類、皿については、A～E・G・H類とした。なお、杯の底部切り離しはすべて回転糸切りである。

① 杯

A類 口径 16.5cm 前後。体部は逆「ハ」字状に直線的に立ち上がる。外面は口クロ痕が明瞭である。

B類 口径 15.6cm 前後。体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部が外反気味となる。外面は口クロ痕を残す。器壁が厚いものと薄いものがある。

C類 口径 14.2cm 前後。体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部がやや内傾する。外面は口クロ痕を残す。器壁はやや厚い。

D類 口径 11.5cm 前後。杯C類より口径が小さく、器高が低くなる。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部もやや内傾する。杯C類の名残りか底径が小さく、体部が逆「ハ」字状に開くものもある。器壁はやや厚い。

E類 口径 12.1cm 前後。杯D類より口径が大きく、体部は直線的に逆「ハ」字状に立ち上がる。器高が低い。口縁端部は薄く引き出される。

F類 口径 14.8cm 前後。杯E類より一段と口径が大きくなり、体部は大きく逆「ハ」字状に立ち上がる。口縁端部は薄く引き出される。

G類 口径 18.4cm 前後。杯F類より口径がさらに大きく開き、端部にむかって薄くなる。

② 皿

A類 口径 9.9cm 前後。体部は逆「ハ」字状に直線的に立ち上がる。

B類 口径 9.4cm 前後。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反気味となる。

C類 口径 8.2cm 前後。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや内傾する。

D類 口径 7.0cm 前後。体部は内湾気味に立ち上がるものの、短く直線的に立ち上がるものがある。

E類 口径 7.8cm 前後。体部は内湾気味に立ち上がり、D類より口径が大きくなる。

G類 体部は内湾気味に立ち上がるものの、直線的に逆「ハ」字状に立ち上がるものがある。杯F類より口径が小さく、器高が低くなり、杯が小型化するタイプである。口径、器形、器壁、底部調整

等の特徴から5つに区分した。

- G1 口径12.0cm前後。器壁は厚く、底部は回転糸切りである。
- G2 口径9.9cm前後。器壁は厚く、底部は回転糸切り後、ナデ消すものが多い。
- G3 口径8.3cm前後。器壁は厚く、底部は回転糸切り後、ナデ消すものが多い。
- G4 口径7.5cm前後。器壁は厚く、底部は回転糸切り後、ナデ消すものが多い。
- G5 口径7.5cm前後。器壁は薄く、底部は回転糸切り後、ナデ消すものが多い。

なお、G2類とG4類には、口縁部近くに沈線をもつものがあり他に類例がない⁽¹⁾。G3類とG4類には内面見込みがくぼむものがある⁽²⁾。

H類 体部は短く外傾して立ち上がり、外反するものもある。口径と底径の差があまりなく、器高が低い。底部の切り離しは、回転糸切りと静止糸切りがある。ナデ消すものが多い。口径、器形、底部調整等から4つに区分する。

- H1 口径10.9cm前後。体部は短く外傾する。底部は回転糸切り後、ナデ消すものが多い。
- H2 口径7.5cm前後。体部は短く外傾する。底部は回転糸切り後、ナデ消すものが多い。
- H3 口径9.3cm前後。体部は外反して立ち上がり、底部周縁はナデにより絞り込む。底部は静止糸切りが多く、ナデ消すものが多い。
- H4 口径6.8cm前後。体部は外反して立ち上がり、底部周縁はナデにより絞り込む。底部は静止糸切りが多く、ナデ消すものが多い。

(2) 土師器の時期（第188図）

在地系土師器の杯・皿の分類を試みたが、今回の調査では陶磁器等と共に伴する例がなく、確実な時期を与えることができない。しかし、出雲平野周辺の他の出土例を参考にしながら時期を推測してみたい。なお、16世紀までの編年や時期は、高橋氏の時期変遷試案（以下、高橋1期～6期とする）を参考とした（高橋2013、5～20頁）。

唯一、土師器の一括資料として、和多坊跡出土の土器溜りSX119の杯・皿を取りあげることができる。これらの土器は、本土師器分類試案（第188図）の杯D類、皿D類にあたる。時期については、小路西遺跡B2区土坑9（間野1999 第135図）や古志本郷遺跡K区SEO1（平石他1999 第51図）の出土例や高橋3期に類似する。ただし、一括資料には古い要素もみられることから、ここでは13世紀後半に位置付けておく。

杯D類より先行するのが、杯A～C類、皿A～C類である。杯A類、皿A類とも、体部が逆「ハ」字状に直線的に立ち上がり、ロクロ痕が明瞭である。天神遺跡第9次SK06（岸1999 第22図）の出土例から12世紀代とみられる。これらは、高橋1期古段階に対応する。

杯B類とC類は、ともに体部はゆるやかに内湾して立ち上がり、杯B類は口縁部が外反気味、杯C類はやや内傾するのが特徴である。杯B類は、天神遺跡第9次SK04出土例（岸1999 第16図）から12世紀後半～13世紀初め、杯C類は、やや新しく13世紀前半と考えられる。皿BとC類も各杯類に対応する。これは、高橋1期新段階から2期に対応する。

杯E類は、杯D類より体部が直線的に逆「ハ」字状に立ち上がり、器壁が薄い。下古志遺跡G区

類	杯	皿	時期
A			12世紀
B			12世紀後半 13世紀初め
C			13世紀前半
D			13世紀後半
E			13 14世紀
F			15 16世紀
G	1 2		16世紀中頃～後半
H	1 2 3 4	3 4	17世紀以降
		1 2 3 4	16世紀後半
		1 2 3 4	17世紀中頃以降



第188図 鰐淵寺の土師器（杯・皿）分類表（試案）

SK22 出土例（三原 2001 第 44 図）から 13 世紀～14 世紀とみられる。皿 E 類も同様な時期である。これは、高橋 4 期新段階に対応する。

杯 F 類は、杯 E 類より口径がさらに大きく、体部は大きく逆「ハ」字状に立ち上がる。築山遺跡 5 区土器溜り出土例（原 2009 第 97 図）から 15 世紀～16 世紀と思われる。これは、高橋 6 期古段階に対応する。

杯 G 類は、杯 F 類より体部が大きく開くもので、姫原西遺跡 C 区 3 号古墓出土例（足立 1999 第 51 図）から 16 世紀後半と思われる。これは、高橋 6 期新段階に対応する。

皿 G1 類と皿 G2 類は、杯 F 類と比べ一層、口径が短く、器高が低く皿型化する。出雲平野ではまとまって出土しないが、器形が類似する鹿嶋山経塚出土品（松本他 2002 図 37）に京都系土師器皿が伴うことや姫原西遺跡 C 区 3 号古墓の出土例から 16 世紀中頃～後半と考えられる⁽³⁾。

なお、杯 G 類と皿 G1 類とは、姫原西遺跡 C 区 3 号古墓で共伴することから杯皿のセット関係をなすものと思われる。

皿 G3 類と皿 G4 類は、皿 G1 類と G2 類と器形は似るが小型である。出土例が少ないが、青木遺跡 1 区伊佐波神社跡出土例（伊藤他 2004 第 68 図）から 17 世紀以降に位置付けられる。

皿 H1 類は、短く外傾して立ち上がる体部が特徴で、姫原西遺跡 C 区 1 号古墓（足立 1999 第 45 図）の例から、16 世紀後半頃と考えられる。皿 H2 類は、外反して立ち上がる底部周縁はナデにより絞り込むのが特徴で、余小路遺跡 5 号溝出土例（宮澤他 2007 第 165 図）から 17 世紀中頃以降とみられる。

以上のように鰐淵寺の土師器は、今回の分布調査と発掘調査により 12 世紀から 17 世紀まで途切れることなく連綿と続くことが知れた。今後の土師器研究の一助になることを期待したい。

3 時期別にみた遺物の傾向（第 32・33 表）

陶磁器・土師器を時期別にみると、以下のようになる。

11 世紀までの遺物として、甕を中心とした古代須恵器や若干ではあるが単純口縁をもつ土師器甕、高台付の土師器などがある。発掘調査では古代の遺構を確認するまでには至らなかったが、分布調査により開山堂をとりまく地域で古代須恵器がまとまって採集されたのは、古代以来一つの拠点となっていた可能性を示唆している。

12 世紀代は白磁が中心で、分布調査や和多坊跡、鰐淵寺川南区で多い。とくに A 地区に多く分布している。松露谷墓地群でも白磁碗があり、堂宇などの何らかの施設があった可能性がある。中世土師器は和多坊跡、鰐淵寺川南区から杯、皿が若干出土しているのみである。

13 世紀～15 世紀にかけては、出土量が全体的に少なくなる。ただし、等瀬院南区と鰐淵寺川南区は同じくらい、和多坊跡は半減し、地区によって差がある。13 世紀は和多坊跡から龍泉窯系青磁、中国褐釉陶器、等瀬院南区から同安窯系青磁、鰐淵寺川南区から四耳壺の可能性がある褐釉陶器がまとめて出土する。国産陶磁器では東播系、龜山系須恵器が各地で出土するほか、等瀬院南区では越前焼が出土、分布調査では常滑焼、越前焼が採集されている。

中世土師器では和多坊跡でWT1期を決める手掛かりとなった土器溜り（SX119）が重要である。13世紀後半頃の杯、皿の一括資料である。

14世紀以降についてみると、14世紀後半～15世紀前半にかけて、青磁（14世紀後半～15世紀初め）、瀬戸・美濃焼（14世紀後葉～15世紀中頃）、珠洲焼（14世紀末～15世紀前半）がみられる。14世紀～15世紀の中世土師器は少ない。

15世紀後半は、青磁（15世紀後半～16世紀前半）や青花（15世紀後半～16世紀前半）が主流となり、国産陶磁器は14世紀代までの越前焼と常滑焼から、15世紀代以降は備前焼に取って代わる様子がうかがえる。褐釉陶器も16世紀代のものが、鰐淵寺川南区で多く出土している。中・近世土師器は在地系の皿と京都系の皿の出土量が増える。16世紀中頃から17世紀代の在地系の皿は、F8、F9で集中して採集される。中には線刻により文字を記した皿もあり、信仰の一端がうかがわれる。京都系土師器皿も16世紀中頃から後半が中心である。

陶磁器の時期別傾向をみると、鰐淵寺では12世紀と16世紀にピークがくる。中世土師器についても同様の傾向がみえ、13世紀～15世紀は、出土量が極端に減る傾向である。先に第5章第6節で示した第1期造成および第3期造成に相当する時期は、遺物でもおさえることができるが、第2期造成については、対象となる遺物が少ない。今回の調査が主にトレンチ調査であったために、偶然の傾向なのか、そうではないのか、今後の発掘調査委ねたいと思う。

（穴道年弘）

註

- (1) G2類（第51図7）とG4類（第51図10）が該当する。高橋周による。
- (2) G3類（第51図12）とG4類（第51図19・20）が該当する。廣江耕史氏により、いずれも新しくなる可能性を指摘していただいた。
- (3) 皿G類については、実際には杯か皿の区別が困難であるため分類表では、杯・皿の中間にいた。今後、類例の増加を待って検討したい。

参考文献

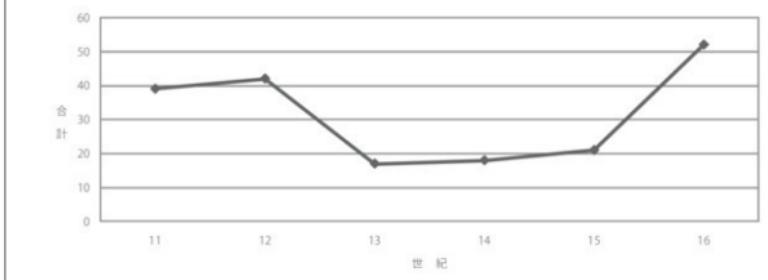
- 岸 道三 1999『天神遺跡第9次発掘調査報告書』出雲市教育委員会
 橋本久和 1995『山陰『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
 原 俊二 2009『築山遺跡』Ⅲ出雲市教育委員会
 大山町教育委員会 2011『大山僧坊跡調査報告書』
 松本岩雄他 2002『大社町史』大社町
 三原一将 2001『下古志遺跡』出雲市教育委員会
 八峰 興 1998『山陰における中世土器の変遷について』『中近世土器の基礎研究』XⅢ

第32表 鰐淵寺採集・出土遺物一覧表

調査区 種別	分布調査		和多坊跡		等測院南区		鰐淵寺川南区		合計	
	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
白磁	96	1.07%	59	0.99%	32	0.52%	117	1.53%	304	1.06%
青白磁	3	0.03%	0	0.00%	2	0.03%	2	0.02%	7	0.02%
青磁	78	0.88%	5	0.08%	37	0.60%	22	0.28%	142	0.45%
中国陶器	2	0.02%	11	0.18%	18	0.29%	63	0.83%	94	0.32%
朝鮮系陶器	6	0.07%	3	0.05%	7	0.12%	1	0.01%	17	0.05%
青花	15	0.16%	5	0.08%	28	0.47%	16	0.21%	64	0.22%
古代須恵器	35	0.39%	9	0.15%	3	0.04%	14	0.19%	61	0.18%
中世須恵器	52	0.58%	17	0.21%	15	0.25%	23	0.30%	107	0.31%
常滑焼	3	0.03%	0	0.00%	5	0.09%	0	0.00%	8	0.04%
越前焼	1	0.01%	0	0.00%	3	0.04%	0	0.00%	4	0.10%
備前焼	626	6.95%	6	0.10%	536	8.76%	16	0.21%	1,184	4.03%
瀬戸・美濃焼	23	0.27%	4	0.06%	7	0.12%	3	0.04%	37	0.13%
窯器系陶器	114	1.31%	25	0.41%	2	0.03%	33	0.42%	174	0.42%
中近世土師器	579	63.71%	4,894	81.54%	4,882	79.80%	7,301	95.09%	22,826	80.06%
土師質・瓦質土器	81	0.93%	0	0.00%	48	0.78%	17	0.22%	146	0.41%
中世瓦	251	2.79%	134	2.25%	287	4.69%	16	0.21%	688	2.41%
近世瓦	36	0.40%	51	0.85%	54	0.88%	0	0.00%	141	0.40%
近世磁器	1,257	13.95%	595	9.96%	108	1.78%	14	0.19%	1,974	6.50%
近世陶器	563	6.26%	176	2.95%	22	0.35%	10	0.13%	771	2.71%
銭貨	13	0.14%	8	0.14%	17	0.27%	9	0.11%	47	0.15%
石製品外	5	0.05%	0	0.00%	5	0.09%	1	0.01%	11	0.03%
合計	9,009	100.00%	6,002	100.00%	6,118	100.00%	7,678	100.00%	28,807	100.00%

第33表 陶磁器の時期別傾向（年代が判明するものに限る）

世紀 地区	11	12	13	14	15	16
分布調査	20	18	8	13	13	7
和多坊跡	1	7	2	1	1	6
等測院南区	3	2	3	1	1	5
鰐淵寺川南区	15	15	4	3	6	34
合計	39	42	17	18	21	52



第4節 鰐淵寺の京都系土師器皿

はじめに

鰐淵寺の発掘調査および分布調査で確認された京都系土師器皿は破片数にして約350点を数える⁽¹⁾。この数は富田城跡や松江城ないしその周辺遺跡の出土数に匹敵し、これまで出雲東部地域に偏在する傾向にあった京都系土師器皿の出土状況の図式を一変させるものといえる。本稿においては、鰐淵寺出土の京都系土師器皿の様相を捉えるとともに、その出現の背景について考えたい。

1 出雲地域における京都系土師器皿の広がり（第189図）

京都系土師器皿とは、京都で生産された手づくね成形の土師器皿を各地域で模倣したものという。16世紀に戦国大名の主導下で本格的な模倣生産が始まり、室町幕府（將軍家）に連なる当主の権威を顯示し、自己の領国支配の正統性を具現する儀礼装置の一つとして導入された（服部2003）。その導入時期は各地域で異なるが、出雲地域では16世紀半ばに尼子氏によって導入される。天文21年（1552）、尼子晴久が中国六か国守護職となり、室町幕府体制の中で安定した地位を得たことと重なる時期である。尼子氏滅亡後も、その生産は在地化して続けられ、松江城では新たな特徴をもつ一群が出現することから、京都系土師器皿の生産には支配者層による一定の規制が働き続けたことを窺わせる（中井2011）。

次に、出雲地域における京都系土師器皿の出土状況を概観したい（第189図）。出土した遺跡の分布を見ると、富田城跡や松江城を中心に東部地域で面的な広がりを見せる一方で、宍道湖南岸や西部地域の北山山系周辺でも出土が認められる。その年代観においては、富田城跡（1）や梨柿園（3）出土資料が尼子氏導入当初の資料と位置付けられるが（中井2001a・廣江2013）、西部地域でも同様の特徴をもつ資料が修理免本郷遺跡（24）から出土している（高橋2014）。したがって、その分布は出雲地域の平野部ないし海岸部の広範囲に及び、その展開においては導入後間もなくして一定の広がりをもった可能性が考えられよう。

2 京都系土師器皿と献盃儀礼（第190図）

京都系土師器皿の用途は、その導入が大名権力との関わりで論じられることから、武家の献盃儀礼の普及に関連するものとして理解されることが多い。なぜなら、土器を式正の器として、献盃儀礼は当時の武家社会の慣例作法となっていた式三献以下の飲食・饗應儀礼を基に始まるからである。富田城跡や松江城およびその周辺遺跡で出土する京都系土師器皿は武家の献盃儀礼に関わるものとして理解して良いであろう。しかしながら、献盃儀礼は必ずしも武家に限定されたものではなかった。

16世紀の地域社会の献盃儀礼については、中井淳史氏による『長楽寺永禄日記』を通した研究がある（中井2001b）。『長楽寺永禄日記』とは、上野国長楽寺の僧賢甫義哲が永禄8年（1565）に記した日記である。その日記には9か月間で157件の饗應記事があり、寺院社会でごく日常的に献盃儀

礼が行われ、僧侶と武士、僧侶と百姓といった異なる階層の交流においても献盃儀礼が行われていたことが明らかとなった。いずれも主人と客、身分の高い者と低い者が同じ杯で酒を交互に飲む所作がなされ、その道具として土師器皿が使われていたのである。

このような上野國長楽寺での献盃儀礼の様相は、鰐淵寺においても同様であった可能性が高いといえる。江戸時代前期の出雲大社上官、佐草自清の日記「御造営日記」寛文4年（1664）1月20日の記事には、鰐淵寺僧が下山し、北島国造家で献盃儀礼を行ったことが記されている（西岡2013）。

經、鰐淵寺僧下山（松本坊之隱居松源院、一脇ニテ七人）、会所ニテ経過、如_例年_北嶋殿へ被レ参、
義式如_前々_、併恒孝去冬ヨリ御病氣ニテ御出無レ之、三こんめの御佐草御名代仕、何も僧衆ヘ
酌ニテ酒ヲすゝむる、七こん過納レ之、蓋佐草御名代ニたべ、此時僧衆いつものことく朗詠アリ、

正月20日の鰐淵寺僧の下山による大社神前での大般若經転読は、中世以来行われていた恒例行事で、この記事はこれに伴う献盃儀礼が鰐淵寺と出雲国造家との間で行われていたことを示している⁽²⁾。この献盃儀礼は「義式如_前々_」とされ、寛文の段階において定例化していたことを窺わせる。管見の限りにおいて、同儀式に関する記述は慶長3年（1598）の北島国造家年中行事覚書（「北島殿御家に有来儀おほえのまゝに書立事」佐草家文書）が最も古く（山崎1997）、少なくとも16世紀末には鰐淵寺において献盃儀礼が行われていたようである⁽³⁾。したがって、鰐淵寺で出土した大量の京都系土師器皿は、同寺での献盃儀礼との関係において理解される可能性が高いと言える。

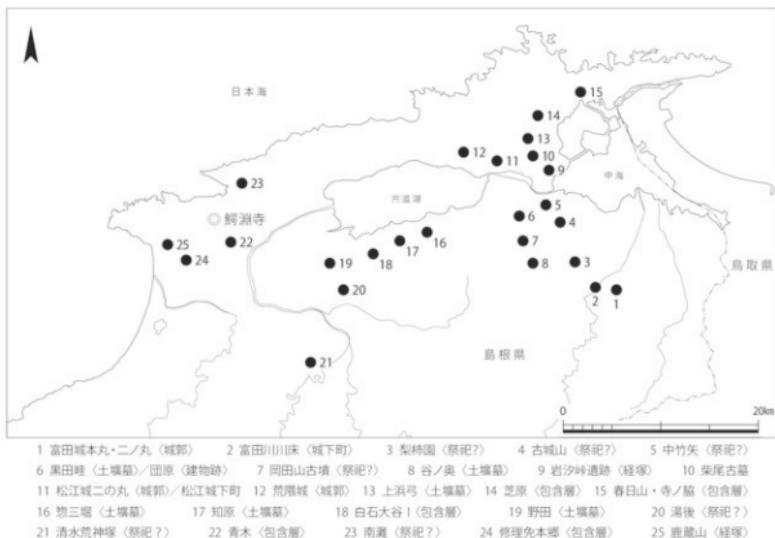
一方で、京都系土師器皿と仏教との観点からすると、出雲地域で同時期の土葬墓・火葬墓の副葬品や経塚遺構に伴って出土する事例が多いことも注目される（第189図）。こうした事例は献盃儀礼との関係性が低く、葬送供養もしくは仏教信仰に関わる儀器として捉えるべきである。出雲地域の近世墓では在地系の土師器皿を副葬するものが多く、在地系と京都系の別がどのような基準に基づくのか検討を要するが、京都系土師器皿の副葬例は出雲全城を通して見られる。

すなわち、出雲地域における京都系土師器皿の使用は武家に限定されず、寺院社会では献盃儀礼や葬送・信仰など多様な場面で使用された可能性があることも注意すべきであろう。

3 鰐淵寺の京都系土師器皿の諸相（第190～193図）

鰐淵寺の発掘調査および分布調査では、5地区（A24, C20, F1, F2, F8）で破片数約350点の京都系土師器皿が確認された。第190図にその分布状況を示し、第193図は口径および形態的な分類でまとめたものである。

まず、出土の分布状況を見ると、鰐淵寺川南区F2で226点と最も多くの京都系土師器皿を確認した。次いで、その背後のF8斜面で117点を確認した。すなわち、鰐淵寺の京都系土師器皿はほとんどが鰐淵寺川南区で見つかったもので、現・山王七仏堂付近ないし北側の平坦地において単発的あるいは継続的な儀礼が行われたことによる所産である可能性を指摘できる。この他、和多坊跡（A24）で6点、松露谷墓地II群（C20）で1点を確認した。



第189図 出雲地域の京都系土師器皿出土遺跡（1:500,000）



第190図 鰐淵寺境内における京都系土師器皿分布図（1:4,000）

確認された京都系土師器皿を口径で分類すると、およそ11～13cmと7～9cmの2法量に分かれる。本稿では前者を皿I、後者を皿IIとする。

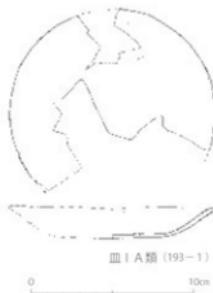
皿Iは、底部を平らにするもの（A類）、丸底もしくは丸みをもつ底のもの（B類）に分かれる（第193図）。

皿IA類の1・2は、口径12.5cm程度で、器壁は2mmと薄い。器形は逆台形で、直線的に立ち上がる。底部内面を一方向にナデたのち、体部内面から口縁部外面にかけてヨコナデする。1には、体部内面のヨコナデを一周させたのちに反対方向へ引き戻しながら端部へナデ抜く、「2」字状ナデ上げの痕跡が残る（第191図、中井2011）。ただし、当該期の京都系土師器皿に見られる底部内面端の圏線は認められない。色調は灰白色で、黒斑を有する。なお、皿IA類は鰐淵寺川南区F2で多数見つかっており、同様の特徴をもつ破片が同区F8でも確認される。また、和多坊跡出土の3は、体部内面から口縁部外面にかけてのヨコナデが認められる。器壁は4mm程度と厚く、色調はにぶい黄橙色で、1・2よりは時期が下るものと考えられる。

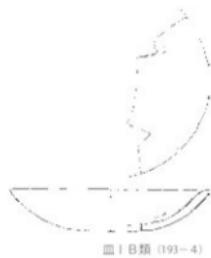
皿IB類（第193図4～8）は口縁端部を丸くおさめるもの（a類）、外反させるもの（b類）に分かれる。口径は11～12cm程度で、器壁は4～5mm程度。色調は浅黄色ないし浅黄橙色、4・6・8には黒斑が認められる。a類の4は底部内面端に浅い圏線が認められ、「2」字状ナデ上げの痕跡も残る（第192図）。口縁部外面のナデは認められないが、口縁部内面を2～3mm程度ナデしている。また、5は底部内面をナデたのち、体部内面をヨコナデするが、底部内面端の圏線は認められない。一方、b類は口縁端部のやや下の位置を強くナデすることで、端部を外反させる。ナデ幅は1～1.5cmと広い。7には「2」字状ナデ上げの痕跡が残る。

皿IIも、底部を平らにするもの（A類）、丸底もしくは丸みをもつ底のもの（B類）に分かれる。

皿IIA類（9～13）は直線的に立ち上がり、底部と体部の境を明瞭にするものが多い。口縁部の形態は丸くおさめるものと外反気味となるものが認められるが、いずれも口縁端部内外面をナデする調整は同じで、形態差として弁別できる程度の差違はない。色調は灰白色ないし浅黄橙色で、9・10・12は黒斑を有する。9～11は口縁端部内面に浅い凹線をつくる。9は右回りに体部内面から端部へと斜めに強くナデ抜く、「斜行ナデ上げ」の痕跡を確認できる（中井2011）。また、口縁部外面に等間隔に刺突痕が見られる。富田城本丸跡出土資料にも同様のものがある⁽⁴⁾。13にも「斜行ナデ上げ」の痕跡がある。10・11は体部内面をナデたのち、底部内面をさら



第191図 京都系土師器皿(1)



皿I B類 (193-4)



第192図 京都系土師器皿(2)

皿 I

A類



B-a類



B-b類



皿 II

A類



B類



皿 III



第193図 鮎淵寺の京都系土師器皿の分類図

にナデている。

皿II B類（14～19）についても、口縁部の形態が外反気味となるもの（14・15）、丸くおさめるもの（16）、内湾気味（17～19）に分かれるが、調整手法は同一であり形態差としては分類しない。色調は15が灰白色であるほかは、にぶい橙色を呈する。15・17・18に黒斑、19には焼成時に赤変した色ムラが認められる。15・17は口縁端部内面に浅い凹線をつくる。18は「斜行ナデ上げ」の痕跡が認められるが、ナデ上げが口縁端部まで達していない。19は体部内面のナデを一周させて、そのまま口縁端部へ上げる。「2」字状ナデ上げのような引き戻す形にはなっていない。

皿III類（20～22）は器壁が6～7mmと特に厚いタイプである。色調は橙色で、焼成は硬い。

4 鰐淵寺の京都系土師器皿の特徴（第193・194図）

ここでは、鰐淵寺の京都系土師器皿の特徴をまとめることとする。

皿I A類は逆台形状で、中井淳史氏の分類（中井2011、以下、「中井分類」）・京都産土師器皿Kを模倣したものと考えられる。特に第193図1・2は、その特徴が富田城本丸跡で出土した口径と底径の比が近いタイプの皿に近似する⁽⁵⁾。また、1・2と胎土・焼成が似る底径4～5cm、器壁の厚さ3～4mmの底部片が6点出土している（第194図）。底部内面のヨコナデと内面端に浅い園線が認められることから京都系土師器皿と考えられ、法量や調整の特徴からして、富田城本丸跡で出土した底径が小さいタイプの皿と同様のものとみられる⁽⁶⁾。このように皿I A類は、器形、器厚や調整が富田城本丸跡出土資料に近似し、色調においては灰白色や白色を呈する梨柿園出土資料の一部と同様であり、富田城周辺の生産集団との関係が注目される。

一方で皿I B類は、皿K（平底）と京都産土師器の小型品の器形である中井分類皿I（丸底）とを折衷した形状で、皿Kに施されるべき「2」字状ナデ上げや底部内面端の園線が認められるなど、2次的な模倣を示す特徴が認められる。器壁は4mm前後とA類に比べて厚い。

また、皿II A類は、平底ではあるが体部の立ち上がりは丸みをもち、京都産土師器の皿Iと皿Kの折衷した形状である。皿Iに見られる「斜行ナデ上げ」を施すものもある。皿I B類と同じく、器形と調整の関係が京都産土師器と一致しない。器壁は4～5mm程度。皿II B類は京都産土師器皿I（丸底）の模倣。器壁は4～5mm程度で、「斜行ナデ上げ」も一部に認められる。

なお、底部内面の園線について、17世紀段階の出雲地域の京都系土師器皿に見られるような意図的に施されたものは、鰐淵寺の京都系土師器皿すべての類型を通しあんど認められない。

上記の諸特徴をまとめると、鰐淵寺出土の京都系土師器皿のうち、皿I A類は富田城本丸跡、皿I B類・皿II類は富田城二の丸・三の丸跡出土の資料と同タイプと位置付けることができる。また、皿III類は器壁が特に厚く、一部にロクロによる調整も認め



第194図 京都系土師器皿(3)

されることから、17世紀以降の所産である可能性が高い。

5 まとめ—鰐淵寺における京都系土師器皿出現の時期と背景—

以上、鰐淵寺の京都系土師器皿を検討したが、皿ⅠA類が富田城本丸跡ないし梨柿園出土資料と同タイプと考えられ、尼子氏が京都系土師器皿を導入したほぼ同時期（16世紀半ば）に、鰐淵寺で京都系土師器皿が使用され始めたことを示唆するものといえる。そして、土師器皿の諸特徴からして、富田城周辺の生産集団によるものが鰐淵寺に流入した可能性が高いと考える。また、皿ⅠB類・皿Ⅱ類は富田城二の丸・三の丸跡出土資料と同タイプで、色調や胎土もよく似ることから、同様の生産集団との関係が想定される。

土師器皿の年代観については、鰐淵寺資料のほとんどが皿Ⅰ・Ⅱ類で、およそ16世紀半ばから後半までの間で捉えられると考える。17世紀段階とみられる皿Ⅲ類も認められるが、その数は少ない。

このように鰐淵寺の京都系土師器皿の様相を見ると、その出現の背景には鰐淵寺と尼子氏の関係を推定することができる。永正6年（1509）の鰐淵寺挖書制定以降、尼子氏は鰐淵寺の上級権力として結び付きを強めていたことから、尼子氏による京都系土師器皿導入の影響が直接的に及んだ可能性が考えられる。京都系土師器皿の導入は献盃儀礼の受容を示唆し、慶長3年の年中行事覚書や寛文4年の「御造営日記」に見える鰐淵寺僧による献盃儀礼の起源とみることもできよう⁽⁷⁾。

永禄5年（1562）の毛利氏の出雲国進入以後、鰐淵寺は毛利氏との関係を強めるが、16世紀後半以降とみられる京都系土師器皿も出土しており、毛利氏との関係においても継続的に使用されたと考えられる⁽⁸⁾。他方、17世紀以降になると、鰐淵寺全体として16世紀代では少なかった在地系土師器が多数を占めるようになり、京都系土師器皿は見えなくなる。この組成の変化は政治的変化に伴う可能性があろう。ただし、寛文4年の日記からすると、17世紀以降も献盃儀礼が行われた可能性は高いが、献盃儀礼では京都系土師器皿は使われていなかつたと見るべきだろう。

末筆ながら、本稿作成に際し資料実見のご協力を頂いた、安来市教育委員会舟木聰氏に記して謝意を申しあげる次第である。

（高橋 周）

註

(1) 「約350点」とは、口縁部および底部の破片の総数である。

(2) 『長楽寺永禄日記』でも献盃儀礼の多くは正月に行われている。また、同『日記』では献盃儀礼において、冷酒に際しては「土器杯」（土師器皿）、燭酒に際しては「ヌリモノノ杯」（漆器椀）を使い分けられていた（中井2001a）。

(3) 鰐淵寺と北島国造家との間での献盃儀礼からすると、出雲大社においても京都系土師器皿が導入された可能性がある。従来の発掘調査においては確認されていないが、今後注意する必要があろう。

(4) 中井2001論文 図2-5

(5) 廣江2013論文 第2図1~7

(6) 廣江2013論文 第2図8~21・23

(7) 鰐淵寺は延暦寺と本末関係にあり、この関係を通した献盃儀礼の流入の可能性も考えられる。しかしながら、京都系土師器皿の特徴が尼子氏導入期と一致することから、献盃儀礼は尼子氏を通じたものと解すべきだろう。

(8) 毛利氏と京都系土師器皿との関係については、郡山城などの関連遺跡でほとんど出土しないことから、積極的な使用には否定的な見解が示されている。そうした中で、毛利氏が永禄5年に築城したとされる荒隈城跡（松江市）では、饗応後の廃棄とみられる京都系土師器皿が見つかっている（廣江2013）。このことから、鰐淵寺と毛利氏との関係においても、既に定着していた京都系土師器皿の使用が継続的に行われた可能性が高い。したがって、天正5（1557）年の毛利輝元による根本堂再建の際の饗応等において使われたことも考えられよう。

参考文献

- 高橋 周 2014 「中世出雲西部における底部ケズリ土師器と京都系土師器皿」『出雲弥生の森博物館研究紀要 第4集』出雲弥生の森博物館
- 中井淳史 2001a 「土師器生産体制変容の一齣—中世末期の出雲東部を中心にして—」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集』中世土器研究会
- 中井淳史 2001b 「16世紀地域社会における献盃儀礼—『長楽寺永禄日記』・『色部氏年中行事』を中心に—」『日本語・日本文化』第27号
- 中井淳史 2011 「「規範」としての京都産土師器—分類・編年・製作技術—」『日本中世土師器の研究』中央公論 美術出版
- 西岡和彦 2013 「史料抄録『寛文度造営遷宮』」「出雲大社の寛文造営について—大社御造営日記の研究—」、島根県古代文化センター調査研究報告書48、島根県古代文化センター
- 服部実喜 2003 「かわらけ」小野正敏・萩原三雄編『戦国時代の考古学』高志書院
- 廣江耕史 2013 「出雲地域東部の京都系土師器皿の様相について」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター研究論集第11集、島根県古代文化センター
- 山崎裕二 1997 「近世の鰐淵寺」『出雲國 浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺

第5節 山陰の中近世瓦からみた鰐淵寺

鰐淵寺の古瓦について触れた著作はほとんどない。管見の限りでは、大正8年（1919）、香取秀真・広瀬都撰・堀江清足の3氏が山陰各地を調査した折の報文に鰐淵寺宝物一覧があり、そこに「天正以前本堂古瓦 一」の記述があるのみ（香取1920）。当時、寺宝類は宝物陳列館に置かれており、そこに瓦があったらしい。「天正以前」とあるのは、天正度の造営を念頭に置いた書きようである。

毛利輝元を大檀主とする根本堂の造営は、天正5年（1577）4月に工事が始まり、11月27日に竣工した（『鰐淵寺本堂再建棟札』科研目録No.505）。前年の天正4年（1576）と推定される『吉川元春書状』（科研目録No.491）に、本堂の瓦葺き替えを了承する旨⁽¹⁾が記されているので、この時の根本堂は瓦葺きであったとみられる。今回の調査では、分布調査と発掘調査によって多くの瓦を見出した。これらの特徴と年代について考え、鰐淵寺での瓦葺き建物を考える基礎としたい。

1 山陰の中近世瓦の研究略史

山陰の中近世瓦の研究は、ようやく手が付きだしたといつてもよい状況である。中近世瓦の報告は、1970年代から進められた松江城跡（松江市）や富田城跡と富田川河床遺跡（ともに安来市広瀬町）の発掘調査とともに始まった。だが、瓦をまとめた成果報告となると、内田律雄氏が富田城跡の朝鮮瓦をまとめたもの（内田1985）が最初だ。この瓦については、山崎信二氏も長崎県対馬市金石城跡との同範関係などを詳述している（山崎2000）。山崎氏の論考は、全国的視野から中世瓦を論じたものだが、取り上げられた山陰の中世瓦はこの1種類のみである。

2001年には松江城跡の軒瓦が、軒丸瓦・軒平瓦各10種類に分類され（飯塚2001）、二ノ丸太鼓櫓西方の番所跡土坑SK01資料によって、江戸初期に左巻き三巴紋軒丸瓦と下向き三葉紋軒平瓦があることが示された。2003年には富田城跡軒瓦の分類案が示された（舟木2003）。この中で、慶長5年（1600）の堀尾氏入封期はコビキBがあり、コビキAの瓦はそれ以前とされた。

山陰の近世瓦を総合的に編年したのは山崎信二氏（山崎2008）と乗岡実氏（乗岡2014・2015）である。山崎氏は、富田城跡、松江城跡、米子城跡、鳥取城跡の軒瓦年代の概要を示した。

富田城跡の巴文字紋軒丸瓦（富田城跡分類「以下「富」と略」II-A類）と宝珠唐草紋軒平瓦（富B-1類）を近世I・II期（1575～1591）とし、尼子滅亡（1566年）後の毛利氏支配下にあたるI期（1575～1582）「まで遡ってもよいと思う」とした。堀尾期（慶長5年（1600）～12年（1607））の瓦はコビキBの左巻き三巴紋軒丸瓦（囲線あり1種（富I-A類）、囲線なし3種（富I-B類））であり、これと軒平瓦5種（宝珠唐草紋2種（富B-2・3類）、中心飾り三葉紋3種（富A-1～3類））をあげる。山崎編年III-2期（1600～1615）の前半である。

松江城と城下町は、慶長12年（1607）に造営着手され、同16年（1611）に完成して家臣団が移住した。この時期には、下向き三葉紋を中心飾りとする2回反転唐草紋6種（乗岡「下向三葉A・B類」（乗岡2015）、松江城分類「以下「松」と略」a-1a・1b～5）があり、左巻き三巴紋軒丸瓦5種（松A-1a・1b～4類）と組む。山崎編年近世III-2期（1600～1615）の後半にあたる。

近世IV期(1615—1657)からVI期(1682—1724)の松江城跡の瓦は示されていない。近世VII期(1724—1765)のものとして、割篠唐草紋軒平瓦2種(松b—1a・1b類)と橘唐草紋軒平瓦2種(b—2・3類)があがる。後者は「大坂式」であり、一部は大坂産を含むとされる。

米子城跡の瓦について山崎氏は、吉川広家が造営に着手した慶長3年(1598)から慶長7年(1602)頃、つまり近世III—1期からIII—2期の移行期に、松江城跡と同紋の下向き三葉紋唐草紋軒平瓦がある、とする。その後は、近世IV期(1615—1657)に複線三葉紋軒平瓦があり、近世VI期(1682—1724)には均整唐草紋軒平瓦、1850年頃には均整唐草紋の赤瓦・黒瓦がある、としている。米子城跡の瓦については、山崎氏に先んじて伊藤創氏の研究があり、それを受けた佐伯純也氏が、軒丸瓦を5群12種、軒平瓦を6群9種に分類しその変遷を示した(佐伯2003)。伊藤氏は、吉川広家が米子城築造に着手した時期を慶長4~5年頃(1599・1600)とし、この時の軒平瓦を宝珠紋唐草紋とみて、三葉紋唐草紋を中村一忠期の所産としている(伊藤2009)。山崎氏とはこの軒平瓦2種の位置づけが逆転する。

鳥取城跡では、近世III—2期に桐紋中心飾の唐草紋軒平瓦があり、山崎氏は巴紋軒丸瓦との組み合合わせを推定する。鳥取城跡の近世瓦については、その後、坂田邦彦氏や神谷伊鈴氏、中原齊氏の研究がある(坂田2010、神谷・中原2011)。

最近、乗岡実氏が松江城跡の軒瓦および関連瓦を分析して、その成果をまとめた(乗岡2014・2015)。その内容については、鯉淵寺の瓦年代を論じる中で紹介したい。

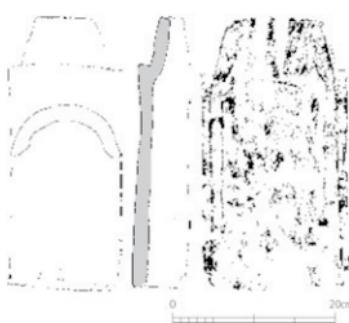
山崎氏・乗岡氏とも触れていないのが、益田氏が築造した七尾城跡(益田市七尾町・大谷町)の瓦である。益田氏は、鎌倉時代末から南北朝期にこの地(益田本郷)に拠点を定め、慶長5年(1600)までこの地を支配した。本丸跡⁽²⁾から、外区に密な珠紋を並べた左巻き巴紋軒丸瓦と唐草紋軒平瓦が、二の段からは右巻き巴紋軒丸瓦が出土し、ともにコビキAの丸平瓦をともなう(木原ほか1998)。城郭遺跡ではこの他に、鬼ヶ城跡、打吹城跡、尾高城跡、江美城跡(以上、鳥取県)、山吹城跡、浜田城跡、津和野城跡(以上、島根県)からも中近世瓦が出土しているが(佐伯2003)、紹介を略す。

城郭跡出土以外では下がり松遺跡(松江市法吉町)と佐太前遺跡(松江市鹿島町)に中世瓦がある。

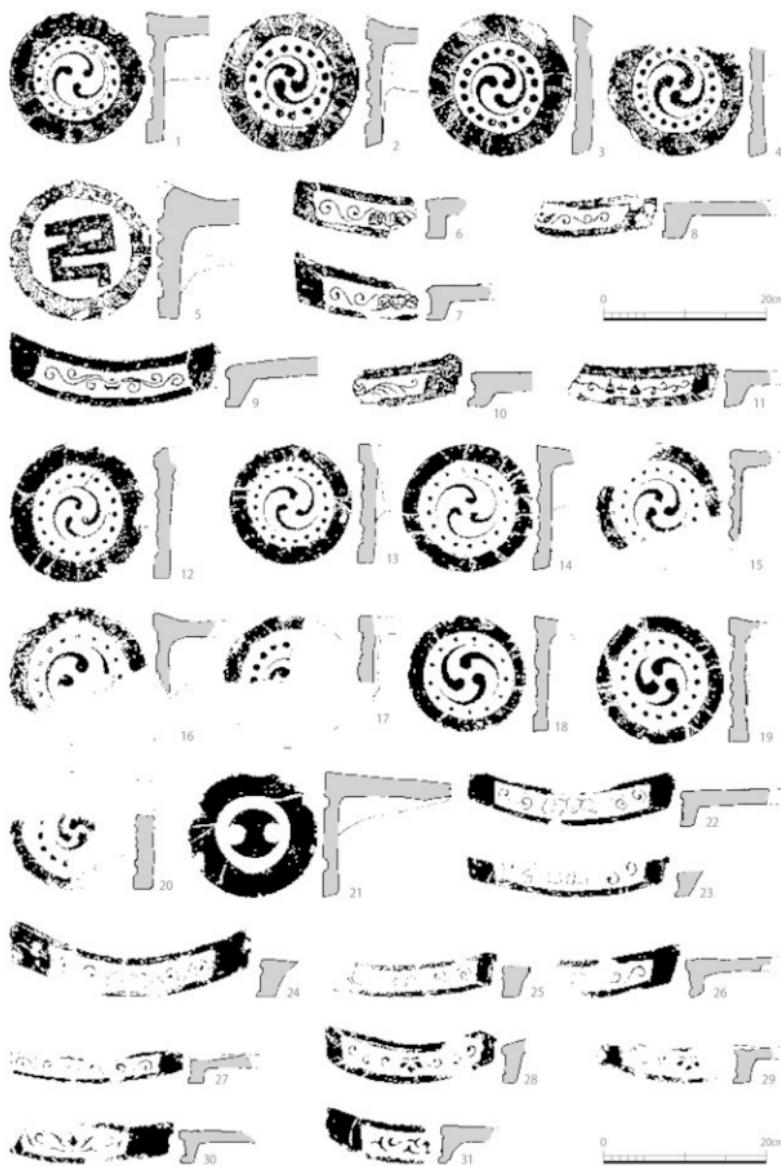
下がり松遺跡では、古墳基壇の盛土から丸瓦2本と平瓦1枚が出土した(熱田ほか2002)。

丸瓦は、四面の段部に太さ約5mmの指し縫いされた吊り紐痕が1条ある。平瓦には「⁽³⁾永十⁽⁴⁾甲戌/七月□「」の型押し銘文がある。現状では西日本唯一例(第34表)。丸瓦の製作技法と平瓦銘文からみて、山崎編年の中世II期(1210—1260)の瓦である⁽⁵⁾。山陰で確認された鎌倉時代の瓦はこれのみだが、どこで使われたかは不明。

佐太前遺跡は、「出雲二の宮」と称された佐太神社境内地に隣接する遺跡。1985・86年と2007~10年の調査で、中近世瓦が多量に出土した(赤澤1987、藤原・清水2010)。次項で紹介する。



第195図 下がり松遺跡の瓦(1:6)



第196図 富田城跡と松江城跡の軒瓦（1：6）

第34表 13世紀代の型押し年号入り瓦一覧（山崎2000により作成）

番号	年号	西暦	瓦種類	所在	寺名・遺跡名	銘文
1	文暦2	1235	平瓦	鎌倉	永福寺	文暦二年永福寺
2	正嘉2	1258	平瓦	常陸	三村山極楽寺	常州極楽寺正嘉二年
3	文永2	1265	平瓦・軒平瓦	下野	智光寺	智光寺文永二年三月日
4	文永3	1266	平瓦	大和	法隆寺	文永三年二月八日
5	文永5	1268	平瓦・軒平瓦	大和	当麻寺本堂	文永五年三月 日
6	文永10	1273	平瓦	河内	神感寺	神感寺大門/文永十年癸酉/三月上三日
7	文永11	1274	平瓦	出雲	下がり松遺跡	文永十一年/甲戌/七月廿四日
8	弘安2	1279	平瓦	下野	長福寺城跡	弘安ニ 二月

3 佐太前遺跡の中近世瓦（第197～200図）

2007～2010年調査の報告書（藤原・清水2010）は、軒丸瓦2点、軒平瓦2点、丸平瓦16点を掲載するが、これは出土資料のほんのごく一部である⁽⁴⁾。

軒丸瓦 右巻き三巴紋と左巻き三巴紋がある。右巻き三巴紋は、同範と思われる2点がある（第197図1・2）。巴紋の尾が長く伸びて隣の巴に接している。内外区をわかる圈線があるが、尾は圈線とは離れる。外区に小粒でややまばらな珠紋がある。珠紋数は14～16個と推測される。外縁は幅1.5cm前後で高さ1.2cmある。瓦当面にハナレ砂がある。1の外縁上面はヘラケズリで、瓦当裏面外周は周に沿うナデ。復元瓦当径は、1が13.2cm、2が13.5cm。

3も右巻き三巴紋と推定される。内外区を圈線で分け、外区には小粒の珠紋が並ぶ。瓦当面にはハナレ砂がある。外縁上面と瓦当側面にはミガキ調整があり、瓦当裏面外周は周に沿うナデ調整。外縁幅1.5cm、高さは1.0cm、復元瓦当径は12cm。

4は左巻き三巴紋。既報告の瓦当部（藤原・清水2010、第105図594）に丸側部が接合した。巴紋は頭部がやや大きく、尾は長く伸びる。内外区を圈線で分け、外区には推定20個の珠紋が並ぶ。外縁は幅3.3cmあり広いが、高さは0.6cmと低い。瓦当側面と裏面の外周をナデ調整する。接合された丸瓦は凹面にコビキB（鉄線切りの痕跡）がある。丸瓦の広端面と凹面先端、側面の先端には刻み目を入れられているが、凸面先端にもあるかどうかは不明。復元瓦当径16.6cm。5は外区と外縁の小片。丸瓦接合にあたり、瓦当部に刻みを入れてある。なお、焼成前に釘穴をあけた軒丸瓦の丸瓦部が2点ある（9・10）。ともに「九州タイプ」の吊り組痕をもつ丸瓦（後述する丸瓦SB類）である。

軒平瓦 3点を図示した。他に、「大坂式」の橘唐草紋が1点ある（藤原・清水2010、第72図451）。6は、既報告資料（第105図597）と同一個体の右端片を合せて示す。立体表現の宝珠紋を中心飾りとする4回反転均整唐草紋で、唐草紋は連接する。内区周囲に圈線があるが、範型の切り縮めによって左側には圈線がない。外縁は高さ0.8cm、脇幅は1.6cm。瓦当部は顎貼り付け手法による成形と推測され、凸面の顎段部に凹型台の圧痕がある。凹面はヨコヘラミガキ調整で、一部に布圧痕が残る。

7は、幅広の宝珠紋を中心飾りとする3回反転均整唐草紋軒平瓦。中心飾りの肩のあたりから唐草紋が派生し、第2・3単位はつながる。外縁は幅0.9cm、高さ0.8cm。瓦当部の成形は顎貼り付け手法。



第197図 佐太前遺跡の軒瓦と道具瓦 (1:4)

瓦当近くの凹面に凸型台の圧痕が残る。この軒平瓦は、富田城跡（安来市広瀬町）および松江城と同様で（乘岡 2015），さらに江美城跡（鳥取県日野郡江府町，伊藤・西尾 2009）とも同範⁽⁵⁾。

8は、中心飾りの不明な均整唐草紋軒平瓦。外縁は幅0.8cm、高さ1.5cm、駒幅1.6cm。瓦当部は頭貼り付け成形で、平瓦部凸面に刻み目を入れた可能性がある。

道具瓦 用途不詳の瓦も含めて述べる。11は、凸面に蛇の目状の楕円形型押し紋を施紋した瓦。丸瓦のように円筒状だが、断面「へ」字状にもみえるので、雁振瓦のように棟に伏せる瓦か⁽⁶⁾。端部の一部に面取りのヘラケズリがあり、凹面にはコビキAの痕跡がある。

12は、雁振瓦の断片。断面が「へ」字状で、凹面にコビキAの痕跡が残る。

13は、丸瓦広端を加工した輪違瓦。凹面にコビキAの痕跡あるか。左右幅8.2cm。

14は、丸瓦筒部のようだが、隅を斜めに切り落とした端部に段部がなく、内にすぼまるように細くなるので、拵瓦あるいは簾瓦の筒部⁽⁷⁾。凹面にコビキAの痕跡がある。

丸瓦 佐太前遺跡の丸瓦は、凹面のコビキ痕がコビキAかBか、吊り紐痕の有無とその種別により3種類に大別した。これを、遺跡名のイニシャルをつけてSA類、SB類、SC類と呼び分ける。

SA類：コビキAで、太い1条の吊り紐痕をもつもの。

SB類：コビキAで、細い吊り紐痕が何条も並ぶもの。「九州タイプ」の吊り紐痕。

SC類：コビキBで、吊り紐痕のないもの。

第198図1・2はSA類。1は、凹面に右上がりのコビキAと太い弧状の吊り紐痕があり、その直下にはヨコ方向に細い指し縫い痕がある。凹面両側辺に大きな面取りがある。玉縁側面の面取りのヘラケズリは、筒部隅を斜めにカットする。凸面はタテにヘラミガキ調整。2も凹面に太い吊り紐痕。

第198図3～10、第199図1～4は、SB類。佐太前遺跡ではこれが主流のようである。

3・4は胴部片。コビキAの方向は違うが調整など作りはよく似る。約1cm間隔で吊り紐痕が並ぶ。

5・6は、長さ4cm強の玉縁部をもつもの。筒部の凸面はミガキで仕上げられ、縄叩き痕が微かに残る。凹面には細い吊り紐痕が何条も並ぶ。5は、凹面に布袋の開いた状態がみえる。5の玉縁部は、側面に面取りのヘラケズリがあり、筒部端の隅に及ぶ。6は玉縁側面が欠損するが同様であろう。

7～9は、筒部凸面がミガキ仕上げだが、縄叩き痕が明瞭なもの。9によれば、玉縁長約3cmと短い。9も玉縁側面に面取りがあるが、さらにそれに並ぶ凸面側にも面取りを加えるのが特徴的である。

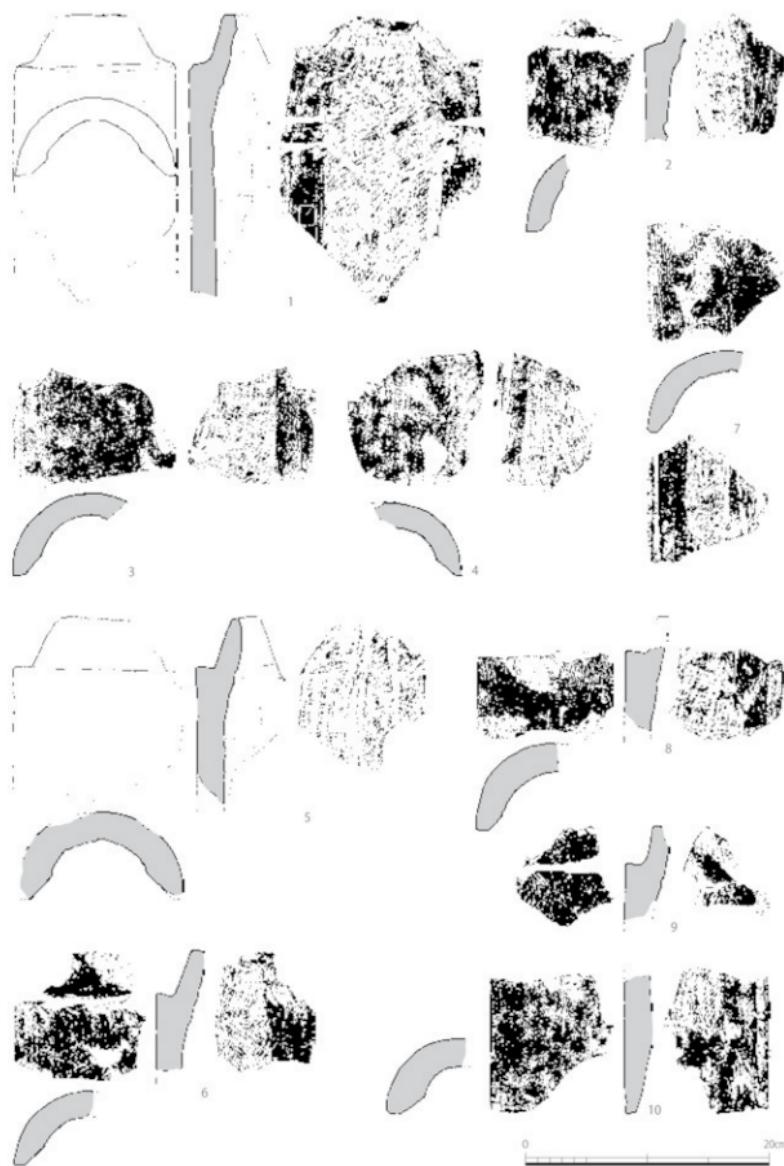
10と第199図1・2は、SB類の広端部。広端側の凹面を幅6cm前後で面取りする。2の側辺の断面形は丸みを帯びる。3は、やや大型の丸瓦の広端部。吊り紐痕はみえない。4は、SB類の吊り紐痕に加えてタテ方向の指し縫い痕を残す丸瓦片。

5・6は、コビキBのSC類。玉縁は長さ2.5cmしかない。玉縁側面の面取りは側面幅の全体に及ぶ。凹面の布袋は合わせ目が大きく開く。吊り紐痕はない。側辺の断面は角ばるもの(5)と丸いもの(6)がある。

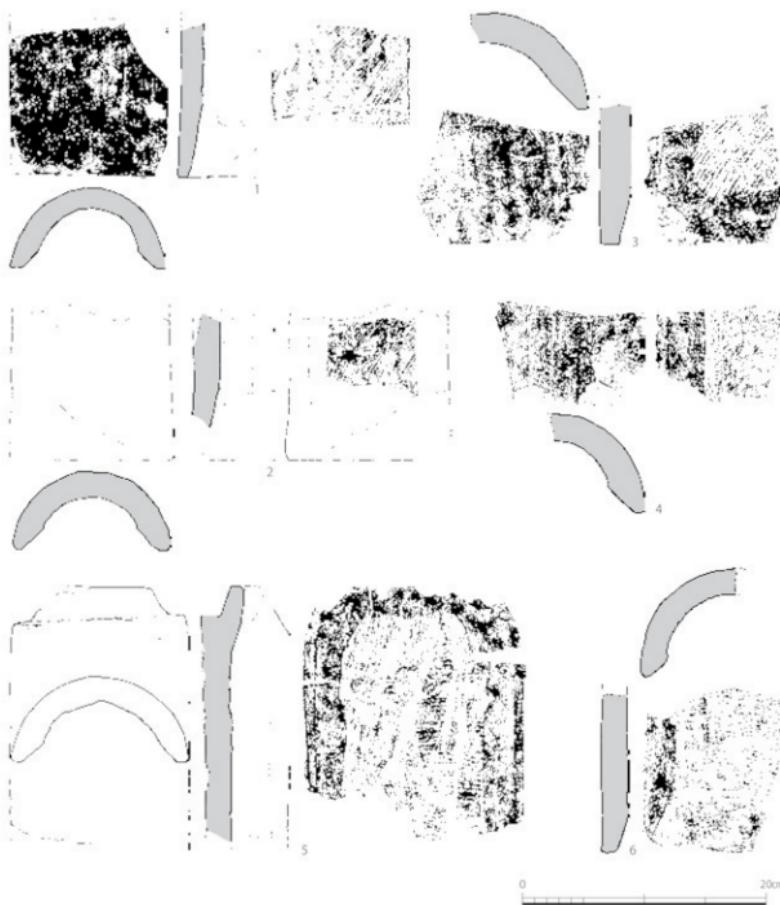
平瓦 佐太前遺跡の平瓦は、大きくは凸面ナデ調整でハナレ砂の付くSA類と、凸面にハケ調整をおこなうSB類の2種類がある。ただ、観察した平瓦の量が少ないので、これがすべてとはいえない。

第200図2～4は平瓦SA類。凸面には凹型台の圧痕があり、付着したハナレ砂が顕著である。凹面はタテナデ調整。狭端部(4、藤原・清水2010第61図414)は、わずかに面取りがある。広端部(3・4、第69図434・第61図413)は、凹面端に面取りがない。3・4とも凹面はヨコミガキ。

1・5が平瓦SB類。1(藤原・清水2010第69図433)は狭端部の断片。5で製作手法をみる。コビキの種別は不明だが、凸型台に粘土板を置き、凸面をヨコハケのちタテハケ調整。縄叩きの有無は不明。次に凹型台にのせ、凹面をタテナデのちヨコヘラミガキ調整し側辺部をナデ。



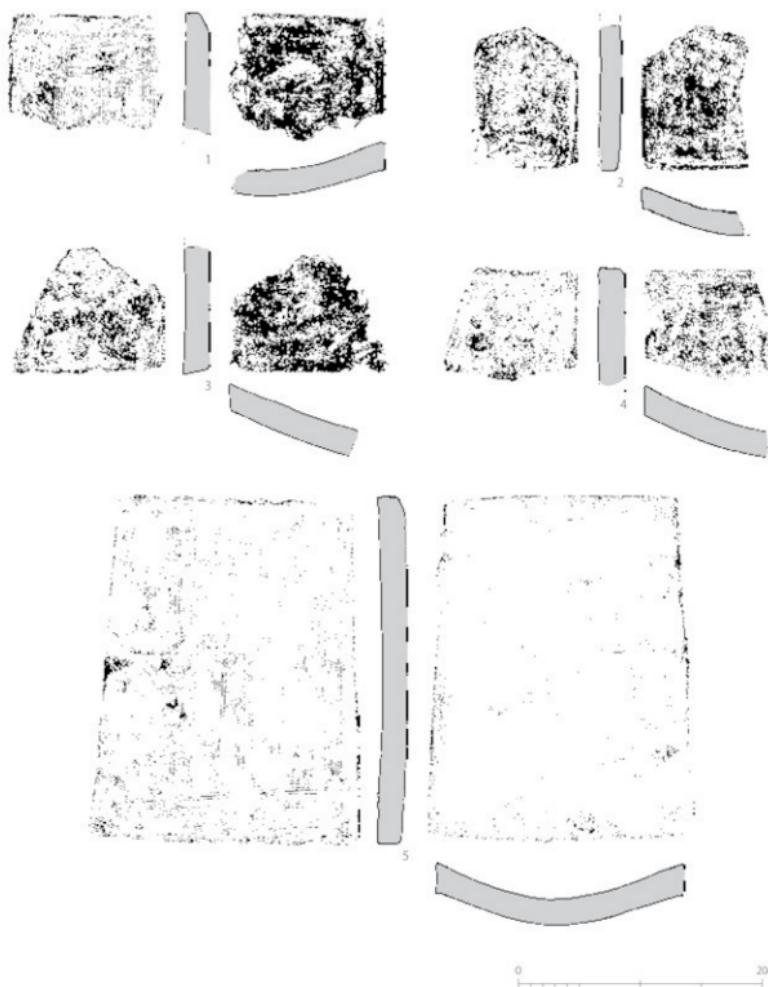
第198図 佐太前遺跡の丸瓦（1）（1：4）



第199図 佐太前遺跡の丸瓦（2）（1：4）

狭端の凹面側には中央で幅約2cmの面取りがある。この面取りは両端で狭くなる。全長28.3cm、広端幅21.4cm、狭端幅18.8cm、厚さ2.2cm、重量2.16kg。凸面の凹型台痕跡は広端で幅21cmあり、これで瓦の規格を決めたとみられる。

佐太前遺跡の瓦は、右巻き三巴紋軒丸瓦+宝珠紋唐草紋軒平瓦+丸瓦SA類+平瓦SA類、が1つのまとまりとなると考える。これらの瓦は、中世佐太神社に付随する神宮寺の屋根に載ったものであろう。中世の佐太神社には、神宮寺7坊があったとされ「佐太神社縁起」にも、「薬堂（薬師堂か）」「経所」「常樂寺」がみえる。井上寛司氏によれば神宮寺の初見は、嘉元4年（1306）という（井上1997）。



第200図 佐太前遺跡の平瓦（1：4）

今回報告した瓦類は、この年代までは遡らないが、後述するように戦国時代の16世紀後半（第3四半期?）と推測できよう。これまで、出雲地域の中世寺院の瓦が研究の俎上にあがることは稀だったので、あえて資料提示をおこなった。

4 鰐淵寺出土瓦と隣接する諸遺跡の瓦 一年代の指標

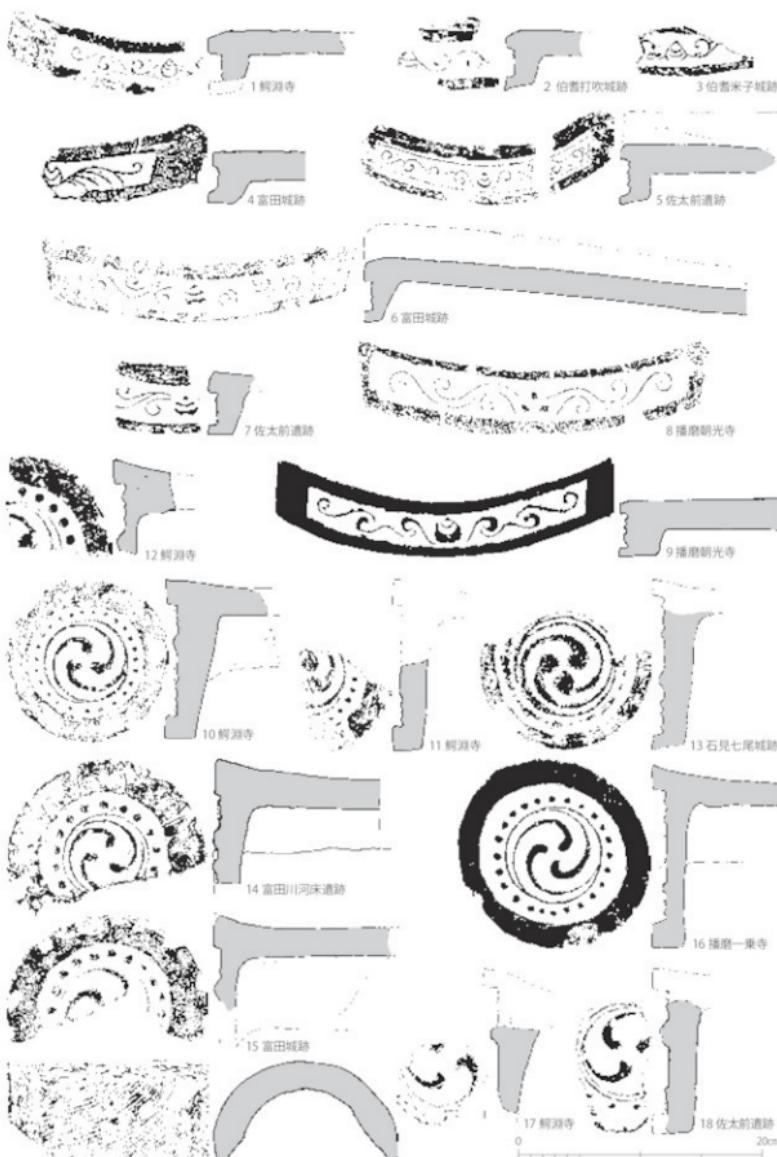
出雲での中近世瓦は、まず、堀尾期の富田城跡と松江城跡の瓦によって年代が付与される。

堀尾期の瓦 乗岡氏は、唐草紋が2回反転する下向三葉B1類軒平瓦が、富田城跡の堀尾期（慶長5年—12年（1600—1607）、第196図6・7（富A—1類A—2類））および松江城築城時（慶長12年—16年（1607—1611）、第196図24（松a—2類））に使われたとし、下向三葉A1類（第196図22・23（松a—1a・1b類））も富田川河床遺跡に同紋ないし同范品があることを指摘する（乗岡2015）。下向三葉B1類軒平瓦は、乗岡氏が述べるように、富田城跡のもの（第196図6・7）より松江城跡のそれ（第196図24）がよりは新相を示すから（三葉の輪郭が簡素）、大きくは山崎編年の近世Ⅲ—Ⅱ期（1600—1615）の前半と後半をそれぞれが代表するのだろう。この点を明らかにするためにも、2つの遺跡間での同範異范の詳細な検討が必要となる。これら下向三葉B1類と同紋瓦は米子城跡でも築城期に使用され、富田城跡の瓦により近いことも指摘されている。

軒丸瓦は珠紋数17の左巻き巴紋（富a—1類と松A—1類）がともなう。丸瓦はコビキBである。
堀尾期以前の富田城跡の瓦 富田城跡と米子城跡ではこれらよりも古相を示す軒平瓦が5種程度あり、うち3種、①上向き三葉紋唐草紋（第196図8、富A—3類）、②宝珠紋波状唐草紋（第196図10、富B—2類）、③2宝珠紋十木槌紋唐草紋（第196図11、富B—3類）、が岡山城2式（文禄年間から慶長5年頃（1592—1600）、乗岡2001）と同範ないし同紋で深いつながりをもつ。そして、それらの年代は、慶長5年（1600）を下限とする吉川広家期で、「古くとも文禄年間」（1592—1596）とされている（乗岡2015）。コビキAの丸瓦がともない、軒丸瓦は圓線のある左巻き巴紋であろう。

鰐淵寺の宝珠紋軒平瓦 鰐淵寺の宝珠紋軒平瓦（第201図1）は、宝珠が線表現である。富田城跡の富B—2類（第201図4）と同様の表現だが、唐草紋はまったく違う。連続する唐草紋が宝珠紋の中ほどから派生する点では、伯耆・打吹城跡例（倉吉市、第201図2、木地谷2011図5—1）や、米子城跡7遺跡例（同3、高橋1996第27図7）が山陰での類例としてあげる。打吹城跡では、左巻き巴紋軒丸瓦やコビキAの丸瓦が共伴する（木地谷2011）。木地谷一氏は、これらの瓦を南条氏による織豊系城郭への改造にともなうものとみて、天正13年（1585）から慶長5年（1600）の年代をあてる。

鰐淵寺の宝珠紋軒平瓦（第201図1）と組み合う軒丸瓦はどれか。まず、同じ平坦面（根本堂地区本覚坊跡北A23）採集の左巻き巴紋（同10）を検討する。頭部が小さく、珠紋数は25。富田城跡や米子城跡には、このような小粒の珠紋を並べるものがない。これに続くのが、等瀬院南A38平坦面の左巻き巴紋（同11）と、開山堂南A64の左巻き巴紋（同12）である。前者は珠紋こそ小粒で密だが巴紋の頭部が大きく、後者は珠紋が大粒となり瓦当が薄い。3点をあえて編年すれば、10⇒11⇒12、の順に新しいだろう。10は、瓦当紋様の印象では、山崎編年中世Ⅶ期で「天文十五年」（1546）の銘文をもつ播磨・一乗寺（兵庫県加西市）の巴紋軒丸瓦（第201図16、山崎2000第90図8）に近い。一乗寺でこれと組む宝珠紋軒平瓦は、鰐淵寺の宝珠紋軒平瓦とくらべると脇区が狭い。鰐淵寺の10と11も、コビキAの丸瓦をともなう安来市富田川河床遺跡の左巻き巴紋軒丸瓦（第201図14、珠紋数20前後）よりは外縁が高いから、富田城跡の吉川広家期の軒瓦よりは年代が遅るとみたい。



第201図 鰐淵寺と関連諸遺跡の軒瓦 (1:4)

鰐淵寺の右巻き巴紋軒丸瓦 鰐淵寺では右巻き巴紋が1点だけ採集されている（第201図17）。近隣の遺跡で同じ紋様は佐太前遺跡（松江市）にしかない（同18）。鰐淵寺例は珠紋が密だが、佐太前遺跡例は疎である。佐太前遺跡ではこの巴紋軒丸瓦に、立体表現の宝珠紋唐草紋軒平瓦がともなう（第201図5）。4回反転する唐草紋、上下外縁とほぼ同じ幅の脇区、また内外区界線をもつ点からみて、山陰地方では下り松遺跡（松江市、鎌倉時代）に次いで古い中近世瓦である。佐太前遺跡ではこれらの軒瓦にコビキAの丸瓦がともなうが、この丸瓦には太い吊り紐痕がなく、布袋を横方向（水平方向）に指し縫いした細紐の圧痕が何段にも残る。いわゆる「九州タイプの吊り紐」痕である（山崎2000）。よって、佐太前遺跡の宝珠紋唐草紋軒平瓦は九州系の紋様とみてよかろう。

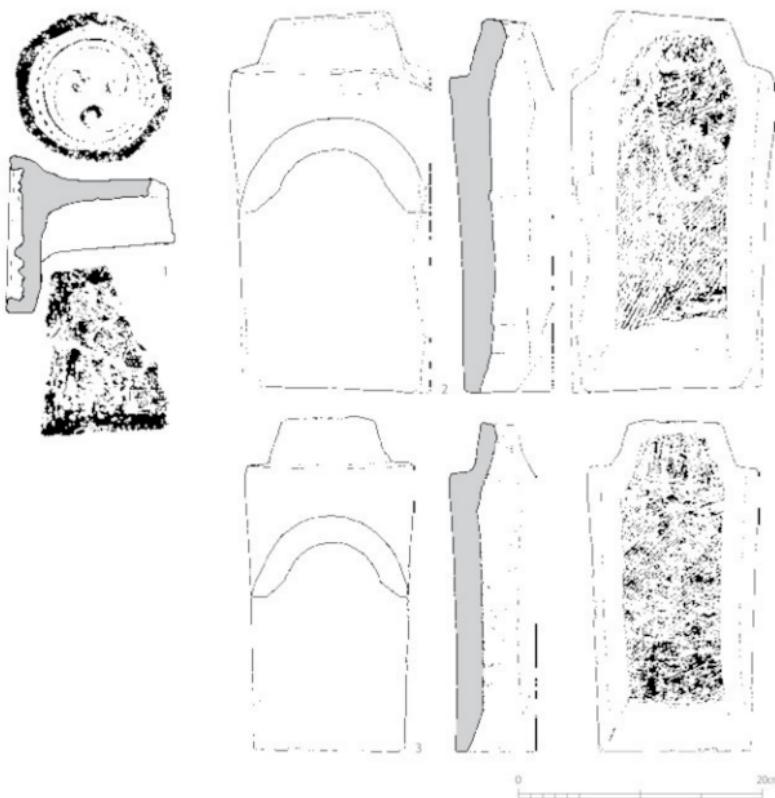
博多遺跡群（福岡市）の宝珠紋軒平瓦について山崎信二氏は、博多遺跡群井戸SE20 挖掘出土資料は、宝珠紋が立体表現から線表現まであることと内外区間の闇線はないことから、これらを永禄2年（1559）から天正7年（1579）とする（山崎2008、123－124頁）。佐太前遺跡例は界線の存在からこれらよりも古く、永禄元年（1558）を遡る山崎編年中世Ⅶ期となる可能性もあるが、左側の界線が切り落とされており、瓦範の製作年代と製品の年代との関係について慎重な検討が必要である。

中国地方で九州タイプの吊り紐痕が卓越するのは、大内氏館跡（山口市）である。北島大輔氏は、大内氏領域の中世瓦を編年し、横方向の細紐痕跡が「町並52次式」（16世紀前半－中頃）まで続き、太い吊り紐痕跡もこの時期に登場する、と考えた（北島2013、図204）。館跡20次調査では、焼失した南門⁽⁸⁾の柱抜き取り穴から「凌雲寺式」（北島2009、15世紀末－16世紀初頭）が出土した（北島編2013、第202図1）。佐太前遺跡の瓦の年代を考える上で、一つの基準となる資料であろう。

なお、九州タイプの吊り紐痕は、富田城跡の丸瓦にも少量存在する（第202図3）。太い吊り紐痕をもつものにも、指し縫いの痕跡を認めるものもある（同2）。

佐太前遺跡と富田城跡の宝珠紋軒平瓦 佐太前遺跡では、もう1種類宝珠紋唐草紋軒平瓦が出土しており（第201図7）、これは、富田城跡（同6）、松江城跡、伯耆・江美城跡（日野郡江府町）と同範である（乗岡2015）。富田城跡例について山崎氏は、近世I期（1575－1582）まで遡ってよいと思う、とした（山崎2008、159－160頁）。この軒平瓦（乗岡分類「松江城宝珠A」富B－1類）については課題が多い。乗岡氏は、松江城跡出土例がコビキBの痕跡を残し、富田城跡でも整備時期の新しい山中御殿でも出土することなどを踏まえて⁽⁹⁾、慶長期前半（慶長5年－12年）の可能性を視野におくものの、天正19年（1591）の吉川広家入封後とし、毛利期（1566－1591）には遡らないとみた。その根拠は、これを、岡山城1式（天正年間）、なかでも下の段38・39（乗岡編2001、176頁第101図）に近似すると考えるからである。上向き三葉紋を中心飾りとするこの下の段39瓦は、大坂城や播磨国内（例えば姫路市香寺町恒屋城跡（田中2004、44頁第19図16））と同範であり、播磨系工人の作品とされる（乗岡2001）。唐草紋の特徴が、永禄年間、1560年前後に橘国次が製作した五弁花紋を中心飾りとする軒平瓦につながるからである（山崎2000、203－205頁）。しかし、中心飾りは違う。

富田城跡の宝珠紋軒平瓦（乗岡「松江城宝珠A」、富B－1類）の中心飾りは、下辺中央がへこむのが特徴で、これは一見すると、播磨・朝光寺（兵庫県加東市社町地区）の軒平瓦（第201図8、田中2004第14図20）に近似し、唐草紋も似る。古い紋様要素と実際の製作時期とが隔たるのかが課題だ⁽¹⁰⁾。



第202図 大内氏館跡の軒丸瓦と富田城跡の丸瓦（1：4）

さて、富田城跡には、もう一つ立体表現の宝珠紋を中心飾りとする軒平瓦がある（未報告）。唐草紋の第1単位が急角度で上に向き、第2単位がS字状にうねるもので、これらの特徴もまた播磨瓦に直結する。すなわち、天文15年（1546）から天文23年（1547）橘國次が、その子の弥六や甚六とともに製作した宝珠紋軒平瓦（第201図9、加西市一乗寺・姫路市円教寺など、山崎2000、田中2004）を祖形とすることは間違いない。製作年代と使用年代については別に検討が必要だが、同じ唐草紋の瓦は岡山城跡はない。つまり、富田城跡には岡山城1式瓦の影響を受ける一群のほかに、播磨から直接あるいは岡山城以外を経由して影響を受けた一群が存在することが指摘できる。この違いが、系譜の違いだけなのか、時期差にも関わるのかが今後の検討問題である⁽¹¹⁾。

富田城跡を中心とする瓦とはやや違った様相を示すのが石見・七尾城跡（益田市）の瓦である。七尾城跡では、本丸北端で瓦葺き礎石建ちの櫓門あるいは櫓門が発見された。瓦は左巻き三巴紋軒丸瓦（第

201図13)などだが、建物基壇の下層からも出土し、先行する瓦葺き建物もあった(木原ほか1998)。

この建物について、千田嘉博氏は「天文期から天正初年の様相」とし(同書92頁)、永原慶二氏は、益田藤兼が三宅御土居から七尾城へ居所を移した時期を「16世紀の前半の終わりに近い頃」とする(同書86頁)。さらに、井上寛司氏は、天文20年(1551)の大内義隆自害とそれに続く同24年(1555)の巣島合戦での毛利氏勝利という事件を含む16世紀中ごろに、三宅御土居と七尾城の改修や整備・拡充が進められたと推考する(同書81頁)。これらの年代は、土器などの遺物から判断される16世紀第3四半期という七尾城跡の建物遺構の年代とよく合致する。石見での最末期の中世瓦として重要な資料である。

5 おわりに

以上、雑駁な議論を重ねてきたが、鰐淵寺から出土(採集)した瓦の年代についての見通しをまとめておく。まず、伊藤創氏にしたがい、コビキAの瓦は基本的には16世紀代以前(戦国期以前)、コビキBの瓦は17世紀以降(江戸期)としてよいと考える。

鰐淵寺から出土した軒瓦で最も古くに位置づけうのが、珠紋数25の左巻き巴紋軒丸瓦と右巻き巴紋軒丸瓦(珠紋数不明)であろう(第201図10・17)。山陰には年代を比較できる資料がないが、左巻き巴紋軒丸瓦は、天文15年(1546)銘をもつ播磨・法華山一乗寺(加西市)と紋様が似ることから、また、右巻き巴紋軒丸瓦は紋様の近似する佐太前遺跡例に共伴する宝珠紋軒平瓦から、山崎編年中世VII期(1490年から1575年)に遡る可能性を考えた。これらが、天正5年(1577)の毛利輝元による根本堂再建に関連するかどうかは、根本堂周辺の発掘調査成果を待たなければならないだろう。

これに續くのが、宝珠唐草紋軒平瓦(第201図1)や左巻き巴紋軒丸瓦(第201図11・12)である。これらは、毛利輝元による根本堂再建の時期よりは新しく、吉川広家期の富田城跡(天正19年(1591)ー慶長5年(1600))の瓦に近いとも考えられる。

江戸時代の鰐淵寺の瓦は、その初期、松江城と松江城下町であれば堀尾氏による築城期(慶長12年ー16年(1607ー1611))に該当する軒瓦の様相が不明である。江戸時代で年代が推定できるのは、山崎信二氏が「割薦唐草紋」と呼び(山崎2008, 165ー166頁)、乗岡実氏が「五葉紋」とした(乗岡2015)軒平瓦(第196図28・29)である。唐草紋が連続しない一群(乗岡分類「五葉A類」)は、両氏とも松江城が大破して修理をおこなった元文3年(1738)から寛保3年(1742)の時期(和田2013)にあてる点で一致する。鰐淵寺出土例のように唐草紋が連続する一群(乗岡分類「五葉B類」)について乗岡氏は、「19世紀の長門萩で作られた瓦との類似性が強く」存在すると指摘する。鰐淵寺例も出雲地域特有の左軒棟瓦なので、19世紀と推定されるが、松江城跡や城下町遺跡出土例とは異質であり、その産地などを含め、今後のさらなる検討を必要とする。

山陰の中近世瓦の研究は、まだ蓄積が少なく、細かな年代論はもとより、製作技術や瓦当紋様の系譜など課題は多いが、これまで主に検討対象とされてきた富田城跡や米子城跡、松江城跡などの城郭の瓦に加え、鰐淵寺や佐太前遺跡など寺院の瓦の様相がうかがえるようになってきた。地域の中近世史研究に新たな光をあてるためにも、研究の進展が求められる分野である。

(花谷 浩)

註

- (1) 「当寺本堂の瓦は、寒国ゆえ相検め候。付いては、昔替えたきの由、尤もしかるべしと存知候」「吉田もその趣、申し越され候」とある。
- (2) 本丸跡北端の礎石建ち門跡は瓦葺。門跡基壇の下層からも軒瓦が出土。先行する建物のものの可能性あり。ともに16世紀後半か。
- (3) 島根県埋蔵文化財調査センターで、2014年7月28日に実見した。
- (4) 2014年9月17日、松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課埋蔵文化財調査室にて実見した。この時、未報告資料があることを知った。その後、出雲弥生の森博物館2014年度企画展「出雲を掘る 第五話 一瓦の歴史」展示資料として借用して資料化した。調査室の川上昭一さんと日野一輝さんにお世話をになった。
- (5) 2014年8月25日、松江市史編纂室主催の松江城瓦検討会にて乗岡実氏らが確認。筆者も、同年12月24日、同室主催の瓦産地分析資料サンプリング（岡山理科大学白石純氏による）の折、4遺跡の同范を確認した。
- (6) 伊丹市教育委員会の中畔明日香さんによれば「龍頭瓦」の胴部片の可能性もある、とのことだった。ただし、ふつうは胴部に鱗紋を飾る。
- (7) 奈良県法隆寺では、凹面に玉縁段部をもたない押瓦、鎌瓦あるいは闊用の瓦が、室町中期II（1436～95）に登場する（軒丸瓦89Wなど）。菊丸瓦の出現もこの時期とする（毛利光・佐川・花谷1992, 366～367頁）。
- (8) この焼失は、天文20年（1551）の陶隆房の謀反から弘治3年（1557）の毛利氏の山口侵攻に関わるものと推定される（北島編2013）。
- (9) 松江城宝珠A軒平瓦の唐草紋は、姫路城・大坂城同范の宝珠唐草紋軒平瓦より遅れるとして、天正年間後葉から慶長期の可能性を示しつつ、播磨ではその時期にはコビキBへの転換がなされているから、松江城跡から出土したこの瓦が富田城跡から運ばれたとしてもコビキBである可能性は残る、ということを述べる。
- (10) 瓦当の成形手法も、富田城跡・松江城跡・佐太前遺跡の諸例は「顎貼り付け」だが、江美城跡例は「直当貼り付け」とみた。富田城跡の資料は多くを実見したわけではないので、これも調査が必要だと思う。
- (11) もう一つ問題となるのは、富田城跡の菅谷地区第II調査区から出土した朝鮮王朝瓦である。山崎信二氏は、富田城跡と対馬金石城跡との同范関係を基礎に、対馬の宗氏の動向などから、1520年代を前後する時期のものとみなし、尼子経久の時代の瓦と推定した（山崎2000, 346～356頁）。渡辺誠氏は、そこまで年代を限定していないが、文禄慶長以前に遡ると考えている（渡辺1992）。一方、中井均氏は吉川広家が朝鮮半島から持ち帰ったものと推測し、これを堀尾氏が改修して転用したものが出土した、とみた（中井2005）。吉川広家の帰国は慶長3年（1598）なので、瓦の製作年代はともかく、山崎氏と中井氏とでは、富田城での朝鮮王朝瓦の使用年代の理解に80年近い差がある。

参考文献

- 熱田貴保ほか 2002『田中谷遺跡・塚山遺跡・下がり松遺跡・角谷遺跡』法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県教育委員会
- 飯塚康之 2001『史跡松江城跡整備事業報告書（第2分冊：調査編）』松江市文化財調査報告書第88集－2 松江市教育委員会
- 石川 崇ほか 2011『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書－松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書－』松江市文化財調査報告書第139集 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団

- 伊藤 劇 2009 「米子城のはじまりについて 一飯山の石垣と採集瓦からー」『島根考古学会誌』第26集, 135 – 144 頁
- 伊藤 劇・西尾克己 2009 「伯耆江美城とその城下町」『西国城館論集Ⅰ』川瀬正利先生追悼論集 中国・四国 地区城館調査検討会, 21 – 34 頁
- 井上寛司 1997 「中世佐陀神社の構造と特質」『重要文化財佐太神社 一佐太神社の総合的研究ー』鹿島町立歴史民俗資料館, 15 – 38 頁
- 井上寛司 1998 「文献から見た中世益田氏と益田氏関係遺跡」『七尾城跡・三宅御土居跡 一益田氏関連遺跡群発掘調査報告書ー』益田市教育委員会, 77 – 83 頁
- 内田律雄 1985 「普谷地区出土の李朝系古瓦について」『史跡富田城跡 普谷地区』第一次発掘調査概報 広瀬町教育委員会, 15 – 20 頁
- 鹿島町立歴史民俗資料館 1997 「重要文化財佐太神社 一佐太神社の総合的研究ー」
- 香取秀真 1920 『好古山陰めぐり』堀江清足発行
- 神谷伊鶲・中原 齊 2011 「糸蔵跡出土瓦にみる鳥取城近世瓦」『鳥取城跡糸蔵跡(第20次調査)』鳥取県立鳥取高等学校改築計画に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥取市文化財団, 154 – 161 頁
- 北島大輔 2009 「鐵豐城郭成立以前の家紋瓦 一山口市凌雲寺跡採集瓦の研究ー」『西国城館論集Ⅰ』河瀬正利先生追悼論集 中国・四国地区城館調査検討会, 227 – 238 頁
- 北島大輔 2013 「中世瓦の三次元計測」『大内氏跡』14 山口市埋蔵文化財調査報告 第109集 山口市教育委員会, 207 – 224 頁
- 北島大輔編 2013 『大内氏跡』14 山口市埋蔵文化財調査報告 第109集 山口市教育委員会
- 木地谷了一 2011 「瓦・石垣から見た打吹城 一その構築時期についてー」『島根考古学会誌』第28集 島根考古学会, 91 – 102 頁
- 木原 光ほか 1998 「七尾城跡・三宅御土居跡 一益田氏関連遺跡群発掘調査報告書ー」益田市教育委員会
府江町教育委員会 1998 『府江町指定史跡江美城跡現地説明会資料』
- 佐伯純也 2003 「米子城跡の近世瓦」『関西近世考古学研究XⅠ』関西近世考古学研究, 214 – 222 頁
- 坂田邦彦 2010 「鳥取城瓦考」『鳥取城跡調査研究年報』第3号
- 高橋浩樹 1996 「米子城跡7遺跡」米子市教育文化事業団文化財調査報告書 15 同事業団
- 田中幸夫 2004 「播磨の中世瓦 一瓦が語る神社・寺・城跡ー」
- 中井 均 2005 「滴水瓦の伝播と展開特に文様・慶長の役を中心としてー」『龍谷大学考古学論集Ⅰ』同論集刊行会
- 中尾秀信・瀬古涼子 2001 「史跡松江城跡発掘調査—二ノ丸番所跡—」松江市文化財調査報告書第56集 松江市教育委員会
- 乗岡 実 2001 「瓦について」『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会, 299 – 316 頁
- 乗岡 実 2014 「近世の瓦を考える 一山陰と山陽を比較してー」出雲弥生の森博物館 2014 年度企画展「出雲を掘る 第5話 一瓦の歴史」関連講座資料
- 乗岡 実 2015 「松江城の屋根瓦 一山陰で活躍した瓦工人と城郭整備ー」『松江市歴史叢書』8 松江市教育委員会
- 乗岡 実編 2001 「史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告」岡山市教育委員会

- 藤原 哲・清水初美 2010『佐太前遺跡発掘調査報告書』広岡川河川改修に伴う発掘調査報告書 松江市文化財調査報告書第135集 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団
- 藤原久良採集陶磁資料調査研究会 2009「島根・富田川河床遺跡の研究－藤原久良氏採集資料（II）－」『古代文化研究』第17号 島根県古代文化センター、45－60頁
- 舟木 聰 2003『史跡富田城跡 環境整備事業報告書II』広瀬町教育委員会
- 村上 勇 2013「出土陶磁から見た尼子氏時代の諸様相」「尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究」島根県古代文化センター研究論集第11集 島根県古代文化センター 横組103－158頁
- 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩 1992『法隆寺の至宝 瓦』法隆寺昭和資財帳15 小学館
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所
- 山崎信二 2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊 奈良文化財研究所
- 和田嘉宥 2013「松江城城郭の推移について」『松江城研究』第2号 松江市教育委員会、55－66頁

第6節 山陰の石塔における鰐淵寺資料の位置づけ

1 鰐淵寺石塔の概要（第203～206図）

（1）石材と産地

五輪塔、宝篋印塔については第6章第2節でもふれているが、本項でも再度整理しておく。

鰐淵寺に所存する石材に関しては、山内靖喜氏（島根大学名誉教授）に鑑定いただいた。五輪塔は、①流紋岩製（白色凝灰岩製）、②花崗岩製、③流紋岩質凝灰岩製、④凝灰岩質砂岩製、⑤凝灰岩製の5種類が確認された。宝篋印塔では、①流紋岩製、②花崗斑岩製、③安山岩質凝灰岩製、④流紋岩質凝灰岩製、⑤凝灰岩砂岩製の5種類が確認されている。数量的には、凝灰岩質砂岩製のものが最も多くみられ、花崗岩・花崗斑岩製は各1点のみであった。

形態的特徴と筆者の肉眼観察による石材の印象から判断すると、流紋岩は通称白粉石・白来待石、凝灰岩質砂岩は来待石と称されてきたものと類似する。鑑定の山内氏によれば、鰐淵寺で確認された凝灰岩質砂岩は一般的な来待石よりも緻密であり流紋岩質凝灰岩にみえる部材もある。出雲市久多美町産の久多美石に感じが近い。その他の花崗斑岩、花崗岩、安山岩に関しては、出雲市近隣にも岩脈が存在するので産出の可能性があると指摘された。

白粉石・白来待石と来待石は、いずれも主な産出地として宍道湖南岸の松江市宍道町来待が知られているが、同質石材の流紋岩、凝灰岩質砂岩は宍道湖岸の複数個所に分布するといわれている。また出雲市近隣では白色凝灰岩、凝灰岩の石切場が確認されていることから、流紋岩も凝灰岩質砂岩も近隣で産出される可能性がある。現時点では、宍道湖南岸の宍道町来待付近、宍道湖北岸の出雲市久多美町付近、神戸川周辺などで産出の可能性があり、採掘・加工・流通の状況を明らかにせねば、石質のみでは、産地は断定できないと考える。流紋岩の分布も、凝灰岩質砂岩と同じであり、それ以上の産地同定は現状では難しい。安山岩質凝灰岩製品の一部に関しては、石塔の形態から福井県高浜町からの搬入品である日引石製品と判断し、その他を山陰の製品と考えた。花崗岩・花崗斑岩製品については、産地を特定できる明確な判断材料がなく、搬入品か在地品か確定できなかった。

（2）石材別にみた形態変遷と実年代（第203～206図）

まず、鰐淵寺における石材ごとの特徴と年代を整理するため、島根県下の代表的な製品を参考にあげ、形態変遷の特徴と推定年代を示していきたい。（第203～206図）

文章中の類と△は第6章の184・185頁第154・155図、195・196頁第158・159図に対応している。

流紋岩

流紋岩とされたものは、從来白粉石、白来待石と呼ばれている白色凝灰岩製石塔に類似しており、本稿では白色凝灰岩として扱う。現在県内で確認される最古のものは、五輪塔では13世紀末頃と推定される正林寺五輪塔群（松江市大庭町）、宝篋印塔では、14世紀前半の伝土御門親王墓（松江市宍道町）、岩屋寺宝篋印塔（同町）があり、三田谷I遺跡でも屋根の軒と思われる部材が確認されている。五輪

つちみかどしづのう

塔は畿内でも見られるような整った形態で、梵字を刻む。宝篋印塔も北近畿の製品と分割成形の点で共通性が見られる。また、古川登は梵字の彫成手法から、伝土御門親王墓と岩屋寺の宝篋印塔の年代を14世紀前半と推定している（古川2008）。

14世紀前半段階での白色凝灰岩製石塔の特徴は以下のとおりである（第35表）。

第35表 白色凝灰岩製石塔の特徴（1）

14世紀前半	
五輪塔	
空風輪	柄は比較的小さく角柱状に整える。
火輪	柄穴は四角。下面是水輪との噛み合わせのくぼみが削られるもある。
水輪	もろく割れやすい石材にも関わらず、内部を大きく抉る。
地輪	内部を大きく抉る（正林寺の地輪は5cm程度の厚みを残して下部から輪状にくりぬいている）
宝篋印塔	
相輪	柄は五輪塔と同様の角柱状。
屋根	隅飾りが小さく單弧
屋根・塔身・基礎	屋根は軒上部、軒下段部、塔身部、基礎上段部、基礎本体部に分割で作られる。それぞれが四角い段状の柄、柄穴で噛み合う。

その後も、寺の前古墓群五輪塔地輪（永徳元年、1381）など14世紀後半の製品も確認され、継続して使用されていたと思われるが、資料数が少なく、当該時期の様相を推定することは難しい。

次段階の石塔としては、社日古墳の五輪塔群、二反田古墓の宝篋印塔群などが確認されている。

15世紀後半～16世紀前半段階の特徴は、以下のとおりである（第36表）。

第36表 白色凝灰岩製石塔の特徴（2）

15世紀後半～16世紀前半	
五輪塔 14世紀前半段階の名残を残す。	
空風輪	柄が小さく角柱状。
火輪	柄穴は四角。
水輪・地輪	抉込みが丁寧さを失い、粗くなる。
宝篋印塔	14世紀代と様相が大きく変わる。
相輪	径の大きさ長い円柱状の柄。相輪部宝珠下、九輪下と伏鉢部は特徴的な蓮弁の装飾を施す。
屋根	軒部分の厚みが大きくなり、隅飾りは小さく2弧へと変化する

二反田古墓の石塔の事例をみると、相輪部の装飾が主弁と間弁で構成されるもの、間弁が消滅するもの、蓮弁の装飾がなくなり無紋になるものがあり、それぞれに若干の年代差があると思われる。屋根部も軒下に段の代わりに蓮弁を刻むものなど、2種類確認されている（杉原1987）。

本論では、形態に共通性を持つと思われる流紋岩製品と流紋岩質凝灰岩製品、凝灰岩質砂岩製品について、上記の特徴をふまえて年代を検討した。

なお、大井谷II遺跡（出雲市上塩治町）で白色凝灰岩製の15世紀末～16世紀と思われる宝篋印塔部材が確認されている。基礎上部に蓮弁を施した意匠に特徴があるが、鰐淵寺で同様のものは確認されなかった（遠藤2001）。

鳥取県			
	大山角閃石安山岩	その他	花崗岩(産地不明) 〃(由良石)
13世紀		1 花崗岩 2 花崗岩	石英安山岩(伊根石) 安山岩質凝灰岩(日引石)
14 15世紀	3 4 5 6 花崗岩(産地不明) 粒状石灰岩(ココメ石)	7 8 石英安山岩(産地不明)	9 花崗岩(産地不明) 10 花崗岩 11 12 石英安山岩(伊根石)
16世紀以降		13 安山岩質 凝灰岩(日引石)	1・2. 倉吉市広瀬 ヒイデ 3・4. 西伯郡大山町 転法輪寺墓地 5. 倉吉市桜 大日寺頼朝墓 6. 西伯郡大山町赤坂 7. 鳥取市白兔身干山 8. 八頭郡八頭町 新興寺 9. 日野郡日南町印賀 10. 鳥取市 山王社 11. 八頭郡八頭町福地 大樹寺 12. 岩美郡岩美町 長安寺 13. 倉吉市岩倉 永昌寺

第203図 鳥取の石造物変遷表

島根県					
	大山角閃石安山岩 石英安山岩質凝灰岩 (白来待石)	その他	花崗岩 (産地不明) 〃 (御影石)	安山岩質凝灰岩 (日引石)	
13世紀		15 16			
14 15世紀	14 17 18 19 20 21 22 23 24 25	21 凝灰質砂岩 (来待石?)	20 角礫凝灰岩 (産地不明)	23 花崗岩 (産地不明)	25
16世紀以降	14. 安来市清水町坂本 15・16. 松江市大庭町 正林寺 17. 松江市宍道町 岩屋寺 18. 松江市宍道町 伝土御門親王墓 19. 安来市清水町 清水寺蓬莱院墓地 20. 松江市竹矢町 安国寺 21. 出雲市別所町 鶴淵寺墓地 22. 大田市温泉津町井田中正路 23. 添田市殿町夕日ヶ丘 24. 益田市染場町 万福寺 25. 益田市美都町 東仙道土居遺跡 26. 松江市宍道町 岩屋寺 27. 大田市大森町 石見越山墓地	26 凝灰質砂岩 (来待石)	27 安山岩質 火山輝凝灰岩 (龍光石?)	0 1m (1/50)	

第204図 島根の石造物変遷表

花崗斑岩・花崗岩

松露谷宝篋印塔1類1が花崗斑岩、松露谷五輪塔2類3・4が花崗岩である。花崗斑岩は鰐淵寺周辺でも採取できる石材なので、地元製作品の可能性がある。なお、基礎部は長方形で段も蓮弁もなく、宝篋印塔の部材として良いか疑問が残る。

県内に搬入される花崗岩では、島根県西部の益田市周辺にピンク色の花崗岩（六甲産本御影石。山口産との異論あり）が知られているが、中世段階の東部にはピンク色の花崗岩は未確認で、鰐淵寺で確認された五輪塔も白色の花崗岩製である。島根県内以外でも岡山、広島にも花崗岩が存在し、現状では在地品か搬入品かの判断材料がなく断定できない。

安山岩質凝灰岩

搬入品と在地品が混在している。松露谷地区の宝篋印塔2類として確認された製品のうち、2類10（第158・161図）は搬入品の安山岩質凝灰岩（福井県高浜町産の日引石（古川1997・2000、大石1996・2001））である。

正面格狭間の左右に銘文があり、「(右)逆修尼妙阿。(左)文安五□(戊力)□(辰力)」と読める。文安五年は1448年である。島根県内においても14世紀後半～16世紀初めと考えられる日引石製品が確認される（今岡2001）。日引石製宝篋印塔は年代が降るにつれて基礎部反花座の間弁の幅が徐々に狭まることがわかっているが、1470～1523年間で反花座の複弁同士が接し、間弁が先端のみになるとみられる。本品は間弁幅がかなり狭いが存在することから1470年以前の製品である。現在の編年案では1423年から1470年の間の基準資料がなく、それ以上絞り込むことができないが、1423～1470年の製品と位置付けられ、銘文と矛盾しない。屋根の候補は、基礎と最大横幅が一致し、軒上6段下2段の特徴を備えた2類6（第158図）があげられる。

一方、屋根2類7（第158図）のように軒上5段下2段のもの、基礎2類13（第158図）の様な基礎部上部幅より下部幅の広がる台形状を呈すものには、出雲市大社町鷲浦の凝灰岩製宝篋印塔（第205図1）の例がある。鷲浦のものは屋根隅飾には輪郭がないなど省略が確認され、模倣品と考えている。

相輪部は、單弁と複弁の請花の彫り方や宝珠の形態、全体の印象などは日引石製品とよく似ているが、鷲浦石塔の相輪部形態が不明であること、安来市広瀬町經負坂古墳群（第205図4）や松江市西尾町米坂古墳群（第205図2）出土の在地石材製品でも同様の形態を備えたものが確認されていることから、搬入品か搬入品の模倣品か断定できない。

凝灰岩質砂岩・流紋岩質凝灰岩

川奥地区的宝篋印塔2類31（第163・164図）は、文明16年（1484）の銘文を刻む。松露谷墓地群の第158図8・9・11～13と川奥墓地の30・31は、搬入品の日引石製石塔と特徴がよく似ており、その年代観を適用するならば、基礎反花座の間弁が消滅はないものの幅が細くなることから15世紀前半～後半の製品といえる。31の紀年銘とも矛盾しない。13は複弁が接し間弁が先端のみになることからやや新しく、15世紀後半～16世紀初めの製品と思われる。3類17～19・34・35は、流紋岩製品と共通の形態を備える。白色凝灰岩の二反田古墓塔の屋根に類似した軒の厚い屋根の

一群であり、同古墓塔の推定年代である15世紀後半～16世紀前半頃の製品と考えた。

3類の凝灰岩質砂岩製石塔は、段数、軒の厚みにおいて安来市伯太町安田要害山城跡宝篋印塔屋根部（第206図6）と類似するが、全体の形態は不明である。次の4類、5類では、4類23・24と5類25・26（第159図）が凝灰質砂岩製である。この段階の石塔に関しては、間野大丞（間野2001、岩屋寺2008）、西尾克己ら（松江2006）の先行研究がある。紀年銘品の文禄5年（1596）岩屋寺1号窟塔（松江市穴道町）、慶長13年（1608）親子観音塔（安来市広瀬町）を基準に、16世紀末～17世紀の来待石石塔の形態変遷が明らかにされている。4類は岩屋寺1号窟4塔、親子観音塔に類似し16世紀末～17世紀初めの段階と考えられる。5類の相輪部に重弧状装飾を持つ石塔は岩屋寺2号窟3塔など数基が知られている（間野2009）。また、17世紀末～18世紀には墓標の大部分が宝篋印塔・五輪塔から位牌型へと変化する（種口2004）。

2類と4類の形態を直接比較すると、北近畿の特徴を備えた搬入品やその模倣品のグループと在地色の強い石塔グループで形態は大きく違うが、今回3類とした形態が確認されたことで、凝灰岩質砂岩製石塔の系譜として1～4類が連続する可能性がでてきた。鰐淵寺で確認された数点の資料だけだが、凝灰岩質砂岩製石塔の初現期が大きく遅り、13世紀末～14世紀には使用されていた可能性がでてくる。今後、3類の製品を中心に検討していく必要がある。

2 鰐淵寺石塔調査の成果（第203・204図）

（1）山陰の石造物の様相と鰐淵寺石塔

第203・204図は、山陰の主要な石造物を変遷表にまとめたものである。本項では、この図と以下に列挙する島根県東部地域の主要石塔の様相（第37表）をふまえて、鰐淵寺石塔の位置づけを行っていきたい。

① 13世紀末～14世紀前半の石塔造立初期の様相とその背景

13世紀末から製品が確認されるのは、古墳時代から石棺などに利用されてきた石材で知られる白色凝灰岩である。この白色凝灰岩製石塔は、初期には1箇所に1～2点の造立であり、形態の連続的変遷を追うのは難しいが、近世まで使用されるようである。一方で、同様に石棺の石材として用いられる凝灰岩質砂岩の製品は、紀年銘で確認されているのは16世紀末以降である。前節でも述べたが、鰐淵寺の流紋岩質凝灰岩・凝灰質砂岩が来待石とすれば、13世紀末～14世紀には来待石が石塔石材に利用されていた可能性がある。

14世紀前半段階では、鳥取、島根両県において、屋根部の隅飾が小さく、塔身は長方形を呈し、基礎上面が階段状になる製品がみられる。基礎上面が反花座の製品は少数である。

14世紀前半には、花崗岩、凝灰岩（産地不明）、大山系角閃石安山岩の製品が点々と確認される。この時期の宝篋印塔は、屋根の隅飾が小さく、塔身は長方形を呈し、基礎上面は階段の製品がみられる。基礎上面が反花座の製品は少数である。この特徴は山陰両県に共通しているように見える。

② 14世紀半ば～16世紀前半を中心とする搬入品と在地品の様相

14世紀半ば以降、北近畿からの搬入品（花崗岩：由良石、安山岩質凝灰岩：日引石・伊根石）が多く見



第205図 「鯛淵寺宝篋印塔2類」の類似石塔分布図



第206図 「鰐淵寺宝篋印塔3類」の類似石塔分布図

られる。この製品の搬入は16世紀前半まで続くようである。西部ではピンク色の花崗岩（六甲産花崗岩。山口産との異論あり）が多数みられる。在地品は確認数が少なく不明だが、当初は搬入品に席巻される状況が予想される。

15世紀後半になると各地で石材が著しく多様化するが、これは石材採取が小規模に各地で行われるようになったことを示している。さらに、16世紀前半の遺跡における石造物出土事例をみると、1箇所から多種類の石材製品が確認される傾向がある。これらの現象は採石、石造物生産の活性化とそれに伴う広範な石造物流通体制の確立を示していると思われる。筆者は、15世紀以降の在地塔製作にこれら搬入品が影響を与えたと想定している（今岡2001）⁽¹⁾。

第37表 島根県東部地域の主要石塔の様相

年代	所在地	石塔種別	石材	備考	図番号
13世紀	松江市大庭町	正林寺	五輪塔	白色凝灰岩	第204図15・16
14世紀	松江市秋鹿町	寺の前古墓群	五輪塔地輪（永徳元年、1381）	白色凝灰岩	
	松江市宍道町	佐土御門親王墓	宝箧印塔	白色凝灰岩	14世紀前半か 第204図18
	松江市宍道町	岩屋寺	宝箧印塔	白色凝灰岩	14世紀前半か 第204図17
	松江市大東町	狩山八幡宮	五輪塔	白色凝灰岩	
	安来市飯島町	羽島神社	宝箧印塔屋根	花崗岩	
	安来市清水町	清水寺蓮乗院墓地	宝箧印塔（正平12年、1357）	凝灰岩	第204図19
	松江市竹矢町	安國寺	宝箧印塔（康永2年、1343）	凝灰岩	第204図20
	安来市清水町	坂本	五輪塔（正平10年、1355）	大山系角閃石安山岩	第204図14
	松江市宍道町	木幡邸庭園	宝箧印塔基礎	安山岩質凝灰岩（日引石）	14世紀後半か
15世紀	安来市利弘町		宝箧印塔（文明年間、1469～1489）	安山岩質凝灰岩（日引石）	第205図3
	出雲市上塩谷町	大井谷II遺跡	宝箧印塔	白色凝灰岩	15世紀末～16世紀前半か
	松江市西尾町	米坂古墳群	宝箧印塔、五輪塔	白色凝灰岩（白来寺石・白柳石、大海崎石）、安山岩質凝灰岩（日引石）、凝灰岩A（荒鳥石）、凝灰岩B（火山礫凝灰岩、产地不明）、大山系角閃石安山岩、安山岩A（大海崎石、和久羅山系）、安山岩B、安山岩C（大山系に類似、近隣か）、凝灰質砂岩（来侍石）	15世紀～17世紀か 第205図2、 第206図4
	松江市平成町	袋尻遺跡	五輪塔	花崗岩、凝灰岩、砂岩	15世紀～16世紀か。 花崗岩はやや古相？
	安来市広瀬町比田	経負坂古墳群	宝箧印塔	大山系角閃石安山岩	1400年前後か 第205図4
	出雲市大社町	鷦鷯文殊堂	宝箧印塔	凝灰岩	15世紀後半～16世紀前半 第205図1
16世紀	松江市吉吉町	二反田古墓	宝箧印塔	白色凝灰岩、安山岩	16世紀前半まで 第206図3
	松江市朝駒町	三大寺遺跡	五輪塔	砂岩（来侍石）、大山系角閃石安山岩、大海崎系安山岩	16世紀～17世紀
	出雲市上塙治町	上塙治構穴墓第33支群	五輪塔・宝篋印塔	凝灰岩、白色凝灰岩	第206図1
	松江市竹矢町	社日古墳	五輪塔	白色凝灰岩	
	松江市宍道町	岩屋寺	宝箧印塔（文禄5年、1596）	凝灰質砂岩（来侍石）	第204図26

③ 16世紀における凝灰質砂岩(米持石)製石塔の形式の確立

16世紀には大規模な石切場が確認され、利用される石材も1遺跡で1～2種類に収束する傾向が出てくる。鰐淵寺においては、北近畿からの搬入品を模した製品から省略・単純化が進み、新たな意匠(地域色)を備えた製品が確認される。

その後16世紀末～17世紀には、島根県東部地域では、特徴的な形態が確立した凝灰質砂岩(米持石)製石塔に集約されていくようである。西部地域では同様に福光石製石塔が多くなる。

④ 山陰の石塔製作における画期

以上の概観から、14世紀の山陰両県に共通する要素、また、15世紀後半段階の石塔(第205図)、15世紀後半～16世紀前半の石塔(第206図)に見られるような石材を超えてみられる特徴は、その年代ごとの「時代的特徴」を表していると考えられる。また、鰐淵寺1類から2類の間(14世紀前半～後半)に搬入品の特徴を備えた石塔が増加する傾向と、2類から3類の間(15世紀前半～16世紀後半)に在地色の強く感じられる石塔への転換が読み取れる。この2つの画期は、生産・流通形態の転換期を示しており、最初の画期は中世の中での変化、2つ目の画期は中世から近世への変化と考えている。

ここまで、第1項(2)で石材ごとの変遷と年代、第2項で島根県における位置づけを確認してきたが、石材と分類が入り組んでやや煩雑になったくらいがあるので、以下に時期区分試案を表してまとめておく。推定年代については、紀年銘製品が少ないとから、今後多少の変動が起こりうることをご承知おきいただきたい(第38表)。

第38表 鰐淵寺五輪塔・宝篋印塔時期区分試案

	推定年代	鰐淵寺分類	五輪塔・宝篋印塔の特徴	鰐淵寺の使用石材	島根県内の使用石材	備考
I期	13世紀末～14世紀前半	1類	石塔造立初期 大型石塔の造立	白色凝灰岩 凝灰岩 花崗岩 流紋岩質凝灰岩	白色凝灰岩 凝灰岩 花崗岩 流紋岩質凝灰岩	
II期	14世紀後半～16世紀初め	2類	多量の搬入品、地元石材製の搬入模倣品增加。石塔造立数の増加	安山岩質凝灰岩 花崗岩 流紋岩質凝灰岩 凝灰岩質砂岩	白色凝灰岩 凝灰岩 花崗岩 安山岩質凝灰岩 角閃石安山岩 流紋岩質凝灰岩 凝灰岩質砂岩	14世紀後半～16世紀初めに北近畿から中～小型の搬入品、石塔造立数の増加
III期	16世紀	3類	搬入模倣品の簡略化・単純化が進み、新たな意匠(地域色)の生み出される時期	白色凝灰岩 凝灰岩 流紋岩質凝灰岩 凝灰岩質砂岩	白色凝灰岩 凝灰岩 流紋岩質凝灰岩 凝灰岩質砂岩 安山岩質火山疊凝灰岩	中世～近世へ石塔形態の大きな変化
IV期	16世紀末～17世紀前半	4類	地域色の強い近世的な五輪塔・宝篋印塔の盛行期	凝灰岩質砂岩	凝灰岩質砂岩 安山岩質火山疊凝灰岩	↓
V期	17世紀後半～18世紀	5類?	五輪塔・宝篋印塔の終末期 位牌型の始まりの時期	凝灰岩質砂岩	凝灰岩質砂岩 安山岩質火山疊凝灰岩	

[]は、今回の調査で確認され、使用が判明した石材

3 展望と今後の課題

これまで鰐淵寺石塔調査の成果を述べてきた。石造物研究の面では大きな成果があったが、鰐淵寺の具体的な歴史像に還元するには至らなかった。以下の2点を課題に調査は継続される必要があるだろう。

(1) 石塔石材の産地について

石塔の石材は産地を特定することで、その製品がどこから運ばれたかを示す指標になる。

今回確認された石材は、確定できなかった花崗岩、安山岩質凝灰岩の一部石材を除き、在地石材と思われるが、各石材の流通圏も視野に入れての検討が必要である。成果が上がれば、鰐淵寺の信仰圏に迫れる可能性があり、今後の進展に期待したい。

(2) 墓域の様相について

調査目的の1つに、石塔の数量や年代分布などを把握し、坊院の盛衰や墓域の変遷を復元することがあった。踏査では、松露谷地区に方形の石組区画と思われる石や内部に敷き詰めたと思われる玉石も確認された。しかし、石塔は原位置を保っておらず部材が散乱し、一基分に復元できる資料は少なかった。現状では、平坦地ごとの大きな年代差は見られないが、現状の分布は自然災害により原位置から斜面下への転落・埋没後に再整備された姿と思われる所以、造立当時の情景を復元するのは難しい。

発掘成果によれば、僧坊は13世紀に盛行を極めたが、石造物では13世紀代の製品は確認されなかった。山陰地方では12～13世紀代には石塔はほとんど造立されておらず、鰐淵寺でも同様の現象が確認できるといえよう。

岩橋康子は島根県東部では、①14世紀代に火葬墓が始まり、②15世紀になると集団火葬墓地の増加・小型石塔の造立が増加すると想定している（岩橋2006）。このことから火葬墓の始まりに伴い石塔の造立が増加することが想定される。それ以前は石塔以外の木製品の造立もしくは上部に墓標を伴わない墓であったと思われる。

石塔に先行する供養塔としては、木製塔婆が想定されるが、木製塔婆については、中森祥の山陰両県の資料についての報告（中森2012）があり、またこの報告を受けて、板碑と木製塔婆についてまとめた山口博之の論考がある（山口2014）。鰐淵寺においても、石塔に先行する供養塔として木製品が使用されていた可能性もある。今後、石組遺構やその下部遺構の確認も視野に入れ検討することが望ましい。最終的には鰐淵寺内部組織の様相へ還元することが目標である。

最後に銘文入り資料について紹介したい。今回の踏査で基礎2点が確認されている。1点は安山岩質凝灰岩（日引石）製の宝篋印塔基礎で、（右）「逆修尼妙阿」（左）「文安五□（戊カ）□（辰カ）」と読める。文安五年は1448年である。本石塔は、尼妙阿が生前に逆修供養のために建てた墓塔である。

もう一点は、凝灰岩質砂岩製の宝篋印塔基礎で、（右）「□□（逆カ）□（修カ）敬白（中央）賴成律師」（左）「文明十六□（年カ、卯カ）月日」と読める。文明十六年は1484年である。律師とは僧侶に対し与えられた位階のことで、法橋上人位に相当する第三位の僧のこと。中世以降には、一般的な僧

信にも与えられるようになることから増加する傾向にあるが、いずれにせよ、それなりの地位の僧侶とみてよい。□部分が判読不能だが、逆修であれば頼感律師が生前に逆修供養のために建てた墓塔であり、別の人名が入れば、その人物によって頼感律師の供養の為に建てた墓塔の可能性がある。

おわりに

出雲市においては、凝灰岩石切場や古墓の調査により 16世紀以降の石塔の確認はされていたが、中世段階の様相は判然としていなかった。今回の調査では特に 1~3 類において当該地域初となる資料が確認でき、島根県の石造物研究においても大きな成果となった。また、新資料の確認により、中世石塔から近世石塔への段階的な変遷が見いただした。これらの成果を鰐淵寺の歴史環境に還元するには、山内と山外地域の資料比較が必要であり、今後の継続した調査が望まれる。また、今回の地表面踏査では限られた成果しか上がらなかったが、将来的に斜面埋没土部分に発掘の鍬が入り新資料の発見があることを期待したい。

また、検討内容が形態的特徴の比較がしやすい宝篋印塔に偏り、五輪塔に関するまとめが不十分となった。今後の検討を約したい。

最後に、銘文判読においては、藤澤典彦氏と佐藤亜聖氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

(1) この 10 年の研究の進展により、伊根石製など、日引石製石造物に類する石塔の存在が明らかになっており(古川 2001), 筆者が前稿で日引石製として扱ったものの中に、他石材製(伊根石, 在地石材など)が混入している可能性が明らかとなってきた。この点については、現在別稿として準備中であるので、後考を約したい。

(佐藤利江)

参考文献

(報告書)

- 石川 崇 1998 「袋戻古墓」『松江市文化財調査報告書第一第 2 卸商業団地造成工事に伴う袋戻遺跡群発掘調査報告書一』第 16 集 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
- 伊藤徳広 2011 「第 3 節 米坂古墳群」「国道 485 号道路改築事業(松江五大橋道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂古墳群・貝先遺跡ほか」島根県教育委員会
- 遠藤正樹 2001 「A 区の調査」「斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ 大井谷Ⅰ遺跡 大井谷Ⅱ遺跡」国土交通省・出雲市教育委員会
- 角田徳幸・伊藤 智 2009 「島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2 三大寺遺跡」
- 近藤 正 1968 「正林寺の五輪塔群」『島根県文化財調査報告書』第 5 集 島根県教育委員会
- 杉原清一 1987 「4 宝篋印塔の比較」「二反田古墓」松江市教育委員会
- 西尾克己・伊藤徳広・大庭俊次 2000 「古代から中世にかけての火葬墓について」『社日古墳 -一般国道 9 号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 舟木 聰 2001 「経負坂古墳群」広瀬町教育委員会
- 守岡正司 1998 「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷跡」

上塙治横穴墓群（第7・12・22・23・33・35・36・37支群）』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

（論文ほか）

浅田芳朗 1961 「中世播磨の念佛衆」『兵庫史学』27

今岡利江 2001 「山陰の中世石造物についての一考察 - 日引石製品を中心に -」『島根考古学会誌』第18集

今岡利江・今岡 稔・舟木 聰 2005 「石室を持つ宝篋印塔2例」『日引』第7号

今岡 稔 1996 「山陰の石塔二三について5」『島根考古学会誌』第13集

今岡 稔 2013 「島根県の石造物と益田の御影石製石造物」『御影石と中世の流通 - 石材識別と石造物の形態 - 分布 -』高志書院

今岡 稔・今岡利江 2002 「山陰の石塔二三について10」『島根考古学会誌』第19集

今岡 稔・今岡利江 2011 「山陰の石塔二三について17」『島根考古学会誌』第28集

岩橋康子 2006 「島根県東部における中世墓の様相 - 火葬墓を中心として -」『古代文化研究』第14号

岩屋寺石造物調査団（間野大丞・木下 誠・稲田 信・西尾克己・今岡 稔）2008 「岩屋寺石造物調査報告書」『来待ストーン研究』9

大石一久 1996 「日島の中世・石造物・特に中央形式塔の分布とその問題点について -」『日島曲古墓群発掘調査報告書』長崎県若松町教育委員会

大石一久 2001 「日引石に関する一考察 - とくに長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について -」『日引』第1号 石造物研究会

岡崎雄二郎 2002 「松江市・安國寺所在の石塔について」『来待ストーン研究』4

松江石造物研究会（岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗・種口英行） 2006 「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景 - 松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術 -」『来待ストーン研究』7

佐藤利江 2014 「山陰の石造物観察と倉吉古石塔の編年について」『西日本における中世石造物の成立と地域的展開 - 石材と形態・様式に着目して -』2011～2013（平成23～25）年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号23320138）研究代表者 市村高男（高知県教育研究総合科学系黒潮灘化学部門教授）

中森 祥 2012 「山陰における中世前期の墓標と墓」『石川県埋蔵文化財情報』第27号

西尾克己・稲田 信・種口英行 2005 「玉湯報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究』6

古川 登 2008 「中世石塔、その広域編年の可能性について - 島根県松江市における二基の白来待石製宝篋印塔から -」『島根考古学会誌』第25集

古川久雄 1997 「中世石造物雑感」『ひびき』第1号 石造物研究会

古川久雄 2001 「丹後伊根石の宝篋印塔（1）」『日引』第2号 石造物研究会

種口英行 2004 「宍道町ふるさと文庫19 白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔」

福澤邦夫「中国・四国」『新版 仏教考古学講座』第3巻 塔・塔婆 雄山閣

間野大丞 1992 「五輪成出土の石塔群について」『松江考古』第8号

間野大丞 2001 「来待石製五輪塔・宝篋印塔について - 中世末から近世初頭を中心に -」『石造物研究会第2回研究資料 来待石を中心とした日本海文化』

間野大丞 2002 「伝土御門親王墓宝篋印塔について」『来待ストーン研究』4

山口博之 2014 「板碑と木製塔婆」『中世人の軌跡を歩く』高志書院

第7節 鰐淵寺の考古学的成果

平成21年（2010）度からはじまった科研による総合調査『科研報告』まで、鰐淵寺の考古学的調査は行われていなかった。

鰐淵寺は数多くの史料や寺宝から古代末まで遡り、伽藍や多数の僧坊が中世後期の14世紀には存在し、江戸期の木版絵図（以下、絵図）に根本堂を中心に僧坊が描かれている。創設については銅造観音菩薩立像が台座に記された「壬辰」銘は持統6年（692）とされたが、寺の成立時期や変遷は不明な点が多くかった。加えて、江戸期の絵図には描かれていない堂や僧坊とみられる平坦面が鰐淵寺境内地の各所に残っていた。絵図に記された鰐淵寺の四至を限る、寺の出入り口にあたる辺についても十分な踏査や分布調査がされておらず、石塔類も所在は知られていたが、実態は不明であった。

そのため、別所地域の平坦面を中心に、四至や墓地の確認、さらに鰐淵寺との関係が問題となっていた周辺の唐川地域、大寺谷地域について分布調査を行った。科研に伴う調査を含めて、僧坊については成立と変遷過程を明らかにすることを目的として、3箇所の発掘調査を行った。今回、発掘調査とともに、悉皆的に分布調査を行ったことによって、古代以降、現在にいたるまでの鰐淵寺の変遷を把握できた。

1 発掘調査の成果

発掘調査は、分布調査だけでは得られない、寺院の範囲や創設年代、変遷を把握するために有効である。
和多坊跡　『科研報告』において、中心的な僧坊であった和多坊跡の発掘調査を通して、「北院和多坊については平安末・鎌倉期以後、明治38年の焼失まで一貫して和多坊跡地の場所に存在したと考えるのが妥当』（『科研報告』29頁）となった。僧坊の発掘調査によって、現地表下に3層の造成土と遺物包含層を確認し、第1面は12世紀後半～13世紀前半の造成で12世紀後半の可能性もあること、第2面は13世紀以降16世紀の間、そして第3面は16世紀から17世紀の造成とした（『科研報告』77頁）。

今回の報告にあたり、層位と出土遺物の再検討を行い、出土炭化材の炭素14年代も参考にして、和多坊跡の第1面造成が13世紀後半以前に遡ることを追認したが、第2面の大規模な造成は13世紀後半以降となった。また、第3面造成については16世紀以降だが、17世紀以降まで降らない可能性が高いことになった（第5章第2節）。

等澍院南区　『科研報告』では、等澍院南区も和多坊跡と同じく三度の造成が行われ、第1面造成が12世紀代（かそれ以前）、第2面は12世紀以降16世紀までの造成、第3面は16世紀以降と考えた。今回の詳細な遺物の検討や炭化物の年代測定から、第1面造成は同じく12世紀代（かそれ以前）、第2面は13世紀後半以降15世紀代までの間、第3面は15世紀から16世紀代と造成年代をより細かく把握した（第5章第3節）。

鰐淵寺川南区　根本堂を中心とする境内を東西に流れる鰐淵寺川対岸にあたる。江戸期の絵図にみられる浴室の礎石が残っていた。造成土中から古代の須恵器や中世土師器、中世須恵器、白磁などの

土器類が出土しているので、この地区も古代末から中世にかけて寺として機能していたと推定される。17世紀までに3時期の造成面が確認され、和多坊跡や等澍院南区の造成時期とほぼ合うので、根本堂地区と同じ頃に大規模な造成が行われていた可能性がある（第5章第4節）。

小結 『科研報告』では、鰐淵寺の上段面にあたる、和多坊跡から南端の等澍院南区の平坦面まで標高約155mの標高でほぼ水平に造成面が通っている点を踏まえて、和多坊跡、現成院跡、等澍院南区の大規模な造成は、同じ時期に行われた可能性を指摘した（『科研報告』80頁）。

今回、鰐淵寺川の対岸にあたる浮浪滻地区の鰐淵寺川南区も、12世紀代には一体となって機能していたことを推定した。各地区的平坦面の造成年代は詳細には特定できていないが、12世紀代には川を挟んだ根本堂地区と鰐淵寺川南区で平坦面の造成が行われ、堂や僧坊が設けられた。その後、13世紀後半以降、15世紀代までに平坦面は広げられ、16世紀代にさらに僧坊の敷地は斜面側に向かって拡張され、17世紀以降は江戸期の絵図に描かれた僧坊を中心に存続していたとみられる。

考古学的には、鰐淵寺の変遷は三度の平坦面造成から、堂舎が整備された第Ⅰ期は12世紀代、第Ⅱ期に平坦面が拡張された13世紀後半から15世紀代、第Ⅲ期を16世紀以降とした（第5章第6節）。

2 分布調査の成果

鰐淵寺は別所地域の根本堂地区を中心に数多くの堂や僧坊が配置されており、全体の構造や変遷を把握する上では分布調査は有効である。同じように山中に展開した、慈光寺（埼玉県）においても平坦面の分布調査によって僧坊群を把握する上で成果が得られている（都幾川村1998）。鰐淵寺では、根本堂を中心とする別所地域については平坦面を中心に悉皆的な分布調査を行い、加えて、これまで関係の有無が問題になっていた唐川地域と大寺谷地域についても踏査を行い、次のような成果を得た。

寺域と道 鰐淵寺の四至は、北山遙堪峰、伊努谷峠、般若坂、心経院坂の四つ堂に囲まれた範囲である。江戸期の絵図にも、別所と呼ぶ境内地の境界に鰐淵寺から南の出雲平野方面へ通じる三つの道が描かれている。遙堪越（峠）、林木越（伊努谷峠）と両ルートの間にある矢尾越（矢尾峠・来成峠）である。3ルートの峠が鰐淵寺の境界であり、平坦面や石造物を確認した（第4章第4節）。

別所地域 別所地域は、鰐淵寺の中心をなす「根本堂地区」、鰐淵寺川対岸で、鰐淵寺原初の場である「浮浪滻地区」、歴代住職の墓地である「松露谷地区」と「川奥地区」からなる。各地域の平坦面から、古代・中世の土器類や瓦が出土しており、第Ⅰ期（12世紀代）に鰐淵寺として一体として機能していたことがうかがえ、採集された土器類の量や瓦から第Ⅲ期の16世紀代に最盛期を迎えた（第4章第5節）。

一方で、中世以降、根本堂が建つ平坦面は鰐淵寺の中核だったが、現在も寺院活動の中心場所で清淨に保たれているために遺物はほとんど採集できない。そのため、根本堂が建つ平坦面の造成がいつ行われたか明確にはわかっていないが、北院・南院の両院が統一した、第Ⅱ期に本堂などを建てるために行われたと推測した（第4章第5節）。

また、松露谷地区は、これまで墓地として知られていたが、礎石が確認された平坦面があり、建物が建っていた可能性もある。

唐川地域 鰐淵寺は、千手觀音菩薩を本尊とする北院と、藥師如來を本尊とする南院として、平安末・鎌倉期には北院が唐川地域、南院が別所地域というように、空間的には別の場所にあり、後に南北両院が同じ別所地域に集中することによって、現在のような景觀が生まれたと考えられていた。そのため、北院とされてきた唐川地域における堂舎の有無を確認するために現地踏査を行った。

『科研報告』では、発掘調査や唐川地区の分布調査の結果から、「もともと鰐淵寺の北院・南院はともに別所地域に存在し（大寺谷地域に南院の所在地を想定することについても再検討の必要があるろう）、とくに北院和多坊については平安末・鎌倉期以後、明治38年の焼失まで一貫して和多坊跡地の場所に存在したと考えるのが妥当」（『科研報告』29頁）とし、唐川地区に北院はなかったと結論づけた。分布調査では土師器や陶磁器などの遺物を採集できず、唐川地域に北院の存在は否定された。

大寺谷地域 南院を考える上で、南西に離れた大寺谷地域の調査も行った。大寺薬師には平安時代に遡る木造仏が祀られ、この谷奥へ約300mさかのぼった広瀬に大寺が存在していたとされていた。分布調査によって、平坦面や礎石、五輪塔を確認し、須恵器などの土器類を採集し、ここに古代に創建された寺院を推定したが、鰐淵寺の火災記録などから、この地に南院があったとみることはできない点を指摘した（第4章第4節）。

3 成立と展開

発掘調査および分布調査からみた、鰐淵寺の成立と中世以降の展開を考古学的に概観する。

(1) 草創期の状況

開創は推古天皇2年（594）、智春上人が推古天皇の眼病平癒を祈願し、また浮浪流で取り落とした仏器を飼ぐくわえたという寺号由来が伝わる。寺の成立にあたって、根本堂から離れた浮浪滻は重要な場所であった。浮浪滻では、仁平3年（1153）銘の石製経筒とともに数多くの銅鏡が出土したとされている。この地区からも中世土器を採集した。

鰐淵寺は清淨な山林に立地し、採集された須恵器から平安時代前期には、山林寺院として成立していた。久保智康氏は、山林寺院の空間構成について、寺域において金堂・塔などの僧地が講堂・食堂・僧坊・鐘楼・経蔵などの仏地とどのような関係にあるか、さらに聖地としての寺域が俗地といきなる位置関係にあるかを検討した。山林寺院は仏地的建物が寺域平坦面群の最奥に営まれ、僧地的建物は同一平坦面の前面や谷寄りもしくは下方の平坦面に展開すること、寺地が「淨処」であることが地形・環境上保証されることが重要とした（久保2001）。

現在の鰐淵寺は、最上段の根本堂地区に堂舎がまとまり、その下方の平坦面に僧坊が展開する。分布調査によって、文献史料からは十分にうかがえない寺の草創期は、別所地域が中心となっていたことが明らかになった。11世紀以前とみられる須恵器が、後の鰐淵寺の中核地域にあたる別所地域で広範囲にわたって採集され、平安時代前期には一定の活動を行っていたと推定できたが、堂の場所については手がかりを得ていない。また、中世に成立する鰐淵寺とのつながりも明確になっておらず、草創期の解明は今後の課題である。

(2) 鰐淵寺の成立と展開

発掘調査によれば、大規模な造成によって、現在の鰐淵寺境内地は形成されていた。

三度の造成 鰐淵寺の平坦面の敷地はそれぞれ形態が地形に大きく左右されており、一定の面積になつてない。全体的に方形を基調とするような坊の設計ではなく、地形を考慮して山を削り斜面に土盛りして平坦面としている。これが特徴である。

鰐淵寺の中核をなす根本堂地区は、標高120mから170mほどの傾斜地に、おおよそ5段の平坦面を造成して堂や僧坊が建つ。発掘調査によって、上から2段目の上段にあたる面は和多坊跡、等瀬院南区の成果から、ほぼ同じ時期に三度の造成が行われた可能性があり、それぞれの造成は寺全体におよび大規模であった。また、各平坦面の分布調査から、他の段についても12世紀以降に堂や僧坊となっていたことが推定できた。

僧坊の配置 根本堂地区を中心として、5段すべてにわたって僧坊が展開するあり方については、第Ⅰ期の12世紀段階で成立していたのか、あるいは、それ以降の第Ⅱ期（13世紀後半から15世紀代）や第Ⅲ期（16世紀以降）まで降るのかは、確定できていない。現状でみると、第Ⅰ期の上段（和多坊跡、等瀬院南区）の造成が大規模である点や、分布調査で各段の平坦面から12世紀代まで遡る土器類が採集できることから、第Ⅰ期に5段にわたる大規模な造成とそれに伴う堂と僧坊の形成が行われた可能性もある。ただし、根本堂地区の下段や最下段については発掘調査によって造成年代を把握できており、採集された土器類も上段などからの流れ込みの可能性もありうる。したがって、5段にわたる平坦面造成が一気に行われたか、順次、行われたかはよくわかつていない。

なお、現在みられるような参道がまっすぐに根本堂に向かい、その両側に僧坊が配置された整備は第Ⅱ期に行われたと推測しているが、詳しい年代は今後の考古学的な発掘調査を待つ必要がある。

また、鰐淵寺川対岸の浮浪瀬地区や松露谷地区でも12世紀代に遡る土器類が出土し、根本堂地区と同じく第Ⅰ期には寺として機能していたが、どのような施設が建っていたかは不明である。

北院・南院の僧坊 考古学的な分布調査によって、周辺の唐川地域、大寺薬師周辺地域が鰐淵寺の北院や南院にあたるとすることはできず、当初から鰐淵寺の南北両院は鰐淵寺中枢の根本堂を中心とする別所地域にあったという成果を得た。現在は、別所地域に置かれた両院の僧坊の位置と変遷が課題となっている。

僧坊の実態 分布調査で確認した平坦面数と史料に記された僧坊数との対応については、不明な点が多い。少なくとも鰐淵寺では僧坊の面積は50m²程度が必要と理解し、別所地域での平坦面は90箇所あった。そのすべてに僧坊があったと断定できないが、最盛期には別所地域に相当数の僧坊があった。また、50m²を大きく越える平坦面もあり、大規模な平坦面のなかには複数の僧坊が置かれていた可能性もある。

中世と近世の僧坊の敷地面積では、大山寺では近世に僧坊が大型化する（大山町教委2011, 235頁）。鰐淵寺においては中世と近世以降の僧坊の敷地面積について、違いがわかつていない。江戸期の絵図に描かれた僧坊の場合でも、そのあり方が中世段階から同じだったかも不明である。発掘調査の成果によれば、第Ⅲ期とした近世以前の16世紀代に最後の大規模な平坦面造成が行われ、その拡張され

た平坦面上に近世以降の僧坊も設けられていた。鰐淵寺では、17世紀以降は平坦面造成を伴う大規模な整備は行われず、16世紀代までに造成された敷地を利用して、建物や石垣などの建造や修理が行われたとみられる。

等湖院南区は発掘調査によって16世紀代頃に廃絶したことが判明し、江戸期の絵図に描かれていない点と整合し、分布調査の成果とも整合している。ここは16世紀代の火災（1551年か）によって廃絶していた（第7章第9節）。鰐淵寺の史料には三度の大火灾の記録があり、今後、鰐淵寺の変遷を考える上では、遺構の火災痕跡と記録との対応を究明することも求められる。

また、発掘調査や分布調査によって、中世瓦が根本堂を中心とする最上段だけでなく、等湖院南区をはじめとする各所で確認でき、瓦葺建物が根本堂以外の平坦面にも建てられていたことも明らかになった（第4章第3節）。

鰐淵寺境内の全体からみると、発掘調査を行った平坦面は3箇所にすぎないが、分布調査は廃絶年代を知る上ではきわめて有効であった。一方で、初期平坦面の造成年代は、実際には採集された遺物類よりも古い年代を示す傾向があった。

4 まとめ

史料などから、鰐淵寺の変遷は三期に区分されている（『科研報告』26-35頁）。

当初は大規模な伽藍が存在せず、修験の道場である鰐淵山として機能し、多数の堂舎や伽藍をともなう鰐淵寺の成立は平安末・鎌倉期であった。千手觀音菩薩を本尊とする北院と、藥師如來を本尊とする南院とが、浮浪流の藏王堂に祀られる藏王権現を中核として1つにまとめられた。その後、正平10年（1355）に、それまで別個に祀られてきた南北両院の本尊を左右に並べて祀る根本堂（本堂）が新たに創建され、南北両院の僧坊が再編された。この後、戦国期（16世紀）に至って、北院と南院の区別が消滅し、根本堂地区における堂舎の整備を経て、現在にいたる。

こうした史料から考えられる、鰐淵寺の平安末・鎌倉期以降の変遷と、考古学的な調査成果は整合的に理解できる。

平坦面の造成は三度あり、第Ⅰ期（12世紀代）の平坦面造成は根本堂地区だけでなく、別所地域全体におよぶ大規模なものであった。この頃には、鰐淵寺が伽藍や僧坊をともなって成立していたとみられる。その後、第Ⅱ期造成が13世紀後半から15世紀代の間に行われ、これは南北両院が正平10年（1355）にまとまった時期に対応するとみることができる。第Ⅲ期が最後の大規模造成であり、この年代は16世紀代の戦国期にかけてであった。その後、等湖院南区などの廃絶を経て、江戸期の絵図にみられる鰐淵寺の景観が成立していたと理解できる。

これまでの鰐淵寺の考古学的な発掘調査と分布調査によって、北院・南院の所在地問題が解決し、平安時代前期の草創期から現在にいたる変遷についても実態が明らかになりつつある。（大橋泰夫）

参考文献

- 久保智康 2001 「古代山林寺院の空間構成」『古代』110号, 143－167頁
- 久保智康 2013 「出雲鰐淵寺の神と仏、一鏡像・懸仏の尊格をめぐって—」『畝山学院研究紀要』第35号, 1－20頁
- 大山町教育委員会 2011 『大山僧坊跡調査報告書』
- 都幾川村 1998 「旧慈光寺跡」『都幾川村史史料2 考古資料』, 252－371頁

第8節 中世山林寺院の調査とその保護

1 中世山林寺院の調査と「山の寺」研究

近年、全国的に中世の山林寺院（山岳寺院）についての調査・研究がさかんになり実態解明が進んだ結果、その重要性の認識が高まりつつある。鰐淵寺もその一つである。

寺院に関する考古学的な調査・研究は、かつて、瓦に代表される遺物と礎石や基壇などの遺構により、その存在が認識しやすい古代寺院が注目されてきた。これらは飛鳥・白鳳寺院や国分寺など、およそ7・8世紀に建立されたもので、平地に立地して七堂伽藍をそなえたものが主体である。その後、平安時代にはいると、天台宗・真言宗の延暦寺や金剛峯寺などの本格的な山林寺院が営まれ、中世へと展開していった。こうした寺院は瓦を伴わず山中に埋もれることもあり、考古学的にはあまり注目されていなかった。

しかし、平成10年代ころから各地で保存目的の中世寺院、とりわけ山林寺院の調査がおこなわれるようになり、その実態も少しずつ明らかにされてきた。こうした状況をうけて、平成18年（2006）、筆者は『月刊文化財』518号において「中世寺院関連遺跡の調査とその保護」（坂井編 2006）を特集し、和歌山県根来寺・愛媛県等妙寺・滋賀県百濟寺・鳥取県大山寺・大分県六郷山などの報告を組み入れながら、その歴史的意義や調査の方法、さらには保護のあり方について見通しを述べた。

その後、大阪市立大学の仁木宏氏により、科研「日本中世の「山の寺」（山岳宗教都市）の基礎的研究」が2008年度から2011年度まで行われ、全国各地で資料収集と研究会をおこない、中世における山林寺院の実態解明が大きく進んだ（仁木 2011 b）。「山の寺」とは、従来おもに「山岳寺院」「山林寺院」「山中寺院」などと称されているものであるが、仁木宏氏（仁木 2011 a）によると、「山中や山麓に立地し、本堂・中心堂舎群（神社である場合も含む）を中心とし、数個から数百の坊院がひな壇状（テラス状）に展開する施設群の総称」である。禅宗寺院、町の寺（律宗・時宗・法華宗など）、村の寺（一向宗など）との対比でくくることができ、かならずしも深山・高山に立地するものに限らないという。山の寺は、日本列島の本州陸奥から九州薩摩まで分布し、およそ9世紀から16世紀に発達したが、中世の地域社会において、①宗教的な中心地、②もの作りや経済のセンター、③文化・芸能の発信地、④大きな政治・軍事力を保持などの点で重要な「核」のひとつとして、きわめて重要な歴史的意義を有していることが明らかにされた。

ここでは、上記の調査研究をふまえて、山林寺院を含む中世寺院関連遺跡についての史跡指定の歩み（文化庁 1991、坂井 2011）と現在の調査研究の状況を確認し、文化財としての鰐淵寺の位置付けについても簡単にふれておきたい。

2 考古学的調査以前の史跡指定（昭和50年代まで）

（1）戦前の史跡指定

現在の史跡の指定制度は、大正8年（1919）に制定された『史蹟名勝天然紀念物保存法』にはじ

まる。有形文化財は、明治 30 年（1897）制定の『古社寺保存法』に始まるので、それに遅れること約 20 年である。この法律には現在の指定基準にあたる「史蹟名勝天然紀念物保存要目」（大正 9 年 1 月 31 日）があり、11 項目中の 2 番目として「社寺ノ隣及祭祀信仰ニ関スル史蹟ニシテ重要ナルモノ」があげられている。神社・寺院と祭祀・信仰に関する遺跡が指定されるべきものとなったのである。この基準は後述する戦後の文化財保護法に伴う指定基準に引き継がれる。

戦前に史跡指定されていた中世の寺院関係は、山形県山寺（昭和 7 年）、神奈川県称名寺内界（大正 11 年）、奈良県吉野山（大正 13 年）、鳥取県三徳山（昭和 9 年）などがある（史跡の名称は当時のもので表示。以下同じ）。このほか昭和 9 年の建武中興 600 年にあたり、後醍醐天皇の南朝に関係する寺院が城郭とともに、史跡指定された。福島県靈山、滋賀県・京都府にまたがる延暦寺境内、京都府金胎寺境内、大阪府の金剛寺境内・觀心寺境内、兵庫県円教寺境内、奈良県金剛山などである。これら以外の南朝関係としては、京都府笠置山（昭和 7 年）、吉野山（大正 13 年）、鳥取県船上山行宮跡（昭和 7 年）、白山平泉寺城跡（昭和 10 年）。平成 9 年に「白山平泉寺旧境内」に追加・名称変更）もある。これらのうち「山」の名称のものは、吉野山（金峰山寺）、靈山（靈仙寺）など、基本的に山岳雪場、修験の拠点であり、寺院が存在する。このように、南北朝の動乱に際して、山林寺院が拠点となった事例が多いことから、中世の山林寺院が当時の政治・軍事・社会において、重要な役割を果たしていたことが容易にうかがえる。なお、吉野山・三徳山は名勝にも指定されており、自然の景勝地としての価値も認められていた。

寺院は称名寺を除くと、指定名称に「境内」が付されているように、庵寺ではなく寺院として機能していたものが対象となった。この時期に指定された古代寺院は、奈良県東大寺旧境内、京都府教王護国寺境内など機能している寺院のほか、奈良県の大安寺塔跡（昭和 43 年に「大安寺旧境内」として追加指定・名称変更）、山田寺跡、本薬師寺跡、全国各地の国分寺跡などがある。これらは発掘調査しなくとも基壇と礎石によって視認できるものであり、その範囲が指定の対象となった。寺院に限らず発掘調査で地下遺構を確認して史跡指定を図るようになったのは、埋蔵文化財保護行政の一環として発掘調査が一般化した戦後も昭和 40 年代以降のことである。

（2）戦後昭和 50 年代までの史跡指定

戦後の昭和 25 年に『史蹟名勝天然紀念物保存法』を継承した『文化財保護法』が制定された。これに伴う「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」（昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会告示第 2 号）のなかで、9 項目中の 3 番目として「社寺の跡又は旧境内その他祭祀信仰に関する遺跡」がある。

戦後も昭和 50 年代前半までは、考古学的な発掘調査をもとに指定されたものはない。この時期で注目されるのは、昭和 40 年代に鎌倉に所在する寺院が連続して指定されたことである。鎌倉五山の建長寺境内・円覚寺境内・寿福寺境内・淨智寺境内・淨妙寺境内、関東十刹の瑞泉寺、ほかに永福寺跡、覺園寺境内がある。永福寺跡は源頼朝が建立したことで知られており、池の立石・中島などがその名残をとどめている庵寺である。これをのぞくといずれも現存する寺院で、禅宗寺院が多い。いまも生きた寺院を鎌倉新佛教の歴史の場として積極的に評価しようとした文化庁の方針がうかがえる。

京都の隨心院境内・醍醐寺境内・妙心寺境内がこれと同じ時期に指定されていることも、関連しているものと思われる。

和歌山県高野山の金剛峯寺は、比叡山延暦寺とならぶ山林寺院であるが、指定は昭和 52 年である。このほか、能登の山岳靈場の拠点である石川県石動山（昭和 53 年）は 300ha もの広大な範囲が指定された。ここでは平成に入って大宮坊の大型建物が復元されるなど、整備事業が積極的に行われている。

3 考古学的調査による遺跡の解明

（1）根来寺の遺跡調査

昭和 40 年代以降、高度経済成長に伴い各地で土木工事に伴う発掘調査がさかんになっていった。こうしたなかで、大規模な中世の山林寺院が注目を集める契機となったのが和歌山県根来寺である。和泉山脈の山中に立地し、真義真言宗の本山としていまも法灯を継いでいるが、昭和 51 年に、現在の境内地外の山内において、大規模農道建設に伴い、天正 13 年（1585）豊臣秀吉の焼き討ちで焼失した明確な焼土層が見つかった。この後、和歌山県教育委員会による保存目的の発掘調査が継続され、現在の境内地の内外において、山の斜面を削平して造成した平坦面が数百にも及ぶことが明らかとなつた。これらは大小さまざまな僧坊であり、仏堂や住坊、倉庫・井戸が配され、なかには城郭のような石垣を築くものもあった。時期は 15・16 世紀中心で、周辺の地形・地割からみて、旧境内地は東西・南北とも 2 km にも及び、宗教都市的なり方が大きな注目を集めた。根来寺は、面積・人口、軍事力、隣国和泉国に及ぶ政治的影響力の大きさからみて、「日本一の山の寺」とされる（仁木 2011 a）。根来寺の遺構は中世後期において強大な宗教勢力であったことを雄弁にものがたり、焼き討ちの対象となる必然を示している。

（2）発掘調査と多様な分野の調査

このころ福井県一乗谷朝倉氏遺跡、広島県草戸千軒町遺跡、福岡県博多遺跡群など、中世遺跡の重要性が認識されるようになり、埋蔵文化財として扱う動きが各地で広がり、発掘調査が行われはじめた。

一乗谷朝倉氏遺跡と同じ福井県に所在する白山平泉寺は、平成元年度から始まった旧境内地のひろがりを確認する発掘調査で、川原石を敷き詰めた道路が見つかり、周辺の山林のなかに緩傾斜地を造成した僧坊跡が広い範囲で確認された。その結果、平成 9 年に「白山平泉寺旧境内」と名称変更するとともに、当初の指定地の白山神社境内（14.6ha）に加えて、東西 1.2km、南北 1 km、約 200ha に及ぶ範囲が追加指定された。このなかには現在の集落が含まれており、いま多くの宅地が遺跡のなかで落ち着いた佇いを見せている。

根来寺や白山平泉寺でとられた調査方法は、地形や地割、遺物散布など地表面の情報を最大限観察して、遺跡全体のおおよその範囲や構造を把握し、その知見をもとに最小限に発掘をおこなうことであった。山地における地表面の調査では、城郭の縄張図作成の手法が取り入れられ、構造の把握にきわめて有効である。近年延暦寺でも広大な範囲におびただしい数の僧坊跡が広がることが判明してい

るよう、廃寺だけではなくいまも機能している寺院においても、この手法により往時の実態をある程度把握でき、この種の調査が初段階で大きな意義をもつことが認識される。

こうした方法に加えて、多方面の分野から総合的な調査をおこなったのが、1990年代から始まった大分県国東半島の六郷山である。大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現県立歴史博物館）は莊園調査を早くからおこなうにあたって、文献史料のほかに失われつつあった地名・地割・水利、民俗・芸能など多様な分野から総合調査を進めた。こうした手法は六郷山でも採用され、これまで文化財指定にはつながっていないものの大きな成果があげられている。

4 近年の史跡指定

中世山林寺院とそれに類した遺跡は、地域を代表する文化財であり、これらを積極的に保存・活用し地域づくりにつなげる潮流もあり、和歌山県根来寺境内（昭和19年）、滋賀県百濟寺境内（平成20年）、愛媛県等妙寺旧境内（平成20年）、京都府石清水八幡宮境内（平成24年）、福岡県首羅山遺跡（平成25年）、福島県宮脇庵寺跡（平成26年）など、指定が相次いでいる。

石清水八幡宮はある面では延暦寺と共に京都における宗教的な拠点ともいえるが、山内で多数の平場が確認され、考古学的にも実態が明らかとなった。一方、地方の寺院では、等妙寺は京都法勝寺の法系下におかれ、鎌倉期の戒律復興運動のなかで、遠国四箇戒場として定められた天台律宗系寺院の拠点であった。また、首羅山遺跡は中世の国際港湾都市博多から約10km東の山中にあり、中世前期を中心に中国人名が刻まれた経筒や中国産とされる薩摩塔などの存在から、中国商人の信仰もうかがえる遺跡である。地方における山林寺院は地域固有の多彩な歴史をもつたのである。このほか、中世の経塚・墓・寺院からなる富山県上市黒川遺跡群（平成18年）や寺院の一角にある墓地である滋賀県敏満寺石仏墓跡（平成17年）もある。

山岳信仰、靈場の拠点については、かなり広大な範囲となり、調査や指定の事務手続きも容易ではないものが一般的である。福岡県宝満山（平成25年）をのぞくと、世界遺産登録と結びついたものが多い。平成16年に登録された「紀伊山地の靈場と参詣道」の構成資産である奈良県大峰山（平成14年）、和歌山県熊野三山（平成12年）、平成25年に登録された富士山（平成23年）、世界遺産暫定一覧表記載をめざした山形県・秋田県鳥海山（平成20年）である。このほか石川県白山、富山県立山についても調査が進められているなど、いずれも地域を代表する史跡の指定が世界遺産の登録運動と一体となって、地域の観光・地域振興の政策として推進されていることがうかがえる。

平成26年に重要文化的景観「小菅の里及び小菅山の文化的景観」に選定された長野県の修験の里、小菅は、史跡としての指定をめざしたことあったが、いまもその地で人びとの生活が営まれている。こうした場は史跡だけではなく、文化的景観としての価値も有している場合があり、いずれの選択がふさわしいかを検討することも必要であろう。

5 文化財としての鰐淵寺の意義

鰐淵寺は、井上寛司氏を中心とした平成9年度と平成21年度から23年度までの総合調査、それ

に続く今回の調査により、考古学のほかに歴史・美術・建築・石造物など多方面から調査研究され、寺院の変遷と実態がかなり鮮明となった。ここでは鰐淵寺の文化財としての意義について、簡単にまとめておきたい。

まず第一点は、往時の 394ha に及ぶ大規模な境内地がいまも継承されており、その範囲は寺に関連した遺構群がきわめて良好な状態で保存されていることである。現在の境内地は近世後期と推定される絵図に描かれた境内地と同じであり、その範囲はおそらく中世にさかのぼるものと推測される。鰐淵寺は僧坊と想定される平坦面の数は 90 箇所で、同じ山陰の鳥取県大山寺の約 170 箇所とくらべると少ないものの、中心部の僧坊群のほか、行場である浮浪滝や石塔類を伴う墓地などを含む、歴史的な境内地全域がいまなお維持されていることは重要である。

第二点として、寺に伝わる鰐淵寺文書の一群の史料を中心としてかなり豊富な記録があり、歴史的な変遷や位置付けが明確にできることである（第9節参照）。12世紀初頭以降の史料により、中世の鰐淵寺は、出雲一宮である杵築大社（出雲大社）に対する「國中第一之伽藍」とされ、14世紀半ばには南院と北院が統合されて、中世末に至り戦国大名に従属するようになり衰退していくことがわかる。まさに中世山林寺院といえる。今回の悉皆的な分布調査と部分的な発掘調査によって、考古学的に12世紀に大規模に造成され、16世紀までおおよそ3段階にわたる展開が明確となったが、こうした



第207図 大山僧坊跡全体図

動向は文書の存在によってより具体的に検討することができる。

第三点としては、第二点と密接に関連するが、鰐淵寺が出雲において杵築大社とともに中世社会の核をなす存在であったことである。中世における杵築大社は出雲全体の守護神と位置付けられるが、鰐淵寺はそれと対をなして国の鎮守として機能した。ここに出雲地域における歴史的特性がうかがえるとともに、中世山林寺院のあり方の一端を具体的に知ることができる。

第四点としては、文書以外に仁平2年(1152)の銘をもつ湖州鏡を伴った経筒(国重文)のほか、仏教彫刻や絵画、鏡や懸仏などの工芸品、建造物など数多く伝えられていることである。指定文化財は、国指定の重要文化財8件、県指定16件、市指定2件にも及ぶ。重要文化財には明治期の古社寺保存法により早くから指定されたものを含む。これらの豊富な文化財により、ここにおける宗教活動や信仰のあり方を知ることができるのである。

第五点としては、第一点とも関連して、海岸からわずか3kmの距離で手軽におとずれることができるものにかかわらず、山内にはいると深山幽谷の趣があり、秋の紅葉や春の新緑など四季折々の豊かな自然に囲まれていることである。いまも世俗から離れた中世山林寺院の佇いを感じることができる。

以上の点から総合的にみて、鰐淵寺の史跡、文化財としての価値は大きい。すみやかに史跡に指定され、その保存・活用が進められることを願うものである。

(坂井秀弥)

主要参考文献

- 坂井秀弥編 2006 「特集中世寺院関連遺跡の調査とその保護」『月刊文化財』518号 第一法規株式会社
坂井秀弥 2011 「山の寺と文化財の保存・活用」『中世「山の寺」研究の最前線』(仁木編 2011b)
辻 信広ほか 2011 『大山僧坊跡調査報告書』大山町文化財調査報告書第12集 大山町教育委員会
仁木 宏 2011 a 「日本中世における「山の寺」研究の意義と方法」『遺跡学研究』8号 日本遺跡学会
仁木 宏編 2011 b 『中世「山の寺」研究の最前線』(山の寺科研総合シンポジウム資料)
文化庁文化財部史跡研究会 1991 『國説日本の史跡』同朋舎出版
文化庁国指定文化財等データベース (<http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/searchlist.asp>)

第9節 鰐淵寺の歴史と変遷

1 浮浪山鰐淵寺の成立

鰐淵寺は、もとは鰐淵山と称する修験の道場として大きな脛わいを示したところである。後白河上皇の編纂になる『梁塵秘抄』に、「聖の住所はどこぞ、箕面よ勝尾よ播磨なる書写の山、出雲の鰐淵や日の御崎、南は熊野の那智とかや」と見えること、あるいは鎌倉前期の説話集『宇治拾遺物語』に、越前国（福井県）の山伏「けいたう房」が白山や伯耆大山・出雲鰐淵など全国の主要な靈場をすべてまわって修業をしたと記されていることなどから、それをうかがうことができる。

この鰐淵寺の開山は智春上人とされ、寺伝などでは「推古天皇の勅願」により同2年（594）に開創されたという。しかし、実際のところは平安初期の9世紀頃に山林修業の靈場として草庵が結ばれはじめ、その後平安末期の12世紀頃に全国的にも著名な修験の道場へと発展していったというもので、最初に草庵を結んで鰐淵山・鰐淵寺の基礎を築いたのが智春上人だったということなのであろう。同じく、縁起書の一種である文治2年（1186）の日付を持つ鰐淵寺古記録写（鰐淵寺文書）には、「推古天皇の御宇に智春上人が金剛藏王を勧請して地主權現とした」と記されていて、智春上人は鰐淵山の藏王信仰を開いた人物でもあるとされている。しかし、国宝の投入堂や藏王權現像で有名な伯耆三徳山三仏寺の事例などからも、藏王信仰が山陰地方に広がっていたのは11世紀頃と推定されていて、鰐淵山の場合も同様であったと考えなければならない。このように、開創期の鰐淵山の様相はすべてが智春上人に仮託して語られていて、その実態解明はなお今後の課題として残されている。

寺号の「鰐淵」も智春上人に因るものである。浮浪の滝で修行中の智春上人が、誤って滝壺（円水）に落とした閻伽の器を鰐が加えてきたことによるとされる。

そして、この縁起からも知られるように、鰐淵山における信仰の中心、最も神聖な場所とされたのは浮浪滝で、その滝の中間の洞窟の中に藏王堂が設けられ、そこに本尊の藏王權現が祀られた。仁平3年（1153）に写經衆僧円朗らが法華経8巻を書写し、石製の経筒に納めて「鰐淵山金剛藏王宝窟」に安置したといい、あるいは仁平2年（1152）に僧仁光が「藏王宝窟」に銅製湖州鏡を施入したなどいうのは、ともにそのことを示している。鰐淵山は出雲国における藏王信仰の拠点として、重要な位置を占めたのであった。

また、11世紀後半には如法経信仰の広がりを契機として天台宗延暦寺の勢力下に組み込まれていったと推察される。鰐淵寺の位置する別所町の「別所」とは、本寺から離れて修行者が草庵を結んだ所を意味していて、鰐淵山は比叡山延暦寺の別所として組織され、それが地名化していったと考えられるのである。

こうした鰐淵山に大規模な伽藍が創建され、本格的な寺院浮浪山鰐淵寺として成立してくるのは12世紀のことであったと推定される。

鰐淵寺の成立（鰐淵山から浮浪山鰐淵寺への転換）には、以上に述べた鰐淵山の内在的な発展とは別に、いま1つの重要な要因があった。弥山を挟んでその反対側に位置する杵築大社との関係である。

杵築大社は古代から中世への移行過程の中で大きくそのあり方を変化させた。最も大きな変化の第1は、律令制の変質にともなう古代的な宗教構造や神祇体系の転換に対応して、古墳時代以来の長い伝統を誇る国府域大庭の拠点を放棄し、出雲国造が杵築大社へと移住したこと、10世紀頃のことであったと考えられている。第2は、古代のオオナムチ（オオクニヌシ）に代わって、祭神がスサノオに転換されたことである。そして、この2つのことが鰐淵山と密接な関わりを持つこととなった。

1つには、杵築大社の祭神スサノオが鰐淵山の本尊蔵王権現と同体とされたこと、そしていま1つには、その上に立って両者で共有される中世神話が構築されたからである。中世神話とは、釈迦が初めて法華経を説いたとされる仏教発祥の地、インドの驚嶺山（靈巒山）の山塊の一部が砕けて東シナ海に漂っていたのを、杵築大社の祭神スサノオが引き寄せ築き堅めて出雲の国造りを行った、それを浮浪山といい、スサノオはその麓に自ら神殿を築き、その祭神としておさまった、というものである。ここに見える「浮浪山」（島根半島のことをいう）が、新しく成立した鰐淵寺の山号とされたところに、両者の密接な関係が示されていると考えられるのである。鰐淵寺には平安末期に遡る多数の神像が曳されていて注目を集めているが、それも上のことと密接に関わっているといえるであろう。

古代から中世への杵築大社の転換で注目される第3の点は、熊野大社に代わって出雲国内最上位の地位を認められ、出雲国全体の守護神（国鎮守）とされたことで、浮浪山鰐淵寺の成立とは「國中第一の靈神」である出雲国一宮杵築大社に対する「國中第一の伽藍」の成立を意味するものに他ならなかった。浮浪山鰐淵寺は中世出雲国一宮制の体制整備のための一環として創建されたものであったと考えられるのである。

その鰐淵寺が史料上に確認できる最初は、同じ日付を持つ建暦3年（1213）2月の『無動寺檢校坊政所下文』と『無動寺下文』（ともに鰐淵寺文書）及び『慈鎮讓状案』（華頂要略）の3通の文書である。出雲国衙から国富郷100町を寄進されて経済的基盤を確立するとともに、比叡山青蓮院門跡領無動寺（楞嚴三昧院）の末寺として、新たな歴史を刻むこととなった。

山陰地方の日本海沿岸部には、先述した伯耆大山をはじめとして、摩仁山や三徳山など山岳信仰や山林修業で栄えた靈山が連なっていて、古代以来ともに修験の道場や靈場として発展してきた。その中にあって、鰐淵寺のみは中世に「國中第一の伽藍」という、有力地方顯密寺院としての道を歩むこととなったわけで、そこに大山寺以下とは異なる独自の特徴が生まれることとなった。中世山陰の天台宗の古刹の中で鰐淵寺だけが多数の中世文書を残し、今日に伝えているのも、このことと密接に関わっているといえるであろう。

2 中世の鰐淵寺と杵築大社

成立期の鰐淵寺は、①宗教活動の拠点をなす寺内（鰐淵寺の境内）と②国衙から寄進された一円的所領としての国富郷（莊）、および③各地に散在する一筆ごとの散在所領とからなっていた。このうち①は、『雲陽誌』に鰐淵寺の境界を示すために4個の地蔵堂が建てられたという、浮浪灘を中心とする遙堪岬・伊努谷岬・般若坂・心経院坂のその四至内を指し、そこは守護使不入の地、すなわち鰐淵寺の自治的支配権が排他的に及ぶ領域とされ、山林等の所有権もすべて鰐淵寺に属した。その歴史

的伝統は 800 年以上を経た現在にも及んでいて、現在もその全域がほぼ鰐淵寺の所有地となっている。これに対し②は、鰐淵寺の宗教活動全般を支える経費に充てられたもので、その一部は次の③と合わせ鰐淵寺を構成する各僧坊の寺僧らに配分され、僧坊領とされた。③には、それぞれ名目を定めて祭礼費用を捻出するための料田として国衙などから寄進された田地と、各僧坊の寺僧らが両親や一族などから直接譲渡あるいは寄進された田地などが含まれていた。一方、②にはその当初から現地を支配し農民からの年貢徴収などに当たる地頭が存在しており、その収益の配分などをめぐって鰐淵寺側と鋭く対立することもしばしばであった。

その鰐淵寺の意思決定は、寺僧のうち学問を主たる任務とする衆徒（大衆）の全員が参加して開催される評定（集会）においてなされる仕組みとなっており、それが最高の意思決定機関でもあった。中世の鰐淵寺には、ほかに衆徒の下層にあって修業や寺院の諸雑務遂行を主たる任務とする行人、および寺外に住む聖や修驗の行者という、2つの異なる身分集団が存在したが、彼等が評定に参加することはなかった。その点で、学僧・大衆と行人の両者が合わさって大衆を構成する、紀伊国（和歌山県）高野山以下の他の多くの顯密寺院とは異なっていたといえる。また、衆徒は領主層、行人は百姓層の子弟によってそれぞれ構成されるのが一般的な原則とされたようである。

中世の鰐淵寺は、3 度にわたって火災に見舞われ、それを機に寺院の景観も大きく変化することになった。最初の火災は創建から間もない天福年中（1233～34）のことと、三重塔や七仏道場を初めとする「数字の伽藍」が焼失したという。2 度目はそれから約 100 年後の嘉暦元年（1326）2 月で、同じく北院三重塔以下「大小十余宇（の堂社）悉く焼失」したという。そして 3 度目は戦国期の天文 20 年（1551）で、失火により堂舎が灰燼に帰したという。

この内、2 度目の火災はとくに大規模だったようで、その復興に手間取り、正平 10 年（1355）に至つても「一宇として未だ建立に及ばず、空しく廿余年を送り畢んぬ」という状況であった。しかし、復興が困難な背景には、いま 1 つの深刻な問題が存在した。南北両院の対立である。

鰐淵寺はその草創期以来、千手觀音を本尊とする北院と、藥師如來を本尊とする南院とからなり、それぞれ長吏によって統括される構造となっていた。寺僧たちの日常的な学問・修業と生活の場である僧坊は「北院和多坊」「南院桜本坊」などと称して、それぞれ南北両院のいずれかに属していたのである。この両院は例え北院が「北谷」とも称されたように、寺中（別所の中核地域）の内の北側と南側にまとまりを持って存在していたことによると考えられるが、その具体的な範囲は明確でない。

この点について、従来は一般に北院が唐川地域、南院が大寺谷地域もしくは別所地域という、距離的にも遠く離れた別の場所に存在し、それらが浮浪滝の藏王権現を中心として1つに統合されていたと考えられてきた。しかし、この間の発掘調査や精細な現地踏査などを通して、こうした理解が誤っていること、正しくは伯耆大山寺における南光院・西明院・中門院の「一山三院制」と同様に、ともに別所地域の中の地域区分として考える必要のあることが明確となった。

問題は、鰐淵寺に寄進された国富郷 100 町が実際には南北両院長吏にそれぞれ 50 町ずつ分けて管理するよう命じられたことからも知られるように、南北両院がそれぞれ強い自立性を持っていて、寺院としてのまとまりに欠けるところがあったことにある。そうした矛盾がとりわけ深刻な形で現れ

たのが、鎌倉末期嘉暦元年の火災にともなう鰐淵寺の再興計画をめぐってであった。北院では、天福年中の復興の際から出雲国守護佐々木氏と結んで再興事業を進めていたこともあって、それから取り残された南院では討幕運動に敗れて隠岐に流された後醍醐天皇や南朝勢力と結んで再興計画を推し進めようとした。しかし、南院長吏源によるこの積極的な再興計画は、北院が北朝・室町幕府権力と結ぶことで、南北朝の争乱を直接寺内に引き込み、鰐淵寺そのものを解体に導くという、極めて深刻な事態へと自らを追い込むこととなった。

この苦境から脱するため、正平10年3月に全山の寺僧122名（大衆89名、行人33名）が連署し、47ヶ条に及ぶ取り決めを設けて両院和合、一味同心していく旨を誓い合った（これを一般に「正平式目」という）。そして、この契約をより確かなものとするため、南北両院の本尊を左右に並べた本堂を新たに南北両院の中間に創建し、これを鰐淵寺の中核施設としての根本堂と称した。現在私たちが目に見える根本堂を中心とする鰐淵寺の景観は、このようにして南北朝期の14世紀中頃に成立したものなのである。

南北朝内乱期の困難を乗り切った鰐淵寺は安定性を取り戻し、寺領も從来の国富郷（註）に加えて、新たに漆治郷（直江郷）を獲得し、この両者がこの後の寺領の中核に位置づけられることとなった。

ところで、中世の浮浪山鰐淵寺は、その成立の経緯からも明らかなように、杵築大社との間に独自の密接な関わりを持っていた。1つは、国造など大社神官との共同による、年中行事としての大社祭礼の執行で、正月20日に鰐淵寺僧が大社まで出向いて内經所で大般若経の転読を行うほか、3月1日から3日に至る三月会では、同じく鰐淵寺僧が出雲国衙によって整えられた大社内外の外經所に出向き、3日間にわたりて大般若経の転読を行った。このうち、とくに三月会は「山陰無双の節会、国中第一の神事」とも称される重要な祭礼で、国造以下の大社神官と鰐淵寺僧が神前で仏事を執り行うのに合わせて、鎌倉幕府の御家人（当初は国衙領の領主）が交替で分担しその費用を貯う相撲・舞も催され、これら神官・僧侶と俗人の領主（御家人）の3者が共同でその任に当たった。これに対し、いま1つは杵築大社の造営の際、その造営の期間中、鰐淵寺僧が寺内で大般若経の転読を行うとともに、遷宮に際しては大社神前まで出向いて遷宮式に参加した。

これらのこととは、先述のように中世の大社祭神スサノオと鰐淵寺の本尊蔵王権現とが同体とされたことに基づくものであって、全国的にも当時はごく一般的に見られた「神仏習合」の一形態といふことができる。但し、その具体的な内容という点では、とくに次のことに注意しておく必要がある。それは、1月20日と3月1～3日の両日を除くそれ以外の祭礼（年中行事）は、大社神官と鰐淵寺僧がそれぞれ別個に、それぞれの場所で自己完結的に執り行っていて、相互の自立性が極めて顕著だということである。とくに杵築大社の場合、年中行事の中に鰐淵寺僧が出向いて行う以外の仏事がまったく含まれておらず、また後述する戦国期以前、公式には大社境内に一切の仏教施設が存在しないものとされた。すなわち、杵築大社と鰐淵寺はそれぞれ寺院・神社として組織的・空間的・機能的に明確に区別されながら、しかもなお機能分担を通じて両者が相互補完的に一体となって機能する構造となっていたのであって、これは「神仏隔離原則に基づく神仏習合」の最も典型的で象徴的な事例と考えることができる。

3 中世末から近世の鰐淵寺

前項で述べた中世鰐淵寺及び杵築大社との関係のあり方は、中世末期の戦国期に至って大きく転換を遂げる。1つには、世俗の政治権力である戦国大名に対する従属性が一挙に強まったことである。

16世紀初頭の永正6年（1509）、守護京極氏から出雲国成敗権の正統な後継者としての地位を認められた尼子経久は、鰐淵寺に対し3カ条からなる掟書を示してその遵守を求めた。「寺領分の百姓の子は從来通り衆徒にしてはならない」「衆議に従わない者は（尼子氏が）直接介入して排除する」など、寺院の構成や運営などの鰐淵寺の根幹に関わる問題に直接世俗権力が介入することは、從来まったく見られなかつたところであり、そこに王法仏法相依論に基づく世俗政治権力と宗教勢力との相互依存・補完関係という、中世的な宗教構造が大きく転換、解体していった様子をうかがうことができる。それは杵築大社についても同様で、同じ永正6年から尼子氏の手による杵築大社の造営が始まったが、それは歴史上初めて大社境内に公然と仏教施設を建立するというもので、これ以後大永・天文年間（1521～37）にかけて鐘楼や大日堂・三重塔・輪藏が相次いで造立されるなど、その動きは急速に拡大していった。

こうした変化が起こってきた背景には、地域民衆の歴史的成長にともなう荘園制支配の行き詰まりとともに、鰐淵寺内部における大衆と行人との差別などの身分制秩序の動搖があり、戦国大名権力に依存しなければそれらの問題を解決することができないという事情があった。戦国期に至って寺院運営のあり方が大きく変化するのも、そのためであったと考えられる。從来鰐淵寺における最高の意思決定機関とされてきた大衆集会に代えて、いくつかの有力僧坊の坊主達による衆議によって意思決定を行う評定衆制が採用され、またその決定された事項を評定衆が輪番で執行に当たる年行事制が新しく創出された、などというのがそれである。このうちの執行機関について若干の補足を行うと、歴史的にはおよそ次のような変化をたどってきた。

まず、鰐淵寺の草創から鎌倉末期までは、南北両院の長吏と、その上位にあって本寺比叡山延暦寺から任命された別当（実際には鰐淵寺に向せず、必要に応じて別当代が鰐淵寺に派遣された）の3者によつて執行機関が構成された。それが、正平10年の正平式目の制定を機に、同じく別当と南北両院長吏ではあっても、別当も鰐淵寺在住の僧をそれに充てることとした。これを「一山三長老制」といい、それが戦国期に至つて年行事制に変化したのであった。

さて、中世鰐淵寺および杵築大社との関係のあり方が戦国期に至つて大きく変化したいま1つの点は、「神仏隔離の原則」が大きく後退し、他の一般の寺社と同様に、杵築大社と鰐淵寺、神社と寺院との癒着・一体化が大きく進展したことである。これを杵築大社に即していふと、先述した多数の仏教施設の大社境内への造立にともなつて、『懷橘談』が「宮中を見れば、…社とも阿良々伎（仏堂のこと）とも見分けがたし」と述べるような景観が生まれたこと、あるいは天文20年（1551）以後、尼子氏の命によって大社造営を任務とする本願僧が常置されることとなり、その本願が国造を抑えて大社支配の実権を掌握していくことなどとして確認することができる。鰐淵寺に関しては、尼子晴久の命に基づいて行われた天文19年（1550）の大社遷宮式以後、鰐淵寺僧が大社本殿内にまで入つて

国造と相対儀礼を行うようになり、そうしたことでもって鰐淵寺僧が杵築大社の「社僧」、あるいは鰐淵寺が杵築大社の「神宮寺」「奥の院」などと称されるようになったことが知られる。

これらのことは、いずれも法華經による領国統合と平和実現の達成を目標として掲げた尼子氏の宗教政策によるものであったが、その基本方針は次の毛利氏時代にも継続され、永禄13年（1570）からは毛利元就の命で正月・5月・9月の1日から7日の各7日間大社神前で鰐淵寺僧による護摩供も行われることとなった。加えて、毛利氏時代には太閤検地が実施され、天正19年（1591）に寺領はそれまでの約3分の1（935石余）に縮小されることとなってしまった。

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦で敗北し、防長両国に転封となった毛利氏に代わって、出雲国は堀尾氏・京極氏そして寛永15年（1638）以後は松平氏の支配するところとなったが、この過程で鰐淵寺領はさらに削減され、元和2年（1616）以後、近世を通じて300石となり、別所・唐川・河下の3村が新たに「門前3カ村」としてその中核に位置づけられることとなった。最盛期の石高が3000石以上とされたことからすると、10分の1以下に縮小されたこととなる。

こうした寺領の縮小が僧坊数など、鰐淵寺の規模の縮小につながったことは容易に想像できる。『雲陽誌』が記された享保2年（1717）以後、近世を通じて鰐淵寺の僧坊数は12であったが、太閤検地以前の鰐淵寺の最盛期にはこれを超える遙かに多数の僧坊が存在したことは疑いない。現状ではなおその数を確定することができないが、僧坊の建立が可能と判断される削平地が90箇所も確認できることからすると、それに近い数の僧坊が存在したと考えることは十分に可能だと考えられる。因みに、鰐淵寺ではかねてから「坊院軒を並べること凡そ三千余坊」（弘治2年（1556）6月の「鰐淵寺二答状案」、鰐淵寺文書）などと唱えられていて、もちろんこれをそのまま認めるとはできないが、同じく僧坊跡と推定される平坦地約170箇所に対し、実際の中世僧坊数が約160坊と推定されている伯耆大山寺の事例を念頭に置いて考えると、中世の景観復元には十分な注意が必要だといえよう。

中世から近世への移行にともなう変化という点で、いま一つ重要なのは杵築大社との関係である。鰐淵寺と同じく、寺領を半分以下に縮小された杵築大社でも、多数の神官が職を失って大社から離脱し、あるいは多くの年中行事が廃絶に追い込まれるなど、大きな困難に直面した。この困難を克服し、再び勢力を回復するために、杵築大社では出雲国を越えた全国的な規模での信仰圏の拡大に努めるとともに（御師の活躍と神在祭の肥大化など）、祭神を再びオオクニヌシに転換・回帰させ、古代の天皇神話と出雲神話の復活を図ろうとした。この政策は、吉田神道に対抗する形で唯一神道・大社神道の提唱として提起されたこともあって、寺院・仏教からの分離・独立を強く主張するものとなった。こうした大社神官等の動きをさらに促進する役割を果たしたのが松江藩主松平直政とその抱え儒者黒沢石斎である。石斎は林羅山仕込みの儒家神道論に基づいて鋭く排仏論を展開し、寛文年間（1661～73）の正殿式造営と合わせて、杵築大社を全国の先駆けとなる「神仏分離」へと導いた。寛文4年（1664）以後、大社境内から仏教施設が次々と撤去され、翌年にはその作業が完了。それを受け本殿の造営に着手し、寛文7年（1667）3月に竣工、4月に遷宮式が行われた。鰐淵寺に対しては、寛文6年末に杵築大社から「（来年）正月廿日の經より三月会説經の儀、以来請け間敷」との通告があり、あっけなく400年余りに及ぶ伝統に終止符が打たれることとなった。

寺領の削減もさることながら、杵築大社との断絶は「國中第一の伽藍」である鰐淵寺の存立基盤をその根底から否定するものであったから、その影響には極めて深刻なものがあった。とりわけ問題となつたのは、鰐淵寺全体の本尊藏王権現の垂迹相手（大社祭神スサノオ）が消滅してしまつことである。しかし、浮浪山の山号からしても、鰐淵寺にとってスサノオとの関係は不可欠であったから、それに代わる新たな理論武装が求められた。それに応える形で登場したのが、常行堂の守護神摩多羅神＝スサノオ説である。この点に詳しく立ち入る余裕はないが、本来は常行堂の本尊阿弥陀仏とセツトをなす形で祀られてきた摩多羅神が、天正初年頃から新羅明神＝スサノオと理解されるようになり、藏王権現＝スサノオ説が否定される中で、藏王権現に代わる鰐淵寺全体の新たな鎮守神としての地位を獲得していったこと、一方杵築大社の側でも鰐淵寺との関係の断絶をスムーズに進めるために必要と感じたのか、摩多羅神を祀る社殿を大社造とすることを承認したこと、その結果、杵築大社の「神仏分離」が完成した寛文7年（1667）に、鰐淵寺では常行堂とつなぐ形で大社造の摩多羅神社が成立し、これ以後、藏王権現はスサノオではなく不動明王として理解されるようになったと推定されること、などが指摘できる。

かねてより指摘されてきたところであるが、鰐淵寺には多数の仏像や懸仏が存在するにもかかわらず、藏王権現像が1体も残されていないという大きな謎が存在する。これについて、牛頭天王像がそれに当たるとの見解も示されているが、古代・中世を通じて鰐淵寺の本尊（南北両院の本尊とは別）として極めて重要な位置を占め、三徳山三佛寺と同様の藏王堂・投入堂が建立され続けた鰐淵寺において、その本尊となる藏王権現像が1体も作成されなかつたとは到底考えがたい。鰐淵寺の末寺で、同じく藏王権現を本尊とする法王寺に藏王権現の懸仏が存在するのも、その1つの証左となろう。これは、かつて藏王堂に祀られていた藏王権現像がその後の何らかの事情で鰐淵寺から姿を消したと考えるのが、最も妥当といえるのではないだろうか。そうした理由の1つとして考えられるのが、以上に述べた中世から近世にかけての巨大な転換、そしていま1つとして考えられるのが、次に述べる明治初年ににおける激動である。今後改めて慎重な検討を進めていくことが重要となろう。

4 近代および現代の鰐淵寺

明治維新後の鰐淵寺は、明治2年（1869）の神仏判然令によって最初の衝撃と試練を受けることになった。神仏判然令が廢仏毀釈の運動と連動していて、松江藩神社調役などの中に、摩多羅神はスサノオと同体、鰐淵山は杵築大社の奥の院だから、鰐淵山は神地であり、仏堂を毀して僧侶を放逐し、寺領等を大社に返納すべきだと主張する者が存在したからである。鰐淵寺側では、村田寂順が摩多羅神はインドから招來された天台仏法擁護の神であって、日本の神祇には属さないとの反論を展開するなどしてこの苦境を乗り切ったが、この論争は別の観点から見れば、鰐淵寺がかつては一方的に断



第208図 三佛寺藏王権現像
(三佛寺所蔵、鳥取県立博物館写真提供)

絶された杵築大社との関係を、今度は自主的・主体的に克服・清算し、天台宗の古利として自立していくための重要な機会になったと評価することもできるであろう。

鰐淵寺にとっての第2の試練は明治4年（1871）の上地令である。これは、広大な領域を誇る寺社の所有地を境内地を除いてすべて収公し府県の管轄下に置き、もとの所有者には扶持米を支給するというもので、その経済的打撃は極めて大きなものであった。しかし、鰐淵寺の場合、上地令に定められた但し書き（地主的土地所有は収公の対象外）に基づいて、鰐淵寺が地主として所有し經營していた寺領300石は、そのまま継続することが認められ、財政危機を乗り切ることができた。

この300石というのは、数字としては近世と同じであるが、その内容が異なっていたのはいうまでもない。近世初頭以来の鰐淵寺領の中核を担ってきた「門前3カ村」に対する支配権は、上地令によって明確に否定されたのであって、近代の寺領300石の中心となったのは、慶応2年（1866）の第1次幕長戦争に際し、村田寂順が松江藩のために摩多羅神社で戦勝祈願の祈祷を行い、それに成功を収めたとして松江藩主から賜った200石を中心とするものであった。

これらの所有地が鰐淵寺の手を離れるのは第2次大戦後、昭和20・21年（1945・46）の第1次・第2次農地改革に際してのことである。また、明治4年に上地された山林は、他の保安林と合わせて約300町が明治39年（1906）に鰐淵寺に払い下げられ、戦後の農地改革でも山林が解放の対象外とされたこと也有って、そのまま現在にまで及んでいる。

近世からの転換という点で重要なのは、年行事制の廃止と住職制への移行である。これは、明治5年（1872）末の太政官布告に基づいて同7年から実施されたもので、無住の寺院をすべて廃寺処分にするという國の方針に対抗するためのものであった。というのも、鰐淵寺は根本堂ほかの仏堂や僧坊12坊などを含む總称で、各僧坊のことを除く寺務については、12坊中から年行事2人（近世以後2人に定めた）が選ばれ、その執行に当たっていた。しかし、國の規定では根本堂などにもそれぞれ住職を置かねばならないこととなるため、僧坊の住職を兼ねる形で1人の住職が鰐淵寺全体の寺務を掌ることとした。これが現在につながる住職制で、初代の伽羅陀覺浪からだくわうろうから数えて、現在の佐藤泰雄師は第7代ということになる。また、昭和6年（1931）には鰐淵寺と松本坊が合併することとなり、鰐淵寺住職は松本坊を鰐淵寺本坊として、當時ここに居住することとなった。現在いう鰐淵寺本坊はこのようにして成立したのである。

僧坊については、明治維新以後も近世と同じく12坊が存続したが（但し、僧坊名には変化がある）、明治21年（1888）に覺城院、明治38年（1905）に和多坊・惠門院がそれぞれ焼失するなど、第2次大戦後まで存続したのは松本坊・是心院・洞雲院・等澍院・現成院の5坊であり、現在は鰐淵寺本坊としての松本坊のみということになる。

明治30年（1897）古社寺保存法が成立し、寺社が有する建造物、宝物の中で、歴史的にまた美術品として価値あるものを内務省が指定し、必要な場合修理のための国庫補助を行うことを定めた。これを受け、明治35年（1902）以後、銅造觀世音菩薩立像をはじめとして多数の文化財が國の指定（旧国宝）とされていった。また、明治30年代初め頃から鰐淵寺が優れた名勝であるとの評価が定着し、大町桂月や河東碧梧桐などの文化人が度々鰐淵寺を訪れ、広く鰐淵寺を全国に紹介した。

鰐淵寺は、中世末・戦国期頃に成立し、近世の宝暦年間（1751～64）頃からいっそう盛んになったとされる出雲觀音靈場 33箇所の3番に当たるが、昭和55年（1980）には新たに中国觀音靈場巡礼が発足し、鰐淵寺は同じく33箇所の中の25番に指定された。自然環境という点でも、昭和39年（1964）には県立宍道湖北山自然公園に指定され、昭和52年（1977）からは中国自然歩道が建設され、鰐淵寺周辺ハイキングコースマップなども作成されている。

（井上寛司）

参考文献

- 井上寛司編 1997『出雲國浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺
- 井上寛司編 2012『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために－』
2009（平成21）年度～2011（平成23）年度科学研究費補助金 基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号
21320123）
- 大社町史編集委員会 1991『大社町史』上巻 大社町
- 大山町教育委員会 2011『大山僧坊跡調査報告書』
- 鳥取県 1972・73『鳥取県史』1・2

第8章 結語

第1節 鰐淵寺の歴史的価値

浮浪山鰐淵寺は、島根半島西部の山塊の一角に位置する。日本海からわずか3kmしか内陸に入っていないが境内は深山幽谷の趣があり、春の新緑や秋の紅葉など四季折々に景色を変える豊かな自然に恵まれている。いまなお中世山林寺院の佇まいを残す鰐淵寺は、境内を訪れる人々を悠久の歴史へと誘う古刹である。

1 文献史学の成果

鰐淵山の時代 鰐淵寺はもと鰐淵山と呼ばれ、寺伝などでは智春上人の開基とされ「推古天皇の勅願」により推古2年(594)に開創されたといわれる。寺号の「鰐淵」は、智春上人が誤って浮浪滻ひきわだの滲壺に落とした閻伽の器を鰐がくわえてきたことに因む、とされる。

もともと、鰐淵山は浮浪滻を中心とした修験の場であり、『染塵秘抄』に「聖の住所はどこぞぞ、箕面よ勝尾よ播磨なる書写の山、出雲の鰐淵や日の御崎、南は熊野の那智とかや」と謡われたように、平安時代末期には、全国的にも著名な信仰の対象へと発展した。そして浮浪滻の裏側は洞窟となっており、そこに藏王権現が祀られていたと考えられる。このころ、「鰐淵山金剛藏王宝窟」に安置された石製経筒(重要文化財)の銘文によると、仁平3年(1153)に僧円朗らが書きし終わった如法妙法蓮華経8巻を経筒に納めたという。この銘文からは、比叡山延暦寺の慈覺大師(円仁)に始まった如法経信仰が鰐淵寺に浸透していたことがうかがえ、両者の本末関係が成立していく過程が垣間見える。それは、出雲における藏王信仰の拠点である鰐淵山が、比叡山延暦寺の本寺に対して「別所」と呼ばれる所以でもあった。

浮浪山鰐淵寺の成立と南北両院の統一 12世紀後半になると堂塔・僧坊に関する記録が現れ、13世紀初めには寺院鰐淵寺へと発展した。鰐淵寺は草創期以来、千手觀音を本尊とする北院と藥師如來を本尊とする南院からなっていた。建暦3年(1213)には国富郷100町が寺領として最初に認められ、南北両院の長吏が50町ずつ支配する体制となった。南北朝期には、北院が足利尊氏と結んだのに対して、南院が隠岐に流された後醍醐天皇や南朝勢力と結びつきをもった。これにより、南北朝の争乱を寺内に引き込むこととなつたため、北院と南院の対立が深まり、鰐淵寺の存続が危うくなった。この危機を脱するため、正平10年(1355)に全山の寺僧122名(大衆89名、行人33名)が連署し、一味同心していくことを誓い合って南北両院は和合、統一され、それまで別個に祀られてきた南北両院の本尊を左右に並べて祀る根本堂が新たに創建された。

杵築大社との神仏習合 いまひとつ中世で注目すべき点は、杵築大社(出雲大社)との強い結びつきである。鰐淵寺の西約6kmに杵築大社は位置しており、鰐淵寺が「國中第一之伽藍」と称されるのに対して、杵築大社は「國中第一之靈神」と称された。両者が宗教上、対をなして出雲国を代表する

存在であったことがうかがえる。中世の杵築大社において祭神がスサノヲとされたのは、鰐淵寺が藏王権現をスサノヲと同体とみていたことが影響している。中世杵築大社の三月会では、鰐淵寺僧が大般若経の転読を行った。三月会は杵築大社のもっとも重要な祭礼となり「山陰無双の節会、国中第一の神事」と称された。この鰐淵寺と杵築大社の関係は「神仏隔離の原則に基づく神仏習合」という日本の宗教全体に認められる最も本質的で典型的な事例と評価できる。

戦国大名とのかかわり 戦国期には、大きな転換をとげる。それは戦国大名による介入である。尼子氏は自らが出雲国における新たな統一権力であることを内外に誇示するため、寺社勢力を抑圧しようとした。尼子経久は、永正6年（1509）鰐淵寺に対して三ヶ条の掟書を示し順守を求めた。掟書により寺の構成や運営など、鰐淵寺の根幹をなす部分にまで介入したのである。また経久は、永正6～天文6年（1509～37）にかけて杵築大社境内に鐘楼や大日堂、三重塔、輪藏など仏教施設を次々と建てた。そして、鰐淵寺僧が杵築大社の「社僧」と呼ばれ、かつ鰐淵寺が杵築大社の「神宮寺」「奥の院」などと称されるようになり、これまでの「神仏隔離の原則」が大きく後退し両者の一体化が進んだ。

この動向は次の毛利氏時代にも継続され、永禄13年（1570）からは、毛利元就の命により杵築大社神前で鰐淵寺僧による護摩供も行われた。この供養は毛利氏の個別的な利益擁護のために行われたもので、戦国大名毛利氏への従属が一層強まることや杵築大社の寺院化がさらに進んだことを意味した。

近世以降の鰐淵寺 近世になると松江藩主松平直政とその儒者・黒沢石斎による排仏論が展開された。寛文7年（1667）の正殿式造営に合わせて全国の先駆けとなる「神仏分離」が行われ、杵築大社境内から仏教施設が撤去された。寛文6年（1666）杵築大社は鰐淵寺に対し、翌年以降の祭礼への参加は無用と通告し、三月会への鰐淵寺僧の参加が途絶えた。これにより400年余りにおよぶ鰐淵寺と杵築大社との不即不離の関係に終止符が打たれた。加えて中世最盛期に3,000石あった寺領は、豊臣秀吉による全国的な検地により、3分の1に削減された。さらに近世には300石にまで削減された。これら杵築大社との関係途絶や財政基盤の大幅な縮減により、鰐淵寺の規模は縮小していくと想像され、江戸中期の『雲陽誌』（1717）などでは僧坊が12坊にまで減少した様子がうかがえる。一方、寛永5年（1628）藩主堀尾忠晴が照高山円流寺（松江市）を創建すると、円流寺住職を鰐淵寺から歴代輩出するなど、近世においてもその寺格の高さは保たれていた。

現境内には、根本堂・常行堂・摩多羅神社・開山堂・釈迦堂・藏王堂のほか、僧坊としては18世紀中期の建立とみられる本坊（旧松本坊）が残っている。鰐淵寺は、古代に修験の場となった浮浪流や、根本堂と大社造の摩多羅神社が並び建つ特異な境内景観など、神仏習合の姿をみることができる。

鰐淵寺の時期区分 このような変遷を経た鰐淵寺について、井上寛司氏は大きく三つの時期区分を示している。つまり、北院と南院がそれぞれの空間的なまとまりを持ちつつ、藏王権現を中心として結びあっていた時期を鰐淵寺第1期（平安時代末から鎌倉時代）、南北両院の本尊を併せ祀る根本堂を中心として鰐淵寺境内が再編された時期を鰐淵寺第2期（南北朝期から戦国期）、多数の僧坊が廃絶し、12の僧坊からなる景観が創出された時期を鰐淵寺第3期（近世から近代初頭）としている。加えて、鰐淵寺は今日まで存在し続け、天台寺院としての法統が受け継がれている。このような例は山陰地方では極めて稀であり、この時期を鰐淵寺第4期（近代初頭以降から現在）と設定したい。

2 考古学の成果

出雲市は、関係各位の協力を得て、平成21年（2009）度から6カ年にわたり分布調査、発掘調査、石造物調査を行った。

調査の目的は、分布調査により鰐淵寺成立期の北院と南院の所在地、江戸後期の絵図に描かれた範囲の僧坊跡を確認すること、発掘調査により僧坊跡の残存状況や境内造成過程を解明すること、石造物調査によりそれらの現況と年代や性格を把握することであった。

この調査によって、上記の目的を概ね達成することができ、鰐淵寺の歴史の一端について明らかにすることができた。

中世の面影を残す境内地 鰐淵寺境内地は、約394haにおよぶ広大な領域である。そのほとんどが急峻な山地で、根本堂など堂宇が建ち並ぶ中枢地域はわずか15haと狭い範囲である。

江戸後期の絵図にも、最高峰の鷲高山を中心とする山々に囲まれた境内地の様子が詳細に描かれている。遙堪峠、林木峠、般若坂、心經院坂で示される四至には四つ堂が建てられ、根本堂や僧坊、浮浪庵、浴室、仁王門など主要施設が細かく表現されている。

現在の鰐淵寺の境内中枢部では、古代末から活動が始まり、中世期には計画的かつ大規模な造成が継続して行われていたことが明らかとなった。また、江戸期の絵図に比べれば、堂宇や僧坊こそ減少したものの、その景観を彷彿とさせる地形や平坦面が良好な状況で残されていることも判明した。絵図に描かれた範囲が今も鰐淵寺の所有地であることを鑑みると、境内（寺域）の広がりは近世期はもちろんのこと、中世にさかのぼる歴史的な領域だったとみられる。そして境内中枢部には、中世期の面影が今なお色濃く残されているのである。

僧坊数を裏付ける多数の平坦面 分布調査によって、鰐淵寺中枢地域を中心として122の平坦面を確認した。そのうち、墓地や小規模平坦面を除く90箇所で、堂舎や僧坊施設が建てられていた可能性を推定した。これまで、正平10年（1355）の起請文に連署した僧（大衆）89名を根拠に、僧坊数は80前後と推計されていたが、これを考古学的に裏付けたわけである。中世期の鰐淵寺境内を多くの僧らが行き来する姿が浮かびあがる。

決着がついた南北両院問題 従来、鰐淵寺の北院と南院の所在地については、一般に北院が唐川地域、南院が大寺谷もしくは別所地域という考え方があった。だが、今回の調査により、北院と南院がともに別所の中枢地域である根本堂地区にあったことがわかり、この問題に決着がついた。唐川地域では、全く遺物が拾えなかったことや平坦面も確認されなかつたことが決め手である。一方、大寺谷地域では、平安期の薬師如来を本尊とする大寺薬師と鰐淵寺とは関係がなく、古代から別の寺院として存在した可能性が高いと結論付けたことによる。

さらに、分布調査では根本堂を挟んで北東側と南西側のゾーンで、12～13世紀の白磁や青磁、中世須恵器が多数採集された。このことは、中世前期においては南北両院それぞれが、根本堂の北側と南側で活動していたことの表われだと判断できる。南北両院が近接しすぎているように見えるが、大山寺僧坊群（鳥取県西伯郡大山町）の南光院・西明院・中門院がともに隣接していた事例などからも、

中世期には一般的であったと考えられる。

14世紀後半には、南北両院の和合統一により根本堂が建立されることになるが、その位置は、北院と南院のほぼ中間に位置する。根本堂はまさに南北両院統一の象徴だったのである。

また、採集遺物の様相から恵門院・覚城院の平坦面は、第1期造成の際には存在せず、自然地形の谷部となっており、第2期造成の際に最上段平坦面を造り出した切土で埋め、新たに平坦面を造成したとの仮説を提起した。これを証明するには大規模な発掘調査を必要とするが、南北両院統一前の鰐淵寺を解明するうえでは、ぜひとも取り組みたい課題である。

三度の大規模造成 発掘調査を行った和多坊跡と等瀬院南区、鰐淵寺川南区では、それぞれ三度の大規模な造成が行われていたことを確認した。その造成時期は第5章第6節で示したように、第1期造成が12世紀代、第2期造成が13世紀後半以降～15世紀、第3期造成が16世紀代である。

和多坊跡と等瀬院南区は、根本堂地区の上段平坦面の北部と南部に位置しており、両区での三度の造成はほぼ同時期に、かつ大規模に行われたと推定できた。加えて、浮浪灘地区的川南区での造成時期も根本堂地区とほぼ並行して行われた可能性が高く、別所の中枢部が一体として存在していたことを確認できた意義は大きい。

また、鰐淵寺の最終造成が中世末期であることは確実で、多少の改修はあっても近世以降、大規模な造成は行われなかつたことも確認した。現在残されている境内の様相は、基本的には中世の景観を大部分残していることが判明した。

寺史の画期と造成 発掘調査によって得られた造成時期と井上寛司氏の時期区分の対応をみると、最初の大規模な造成である第1期造成（12世紀代）は、井上氏区分の鰐淵寺第1期とほぼ重なる。

第2期造成は、鰐淵寺第2期の始まりに当たると考えられる。南北両院が和合統一し、根本堂が建立された。その年代をさらに絞り込む必要が、今後の調査に求められている。

最後の第3期造成（16世紀代）は、鰐淵寺第2期の末期に当たると考えられる。天正5年（1577）、和多坊栄芸が深く関与した毛利氏によって、根本堂が再建された。この時の造営工事と第3期造成は関連すると推定されるが、その証明も今後にゆだねられている。

見えてきた石造物の様相 鰐淵寺の墓地は、堂舎や僧坊群とは別の地域、すなわち、鰐淵寺川の対岸に松露谷墓地群、谷の奥まった場所に川奥墓地が選定された。急峻な斜面に平坦面が並び、そこに五輪塔、宝篋印塔、無縫塔などの墓石が今も残されている。墓石の造立は14世紀に始まり、現在まで連続と継続している。一方、川奥墓地の造墓開始時期は同じ14世紀ごろであるが、16世紀末から17世紀前半にはその機能を停止する。

松露谷墓地群には礫集積箇所があり、13世紀代の蔵骨器と思われる常滑焼片も採集されたので、14世紀以前に既に墓地利用が始まっていた可能性もある。また墓石のない平坦面がいくつかあり、12世紀代の白磁も採集されたことから、墓地だけでなく僧坊等に利用された地点もあったと想定される。

近世以降の石塔の分析では、歴代住僧の石塔形態として、尖頂方形石塔から無縫塔への転換期を18世紀前半期と推定した。これが出来雲や他地域の様相へと一般化できるかは、今後の課題である。

松露谷墓地群は、基本的には中世期のあり様を踏襲し、そこに近世期の改変と新たな墓塔造立が繼

続された。つまり、境内中枢部と同様に、中世の面影を残しつつ、現在に至る寺の歴史を加味しているのである。

歴史を紡ぐ豊富な遺物　今回の調査成果の一つに、膨大な量の遺物が採集されたことがあげられる。分布調査では約9,000点、発掘調査では総面積わずか340m²のトレンチ調査にもかかわらず、和多坊跡約6,000点、等瀬院南区約6,100点、鰐淵寺川南区約7,600点の遺物が出土した。古代から現代までの遺物が出土しており、連綿と続く鰐淵寺の歴史を裏付ける貴重な資料である。

土器の中には多数の貿易陶磁器が含まれる。中世前期には、越州窯青磁や青白磁の梅瓶、青釉陶器などの優品が、中世後期には、中国産や瀬戸・美濃焼の天目碗、備前・越前焼の貯蔵用具、鉢皿・擂鉢・奈良火鉢、土師器の日常雑器などが見つかった。これらは、中世期の寺院僧坊における日常生活を反映していると考えられる。特に、天目碗、備前焼の茶碗・水屋甕などの茶に関わる遺物は、鰐淵寺が宗教活動とともに当時の高い文化を受容していた証である。そこには延暦寺末寺として、京都との交流が礎となった部分も少なからずあったのであろう。

鰐淵寺川南区で出土した「天王」刻書土器は牛頭天王祭祀が、輪宝の墨書き土器は地鎮などの祭祀が、京都系土師器は献盃儀礼が、各々行われた可能性をうかがわせる。つまり、祭祀や儀礼に関わる土器の多さが、この地区を特徴付ける。それは、根本堂地区での僧坊の集中、鰐淵寺川対岸の葬地としての松露谷に対して、鰐淵寺川の南岸が、浮浪滝を包含する場（空間）として存在するからだと考えられる。この南岸は南北両院を統合していた「浮浪滝と藏王権現」の特殊性・重要性に直結する場所で、鰐淵寺が一体として機能するための儀礼・祭祀を行う空間であったと位置付けられるのではないか。時代はやや古いが、経筒と推定される褐釉陶器の四耳壺がこの地区に限って分布することも、鰐淵寺川南区が古くから特殊な場所であったことと関わるのであろう。

以上のように、今回の調査によって顕わになった成果は多岐にわたるが、主要なものとして次の3点に絞ることができよう。

第1点は、この地での活動が古代（11世紀以前）にさかのぼることを示す土器を多数採集したことである。鰐淵寺の創建に関しては、考古学なくしては語れなくなつた、といえる。

第2点は、南北両院が現境内に位置することをつきとめたことである。これまでには、北院は唐川、南院は大寺谷あるいは別所、という、境内から離れた場所を考える説が有力だったが、これを完全に否定した。

第3点は、現境内地が大きく三度の造成工事によって形成されたことを解明したことである。鰐淵寺境内の形成過程が具体的に見えてきたことは、寺史と関連して極めて重要である。

3 守り継がれた文化財

鰐淵寺には、400点を超える中世文書や壬辰年（持統6 = 692）銘の記された銅造觀音菩薩立像（重要文化財）、仁平3年（1153）の銘が刻まれた石製經筒（重要文化財）をはじめとする多くの貴重な文化財が受け継がれてきた。これらのうち国・県・市指定文化財は26件で、建造物・絵画・彫刻・工

芸品・書跡・古文書・考古資料と多彩である。

建造物としては、寺を象徴する根本堂が最上段中央に構えている。立ちの高い外観や華麗な意匠が仏堂としてふさわしい威儀を醸し出している。また、その左手には常行堂と摩多羅神社が前後に並んで建つ。殊に摩多羅神社は大社造で、神仏習合の時代を彷彿とさせる、境内唯一の建造物である。

美術工芸品のうち、金銅五鈷杵・五鈷鉢は、鎌倉時代に制作されたもので、つい最近まで本坊で実際に使用されていた。つまり 700 年もの間、歴代住僧が使用していたという驚くべき文物である。

鰐淵寺の歴史を紡ぐうえで核となっている古文書も価値が高い。研究者の間で評価が高いのは、内容もさることながら、当時の状態のまま残されていることにある。文書の縦じ方や折り方、花押の位置など、当時の様式を知るうえで欠くことのできない情報が溢れているのである。

歴史を解き明かすものは、境内にひっそりと置いてあった。釈迦堂内を調査しているとき、昔のお触れ書きがいくつか床に置かれており驚いた。天正 12 年（1584）、境内の樹木を勝手に伐採してはならないと記された、毛利輝元の花押をもつ制札もその一つである。また、毛利氏と親密で、大いに活躍した和多坊栄芸が根本堂に寄進した開伽桶もこの時見つけ出した。開山堂内の調査では、平安期の開祖智春上人像が祠の中で佇んでおられる姿を目にすることができ、ふと眼を床に移すと、古い木製の塵取があった。ひっくり返すと裏面に墨書きがあり、「天保十二年」（1841）と記されていた。

それらの一つひとつが鰐淵寺のきらびやかな歴史と文化性を紡ぎ出す貴重な文化財である。1400 年を越える「時」を紡ぐ鰐淵寺の文化財は、出雲の歴史そのものでありながら、その地域の枠を超えて、日本各地そして日本の歴史と不可分に結びついている。

鰐淵寺は、かつて 80 前後の僧坊を有し、我が国の中枢権力者や戦国大名と渡り合い、出雲大社と双璧をなした。この間には、度重なる火災、寺領削減という経済的な打撃や江戸期の神仏分離、明治の廃仏毀釈などの政治的な荒波が次々と襲ってきた。様々な試練がある中で、深く、そして長い歴史と文化財を、今日まで守り伝えられてきたお寺の努力と辛苦には、心から頭の下がる思いである。

その意味を踏まえたうえで、これらの文化財をより多くの人々に、未来にわたって伝えていくさらなる努力を、市としても、市民とともに取り組んでいかなければならない。

平成 17 年 9 月 2 日、今でも忘ることのできない事件が起こった。鰐淵寺の宝蔵殿が破られ、重文 4 件・県指定 2 件を含む十数点の貴重な文化財が盗まれたのである。当時の警察の見解では、プロによる仕業らしい。あれから 10 年近く経つが、未だに 1 件も見つからず、また情報もない。この長い歴史を語り、労苦の積み重ねによって伝えられてきたかけがえのない文化財を盗み去った者を許すことはできない。が、もう一度鰐淵寺の元に戻ってきてほしいと、ただそれのみを願うばかりである。

4 法統を受け継ぐ鰐淵寺

鰐淵寺には、今なお清浄な水が流れ落ちる浮浪滝や僧坊跡とみられる多数の平坦面が残る境内地、僧や人々が行き来した道や峠など、中世の景観がそのまま数多く残っている。また鰐淵寺は、延暦寺ゆかりの寺として天台の仏の教えを、長い時を超えて一貫して今なお受け継ぎ、広められている。修

駿道から始まる鰐淵山、如法經信仰や比叡山延暦寺との本末関係をとり結ぶ鰐淵寺の成立、このつながりと信仰は今も断ち切れることなく続いている。

その背景にあるのはいったい何か。鰐淵寺が創建以来、保ち続けた確固たる不变性、終始一貫した精神性、搖るぎのない思想性が土台となっていると考えられる。境内の空間構成、貴重な文化財、絶えることのない法灯などは、強い精神性・思想性が貫かれていたからこそ、維持、継承されてきたといえるだろう。僧坊が歴史的な経緯とともに盛衰を繰り返し、坊名も変わっていく実態、長吏・年行事等の世襲制でない運営形態など、往古より継続することが困難な環境にありながら、寺自体が途絶えることがなかったのは、地方においては誠に希少と言わざるを得ず、そこには世俗的な思惑を超えた鰐淵寺一山を貫く搖がない信念があったからに他ならないだろう。

このように、鰐淵寺は創建から現在まで約1400年もの長きにわたる法統が受け継がれており、歴史学にとどまらず、宗教学、思想史を研究する上でも非常に貴重な寺院といえるだろう。そして、中世山林寺院としての鰐淵寺という存在は、出雲や山陰という一地方にとどまらず、全国的にも他に匹敵するものがいない存在だと考えられる。今回、調査に参画した一同の偽らざる気持ちである。

第2節 鰐淵寺の保存にむけて

鰐淵寺の研究は、これまで文献史料を中心に続けられてきたが、近年、島根大学が主になって行つた『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究』を契機にその速度を増している。

また、この研究によって新たな価値が見出されることとなった鰐淵寺の文化財は、特別展『もう一つの出雲神話—中世の鰐淵寺と出雲大社—』(出雲弥生の森博物館 2013)、企画展『修驗の聖地 出雲国浮浪山鰐淵寺』(島根県立古代出雲歴史博物館 2014)、特別展『山陰の古刹 島根 鰐淵寺の名宝』(京都国立博物館 2015)と、3年続けて開催された展覧会で一般に公開される機会を得た。

これらの展覧会をとおして、鰐淵寺には、仏像や古文書など貴重な文化財が多数残っていること、かつ、それらが山陰地方では抜きんでていることが広く認知されたため、全国的にも大きな注目を集めている。さらに、出雲市が行った今回の埋蔵文化財調査は、鰐淵寺の歴史に初めて考古学の側面から光を当て、これまで知られていなかった様々な事実を明らかにし、鰐淵寺の価値を一層高めた。

古代以来、現在に至るまで連綿と信仰を継ぐ鰐淵寺は、出雲の歴史にとどまらず、我が国の宗教史を理解するうえでもたいへん重要な位置を占める古刹である。今後は、より積極的な情報発信を行うとともに、法統と伝統を絶やさないためにも保存を図る必要がある。そのためには、まずは鰐淵寺の史跡指定を目指さなければならない。

そして、建造物の保存修理や境内の環境整備も速やかに行う必要がある。とりわけ、参拝者の安全確保のための修理や、防犯・防災設備の充実などは喫緊の課題である。鰐淵寺の史跡指定後は速やかに保存管理計画を策定して、これら諸課題を解決しつつ地元の理解と協力を得ながら、保存・活用を推進しなければならない。

(穴道年弘・三原一将・石原聰・野坂俊之・花谷浩)

鰐淵寺 略年表

【凡例】

1. この略年表は、鰐淵寺に関わるおもな歴史的事象をまとめたものである。作成にあたっては、

井上寛司編 1997『出雲國浮浪山鰐淵寺』(浮浪山鰐淵寺), および,

井上寛司編 2012『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために－』

2009(平成21)年度～2011(平成23)年度科学研究費補助金 基盤研究(B), 研究成果報告書(課題番号 21320123), 〔『科研報告』〕

に基づいて鰐淵寺の歴史にとって重要と考える事象を摘記した。基本的には、「鰐淵寺文書」を中心とする史料(古文書など)の記述を年代順に列記している。草創期に関わる記録で掲載しなかったものがあるが、その基準は基本的に上記『科研報告』によっている。

2. 「ことがら」に関する史料の翻刻・内容は、おもに次の文献によった。

曾根研三 1963『鰐淵寺文書の研究』鰐淵寺文書刊行会,

井上寛司ほか編 1997『大社町史 史料編(古代・中世)』大社町, [以下,『大社町史』]

これらに掲載されないものについては、(井上編 1997) によったほか、井上寛司氏からご教示を受けた。また、摘記の内容については、『大社町史』を引用したものがある。

3. 年月日未詳や年末詳の史料の年代は、基本的には『科研報告』掲載の「鰐淵寺関係編年史料目録」(同書 38 - 57 頁) に従った。また、出典の名称もこの目録の典拠名に従って原史料名を記し、目録と対照できるように目録番号を付した。目録に掲載されない史料について『大社町史』の目録番号や参考文献を記したものがある。なお、「月日」のうち○囲みの数字は閏月を表す。

(花谷 浩)

年代(和暦/西暦)	月日	ことがら	出典など
推古2年	594	智春(ちしゅん)上人、推古天皇の眼病を治療し、勅願により鰐淵寺が創建された、という	「鰐淵寺衆徒等勅進状案」(推長六年(1254)、鰐淵寺文書、目録 36)に初出
持統6年	692	5月 壬辰年五月、出雲国若狭郡佐藤太理(わかやまとべのおみのとくたり)、父母の為、菩薩を造り奉る	「開造觀音菩薩立像台座銘」(鰐淵寺所蔵、目録 1)
永承年間	1046-1053	永運(えいせん)が鰐淵山に入る	「後拾遺往生伝」(永運は如法經聖、続群書類注巻 197、目録 6)
承暦3年	1079	鰐淵の実円上人、清水山井口に聖德太子堂を建立する	「東山往來」(目録 3)
康和3年	1101	杵築神社の西浜に福楽淨土から迎えの舟が来た夢を見て修行に励んだ良範上人が没する	
康和4年	1102	良範上人と同じ夢を見た行範上人が没する	
天仁元年	1108	10月8日 出雲国鰐淵山の御靈永運。河内国太子廟で示寂する 「鰐淵山」の初見史料	「廣隆寺上宮院聖德太子像内納入太子關係遺品包紙墨書き銘」(大日本史料、目録 8)
保安元年	1120	仏子定海の勅願に應じ、出雲国鰐淵山に住んだ僧忠堅(ちゆうかん)を使者とする	「鰐淵銘」(鰐淵寺所蔵、目録 13)
仁平2年	1152	6月10日 僧仁光、鰐淵山尊王宝窟に湖州鏡を施入する	「石製經筒銘」(仁平元年辛未二月写經開始、鰐淵寺所蔵、目録 14)
仁平3年	1153	5月2日 僧円朗ら、如法妙法蓮華經1部8卷を書写し、石製經筒におさめて鰐淵山金剛藏王宝窟に安置する	「石製經筒銘」(仁平元年辛未二月写經開始、鰐淵寺所蔵、目録 14)
長寛2年	1164	4月2日 太政大臣藤原伊通、出雲国の熊野・杵築両社の祭神は、ともに素戔嗚尊であると述べる	「長寛勘文」(大社町史 135)
永万元年	1165	2月4日 本寶坊からと見られる出火により、千手堂、藥師堂以下が焼失する、という	
治承元年	1177	10月9日 千手堂を造営供養する、という	
治承2年	1178	千手堂、藥師堂、常行堂、塔、积迦院、普賢院が焼失、とい う	「鰐淵寺古記録案」(鰐淵寺文書、目録 17)
		6月 宝光坊の勅進で千手堂を立柱し年中に造営終わる、とい う	

治承3年頃	1179頃		「聖の住所は何處如何ぞ。眞面よ勝尾よ播磨なる書写の山。出雲の鰐洞や日の御跡。南は熊野の那智とかや」	『梁塵秘抄』(目録15)
寿永2年	1183	5月 19日	伯耆国松山大日寺上院の鐘として、梵鐘が鋳造される	「鈴鏡銘」(鰐洞寺文書、目録16)
元暦元年	1184	11月	塔と千手院を供養。といふ	「鰐洞寺古記録案」(鰐洞寺文書、目録17)
文治年中	1185-1190		業師堂造宮(勸進宝光院)、常行堂造宮(造宮は国衙在官人筆頭の廟(崇徳・氏か))、という	「鰐洞寺古記録案」(鰐洞寺文書、目録17)
建暦元年	1211		石州三國の僧良忠。鰐洞寺の月珠房信運(しんぜん)に師事し書を習う 「鰐洞寺」の初見史料	「然阿上人伝」(目録18)
建暦3年	1213	2月 2日	国衙在官人(海定)の左衛門頭某が、国宣に基づき、国富郷の経田百町を比叡山無動寺領として認められ、鰐洞寺の南北兩院が、本寺に籍千枚を年貢として納めることとなる 鴨道寺富郷の成立	「出雲国宣」(鰐洞寺文書、目録19)
		2月	国富郷経田百町の比叡山無動寺領として認められ、鰐洞寺の南北兩院が、本寺に籍千枚を年貢として納めることとなる 鴨道寺富郷の成立	「無動寺校坊政所下文」(鰐洞寺文書、目録20)
		2月	馬内が朝仁親王に讐讐することになった門跡相伝領に、「益鏡重慶状案」(草稿要略卷55、目録22)	「益鏡重慶状案」(草稿要略卷55、目録22)
建保4年	1216	5月 13日	鎌倉將軍、国富郷の前地頭の内蔵孝元の墨効を止め、同為事を地頭職に補任する	「將軍(源実朝) 家政所下文」(鰐洞寺文書、目録23)
天福年中	1233-1234		最初の大火灾 「去る天福年中、神火忽ち起り。数字の燈籠紅焰を支え。若干の尊像數天に化す。」	「鰐洞寺衆徒等勤進状案」(建長六年(1254)、鰐洞寺文書、目録35)
			「四条院御宇天福年中炎上時の、降さる所の黒煙、□□□公事、武家の重書等、寺庫焼失の間、悉く紛失せしむにより々々」	「鰐洞寺衆徒等勤進状案」(建長四年(1329)千家古文書写乙、目録77)
延応2年	1240	5月 28日	北院長吏の難光、房地を弁央に譲る 最古の僧坊譲状	「難光願狀」(鰐洞寺文書、目録29)
宝治元年	1247	10月	杵葉大社神宮ら、鰐洞寺僧が国富庄地頭介の代官季綱との相論により、三月会への参加を拒否しているとして、幕府に解決を求める	「杵葉大社神宮等連署申状」(鰐洞寺文書、目録31)
宝治2年	1248	10月 27日	杵葉大社、正殿式造宮を行う(宝治度造宮)	「杵葉大社度造宮」(鰐洞寺文書、目録32)
建長2年	1250	10月	鰐洞寺僧内觀が鰐富經四反を十林房に譲る 「鰐洞寺北院之内、和多房之地」 北院和多房の初出	「内觀願狀」(鰐洞寺文書、目録33)
建長6年	1254		鰐洞寺衆徒らが七佛藥師堂や塔の再建を請え。勤進帳を作成する	「鰐洞寺衆徒等勤進状案」(鰐洞寺文書、目録36)
		4月	守護佐々木泰清、鰐洞寺を「國中第一之領藍」と呼ぶ。鰐洞寺中ならびに島居別所等への部使の入禁じる 「出雲守護(佐々木泰清)書下」(鰐洞寺文書、目録35)	「出雲守護(佐々木泰清)書下」(鰐洞寺文書、目録35)
建長7年	1255	6月	「宮主、林成」 「建長七年癸卯六月日」(祇園)の線刻	「鉄造花線刻種子鏡銘」(鰐洞寺所蔵、目録37)
康元元年	1256	12月	杵葉大社領12郷のうち、通堪・高浜・糸岡・武志の4郷に合計9町3段30歩が設定される	「杵葉大社領注進状」(出雲大社文書、目録39)
弘長2年	1262	6月 8日	守護佐々木泰清、鰐洞寺北院に對し、塔本尊の积迦・多宝の修理費用を負担を伝達する	「佐々木泰清書状」(鰐洞寺文書、目録40)
		7月 25日	守護佐々木泰清、鰐洞寺北院衆に対し、塔本尊修理の意向を伝える	「佐々木泰清書状」(鰐洞寺文書、目録41)
弘長3年	1263	8月 5日	別当部卿鷹利承、比叡山楞嚴三昧院から任命か 「閻東下知状」(鰐洞寺文書、目録42)	「閻東下知状」(鰐洞寺文書、目録42)
弘安6年	1283	6月 29日	守護佐々木頼恭、鰐洞寺北院衆に對し、故泰清の一問恩怨を謝し、三重塔造宮のため彌縫 30實と銀塔一基を施入する	「佐々木頼恭泰書状」(鰐洞寺文書、目録53)
弘安7年	1284	九月七日	守護佐々木頼恭、鰐洞寺南北衆に北条時輔の子息に対する警戒を伝える	「出雲守護(佐々木頼恭) 施行狀」(鰐洞寺文書、目録55)
乾元2年	1303	4月 11日	守護佐々木貞清、祖父泰清・父頼泰の菩提のため「北院三重塔修理料田」一町を寄進 「佐々木貞清寄進狀」(鰐洞寺文書、目録65)	「佐々木貞清寄進狀」(鰐洞寺文書、目録65)
		2月 23日	第二の大火灾 「去る二月三日子刻ごろ類火。北院三重塔寄進以下の(室舎を以て)炎上す云々。」	「沙彌覓見書状」(推定同年六月五日付、鰐洞寺文書、目録74)
嘉暦元年	1326	2月	「嘉暦元年二月、類火のため回禪し、本堂以下の堂□□□大小十余室。悉く焼失せしめんぬ。」	「鰐洞寺衆徒等解状案」(千家古文書写乙、目録77)
		12月	鰐洞寺常行堂の一乗ら 15名が 5が条の起請を立てる	「鰐洞寺常行堂一乗等速著起請文案」(鰐洞寺文書、目録75)
			本堂以下、大小十余室の堂舎が焼失したため、棟別毬の賦課で再興をおこなう繪旨を訴える。この時、寺家(鰐洞寺)と社家(大社神宮)は「寺社牛角」の關係と表明	「鰐洞寺衆徒解状案」(千家古文書写乙、目録77)
元弘2年(正慶元年)	1332	8月 19日	南院長吏賴宗、隱岐に向出き後醍醐天皇の繪旨を得る 後醍醐天皇「急心の所願、速成に成せしめば、根本薬師堂の造営」の造営に、その功を終え。ことを約す	「後醍醐天皇願文」(鰐洞寺文書、目録79)「額源造進文書目録」(鰐洞寺文書、目録124)
元弘3年(正慶2年)	1333	5月	鰐洞寺僧懇源、六波羅攻めの軍忠状を提出	「額源軍忠狀」(鰐洞寺文書、目録81)
鎌倉末			大社領のうち、通堪堀・高浜堀・糸岡堀の3町9段80歩は、毎年正月 20日に大社宝前にて行われる天下御祈禱。大社若經輪説の田である。と記される	「杵葉大社経田注文新簡」(鰐洞寺文書、目録82)

建武 3 年 (延元元年)	1336	1月 15 日	後醍醐天皇、根本南院薬師堂に三所郷地頭職を寄進	「後醍醐天皇繪」(鶴洞寺文書、目録 85)
		2月 9 日	名和長年、鶴洞寺南院衆徒に対し、宿老は朝敵入族伐の祈禱を、若輩は軍忠をなすよう命じる	「名和長年軍事催促状」(鶴洞寺文書、目録 87)
		8月 9 日	足利尊氏、鶴洞寺北院密嚴院の長老に祈禱の精誠を命じる	「足利尊氏御判御教書」(鶴洞寺文書、目録 89)
建武 5 年 (延元 3 年)	1338	7月 18 日	守護塩冶高貞、奉行所に鶴洞寺北院衆徒の軍忠を伝え、恩賞を与えるよう批遺を求める	「塩冶高貞吹合状」(鶴洞寺文書、目録 93)
應永 4 年 (興国 2 年)	1341	3月 24 日	足利直義、鶴洞寺北谷衆徒に対し、佐々木高貞が隠謀を企て遁下として誅伐を命じる	「足利直義御判御教書」(鶴洞寺文書、目録 97)
興国 4 年 (康永 2 年)	1343	6月 1 日	鶴洞寺僧信鑑房(佐々木氏一一族・高岡高重の弟)が根本薬師堂造修料として銭と真奇附を表明	「佐々木高重願文」(鶴洞寺文書、目録 101)
貞和 3 年 (正平 2 年)	1347	6月 23 日	北院と南院との統一を目指す 本堂を真中、塔頭は左右、常行堂は右手に東面させ、本堂の中に薬師如来と千手千眼觀音を安置すると申合せる	「兩院一段草狀」(正平 10 年の「鶴洞寺大衆条々連署起請文案」鶴洞寺文書、目録 119 に引用)
		8月	嘉慶元年の火災以後、再建の進まない状況が記される 「嘉慶元年の火災以上以後、數字の仏龕の内、一字として未だ建立に及ばず。空しく廿年を送りおわんぬ。」	「蓮華寺本家衆徒解狀」(正平 10 年の「鶴洞寺大衆条々連署起請文案」鶴洞寺文書、目録 119 に引用)
		11月 13 日	青蓮院尊円法親王の名で南北両院の長吏に対し、南北両和合を命ずる令旨が出来る	「本尊令旨」(正平 10 年の「鶴洞寺大衆条々連署起請文案」鶴洞寺文書、目録 119 に引用)
貞和 5 年 (正平 4 年)	1349	11月 25 日	後光明天皇、根本千手堂修造料として添治卿を寄進する 添治卿の室顕化	「後光明天皇宣」(鶴洞寺文書、目録 102)
正平 6 年 (貞治 2 年)	1351		後村上天皇、心中の所願成就なれば鶴洞寺根本薬師堂の造営を急いで遂げると伝える 根本薬師堂が未完成	「後村上天皇宸筆願文」(鶴洞寺文書、目録 113)
正平 10 年 (文和 4 年)	1355	3月	南北両院の統一なる 鶴洞寺の大衆、48 力条に及ぶ山内の式目を定め、連署起請する。署名した大衆 89 名、行人(下方) 33 名 大社三月会には 3 日間で述べ 93 人が参加と記される	「鶴洞寺大衆条々連署起請文案」(鶴洞寺文書、目録 119)
正平 12 年 (延元 2 年)	1357	6月 8 日	後村上天皇、鶴洞寺長吏額源僧都に三所郷地頭職を安堵する	「後村上天皇繪」(鶴洞寺文書、目録 121)
貞治 5 年 (正平 21 年)	1366	3月 21 日	鶴洞寺僧額源、元弘年間以来の文書目録を浄達上人に送達する	「額源送達文書目録」(鶴洞寺文書、目録 124)
応安 3 年頃 (建徳元年)	1370頃		島根半島が広く浮島山と称されていたことが知れる	「知寛庵山大道和尚行狀」(続前著御徳巻 234、目録 127)
応安 4 年 (建徳 2 年)	1371	7月 25 日	勝部高家、高麗より将来した純金阿弥陀仏座像を鶴洞寺に寄進する	「勝部高家寄進狀」(鶴洞寺文書、目録 128)
応安 5 年 - 永和 2 年	1372-1376		鶴洞寺旧蔵の大般若經六百巻が書写される	「常光寺所藏大般若經」(目録 131)
明徳 3 年	1392	10月 28 日	應永、鶴洞寺南院桜本坊の坊舎と敷地を観鎮に先渡す 南院桜本坊の初見史料	「應永先券」(鶴洞寺文書、目録 134)
		10月 16 日	守護佐々木高證、杵築内経所経田、高浜町 2 町 2 歩 60 歩と通塙堀 3 段 300 歩の下地知行を鶴洞寺に安堵する	「出雲守護『佐々木高證』書下」(鶴洞寺文書、目録 135)
応永 2 年	1395	2月 9 日	圓融、和多坊と別所経田を譲渡する一方、和多坊と敷地を別所経田を持て、丘建立のため先渡す	「維圓印狀」、「維圓先券」(鶴洞寺文書、目録 136・137)
応永 8 年	1401	4月 25 日	室町將軍、鶴洞寺の請えに従い、国富住と添治卿の沙汰を守護京極高證に命じる	「室町幕府御教書」(鶴洞寺文書、目録 139-140)
		6月 18 日	室町將軍、重ねて国富住と添治卿の半済を止め、下地を鶴洞寺の家臣誰家掌に沙汰し付けるよう守護京極高證に命じる	「室町幕府御教書」(鶴洞寺文書、目録 150)
応永 9 年	1402	10月 9 日	比叡山青蓮院門跡、鶴洞寺は甚院以来、無動寺の末寺であること、など 10 力条の授を公布する	「尊道親王袖判鶴洞寺定書案」(青蓮院文書、目録 151)
応永 12 年	1405	12月 19 日	學林坊の僧円仍、沙弥妙中作の木造大日如來坐像を求める	「木造大日如來坐像背面刻銘・墨書銘」(鶴洞寺所蔵)
応永 25 年	1418	10月 16 日	鶴洞寺、南院桜本坊と別所経田・資財・本尊などを浄領に譲渡する	「鏡頭讓狀」(鶴洞寺文書、目録 159)
応永 27 年	1420	①月 24 日	將軍義持、添治卿に関する文書を携え急ぎ上洛するよう命じる	「青蓮院〈義円〉御教書」(鶴洞寺文書、目録 160)
正長元年	1428	11月 18 日	法眼ら、応永 28 年の令旨により國富莊・添治卿の段銭・臨時雜役等が免除されたことを鶴洞寺に伝える	「青蓮院〈義快〉御教書」(鶴洞寺文書、目録 168)
永享 5 年	1433	12月	11月 20 日夜、一廟院と竹本坊が炎上し、金剛院ほかの証文が紛失したと、鶴洞寺の三長老が申し立てて 「一山三長老制を記す最古の史料」	「鶴洞寺別当円運等連署紛失狀」(鶴洞寺文書、目録 171)
永享 10 年	1438	3月 11 日	將軍義教、青蓮院に対し、鶴洞寺と國富莊・添治卿への臨時課役・反錢、人夫以下の公事を免除し、守護使不人の地とすることを伝える	「足利義教御判御教書」(鶴洞寺文書、目録 174)
永享 11 年	1439	8月 19 日	室町幕府、鶴洞寺の散在寺領への恒例・臨時反錢以下の諸公事を免除する旨を伝える	「出雲守護(京極持高)奉行人連署奉書」(鶴洞寺文書、目録 177)
文安元年	1444	⑥月 18 日	維榮、北院和多坊の坊舎・聖教と別所経田(大般若経料田)の坪付を注進する	「維榮鶴洞寺北院和多坊房舍經田等注文」(鶴洞寺文書、目録 178)

文安3年	1446	2月 8日	禰栗と鶴洞寺三長老、国富庄にある多功経田について授を定める	「禰栗授書」(鶴洞寺三長老連署授書) (鶴洞寺文書、目録 180・181)
		9月 5日	室町将軍、鶴洞寺領国富庄・漆治郷・散在田畠等に対する臨時課役を免除し、守護使の入部を停止するよう、守護京権持酒に命じる	「室町幕府御教書」(鶴洞寺文書、目録 182)
		12月 3日	吉吉社領漆治郷領所の文書 18通、直銭 45貫文で鶴洞寺に売却される	「吉吉社領出賣漆治郷文書目録」(鶴洞寺文書、目録 183・184)
享徳元年	1452	8月 22日	地主、北院和多房の屋舎と別所経田を榮尊に譲る 本房の四壁には柱が建つ、和多房の南側は井上坊	「鶴洞榮讓狀」(鶴洞寺文書、目録 188)
享徳3年	1454	6月	鶴洞寺僧惣、久留里村の和多功経田と泰安寺残田を清瀬に領知せると申し置く	「某契狀」(鶴洞寺文書、目録 192)
康正2年	1456	10月 20日	吉良義政、青蓮院に対し、鶴洞寺領国富庄・漆治郷・散在田畠等への守護使不入を認める	「吉良足利義政御印御教書」(鶴洞寺文書、目録 193)
貞正4年	1463	12月 18日	僧円専、木造普偏立像を造立する	「木造普偏立像背面墨書き」(鶴洞寺所蔵)
文明6年	1474	8月 吉日	教尊、山王七社に創造山王七所本地懸仏を奉獻する	「鶴洞山王七社本地懸佛裏墨書き」(鶴洞寺文庫、目録 202)
文明14年	1482	7月 18日	多賀秀長、福地郡西郷内の経田を足利義尚の命に従い、鶴洞寺に寄進する	「多賀秀長置文」(鶴洞寺文書、目録 206)
延徳3年	1491		この年の春、鶴洞寺で火災か	「御滿殿上日記」(延徳3年八月一四日条) 「尼子經久鶴洞寺授書」(鶴洞寺文書、目録 217)
永正6年	1509	10月 20日	尼子経久、鶴洞寺に對し 3カ条の授書を制定する	
			尼子経久による出雲大社造営(大社の寺院化)始まる 鐘樓の造営(其緒は承和6年89)	
永正15年	1518	11月 10日	尼子経久、鶴洞寺評定案に對し、国富・直江の名主の件につき催促を認め、評定案の人選などを命じる 評定案の初見 年行事もほぼ同時に成立か 直江初見	「尼子経久書状(折紙)」(鶴洞寺文書、目録 220・221)
永正16年	1519	4月 16日	杵柴大社、仮殿式の遷宮を行なう(永正遷宮) 鶴洞寺から勤行僧 20 人が赴向する	
		4月 御晦日	国造千家繁尼、尼子経久の援助によった造営と遷宮の次第を記す中に、「神宮寺」が初出する	「永正中年大社造営・遷宮次第」(千家家文書、目録 222)
大永2年	1522	2月	尼子経久、僧 1100 人を集めて大社神前に一部法華経誦をする 神門と鳥居の西の原に建てた家屋4棟を道場とし、鶴洞寺竹本家の御跡三尊を安置する	「杵柴大社御印御遷宮次第」(鶴洞寺文書、目録 631)
大永4年 一天文6年	1524-1537		尼子経久、杵柴大社に仏教施設を次々と建設する 大日堂(1524)、三重塔(1527)、鐘鼓(1537)	「杵柴大社旧御印御遷宮次第」(鶴洞寺文書、目録 631)
享禄3年	1530	5月 13日	尼子晴久、鶴洞寺本堂に大般若経を寄進する	「大般若經奥書」(鶴洞寺文書、目録 235)
天文12年	1543	3月 5日	立原幸隆らの奉行。鶴洞寺根本堂造営を命じる尼子晴久の書を伝える	
		6月 28日	尼子晴久、塙治興久の反乱(1530-1533)に際し欠所となつた寺領直江・國の主職の一剖を返却する	「尼子晴久書状(切紙)」(鶴洞寺文書、目録 254)
天文13年	1544		井上坊堺榮、本堂に釈迦如來坐像を安置する 根本堂再建か	「釋迦如來坐像」(鶴洞寺所蔵、目録 259)
天文14年	1545		尼子晴久千部法華経誦。左右の巻をめぐり鶴洞寺が清水寺に対して抗議する 富田城法席座次論争(=1556)	「鶴洞寺衆徒連署起請文」(鶴洞寺文書、目録 274)
天文19年	1550	8月 21日	清水寺、比叡山延命宮門跡の令旨を入手と主張する	「鶴洞寺二答状」(鶴洞寺文書、目録 300)
		9月 26日	杵柴大社、仮殿式の遷宮を行なう 鶴洞寺から竹本坊印宗と衆僧 20 人が参加する	「杵柴大社造営遷宮次第」(千家家文書、目録 261)
天文20年	1551	4月	第三の大火灾 「鶴洞寺損失す」	「夢愚要略」(門主伝 23、同年4月条、目録 267)
			「天文廿年首夏仲旬の候、測らずも失火忽ち起りて、堂舍一時に灰燼たりと云々」	「鶴洞寺本堂再興動進状」(天文3年(1573)、鶴洞寺文書、目録 457)
		2月 12日	鶴洞寺全山の僧、安来清水寺との法論議争で当寺が左座と起請する 大衆 20 名、中方 8 名、下方 17 名署名	「鶴洞寺衆徒連署起請文」(鶴洞寺文書、目録 274)
天文24年	1555	5月 20日	鶴洞寺を左座とする輪旨が出る	「後奈良天皇編旨」(鶴洞寺文書、目録 276)
		春	清水寺を左座とする輪旨が出る	「中山季聰書状(切紙)」(鶴洞寺文書、目録 355)など
		6月	この月までに、鶴洞寺と清水寺からそれぞれ三間三答状が提出される	「清水寺初問状案」「鶴洞寺初答状案」「清水寺二問状案」「鶴洞寺二答状案」「清水寺三問状案」「鶴洞寺三答状案」(鶴洞寺文書、目録 294, 295, 298, 300-302)
弘治2年	1556	11月 13日	あらためて鶴洞寺を左座とする後奈良天皇輪旨が出される	「御奈良天皇輪旨」(鶴洞寺文書、目録 332)
			石見剣庄の毛利元就、洗合城に入り、富田攻め始まる	
		8月 16日	毛利元就。鶴洞寺の当知行を安堵し、その概要を書き上げる	「毛利元就・同隆元津署書状」(鶴洞寺文書、目録 370)
永禄5年	1562			

永禄 8 年	1565		この頃より、年行事と並び、和多坊（栄芸）が鰐淵寺の管理經營の中心となる	「毛利氏奉行人連署書状（折紙）」（鰐淵寺文書、目録 377）など	
		8月3日	毛利元就と輝元、和多方に対し、尼子方に付いた本覚坊・月輪坊・金剛院の後任には味方を配分するよう命じる	「毛利元就・同輝元連署書状」（鰐淵寺文書、目録 382）	
		10月	智尾権現社とその舞殿が造立される	「智尾権現社并舞殿造立様式」（鰐淵寺所蔵、目録 584）	
永禄 9 年	1566	5月9日	毛利氏。和多方栄芸に大庭净音寺・大草神宮寺・同六所宮・宗倉庵など、およそ千億の所領を新たに与える	「毛利斯元安堵状」「毛利氏奉行人連署奉書（折紙）」（鰐淵寺文書、目録 390-393）	
		11月21日	尼子義久、富田城岡城を申し出で降伏する	「尼子勝久利判（折紙）」（鰐淵寺文書、目録 413）	
永禄 12 年	1569	9月20日	尼子勝久、直江景・国富荘その他の田地などを、晴久の如く知行することを認める	「毛利元就・同輝元連署書状」（鰐淵寺文書、目録 416）	
永禄 13 年 (光風元年)	1570	7月28日	毛利氏。鰐淵寺の領定め、片桐大社において一・五・九月の最初の一週間、撫摩供することなどを命じる	「吉川元春・小早川隆景・國富當往の如く、守護不入として遣す」と記載する鰐淵寺文書に伝える	
		8月17日	吉川元春と小早川隆景、鰐淵寺直江景・國富當往の如く、守護不入として遣す」と記載する鰐淵寺文書に伝える	「毛利輝元書状」（鰐淵寺文書、目録 386、年末詳）	
元亀 2 年?	1571?	4月3日	毛利輝元。和多方栄芸が、出雲侵攻当初より、また吉田博隆後も4・5年をわたり忠勤したことと記す	「口羽通良書状」（鰐淵寺文書、目録 440、年末詳）	
元亀 3 年?	1572?	10月25日	口羽通良。寺領直江瀬をめぐる毛利元康との争いを、元康の得分300俵で調停するよう兒玉元臣に要請するが、元康はなお不足として500俵を要求する	「口羽通良書状」（鰐淵寺文書、目録 440、年末詳）	
元亀 3 年?	1572?		元就以来、片桐大社で祈念の儀度を行ひ（一・五・九月）、鰐淵寺本堂でも毛利氏の武運長久を祈禱してきたと訴えるが、直江の半分を毛利元康に渡すよう命ぜられる	「某書状断簡」（鰐淵寺旧蔵文書、目録 447、年月未詳）	
天正元年	1573	7月16日	和多方栄芸、極楽坊の田地に日頃院を建て、元貢の菩提を弔う	「吉川元春書状」（鰐淵寺文書、目録 424、年末詳）	
天正元年?	1573?	9月28日	直江の件、半分を元康に渡すことで決済	「毛利輝元書状」（鰐淵寺文書、目録 449）	
天正 2 年	1574	4月10日	毛利輝元。和多方栄芸に対し、元就報恩のための日頃院が造述することなどをよう求める	「吉川元春書状」（鰐淵寺文書、目録 438、年末詳）	
天正 2 年?	1574?	6月27日	毛利元就より拜領しない安堵された所領といえども、毛利の上意でいつでも没収される状況と伝えられる	「毛利輝元書状」（鰐淵寺文書、目録 454、年末未）	
天正 3 年	1575	4月10日	毛利元就が鰐淵寺本堂建立のことを尼子合戦のころから気付いていたと記される	「鰐淵寺本堂再興勅進帳」（鰐淵寺旧蔵文書、目録 457）	
		11月吉日	沙弥某。鰐淵寺本堂再興のため勅進帳を作成する	「毛利輝元補判提書」（鰐淵寺文書、目録 473）	
天正 4 年	1576	3月10日	毛利輝元。鰐淵寺本堂造営のための擬を定める	「杉原盛重、鰐淵寺本堂建立の奉加につき、使僧と相談の旨、毛利輝元・吉川元春と毛利氏奉行人に相談する	「杉原盛重書状（切紙）」「同書状（折紙）」（鰐淵寺文書、目録 484 - 486）
		3月29日		吉川元春、本堂の瓦昌替の要望を承知したと伝える	「吉川元春書状」（鰐淵寺文書、目録 491）
		6月17日	鰐淵寺の根本堂が再建される（4月23日新始、10月27日竣工。11月27日竣工、11月29日権）	「鰐淵寺本堂再建権記」（鰐淵寺所蔵、目録 505）	
天正 5 年	1577	11月29日		「鰐淵寺日頃院縁起案」（鰐淵寺文書、目録 503）	
		6月14日	和多方の栄芸。日頃院の由来を記録する	「常行堂内内殿摩多羅神御影向所建立様札」（鰐淵寺所蔵、目録 506）	
天正 6 年	1578	9月	常行堂の内殿として摩多羅神影向所が建立される	「片桐大社日頃院御影所建立様札」（鰐淵寺所蔵、目録 631）	
天正 8 年	1580	11月26日	片桐大社の遷宮が行われる遷宮の取り次ぎを竹本坊豪円が記す	「片桐大社本殿再興様札」（鰐淵寺文書、目録 531）	
天正 11 年	1583	12月22日	この年の2月23日に焼失した神魂神社造営に際して、和多方栄芸が奉行につとめる	「和多方栄芸が延喜式を説く」という（実際は翌月か）	
天正 12 年	1584	7月27日	和多方栄芸が延喜式を迎える	「吉川元春・同元長連署書状」（鰐淵寺文書、目録 539）	
		7月晦日	吉川元春と元長、和多方（栄芸）の賛美を西本坊栄哉に相照せることに異議はないことを伝える	「西本坊豪円と大功圓円、尼子義久寄進の両界曼荼羅図を修補する」	
天正 13 年	1585	10月	西本坊豪円と大功圓円。尼子義久寄進の両界曼荼羅図を修補する	「和多方栄芸画像譜」（鰐淵寺所蔵、目録 558）	
天正 16 年	1588	8月27日	青蓮院の尊證法親王、次回の上洛の折、和多方に尊證院の号を与えると伝える	「尊證法親王直書」（鰐淵寺文書、目録 571）	
天正 19 年	1591	12月16日	毛利氏より、砲石高935石8斗6升9合の寺領を打ち渡されるが、寺領から直江郷が脱落する	「毛利氏奉行人連署充行状」（鰐淵寺文書）	
			豪円、木造元三大師坐像を求める	「木造元三大師坐像厨子内墨書銘」（鰐淵寺所蔵）	
慶長 3 年	1598	1月20日	片桐大社での天下御祈祷の誦經に、鰐淵寺僧9人が参加する	「北島殿御院に有來備おほえのまゝ書立事」（佐草家文書、「出雲國浮島山鰐淵寺」）	
		この頃	毛利輝元。佐世元嘉を通じて源義経と弁慶の書き物の提出を命じる	「佐世元嘉書状（折紙）」（鰐淵寺文書、目録 595）	
慶長年間	1596-1615		鰐淵寺の年行事ら、先の棟地で2000石が没収され僅かに1000石が残され、今度また390石余が没収されるのは困るとしてその免除を求める	「鰐淵寺年行事等連署書状」（鰐淵寺文書、目録 592）	

慶長 14 年	1609	3月 28 日	杵築大社、仮殿式の遷宮を行う（慶長慶遷宮） 遷宮導師を多摩東象村が勤める	「杵築大社旧記御遷宮次第」（解説寺田藏文書、目録 631）
元和 2 年	1616	3月 8 日	解説寺石高 300 叢（河下・橋引・下庄・東西別所・廣川・吉志） 年貞高から收穫高に変更され。実質戦国期の 1/5 以下	「松江藩（堀尾氏）寺領打渡日録」（解説寺文書、目録 633）
寛永 9 年	1632	6月	杵築大社の上官佐草吉清、解説寺僧が社入して読經する行為に対し、神法を捺める行為だと過烈に批判する	「佐草吉清起譖文」（佐草家文書、「出雲國浮瀬山解説寺」）
寛永 15 年	1638	9月吉日	解説寺年行行事の西口（本）坊と橋口（本）坊、尼子義久寄進の両界曼荼羅図を修理する	「武界曼荼羅因輪木修理銘」（解説寺所蔵、目録 558）
万治 2 年	1659	9月吉祥日	解説寺の藏王権現社が建立される	「万指出」（「藏王権現社建立棟札写」）
寛文元年	1661	8月	幕府より、出雲大社造営の内定が松江藩に伝えられる	（「出雲國浮瀬山解説寺」）
寛文 3 年	1663	⑤月 19 日	佐草吉清、大社神前での解説寺衆による祈禱は無用で、宿坊も不要と、その日記に記す	「大社御造営日記」
寛文 4 年	1664	4月吉日	解説寺の祝延堂が建立される	「祝延堂建立棟札」（解説寺所蔵、目録 671）
寛文 5 年	1665	5月 11 日	一切經堂が破却され、杵築大社から仏教施設が一掃される（仏教施設などの塵廢品前年 1 月 30 日に開示された）	（「仏教施設などの塵廢品前年 1 月 30 日に開示された」）
寛文 6 年	1666	12月 8 日	杵築大社より解説寺に對し、翌年以降の祭礼への參加無用と通告される。三月会祭礼への解説寺僧の參加途絶える	（「万指出」）
寛文 7 年	1667	3月 30 日	杵築大社、正殿式の遷宮を行つ（寛文慶遷宮）	
		12月 11 日	解説寺に、摩多羅神社と常行堂が建立される	「摩多羅神宮并常行堂建立棟札」（解説寺所蔵）
寛文 12 年	1672		解説寺で法華堂が建立される	「万指出」（「法華堂建立棟札写」）
延宝 4 年	1676		解説寺に山王権現社が建立される	「延宝四年山王権現社建立棟札」（解説寺所蔵）
元禄 4 年	1691	8月	解説寺根本堂が建立される	（「万指出」）
元禄 11 年	1698	2月吉日	解説寺の紙本著色十二天像の修復が終わる	（「十二天像帝釈天裏墨書き銘」（解説寺所蔵））
元禄 12 年	1699	6月	山王七仏堂前に六百石油井養塔が建てられる	
18世紀初頭			この頃、解説寺弁慶伝説が確立される	
正徳 3 年	1713	3月吉祥日	鐘楼が建立される	「鐘楼建立祈禱札」（解説寺所蔵）
享保 2 年	1717		僧坊 12 あることが記される	（「雲陽誌」（黒沢石菴著））
享保 10 年	1725		念仏堂前に六百石油井養塔が建てられる始める	
享保 12 年	1727	4月 8 日	解説寺僧印円印。木造宝塔を奉獻する	「木製宝塔刻銘」（解説寺所蔵）
慶応 4 年 (明治元年)	1868		明治維新	
明治 2 年	1869	7月 28 日	神仏判然令に対して、村田寂順が摩多羅社は天台仏教擁護のインドの神と主張したため、その撤去を免れる	
明治 7 年	1874	12月 7 日	年行事制を改めて官職制に移行する（初代住職倒籠院貞道）	
明治 8 年	1875	8月	本堂を中心 12 坊が存続する	（「解説寺見取懸絵図」）
明治 20 年	1887	12月	「当山御相撲」を島根県に提出する（境内納印添付）	
明治 21 年	1888	9月	賀城院が焼失する	（「松本坊靈薄」（大正以降の文書））
明治 35 年	1902	7月 31 日	觀世音菩薩立像 2 体が国宝（現重要文化財）に指定される	
明治 38 年	1905	5月	和多坊・惠門院・念仏堂が焼失する	（「松本坊靈薄」「山陰新聞」など）
明治 43 年	1910	2月 18 日	是心院・松本坊・等源院ほか 7 坊が残る	（「倒院二聞スル答申書」（平田因善館所蔵））
昭和 6 年	1931	6月 25 日	解説寺と松本坊が合併し、松本坊が解説寺本坊となる。	
昭和 18 年	1943	9月 20 日	風水害により唐門が全壊。仏心堂流などの被害を受ける	
昭和 21 年	1946		農地改革により所有田畠 150 反を国に譲渡する	
昭和 30 年	1955	9月 7 日	慶王宝窟にて銅製錫鏡が発見される	（「銅鏡保存板墨書銘」（解説寺所蔵））
昭和 35 年	1960	11月 6 日	解説寺開創 1350 周年法要が開まる	
		10月	七仏堂がコンクリート造で建設される	
昭和 47 年	1972		平田市（当時）が慶王宝窟地に觀光施設の満翠館を建設する（平成 25 年（2013）完成）	
昭和 54 年	1979		標本中堂・摩多羅神社などの修復が行われる（完成は 1983 年）	
昭和 58 年	1983		本尊千手観音菩薩・藥師如來の御開帳が行われる	
平成 17 年	2005	9月 2 日	宝嚴殿の文化財が盗難に遭う	
平成 18 年	2006		最心院の建物が撤去される	
平成 27 年	2015	3月 20 日 — 22 日	本尊の御開帳が行われる	

史料からみた鰐淵寺僧坊の消長（附表1～3）

- 附表1～4は、「鰐淵寺文書」などにみえる鰐淵寺の僧坊名を年次順に配列してその消長を示したものである。史料に登場する僧坊は数多く、かつ変化するので、井上寛司氏による時期区分（第3章第2節）に基づき、附表1：第1期、附表2：第1期末から第2期前半、附表3：第2期後半、附表4：第2期末から第3期、に分けた。そのため、附表ごとに配列される僧坊には違いがある。
- 作成あたり、「科研報告」と、井上寛司編「1997『出雲國浮浪山鰐淵寺』」を参考にした。各附表に記した「文書番号」は「科研報告」「鰐淵寺関係編年史料目録」の番号である。
- 各文書の内容については、主に次の文献によった。
曾根研三「1963『鰐淵寺文書の研究』鰐淵寺文書刊行会、井上寛司編「1997『大社町史 史料編（古代・中世）』大社町これに掲載されない文書については、井上寛司氏の教示による。

附表1 第1期の僧坊

年号	承和1	治承2	元暦1	文治年中	建保1	天福年中	建長2	建長6	建長8	嘉慶1	嘉慶3	建武3	貞和3	貞和6?	
西暦	1165	1178	1184	1185-1189	1211	1233・34	1250	1254	1256	1326	1328	1336	1347	1350頃	
文書番号	17					18	36	33	36	74	76	89	119	※3	
特記事項 火災? 火災? 火災?															
本坊	□														
曾根院		■													
圓滿坊		■													
柳門院		■													
宝珠坊	□	○	●												
月珠坊															
如意坊										○					
十林院										□					
円鏡坊										□	※1				
大妙坊										■					
聖相房										■					
密嚴院															
月藏院												□	※2		
竹本坊															□

※1 和多坊の南に所在。

※2 「如意輪寺」の記載。「寄闇誌」などに密嚴院本尊は如意輪觀音。

※3 「鰐淵寺大乗集々造裏記諸文案」が引くする「寺務月藏房法印宗興施行」。

※4 「佐々木系図」(鰐淵寺御遺稿 卷132)

□ 初出で以後も史料に登場する

■ 初出で以後、史料にみえない

○ 史料にみえる

● 後、史料にみえない

附表2 第1期末から第2期前半の僧坊

年号	嘉慶1	嘉慶3	建武3	貞和6?	親応2	正平8	正平10	貞治3	貞治5	応安1	明徳3	応永2	応永8	応永12
西暦	1326	1328	1336	1350頃	1351	1353	1355	1364	1366	1366	1392	1395	1401	1405
文書番号	74	76	89	※2	108	116	119	123	124	126	134	136,137	141-149	152
特記事項 火災														
本坊														
僧門坊												□		
如意坊		○			○	○	○	北院		○			○	北院
円鏡坊														
井戸坊														
密嚴院														
竹本坊														
梅本坊														
學本坊														
維本坊														
大藏坊														
金剛院														
行持坊														
金剛坊														
一乘院														
羅本坊														
田中坊														
大蓮坊														
一心坊														
年号	応永20	応永25	永享5	永享7	文安1	文安2	文安2	文安3	文安4	享徳1	享徳2	享徳3	文明10	文明18
西暦	1413	1418	1433	1435	1444	1445	1445	1446	1447	1452	1453	1454	1464	1466
文書番号	154	159	171	172	178	180	119	181,184,185	186	188,189	191	192	203,207	208
特記事項														
本坊														
僧門坊														
如意坊														
円鏡坊														
井戸坊														
密嚴院														

年号	応永 20	応永 25	永享 5	永享 7	文安 1	文安 2	文安 2	文安 3	文安 4	享徳 1	享徳 2	享徳 3	文明 10	文明 18	
西暦	1413	1418	1433	1435	1444	1445	1445	1446	1447	1452	1453	1454	1484	1486	
文書番号	154	159	171	172	178	180	119	181,184,185	186	188,189	191	192	203,207	208	
跡記事項															
竹尾坊															
竹本坊															
梅本坊															
学本坊															
梅本坊															
大福坊															
金福院															
行林坊															
金本坊															
一乗院															
塔本坊															
田本坊															
大本坊															
一心坊															
年号	長享 2	延徳 2	延徳 3	明応 7	明応 9										
西暦	1488	1490	1490	1498	1500										
文書番号	119	209	2-99	211	212										
跡記事項															
本覚坊															
僧本坊															
和本坊															
門本坊															
井本坊															
覺院															
竹本坊															
竹本坊															
梅本坊															
学本坊															
梅本坊															
大福坊															
金福院															
行林坊															
金本坊															
一乗院															
塔本坊															
田本坊															
大本坊															
一心坊															

※1 「如意輪寺」の記載、「宝闇院」などに密厳院本尊は如意輪觀音。

※2 「佐々木系図」(続御書類叢書 卷132)

※3 文書には「北政所竹瓦坊」。後の書き込みの可能性。

※4 和多坊の前に所在。

□ 初出で以後も史料に登場する

■ 初出で以後、史料にみえない

○ 史料にみえる

● 以後、史料にみえない

附表3 第2期後半の僧坊

年号	永正 16	永正 17	大永 2	大永 7	年未詳	天文 1	天文 2	天文 3	天文 5	天文 8	天文 9				
西暦	1512	1519	1520	1522	1527	1532	1533	1534	1535	1539	1540				
文書番号	219	223	224	227,228	631	234	237	236	238,239	240	241	246	※ 1	631	
跡記事項															
本坊															
僧本坊															
和本坊															
井本坊															
覺院															
竹尾坊															
梅本坊															
學本坊															
梅本坊															
大福坊															
金福院															
行林坊															
金本坊															
一乗院															
塔本坊															
月輪坊															
地本坊															
正教坊															
眞教坊															
西本坊															
梅本坊															
正教坊															
元教坊															
井本坊															
梅本坊															

年号	永正 9	永正 16	永正 17	大永 2	大永 7	年未詳	天文 1	天文 2	天文 3	天文 5	天文 8	天文 9
西暦	1512	1519	1520	1522	1527		1532	1533	1534	1535	1539	1540
文書番号	219	223	224	227,228	631	234	237	236	238,239	240	241	246
特記事項												
寺本坊												
龍光坊												
竹光坊												
典光坊												
自性院												
年号	天文 10	天文 12	天文 13	天文 15	天文 19		天文 20	天文 22	天文 24	年未詳	弘治 2	
西暦	1541	1543	1544	1546	1550		1551	1553	1555	1557	1556	
文書番号	631	257	258,259	631	261	631	264-266	267	268-270	274	286	290
特記事項												
本覚坊												
僧門坊												
和多坊												
井上坊		○					○	○				
密嚴院							○					
竹光坊							○					
性本坊	○			○	○		○					
専本坊		○										
総本坊												
金剛院							○					
延光坊												
大蓮坊					○			○				
月輪坊							○					
池田坊							○					
正教坊										○		○
顯教坊											○	○
西本坊							○					
極楽坊										○		
正定坊												
光嚴坊												
井上坊							○					
梅本坊												
専本坊												
圓本坊												
竹井坊							□					
典光坊							□					
自性院												
年号	弘治 2		年未詳		永祿 4		永祿 6	永祿 7	永祿 8		永祿 9	年未詳
西暦	1556		1556?		1561		1563	1564	1565	1565	1566	1569
文書番号	316	346	286,308 347	367	368	369	373	※ 5	377,378	382	384	390,391 402,405 412
特記事項												
本覺坊	○									○		
僧門坊		○	○		○			○		○	○	○
和多坊	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○
井上坊			○	○	○							
密嚴院			○									
竹尾坊							○					
性本坊												
専本坊												
學林坊												
總本坊												
大福坊												
金剛院												
延光坊												
大蓮坊							○					
月輪坊										○		
池田坊							○					
正教坊				○	●	●						
顯教坊				●	●	●						
西本坊												
極樂坊												
光嚴坊												
井上坊							○					
梅本坊												
専本坊												
圓本坊												
竹井坊												
典光坊												
自性院												

年号	永禄 13	年末詳	元龜 1	元龜 2	元龜 3	元龜 3 ?	年末詳	天正 2	天正 3	天正 4	天正 5	天正 6	天正 7	天正 11	
西暦	1570	1570?	1570	1571	1572?			1574	1575	1576	1577	1578	1579	1583	
文書番号	416	417-419	422,429	431	437-444	447	449-451	454-457	459,472 498	487,497	501	503,505	507	510	522,531
特記事項															
本覚坊														○	
僧行坊															
和多坊	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○		
井上坊	○													○	
密教院		○													
竹本坊		○													
竹本坊	○													○	
梅本坊															
学本坊															
梅本坊															
大福坊															
金剛院		○													
塔本坊	●	●	●												
月本坊		○													
池本坊															
正教坊															
鏡本坊															
西本坊															
月本坊															
池本坊															
正教坊															
光慶坊															
井本坊										○		○			
梅本坊															
寺本坊															
岩本坊															
竹本坊															
梅本坊															
自性院															
年号	天正 12			天正 13			天正 14			天正 15			天正 16		
西暦	1584			1585			1586			1587			1588		
文書番号	535	536	538,539	547-549	554,557 558	563	565	569-573	577	579	581	585	592	616	
特記事項															
宋芸死去														寺領没収 への脈状	
本覚坊															
僧行坊															
和多坊	○	○	○				○	○	○	●	●	○	○		
井上坊															
密教院							○		○						
竹本坊															
竹本坊	○		○	○	○	○	○								
毘尼坊															
南院															
学本坊															
梅本坊															
大福坊															
金剛院															
塔本坊															
大蓮坊							○		○						
月本坊															
池本坊															
正教坊															
鏡本坊															
西本坊	○		○				○								
梅本坊															
正教坊															
光慶坊															
井本坊							○								
梅本坊															
寺本坊															
岩本坊															
竹本坊															
梅本坊															
自性院															

※1 「国富任結解状写新稿」(木内隆貞家文書)

※2 うち中方 8 倍、下方 17 倍。

※3 「大社町文」にも「正教坊法印」とあり、比叡山北谷の僧坊とする。

文書には「大社町文」とある。

文書は元秀所尾殿大政若経・巻 491 黄書

文書には「たうの本」。

文書には「真筆書き込み」。

文書には「自性院」の院号で登場。

文書には「鰐源寺僧侯芸、復海達窓定資書」(木内隆貞家文書)

□ 初出で以後も史料に登場する

■ 初出で以後、史料にみえない

○ 史料にみえる

● 以後、史料にみえない

附表4 第2期末から第3期の僧坊

年号	慶長7	慶長11	慶長13	慶長15	年末詳	元和4	寛永9	寛永15	寛永16	年末詳	慶安4	万治2	寛文1	寛文4
西暦	1602	1606	1608	1610		1618	1632	1638	1639		1651	1659	1661	1664
文書番号	620,621	626	627	629	631	634	647	558	663	※3	666	668	669	673
特記事項	10坊													大社造替
本堂坊	○		○											
僧院坊														
和多坊	○			○	○				○			●	○	○
井上坊														
密嚴院							○							
竹林坊	●													
竹本坊	○	○	●											
松本坊														
學林坊														
雄立坊														
大藏坊														
金剛院	○		●											
理圓坊	■													
大藏坊														
月輪坊	●													
地主坊	○						○							
西本坊	○							○?	※2		○			
井本坊	○										○			
正覺坊														
自性院														
松本坊														
禪林坊														
圓覺院														
年号	寛文6	寛文7	享保2	享保9	享保19	延享1	宝曆14	文化8	文化10	明治20				
西暦	1666	1667	1717	1724	1734	1744	1754	1811	1826	1887				
文書番号	学尼羅神 宮井常行 堂井立権 札		智尾大權 現社修造 権札	山王権現 社修造権 札	智尾大權 現社修造 権札写		明総帳	摩多羅神 社井常行 堂修造権 札	山王権現 宮井通権 札	明総帳				
特記事項	片斯大社、 解説寺僧 の下山停 止を通告	12坊	8坊					9坊	9坊	12坊				
本堂坊		○						本堂坊	○	○	本堂坊			
僧院坊			○和多坊		○			和多坊	○		和多坊			
和多坊														
井上坊			○密嚴院		○			密嚴院	○	○	密嚴院			
密嚴院														
竹林坊														
竹本坊														
桜本坊	○桜本坊							淨觀院	○淨觀院		淨觀院			
學林坊														
雄立坊	○雄立坊							惠門院	○慧門院	○惠門院	惠門院			
大藏坊								寶城院	○寶城院	○寶城院	寶城院			
金剛院														
理圓坊														
大藏坊														
月輪坊														
地主坊	○地主坊		○是心院		是心院	○	○	○	○		是心院			
西本坊	○西本坊											○等院	○等院	
井本坊	○井本坊		○井本坊		○			○	○		○	○	○	○
正覺坊														
自性院	○松本坊		○		松本坊	○	○	○	○		松本坊			
松本坊														
禪林坊	○禪林坊		○現成院		現成院	○					現成院			
圓覺院	○圓覺院		○		圓覺院	○		圓覺院	○		圓覺院			
	■妙覺院		■普明院											

※1 文書には「西口坊」。

※2 文書には「櫻口坊」。

※3 「松井七郎左衛門附等連署書状」(前田市田文文書)。

※4 「岡田半右衛門書状」(岡田半右衛門外三名連署書状) (前田市田文文書)。

□ 初出で以後も史料に登場する

■ 初出で以後、史料にみえない

○ 史料にみえる

● 以後、史料にみえない

鰐淵寺 遺物観察表

【凡例】

1. この遺物観察表は、陶磁器・土器、瓦、銭貨、石製品等の順で掲載する。
2. 法量（　）内数字は、復元値である。
3. 調整・手法の記号は、回転ナデ：a、ヨコナデ：b、ナデ：c、回転糸切り：d、静止糸切り：e、同心円タタキ：f、平行タタキ：g、格子タタキ：h、タタキ：iを表す。
4. 色調の色・記号は、1996『新版 標準土色帳 1996年版』財団法人日本色彩研究所を使用する。

陶磁器・土器観察表（1）分布調査

捲 番	図 面 号	図 番 版 号	平坦面 番 号	採集位置	種 別	器 種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色 調	被熱	備 考
							口径	底径	器高					
48-1	8	F2	平坦面	白磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 7SYR 7/2	○	破IV類	
48-2	8	A55	下斜面	白磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 7SYR 8/1	○	破IV類	
48-3	8	C5	上斜面	白磁	碗	—	(7.4)	—	—	密・良	灰白 5Y7/1	○		
48-4	8	C5	上斜面	白磁	碗	—	(7.6)	—	—	密・良	黄灰 2SY5/1	○		
48-5	8	C5	上斜面	白磁	皿	—	4.6	—	—	密・良	灰白 7SY 8/1	○	皿VII類	
48-6	8	A38	南側斜面	青磁	碗	(12.0)	—	—	—	緻密・良	灰白 7SY 7/1	○	龍泉窯系	
48-7	8	A30	平坦面	青磁	碗	—	4.6	—	—	密・良	暗灰 7SY 5/1	○		
48-8	8	A54	平坦面	青磁	碗	—	(5.3)	—	—	密・良	灰白 7SY 7/1	○		
48-9	8	A45	平坦面	青磁	碗	—	(5.2)	—	—	密・良	灰白 7SY 7/1	○		
48-10	12	A38	南側斜面	青磁	碗	—	(6.5)	—	—	緻密・良	灰白 7SY 7/1	○	破B-I類	
48-11	8	A38	2トレンチ 側斜面	中国陶器	钵	(24.4)	—	—	—	密・良	にぶい赤褐 2SYR 4/3		褐釉C類	
48-12	12	F9	上斜面	中国陶器	四耳壺	(10.0)	—	—	—	密・良	灰 N4/		褐釉	
48-13	8	A38	南側斜面	青花	皿	(14.8)	8.0	(3.8)	—	密・良	灰白 7SY 7/1	○	皿B1群	
49-1	8	A27	北東側平坦 面	古代須恵器 か	甕	—	—	—	内面：カキメ	密・良	灰黄褐 10YR 6/2			
49-2	8	A38	南側斜面	古代須恵器	甕	—	—	—	内面：f 外面：g	密・良	灰 5Y 6/1			
49-3	8	A27	北東側平坦 面	古代須恵器	甕	—	—	—	内面：f 外面：g	密・良	淡灰 2SY 7/1			
49-4	8	A38	東側平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	外面：h	密・やや 不良	淡灰 2SY 7/1			
49-5	8	A37	平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	外面：h	密・やや 不良	淡灰 2SY 7/1			
49-6	8	A38	西南側平坦 面	中世須恵器	甕	—	—	—	外面：h	密・やや 不良	淡灰 2SY 7/1			
50-1	13	A38	平坦面	常滑焼	甕	—	—	—	内外面：b	密・良	褐灰 10YR 6/2			
50-2	12	C 20	平坦面	常滑焼	甕	—	(17.0)	—	内面：c 外面：ハケ後,c	密・良	灰黄褐 10YR 6/2			
50-3	13	A38	南側斜面	越前焼	甕	—	—	—	内面：b	密・良	灰黄褐 2SY 7/2			
51-1	13	A38	2トレンチ 側斜面	備前焼	甕	—	—	—	内外面：b	密・良	灰黄褐 10YR 5/2		中世3期	
51-2	13	F9	上斜面	備前焼	甕	(41.0)	(30.0)	(89.0)	内面：ケズリ後c 外面：b; 脊部ケズ リ	密・良	明赤褐 5YR 5/6		中世5期	
51-3	13	A45	平坦面	備前焼	甕	—	—	—	内外面：b	密・良	にぶい赤褐 7SYR 5/3		中世5期	

陶磁器・土器観察表（2） 分布調査

捲番 図 号	図 番 号	版 番 号	平坦面 番 号	探集位置	種 別	器 種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色 調	被熟	備 考
							口径	底径	器高					
51-4	13	A38	2トレンチ側斜面	偏前焼	甕		—	—	—	内面：b,c 外面：b	密・良	褐色 10YR 5/1		中世 5期
51-5	13	A38	2トレンチ側斜面	偏前焼	甕		—	—	—	内外面：b	密・良	にぶい赤褐 5YR 5/4		中世 5期～ 6a期
51-6	13	A46	平坦面	偏前焼	甕		—	—	—		密・良	褐色 5YR 4/1		中世 6b期
52-1	12	A38	山側	偏前焼	搖鉢	(30.6)	(14.2)	(14.3)		内面：a 外面一部にハケ目	密・良	赤褐色 2.5YR 4/6		中世 5a期
52-2	13	A38	南側斜面	偏前焼	四耳壺	(20.2)	—	—			密・良	褐色 7.5YR 4/1		中世 5a～ 5b期
52-3	13	A38	南側斜面	偏前焼	四耳壺か	(14.6)	—	—	内外面：b	密・良		褐紅 7.5YR 6/2		
52-4	13	A38	2トレンチ側斜面	偏前焼	甕	—	—	—		密・良	褐色 10YR 4/1		縫刻	
52-5	13	A38	南側斜面	偏前焼	甕	—	—	—		密・良	褐色 10YR 4/1		縫刻	
53-1		A38	南側斜面	土師器	杯	—	5.3	—	内外面：a 底部：d	やや粗・ 良	浅黃褐 7.5YR 8/4			
53-2		A38	2トレンチ側斜面	土師器	杯	—	5.5	—	内外面：a 底部：d	やや粗・ やや不良	にぶい褐 2.5YR 6/4			
53-3		A27	北東側平坦面	土師器	杯	—	5.0	—	内外面：a	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3			
53-4		A38	南側斜面	土師器	杯	—	(6.1)	—	内外面：a 底部：b	やや粗・ やや不良	にぶい褐 7.5YR 6/4			
53-5	53	F9	上斜面	土師器	皿	(12.0)	4.4	3.2	内外面：a 底部：d	密・良	浅黃褐 10YR 8/4		G1類	
53-6	53	F8	西上斜面	土師器	皿	(11.9)	5.5	3.5	内外面：a 底部：d	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		G1類	
53-7	53	F9	上斜面	土師器	皿	(10.4)	5.8	2.9	内外面：a 底部：d → a	密・良	にぶい褐 7.5YR 6/6		G2類	
53-8		F8	西上斜面	土師器	皿	(9.8)	(5.2)	2.9	内外面：c 底部：d → c	密・良	にぶい褐 7.5YR 6/4		G2類	
53-9		F8	西上斜面	土師器	皿	9.6	6.0	2.1	内外面：c 底部：d → c	密・良	にぶい褐 7.5YR 7/4		G2類	
53-10		F9	上斜面	土師器	皿	8.3	4.3	2.0	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G3類	
53-11	53	F9	上斜面	土師器	皿	8.4	3.8	2.1	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G3類	
53-12		F8	西上斜面	土師器	皿	8.5	4.9	1.6	内外面：d 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G3類	
53-13		F9	上斜面	土師器	皿	(7.8)	3.2	2.0	内外面：d 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G4類	
53-14		F9	上斜面	土師器	皿	7.7	4.4	1.6	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G4類	
53-15		F9	上斜面	土師器	皿	7.6	4.6	1.4	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G4類	
53-16		F8	西上斜面	土師器	皿	7.4	3.9	1.7	内外面：d 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G4類	
53-17		F9	上斜面	土師器	皿	8.1	4.7	1.6	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		G4類	
53-18		F8	西上斜面	土師器	皿	(7.8)	4.8	1.8	内外面：a → c 外面：c 底部：d	密・良	にぶい褐 7.5YR 6/4		G4類	
53-19		F9	上斜面	土師器	皿	7.3	3.2	1.7	内外面：a 底部：d	密・良	にぶい黄褐 7.5YR 6/4		G4類	
53-20	53	F9	上斜面	土師器	皿	7.2	4.1	1.6	内外面：a 底部：d	密・良	にぶい黄褐 7.5YR 7/4		G4類	
53-21	53	F9	上斜面	土師器	皿	7.2	4.4	1.3	内外面：b 底部：d → c	密・良	にぶい褐 7.5YR 7/4		G5類	
53-22		F9	上斜面	土師器	皿	7.3	4.4	1.1	内外面：a 底部：d → c	密・良	褐 5YR 7/6		G5類	
53-23		H2	斜面	土師器	皿	7.3	4.2	1.5	内外面：a 底部：d → c	密・良	褐 7.5YR 7/6		G5類 光明面	
53-24		F8	西上斜面	土師器	皿	(8.1)	(4.2)	1.4	内外面：c 底部：d	密・良	浅黃褐 7.5YR 8/6		G5類	
53-25	53	F8	西上斜面	土師器	皿	(8.8)	(6.8)	1.6	内外面：b 底部：d → c	密・良	にぶい褐 7.5YR 7/4		H2類	

陶磁器・土器観察表(3) 分布調査

捲番	団号	固番	版号	平坦面番号	採集位置	種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
								口径	底径	器高					
53-26	53	A38	2トレンチ側南斜面	土師器	皿		(7.4)	(5.7)	1.9	内外面:a 底部:d	密・やや不良	灰黄褐 TOYR 5/2		皿 H2類	
53-27	53	F8	西上斜面	土師器	皿	(10.3)	(9.0)	2.3	内外面:c 底部:d	密・良	にぶい橙 7SYR 6/4		皿 H3類		
53-28		F8	西上斜面	土師器	皿	(9.1)	(7.0)	2.3	内外面:c 底部:d→c	密・良	橙 2SYR 6/6		皿 H3類		
53-29		F9	上斜面	土師器	皿	(9.2)	(6.8)	2.4	内外面:a 底部:e→c	密・良	橙 2SYR 6/6		皿 H3類		
53-30		F8	西上斜面	土師器	皿	(9.0)	(7.1)	2.0	内外面:b 底部:e→c	密・良	橙 SYR 6/6		皿 H3類		
53-31		F8	西上斜面	土師器	皿	(8.8)	5.7	1.8	内外面:b 底部:e→c	密・良	明赤褐 2SYR 5/6		皿 H3類		
53-32		F8	西上斜面	土師器	皿	(9.4)	(7.0)	2.1	内外面:a 底部:e	密・良	橙 2SYR 6/6		皿 H3類		
53-33	12	F8	西上斜面	土師器	皿	—	6.0	—	内外面:a 底部:e	密・良	にぶい橙 7SYR 7/4		皿 H3類 輪郭の墨書き		
53-34		C7	上斜面	土師器	皿	—	(5.6)	—	内外面:b 底部:d→c	密・良	橙 7SYR 7/6		皿 H3類		
53-35	53	F9	上斜面	土師器	皿	7.6	5.2	2.1	内外面:a 底部:e	密・良	浅黄 7SYR 8/4		皿 H4類		
53-36		F8	西上斜面	土師器	皿	7.1	5.6	1.7	内外面:b 底部:d→c	密・良	浅黄橙 7SYR 8/4		皿 H4類		
53-37		F8	西上斜面	土師器	皿	6.9	5.7	1.6	内外面:b 底部:d	密・良	にぶい橙 7SYR 6/4		皿 H4類		
53-38		F9	上斜面	土師器	皿	7.0	4.6	1.6	内外面:a 底部:d	密・良	橙 7SYR 8/4		皿 H4類		
53-39		F9	上斜面	土師器	皿	6.9	5.0	1.4	内外面:c 底部:dか	密・良	にぶい黄褐 7SYR 6/4		皿 H4類		
53-40		F8	西上斜面	土師器	皿	7.0	5.3	1.5	内外面:b 底部:d	密・良	にぶい橙 7SYR 7/4		皿 H4類		
53-41		F9	上斜面	土師器	皿	6.2	4.0	1.6	内外面:b 底部:d→c	密・良	にぶい橙 7SYR 7/4		皿 H4類		
53-42		F8	西上斜面	土師器	皿	6.0	4.4	1.7	内外面:b 底部:d→c	密・良	にぶい橙 7SYR 7/4		皿 H4類		
54-1	53	F9	上斜面	土師器	皿	(12.2)	(5.3)	2.6	内面:h 外面:c 底部:c	密・やや不良	浅黄橙 TOYR 8/4		京都系		
54-2	53	F8	西上斜面	土師器	皿	(10.2)	(4.2)	2.4	内外面:c, 指押え 底部:c	密・やや不良	にぶい黄褐 TOYR 7/3		京都系		
54-3		F8	西上斜面	土師器	皿	10.8	—	2.0	内外面:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/4		京都系		
54-4		F8	西上斜面	土師器	皿	11.0	—	1.8	内外面:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/3		京都系		
54-5		F8	西上斜面	土師器	皿	11.2	—	(1.9)	内面:c 口縁端部:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/3		京都系		
54-6		F8	西上斜面	土師器	皿	11.6	—	1.8	内面:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/3		京都系		
54-7		F8	西上斜面	土師器	皿	14.4	—	2.4	内外面:a 底部端子:指押え	緻密・良	にぶい橙 7SYR 7/4		京都系		
54-8	53	F8	西上斜面	土師器	皿	9.0	—	1.7	内面:b,c 外面:c	緻密・良	にぶい黄褐 TOYR 7/3		京都系		
54-9		F8	西上斜面	土師器	皿	8.0	—	1.2	内外面:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/4		京都系		
54-10		F8	西上斜面	土師器	皿	8.4	—	1.3	内外面:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/4		京都系		
54-11		F8	西上斜面	土師器	皿	8.4	—	1.4	内面:c 口縁端部:c	緻密・良	浅黄橙 7SYR 8/6		京都系		
54-12		C20	下斜面	土師器	皿	(8.2)	3.0	(1.4)	内外面:c, 指押え痕	密・良	浅黄橙 7SYR 8/4		京都系		
54-13		F8	西上斜面	土師器	皿	9.2	—	1.4	内面:c 口縁端部:c	緻密・良	浅黄橙 TOYR 8/3		京都系		
54-14		F8	西上斜面	土師器	皿	(8.3)	(3.1)	1.9	内面:c, 指押え痕 底部:c	密・不良	にぶい黄褐 TOYR 7/3		京都系		
54-15	53	F9	上斜面	土師器	皿	(8.6)	(3.7)	1.8	口縁端部:c 外面に指押え痕	密・良	SYR 7/4		京都系		
54-16		F8	西上斜面	土師器	皿	7.4	—	1.5	内外面:c	緻密・良	にぶい 橙 7.5SYR 7/3		京都系		

陶磁器・土器観察表(4) 分布調査

捲番 団号	団番 編号	平坦面 番号	探査位置	種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
						口径	底径	器高					
54-17		F9	上斜面	土師器	皿	(10.0)	(4.5)	2.0	内面:c 外面:b, 指押え痕	密・やや不良	にぶい橙 7.5YR 7/4		京都系
54-18	53	F9	上斜面	土師器	皿	11.6	—	2.3	内外面:c	緻密・良	浅黄橙 10YR 8/4		京都系
54-19		F8	西上斜面	土師器	皿	9.0	—	2.0	内外面:c 底部:指押え成形痕 c	緻密・良	にぶい橙 5YR 7/4		京都系
54-20		F8	西上斜面	土師器	皿	9.6	—	1.8	内外面:c	緻密・良	にぶい橙 7.5YR 7/4		京都系
55-1	52	A23	北東側	土師質土器	浅鉢	—	—	—		密・やや不良	灰白 2.5YR 8/1		浅鉢IV類
55-2	52	A25	平坦面	瓦質土器	蓋か火鉢	—	(23.2)	—	内面:a 外面:b 底部:回転ヘラケズリ	やや粗・良	灰 5Y 7/1		
9-1	C5	上斜面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰黄 2.5YR 6/2	○	碗II類
9-2	A24	平坦面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	碗IV類
9-3	C5	上斜面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1		碗IV類
9-4	A24	平坦面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	碗IV類
9-5	C5	上斜面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		碗V類
9-6	F1	平坦面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰 7.5Y 6/1		碗V類
9-7	A45	平坦面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1		碗V類
9-8	C1	南下斜面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	浅黄 2.5Y 8/2	○	碗V類
9-9	C5	上斜面	白磁	碗	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1	○	碗V類
9-10	—	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	
9-11	A22	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 N 8/		
9-12	A42	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 8/1	○	
9-13	A37	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	
9-14	A44	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	
9-15	A23	北東側平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	
9-16	C1	南下斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1		
9-17	C1	南下斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/2	○	
9-18	C1	南下斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰黄 2.5Y 7/2	○	
9-19	C5	上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1		
9-20	C5	上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰黄 2.5Y 7/2	○	
9-21	C5	上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/2	○	
9-22	C2	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/2	○	
9-23	C2	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/2	○	
9-24	C2	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/2	○	
9-25	A43	平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/2	○	
9-26	C5	上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—	—		密・良	灰黄 2.5YR 6/2	○	

陶磁器・土器觀察表(5) 分布調査

捲番	図 番	版 番	平底面 番号	採取位置	種 別	器 種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色 調	被熱	備 考
							口径	底径	器高					
9-27	C5		上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰黄 2.5YR 6/2	○		
9-28	C5		上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1	○		
9-29	—		平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○		
9-30	—		平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/1			
9-31	—		奥側平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/1	○		
9-32	A 44		平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○		
9-33	C5		上斜面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1	○		
9-34	A 45		平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/1	○	皿VI類	
9-35	A 52		平坦面	白磁	碗か皿	—	—	—		密・良	灰白 N 8/	○		
9-36	A 54		平坦面	白磁	水注か耳 壺	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○		
9-37	A 46		平坦面	白磁	水注か耳 壺	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○		
9-38	—		平坦面	白磁	水注か耳 壺	—	—	—		密・良	灰 7.5Y 6/1			
9-39	F 1		平坦面	白磁	水注か耳 壺	—	—	—		密・良	黄灰 2.5Y 5/1	○		
9-40	F 1		平坦面	白磁	水注か耳 壺	—	—	—		密・良	灰 7.5Y 6/1	○		
9-41	A42		平坦面	青白磁	梅瓶	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1			
9-42	A64		北上斜面	青白磁	梅瓶	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1			
10-1	A 23		平坦面	青磁	皿	—	—	—		密・良	灰 5Y 6/1		龍泉窯系 皿I類	
10-2	A 35		平坦面	青磁	皿	—	—	—		密・良	灰 5Y 6/1		龍泉窯系 皿I類	
10-3	A 56		下斜面	青磁	皿	—	—	—		密・良	灰 5Y 6/1		龍泉窯系 皿I類	
10-4	A 54		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 N 7/	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-5	A 37		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-6	A 50		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-7	A50		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-8	A 44		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-9	A50		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-10	A 47		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系 碗B I類	
10-11	A47		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系 碗B I類	
10-12	A 28		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-13	A50		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-14	A64		北上斜面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-15	A 22		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗B I類	
10-16	A 37		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1		龍泉窯系 碗B IV類	
10-17	A37		平坦面	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系 碗B IV類	

陶磁器・土器觀察表(6) 分布調查

捲番 図 号	図 番 版 号	平坦面 番 号	探集位置	種 別	器 種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色 調	被 熱	備 考
						口径	底径	器高					
10-18	A 57	下斜面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 N 7/	○	龍泉窯系 碗 C I 類
10-19	A 55	下斜面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗 C I 類
10-20	A 19	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗 C I 類
10-21	A 57	下斜面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗 C I 類
10-22	A 44	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗 C II 類
10-23	A 41	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1		龍泉窯系 碗 D 類
10-24	A 28	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系 碗 D 類
10-25	A 54	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗 D 類
10-26	—	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1		龍泉窯系 碗 D 類
10-27	A 41	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 8/1	○	龍泉窯系 碗 D 類
10-28	A 42	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 8/1		龍泉窯系 碗 D 類
10-29	A 51	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/1	○	龍泉窯系
10-30	A 44	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系
10-31	A 42	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/1	○	龍泉窯系
10-32	A 23	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系
10-33	A 50	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系
10-34	A 50	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1	○	龍泉窯系
10-35	A 44	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 N 8/		龍泉窯系
10-36	A 45	平坦面	青磁	碗		—	—	—		密・良	灰白 N 8/		龍泉窯系
10-37	A 47	平坦面	青磁	皿		—	—	—		密・良	灰 5Y 6/1		龍泉窯系
10-38	A 50	平坦面	青磁	盤		—	—	—		密・良	灰 5Y 6/1	○	龍泉窯系
10-39	A 41	平坦面	青磁	盤か香炉		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系
10-40	A 31	平坦面	青磁	香炉		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系
11-1	A 54	平坦面	青磁	香炉		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系
11-2	A 44	平坦面	青磁	香炉		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系
11-3	A 28	平坦面	青磁	瓶		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系
11-4	A 54	平坦面	青磁	香炉か		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系
11-5	A 37	平坦面	青磁	香炉か		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1		龍泉窯系
11-6	A 51	平坦面	青磁	香炉か		—	—	—		密・良	灰 7.5Y 6/1		龍泉窯系
11-7	A 44	平坦面	青磁	香炉か		—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1		龍泉窯系
11-8	A 19	平坦面	青磁	碗か皿		—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/1		龍泉窯系
11-9	A 44	平坦面	青磁	碗か皿		—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	龍泉窯系
11-10	A 23	北東側平坦面	青磁	碗か皿		—	—	—		密・良	灰白 10YR 7/1	○	龍泉窯系

陶磁器・土器觀察表(7) 分布調査

捲番	図番	版号	平坦面番号	採取位置	種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土 焼成	色調	被熱	備考
							口径	底径	器高					
11-11	A 44		平坦面	青磁	碗か皿	-	-	-		密・良	灰白 N 8/		龍泉窯系	
11-12	A 44		平坦面	青磁	碗か皿	-	-	-		密・良	灰白 N 8/		龍泉窯系	
11-13	A 23		平坦面	青磁	碗か皿	-	-	-		密・良	灰白 2SY 7/1		龍泉窯系	
11-14	A 37		平坦面	青磁	碗か皿	-	-	-		密・良	灰白 SY 7/1	○	龍泉窯系	
11-15	A 26		平坦面	青磁	碗か	-	-	-		密・良	黄灰 2SY 6/1	○	同安窯系	
11-16	A 38	2トレンチ側斜面	中国陶器	四耳壺	-	-	-			密・良	褐灰 10YR 4/1		褐釉	
11-17	A 38	南側斜面	中国陶器	鉢か	-	-	-			密・良	黄灰 2SY 6/1		褐釉	
11-18	A 38	南側斜面	中国陶器	鉢か	-	-	-			密・良	黄灰 2SY 6/1		褐釉	
11-19	A 38	南側斜面	中国陶器	鉢か	-	-	-			密・良	黄灰 2SY 6/1		褐釉	
11-20	A 24		平坦面	朝鮮系陶器	壺	-	-	-		密・良	黄灰 2SY 4/1		德利形	
11-21	A 40		平坦面	朝鮮系陶器	壺	-	-	-		密・良	黄灰 2SY 4/1		德利形	
11-22	A 24		平坦面	青花	皿	-	-	-		密・良	灰白 N 8/			
11-23	A 38	2トレンチ側斜面	青花	皿	-	-	-			密・良	灰白 N 8/	○	皿 B1 群	
11-24	A 39		平坦面	青花	皿	-	-	-		密・良	灰白 N 8/	○	皿 B1 群	
11-25	A 24		平坦面	青花	碗か皿	-	-	-		密・良	灰白 2SY 7/1			
11-26	A 38	2トレンチ側斜面	青花	碗か皿	-	-	-			密・良	灰白 N 8/	○		
11-27	A 24		平坦面	青花	碗か皿	-	-	-		密・良	灰白 2SY 7/1	○		
11-28	A 38	2トレンチ側斜面	青花	盤か鉢	-	-	-			密・良	灰白 N 8/	○		
11-29	A 24		平坦面	青花	盤か鉢	-	-	-		密・良	灰白 N 8/	○		
11-30	A 24		平坦面	青花	盤か鉢	-	-	-		密・良	灰白 N 8/	○		
11-31	A 24		平坦面	青花	盤か鉢	-	-	-		密・良	灰白 N 8/	○		
11-32	A 25		平坦面	青釉陶器	小皿	-	-	-		密・良	灰白 2SY 8/1			
11-33	A 24		平坦面	青釉陶器	小皿	-	-	-		密・良	灰白 2SY 8/1			
50-1	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	外面: ヘラケズリ		密・良	灰 N 4/			
50-2	A 39	平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 7SY 4/1			
50-3	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	暗灰 N 3/			
50-4	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 N 4/			
50-5	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 7SY 4/1			
50-6	A 34	平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 10Y 4/1			
50-7	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 7SY 5/1			
50-8	A 23	平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 7SY 4/1			
50-9	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 10Y 4/1			
50-10	A 19	平坦面	古代須恵器	罐	-	-	-	内面: f 外面: g		密・良	灰 10Y 5/1			

陶磁器・土器觀察表(8) 分布調査

捲番	図番	版番	平坦面番号	採取位置	種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
							口径	底径	器高					
50-11	A 27	北東側平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰 7.5Y 5/1		
50-12	A 34	平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰褐 7.5YR 4/2		
50-13	A 23	北東側平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰黄褐 10YR 5/2		
50-14	C2	平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	褐灰 10YR 6/1		
50-15	A 23	北西側平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰 7.5Y 4/1		
50-16	C5	平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰黄褐 10YR 6/2		
50-17	A 22	平坦面	古代須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰 7.5Y 4/1		
50-18	A24	平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:カキメ 外面:h	密・良	灰白 2.5Y 8/1	龜山系	
50-19	A 47	平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:カキメ 外面:h	密・やや不良	灰黄 2.5Y 7/2	龜山系	
50-20	A47	平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	—	—	内面:カキメ 外面:h	密・やや不良	灰黄 2.5Y 7/2	龜山系	
50-21	A 27	北西側平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	—	—	外面:h	密・良	灰 5Y 6/1	龜山系	
50-22	A 45	平坦面	中世須恵器	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	灰 5Y 4/1		
50-23	A38	南斜面平坦面	中世須恵器	鉢	—	—	—	—	—	—	密・良	暗灰 黄 2.5Y 5/2		洲洲原V期
50-24	A64	西上斜面	中世須恵器	皿	—	—	—	—	—	—	密・良	暗灰 N 3/	灯明畠	
50-25	A 52	平坦面	中世須恵器	皿	—	—	—	—	—	—	密・良	暗灰 N 3/	灯明畠	
50-26	A 37	平坦面	中世須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	密・良	灰 5Y 4/1		
50-27	A38	2トレンチ側南斜面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	灰褐 7.5YR 5/2		
50-28	A38	南側斜面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	褐灰 10YR 4/1		
50-29	A38	南側斜面	偏前燒	塼鉢	—	—	—	—	—	—	密・良	灰褐 5YR 5/2		
50-30	A38	2トレンチ側斜面	偏前燒	塼鉢	—	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐 10YR 5/2		
50-31	A38	2トレンチ側斜面	偏前燒	塼鉢	—	—	—	—	—	—	やや粗・良	暗灰 7.5YR 5/2		
50-32	A16	平坦面	偏前燒	塼鉢	—	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐 10YR 5/2		
50-33	A38	2トレンチ側斜面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	褐灰 10YR 4/1		
50-34	A38	南側斜面東角・東裏側斜面	偏前燒	水屋甕	—	—	—	—	—	—	密・良	灰褐 7.5YR 4/2	A類	
51-1	A 27	北東側平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	暗灰 黄 2.5Y 5/2		
51-2	A 45	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐 10YR 4/2		
51-3	A 16	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐 10YR 5/2		
51-4	A 43	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	黄灰 2.5Y 5/1		
51-5	A 52	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	褐灰 10YR 4/1		
51-6	A24	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	にぶい黄橙 10YR 6/4		
51-7	A 41	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	黄褐 10YR 3/2		
51-8	A27	北東側平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	暗灰 黄 2.5Y 5/2		
51-9	A67	平坦面	偏前燒	甕	—	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐 10YR 5/2		

陶磁器・土器觀察表(9) 分布調査

捲番	図番	版番	平坦面番号	採取位置	種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土 焼成	色調	被熱	備考
							口径	底径	器高					
51-10	A27	北西側平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	黄灰 2.5Y 4/1			
51-11	A 26	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 7.5YR 5/1			
51-12	A 34	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	暗褐 10YR 3/4			
51-13	A 50	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 10YR 6/1			
51-14	A50	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 10YR 6/1			
51-15	A67	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 10YR 5/3			
51-16	A 34	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 7.5YR 4/2			
52-1	A67	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	灰白 10YR 7/1			
52-2	A45	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	黄灰 2.5Y 5/1			
52-3	A45	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	暗灰黄 2.5Y 5/2			
52-4	A45	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	黄灰 2.5Y 4/1			
52-5	A 50	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 10YR 5/1			
52-6	A34	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	灰黄褐 10YR 4/2			
52-7	A 54	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 10YR 5/2			
52-8	A 34	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 10YR 5/1			
52-9	A 50	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 10YR 5/1			
52-10	A34	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	灰黄褐 10YR 4/2			
52-11	A 50	平坦面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	灰黄褐 10YR 4/2			
52-12	C 5	上斜面	備前燒	甕	-	-	-	-	-	密・良	褐灰 10YR 4/1			
52-13	A 54	平坦面	瀬戸・美濃燒	天目	-	-	-	-	-	密・良	灰黄 2.5Y 7/2	○		
52-14	A38	2トレンチ側斜面	瀬戸・美濃燒	小壺	-	-	-	-	-	密・良	灰黄 2.5Y 7/2	○	直付	
52-15	A67	平坦面	瓷器系陶器	甕	-	-	-	-	-	やや粗・良	にぶい赤褐 5YR 5/4			
52-16	A67	平坦面	瓷器系陶器	甕	-	-	-	-	-	やや粗・良	にぶい赤褐 2.5YR 5/4			
52-17	A38	南側斜面	土師器	不明	-	-	-	-	-	密・良	橙 7.5YR 6/6	高台付		
52-18	A 27	北東側平坦面	土師器	杯	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 10YR 6/4			
52-19	A24	平坦面	土師器	杯	-	-	-	-	-	密・良	にぶい橙 7.5YR 6/4			
52-20	A 27	北東側平坦面	土師器	杯	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4			
52-21	F8	西上斜面	土師器	皿	-	-	-	-	-	密・良	灰黄 2.5Y 6/2	京都系		
52-22	F8	西上斜面	土師器	皿	-	-	-	-	-	密・良	黄灰 2.5Y 7/6	京都系		
52-23	A38	南側斜面	土師質土器	火鉢	-	-	-	-	-	やや粗・ やや不良	にぶい黄褐 10YR 5/3	深鉢V		
52-24	A24	平坦面	土師質土器	火鉢	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 7.5YR 6/4			
52-25	A 54	平坦面	土師質土器	鉢	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 10YR 6/4			
52-26	A38	東側平坦面	土師質土器	火鉢	-	-	-	-	-	密・良	灰黄 2.5Y 6/2			
52-27	A 57	下斜面	瓦質土器	風炉か	-	-	-	-	-	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3			

陶磁器・土器観察表(10) 大寺谷遺跡

捲番 図号	図版 番号	種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	備考
				口径	底径	器高				
67-1	51	須恵器	蓋	—	—	—	内面：c 外面：ヘラケズリ,a	密・良	灰 5Y 6/1	
67-2	51	須恵器	蓋	(12.5)	—	(1.7)	内面：c 口縁部：a 外側：ヘラケズリ	密・良	灰 7.5Y 6/1	
67-3	51	須恵器	杯	(12.6)	(7.7)	3.6	内外面：a 底部：c	密・良	灰 5Y 6/1	
67-4	51	須恵器	杯	—	(7.9)	—	内面：c 外側：a 高台部：a 底部：d	密・良	灰 7.5Y 6/1	

陶磁器・土器観察表(11) 和多坊跡

捲番 図号	図版 番号	出土位置		種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考	
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高						
91-1	62	1	SX119	土師器	杯	(11.6)	(4.2)	4.0	内外面：a 底部：d	密・良	淡黄相 10YR 8/3	杯D類		
91-2	62	1	SX119	土師器	杯	(11.7)	6.6	4.4	内外面：a 底部：d	やや粗・ 良	淡橙 SYR 8/4	杯D類		
91-3	62	1	SX119	土師器	杯	(11.2)	5.6	4.0	内外面：a 底部：d	密・良	橙 7.5YR 7/6	杯D類		
91-4	62	1	SX119	土師器	杯	(11.1)	—	—	内外面：a	緻密・良	にぶい黄橙 10YR 7/4	杯D類		
91-5	62	1	SX119	土師器	杯	(11.6)	(5.7)	4.0	内外面：a	緻密・良	黄相 7.5YR 8/8	杯D類		
91-6	62	1	SX119	土師器	杯	—	4.8	—	内外面：a 底部：d	緻密・良	浅黄相 10YR 8/3	杯D類		
91-7	62	1	SX119	土師器	杯	—	5.0	—	内外面：a 底部：d	密・良	橙 2.5YR 6/8	杯D類		
91-8	62	1	SX119	土師器	皿	(7.1)	4.2	1.7	内外面：a 底部：d	やや粗・ やや不良	橙 SYR 6/8	皿D類		
91-9	62	1	SX119	土師器	皿	(7.1)	(4.9)	1.5	内外面：a 底部：d	密・良	浅黄相 10YR 8/4	皿D類		
91-10	62	1	SX119	土師器	皿	(7.2)	(5.3)	1.4	内外面：a 底部：d	緻密・良	黄相 10YR 8/6	皿D類		
91-11	62	1	SX119	土師器	皿	(6.6)	(4.9)	1.3	内外面：a 底部：d	密・良	橙 SYR 6/6	皿D類		
91-12	62	1	SX119	土師器	皿	—	6.7	5.2	1.2	内外面：a 底部：d	緻密・良	浅黄相 10YR 8/4	皿D類	
92-1	14	1	4	白磁	碗	(16.0)	(5.5)	(5.9)	—	密・良	灰白 7.5Y 8/1	碗IV類		
92-2	14	1	5	白磁	碗	(17.8)	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 8/1	碗IV類		
92-3	14	1	5	白磁	碗	(14.6)	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 8/1	碗IV類		
92-4	14	1	5	白磁	碗	(17.0)	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 8/1	碗V類		
92-5	14	2	2	白磁	皿	(11.2)	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 7/1	皿VI類		
92-6	14	1	5	白磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 8/1	碗V類		
92-7	14	2	1	白磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 5Y 7/2	碗VI類		
92-8	14	1	4	白磁	四耳壺	—	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 7/1	○		
92-9	14	1	4	白磁	四耳壺	—	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 7/1			
92-10	14	1	8	青磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 7/1	龍泉窯系 碗I-2類		
92-11	14	1	8	青磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 7/1	○		
92-12	14	1	4	中国陶器	壺	—	—	—	—	密・良	灰オリーブ 7.5Y 5/2	褐色		

陶磁器・土器観察表(12) 和多坊跡

総四 番号	四版 番号	出土位置		種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色調	被熱	備考
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高					
92-13	14	1	10	中国陶器	壺	—	—	—		密・良	暗灰黄 2.5Y4/2		褐釉
92-14	14	1	10	青花	皿	—	—	—		密・良	灰白 N8/		皿E群
93-1		2	2	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	灰 N5/		
93-2		1	6	中世須恵器	鉢	(20.2)	—	—	内外面:b	密・良	灰 N6/		東播系
93-3		2	1	中世須恵器	甕	—	—	—	内面:c 外面:h	密・良	暗灰 2.5Y7/1		龟山系
93-4		1	9	中世須恵器	甕	—	—	—	内面:カキメ 外面:h	密・良	灰 N5/		龟山系
93-5		1	6	中世須恵器	甕	—	—	—	内面:c 外面:h	密・良	灰 N5/		龟山系
93-6		1	9	中世須恵器	甕	—	—	—	内面:a 外面:h	密・良	暗灰褐 2.5Y4/2		龟山系
93-7		1	7	中世須恵器	甕	—	—	—	内面:c 外面:i	密・良	灰 N5/		龟山系
93-8		1	7	備前焼	唐鉢	—	—	—	内外面:c	密・良	褐 SYR 4/1		
93-9	14	1	4	瀬戸・美濃 境	卯皿	(13.8)	(6.4)	(1.7)	底部内面:瘤目	密・良	灰 5Y6/1	○	古瀬戸後期様式
93-10		1	4	備前焼	水屋甕	—	—	—	内外面:a	密・良	褐 SYR 4/2		中世6期
93-11		1	9	備前焼	甕	—	—	—	内面:a	密・良	暗灰褐 2.5Y4/2		
93-12		1	9	備前焼	甕	—	—	—	内面:a	密・良	暗灰褐 2.5Y4/2		
93-13		2	1	備前焼	甕	—	—	—	内外面:a	密・良	灰 N5/		
93-14		1	7	瀬戸・美濃 境	天目	—	—	—		密・良	黄 2.5Y7/2	○	
93-15		1	7	瀬戸・美濃 境	四耳壺	—	—	—		密・良	灰白 5Y7/1		
93-16		1	3	瓷器系陶器	甕	—	—	—		粗・やや 不良	褐 7.5YR 4/2	○	
94-1	62	1	5	土師器	杯	—	(10.2)	—	内外面:a	密・良	褐 2.5YR 6/6		足高台
94-2	62	1	5	土師器	不明	—	(7.8)	—	内外面:a	密・良	褐 7.5YR 7/6		足高台
94-3	62	2	2	土師器	不明	—	(5.4)	—	内外面:a	やや粗・ 良	褐 5YR 6/6		足高台
94-4	62	1	3	土師器	不明	—	(6.6)	—	内外面:a	密・良	褐 5YR 7/8		足高台
94-5	62	2	2	土師器	不明	—	(6.0)	—	内外面:a	やや粗・ 良	褐 5YR 6/6		足高台
94-6	62	2	2	土師器	不明	—	—	—	内外面:a	やや粗・ 良	浅褐 7.5YR 8/4		足高台
94-7	62	2	3	土師器	不明	—	5.0	—	内外面:a	密・やや 不良	にぶい黄褐 10YR 6/4		足高台
94-8	62	2	1	土師器	不明	—	(6.1)	—	内外面:a	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		足高台
94-9	62	1	5	土師器	甕	—	—	—	内外面:c	やや粗・ 良	褐 7.5YR 6/6		
95-1	63	2	2	土師器	杯	(16.0)	4.9	5.7	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3		杯A類
95-2		2	1	土師器	杯	(16.9)	—	—	内外面:a	密・良	褐 7.5YR 7/6		杯A類
95-3	63	2	1	土師器	杯	(14.4)	(6.5)	4.7	内外面:a 底部:d	密・良	褐 5YR 6/6		杯B類
95-4		2	5	土師器	杯	(16.0)	(6.0)	(4.9)	内外面:a 底部:d	やや粗・ 良	褐 2.5YR 6/6		杯B類
95-5		2	2	土師器	杯	(15.6)	(6.3)	3.9	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい褐 7.5YR 7/4		杯B類
95-6		2	3	土師器	杯	(16.2)	—	—	内外面:a	密・良	褐 5YR 6/8		杯B類

陶磁器・土器観察表(13) 和多坊跡

掲題 番号	図版 番号	出土位置		種別	器種	法量cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高					
95-7	63	1	5	土師器	杯	(14.2)	(5.3)	4.9	内外面：a 底部：d	密・やや不良	褐 7.5YR 6/6		杯C類
95-8	63	1	5	土師器	杯	(11.5)	(6.8)	4.1	内外面：a 底部：d	密・良	浅黄褐 7.5YR 6/4		杯D類
95-9	63	1	5	土師器	杯	(12.9)	5.8	3.8	内外面：a 底部：d	密・良	褐 7.5YR 7/6		杯E類
95-10		2	2	土師器	皿	10.0	5.3	2.3	内外面：a 底部：d	密・良	褐 2.5YR 6/8		皿A類
95-11	63	2	2	土師器	皿	(9.7)	4.6	2.4	内外面：a 底部：d	密・やや不良	にぶい黄褐 10YR 7/4		皿A類
95-12		2	1	土師器	皿	(10.1)	(4.6)	2.5	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		皿A類 板目圧痕
95-13		1	4	土師器	皿	7.3	3.3	2.5	内外面：a 底部：d	やや粗・良	浅黄褐 7.5YR 7/4		皿B類
95-14	63	1	5	土師器	皿	(7.9)	3.7	2.1	内外面：a 底部：d	粗・良	褐 5YR 7/6		皿B類
95-15	63	1	5	土師器	皿	(7.0)	3.3	2.1	内外面：a 底部：d	密・良	浅黄褐 7.5YR 7/6		皿C類 板目圧痕
95-16		2	2	土師器	皿	(8.4)	(4.2)	2.3	内外面：a 底部：d	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		皿C類 板目圧痕
95-17		1	5	土師器	皿	(7.6)	4.1	2.5	内外面：a 底部：d	緻密・良	褐 7.5YR 7/6		皿C類
95-18		1	6	土師器	皿	(8.4)	4.3	2.6	内外面：a 底部：d	緻密・良	にぶい小粒 7.5YR 7/4		皿C類
95-19		2	1	土師器	皿	(8.5)	3.8	1.9	内外面：a 底部：d	密・良	褐 7.5YR 8/6		皿C類
95-20	63	1	9	土師器	皿	(7.2)	(4.8)	1.3	内外面：a 底部：d	やや粗・良	褐 5YR 7/6		皿D類
95-21	63	2	2	土師器	皿	7.9	4.5	1.9	内外面：a 底部：d	やや粗・ やや不良	褐 5YR 7/6		皿E類
95-22		1	5	土師器	皿	8.0	5.2	2.1	内外面：a 底部：d	やや粗・ やや不良	褐 2.5YR 5/8		皿E類
95-23		1	5	土師器	皿	7.8	4.5	1.9	内外面：a 底部：d	密・やや不良	にぶい褐 10YR 7/4		皿E類
95-24		1	5	土師器	皿	(7.4)	(4.5)	1.6	内外面：a 底部：d	密・良	褐 2.5YR 6/8		皿E類
95-25	63	1	9	土師器	皿	(6.8)	(3.4)	1.9	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/8		皿E類
95-26	63	1	6	土師器	皿	(10.4)	(7.6)	1.9	内外面：a 底部：d	緻密・良	褐 7.5YR 7/6		H1類
95-27		1	5	土師器	皿	(10.5)	(7.6)	1.9	内外面：a 底部：d	緻密・良	褐 2.5YR 6/8		H1類
95-28		1	7	土師器	皿	(11.8)	(9.8)	1.7	内外面：a 底部：d	緻密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		H1類
95-29		1	6	土師器	皿	(10.7)	(8.4)	2.2	内外面：a 底部：d	緻密・良	褐 7.5YR 7/6		H1類
95-30		1	6	土師器	皿	(7.4)	(6.2)	1.7	内外面：a 底部：d	やや粗・ 良	浅黄 2.5YR 7/3		H2類
95-31		1	6	土師器	皿	7.6	6.0	1.7	内外面：a 底部：d	密・良	褐 10YR 8/6		H2類
95-32		1	8	土師器	皿	(7.6)	(5.8)	1.5	内外面：a 底部：d	緻密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		H2類
95-33	63	1	7	土師器	皿	(7.2)	6.0	1.4	内外面：a 底部：d	密・良	浅黄褐 7.5YR 6/4		H2類
95-34		1	4	土師器	皿	(7.8)	(6.6)	1.3	内外面：a 底部：d	密・やや不良	にぶい褐 7.5YR 7/4		H2類
96-1	62	1	5	土師器	不明	—	5.5	—	外面：b 底部：d	密・良	褐 5YR 6/6		柱状高台
96-2	62	2	1	土師器	不明	—	—	—	外面：a	密・良	にぶい褐 7.5YR 7/4		柱状高台
96-3	62	1	6	土師器	不明	—	—	—	外面：a	密・良	褐 5YR 6/6		柱状高台
96-4	62	2	5	土師器	不明	—	(4.8)	—	外面：c 底部：d	緻密・良	褐 7.5YR 7/6		柱状高台
96-5	62	1	5	土師器	不明	—	(4.6)	—	内外面：a 底部：d	密・良	褐 5YR 6/8		柱状高台

陶磁器・土器観察表(14) 和多坊跡

井戸番号	回収番号	出土位置		種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高					
96-6	62	2	3	土師器	皿	(8.1)	5.2	1.3	内外面:c 口縁端部:c	密・良	淡褐 SYR 8/4		京都系
96-7	62	1	7	土師器	皿	7.4	2.2	1.8	内外面:c	密・良	にぶい褐 SYR 7/4		京都系
96-8	62	1	7	土師器	皿	(7.2)	—	(1.7)	内外面:c	密・良	灰黄褐色 TOYR 5/2		京都系
96-9	62	1	6	土師器	皿	9.3	3.8	1.9	内外面:c 底部:c	密・不良	にぶい黄褐 TOYR 7/3		京都系
96-10	62	1	6	土師器	皿	(13.0)	(8.0)	1.9	内外面:b 底部:c	密・良	にぶい黄褐 TOYR 7/4		京都系
96-11	62	1	5	土師器	皿	—	—	—	内外面:c	やや粗・良	褐 7SYR 6/6		京都系
96-12	62	1	8	土師器	皿	—	—	—	内外面:c	密・良	明黄褐色 TOYR 7/6		京都系
96-13	62	1	5	土師器	杯	(14.9)	—	—	内外面:a	密・やや不良	にぶい褐 7SYR 7/4		搬入品か
96-14	63	1	4	土師器	杯	—	(6.9)	—	内外面:a 底部:d	密・良	明赤褐色 2SYR 5/8		大内系、板目 庄底。赤色顔料
96-15	63	1	4	土師器	杯	—	3.7	—	内外面:a 底部:d	やや粗・良	にぶい褐 7SYR 7/4		穿孔1箇所
96-16	63	1	7	土師器	杯	—	—	—	—	密・良	褐 7SYR 6/4		墨書き
96-17	63	1	4	土師器	杯	—	5.1	—	内外面:a 底部:d	密・良	明黄褐色 TOYR 6/6		刻書
96-18	63	1	4	土師質土器	深鉢	—	—	—	内面:回転ヘラケズ 裏面:c 外面:a	やや粗・良	明黄褐色 TOYR 7/6		
96-19		1	5	土師器	杯	—	—	—	内外面:a	密・良	褐 7SYR 7/8		搬入品か

陶磁器・土器観察表(15) 等渕院南区

井戸番号	回収番号	出土位置		種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高					
112-1	15	1	SK208	青磁	皿	(12.0)	5.9	4.0	—	密・良	灰白 N 8/	○	
112-2	15	1	SK208	青磁	皿	(12.2)	(6.6)	3.7	—	やや粗・良	褐褐色 7SYR 5/2	○	
112-3	15	1	SK208	青磁	香炉	(9.5)	—	(8.6)	—	密・良	灰白 SY 8/1	○	
112-4	15	1	SK208	青白磁	梅瓶	(4.0)	(26.3)	—	—	密・良	灰白 SY 8/1		
112-5	15	1	SK208	中国陶器	天目	(11.0)	3.8	5.9	—	密・良	灰 SY 6/1	○	
112-6	15	1	SK208	中国陶器	天目	(11.6)	—	—	—	密・良	灰 SY 6/	○	
112-7	16	1	SK208	中国陶器	天目	(11.0)	—	—	—	密・良	灰 SY 8/1		
112-8	17	1	SK208	朝鮮系陶器	大壺	(24.4)	(20.2)	(56.3)	内外面:hの後 c 底部:c	密・良	暗褐色 SYR 3/3		黒釉
112-9	17	1	SK208	備前焼	大壺	(13.4)	(21.3)	50.6	内面:c 外面:ケズリの後 c	やや粗・良	外面: 青灰・黄灰 N 2/ ~ 2SY 5/1 内面: 灰~黄灰 N 5/ ~ 2SY 5/1		
112-10	15	1	SK208	瀬戸・美濃燒	鉢皿	(13.2)	6.5	2.8	—	密・良	灰オリーブ 2SY 6/1	○	古瀬戸後期様式
112-11		1	SK208	土師器	杯	(12.4)	(4.8)	(3.9)	内外面:a 底部:d	粗・やや不良	褐 SYR 7/6		杯 E 類
112-12		1	SK208	土師器	杯	—	(6.8)	—	内外面:a	やや粗・ やや不良	浅黄褐色 10YR 8/3		杯 E 類

陶磁器・土器観察表 (16) 等湯院南区

掲載番号	団版番号	出土位置		種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高					
113-1	18	2	SK222	越前焼	大甕	(55.6)	—	(75.0)	内外面:c 指押え痕	やや粗・良	外面: 黒褐色 5YR 2/1 内面: 褐灰 7.5YR 4/1	目-1期	
113-2	16	2	SK222	信楽焼	甕	(14.2)	—	—	内外面:c	密・良	灰オーリーブ 7.5YR 6/2		
113-3		2	SK222	土師器	皿	(9.0)	—	—	内外面:a	やや密・良	にぶい橙 7.5YR 7/4		
113-4		2	SK222	土師器	皿	—	(3.8)	—	内外面:a 底部:d	やや粗・良	にぶい橙 7.5YR 7/4		
114-1	18	2	SK223	備前焼	大甕	(44.6)	(43.2)	(86.0)	内面:c 指押え痕 外面: 頭部c、肩部c、ケズリの後c、底部c	やや粗・良	外面: 極暗 赤褐色 10R 2/2 内面: 暗赤 7.5YR 3/1	中世5期	
114-2		2	SK223	越前焼	甕	—	—	—	内外面:b	密・良	灰 7.5YR 6/1		
114-3		2	SK223	土師器	杯	—	(6.4)	—		やや密・良	にぶい橙 7.5YR 7/4		
114-4		2	SK223	土師器	皿	—	(4.0)	—	内外面:a 底部:c	やや密・良	にぶい橙 7.5YR 7/4		
115-1	65	2	SP225	土師器	皿	(7.2)	(3.6)	1.4	内外面:b	密・良	褐 7.5YR 7/6	目H2類 灯明皿	
115-2	65	2	SP243	土師器	皿	7.2	6.0	1.75	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい橙 7.5YR 7/4	灯明皿	
115-3	65	1	SX201	瓦質土器	火鉢	—	—	—		やや粗・ やや不良	褐灰 10YR 4/1, 5/1		
115-4		2	SK213	中国陶器	不明	—	—	—		密・良	灰赤 2.5YR 5/2	褐釉	
115-5	16		SP250	中国陶器	四耳壺	—	—	—		密・良	灰白 5Y 7/2		
116-1	16	2	S7	白磁	碗	—	—	—		纏密・良	灰白 5Y 7/1	纏V類	
116-2	16	1	N1	青磁	盤	—	—	—		密・良	灰黄 2.5Y 7/2		
116-3	16	2	S4	中国陶器	甕	(18.4)	—	—	内外面:b	密・良	褐灰 10YR 4/1	褐釉	
116-4	16	1+2	N2+S4	中国陶器	甕	—	6.5	—		やや密・ 良	灰黄 2.5Y 6/2	○	
116-5	16	2	S1	朝鮮系陶器	甕	(5.6)	—	—	内外面:b	密・良	褐灰 2.5Y 5/1	徳利形	
116-6	16	2	S2	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	褐灰 10YR 4/1		
116-7	16	2	S2	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	褐灰 10YR 4/1		
116-8	16	2	S1	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	密・良	褐灰 10YR 6/1		
116-9	16	2	S6	中世須恵器	甕	—	—	—	内面:c 外面:h	密・良	灰白 2.5Y 8/1	龜山系	
116-10	16	2	S3	越前焼	甕	—	—	—	内外面:b	密・良	褐灰 10YR 5/1		
116-11	16	2	S3	越前焼	甕	—	—	—	内外面:b	密・良	褐灰 10YR 6/1		
116-12	15	1+2	N2+S3	備前焼	茶碗	(10.3)	(8.8)	9.35	内外面:a 底部: ハラケズリ	密・良	暗赤褐色 10R 3/3	茶道具	
116-13	16	2	S8	備前焼	擂鉢	—	—	—	内面:擂目 外面:b	密・良	褐 5YR 4/2		
116-14	16	2	S4	白磁	碗	—	—	—		やや粗・ 良	灰黄 2.5Y 7/2		
116-15	16	1	N3	青白磁	梅瓶	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○	
116-16	16	2	S7	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○ 細C-2類	
116-17	16	2	S1	青磁	盤	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 8/1	○	
116-18	16	1	N5	青花	碗	—	—	—		密・良	灰白 5Y 8/1	○ 細E群	

陶磁器・土器観察表 (17) 等湯院南区

掲番 番号	固版 番号	出土位置		種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色調	被熱	備考
		トレンチ	遺構・グリッド			口径	底径	器高					
116-19	16	2	S5	青花	皿	—	—	—		密・良	灰白 5Y8/1	○	皿 B1 群
116-20	16	2	S1	青花	碗	—	—	—		密・良	灰白 5Y8/1		
116-21	16	2	S4	青花	碗	—	—	—		密・良	灰白 5Y8/1		碗 C 群
116-22	16	2	S7	瀬戸・美濃 燒	香炉	—	—	—		密・良	灰黄 2.5Y7/2		
116-23	16	2	S10	瀬戸・美濃 燒	天目	—	—	—		密・良	灰黄 2.5Y6/2	○	
117-1	65	2	S8	土師器	杯	(12.1)	5.5	3.8	内外面：a 底部：d	密・良	褐 7.5YR 7/6		杯 E 類
117-2		2	S9	土師器	杯	—	5.8	—	内外面：a 底部：d	密・良	浅黄褐 7.5YR 8/4		杯 E 類
117-3	65	2	S9	土師器	杯	(12.5)	(5.1)	3.1	内外面：a 底部：d	密・やや 不良	にぶい褐 7.5YR 7/4		杯 F 類
117-4		2	S9	土師器	杯	12.8	5.6	3.3	内外面：a 底部：d	密・良	褐 7.5YR 7/6		杯 F 類
117-5	65	2	S8	土師器	杯	(14.8)	(6.0)	4.0	内外面：a 底部：d	やや粗・ 良	にぶい褐 7.5YR 7/4		杯 F 類
117-6	65	2	S9	土師器	杯	18.4	7.6	3.75	内外面：a 底部：d	密・やや 不良	にぶい褐 7.5YR 7/4		杯 G 類
117-7	65	2	S5	土師器	皿	(8.1)	3.7	2.15	内外面：a 底部：d	密・良	褐 SYR 6/6		皿 B 類
117-8		2	S3	土師器	皿	8.4	4.5	1.9	内外面：a 底部：d	密・やや 不良	褐 SYR 6/6		皿 B 類
117-9	65	2	S1	土師器	皿	11.3	8.5	1.85	内外面：a 底部：d	密・やや 不良	にぶい褐 7.5YR 7/4		皿 H1 類
117-10	65	2	S3	土師器	皿	(8.7)	(6.2)	1.7	内外面：a 底部：d	粗・不良	褐 SYR 6/6		皿 H2 類
117-11		2	S3	土師器	皿	(8.7)	(6.5)	1.4	内外面：a 底部：d	やや密・ やや不良	にぶい褐 7.5YR 6/4		皿 H2 類
117-12	65	2	S3	土師器	皿	(8.1)	5.5	2.0	内外面：a 底部：d	密・良	褐 7.5YR 7/6		皿 H4 類
117-13	65	2	S7	土師器	杯か	—	4.5	—	底部：d	やや粗・ 良	褐 SYR 7/6		柱状高台付
118-1	65	2	S5・S8	土師質土器	火鉢	—	—	—		やや粗・ やや不良	にぶい黄褐 10YR 7/3		
118-2	65	2	S6	土師質土器	火鉢	—	—	—		やや粗・ 不良	にぶい褐 7.5Y 7/3		
118-3	65	1	N0	瓦質土器	火鉢	—	—	—		密・良	灰黄褐 10YR 5/2		深鉢
118-4	65	2	S6	瓦質土器	火鉢	(36.2)	—	—		やや粗・ やや不良	灰黄 2.5Y 6/1		

陶磁器・土器観察表 (18) 鯉淵寺川南区

掲番 番号	固版 番号	出土位置			種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色調	被熱	備考
		地区	シリ No/F	遺構・ 層			口径	底径	器高					
134-1	19	F2	4 3	SP326	青花	碗	(12.6)	(4.2)	5.9		緻密・良	灰白 N 8/	○	碗 C 群
134-2	19	F2	4 7	SP322	中世須恵器	甕	—	—	—	外面：h	密・良	黄灰 2.5Y 4/1		龜山系
134-3	19	F2	4 7	SP322	中世須恵器	甕	—	—	—	外面：h	密・良	灰 7.5Y 6/1		龜山系
134-4	19	F2	4 4	SP330	備前焼	甕	—	—	—		密・良	灰 5Y 4/1		中世 6a 期
134-5	19	F2	4 4	SP331	備前焼	甕	—	—	—		密・良	褐赤褐 2.5YR 3/3		
19-1	F2	4 4	SP330	白磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2.5Y 7/1	○		
19-2	F2	4 5	SP326	青磁	盤	—	—	—		密・良	灰白 7.5Y 7/1			

陶磁器・土器観察表(19) 鮎瀬寺川南区

探査番号	回収番号	出土位置			種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・焼成	色調	被熱	備考
		地区	トロツ	遺構・層			口径	底径	器高					
19-3	F1 2 3	SP346	中国陶器	壺か	—	—	—	—	—	密・良	褐色 10YR 4/1	○	褐釉	
19-4	F2 4	SP331	中国陶器	壺か	—	—	—	—	—	密・良	黄褐色 2.5Y 5/6		褐釉	
19-5	F2 4 4	SP331	青花	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰白 5Y 8/1	○		
19-6	F2 4 3	SP332	青花	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰白 5Y 7/1	○		
19-7	F2 4 4	SP331	偏前焼	壺か	—	—	—	—	—	密・良	灰褐色 5YR 4/2			
19-8	F2 4 3	SP330	偏前焼	壺か	—	—	—	—	—	密・良	灰 7.5Y 5/1			
135-1	68 F1 2 4	A	白磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰白 5YR 7/2	○	破V類	
135-2	68 F1 1 5	A	白磁	皿	—	—	—	—	—	密・良	灰白 2.5Y 7/2	○	皿VI類 広東系	
135-3	68 F1 2 5	A	白磁	皿	—	—	—	—	—	密・良	灰白 2.5Y 8/1		皿VI類 広東系	
135-4	68 F1 2 4	A	青磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰黄 2.5Y 6/2		越州窯系 碗目類	
135-5	68 F1 2 5	A	青磁	皿	—	—	—	—	—	密・良	黄灰 2.5Y 6/1	○	越州窯系 皿IV類かV類	
135-6	68 F1 2 5	A	中国陶器	鉢	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐色 10YR 5/2		褐釉	
135-7	68 F1 1 2	A	中国陶器	鉢	—	—	—	—	—	密・良	にぶい黄褐色 10YR 5/3		褐釉	
135-8	68 F1 1 1	A	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	—	密・良	褐灰 10YR 5/1			
135-9	68 F1 2 5	A	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	—	密・良	褐灰 10YR 5/1			
135-10	68 F1 1 1	A	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	—	密・良	灰黄褐色 10YR 5/2			
135-11	68 F1 2 4	A	古代須恵器	甕	—	—	—	内面:f 外面:g	—	密・良	褐灰 10YR 6/1			
135-12	68 F1 1 2	A	瀬戸・美濃 灰	却皿	—	—	—	—	—	密・良	黄褐色 2.5Y 5/3			
135-13	68 F1 2 5	A	土師器	皿	(8.2)	4.2	1.8	内外面:a 底部:d	—	密・良	にぶい黄褐色 10YR 6/3		皿B類	
135-14	68 F1 1 2	A	土師器	皿	—	7.7	5.0	1.4	底部:d	粗・良	粗 5YR 6/8		皿D類	
135-15	68 F1 2 4	A	土師器	皿	—	—	—	—	—	密・やや不良	にぶい黄褐色 10YR 7/3		京都系	
135-16	68 F1 1 1	A	土師器	皿	—	—	—	—	—	密・良	にぶい黄褐色 10YR 7/4		京都系	
68-1	F1 2 4	A	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐色 10YR 5/2		褐釉	
68-2	F1 2 4	A	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	—	密・良	灰オリーブ 5Y 5/2		褐釉	
68-3	F1 2 4	A	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	—	密・良	灰 5Y 4/2		褐釉	
68-4	F1 2 5	A	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐色 10YR 5/2		褐釉	
68-5	F1 1 2	A	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	—	密・良	灰オリーブ 7.5Y 4/2		褐釉	
68-6	F1 3 6	A	朝鮮系陶器	壺	—	—	—	—	—	密・良	黄褐色 2.5Y 5/3		德利形	
68-7	F1 2 5	A	瓷器系陶器	甕	—	—	—	—	—	密・良	灰褐色 5YR 4/2			
136-1	68 F1 1 1	B	白磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰白 5Y 8/1		碗IV類	
136-2	68 F1 1 2	B	白磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰黄 2.5YR 7/2	○	碗V類	
136-3	68 F1 1 1	B	白磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰白 5Y 7/1	○	広東系 碗V類	
136-4	68 F1 1 2	B	白磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰白 2.5Y 8/2	○	広東系 碗X類	
136-5	68 F1 1 1	B	白磁	皿	—	—	—	—	—	密・良	灰白 2.5Y 8/1	○	皿VI類	
136-6	68 F1 1 2	B	青磁	碗	—	—	—	—	—	密・良	灰黄褐色 10YR 6/2		越州窯系 碗III類	

陶磁器・土器観察表(20) 鰐淵寺川南区

掲図 番号	図版 番号	出土位置			種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色調	被熱	備考							
		地区	寸法 径寸				口径	底径	器高												
			横幅	高さ																	
136-7	68	F1	1 2	B	青磁	碗	(16.6)	—	—	—	密・良	灰白 2SY 6/2	○	龍泉窯系 碗D類							
136-8	68	F1	1 1	B	中国陶器	瓶	(8.2)	—	—	—	密・良	暗灰黄 2SY 4/2		褐釉							
136-9	68	F1	1 2	B	古代須恵器	甕	—	—	—	内部:f 外面:g	密・良	褐灰 TOYR 4/1									
136-10	68	F1	1 1	B	古代須恵器	甕	—	—	—	内部:f 外面:g	密・良	褐灰 TOYR 5/1									
136-11	68	F1	1 1	B	中世須恵器	甕	—	—	—	外面:h	密・良	灰黄 2SY 6/2		龜山系							
136-12	68	F1	2 3	B	中世須恵器	甕	—	—	—	外面:h	密・良	灰白 SY 7/1		龜山系							
136-13	68	F1	1 2	B	土師器	杯	—	5.2	—	内外面:a 底部:d	密・良	褐 SYR 6/6		杯B類							
136-14	68	F1	3 6	B	土師器	杯	(11.2)	(6.1)	3.2	内外面:b 底部:d	密・良	浅黄橙 7SYR 8/6		杯E類							
136-15	68	F1	1 2	B	土師器	不明	—	—	—	—	密・良	浅黄橙 7SYR 8/4		穿孔1箇所							
136-16	68	F1	1 2	B	瓦質土器	火鉢	(36.2)	—	—	内外面:c	密・良	灰 N 4/									
136-17	68	F1	1 1	B	瓦質土器	火鉢	—	—	—	—	密・良	灰 N 4/									
68-9	F1	1 2	B	白磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 2SY 8/1										
68-10	F1	1 1	B	中国陶器	四耳壺	—	—	—	—	密・良	暗灰黄 2SY 5/2		褐釉								
68-11	F1	1 2	B	中国陶器	四耳壺	—	—	—	—	密・良	暗灰黄 2SY 5/2		褐釉								
68-12	F1	1 2	B	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	密・良	暗灰黄 2SY 5/2		褐釉								
68-13	F1	1 2	B	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	密・良	暗灰黄 2SY 5/2		褐釉								
68-14	F1	2 5	B	瓷器系陶器	鉢	—	—	—	—	密・良	褐灰 7SYR 4/1										
68-15	F1	1 1	B	瓷器系陶器	甕	—	—	—	—	密・良	褐灰 7SYR 4/2										
68-16	F1	1 2	B	瓷器系陶器	甕	—	—	—	—	密・良	褐灰 7SYR 4/2										
137-1	69	F1	1 2	C	古代須恵器	甕	—	—	—	内部:f 外面:g	密・良	褐灰 TOYR 4/1									
137-2	69	F1	1 2	C	土師器	皿	(7.8)	3.8	1.5	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい黄橙 10YR 7/4		皿B類							
137-3	69	F1	1 1	C	土師器	皿	(7.0)	—	1.0	—	密・良	にぶい黄橙 10YR 7/4		皿D類							
137-4	69	F1	1 1	C	土師器	不明	—	—	—	内外面:c 底部:d	密・良	浅黄橙 7SYR 8/4		柱状高台付							
69-1	F1	1 1	C	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	密・良	灰黄 2SY 6/2	○	褐釉								
69-2	F1	1 2	C	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	密・良	黄褐 2SY 5/3	○	褐釉								
69-3	F1	1 1	C	中国陶器	壺か鉢	—	—	—	—	密・良	黄灰 2SY 6/1		褐釉								
69-4	F1	1 1	C	土師器	高杯	—	—	—	—	密・良	にぶい黄橙 10YR 7/4										
138-1		F2	4 8	D	土師器	皿	(6.4)	—	1.6	—	緻密・良	灰白 N 7/		京都系							
139-1	69	F2	2 3	E	白磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 N 7/		碗V類							
139-2	69	F2	4 5	E	白磁	皿	—	—	—	—	密・良	灰黄 2SY 7/2	○	広東系							
139-3	69	F2	4 6	E	青磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 SY 7/1		龍泉窯系 碗B2類							
139-4	69	F2	4 5	E	青磁	碗	—	—	—	—	密・良	灰白 10YR 7/1		龍泉窯系 碗D類							
139-5	19	F2	4 4他	E	青磁	碗	(12.0)	—	—	—	緻密・良	灰白 N 8/	○	龍泉窯系 碗C類							
139-6	19	F2	4 3-4	E	青磁	碗	(12.1)	—	—	—	緻密・良	灰白 N 8/	○	龍泉窯系 碗C類							

陶磁器・土器観察表(21) 鰐淵寺川南区

掲図 番号	回収 番号	出土位置			種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色 調	被熱	備 考	
		地区	トロツ ヨリ	遺構・ 層			口径	底径	器高						
139-7	69	F2	4 3	E	青磁	碗	—	—	—	密・良	灰白 7.5Y 7/1	○	龍泉窯系 碗 D類		
139-8	69	F2	4 3	E	青磁	香炉	(7.7)	—	—	緻密・良	灰白 N 7/		龍泉窯系		
139-9	69	F2	4 6	E	青磁	碗	—	—	—	密・良	灰 5Y 6/1		同安窯系 碗 I-b類		
139-10	69	F2	4 3	E	中国陶器	壺	(9.4)	—	—	密・良	灰黄褐 10YR 4/2		褐色		
139-11	19	F2	4 6・7	E	青花	碗	(13.8)	(4.6)	6.3	密・良	灰白 5Y 8/1	○	碗 C群		
139-12	19	F2	4 5	E	青花	皿	(12.5)	(7.0)	2.5	密・良	灰白 10Y 7/1	○	皿 B群		
140-1	69	F2	4 5	E	中世須恵器	甕	—	—	—	外面:h	密・良	黄灰 2.5Y 4/1		龜山系	
140-2	69	F2	4 5	E	中世須恵器	甕	—	—	—	外面:h	密・良	褐灰 10YR 6/1		龜山系	
140-3	69	F2	4 6	E	中世須恵器	甕	—	—	—	外面:h	密・良	黄灰 2.5Y 4/1		龜山系	
140-4	20	F2	4 6	E	偏前燒	壺	(14.8)	—	—	内外面:a	やや密・ 良	灰赤 7.5YR 4/2		中世 6a 期	
140-5	20	F2	4 6・7	E	偏前燒	壺	—	—	—	内外面:a	やや密・ 良	灰褐 7.5YR 4/2		海利田 中世 6a 期	
140-6	69	F2	4 3	E	偏前燒	甕	(42.4)	—	—	内外面:b～ハケメ	密・良	外側:灰 リーブ 7.5YR 4/2 内側:褐 7.5YR 3/3		中世 4b 期	
140-7		F2	4 3	E	偏前燒	甕	—	—	—	内外面:ハケメ	密・良	褐 7.5YR 4/3			
140-8		F2	4 3	E	偏前燒	甕	—	(20.0)	—	内外面:c 底部:d	密・良	外側:灰褐 7.5YR 4/2 内側:褐 7.5YR 4/1			
140-9		F2	4 3	E	偏前燒	甕	—	—	—	内外面:ハケメ→b	密・良	外側:灰褐 7.5YR 4/2 内側:にぶ し黄褐 10YR 4/3			
140-10	20	F2	4 6・7	E	偏前燒	捏鉢		14.6	7.8	内外面:a	密・良	褐灰 7.5YR 4/1			
140-11	69	F2	4 7	E	瀬戸・美濃 窯	小天目	(7.4)	(4.0)	3.3	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4				
141-1		F2	4 6	E	土師器	不明	—	—	—	密・やや 不良	粗 SVR 6/8		高台付		
141-2	20	F2	4 4	E	土師器	皿	(8.2)	4.0	2.0	内外面:a 底部:d	密・良	粗 7.5YR 7/6		皿 B類	
141-3	69	F2	4 4	E	土師器	皿	(11.2)	(9.2)	1.9	内外面:a 底部:d	密・良	浅黄褐 10YR 8/4		皿 H1類	
141-4	69	F2	4 7	E	土師器	皿	(8.4)	6.4	1.6	内外面:a 底部:d	密・良	明黄褐 10YR 6/6		皿 H2類	
141-5	69	F2	4 7	E	土師器	皿	(7.8)	(6.0)	1.6	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい黄褐 7.5YR 7/4		皿 H2類	
141-6	20	F2	1 7	E	土師器	皿	8.2	7.0	1.6	内外面:a 底部:d→c	密・良	にぶい粗 7.5YR 7/4		皿 H2類 明月	
141-7	20	F2	4 6	E	土師器	皿	(12.6)	(7.0)	1.9	内外面:h 指押え 痕	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3		京都系 裏斑	
141-8	20	F2	4 6	E	土師器	皿	(12.7)	6.6	2.0	内外面:h 指押え 痕	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3		京都系 裏斑	
141-9	20	F2	4 6	E	土師器	皿	(12.1)	(5.8)	2.4	内外面:h 指押え 痕	密・良	浅黄褐 7.5YR 8/4		京都系 裏斑	
141-10	20	F2	4 7	E	土師器	皿	(13.6)	(6.0)	2.4	内外面:h	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		京都系	
141-11	20	F2	4 7	E	土師器	皿	(12.0)	(7.0)	1.3	内外面:h	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		京都系	
141-12	20	F2	4 6	E	土師器	皿	(11.8)	(6.2)	2.0	内外面:h	密・良	浅黄褐 7.5YR 8/3		京都系	
141-13	69	F2	4 6	E	土師器	皿	(13.4)	—	—	内外面:h 指押え 痕	密・良	浅黄褐 10YR 8/3		京都系	
141-14	69	F2	4 6	E	土師器	皿	(11.9)	—	—	内外面:h 指押え 痕	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3		京都系 裏斑	

陶磁器・土器観察表(22) 鰐淵寺川南区

掲図 番号	図版 番号	出土位置			種別	器種	法量 cm			調整・手法	胎土・ 焼成	色 調	被熱	備考							
		地区	寸法 径寸				口径	底径	器高												
			横	縦																	
141-15		F2	4 3	E	土師器	不明	—	—	—	内外面:a	密・やや不良	褐 SYR 6/8		柱状高台付							
141-16	69	F2		E	土師器	皿	—	—	—	内外面:a	密・やや不良	浅黄褐 TOYR 8/3		穿孔2箇所							
141-17	69	F2	4 5	E	土師器	皿	—	—	—		密・やや不良	褐 SYR 7/6		穿孔1箇所							
	20-1	F2	4 6	E	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰青 2SYR 7/2		同安窯系 碗1b類							
	20-2	F2	4 6	E	青磁	碗	—	—	—		密・良	灰黄 2SYR 7/2		同安窯系 碗1b類							
	20-3	F2	4 6	E	中国陶器	盤	—	—	—		密・良	灰黄褐 TOYR 6/2		黄釉盤							
	20-4	F2	4 6	E	朝鮮系陶器	碗か皿	—	—	—		密・良	灰 SYR 6/1	○	象嵌							
143-1	20・69	F2	4 5・6	E	土師器	皿	(10.8)	(8.4)	(2.2)	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい褐 7SYR 7/4		皿H1類 繩刻							
143-2	20・69	F2	4 5・6	E	土師器	皿	(10.2)	(7.6)	2.2	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい褐 7SYR 7/4		皿H1類 繩刻							
143-3	69	F2	4 6	E	土師器	皿	(12.0)	(8.6)	2.0	内外面:a	密・良	にぶい褐 7SYR 6/4		皿H1類 繩刻							
143-4	69	F2	4 5	E	土師器	皿	—	(5.7)	—	内外面:a 底部:d	密・良	褐 7SYR 6/6		皿H1類 繩刻							
143-5	69	F2	4 6	F	土師器	皿	(8.5)	(5.6)	1.7	内外面:a 底部:d→c	密・良	にぶい褐 7SYR 6/4		皿H1類 繩刻							
142-1	69	F2	4 7	F	白磁	碗	—	—	—		密・良	灰白 2SYR 7/1		碗IV類							
142-2	19	F2	4 6他	F	青花	皿	(12.0)	6.8	2.5		緻密・良	灰白 N/7	○	皿B群							
142-3	19	F2	4 6他	F	青花	皿	9.6	4.8	2.3		密・良	灰白 SYR 8/1	○	皿B群							
142-4	69	F2	4 3	F	中世須志器	甕	—	—	—	外面:e	密・良	黄灰 2SYR 6/1		龟山系							
142-5	69	F2	4 3	F	土師器	杯	(13.9)	—	—	内外面:a	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		器入品か							
142-6	69	F2	4 5	F	土師器	杯	—	(6.0)	—	内外面:a 底部:d	密・良	浅黄褐 10YR 8/4		杯D類							
142-7		F2	4 3	F	土師器	杯	—	(6.0)	—	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/3									
142-8		F2	4 6	F	土師器	杯	—	(6.8)	—	内面:a 底部:へら切り	密・良	にぶい褐 7SYR 6/4									
142-9		F2	4 5	F	土師器	皿	(7.7)	(4.2)	1.7		密・良	褐 SYR 6/6									
142-10		F3	4 7	F	土師器	皿	(11.7)	(8.8)	2.5	内外面:a 底部:d	密・良	にぶい褐 7SYR 6/4		皿H3類							
142-11		F2	4 6	F	土師器	皿	7.9	6.7	1.7	内外面:a 底部:d	密・良	褐 7SYR 7/6		皿H4類 灯明皿							
142-12		F2	4 6	F	土師器	皿	(7.8)	(3.6)	1.5	内外面:h, 指押え痕	密・良	にぶい黄褐 7YR 7/3		京都系 黒斑, 刺突文							
142-13		F2	4 6	F	土師器	皿	(9.4)	(4.8)	1.6	内外面:hか	密・良	浅黄褐 10YR 8/4		京都系 灰斑							
142-14		F2	4 6	F	土師器	皿	(8.0)	(3.6)	1.7	内面:h 外面:a→指押え	密・良	にぶい黄褐 10YR 7/4		京都系か 丸付着							
142-15		F2	4 6	F	土師器	皿	(7.8)	—	1.4	内外面:h	緻密・良	にぶい黄褐 10YR 5/2		京都系							
142-16		F2	4 5	F	土師器	皿	(6.4)	—	1.1	内外面:h	やや粗・ 良	褐 7SYR 7/6		京都系							
	69-5	F2	4 3	F	土師質土器	火鉢	—	—	—		やや粗・ 良	褐 SYR 6/6									
144-1	69	浴室跡 (F3)			土師器	皿	(7.6)	(3.2)	1.9	内外面:a 底部:d	密・良	褐 7SYR 7/6		皿B類 灯明皿							
144-2	69	浴室跡 (F3)			土師器	皿	8.7	6.0	2.0	内外面:a 底部:d	密・良	褐 7SYR 6/6		皿H1類 灯明皿							
	69-6	浴室跡 (F3)			土師質土器	火鉢	—	—	—		密・良	にぶい褐 7SYR 5/4									
	69-7	浴室跡 (F3)			鉄製品	鉄釜	(57.6)	—	—		密・良	黒褐 7SYR 3/2		実帶							

瓦 観察表 (1)

押印番号	図版番号	採取位置		種別	法量		特徴	調整手法
		平坦面 番号	トレチ・ その他		寸法 (cm)	重量 (g)		
56-1	54	A-23	北西側平坦面	軒丸瓦	瓦当径 13.0 厚 2.5	1,074	左巻き三巴紋 珠紋 25	丸瓦コビキ A
56-2	54	A-64	西上斜面	軒丸瓦	外縁幅 1.4 厚 2.2	55	珠紋密・小	
56-3	54	A-27	北東側平坦面	軒丸瓦	復元瓦当径 13	161	右巻き三巴紋 圓環二重 珠紋小	
56-4	54	A-38	2トレチ側 南斜面	軒丸瓦	厚 2.5 ~ 3.5	169	左巻き三巴紋 珠紋小	ハナレ砂
56-5	54	A-64	北上斜面	軒丸瓦	外縁幅 2.0 厚 2.0	328	左巻き三巴紋 珠紋大	外縁ミガキ
56-6		A-64	平坦面	軒丸瓦接合部		145		コビキ A 端面刻み目
56-7		A-64	西上斜面	軒丸瓦接合部		255		コビキ A 端面刻み目
56-8		A-38	1トレチ側 斜面	軒丸瓦接合部		260		コビキ A 端面刻み目
56-9	55	A-24	表土中	丸瓦 A (釘孔)	玉縁長 3.7 厚 2.6	650		コビキ A
56-10	55	A-4	平坦面	丸瓦 A (釘孔)	厚 2.4	890	丸瓦 A1 大	コビキ A 段部内面縫い目
56-11	55	A-23	平坦面	丸瓦 B (釘孔)	玉縁長 2.5 厚 2.3	1,322		コビキ A 筒部内面縫い目 7段以上
57-1	54	A-23	平坦面	軒平瓦	瓦当厚 4.6 脇幅 3.5	699	中心飾宝珠紋の唐草紋	コビキ A 凹布庄痕 鏡に凸型台庄痕 外縁ヘラズリ
57-2		A-38	2トレチ側平坦面	軒平瓦		87	紋様不明	鏡剥離面に刻み目
57-3	54	A-34	平坦面	軒棟瓦	瓦当厚 4.5	826	中心飾五葉紋の唐草紋 と右巻き三巴紋、左残	
57-4	54	A-38	南側斜面	軒平瓦	瓦当厚 4.8	313	中心飾不明唐草紋 刻印「□跡」	
57-5	54	A-23	平坦面	鳥衾瓦		487	裏面縁に凸帯	丸瓦コビキ A カ
57-6	54	A-27	北東側平坦面	棟端瓦	左右幅 18.6 紋様径 6.6 瓦当径 9.0	1,227		丸瓦部コビキ B
57-7	55	A-38	1トレチ側 東南平坦面	熨斗瓦	長 27.3 幅 20.7 厚 2.0	1,868		凹面にカキ目 3条
57-8	55	A-38	東側平坦面	大型棟瓦	長 45.2 厚 1.7	2,500	偏平で大型の棟瓦 棟門や頃用カ	
58-1	56	A-38	1トレチ側 東南平坦面	丸瓦 A1 大	長 23.6 幅 16.2 玉縁長 4.0	1,546		コビキ A 吊り紐痕 (太)
58-2	56	A-38	2トレチ側 斜面	丸瓦 A1 大	幅 14.9 玉縁長 3.8	1,282		コビキ A 吊り紐痕 (太) 筒部凹面に縫い目
58-3	56	A-31	平坦面	丸瓦 A1 大	幅 15.0 玉縁長 3.9	638		コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目
58-4	56	A-28	平坦面	丸瓦 A1 大		875		コビキ A 吊り紐痕 (太)
58-5	56	A-24	表土中	丸瓦 A1 大		595		コビキ A 吊り紐痕 (太)
58-6	56	A-24	表土中	丸瓦 A1 大	幅 15.8	924		コビキ A 吊り紐痕 (太)
59-1	56	A-28	平坦面	丸瓦 A1 小	幅 13.0 玉縁長 3.7	1,230		コビキ A 吊り紐痕 (太) 筒部凹面に縫い目
59-2	56	A-28	平坦面	丸瓦 A1 小	幅 12.8 玉縁長 3.9	1,002		コビキ A 吊り紐痕 (太) 筒部凹面に縫い目
59-3	57	A-38	山側 (東北) 平坦面	丸瓦 A1 小	幅 13.6 玉縁長 3.6	1,319		コビキ A 吊り紐痕 (太) 縫い目あり

瓦 観察表 (2)

押因 番号	図版 番号	採取位置		種別	法量		特徴	調整手法
		平坦面 番号	トレチ・ その他		寸法 (cm)	重量 (g)		
59-4	57	A-64	西平坦面	丸瓦 A1 小	幅13.5 玉縁長3.4	501	コビキ A 吊り紐痕 (太) 筒部凹面に縫い目	
59-5	57	A-27	北西側平坦面	丸瓦 A1 小	復元長32.8 厚3.3	1,188	コビキ A 吊り紐痕 (太) 筒部凹面に縫い目	
60-1	57	A-38	1トレチ 東南平坦面	丸瓦 A2 大	全長33.7 幅15.5 玉縁長5.1	1,610	コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目	
60-2	57	A-26	平坦面	丸瓦 A2 大	長27.2 幅16.4 玉縁長3.9	2,063	コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目	
60-3	58	A-26	平坦面	丸瓦 A2 大	長25.9 玉縁長4.2	1,179	コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目	
60-4	57	A-51	平坦面	丸瓦 A2 大		766	コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目	
60-5	58	A-26	平坦面	丸瓦 A2 大		638	コビキ A 吊り紐痕 (太)	
61-1	58	A-38	1トレチ 東南平坦面	丸瓦 A2 小	全長29.0 幅13.2 玉縁長4.2	941	コビキ A 吊り紐痕 (太) 内印き痕あり 玉縁凹面に縫い目	
61-2	58	A-24	表土中	丸瓦 A2 小	玉縁長3.8	451	コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目	
61-3	58	A-38	東側平坦面	丸瓦 A2 小	玉縁長3.6	557	コビキ A 玉縁凹面に縫い目	
61-4	58	A-38	東側平坦面	丸瓦 A2 小		584	コビキ A 吊り紐痕 (太)	
61-5	58	A-14	平坦面	丸瓦 A (A2) 大	幅15.3 玉縁長3.3	539	コビキ A 吊り紐痕 (太)	
61-6	58	A-27	北東側平坦面	丸瓦 A (A2)	玉縁長4.4	534	コビキ A 吊り紐痕 (太)	
61-7	58	H-2	(斜面)	丸瓦 A	玉縁長4.5	240	コビキ A 吊り紐痕 (太) 玉縁凹面に縫い目	
61-8	59	A-24	表土中	丸瓦 A	玉縁長4.0	297	コビキ A 吊り紐痕 (太)	
62-1	59	A-11	平坦面	丸瓦 C	長34.6 幅15.5 玉縁長2.4	1,998	コビキ B 吊り紐痕なし	
62-2	59	H-2	(斜面)	丸瓦 C	玉縁長1.8	1,066	コビキ B 吊り紐痕なし 内印き痕あり	
62-3	59	A-13	平坦面	丸瓦 C	幅15.2 玉縁長2.8	989	コビキ B 吊り紐痕なし 玉縁凹面ミガキ	
63-1	59	A-38	2トレチ付近山側	平瓦	狭端幅25.0 厚2.1	780		
63-2	59	A-38	2トレチ側 斜面	平瓦	狭端幅24.5 厚2.3	726	コビキ A	
63-3	60	A-16	平坦面	平瓦	厚3.0	840		
63-4	59	A-28	平坦面	平瓦	厚1.9	120	イブシなし	
64-1	60	A-38	南側平坦面	平瓦	厚2.3	1,165		
64-2	60	A-28	平坦面	平瓦?	厚2.2	725		
64-3	60	A-64	西平坦面	平瓦	厚3.1	1,186		凸ハケ目
97-1	64	和多坊跡	2トレチ 表土	軒丸瓦	復元瓦当径 14 厚2.9	142	三巴紋	ハナレ秒あり
97-2		和多坊跡	1トレチ・7 G r 1層	軒丸瓦		15	外縁のみ	
97-3	64	和多坊跡	3トレチ・4 G r 表土中	軒桟瓦	径9	132	三巴紋 右桟瓦	

瓦 観察表 (3)

鉢図 番号	図版 番号	採取位置		種別	法量		特徴	調整手法
		平坦面 番号	トレンチ・ その他		寸法 (cm)	重量 (g)		
97-4		和多坊跡	1トレンチ・7 G r 1層	軒平瓦		8	外縁のみ	
97-5		和多坊跡	1トレンチ 表土中	ヘラ掘 棟瓦	厚 2.3	72	用途不詳	
97-6	64	和多坊跡	1トレンチ 1面下	刻印瓦	厚 1.7	40	角甲形押印 文字	
98-1	64	和多坊跡	1トレンチ・7 G r 1層	平瓦	厚 2.0	143		
98-2	64	和多坊跡	1トレンチ・7 G r 1層	平瓦	厚 2.5	335		
98-3		和多坊跡	1トレンチ・6 G r 4層	平瓦	厚 2.4	486		
119-1	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr 精査	軒丸瓦		27	巴紋	
119-2	66	等測院南区	2トレンチ・56Gr	軒丸瓦		21	巴紋	
			2トレンチ・56Gr 1層					
119-3	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr サブトレ1層 南側斜面	丸瓦 A1 小	現長 27.5 厚 2.3	577		コビキ A 吊り紐痕 (太)
119-4	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr 1面下サブトレ造構	丸瓦 A	厚 2.8	660		コビキ A
119-5	66	等測院南区	1トレンチ・N1Gr 表土	平瓦	現長 29.5 現幅 17.0 厚 2.1	1,127		コビキ A
119-6	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr SK213 (SX02)	平瓦	現長 11.3 現幅 19.7 厚 2.3	630		凸一部タテヘラケ
119-7	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr 1面下サブトレ造構	平瓦	厚 2.4	450		
119-8	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr SK213 (SX02)	平瓦	厚 2.7	434		
119-9	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr SK213 (SX02)	平瓦	厚 2.5	481		
119-10	66	等測院南区	2トレンチ・55Gr SK213 (SX02)	平瓦	厚 2.4	305		
145-1	70	鰐淵寺川 南区	F2-4トレンチ・5Gr 1面直上 1面精査	丸瓦 A1 大	長 27.3 幅 16.2 玉縁長 4.3	1,438		コビキ A 吊り紐痕 (太)
145-2	70	鰐淵寺川 南区	F2-4トレンチ・5Gr 1面下 P28の上	丸瓦 A2 大	幅 16.0 玉縁長 3.5	990		コビキ A 吊り紐痕 (太)
145-3	70	鰐淵寺川 南区	F2-4トレンチ・5Gr 第1砂層	丸瓦 A	玉縁長 3.8	334		コビキ A 吊り紐痕 (太)
145-4	70	鰐淵寺川 南区	F2-4トレンチ・5Gr 1面精査	丸瓦		185		コビキ A

錢貨觀察表（1）

辨認 番号	凶版 番号	採集位置	出土位置	銭	銭種名	法量				特徴
							縦径 (mm)	横径 (mm)	厚さ (mm)	
65-1	61	A38		銅錢	皇宋通寶	24.3	24.6	0.9	2.4	篆書（北宋、寶元元年・1038年初鑄）
65-2	61	A19		銅錢	寛永通寶（古）	24.4	24.4	1.1	2.3	古寛永 1636～1659
65-3	61	A64		銅錢	寛永通寶（新）	23.2	23.3	1.1	2.5	
65-4	61	A19		銅錢	寛永通寶（新）	22.7	22.4	1	2.4	
65-5	61	A19		銅錢	寛永通寶（新）	23.5	23.5	1.4	3.8	
65-6	61	A19		銅錢	寛永通寶（新）	23.2	23.1	0.9	1.7	
65-7	61	A19		銅錢	寛永通寶（新）	24.1	23.8	1.2	2.3	3期（元禄10年・1697～1747年、1767～1781年）
65-8	61	A24		銅錢	寛永通寶（新）	23.6	23.5	1.0	2.3	
65-9	61	F1		銅錢	寛永通寶（新）	23.1	23.3	0.8	2.1	
65-10	61	F10		銅錢	寛永通寶（新）	23.5	23.7	0.9	2.3	
65-11	61	F10		銅錢	寛永通寶（新）	24.1	23.6	1.0	2.0	
65-12		A38		銅錢	半錢	22.2	22.1	1.1	3.1	明治9年（1876）発行
99-1	64	和多坊跡 1・5	銅錢	祥符口寶	—	22.7	1.0	0.8	模鍛錢	
99-2	64		銅錢	元祐通寶	23.6	23.7	0.9	2.1	篆書（北宋、元祐元年・1086年初鑄）	
99-3	64	和多坊跡 3・3	銅錢	洪武通寶	23.8	—	1.3	2.2	背下「福」（明、洪武元年・1368年初鑄、鑄造地福州）	
99-4	64		銅錢	寛永通寶（新）	23.1	22.5	1.2	2.4	3期（元禄10年・1697～1747年、1767～1781年）	
99-5	64	和多坊跡 3・2	銅錢	寛永通寶（新）	22.7	22.7	1.0	2.2		
99-6	64		銅錢	寛永通寶（新）	22.9	22.3	0.7	1.4		
99-7	64	和多坊跡 3・3	銅錢	寛永通寶（新）	22.9	23.0	1.3	2.9		
99-8			アルミ貨 1・3	1銁アルミ貨	17.6	17.6	1.7	0.8	昭和15年（1940）発行	
120-1	67	等測院南 2・53	銅錢	皇宋通寶	25.3	25.2	1.3	2.1	篆書（北宋、寛元元年・1038年初鑄）	
120-2	67		銅錢	元祐通寶	23.8	23.8	1.1	2.3	行書（北宋、元祐元年・1086年初鑄）	
120-3	67	等測院南 2・59	銅錢	元祐通寶	24.2	24.3	1.4	2.3		
120-4	67		銅錢	天聖元寶	—	—	1.0	0.6	篆書（北宋、天聖元年・1023年初鑄）	
120-5	67	等測院南 1・N4	銅錢	寛永通寶（新）	23.0	—	1.3	2.0	3期（元禄10年・1697～1747年、1767～1781年）	
120-6	67		銅錢	寛永通寶（新）	23.8	23.7	0.9	2.4		
	67-1	等測院南 1・N3	銅錢	祥符通寶	—	—	—	—	真書（北宋、大中祥符元年・1009年初鑄）	
	67-2		銅錢	天聖元寶	—	—	—	—	篆書（北宋、天聖元年・1023年初鑄）	

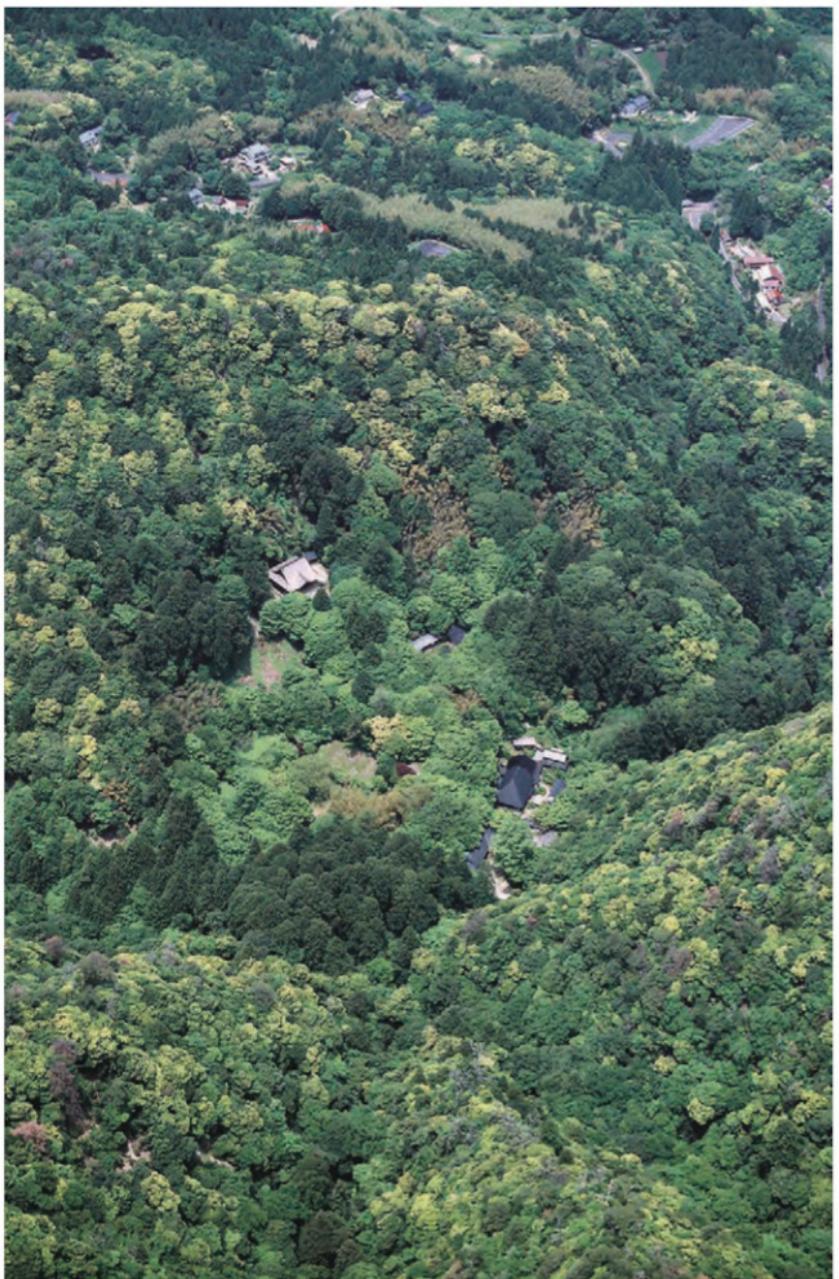
銭貨観察表（2）

埠回番号	因版番号	採集位置	出土位置	錢	錢種名	法量			特徴
		平坦面番号	トレンチ・グリッド			規徴 (mm)	横径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
67-3		等測南 1・N3	銅錢	元□（豐カ）通寶	—	—	—	—	篆書 寶の字形から見て元豐通寶と推定（北宋・元豐元年・1078年初鋤）
		等測南 1・N3	銅錢	永樂通寶	—	—	—	—	（北宋・明永樂6年・1048年初鋤）
67-5		等測南 1・N3	銅錢	不明	—	—	—	—	
		川南 1・2	銅錢	政和通寶	24.6	24.5	1.6	2.1	篆書（北宋・政和元年・1111年初鋤）
146-2	70	川南 2・4	銅錢	元豐通寶	24.3	24.4	1.2	2.3	行書（北宋・元豐元年・1078年初鋤）
146-3	70	川南 4・7	銅錢	皇宋通寶	24.8	25.2	1.0	1.5	真書（北宋・寶元元年・1038年初鋤）
146-4	70	川南 2・4	銅錢	慶長通寶	23.2	23.3	1.3	2.2	日本（慶長年間・1596～1615年）
146-5	70	川南 1・1	銅錢	寛永通寶（新）	25.2	25.3	1.3	3.5	文銭 2期（寛文8年・1668年～天和3年・1683年）
146-6	70	川南 2・5	銅錢	寛永通寶（新）	24.1	24.2	0.9	2.1	3期（元禄10年・1697～1747年、1767～1781年）
146-7	70	川南 ／・e-3	銅錢	寛永通寶（新）	22.6	22.6	1.1	2.5	

石製品等観察表

埠回番号	因版番号	分布調査	発掘調査	種類	材質	色調	法量 () 内は残存部				特徴
		平坦面番号	トレンチ・グリッド				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
66-1	61	A27		温石	滑石	灰 N/S	5.8	5.4	1.2	66.4	角を欠いた方形で、ツルツルする。凹面は丁寧に磨く。7mmの円孔があり。
	61-1	A57		硯	頁岩	にぶい黄緑 10YR 6/4	(2.6)	6.8	1.5	38.7	海側の短辺の破片か。
	61-2	A38		砥石	凝灰岩	にぶい黄 2.5Y 6/4	(9.0)	3.0	2.3	109	長辺の一部の破片。表裏面、側面とも磨耗痕。表面は凹面を呈す。
	61-3	C7		砥石	安山岩	灰 2.5Y 7/1	(4.7)	(4.0)	(1.5)	36.3	表面の一部の破片。表面は磨耗痕。
	61-4	A38		石臼	砂岩	灰黄褐 10YR 4/2	(4.4)	(3.4)	(1.7)	29.5	裏面の一部以外は欠損。
121-1	67		等測南区 2・S1	硯	滑石	灰 N/S	(6.9)	(1.5)	(1.6)	18.9	海側の角の破片で、ツルツルする。
121-2	67		等測南区 1・HS	硯	瓦	灰黄 2.5Y 7/2	8.6	6.0	1.7	118.5	瓦の軋用。表裏面は黒斑を残す。表面は凹面をなし、使用痕あり。
121-3	67		等測南区 2・S4	砥石	頁岩	灰 7.5Y 4/1	(3.3)	2.0	(1.5)	20.9	角の一部の破片で、表面に筋状の使用痕あり。
121-4	67		等測南区 2・S3	培塿	土	灰黄 2.5Y 6/2	(2.8)	(2.0)	(1.0)	10.7	長方形形状
121-5	67		等測南区 2・S2	培塿	土	灰黄 2.5Y 6/2	(3.5)	(3.1)	(1.3)	11.4	三角形状
	68-8		等測寺川南区 F2・1・1	硯	頁岩	黄灰 2.5Y 6/1	(8.0)	5.1	0.7	57.1	陸側の破片。薄い作りで、縁と陸の段差はわずか。

図 版
(カラー)



(南上空から)

図版 2 浮浪滝と藏王堂



(北から、撮影：杉本和樹氏)



1 新緑の中の根本堂（南から）

（提供：出雲観光協会平田支所）



2 根本堂と常行堂（北から）



1 根本堂（東から）

(撮影：杉本和樹氏)



2 根本堂（南東から）

(撮影：杉本和樹氏)



1 常行堂と摩多羅神社（北東から）

(撮影：杉本和樹氏)



2 積迦堂（南から）

(撮影：杉本和樹氏)



1 覚城院跡の紅葉（南から）

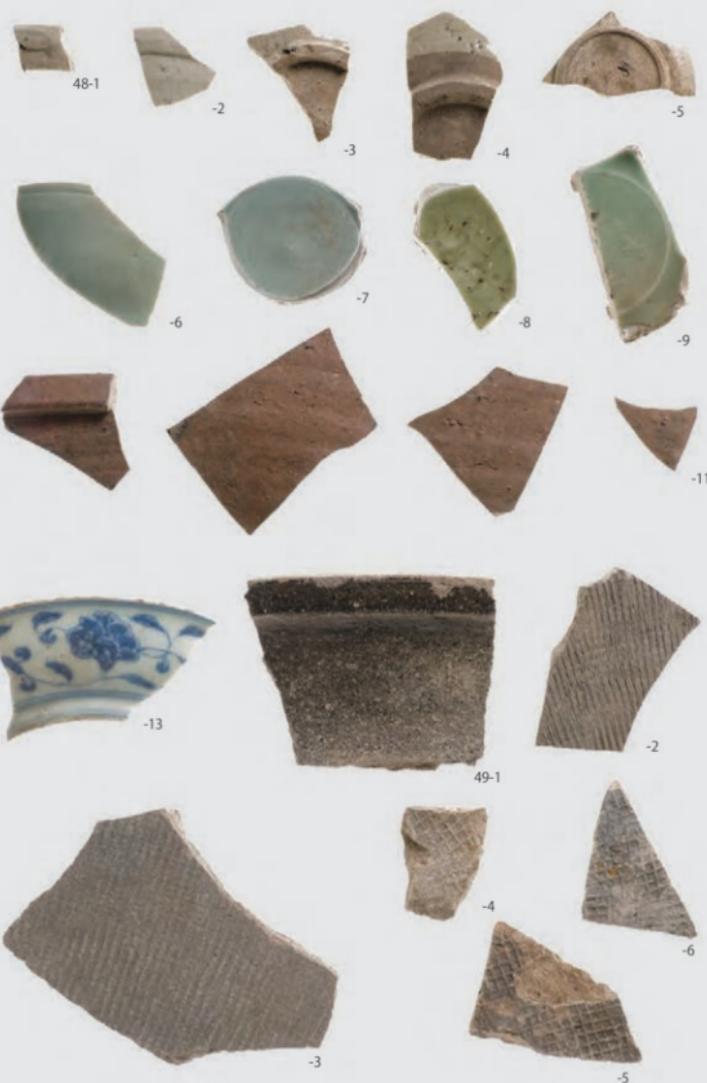
（提供：出雲観光協会平田支所）



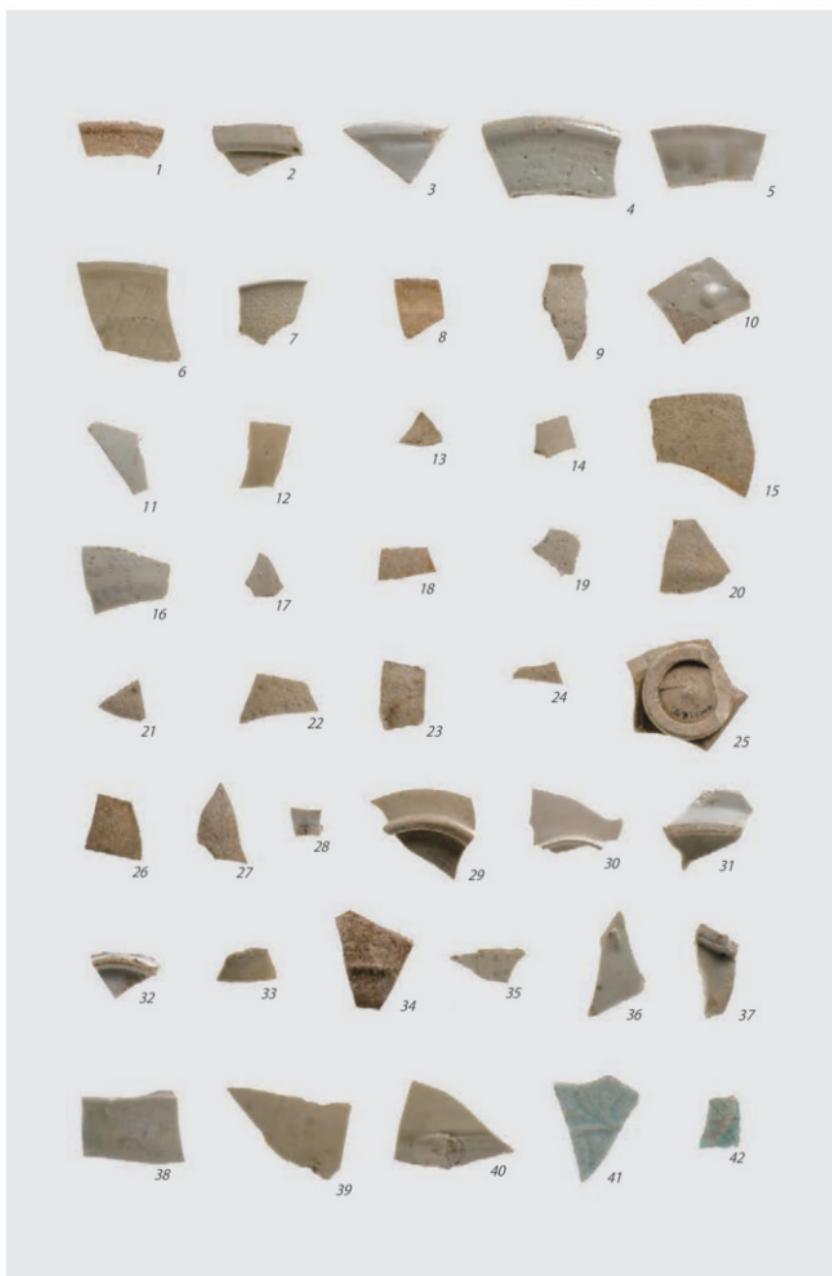
2 杉林の中の浮浪滝地区（北から）



(北から)

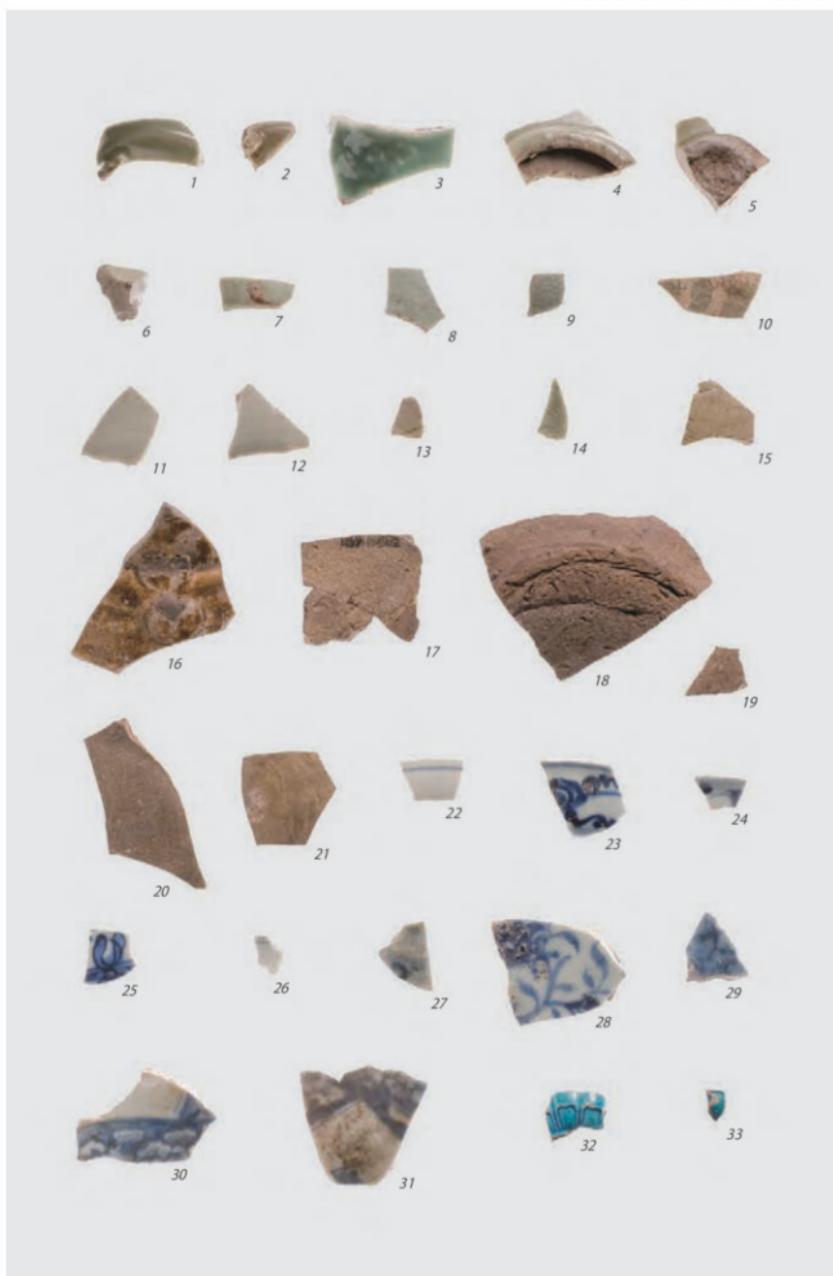


陶磁器・須恵器



白磁・青白磁



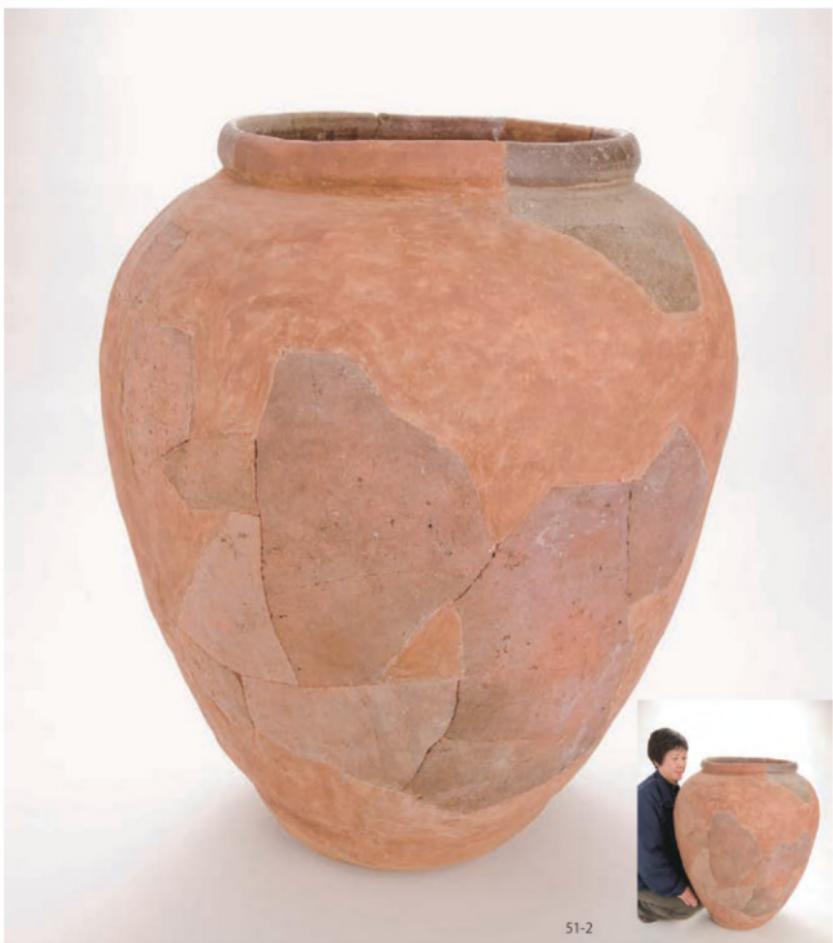


青磁・褐釉陶器・青花など

図版 12 分布調査採集土器（5）



陶磁器・墨書き土器



備前焼など

图版 14 和多坊出土土器，等澍院南区出土土器（1）



1 和多坊跡出土陶磁器



2 等澍院南区土坑 SK208 出土陶磁器



112-1



112-2



112-3



-3



112-5



112-6



112-4



112-10



116-12

土坑 SK208 出土陶磁器と備前焼茶碗



陶磁器と須恵器



112-8



112-9

土坑 SK208 出土朝鮮系黒釉陶器と備前焼大壺



113-1

1 埋葬遺構 SK222 出土越前燒大甕



114-1

2 埋葬遺構 SK223 出土備前燒大甕



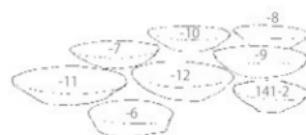
1 遺構出土土器



2 青磁と青花



1 陶磁器



3 線刻土師器

図 版
(白黒)



1 上空から見た鰐淵寺境内（東から）



2 根本堂と常行堂（南から）



1 鐘楼（左）と积迦堂（南東から）



2 本坊（旧松本坊、南東から）



1 現成院跡（北東から）



2 等済院跡（南東から）



1 是心院跡（南東から）



2 覚城院跡と惠門院跡（南から）（奥は旧宝物拝観所【推古館】と宝物收藏庫）



1 山門（北から）（撮影：杉本和樹氏）



2 御成門（南西から）（撮影：杉本和樹氏）



3 是心院跡庭園（南から）



4 淨觀院庭園（北から）

図版 26 分布調査（1）



1 密嚴院跡



2 洞雲院跡



3 堂司庵跡(A-11平坦面)



4 宝藏跡 (A-13平坦面)



5 念仏堂跡(A-19平坦面)



6 A-54平坦面



7 A-59平坦面



8 嚩王院跡立会調査



1 念仏堂跡前の念仏塔（北西から）

(撮影：杉本和樹氏)



2 B-2 平坦面



3 C-6 平坦面（松露谷地区）



4 松露谷墓地Ⅰ群 C-3・C-4（南西から）

(撮影：杉本和樹氏)



1 松露谷墓地 I 群 C-7 (南から)

(撮影：杉本和樹氏)



2 松露谷墓地 I 群 C-8 (西から)

(撮影：杉本和樹氏)



1 松露谷墓地II群 C-9 (西から)

(撮影：杉本和樹氏)



2 川奥墓地 (西から)

図版 30 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（1）



1 調査区全景（北から）



2 磨石建物跡 SB101 全景（南から）



1 確石建物跡 SB101 と 1 トレンチ（北東から）



2 確石建物跡 SB102 全景（北から）

図版 32 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（3）



1 磨石建物跡 SB101 と 3 トレンチ（南から）



2 3 トレンチ全景（東から）



1 1トレンチ北西部（北から）



2 1トレンチ全景（西から）



3 1トレンチ全景（東から）

図版 34 根本堂地区北部（和多坊跡）の調査（5）



1 2 トレンチ全景（南から）



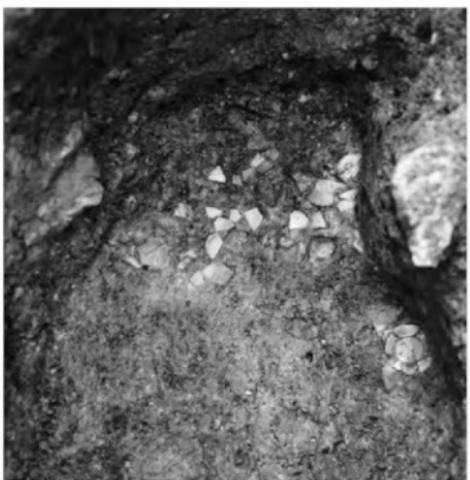
2 池跡 SG130 全景（南西から）



1 1トレンチ 石垣 SW 118 (北から)



2 1トレンチ 石垣 SW 120 (北から)



3 1トレンチ 土器漁り SX 119 (西から)

図版 36 根本堂地区南部（等済院南区）の調査（1）



1 調査地全景（調査区表土除去後全景、南西から）



2 1トレンチ全景（北東から）



3 2トレンチ主要部（南西から）



1 1 トレンチ土坑 SK208 掘出状況（西から）



2 1 トレンチ土坑 SK208 完掘状況（東から）



1 2 トレンチ埋甕 SK222・223ほか（北西から）



2 トレンチ主要部（南西から）



3 埋甕 SK222（東から）



4 埋甕 SK223（東から）



1 2 トレンチ埋甕 SK222・223 梢出状況（北西から）



2 2 トレンチ石壙 SW271・272・273（南東から）



3 2 トレンチ石壙 SW273・274（南東から）

図版 40 浮浪滝地区（鰐淵寺川南区）の調査（1）



1 F-1 平坦面 調査前（北西から）



2 F-3 平坦面 調査前（北から）



1 F-2 平坦面 調査前（西から）



2 旧仏心橋 橋台跡（東から）



1 F-1平坦面 1~3トレンチ（東から）



1 F-1 平坦面礎石列 SX 361 (西から)



2 1～3 トレンチ (西から)



3 1 トレンチ全景 (南西から)



F-2 平坦面 4 トレンチ全景 (北から)



1 4トレンチ全景（北から）



2 4トレンチと石列 SX334（南から）



3 4トレンチ石垣 SW335（北東から）



4 4トレンチ石垣 SW335（転石除去後、北東から）



1 F-3 平坦面清掃後全景（南東から）



2 浴室跡竈跡 SL316（北東から）



1 F-3 平坦面 確石列 SX301 ほか（南東から）

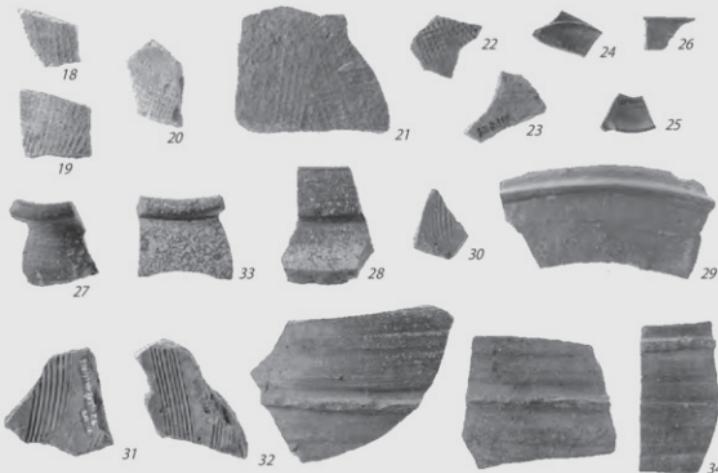
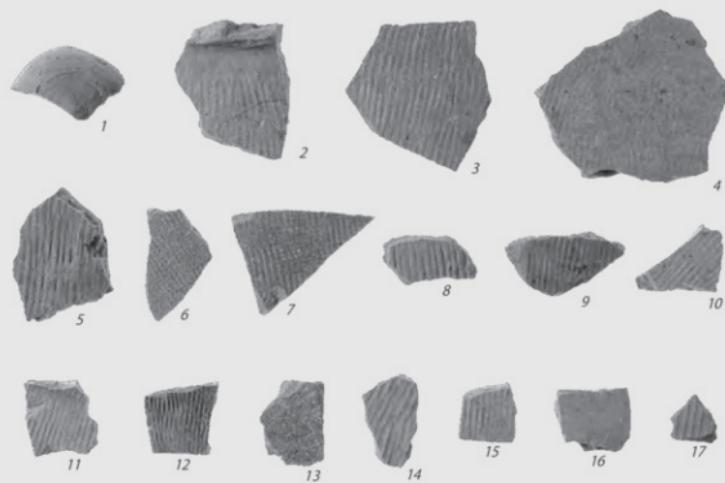


2 F-3 平坦面 池跡 SG308（南から）

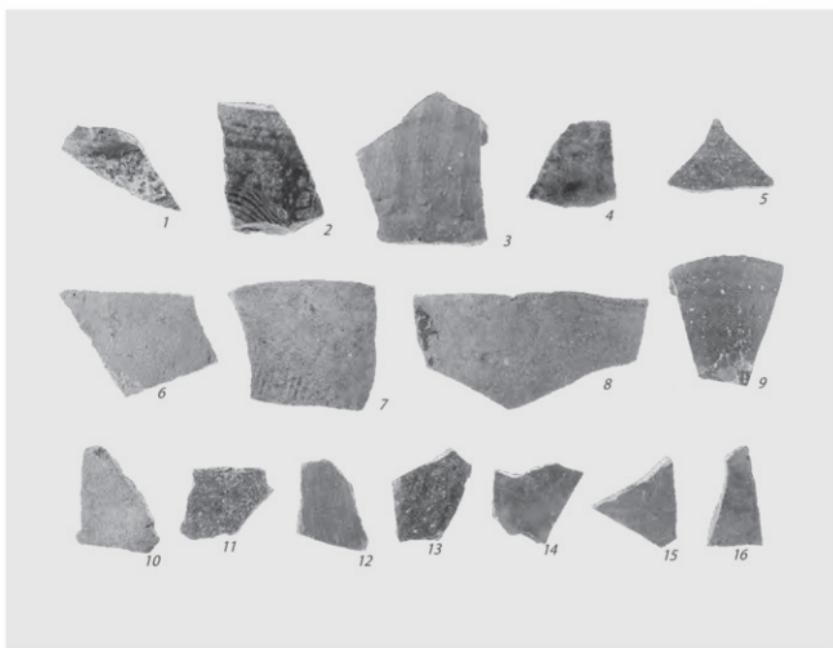


山王七仏堂および浮浪滝へと通じる石段（北から）

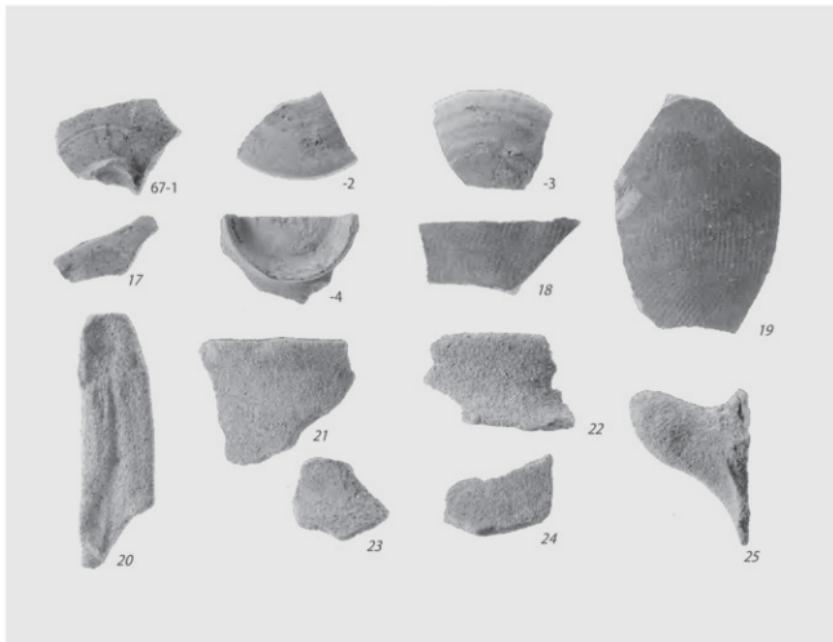




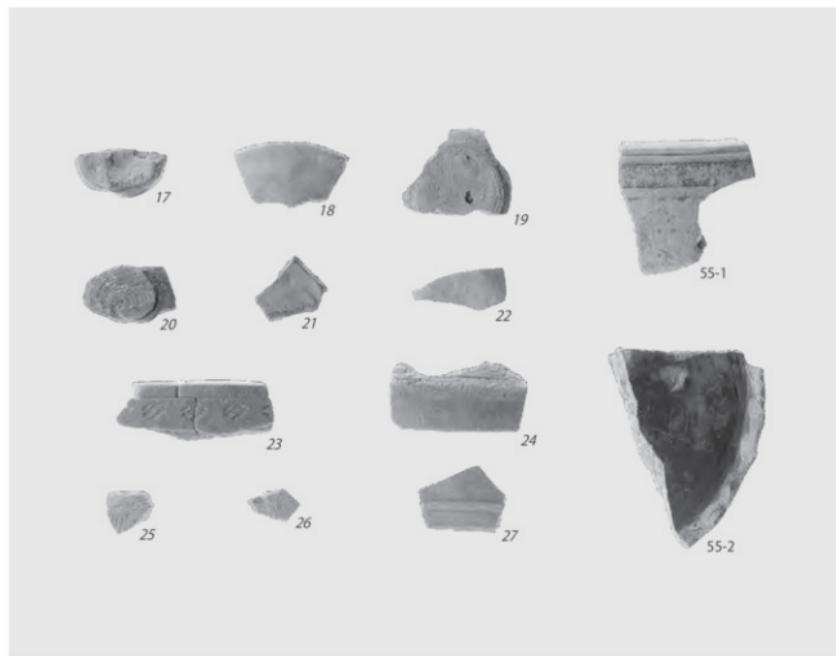
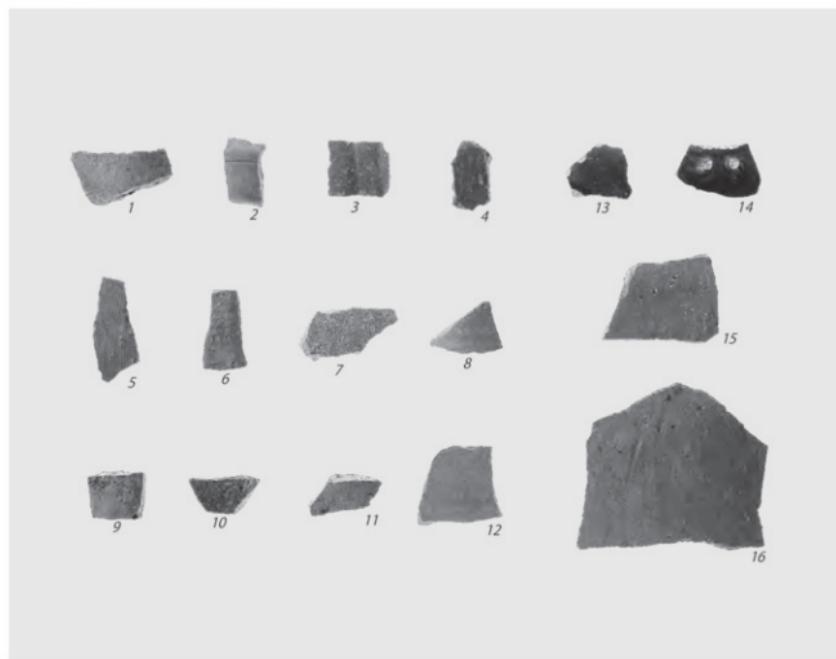
須恵器・備前焼など



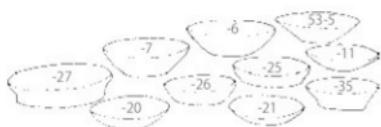
1 備前焼



2 大寺谷遺跡出土土器



備前焼・瀬戸美濃焼・土器など



53-6



53-7



53-5



53-11



53-20



53-21



53-25



53-27



53-35



54-15



54-2



54-1

図版 54 分布調査採集瓦 (1)





56-9



56-11



56-10

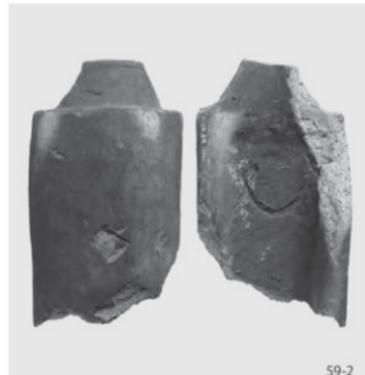
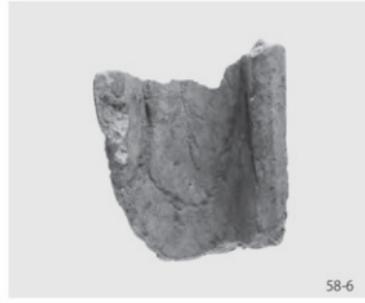
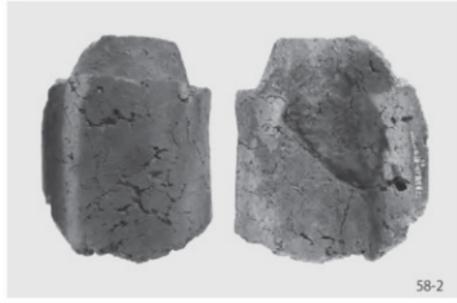
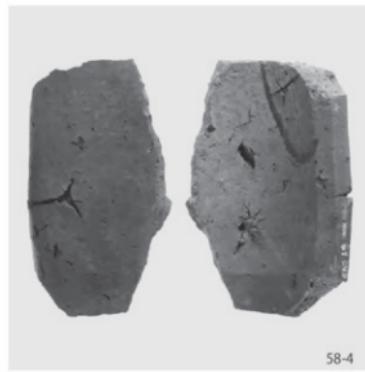


57-8



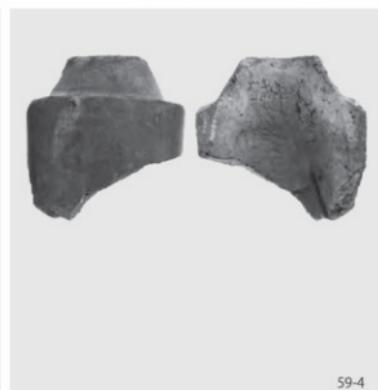
57-7

図版 56 分布調査採集瓦 (3)





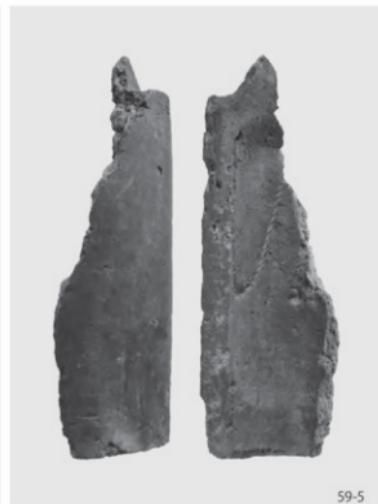
59-3



59-4



60-1



59-5

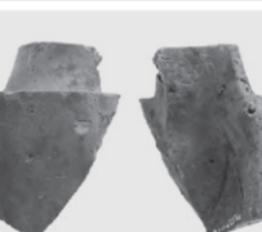
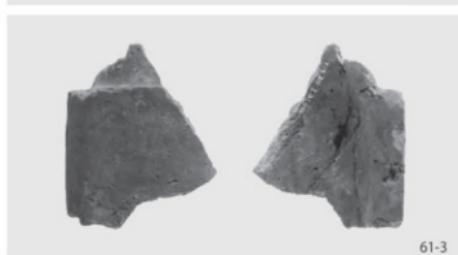
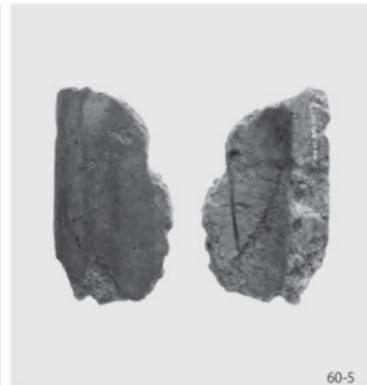


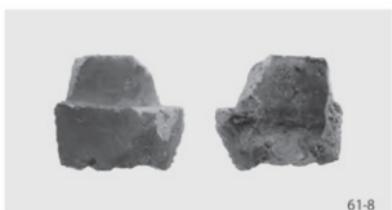
60-2



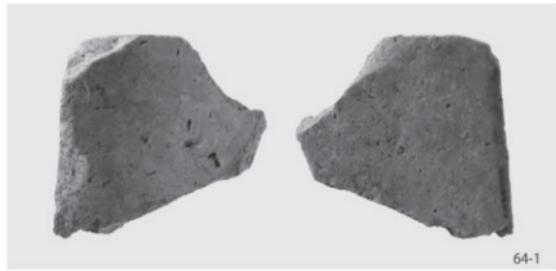
60-4

図版 58 分布調査採集瓦 (5)





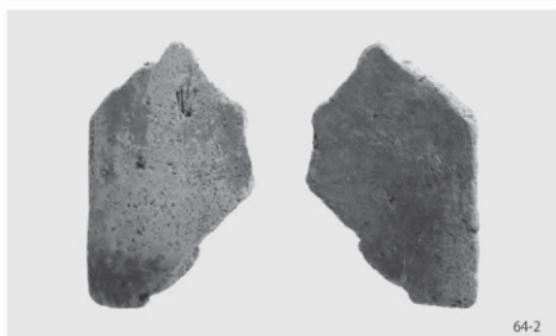
図版 60 分布調査採集瓦 (7)



64-1



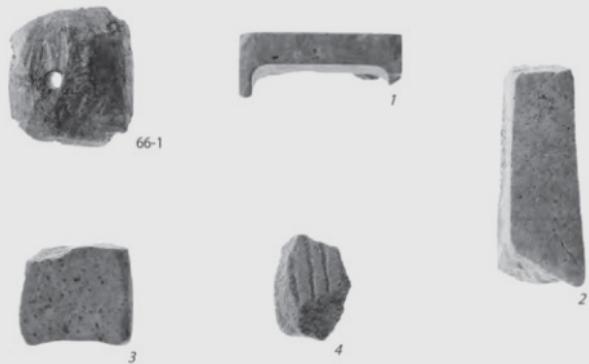
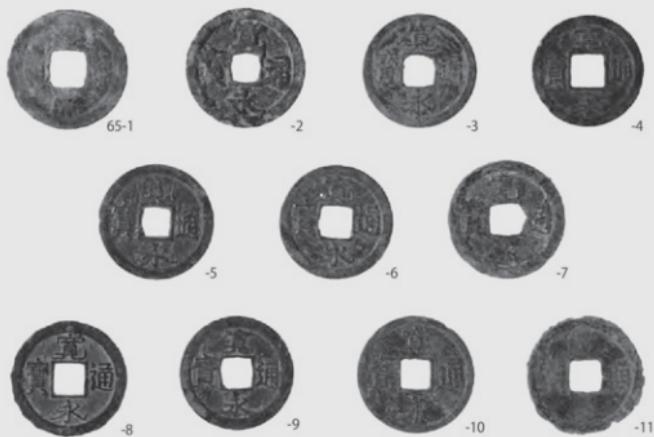
63-3



64-2

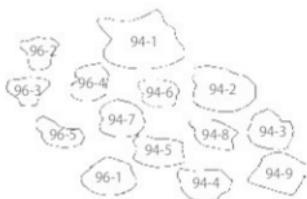
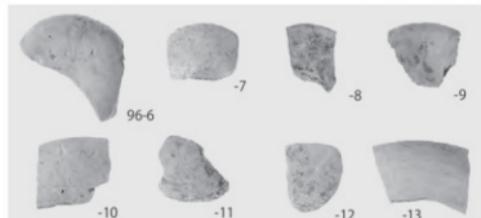


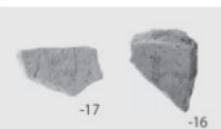
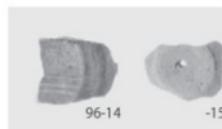
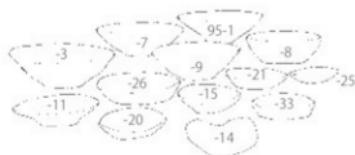
64-3





土器溜り SX119 出土土器





図版 64 和多坊跡出土瓦・錢貨



97-1



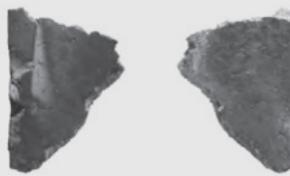
97-3



97-6



98-1



98-2



99-1



-2



-3



-4



-5



-6



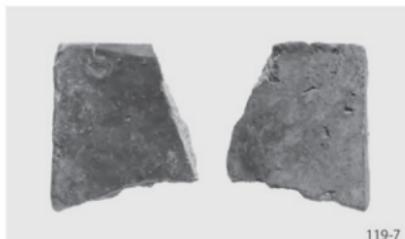
-7

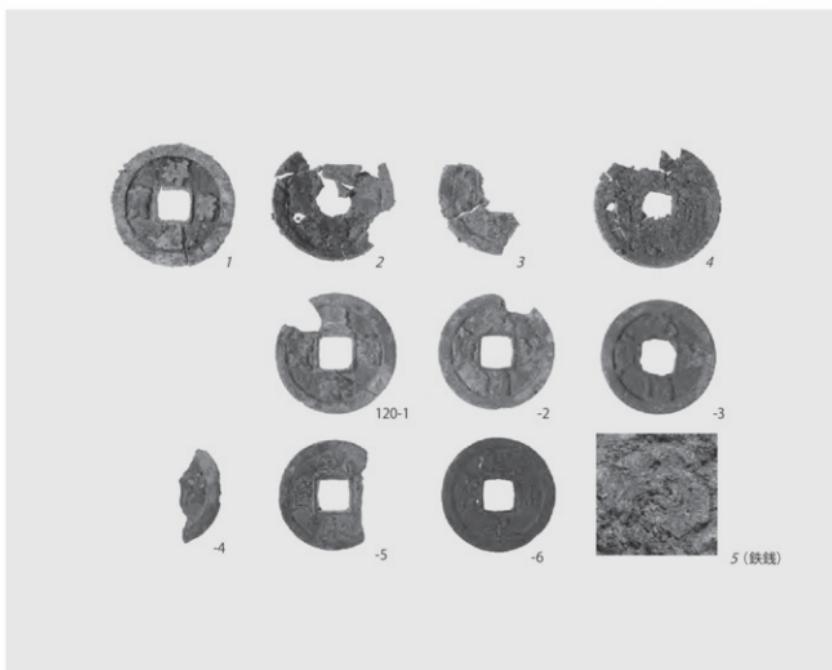


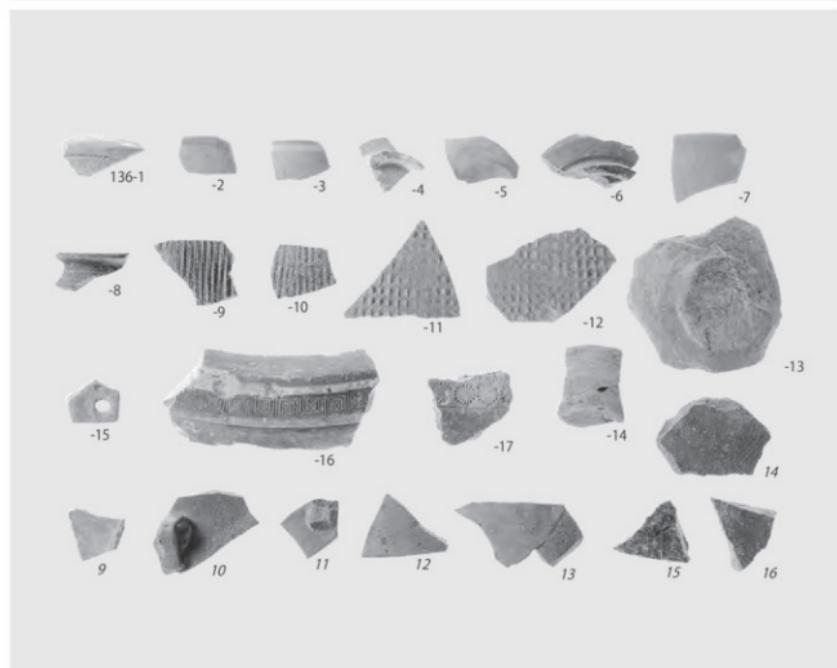
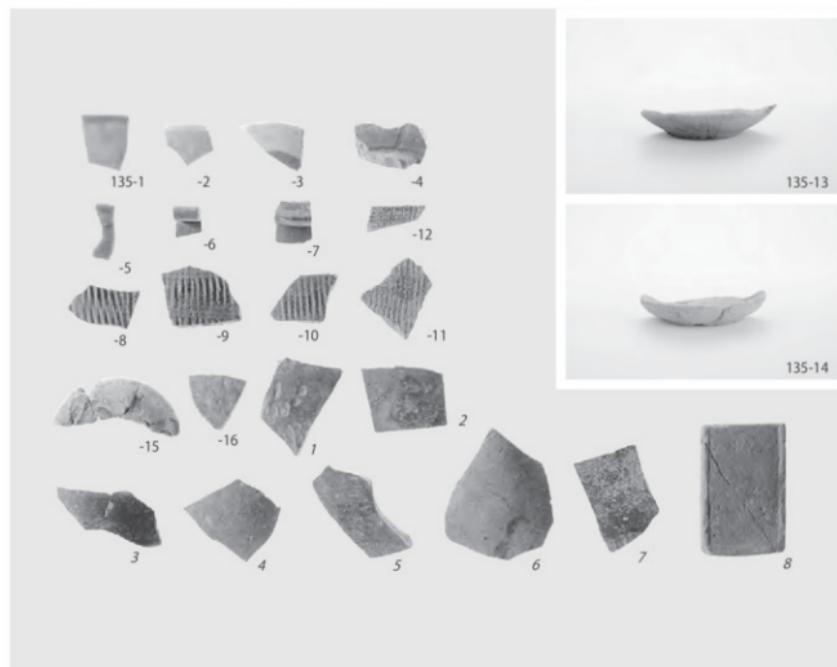
图版 66 等澍院南区出土瓦

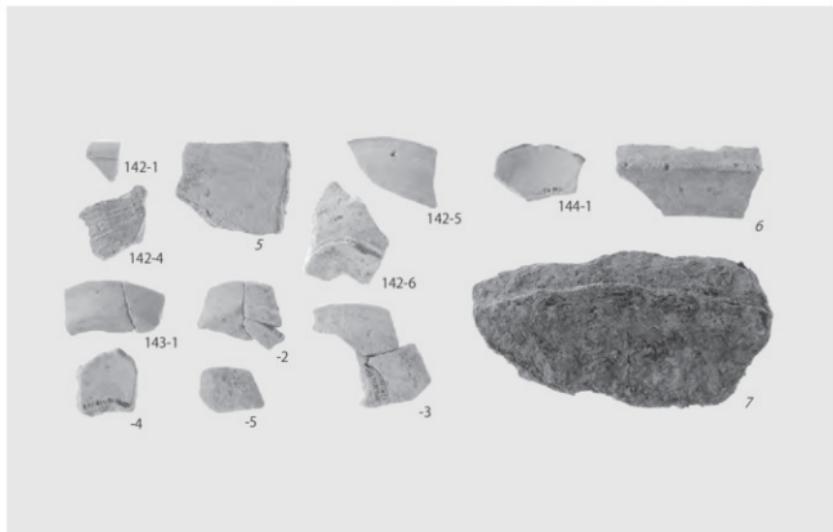
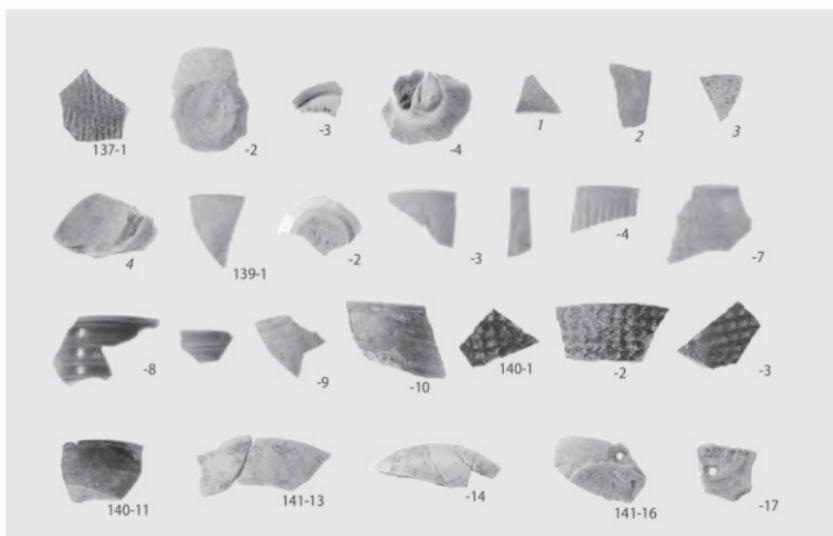


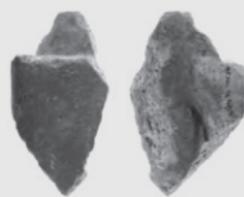
119-8











145-3



145-4



146-2



-3



-4



146-1



-2



-6



-5



-7



土師器（杯 A ~ F 類）



土師器（皿 A ~ E 類）



土師器（皿 G ~ H 類）

報告書抄録

本書で使用した用紙

表 紙	アイベスト	22.5 kg
見返し	上質紙	110.0 kg
本文	マットコート紙	90.0 kg
写真図版	アート紙	90.0 kg

平成 27 年(2015)3 月 27 日 発行

出雲鰐淵寺 埋蔵文化財調査報告書

出雲市の文化財報告 28

〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地

著作権所有
発 行 者 出雲市教育委員会

印 刷 者 株式会社 報光社